
とある科学の正体不明（カウンターストップ）

暁刀魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の正体不明
カウンターストップ

【Nコード】

N76390

【作者名】

暁刀魚

【あらすじ】

不幸な少年、上条当麻は彼女とであった。

風斬氷華、気が弱くて、笑顔がかわいい少女だった。

そして彼と彼女は、物語の大きな渦へ、巻き込まれてゆく。

——守るための力が右手にあるのなら、左手で手を握ればいい！

科学と魔術が交差するとき、物語は始まる——！

※現在『暗部闘争』編を更新中！

※2三日ごとの七時に更新中、たまに忘れて前後することあり

グランドプロローグ 『彼女の笑顔 Sunflower』 (前書き)

これはI Fの話です。

メインになるオリキャラは出ず、出たとしてもモブになるはず。

また、相当な数の独自設定、改変設定を用意していますので、苦手な方は問題点を目を点にして探して叩くか、ブラウザバックでお戻りください。

更新は不定期です。(最近は四日ごとの更新となっております、ストックに余裕がある限りこのまま行くことでしょう(5/28時点))

グランドプロローグ 『彼女の笑顔 Sunflowers』

プロローグ

「不幸だあ……不幸すぎますう……」

その日、上条当麻はいつもどおりだった。具体的に言う朝にビリビリと遭遇して学校でトンデモ不思議先生、月詠小萌から『上条ちゃん馬鹿だから補修でーす』との宣告を受け、帰ろうと道を歩いていたら不良に絡まれた少女^{ビリビリ}を発見し不良を助けるために奮闘するも失敗。その後不良を叩きのめした少女と小一時間のランデブーを不幸^{たの}しんだ。

まあそれにも何とか別れを告げて上条はやつとのこととで帰路に着こうというのだ。

場所は公園で、逃げ回ってやっと一息ついて帰ろうかというところだ。と、そこで目の前には自動販売機、通学途中に見かける自販機で、中身がアレなので試したことは無かったがとりあえずそこに在るのは丁度良かった。

が、上条当麻の不幸は止まらない。

人間、不幸なときは何処までも不幸なもので、上条は典型だ、不幸が不幸を呼び、更に不幸に転がっていくのは上条特有の不幸スキルである。……最後に女性の胸に突っ込んだり女性を押し倒したりするがそれは余計な話である。

決してもげるとか言っではいけない。

さて、本題に戻り、上条の不幸はまだまだ続く、彼が今持っていた代金は二千円だった、それもよにも珍しい二千円札である。（何故持っているかといえば初めて二千円札が世に出たときに手に入れ

たのをそのまま持っていた、それだけである）が、それを自販機に飲み込まれたのである。つりを求めてもまったく出てこず、彼の貴重な資金が無駄になった。

そんなこんな状況である。

先程からほしいジュース以外のジュースのボタンを連打したり、ほしいジュースをそれ以外のジュース以上の勢いで連打したり、前述の通りつり銭のレバーをガチャガチャしたり、軽く自販機を叩いてみたが何もならない。

要するに手詰まりである。正解はあるのだが上条が気づくことは恐らく無いだろう。

よって、

「不幸だあ……………不幸だあ……………不幸だあ」

定期的に同じ言葉を何度も繰り返す。その数や既に三桁の全台を突破しようかというところだ、分速四十回、既に三分近くが経過しようとしていた。

当然そんな事をしたって帰ってくるものは何も無いし、正解にたどり着けなくては丸々二千円を無駄にすることになる。故に不幸だ。上条当麻はどうしようもなく不幸の階段を上っている。……いや、階段はもしかしたら転げ落ちているのかもしれない。不幸なのだから。

「というわけで、もう一度――」

不幸だと、百回目を記念して……別に記念ではないが、区切りをつけるようにせーの、と掛け声をつける。そんな感じで言葉を発しようとして。

「あの……」

おびえたような、少女の声が聞こえた。

振り返ると、気の弱そうな美少女がいた。上条より低い身長に、わずかに茶色がかった黒髪——染めているわけではなく元々そうだった色だろう——長さは太もも辺りまで伸びたストレートで、そのうちの一房、頭の横で束ねられたものが伸びている。フレームの細い、知的というべきメガネをかけているのだが、少しずれ落ちている。また、上条的主観だが、とある一部分の大きさは彼の知り合いのなかでもトップクラスである。

（あれ……この制服……）

誰だ、と思うよりも上条はまずそこに目が移った。知らない知識よりも知っている知識といったところか——とはいえその知識もおぼろげなものだが。とんと使われていない記憶の倉庫からその知識を無理やり引きずり出す、少し考えて、その記憶と知識を目の前の少女と合致させた。

「ん……霧ヶ丘の制服？」

——住んでいる人間の八割が学生である学園都市、超能力開発が行われ、その他の技術力も”外”とは二十年も三十年も違うといわれる都市である。

霧ヶ丘——霧ヶ丘女学院はその中でもトップクラスの能力開発が可能な名門お嬢様学校で同じく能力開発トップクラスのお嬢様学校——常盤台がレギュラー的な能力開発を行っているのに対し、この

霧ヶ丘は異常で再現不可能な、イレギュラー的能力開発を行う学校である。

つまり一芸に秀でれば強度の低い人間でもやっていけるのである。

何故その霧ヶ丘の生徒がここに、疑問はまあそれだけだ。ただ、その疑問の所為で他の浮かべるべき疑問、たとえば何故自分に話しかけたのか、だとかそもそも誰なのか、とかが上条の思考からすっぽ抜けてしまっていた。

その所為か、質問攻めになるようなことは無くこの押しの弱そうな少女から答えを待つほか無かった。

「……えっと、あの……その……風斬氷華、です」

暫く少女は悩んだように固まっていたが、意を決したのか、名前を告げてきた。答えにはなっていないが上条の思考を正確にするには丁度良かった。

先程まで浮かんでいる思考が一つだけだったので少しあっとなつて、それを落ち着けるように上条は一つ、大きな息を吐いた。

それを風斬と名乗った少女は、大きな嘆息だと誤解したのか、思わずおびえたような声を上げる。

「あ、っと、すまん、上条当麻だ、さっきのあれは……自分に対するものだから気にしないでいいぞ」

上条は気まずそうに頭をかいて顔を上げる。おびえたような表情が困ったような表情に変わる。恐らくこの困ったような表情がデフォルトなのだろう。

そのまま、うんうん、と確かめるように頷きつつ、風斬は口を開く。

「え……うん、風斬氷華です」

とはいえ何かてんぱっているようで、もう一度自分の名前を宣言する。上条は呆れたようにもう一度頭をかいて、埒が明かないと判断したか、話を進めることにした。

「解ってるから繰り返さなくていいぞー……で、こんなところで何してるんだ？」

「えっと、散歩、かな……？」

「何で疑問系なんだよ……」

げんなりしたように呟き、またはや風斬はおびえたように声を上げる。なにやら上条の一举一動を怖がっているようだが、よくわからない。ともかく、と上条が頭を書いていた右手を振って立ち上がる。その際にまたもや風斬が何かおびえていたがそろそろ慣れるべきだと上条は思う。

（ていうか、さっきよりもおびえてないか？）

上条さんはショックです、とぼんやりこぼして、風斬の方を見る。再び風斬はピクリとおののくが諦めることにしたのでそれでも構わずに言葉をかける。

「で、何で俺に話しかけてきたんだ？」

純粋な疑問といった風に問いかけて、それを風斬は少し考えるようにして……おどおどしながらも口を切る。

「えっと、自販機の前で唸ってるあなたが、気になったから……かな？」

「……………そうですか……………上条さんはやはりこっけいな不幸道化なのですね」

ずーんと、そういった効果音が聞こえてきそうな、というか上条自身がずーんと言いながらうつむく、その際右手が空を切るが、風斬はそれにおびえていた。

ともかくそんな調子の上条にあわてたように風斬はフォローを入れる。

「あの、そうじゃなくて、ただ本当に、どうしたんだろうって、疑問に思った、だけなんです……………」

「そうなのか？ ……他の奴らみたいに笑ったりしない？」

フォローを聞いた上条は目を輝かせて風斬を見る。

「そ、そんな……………初対面の、人の不幸を、笑えるわけ……………無いじゃないですか」

「それも……………そうか、ありがとうな風斬。俺の周りにはまた上条か、とかざまあないな、というやつしかいなかったんだよ……………まあ、それもマシなほうなんだけどな」

最後の方はほとんど風斬には聞こえなかった。ただ聞き取れなかったためハテナマークを浮かべて首をかしげている。思わずもれてしまったが聞かれたくなかったので問題は無かった。

……………ちなみに、笑われるというのは笑う側も笑われる上条も冗談

だと解っているので気にしてはいない。上条の不幸に女性が絡んでいればそうもいえなくなるのだが。

「そっか、そう、なんだ」

何となく、意味も無く頷く風斬に、上条は一つ笑ってみせる。

「皆悪い奴じゃねえんだよ、だから不幸だって、それを自慢して――笑えるんだ」

当然のようにそれを言う上条を見て、笑っている上条がいて――自然と風斬からも、笑みがこぼれていた。それに気がついた上条ははっとした表情になり、何気なく手近にあった左手で風斬の方に触れる。

驚いたようにして風斬はそちらをみて、改めて上条を見る。

「はじめて笑ったな……いや、別にあって少ししか立ってないから気にすることは無いんだろうけど……」

改めてにかつと風斬に笑いかけ、

「笑ってるほうが、風斬はかわいいぞ」

平然と言ったのけた。

言われた風斬は、思わず紅くなってしまふような何かと、笑みが、顔にありありと浮かんでいた。

その後、嘆いても仕方ないと上条は別の自販機でジュースをかう

ことにした。それほど遠くはない、公園自体が思いのほか広いのか、同じ公園内にあった自販機でジュースを買った。ここにあったのは比較的まともなもので、あちらは間違いなく上級者向けだ。

とにもかくにも、上条と風斬は自販機があった場所から一番近い公園のベンチに腰掛けていた。

「うまいか？」

ジュースを軽く半分ほど飲み干して、上条は風斬に問いかける。風斬はといえばちびちびと飲み進めていたようで、あまり減っていないように見える。

飲み方の問題だろうから上条は気にせず返答を待つ。

「……………から、おいしい、です」

少し考え込んだようにして答えて、その答えは最初の方が不明瞭だった。

この時上条は先程の風斬のように首を傾げるだけで追求することはない、結局一言、そうか、で済ませてしまった。とはいえここでもし、風斬にも自分と同じように何かしらの触れてほしくない事情のようなものがあると気がついていたのなら、一週間後、彼は後悔するようなこともなかったのだろうか。

「そうか、じゃあこの後、どうするんだ？」

「多分、” 帰る ” なんだと、思います。……他にやることも、無いと、思いますから」

そうかと上条はもう一度頷いて、黙り込む。自身の手に持つ缶ジュースを眺めてそれからそれを飲んでいく。風斬も同じように怪し

い名前のジュースを飲んでいく、名前は怪しいがおいしそうだ。名前は怪しいが。

さて――別にジュースはそれほど量があるわけでもない、飲むのは思いのほかあっという間だ。

上条はこんなものかと空になったジュースを見て、そのまま立ち上がる。

「それじゃあ、今日はさよならだな」

「今日は、ですか？」

「ま、こうしてあったのも何かの縁、また会うことも、あるんじゃないか？」

別れる時は笑顔で、ずっと昔から決まっていたかのように上条は笑い。そして手に持っていた空き缶を自販機近くのゴミ箱に投げ入れる。

風斬は沈黙して――しかし困ったといった様子でもなく何度か言葉を出しかけて、選ぶ。

「じゃあ、こう、ですか？」 また会いましょう”」

だな、と笑顔で上条は頷いて。

ゴミ箱の中に入った空き缶の小気味のいい音が聞こえた。

第一章『幸せの笑顔 Smile in a day』

1

『私と一緒に、地獄の底までついてきてくれる？』

朝、小萌先生からのラブコールこと補修のお知らせを受け、気晴らしに布団を干そうとしたところで上条は一人の少女とであった。それは自然な出会いといえるモノではなく、運命を左右するかのような、いたずらの出会い。

運命のいたずらか、それともいたずらな運命か。

——あの白い少女、インデックスは上条に向けてそう言った。言って直ぐ、上条の前から消え去った。上条の覚悟をインデックスは問うたのだ。

別れる際の言葉、もう合わないだろうと、そう言うことをインデックスが決定付けた上での言葉なのだ。つまり、

（ふざけやがって……）

上条はいいえと答えると決め付けて聞いたのだ。助けてくれるわけが無い——いや、助けてほしくない、何の因果も罪もないただの一般人を巻き込みたくない。

言ったのだ、そうインデックスは。その一言の中には、上条を拒絶する符号が大量にあった。いや、拒絶しなかった。

ならば、

（ふざけやがって！）

彼女には上条当麻という人間がどういう人間か、わかっていなかったのだろう。いや、初対面の人間の事が解る人間など、相手の心を読むなどの精神系能力者でなければ無理だろう。昨日の風斬だつてそうであるはずだ。

ともかく、彼にとつて答えなど最初から決まっていたのだ。
悩むことすらありはしない。

（はい、ついていきますなんて、いえるわけねえ、だけど、いいえ、ついていきません何てことも、いえるはずがねえ！）

会って初めてで一緒に死のうといわれても、それは無理な話だ。
インデックスは死ぬつもりは無いだろう。だが自分のいる場所を地獄だと表現した。ならば、死と同じだ。

そして、たとえば死であろうと、地獄であろうと、そこで上条がとる行動は決まっている。

「地獄の底までついていきたくなけりゃ、地獄の底から、引きずりあげてやるしかねえよな」

誰に聞こえるまでも無く言う。周りに人はいるが、聞こえることは無いだろう、ただぼそぼそと独り言をしゃべっているだけ、見ず知らずの人間でアレばそれで処理するであろう。

そう、見ず知らずの人間であれば。

「地獄の底から、ですか……？」

たとえば御坂美琴のように、とりあえず口や足が出るタイプなら

そうでもなかっただろう、ただ今回は相手が悪かった。

いつの間にか、上条の隣には首を傾げる風斬氷華がいた。

「うおおお！ い、いたのか」

「ちょ……ちよつと前から、いましたよ？」

そうか、と土盛りながら上条は相打ちを打つ。聞かれていたのかと、何となく恥ずかしくなってくる、決意は変わらないが、それを聞かれるとなんだか困る。

とはいえ聞かれてしまったものは仕方が無い。

「それで、どういうこと、なんですか？ ……地獄の底から、何て、普通じゃあ、ありませんよ？」

「い、いや、気にしないでもらえると助かるな」

「そ、そうですか」

どもったような上条の声に、同じくどもったように答えてしまう風斬、別におびえる必要など何処にもないのだが、彼女はなにかしらおどおどしていないといけない性質らしい。

いうなれば、生きるのに敏感、といったところか。

「それより風斬、お前何してるんだ？ 別に補修って訳じゃないだろ？」

「あ……その、散歩、です」

「散歩なのか」

「散歩、です」

意味も無く互いに繰り返しあう。そのやり取りは何度続いたか、恐らく投稿途中、そして散歩中である風斬の暇つぶしにはなっただろう。

とはいえ埒が明かないうえに少しすると飽きてくるのは事実。ならばそろそろ話題をどうにかすべきだろう、変えるか動かすかはともかくとして。そう考えたのは上条の方が早かったのか、口を開いて、

「……風斬って、散歩好きなのか？」

毎日の様に、時間だって不規則だ。今は昨日と同じ時間だと切り捨てられるような時間ではない。誤差の範囲ですらないのだ。

風斬はといえば驚いたようにしたり、おびえたようにしたり、困ったようにしたり、おどおどした様子を保持したまま器用に表情をころころとさせていた。

「う、あ……その、それ……あ、うん、好き、ですよ」

「……？　そうなのか？」

よくわからないが、ほかに答えが無い以上致し方あるまい。結局の所、風斬のことを上条はほんの少ししか知らないのだから。

空を見て、ためらいがちに上条の隣を歩く風斬、表情なんて気弱そうとしか読めない、淡い彼女を上条は何処と無くつかめないでいた。

「散歩は、好きです。……考えないことも、考えることも、出来る

から」

ぽつりと風斬が漏らす。何かをしゃべろうとして出たのではなく、自然と風斬の言葉として出た会話。恐らく、日常の会話風景と呼ぶのに、今までの中で一番ふさわしいだろう。

「不安なときや、何かを纏めたいとき、そう言うときは、こうやって散歩をするんです。……ありきたり、かもしれないけど、やっぱり歩くって事は、いろいろなことが出来ると、思うから」

結局の所上条の日常というのは、何かを考えるためだけの時間や、何も考えない時間が無い程度に密集していた。

散歩をすることは無かったからわからなかった。だけど、解ったかもしれない。そう思ったから、風斬に向けて、一つ頷く。

「上条さんも、どう？ 散歩じゃないと、歩くことが出来ないもの……体を、それに心を、歩かせてみませんか？」

風斬が自分の言葉で話し、上条もまたそれを感じ取っていた。それでもう一つ、上条だからこそ感じることもある。

「名前……呼んだな」

「え？」

唐突だったか、風斬は思わず聞き返す。

何のことは無い、ただ単に名前を呼んだだけ、だけれどもそうやって呼んだのは初めてだった。それだけのこと、といえばそれだけのこと。

とはいえまあそれが特別だと感じる理由があれば、特別とを感じる

こともあるだろう。

たとえば、

「いやさ、風斬って俺のこと避けてる感じだったろ？ だから意外なんだよな」

それを珍しいと感じるならば、こうして特別だということもできる。

「そう、ですか？」

「ああ——当麻でいいぞ、上条さんってのは他人行儀過ぎる気がするしな」

思いついたように上条は言って、驚いたように風斬はそれを見る。とはいえ短い時間ではない。直ぐにうなずいて、肯定した。

「解りました、当麻さん」

「そうだな、それくらいが丁度いいだろ」

上条か当麻さんあたりか、その辺りは元々織り込み済みだ。呼び捨てで呼ぶことは無いだろうし自分が名前を呼ぶのも中々無いだろう。

頷いて、上条は何となく沈黙を持たせながら辺りを見るのだった。

と、そこで風斬が言葉を起こす。

何気ない程度しか時間がたっていないようにも見えるが、実際の所、風斬と上条の気まづくはないがなんともいえない沈黙は結構続いていたのだ。

会話が途切れてしまったのだ、まあ仕方ないだろう。
とにかくにも風斬は、

「そういえば、当麻さんは、どうしてこんな日に？ 何かの待ち合わせ、ですか？」

何気なく話しかける、何気なく、というのがポイントだ。

「ん……それは。それは——風斬お嬢さん、ちよいと聞いてくださ
いよ」

「ふえ？」

驚いたように風斬は上条を見る。何気なく言ったら非常につらそう
な声をされたのだ、驚いてしまうしおびえてしまう。

そんな事は構わず、非常に疲れた様子で上条は嘆息する。

「なんてことは無いんですよ、不幸なんですよ上条さん……それは
ある日の事でした、わたくし上条当麻は——」

「えっと、何で昔話、するんですか？」

不幸だ不幸だといい始めやがる上条に風斬が待ったをかける。彼
女のいつもどおりの話し方で、遠慮はしているのだが、その雰囲気
には『御託はいいからさっさと理由を話せ屑が』という事がありあ
りと浮かんでいた。

最後の『屑が』は要約だが。

「あの、その、上条さんは、補習に向かっていてですね、その前に
銀色シスターに、遭遇しましていろいろ混乱、しているのです」

何となく……あくまで何となくだが、風斬のような話し方で報告する。

「補習が、メイン何じゃ、ないんですか？」

先程の上条とであったときを思い出しながら、風斬は考え事をするように一指し指と一緒に体を傾けながら、

「それだったら、当麻さんの、自業自得ですよね？」

「……」

沈黙する。

「……」

二倍沈黙する。

その間数十分（上条比）。

「ふ、不幸だあああああああ！」

結局、思考の放棄を選んだようだ。

第一章 2

2

「ねえ、アンタ……」

「っひ」

何処と無く聞いたことのある声、思わず条件反射でおびえてしまうタイプの人間、なんだかパチパチと静電気のような音が聞こえてくる能力者。

上条当麻の知り合いで、該当者は残念ながら一人だ。

「人の目の前で女の子を楽しむように話して、尚且つあったとたんに条件反射でおびえるって、どういう了見なのよッ！」

制服を推奨している所為か、それしか見たことがないいつもどおりの制服姿、風斬と同じで制服自体でどういった学校かわかってしまいう有名校の制服だ。この場合は学園都市有数のお嬢様学校、常盤台中学の制服だ。

常盤台——風斬の霧ヶ丘がイレギュラーな能力開発を行う学校だとすれば、常盤台はレギュラーで更に高位の能力者を育てる学校である。

その入学にはレベル3……強能力者以上である必要がある。故に、目の前の少女のような、いわゆる怪物と呼ばれる能力者も入学する。そして、

バリイッ！！ と、数条の電撃が上条に襲い掛かる。

御坂美琴、それが目の前の少女の名前であり、同時に学園都市2
30万分の7、最強と謳われる超能力者……レベル5である。

能力は電気使い^{エレクトロマスタ}、別名超電磁砲、名の通り電撃を扱い——その威力は間違いなく最強であろう。

それを全力で、何の遠慮も無く彼女は放った。

当たれば最悪死が待っているというのに、人間の回避できる速度ではないというのに。

——当たれば死、回避は不可能。そんな状況で、上条に電撃が炸裂する。

だがそれでも上条は立っている。無傷で、右手をかざして。

上条当麻の右手には異能キラーが宿っている。幻想殺し^{イマジンプレイカー}、その右

手で異能に触れれば、ありとあらゆるものを消し飛ばすまさしく文字通りの異能キラー。

幻想を殺すと名を冠するのもそれが故であり、その右手でなぎ払えるものは星の数、時には目の前で襲われていた少女を助けるために振るわれて、時には自身に降りかかる不幸に対抗する為に使われる。

上条当麻は学園都市の最下層、無能力者（レベル0）であるが、超能力者（レベル5）の電撃すら打ち消してしまう、いうなればジョーカーと評すべき零なのだ。

もし存在するのなら、魔術だろうが、神の奇跡だろうが、問答無用で上条は消し飛ばしてしまうだろう。

だから——

——解っていた事だ。解りきっていたこと、予定調和も予定調和、最初から定められ、そして実行された不幸な習慣なのだ。

よって、そこに残るのは不幸そうな上条の顔と不満そうな美琴の顔だ。——仕方なしに上条はかざしていた右手を下げながら嘆息する。

「……相変わらず、何の遠慮容赦も無く突然だな、ビリビリは」

「ビリビリいうな……というか、理由なら毎回ちゃんとあるじゃない」

「あのなあ……あんな理不尽な理由で納得できるわけ無いだろ」

常識的に考えて、と続きそうな返答に対して、美琴はあからさまに不機嫌な表情を作る。

「何よ、アンタの場合少し話してるだけでも油断ならないじゃない、というか……手遅れ？」

普段の上条の行動を鑑みるに、少し話しただけでも、その女性は上条が意中の人である。ちなみに大半は困ったり助けを求めている女性。

アンラッキーバキューム……不幸清掃人とでも言うべきか、上条は他人の不幸までも自身に引き寄せるのである。ほとんどが自業自得か、自身の決断によるものなのだが……

とかく、不幸に落ち込んでいるところを良くされると、なんだかんだで好かれてしまうのである。

「なんなんですか、最近は突っかかってくるだけだったはずのビリ

ビリですら上条さんをそんな風にいうのでせうか」

上条は鈍感の鈍が三桁はつけられるような人間なので、当然そういった意味に気づかず、聞こえたとおりの意味で解釈する。

随分と落ち込まれたようでさしもの美琴も困惑してしまう。

「あ、あの……そういう意味じゃなくて……」

何かしら慰めようかと、上条の扱いを何となく解ってきただけで慣れているわけではない美琴は言葉を贈ろうとする。

とはいえ、やはり慣れていない以上直ぐに出てくるものではなく、落ち込む上条を前にあたふたした御坂美琴（14歳、常盤台中学所属、第三位、超電磁砲）は、

ババリバリッシュ！！ と、やけくそに電撃を放った。

ちなみにその際の言い訳は、

「人をうるさいハエみたいに言ってんじゃないわよ！」

である。

「ハエってほどじゃ……確かに鬱陶し……うわああああ！！！」

反論しようとしたが、さすがにコレは失礼な話で、また地雷である。

「で、なんなの、よ、あの子、は！」

「ぎゃひゃああ！ 昨日公園で知り合ったんだよ、特に何かあったって訳でもねえし、そもそも御坂には関係ねえだろうですますう！」

関係あるわけが無い、別に美琴は上条のことを——明確には、という前置きがあるが——好きというわけではないし、やきもちをやいても仕方ないというものだ。

が、そんなことをてんばった美琴が判断できるはずも無く——

電撃が炸裂した。

結局の所、これは上条の普段の行動と今の言動が呼んだ自業自得である、そうなってしかるべき、なのだが——叫ばずにはいられない。

またか、という事無かれ、これが彼の日常なのだ。

「不幸、だあああああああああああああ！」

第一章 3

3

昼が夜に変わる。

走っていた。

訳がわからない、理由もなく走っているわけではない、しかし目的地が定まっているわけでもない。上条当麻は——地獄にいた。

訳のわからぬ異能の力、それによって命が凍えていくその場所を、地獄と呼ばずになんと呼ぶか……少なくとも上条にはそれ以外に定まる答えを知らない。

地獄の底までついてくるかと、問うた背中のインデックスは、もしかしたら知っているのかもしれないが、知りたくもないと——上条は聞かないだろう。

聞かずに、地獄から助けようとするだろう。

実際上条はそうしている、夜の学園都市を死にかけのインデックスを背負いながら上条は駆けているのだ。

ことの始まりは美琴と別れて家に到着してから、そこで上条は血塗れのインデックスを見つけたのだ。

突然のことで気が動転している中、現れたのは魔術師と名乗る一人の少年。名をステイル・マグヌスと言った。

インデックスを回収すると豪語する彼と、上条は対決した。させられなかったのだ。

許せなかったのだ。

だから戦って上条は勝利した。

けれども、そこまでののだ。そこまでで、終わりなのだ。

上条にインデックスは救えない。

インデックスを救う能力も魔術も無い。知識だってありはしない。守ることはできても救うことなど、最初から適わないのだ。

少なくとも、今の上条当麻には背中ですんだんと生気を失うインデックスを救う方法を用意できない。

「くっそ、ちくしょう！」

何が、

「何が」

考える。

「何が地獄の底までついていきたくなけりゃ、地獄の底から、引きずりあげてやるしかねえよな——だ、ふざけるな、そんな事、まったくできてねえじゃねえか！」

——できているできていないの問題ではない、上条では『できない』のだ。インデックスを地獄から救うことなど、上条にはできない。

幻想を殺すだけの右手に、そんな力などありはしない。

地獄という幻想を殺すか？　だが、何をすれば殺せる？　そんな方法、上条が知ることはできない。上条の考えが地獄に届くなんてそんな事はあるはずが無い。

ならば、ならば今の上条はどうすればいい。

「俺にできることなんてほとんど無い、だけど、今、こいつを救う

ために、一体どうすればいい！」

病院？　だめだ。

インデックスはIDを持っていない、病院にいつても、助けられるなんてことはない。滞在していることが不法なのだから、病院にいけば、追い出されてしまう。

治癒系の能力者？　だめだ。

上条の周りには他者の治癒ができる能力者はいない、自己再生はありふれた能力だが、他者の再生は思いのほか珍しい能力なのだ。
アクセラレータ
その能力の系統がかの一方通行と同じだとすれば、その難しさも解るだろう。他者の体を操作するのは中々に大変なのだ。

「だから”無理”なのか？　違うだろ、そうじゃねえ、考えろ、考えろ！　考えろッ！！　俺に、右手が幻想を殺すだけの上条当麻に、何ができる。何もできないなら、誰に助けを求めればいい！」

あたりには誰もいない、いないから、ではないが、それでもいい故に、荒げる声のリミッターは振り切られていた――自身の言葉を、自分自身を発して確認する。

むしろ、そこに意識を向けることで逃避して板の意かもしれない。だからだろうか、

そこに現出した彼女に気が付かなかった。

左肩に衝撃を感じたと思ったら、目の前には風斬がよろめいていた。いつ現れたのかは知らないが、恐らくずっとここにいたのだろう。

まずいことになったと、上条は齒噛みする。

恐らく聞かれていただろう。今朝方に唐突に会った際も聞かれていた訳だから今回も聞かれていておかしいことは何もない、むしろ聞かれているのが当然と考えるべきだ。

ならば逃げるのが良作だが、上条の性格的にそれは無理があるというもの、赤の他人なら悪いすまない大丈夫かじゃあでいいのだが、どうしても知り合いだと、向こうから離しかけてくる。特に今回は何事かと、あせるだろう。

非常にまずい状態。背中インデックスはどんどん弱っていつているし、限界が近い。生きていることが奇跡なのだから、

「当麻、さん」

——とてつもなく冷たい声だった。こちらがぶつかったことを咎めることはなく、そこに意思は感じられない。

上条の目の前で、風斬は幽鬼の様に体を安定させる。ゆれているように見えた。

顔を俯かせて、コチラを睨みつけることもせずに、何かを呟いている。

やがて風斬から意思が感じられるようになってきた。軽く自身を揺らして、感情を一つに纏めているかのようだ。向けるべき感情を選んでいるのか。

(……ちくしう)

風斬に声をかけられない、そのことに齒噛みする。結局の所、上条はどうしようもない。それは何が何でも変わらない。救うことができないのは、散々証明したとおりだ。

もう逃げてしまおうかという自分自身にも、上条は憤りを感じていた。そのもどかしさはもはやどうしようもないだろう。

風斬を待つしか、ほかが無い。

だから、

「その子を、助けさせてください！」

そういわれたときは、思わず呆けてしまった。

急展開だった。何も思い浮かばずに進まなかった展開が嘘のように物事が進んでいく、嘆いていた自身を、あざ笑うかのように、上条には何もできないのだと、宣告するように。

風斬には一切合財全てを話した、魔術のことや、これまでの経緯。――それに対して風斬は疑いもせず、「それなら……」と呟いたとき黙りこくっていた

まず、抑揚を感じられない、言葉だけを発するようなインデックスに、風斬には魔力が無いといわれた。彼女を助けようとする風斬、上条、そしてインデックス本人、全てに魔力があるという事が判明した。

風斬に関しては、こんな存在では生み出しようが無いといったが、余談だ。

そこで風斬が持ってきた代案。

自身では無理だということだめげずに、風斬は言った。自身のすべてを賭けるように、意思を持って、意識に賭けて。

少し落ち着いて考えれば上条でもたどり着けただろう。だが、そうは行かなかった。そういったところから、上条はだんだんと自身の未熟さを痛感してしまう。

場所は風斬の代案の結果、魔力の無い物、要するにこの学園都市の、超能力開発を受けていない教師、この場合は、いきなり教え子である上条当麻が血塗れの少女とそれに付き添うように付いてくる少女について何も言わないという教師の対象は、上条のバンクの中では一人だけだった。

とてつもなくお人よしで、どうしようもなく生徒思いで、例えばおとこぼれだろうと、とんでもない優等生だろうと区別無く接し、子供のために泣き、子供のためにしかれる。そんな教師。

何故か自身も十歳程度の容姿な子供先生で、その癖だめな意味で大人っぽい。

月詠小萌。

それがその教師の名だ。

第一章 3（後書き）

次回、次々回と長くなる予定。
というか、思いのほか長かったその3、もっと少ないものだと思っ
てました。

第一章 4

4

上条と風斬は外にいた。

外気に触れる場所である。具体的には小萌の住むアパートの階段、インデックスに追い出されて、彼らはそこにいた。

上条当麻と風斬氷華。互いに治療用の“術式”の阻害となる可能性があるらしい。

辺りは若干の熱気が籠っていた。夏の夜、多少は涼しさを帯びてはいるものの、基本として夏の中心に位置する時期だけに、夜だというのに息苦しい。

上条はそれを感じながら、何とか火照った体を冷やそうと、慰めるかのように薙がれる風を感じたが――無意味だった。その程度で上条の気が治まるわけではない。

……インデックスに対して、今の今まで、何もできていなかったのだ。仕方ないといえばその通りだろう。だが、それで納得できないのが上条なのだ。いい意味でも、悪い意味でも。

「ちょっと前、多分、二日前です。私があの子……インデックスちゃんにあったのは」

風斬は、そんな上条に向けて言葉を発す。説明のつもりか、それとも、慰めのつもりか。どちらにせよ上条はただ聞くだけだ。

「丁度、さっき当麻さんとぶつかった時、見たいに、インデックスちゃんとぶつかったんです。すぐくあわてたみたいに、私とぶつかっても特に気にした様子なく、走っていったんです」

よくぶつかってますよね、と苦笑した風斬はいつもと——ほんの数日程度だけれど——変わらずに上条に接してくる。

「ありがとう、風斬」

「わ、私は貴方達だったから、貴方達が、一緒にいたから、だよ。本当にそれだけ、だから」

あわてたようにして、風斬は言う、弁解のように、しかし弁解になっていない。前提が成り立っていないのだから。

「……なあ、風斬、俺に——いったい何ができるんだろうな」

「——、」

一瞬、詰まったように風斬は考える。上条は言ったきり、自身になびいている風をうつとうしそうに払うしぐさをしていた。

とはいえ待ち時間など無いに等しい——何せ、答えがわかってい
るのだ、少しの勇気でそれを引き出しから取り出せばすべて解決する。

「……解らない、よ。私には」

風斬は臆せずにはわからないと答えた。解らないから、上条の問いには答えられない。知ることができなかったから、できない。

「私は、今まで友達って言える人が、居なかったから……解らないんです」

話すことはできない。けれども風斬は自身を放すことはできる。上条でもできることだ。――上条の意識を、一度でも別の場所に移そうとしているようだ。

もしくは、自身の感情も、同時に整理しているのかもしれない。

「話したこともないし、笑ったこともありません、楽しいと思ったことも、ありません」

多分、自身の助けたいという思いを片すためにも、必要なだろう、慣らすためにも――通らなければいけないのだろう。

上条は何度も、自身にまわり付く風を払おうとしている以外、何のリアクションもせずに、無言で、聞いている。聞き入っている。

「一緒に食事をしたこともありません、一度も遊んだこともありません、一度も、一緒に、勉強したことも、ありません」

それは悲痛だ。

上条は風斬のことを何も知らない、せいぜい散歩が好きで、笑顔がとてもかわいい、それくらいだ。だからそれを、ただ悲痛だとは思えない。同情すらも、する余地が無い。

他人というには少しばかり近すぎて、代わりに友人にはあと少し及ばない。いいところで、会えば会話する、その程度だ。

「だから」

けれどもそれはそこまで、上条当麻という存在は、風斬氷華という存在に、今は近づいている。

――風斬のそれは、悲痛であって悲観ではない。そこにあるのは希望だけだったから、風斬が今抱いているのは、少なくとも希望だから。

悲痛であって悲観ではない。

それは……

「私は、あの子と友達になりたいんです」

アパートの、大きく踏めばきしむような階段に、上条と隣り合い、壁にもたれるように座っていた風斬は、立ち上がり、階段を昇る。

一番高い場所、アパートの二階そのもの、そこに風斬は立って上条に、目を向ける。

上条はそれを見上げ、苦笑して、それから今まで風を払っていた右手で頭を搔く、困ったように、上条は実際コマって、何だかなと呟く。

「……なあ、風斬」

それから、風斬に習って立ち上がった。どうやって切り出そうかと少し迷ったようだが、なんだかんで無難な話しかけ方になる。まあ、いいかと考えて、そうでなければ意味がないとも考える。

「風斬はインデックスを救って、それを切欠に……って思ってるのかもしれないけどさ、それじゃあダメだよ」

え……と、風斬の声が聞こえるが、上条は構わず続ける。

「なんつーかさ、それじゃあ、お前はインデックスの友達じゃなくて恩人なんだよ、それじゃあ……違うんだよな」

フェアじゃ、ない。
上条は結ぶ。

「フェアじゃあ………だったら！ ……だったら、どうすればいいんですか」

「話せばいいんだよ」

即答した。

「笑えばいいんだよ。」

楽しめばいいんだよ。

食事をすればいいんだよ。

遊べばいいんだよ。

一緒に勉強すればいいんだよ！

それだけじゃねえ！

喧嘩すればいいんだよ！

仲直りすればいいんだよ！

友達を作るってのは、風斬の思ってるほど難しいことじゃないんだよ！」

しかるように、どなりつけるように、叫んでいたときに、既に上条の悩みは吹き飛んでいた。——簡単なことなのだ、客観的に考えてみると、上条の考えていることはひどくちっぽけなのだから。

——やるべきこと、それはもう、決まった。

一歩、前に出る。

もう一歩、風斬の前に出て、顔だけを振り向かせる。

「風斬、」

少しだけ、間を置きながら、

「簡単なんだからさ、まずは――インデックスと友達になりに行こうぜ」

もう、気休めの風は、死んでいた。

一日がそれから過ぎていた。結局インデックスは怪我が治癒されてからずっと寝ており、目を覚ましたのは少し前、朝になってからのことである。

小萌は今日も当然のごとくある補修のため出かけており、上条は特別に補修を後回しにされたものの、暇をもてあましてしまったのだ。

インデックスがおきる前までは風斬と交代で……夜が明けてからは風斬と二人でインデックスの様子を見ていたから良かった。

彼女が目を覚まして、驚いたようにあたりを見渡すまでもよかった。

「おきたか？」

軽く声をかけて、焦るインデックスを落ち着かせる。目の前にいる存在を上条だと解らせて、それから落ち着くまで少し待った。その間にインデックスは記憶の整理をしたのだろう。落ち着いた後、まず視線が言ったのは風斬だった。

困ったような、驚いたような、自分でも表現できないもやもやとした……もやもやというよりも、色々な感情がごっちゃになったそれがインデックスの顔に張り付いていた。

それを察して上条が動く。

「ああ、こいつは俺の友達の風斬氷華だ、お前なら覚えてるだろう」

諭すように、上条がな？ とインデックスに示す。確かに覚えている。インデックスが忘れるはずはない、彼女は完全記憶能力、見たもの、聞いたことを忘れない体質を持っているのだ。

少し前、上条にあうよりも前に風斬とインデックスは出会っている。これは風斬が言ったとおりだ。それを上条に告げて、うん、と一つ頷く。

「あの時は突然出てきてびっくりしちゃったんだよ、気づかなくてごめんね？」

「あ、えっと、あの、その……あーう……あっと」

それに対して、風斬はとてつもなくどうしようもなくなくなあわて方をしていた。電話しようかしないか数時間ほど悩んでおいて、いざ電話をしても話す言葉が見つからない、そんな感じだ。

もしくは上条の友達宣言に嬉しくなっていたり。

「落ち着け、風斬」

暫くオーバーヒートが止まらないだったが、それもなんだかなんだかで上条がストップをかける。それでも少しの間は止まらなかったが、やがてぷすんと音を立てると、非常にキリッとした顔つきになった。

「私がボーっとしてたから悪いんですよ、もうちょっと気をつけてればよかったんぢえすよ」

囁んだ。

風斬は暫く無言でキリツとした表情を保っていたが、やがてそれが赤面をはじめ、最後には涙目になって床に突っ伏してしまった。無言で少しだけ肩を震わせているのが痛ましい。

「……………変わった……………人だね」

インデックスから気休め程度にその言葉が出て——上条はなんともいえない表情で風斬を見ているのだった。

——そこまでは、そこから少しはやること、話すことがあった。インデックスの話を聴いて、ちょっと説教をしたりして、そこまでは良かった。だがそこから先、上条はやることがなくなったのだ。朝食は小萌の手伝いをしたときに済ませてしまい、食べていないのは風斬とインデックスだ。

風斬の場合わざと上条がインデックスと会話させるため食べさせなかったのだが、なんだか裏目に出してしまったかもしれない。

小萌の家に二人をおいて出て行くわけにも行かず、正直、小萌が補修用のプリントを置いていってくれば上条はやったのだが——それくらい暇だったのだが——そうも行かなかった。

結局上条には、適当に小萌の部屋においてある本（普通の小説）をみつくるって風斬をからかいつつ二人きりにしてそとで本を読むしかないのだった。

「というわけで、現在上条さんは手持ち豚さんなのですよー」

はぁ、と嘆息してうなだれる。

手元の小説をパタンと閉じて退屈そうに階下を見る。——小説は正直小難しすぎて解らなかった。上条の小さなおつむでは縦に殆ど

改行なしでずらっと並んだ本は読むに耐えられなかった。因みに題名は『太宰治全集3』（ちくま文庫、刊）。

あたりは煌々とすべてを照らす太陽のもと、各々の日陰が築かれている。少しずつ移ろいゆく太陽に合わせて、影は少しばかりせまくなっていた。

「あんた、何やってんのよ、こんな所で」

退屈で死に近い夢の世界へ旅たつか旅たたないかの瀬戸際（昨日あまり眠らなかった所為もある）に声をかけた希望の主がいた。

御坂美琴だ。

説明不要の超有名人、常盤台のレベル5である。

「ん……ああ、ビリビリか、よくこんなところまで来るな」

「なんでってそりゃ……昨日……ごく……て……と……思った……結局……」

どもった声で、御坂は赤面しながらもじもじと答える。が、上条にはなんと言っているのだからさっぱり解らない。

まあ仕方がないだろう、近くで聞いていても解らないだろうに、今上条はアパートの二階にいて御坂はアパートの一階部分にいるのだから。

「あのー、御坂さん、ここからだど貴方の声が聞こえないのですが」

「うっさいわね、それくらい解りなさいよ」

バリリッ！ と御坂が電撃を放出し、上条はなでる様に右手を振

るう。なんだかんだで威力は乏しく、ツじゃれ付くような一撃だった。

不思議に思いつつもなんともいえない表情で右手を握ったり開いたりしてみる。

「さ、さすがにこの理由が理不尽なことぐらい解ってるわよ、何か言いなさいよ！」

上条の挙動を気にしてか、それ以外に何かあるのか。まあどちらにせよ反省はしているようで、すまなそうな顔をしている。

至るところ、上条としては気にするべくもない。正直、不幸ではあるし面倒だが嫌ではないのだ。なんだかなあといいつつ、日常の不幸として御坂の電撃をやり過ぎているのである。さすがに彼女が原因の停電で家電が逝った時は文句の一つも言うが。

「ああ、そういうえば……手持ち豚さんってあれ、実際には手持ち無沙汰が正しいのよ」

「……………マジで？　ずっと豚さんだと思ってた」

驚いたような、呆けたような上条の言葉、視線を御坂から逃すように、上に向ける。

「……まあ、無沙汰をぶたさに間違えることならあると思うけど、さすがに豚さんとは間違えないわよ」

なんだそれほと、頭を抱える御坂、マジかよと頭を抱える上条、御坂は片手、上条は両手。

そこで太陽があたりを隠した、なんだか不穏な——とまではいかないまでも、先ほどまでの薄暗さ訪れと太陽が肌を焼く痛さが和ら

いだ。

「にしても暑いわねえ、まったく」

「仕方ないだろ、夏なんだから」

「夏なんだものねえ」

物憂げに二人がつぶやく、太陽が隠れた今でも、暑い暑いと言わざるを得ないようだ。

「冬が待ち遠しいわ……」

「夏が待ち遠しい、になるわけだな？」

そのとおりよ、と美琴が肯定して伸びをする。軽く息をとめて弓なりに体をそらせる。上条は特にそれを気にした様子もなく自分もそれに倣って体を伸ばした。とはいえ体はアパートの鉄柵にそのままなので、腕だけである。

完全に気休め。

「んー、これから如何しようかしら」

「そうだな、十分時間は稼いだしな……ああいや、で、どうするんだ？」

ちらりと携帯を確認して時計を見てみれば、時刻は既に短針が10を指す時刻であった。

「時間稼いだって、話してるのはそんなに長くないわよ？」

「三十分もあれば十分だろ」

憶測だが。

「ま、私はあんたの事情なんてわからないわけだし、仕方ないわね……」

「にしても、お前と普通に会話するのも初めてかもしれないな」

如何しようかと上条に背を向けた御坂に向けて、一言投げかける。

「そーいやそーうねえ」

去り際の一言に反応して、顔だけ振り向きながら頷いてくる。
なぜかと考えれば、普通に答えは出てくる。昨日の反省を生かして御坂が賢者モードだったのが幸いしたのだろう。

「お前もさ、普段から落ち着いたらどうだ？ 何せ常盤台の美しいお姫様、なんだから」

何気なく上条が冗談めかして言う。

軽く笑って、それが別れの挨拶だと、手を振った。御坂はショートして、すこしだけあうあうしていたが持ち直して、赤くなった顔で上条を睨みつける。

「悪かったわね！ いつもお嬢様してなくて！」

バチバチと電撃を鳴らしながら、その場を去っていく御坂。

なんだったんだと、その様子を見送る上条——空の雲が溶け、

再び太陽があたりを照らそうとしていた。

第一章 4（後書き）

本当は次の場面まで行くつもりでしたが、今回はここで切ります。
区切りが良すぎただけです。

第一章 5

5

風斬氷華はひどく困惑していた。

そもそもは上条が悪いのだ。友達になりに行こうと自分を誘ったにもかかわらず勝手に自分を友達だといって、勝手にインデックスと二人きりにしてしまったのだ。

上条は自分を一体なんだと思っているのだろう。風斬が口下手だということは向こうもわかっていいるはずなのに、上条に話しかけたことだって本当の本当に一世一代の大勝負だったのだ。

（それなのに、当麻さんはひどい！ ……そりゃあ私のことを友達だと言ってくれたのは嬉しいけど、すごく嬉しいけど、でもちょっとだけ残念だけど……それとこれとは話が別。なんだってインデックスちゃんと二人きりにしちゃうの？）

引っ込み思案本人としては、ある程度慣れるまで一緒にいてほしかったのだ。だというのに上条は一足先にインデックスと仲良くなってしまう、風斬を置き去りにしてしまった。

その所為で現在風斬はインデックスと共に食事中であり、如何切り出したものかと四苦八苦しているのである。

一度勢いに乗せて話してしまえば、後は楽なのだが。

「……ねえ」

それから、なんども声をかけようと思った。何度も話しかけようと思った。だがそのたびに彼女はためらってしまう。いやいやいや

うん。そんな事が何度続いただろうか。

天恵は思いの他はやくやってきた。

おずおずと——向こうも迷っていたのだろう、インデックスがやつとのことといった趣で風斬に話しかけてきた。

「え、？」

思わず聞き返す形で、びっくりと風斬は視線を這わす。おどおどとした様子で、それはインデックスの気を和らげたようだ。ようするに、彼女も同じだと。

「ねえ、ひょうか——だっけ？」

「うん、風斬氷華……風斬氷華、だよ」

そっか——とご飯を書き込みながらインデックスは頷く。風斬は落ち着かない様子で茶碗を箸で叩いている。

「ひょうかは、食べないの？」

ご飯、とは言わずに茶碗を氷華に示してみせる。それからことんとそれを置いて改めて、隣の味噌汁に手をかける。少しずつ、しかし確実にがつつと食べていくが——その一つ一つが幸せそうだ。

（笑って楽しんで話をして——食事をすればいい……か）

考えながらも、今までなんだかんだ緊張して手をつけていなかったご飯を少し、食べる。

味気ない、みずみずしくて、少し冷めかけてるけどあったかくて……でもちよっと物足りない。最初はそう感じて、だけど、少し、

踏み込んで、かみ続けてみれば、そこには確かな甘さがあった。

（こんな感じ、なのかな）

風斬は、ここに来て、初めて友情おいしきを知った。

——それから。

「ねえ、ひょうか」

改めてというように、インデックスがコチラに話しかけてくる。
ご飯は半分が終わっていた。ここまで数分も経っていない、外では
また御坂も着ていない時間帯だ。

「何？」

簡単に氷華は返す。簡単に、返せた。

「ひょうかはなんで私を助けるの？ 正直、まったくわからないんだよ」

どういふことなのかと、インデックスは動作でも示してみせる。
やれやれと、本来ならそういった様子だろう。

そして、風斬が答えるより前に、矢継ぎ早に連弾を発射する。

「とうまだってよくわからない。私とは少し会話しただけなのに、
こうやって助けてくれるのって、よく解らない。

だってだって、ひょうかは本当に見ず知らずなんだよ？ 本当に
ちよっとぶつかっただけの、私じゃなかったら忘れたって可笑しく
なかった。それなのに、だよ？」

「――それは――」

少しだけ、戸惑う、ちょっとだけ勇気が出ない。何でかは解らないけど、風斬は、その勇気を見捨てる他なかった。

だって――インデックスちゃんは、私にとって、初めての人だから。

第一章 5（後書き）

いやいやいやんのフレーズはすごく印象的だと思う。
さて、このことに一体どれくらいの人がわかってくれることやら。

行間？

行間1

ステイルⅡマグヌスにとって、彼女は全てだった。

比喩ではない、たとえでもない。ましてや抽象的なものでもない。ステイルという男には、彼女以外のものが存在しなかった。

そういつても差し支えの無い——いや、そういわざるを得ないのだ。

初対面は衝撃的、だっただろう。少なくともステイルは、アレ以来、出会って初めてで衝撃を受けることは無かった。あのみぎて幻想殺しは十分に驚愕に値したが。

少なくとも彼にとつての起点はそれであつたし、単なる一人の少年でしかなかった彼が、彼女のために、全てを殺して己も屠ることを誓ったのは、それアリキのことだ。

あらゆる己の犠牲に成り立つ天才魔術師、ステイル。彼は自身の犠牲を台に彼女を支えてきた。その本心は、なんだっただろう。

いや、

「考えなくてもわかる」

手に持つタバコを地に落とし、かき消す。踏みにじるように、何度も、何度も。——それで、自身が報われることなど、一生ないというのに。

だが、せざるを得なかった。いつも慣れ親しんでいたそれがどうしようもなく苦々しかったから、今の自分にはとてもではないが合わない。

結論として、ステイルⅡマグヌスは、恋をしていたのだ。

「同情という名の、請いを――」

終わったことだ。

――彼は、だからこそか、怒りと動揺でもって、タバコを苦々しく感じざるを得ない原因の内、ひとつを睨みつける。赤を纏うステイルの眼光は、同様に鋭かった。

「不自然」

返すそれもまた同じこと、互いににらみ合い。その視線が剣戟する。

「どうしたというんだい――アウレオルスⅡイザード」

タバコをもみ消すと同時に今までタバコを持っていたほうの手でポケットの中に突っ込む、あくまでゆっくりと、自然な動作で。

「いや、」

とはいえ向こうも、コチラの動作の意味は承知しているだろう。なにせこんな場所、わかりやすくいうならば魔術師禁制の場、学園

都市に乗り込んでまでステイルと敵対するのだから。

自分のしていることの意味、自分の使用とされていること、アウルスはそれを解っているはずなのだ。

だから、

「こう呼ぶべきか、インデックスの元先生役！」

——…、

インデックスには一年間の記憶しかない。一年前からの記憶しかない——でも正解でもあるが、それでも最も正しい表現は一年しか記憶がないというほうだろう。

原因は彼女の持つ十万三千冊の魔道書^{きおくする}。

これらは彼女の脳、そのおおよそ85%を犯しているのだ。よつてのこり15%分である一年を記憶しなくてはいけないのだが、その一年もまた限界が来る。

よって彼女は一年毎に記憶を失い、彼女は一年間しか記憶がないのだ。

——これを可笑しいと思わない連中を責めるのは、まあ科学に疎いのだ、やめておいたほうがいいだろう。

あたりはただっ広い学園都市の庭^{どうろ}、人払いのルーンによって、あたりは静寂以外生存してはいない。ステイルと、目の前の錬金術師、彼も今は、音を殺していた。

——長い長い、沈黙である。

とはいえ、永遠ではない、永遠に感じられようと、それは有限で

ある。

「然^{しか}、私はキサマの様な無粋な犬と相對しに来たのではない。——あの子の居場所を、教えてもらおうか」

目の前の青年——そうは見えないが。齡のほどは18だ——髪の色は染められていることが遠めでも解る不自然な緑髪、肌も服も白い、解りやすく言えば目立たない彼の姿に反比例して、異様さをもし出していた。

名をアウレオルスという。

「まったくもってわかりやすい話だ」

ステイルの手が服から引き裂かれ、手に持っていたそれがあたりに飛び散る。

持ち上げた腕から、戦いの合図がばら撒かれたのだ。

「憤然、話のわかる相手ではなかったか」

アウレオルスの右腕からそれがとびでる。

黄金の刃、鎖に繋がれながら、アウレオルスの手に収まる。

対するステイルには、炎が集った。

「お断りだ——糞錬金術師！」

激昂にまかせた、ステイルの叫びがとどろいた。

最初に動いたのはやはりというべきなのだろうか、ステイルだ。手に包み込むように抱えていた炎を突き放し、分断させる。向きは三つに分かれ、時間差にそれぞれの場所へ向かう。

まず最初に襲い掛かるのが派生した三つのうち、大玉である二つだ。アウレオルスに襲い掛かり、先ほどまでアウレオルスがいた場所に、交差するように襲い掛かった。

——別にアウレオルスもただ構えていたわけではない。ステイルの炎が掲げられるとほぼ同時に動き始めていた。

ワンテンポステイルが速かったが、それでもそこまで違いが在るわけではない。

とはいえ、速度も対して変わらないため、ステイルの有利に変わりはしないが。

「消えろ！」

そうやって動こうとしていたアウレオルスへ向けて本命の、小型弾が襲い掛かる。追い詰めるように放たれたそれに喰らい付く。人を燃やすだけならこの程度でも問題は無い。

それに――

「甘い」

本命といってもあの三つの中では、の話だ。

アウレオルスの咆哮とともに、彼は体を横へ落とした。何という事はない。どれだけ早くとも、ただ直線なのだ、この一撃は。

考える。

自身にとって必殺の間合いは向こうにとっては相応の死角になる。

（奴の魔術がいかようなものかは完全に判断は付いていない……が、察するにあの魔術はルーンに支えられている。これは素人目でもわかる。そして戦闘の開始時にばら撒いたところを見ると、相当数で敵を焼き払う魔術）

つまり、と自身の黄金を構えながら思考を続ける。

（炎を飛ばしてくるが、それ以上の大玉があることは必定、ならば私の間合いでこやつを倒すことに専念する。若干コチラも不利ではあるが、近づくよりかはましだ！）

結論は出た、アウレオルスとステイル、二人の間合いは相応に違うのだ。

本来ならばステイルはもう少しルーンをばら撒いていただろう。だがそうも行かなかったのだ。彼は上条当麻との戦いで持ってきていたルーンの半分以上を全滅させている。

本来ならば終わった後に回収しても良かったのだ。だが、上条のときはそうも行かなかった。

濡れて使い物にならなくなってしまったのだから。

それに、

「リメン――」

ステイルは非常に焦っていた。インデックスを奪取できず、あまつさえ傷を放置するしかない現状、本来ならばこんな男に構ってなどいられないのだ。

だがそうもいかない。

「――マグナッ！」

前述の通り、ステイルはルーンの大半を失っている。

別に出し惜しみをする必要があるわけではない。場所の問題だ。

ステイルの魔術は主に入り組んでいないある程度狭まった範囲で最大の効果を発揮する。

たとえば、学校の体育館など最高だ。ある程度の範囲が確保され、圧倒的に広くない。ようするに、今ステイルのいる、圧倒的に広い場所も、彼にとっては不利だった。

普段なら違う。優先度はある程度下がり、まあ問題ないかで戦場として使える。入り組んだ場所の襲撃ではないためそれで十分であることは間違いない。

ただし、今のような、ルーンが足りない状況でなければ……だが。

――それを悔いる人間はいない。ステイルの意識はすべて目の前の刃に注がれていた。飛び道具であることは最初からあたりを付けていたし、攻撃も読めた。

だが、早かった。

運動神経は聖人である神裂や、喧嘩慣れしている上条には遠く及ばない。上条の右手とステイルの炎剣、直接切り結べば敗北するのはステイルだ。

それは最初から、自信の犠牲としての天才性を手にした時からわかっていて。だから、覚悟だけはしている。物おじだけはせず、速度はあろうと、一度は回避できる。それは自負だ。

だが、

その一撃はステイルの上をいく。
刃が巻き戻され、ステイルが態勢を立て直すより早く、襲いかかったのだ。

当然ステイルは回避できない。だが回避するしかない。先ほどの一撃でステイルは知っている。あの一撃は、すべてを溶かす——！

（ぐ、おおおおおおおおおおおおお！！）

声にできない声で、彼は思い切り飛ぶ。

体が無様に転がして、なんとか回避する形をとって、刃からできる限りはなれる。唇がかすかに震える、囁きかけるかのような様子だ。

「肝を冷やしているところ悪いが——」

アウレオールの声が聞こえる。

「——私の瞬間錬金^{リメンマゲナ}は、一秒間に十の射出と巻き戻しが可能だ」

要するに、ステイルは絶体絶命だった。体は避けた体制のまま、本当にぎりぎりだったし、あれだけ大きく動いたのだ、ポケットから携帯が飛び出すほどの勢いを持って彼は転げ回った。

動く暇も、対抗する暇もない。ステイルは少しでも口を開き、何事かを叫ぶ。——空しい絶叫か。

そして、それと同時に、ことが起こった。

神裂はやつとのことですそこに戻ってきた。ステイルの人払いへ大

急ぎで割り込んでいたのだ。

どうやらステイルの人払いは急造だったらしい。味方を対象に含めないという、基本的なことすらせず、その癖かなり全力で作ってあったのだ。

聖人である神裂と常人であるステイル。その力の差は歴然としている。だが、魔術師としての格は、ほぼ同格なのだ。互いに最上級のプロ魔術師である。

よって、それ相応の時間がかかった。

そこは——特に何のことはない場所だった。ただたんにステイルも通りかかったただけだろう。やけに広いが——それだけだ、強いて言うなら歩道橋が奥に見え、そこは闇によって死角になっていた。

「ステイル——」

つぶやくように呼び掛ける。何が起こったのかは判断がつかない。一ヶ所、気になるところがあるが、魔術であるということは確かだ。よって、まずは自信の仲間であるステイルの探索である。

戦闘の後——先ほどの一ヶ所を含めた数個の跡。

いくつかは炎によって地面が焦げ付いた跡であり、もう一つは、黄金の跡だ。

——比喻でなく、文字通りそこは黄金だった。軽くしか確かめていないが、本物だろう。そしてこれは——

「鍊金術？　しかし、なんなのでしょう、これは……」

どうにも違和感がある。

鍊金術、特に黄金の鍊成は非常に手間のかかる。正直なところ、そんなことをするよりかは、あり得ない可能性に賭けて、適当に地

面を掘ったほうが効率がいい。

ならば、これは――

と、そこで。

不意に気配だした。人の気配だ。

「誰ですか!」

自信の刀に手をかけ、神裂が叫ぶ。だが、それもすぐに終わりだ。この気配は――敵ではない。

「神裂、だいぶ老けているようだね」

歩道橋の闇から、ステイルが姿を現し、同時に、続ける。

「……悪い、疲れているようだ」

すぐに刀は下げられ、神裂ははっきりとステイルの顔を見る。

確かに、かなりやつれているように見える。精神的にも体力的にも、思いのほか彼の体が参っているのだろう。

それでも煙草をくわえているあたり、彼も相当だ。

「彼に襲われた……知っているだろう? あの子の元先生役だ」

ああ、と合点がいく。確かに、彼ならばあの黄金も説明がつく、

あの錬金術師ならば可能だろう。少なくともそう聞いている。

「……安心してくれ、撃退した。相当危なかったが、なんとか間に合ったよ」

聞くに、ぎりぎりのところでステイルは魔女狩りの王を引きずり出したらしい。
イノケンティウス

囁くような声や、小さく漏れた言葉はすべて詠唱だったのだ。引きずり出すのに必要なルーンは、転がりまわる際に、自然と落ちた。そして、アウレオルスが必殺の一撃を放つと同時に、魔女狩りの王がステイルを守ったのだ。

その時点でアウレオルスは手がなくなったのか、その場を立ち去った。勝ち負けのつくような戦いではなかったが、それでも勝ち負けを作るなら、ステイルの勝ちだ。

「お疲れ様です——交代、はさすがに無理ですね、その様子では、監視は私が引き続き行います」

「……今のところ、どうだい？」

「どうやらあの少年の友人と交友を結んだようです」

苦々しげに、告げる。

無駄だとわかっているから、その表情はどうしても歪んでしまう。

「……そうか」

ステイルの顔も、それ相応に歪んでいた。

逃げ回り続けた一年、やっとのことで彼女は友人を手に入れた。

それなのに——もう、あと数日で彼女は刻限を迎えてしまう。どうしようもない地獄が、また始まってしまう。

とてもとても、とてもつらかった。

それでも、ステイルは歩き出す。

“彼女のために生きて死ぬ” そのためならば、ステイルは彼女の地獄すらも、エゴイスティックに肯定してしまうのだ。

行間？（後書き）

エゴイステイック、でいいんですかね、教えて、エロい人！

第二章『守るは唯一にあらず Reaching Knight』

1

上条は外に出ていた。

インデックス、風斬を連れ立って、小萌と共に、である。目的は銭湯へ行くためだ。一日の疲れを癒し、明日のための糧にする場所。まあ上条が何かしたかといえば、会話をしただけなのだが。

ともかく、本命はどちらかというと小萌率いる女性軍団の方だろう。

空は満点の星空だった。いや、学園都市は大都会であるゆえ、実際に見ることはできない。しかし間違いなく今日は晴れた。インデックスも、風斬も、小萌も、それは感じているだろう。

まあどれもこれも上条の主観によるものだ。

とかく。

「ねえねえひょうか、これから何処に行くの？」

「銭湯、だよ」

後ろから二人の友人たちの声が聞こえる。楽しそうに言葉を躍らせるのはインデックス、ちょっとおどおどしているものの、最初に緊張していた頃とは比べ物にならない風斬。

こうやってみると風斬は一度思い切って話しかければ遠慮や何かも多少は和らぐようだ。——それでもできてしまう壁のようなものは気のせいだろう。おそらく、こういうタイプはそういった壁のよなものが自分自身なのだ。

まあ、これもまた上条の主観によるものだ。

「それは前にも聞いたんだよ、だから、どういふところなのかな」

インデックスの言葉が直ぐに返される。なんだか一言一言が楽しそうだ。

「えっと、おばあちゃんがいて、座ってて、お茶を飲んでるところ……かな？　出た後に、フルーツ牛乳を、飲むんじゃ、ないかな」

（その答えは突っ込みたいですよ！　風斬さあん！）

何処から仕入れたんだか解らない変な知識を披露する風斬、それだけでも突っ込みたいのだが、更に内容にももっと突っ込みたい。なんだおばあちゃんって、何だお茶って、いつの時代の話なのだ。というか、そもそも何でフルーツ牛乳おんりい何だ、牛乳は何もないのがジャスティスだろ、常識的に、ではなく上条の主観的に考えて。

とはいえそれに突っ込むことはしない、インデックスを怒らせるのは怖いと、かまれたときに悟っているため、そして風斬が悲しむ顔を見たくないため、である。

因みに割合は八割と二割、残念ながらインデックスが八割である。マジメにやっているなら逆転するが、突っ込みをマジメにやる理由はないので、この割合である。

割とマジで申し訳なかった。

と、ここまでが上条の主観である。

「それは……すごいんだよ、ごくり」

「自分で言うなよ！」

無理だった、起こらせたくないとかそう言うの以前に、条件反射だった。上条は自分を突っ込みキャラだとは思っていないが、インデックスのような完ボケキャラに対して瞬間的に答えてしまう程度には、突っ込み気質だったらしい。

なんにせよ、しまったと思うのはもう遅い、上条はおそろおそろ、後ろにいるインデックスに視線を向ける。

「とうまはひどいんだよ、情緒とふいんきって物がわかってないかも……ん？」

「……さすがに、そんなボケにたいして突っ込まない上条さんではないのですのことよー」

どうやらそこまで怒ってはいなかったようだ。よって上条は調子に乗り、とはいえ多少はおそろおそろインデックスに話しかけたのだが、どうもインデックスは自分の発言に対する違和感に集中しているようだ。

一体何を間違えたのだろうと上条は先ほどの言葉を何度か繰り返す。

（えーっと、情緒と雰囲気……あ）

何度目かで答えに行き着いた。どうやらインデックスはふいんきと雰囲気の間違ったようだ。何故か変換以下省略の巻。

「ふいん……ふういん……ふんい……ふい……ふう……えーと！」

コレはつまり思い出せないのか、お前は完全記憶能力を持っているんじゃないのか。どうなんだどうなんだ、上条の突っ込み指数は

日に日に高まっていく。

インデックスはいえ腕を組んで悩んだ態勢のまま、何度も言葉の繰り返していた。

「ふいんきという……それを……きでしょう——あー、あとちよつとなのに！」

「む、無理しないで、ね？」

うがー、と吠え出したインデックスに驚いたのか、風斬がインデックスをたしなめにかかる。心臓に悪いのかもしれない、どんだけ弱い心臓だ。

——上条の主観による見方だが。

「うがーなんだよお！ うがーなんだあよ！」

風斬の呼びかけにも答えず、インデックスは唸りを挙げる。正直なところ周りからの視線を集めそうで見えて怖い。幸い今の所そういったことは無いようだが、いつそうなるか解ったものではない。当然風斬もそれは解っているらしく、落ち着いて落ち着いてと、何度もインデックスに呼びかけていた。

如何したものかと考えながら、少しずつ速度を落として上条は風斬に近づいていく。先頭を歩く小萌とは大分距離が離れてきた。余談過ぎるが。

「なあ、如何する？ あれ」

「如何するって、言われても……話しかけても、返事が無かったのは、見てた、よね？」

ぼそりと、相談事を持ちかけるように、実際風斬に持ちかけた。対象である風斬は少し考えた後、前振りのように一つ、問いかけてきた。

それに対しては当然だと、上条は肯定する。実際、それが解ったから話しかけたのだから、前提におかれていないといけないことだ。

「多分、今あの子は意識が、全部怒ることに向いてるんだと、思います。混乱してるのと、殆ど変わらないよ。だから多分何があってるのかも、考えられないんじゃないかな」

「……なんだって、――」

途中まで言いかけて、ふと思い当たる節が、上条の主観に思い描かれる。

要は、簡単なことなのだ。

「――つまり、」

「安心してるんですよ、こうやって誰かと話ができて」

風斬が引き継いで、そして締めくくる。

そうだ、つまりインデックスは、楽しんでるのだ。風斬が楽しみたいように、インデックスは自然と、楽しんでいたのだ。

それを、

「うらやましい限り――ですね」

壊すように、上条の主観は終わりを告げた。

気が付けばあたりに人はなく、あるのは学園都市の夜光に照らされた三つの影、どうしようもなく確実に、それは上条と、風斬と――

「始めまして、とまずは自己紹介をしておきましょうか。私は神裂火織といいます。用件は――」

有無を言わさぬ声、その一つ一つが、上条を攻め立てるように、向かってくる。

三つの影、歩道橋の死角に半ば隠れる形になっていた最後の一人が、少しずつ上条たちへ寄ってくる。大きな、曲がらない意思を持つて。

「――私は魔術師だ。といえば、自ずとわかるでしょう？」

それは一種の、宣戦布告だった。

第二章 2

2

あたりには何もなかった。ここまで突然に、上条と風斬の周りから、人はいなくなっていた。……もしかしたらそういう矛盾を回避するために、少しずついなくなっていたのかもしれない。

が、上条と風斬には、気がつくことができなかった。

あたりに明かりは少ない。照らすための明かりではなく、学園都市が暮らす生活の闇が、あたりを照らす主流となっていた。

だが、その中心の一つであるものが無い。解りやすく言えば車だ。あたりに何もないのは先述の通りだが、それに合わさって、明かりが足りていないため、辺りは非常に薄気味悪い状況を作り出していた。

気になることがあるとすれば一点、夜影の中薄暗く見える何かがこげた後、これは一体、何を意味するのだろうか、上条たちにはしる術が無い。

そして目の前の魔術師^{てき}は、考える暇を渡さないだろう。何せ敵なのだ。文字通り、上も下も、左も右も、前も後ろも何も無く、上条は彼女と敵対せざるを得ないのだ。

風斬が、驚きか、おびえか、数歩後ろに下がる。上条はむしろ下がることをせず、前に少しだけ進む形にした。

「……おや、私はそちらの少年だけを範囲に指定したはずだったのですが、おかしいこともあるものですね」

目の前の魔術師——片方が思い切り裁断されたジーンズと、似たようなTシャツ、ともすれば露出魔のような、あやしげな服装——名乗った名は神裂だったか、それが本名かは上条には定かではないが。

いや、それよりも……

「テメエ……風斬を巻き込んだのか？ テメエのミスで！」

まずはそこに激昂する。インデックスの事を狙っておいて、それに加えて風斬も？ 死かも自身の手違いで……悪びることも無く、平然と——

「それは、申し訳なく思っています」

「……なっ」

上条の表情が驚愕に揺れる。それは怒りによるものではなく、純粹な驚き、理解できないという意味では、不快を感じているのかも知れないが、余談だ。

故、現在上条が感じているのは全て驚愕だ、そこから派生する感情など二の次に、結論だけみれば驚愕一色に、一瞬で塗り変わってしまった事になる。

「言い訳になりますが、私は貴方以外の人間全てを対象に魔術を仕掛けました。その効力はたとえつい先ほどまで会話をしようといふ何の違和感無く離れさせることができます」

何せあの子をだませるのだから……風斬が一度そこで言葉を締める。——これでは余計に訳がわからなくなったただけだ。

混乱する上条と、困惑する風斬、それを他所に神裂は言葉を改め

て進める。

「彼女が貴方のように魔術をひきつけない体質なのでしょうか……何となく、彼女からは魔術とはまったく縁が感じられないのですが、どうということなのでしょうね」

締めくくった。

コレまでのことを考えて、纏めてみるとつまり、単なる無駄話だったのだ。本題の前に、緊張でもと選り払おうとしたか……それはないか。

これは前振り、もしくは彼女自身のけじめ——どれでもいい、ただ、彼女の目には、見据える視線だけが残った、射抜く視線で、射抜くだけになった。

「……彼女を、渡してもらいましょうか」

構えるように、腰を落として、しかし腰の不気味なまでに長い刀には手をかけず、脅してかかるように、実際上条たちを脅してきた。常人ならば気圧される状況で、間違いなく相手は数段格上だ。故に、物怖じしても攻められることはない。

むしろ、神裂はそれを願っていた。

戦うことなく、彼らが、彼らの光ある道を、進んでくれる、それが良かった。だが――

「ふざけんなよ！」

上条は動じることは無かった。むしろ逆に戦意を掻きたて、怒りのもとに神裂を睨み返している。睨み殺して、送り届けている。

そして風斬もまた、動かない。風斬でさえ、自分の中にある柱を、紅く灯して、そして同時に――白く輝かせている。

「ごめんなさい。私は……やっと友達になれた子と、別れたくはありません」

神裂は、自身と上条、十歩あるかないかの間を通る風を“見た”。そこに拒絶の意思、否定の壁を感じて、いくつかの怒りを内包させる。

改めて、睨み返した。

「解りました、では……力づくでもあの子を保護させていただきま
す」

まず最初に、浮かんだのは『?』だった。神裂が保護という言葉を使ったことに、上条と風斬は同様の疑問を覚えた。“保護”という言葉、非常に大きな違和感。

それが伝わったのだろう、神裂は何かを察したように頷くと、少しだけ構えを緩める。油断ではないだろうが、話すべきだと、判断したのだろう。

そして、この事件、一から始まった全ての事象が、ひっくり返る。

ことの発端は上条とインデックスが出会ってから——この物語の最初の始まりだ。

ベランダで布団を干そうとした上条が、ベランダで干されていたインデックスを見つける。出会いとしては、衝撃的だった。

とかく、そこでインデックスは魔術結社に追われているといった。

だが、

その日の夕方に出会ったステイルという魔術師は、彼女の回収に
来たといった。実際彼女を殺しそうな勢いだったし、上条の抵抗を
当然だと受け入れていた。

負けるとは、思っていなかったようだが。

だが、

次の日、治療を終え、目が覚めたインデックスは大方の真実を語
った。そこで上条は彼女をちよっと怒ってちよっと許して、守ると
近い、風斬はインデックスと友達になった。

経緯はともかく、上条の情報は大体ここで止まっている。

だから、

そもそも、魔術師に追われていると言ったのはインデックスだけ
ではなかったか？

そもそも、ステイルは回収に来たと入っても自分を魔術結社の人
間とは言わなかった。

そもそも、――

ここまで疑問だけならば多数あった。しかし答えが出ることは無
かったのだ。もしくは、目先に見えた答えで満足していたのかわし
れない。

とはいえ上条を、風斬を、インデックスを、ステイルを攻めるのは酷だろう、それぞれにそれぞれの考え、事情、記憶があって、それは他者では推し量ることなどできないのだから。

しかしそれも終わりだ、神裂の登場と、それによる全ての種明かし——いや、種明かしは正確ではないか、もっと正しく言うならば歯車合わせ、間違った歯車と正しい歯車を交換して時計を合わせる。

上条と神裂の間にあった風が、今度は両者に吹きかける。時を告げる時代のように。

「なんですか……それ、ふざけないでくださいよ、インデックスちゃん、貴方達の不満を、全部一人で背負って、その上貴方達は嫌だからって言うだけで、身勝手な地獄を、あの子に押し付けたって言うんですか!？」

話が終わって、風斬が、まず激昂した。上条は拳を握り締め、顔を俯かせたままで——今は全てを風斬に任せているのかもしれない。もし、神裂が襲ってきたとき、風斬を守るのは自分だけだ——そのときのために、爆発させる意思を溜めているのかもしれない。

「それでも、そうするしかなかった! あの子をこれ以上つらい思いをさせたくなかったから、もうだめだって、最後の瞬間なのに、笑顔で笑っている、そんなことをさせられなかったから! そうするしか、無かったんですよ!」

悲痛な表情で、実際そうなのだろう、古傷を、えぐられたくない場所をえぐられている——神裂は叫び返す、意志の強さで言えば神裂の方が上だ。声の大きさも、力の強さも。

けれどもそれは、風斬の退く理由にはならない。

諦めてはいそうですかと、二人目の『ともだち』を見捨てる理由にはならない。

「それは、貴方達の身勝手じゃないですか！ インデックスちゃんは何も悪くない、全部、全部貴方達が悪いんだ！ だってそうでしょう！？ あの子はただ笑顔を浮かべるだけ、つらいと思うのは、貴方達だけだ！」

だって、と。

だって、と――

だって、と思いを迸らせる。限界まで、神裂を目を向ける。

「インデックスちゃんは、楽しかったから笑っていたんです！ 次の一年もきつと楽しいって、そうおもったから笑えたんです。それを、貴方達は――」

風斬の言葉、

そして、

「うっせえんだよ！ ど素人が！」

神裂の怒り――風斬の言葉は、神裂にとてつもなく不条理に突き刺さったのだろう。ならば、激昂するのも可笑しくはない。

刀に手をかけないまま、獲物から手を放したまま、神裂が飛び掛

ったのも、可笑しくはない。元々、言葉ではなく実際の戦闘が行われるはずだったのだ。

だから、

「やめろ！」

上条の言葉も、また可笑しくなかった。

割り込むように神裂の前に出て、驚いた様子で神裂が立ち止まる。本来ならばよろめいて、隙を見せていただろう。しかし神裂に限ってそれはなく、すぐさま当然のように速度を修正すると、一度だけ、上条には近くできないくらいの短い時間、止めて、高速でけりかかる。

横からの蹴り、見えなかった。

よって避ける暇も無く突き刺さる。しかし横に飛ぶことも、倒れふすこともない。

上条は後ろにおおきく飛ばされて——それでも風斬の後ろまで下がることは無く、着地と同時に立ち上がる。

立ち上がっただけの上条は、

「てめえらの過去を見せられて、てめえらは不愉快になったかもしれないねえ……だけどな！」

一歩前に踏み出し、

「俺達の手で幸せにして何が悪い！？ インデックスに笑顔を与えて何が悪い！？ てめえらがやり損ねたことを、俺達がやって何が

悪い!!」

拳を握り締め、

「だから、俺達の未来は、てめえらの過去は、俺達が永遠のまま完結させてやる!」

爆発させた意思でもって、強大なまでの無謀に、果敢にも挑みこむ。

敵は強大、先ほどの一撃、上条にはまったく見えなかった。ただのけりだというのに――そして、それだけではないだろう。ただなすべきことは山のようにある。

だが……諦める意思は、最初から必要なかった。

第二章 2（後書き）

今度こそは……！

とりあえず、一気に物語が転に傾くことって、ありますよね。
第一部だところこ。

第二章 3

3

上条当麻は動く。

いや、動いた。そのまま踏み込んで、踏み込んだまま前かがみに倒れこむ。原因は間違いなく神裂だ。いつの間にか目の前にいた神裂が足を振り下ろしていた。

疾風迅雷電光石火、銘打つならばそういったところだろうか……いや、いうなればコレは、神速神閃。

「立ち上がらないでください！」

言うものの、実際立ち上がることは無いだろうと、神裂は踏んでいる。何せ殺すつもりは無いにしても、頭を思いの外勢いをつけて打ち付けたのだ、常人ならば、一撃で沈んでいるはずだ。

なれども、

「断る！」

勢いをつけて、上条は手を地につけて立ち上がる。そのまま頭突きの要領で神裂に向けて飛び掛った。あわてることは無く神裂はそれを横に退く事で避ける。多少の動きのみで、あつという間に上条は新たな隙を作る。

届かない。

「があっ！」

すぐさま神裂の裏拳を叩き込む。少しの間滞空し、撃墜する。耳

が痛くなるような鈍い音、空を切る、それだけならばきれいな音、最初と同じような激突音、しかしこちらの方が、音が薄い。

「貴方が！ 立ち上がらなければ！ あの子は！ 何も知らないままで！ いられると！ 言うのに！」

上条が立ち上がるよりも早く、上条の元へたどり着いた神裂が、自身の鞘をそのままにした刀で上条を殴りつける。何度も、何度も、何かがきしむ音と共に、上条の体を傷つけていく。

それを――

「やめてくださ――」

「来るな！」

風斬が止めようとして、上条が制した。風斬を想ってゆえの行動。それが皮肉か、それとも幸運か、神裂の腕が一瞬とまる。

一瞬、その間に上条は右手を伸ばす。

九死の一生を上条は迷わず前に進む為に使う。彼の右手は神裂の鞘へと向かい、握りこむ。放すまいと、負けまいと。

だが、

「倒れて、くだ……さ、い！」

神裂は言葉の端に力をこめて、それを振り払う。何の抵抗もできず、豆腐を切り裂くように上条はあっけなく吹き飛ばされてしまい、訪れた機会は消滅する。――もし、逃げを選んでいても、答えは変わっていないかっただろうが。

一回転、二回転、体を思い切り打ちつけながら上条は回転する。

その度に、空が見えた。暗いくらい、光にかき消された闇の空、手を伸ばそうとしても伸ばせず、伸ばせたとしても、届かず、その闇をかき消すことはできない。

(立ち……あがらないと)

考える。

けれども体は動かない。動かすことができないからだ。何せコレまで、神裂は殺さないつもりでも、何かの拍子に死んでも可笑しくない一撃を何度も喰らっているのだ。

それがここに来て、集中した。神裂の攻撃の、その根本が姿を現し始めたのだ。

高くから落とせばガラスは割れる“かもしれない”、それと同じこと、上条はいつやられても可笑しくなかった、どれだけ淡泊な結果だろうと、それは事実なのだ。

「ぐああ……おおおおお」

それでも上条は唸り声を上げる。地獄のそこから……むしろ、地獄のそこへも届いてしまいそうな唸り声、止めるものはいない。神裂はもう立ち上がれないと懇願にも近い確信をいだいていたから、風斬はもとより止める理由はないから。

止める理由は、風斬には無い、しかしそれは直ぐに書き換えられる。上条が立ち上がることに失敗したとき、風斬はもう、飛び出していた。

歩幅はそれほど大きくないが、それでもそこまで遠くは無い、風斬でも歩く歩数は二桁入らない。

それに気が付いているのかいないのか、上条はそれでも苦悶の表情を挙げながら、闇の上へ立ち上がろうとする。

「た、立っちゃ、だめ、だよ！」

必死な風斬の声が誰も居ない夜空へ響く。

上条の右手は、地を指しわるかという勢いで力をこめる。動かない体は、どうにかそれで立ち上がる。だがまだ、膝をついているだけだ。

「何故——」

「何で——」

神裂火織。

風斬氷華。

考えると、言葉が合わさる。

「立ち上がるのですか！」

「立ち上がっちゃうの！」

その中に含まれる感情は、完全に別のものだろうが——優劣を考
えるとしたら……そんな物はないのだろうけど、美しいのは間違い
なく風斬の方だ。

「当麻さんは、自分勝手だよ！ 勝手に戦って、勝手にやられて、
これじゃあ、あの人たちと、何も変わらないよ！」

「じゃあ、風斬」

上条は左手で風斬の頭をなでて、一瞬茹蛸になるものの、風斬は直ぐに怒った様に表情を切り替える。

「風斬は救えるのか？」

「ッ——それ、は……」

違うとは、いえなかった、言わせてはくれなかった。
言えば同じになってしまう。押し付けがましい答えと、自分勝手な否定は、結局は何も変わらない、まったく同じで、勝手だ。

「だったら、俺がやらなくちゃいけねえ、あいつの目を覚まさせて、それから——考えるんだ。時間はあと少しだけあるんだろ？ だったら考えなくちゃ行けねえ……」

答えが、必ずあるはずだから。

上条は立ち上がる。

「あ、——」

風斬の手から、上条が離れていく。

——思い返す。神裂が現れ、ことの真実を知る。

インデックスは記憶の容量の85%を魔道書のために使わなくてはいけない。よってのこりの15%で、たったの1年しかない記憶容量ですごさなくてはいけない。

そしてその期限が、もう直ぐ迫っている。

(……あれ?)

そこに来て、潔く風斬は違和感を覚えた。

見えないほどの高速で後ろに下がってから、神裂は体を落として——というよりも体を下ろしてしゃがみこむ。

目の前に迫る上条当麻、その意思是間違いなくもう少し前の自分たちとそれほど差異は無い。つまり、この先にある絶望を、彼は知らないのだ。

ならば、教えるしかない。絶望を教えて、ただし感じさせず、この少年には、早々に退場してもらおう——あの向こうの少女も同じ事だ。彼らの感じる絶望は神裂が二度感じた絶望という根本とはかけ離れたものだ。だが——

(それでも、十分なはずなのです。何せ彼らは単なる子供なのだから)

自分自身の個を感じることができないただの子供だ。

神裂は上条をそう断じた、風斬をそう決め付けた。だから——知らず、そして解らないのだ。上条が『偽善使用^{フォックスワード}』であることを、風斬にとって、インデックスはこの世で最も失いたくないものだということを。

たとえば神裂が、救われぬものの救済を願ったように。

上条は救いたいものを救い続ける。

たとえばステイルがインデックスのために全てを殺すと覚悟したように。

風斬は初めてできた二人の友達を、守り続ける。

「お、おお、おおお」

神裂は片膝をついてしゃがみこんだ。コレはつまり“自身の存在を目立たなくする”意味がある。

周りに立っている人間が多いほど意味のある魔術で、隠密を得意とする彼女の魔術の初歩の初歩といえるものだ——ただし、超一流の熟練者が行った場合、それは非常に強力な隠密の魔術となってしまう。

つまり、たとえ目の前に先ほどまでいたはずの人間だったとしても、魔術をまったく知らないもの、魔術というものの根本を理解していないものにはまったく見つけることのできない代物なのだ。——事実、風斬は突然の消失に困惑している。

そう、風斬は。

つまり、上条は何の迷いもなく、突っ込んでくる。

見えないはずなのに、感じることでできないはずなのに、上条は最初からそこに在ることを察知しているかのように踏み込んでくる。

回避、する暇は無い。可能だが多少無理が出る。そもそもこの魔術は動かないことに意味があるのだ。しゃがみこんだままでも、動いてしまえば効果は切れる。

そのため風斬は迎撃することを選んだ。

上条は——先ほどまで神裂が立っていた場所を完璧に無視して神

裂の今いる場所へ進んでくる。

それが何を意味するのかは——神裂には検討がつかなかった。

——上条の拳と神裂の鞘が交錯する。

そして、

——そもそも、神裂の服装と二メートル近くある刀と鞘、これらには全てある一定の意味がある。たとえば服装は左右対称であるし、それ以外にも彼女はさまざまな場所に、さまざまな方法で“意味”を隠している。

彼女の場合、自身の容姿とあいまってそれが余計にアヤシさを感じさせてしまっているが、少なくとも彼女の根本、もしくは母体とも呼ぶべき『天草式十字凄教』は隠密を軸としているのだ。

故に、彼女の持つ刀、七天七刀しちてんしちとうを収める鞘にも又、ある種の記号が混ざっている。たとえば——いや、これは余談が過ぎるか。

つまり、

素人目では解らない位繊細に、そして精密に、魔術は鞘にまとり付いている。これは一つの結論だ。解りやすく言おう、上条は魔術に関してはまったくの素人だ。そんなものがあるのは、まったくもって知るよしもないのである。

そして上条には右手がある。

その右手が、偶然にも神裂が迎撃に使った鞘の魔術に触れたら。

バギッ！！ と、音を立てて神裂の楼閣は砂と散る。

まず最初に、神裂はまずいと考えた。

相手は一般人なのだ、動けない程度に何も残らないよう痛めつけてはいるものの、それでも本来は神裂にとって、上条当麻という存在は、救うべき手のひらを伸ばす相手なのだ。

非常にそれではまずいのだ。神裂と上条の間、そこには右手と刀身をさらした刃がある。

これでは切り裂いてしまう。

たとえ魔術がまわり付こうと、あくまで刀は刀だ。切れるものは切れる。そしてきれば残ってしまふ。

「くっ」

ここに来て、神裂が始めて苦悶の声を上げる。それは皮肉にも、自身の性によるモノだった。

——神裂の体が、無理やり後ろへ転がっていく。

時間が無かった、ほんの一瞬で取れる行動はそれだけだったのだ。故に、それは致命的な隙を生む。戦闘に置いて、取り返しが付かないほどの——圧倒的な隙。

上条と神裂、常人と聖人という、拳銃と核兵器の戦力差が、あっけなく逆転するのである。

「てめえが……もし、自分の押し付け、がましい、幻想を……インデックスも……そうだと、信じているのなら………」

ふら付いたままの上条当麻が、しかし一歩だけ前に踏み込んで、神裂に宣言する。

「まずは……その、幻想を——」

それはまさしく、そうかのほうこう勝利宣言だ。

だが、

そこまでだった、上条は、倒れこむ。

もし——もし後一歩踏み込めていたならば、上条は神裂に勝利していたかもしれない。しかし、足りなかった。上条当麻は、自身の勝利の前に、倒れ付いたのだ。

後には駆け寄る風斬と、苦々しげな表情で、風斬に向けて何かを言う神裂だけが、残った。

上条当麻は——意識を起こしていない。

第二章 4

4

結局の所、神裂との対決はどうともいえない結果になった。

予定調和といえはその通りだろう。何せ向こうはインデックスを魔術に巻き込まなかったのだから、最初からその場で捕まえるつもりは無かったのである。

絶望を味あわせる。地獄のそこへ、上条たちがついていけないために神裂は地獄の入り口を店に來たのだ。真実と、神裂のような実力がありながらも助けられない事実、それを突きつける。大体そのような目的だったのだろう。

ともあれ、それを風斬たちは勘繰ることはできない。何せ風斬たちは地獄を見向きもせずには手を伸ばしているのだ。インデックスの地獄を幻想だと断言してぶち壊しているのだ。

そして風斬は今、幸せの結末を疑っていなかった。

(そもそも、)

考える。

これまでの情報の中で、科学側の人間である風斬が感じなくてはいけなかった疑問、上条とは違い、風斬はそれなりに科学に近い立ち位置にある。故に、気づくことが当然である、問題。考えた。

(前提からして可笑しい)

断言しよう、神裂のいう15%は虚実だ。

（人の記憶には意味記憶とエピソード記憶がある。これは別々で、たとえばインデックスちゃんの場合、記憶している十万三千冊は全て意味記憶に記憶されている。対して神裂……さんの言う記憶は全てエピソード記憶）

風斬は目先を下に落とす。

（そもそも、人は140年分の記憶を保持できる。だから神裂、さんの言ってることは一種の勘違い、だよ）

目線の先には二人の人間がいる。一人は数日前から眠り続けている上条当麻、もう一人は昨日眠ってから一度も目を覚ましていないインデックス。

（ここ最近。インデックスちゃんは眠りが深くなってきている。つまり、刻限が近い。……神裂、さんのいうことは、やっぱり本当なんだね……）

だからこそ、それはおかしい。科学的に、そういったことは起こらないはずなのだ。だからおそらく原因は魔術。それも内側からの枷だ。

その枷の対象はインデックス、だけではなくその周りの人間にまで影響を及ぼす。

神裂はまだいいほうだろう、彼女は間違いなく上条たちも救うつもりだ。救われない、インデックスを救うものたちに救いを、彼女はたぶん、そう考えているのだろう。

（そんな人たちをだまして、人為的な地獄を、こんな簡単に作り上げてしまう、いったいどうしてそんな事ができるの？）

だが、救える。

インデックスを救うには、上条の力が必要だ。彼自身から、そして小萌から聞いた、とても不可思議な科学のほずで科学ではないような能力——イマジンブレイカー幻想殺し。

これを使えば必ず、インデックスを救うことができる。
場所の目処も大体立っている。

『——』

上条の言葉が、何度も響いてくる。その内容に、ちょっとだけ不満を覚えながら、それでも思い出すだけで嬉しくなってしまうような言葉、魔法のように……いや、上条の幻想こじはは間違いなく、感情の魔法なのだ。

（お願いします、当麻さん、貴方の右手みぎてで、地獄という名の幻想からインデックスちゃんを救い上げてください）

そう願ひ、それから、

（私は貴方を助けるから、二人で、友達を、助けよう、当麻さん！）

そして——インデックスの目が風斬の決意に呼応するように開いた。

インデックスと小萌は銭湯に来ていた。

風斬は上条が倒れてからずっと看病しっ放し、ご飯などは普通に食べているし、睡眠などもちゃんととっているのだが、彼女は上条がおきるのを鬼のように待ち続けているので、正直怖い。

ただ風斬本人曰く上条が目覚めたら全部終わる、だそうなので小萌としては早く上条の目覚めを待つばかりである。

「ねえ……」

学園都市の一等地、第七学区の本来ならば高層ビルがほかの場所と同じように立ち並んでいても可笑しくない場所に銭湯はあった。何故あるのか、経営は大丈夫なのか……不思議なことは多々あるが、第七学区に大きな銭湯はここだけなのだ、恐らくそれが続く限りこの銭湯は大丈夫なのだろう。

中は昔を思わせる素朴なつくりで、例外は学園都市最先端、外の二十年以上先に行くマッサージ機程度だろうか、牛乳が置いてあるのは変わらない。

脱衣所は一端の銭湯にしてはかなり大きめで、一度に五十人以上が入れる。外から見るとかなり狭く見えるのだが、同じ場所に高層ビルが建てられるだけあり、実際には相当広い。その殆どが銭湯というわけだ、五十人も可笑しくはない。

中には毎度毎度たくさんの方がいる。小萌は毎日ここに来ているし、インデックスも小萌の元へ転がり込んでからはずっとここに通っている。

そんな中で、外の喧騒と同じくらいの人の波は、中々に圧巻であった。

そんな場所で、インデックスはけだるげな声と目を隠さずに、小萌に向ける。

二人は脱衣所の中にいた、時間的にも丁度風呂に入りたい時間だ、あたりには人があふれている。風斬は人がいないうちにさっさと漬かりに行ってしまう、後から来ることはない、今は寝るまで上条を待ち続けている最中だろう。

「どうしたのですか、シスターちゃん」

ごそごそと、自分の目線の高さまでもってきたカゴに小萌が服を放り込みながら問い返すように促してくる。

インデックスは少し考え込んだ後、ガクリと眠そうに顔を落とすのをはさんでから言葉を選ぶ。

「なんでひょうかはとうまが起きるのをずっと待っているの？」

風斬が確信して待ち続けること、それが疑問だったのだろう。本人に聞いてそのうち解るとしか言わないし、インデックスには答えに至る方法がないのだ。

「待ってるだけじゃ何もできないんだよ、私たちシスターが祈り、救って、救われてきたように、生きるためには待つっていうのは少し弱い選択肢かも」

自身の存在と風斬、その他もろもろを含めて、インデックスは語る、だがその言葉に力は乏しい、何せインデックス自身が今まで一度もすくわれたことがないのだ。だから仕方がないといえば仕方がない。

小萌はその力の乏しさに気づいているのかいないのか、答えに至ることが出来ないこは解っているだろう。だけれども小萌自身も答えは出ていないのだ。

故に、想像で話すしか方法はない。

「うーん、むずかしい質問ですねえ……」

唸りながら、自身の身につけていたもの全てを乗せて多少重くなったカゴを抱えて、先ほどまで使われていたのか、――まあほかの場所も大体そのような感じだが――締めっぽい椅子兼台から持ち上げてえんやこらと元の場所に戻す。

「多分、上条ちゃんであれば出来ないことがあるから、それをまってるんでしょけど……」

それは違うんじゃないかと、小萌は続ける。

「別に上条ちゃんである必要はないのですよ、確かに上条ちゃんは頼りになりますし、ここぞというところでいろんな人を助けてます。でも、だからといって上条ちゃんに全てを託す必要はないのです。」

上条ちゃんが私を頼ったように、風斬ちゃんも上条ちゃん以外の誰かという選択肢を持つべきなのです」

そう、風斬は別に上条だけに頼る必要もないのだ、インデックスの枷が魔術的なものだとかっている以上、風斬は魔術師に頼ることも選択できたのだ。

小萌の言う上条以外の誰かに頼る、それは思いのほか簡単なのだ。それなのに、風斬は上条を待つ、確実ではないにせよ、別の方法があるのだというのに。

「でも、ひょうかは絶対にとうま以外からの選択肢を切り捨ててるんだよ?」

「それはまあ……しょうがないのです」

全ての準備を終えて一足先に本陣へ向けて足を運び始めた小萌、それを追いかけるように小萌より少しの時間をかけて準備を終えた

インデックスが後を追う。

カラカラと、扉が開いて、四人組の少女が出てくる。何処かで見た少女が一人、知り合いではないので気のせいかな、向こうがそれなりに有名なのかな。

どちらでもいいが、彼女たちは二人が扉にたどり着く前にその場を離れた。

「風斬ちゃんはちょっとばかり大変な病氣にかかってしまったのですよ」

冗談めかして小萌が言う、対してインデックスは思わず驚いて大声で聞き返してしまいそうになるが、小萌の言葉に本気の気はまったく感じられないので、あわててそれを収める。

危うく入る前からのぼせてしまうところだった。

ただでさえ眠くて仕方がないのだから、これ以上疲れさせないでほしいと、視線でインデックスは抗議する。――が、小萌はそんな事どこ吹く風、わかった上で全部流してしまっている。

「……………それで…………ひょうかの“病氣”ってなに？」

暫くそんなものが続いたまま二人は停止していたが、諦めたようにインデックスが動き出す。小萌もあわせて動き出して、閉じきってしまったドアに手をかける。

「それは――後のお楽しみという事で、とっておきましょう……………お教えしますよ、風斬ちゃんと一緒にね」

お楽しみを持ったまま入ってみるとインデックスが眠気の所為か

早々にのぼせたため、数十分で風呂を切り上げ、牛乳を伝統の飲み方で飲み干し二人は帰途についた。

その道中、特に会話は無く、インデックスが小萌の言葉を待つような雰囲気、家についた。

出迎えた風斬を巻き込んで小萌による“夏休み補修大作戦自宅出張編”が開催され、ドンドンパフパフしながら聞くことになった。

その内容に二人はおーだとかへーだとか、相槌を入れながら、インデックスは非常に眠そうにしながら、それでもなんだかんだで最後まで聞きながら、眠ったままの上条を含めた四人は一日を終えたのだった。

そして、インデックスの刻限である“最終日”、刻一刻と迫る時間の中で、インデックスを救うためのパーツが、少しずつそろい始めようとしていた。

第二章 4（後書き）

次回クライマックス！

ですが戦闘部分は原作と特に違いはないため、かなり短くなります。

エピソード『そして希望の夢の話を I hope palm』

最初に訪れたのは二人の魔術師、考えるまでも無く神裂とステイルである。

二人はインデックスの保護に来たという。そして同時に、別れの挨拶を済ませろといった。風斬は当然それを拒否し、上条が目覚めるのを待てといった。

全て、そのときに終わらせるから、と。

神裂たちはその言葉の意味を正しく理解しなかった。ほとんど理解できなかったというのが正しいが、それでも別れを済ませるのなら、それでいいと納得した。

ただ、保護に來た神裂たちに激昂することも無く、かといって諦めた様子も無く、待っていたといった様子の風斬に疑問を覚えたが、話し合っても結論は出なかった。

それから暫くして、最後の日ギリギリのところ得上条が目を覚ました。内に残る打撃を大量に喰らった所為か大分疲れが残っている様子だった。

物語は一気に加速する。

風斬が上条に解決策を話したのだ。

恐らく上条も、時間があればたどり着けただろう。しかしそれは叶わず、意識の覚醒がギリギリになってしまった。

タイムリミットまでは数分。

しかしありとあらゆる例外である上条は、全ての障害をキャンセル

ルし、真正面から突き進める。

もはやインデックスを、救えない理由等何処にもなかった。

全てが救われる。

上条がインデックスののろいを殺し、それによって発生した障害によって神裂たちがそれに気がついた。丁度小萌は銭湯に行っていない。

何もかもがそろい、そろったキーによって、風穴が開けられる。スタートラインに立った魔術師の協力により、上条は右手をインデックスに差し伸べた。それで全てが終わり、ハッピーエンドを迎える。

はずだった。

神裂が言うには、目の前の羽には先程の竜王の殺息クラスの威力があるという。人が喰らえば跡形残らず……とは範囲の問題では行かないが、喰らった部分が完全に死滅するだろう。この残り滓はそれほどの威力だ。

そして、その真っ只中に上条とインデックスが居る。

(……だめだ)

このままじゃあ二人は無事にすまない、形的にインデックスを上条が庇う形だがそんな事はない、上条が倒れてしまえばインデックスが危ない。たとえ上条がインデックスを守ったとして、上条

はどうなる？　——だめだ、そんなの絶対にダメだ。

（やっと……やっとインデックスちゃんが幸せをつかんだのに、それにあの二人が当麻さんの背中を押して、やっと、やっと手に入れたハッピーエンドだったのに！）

こんな終わり方じゃあ、あんまりだ。

だったら、

（だったら——変えなくちゃ、バッドエンドなんて認めない、誰もつかめない、涙だけなんて、そんなの絶対認めない）

インデックスが、上条が、そしてできれば自分が——笑ってられる未来を、だれが否定できようか……そんなの、誰にだって出来やしない。

笑っている本人にだって、いわせやしないのだ。

”笑える”事を否定する何て、誰も、出来やしないし、誰にもさせない。

（だから——）

「だからお願いします、神様」

（私の友達を）

「私たちが助けた親友を」

——昨日、小萌が言っていた。

『人を好きになることはとても大切なことです。誰かを想い、誰かを助けたいと思う心に間違いはないのですよ』

笑って、自分とインデックス、恋とは何かと説いたのだ。

『だからそうやって、誰かを助けたい、守りたい、そういった想いに人が触れると、恋というものは自然と出来上がるものなのです』

思い出して、内心くすりと微笑する。

『俺達の手で幸せにして何が悪い！？ インデックスに笑顔を与えて何が悪い！？ てめえらがやり損ねたことを、俺達がやって何が悪い！！』

小萌の言うことは一つ一つの的確で、そして思いやりに満ちている。

『だから、俺達の未来は、てめえらの過去は、俺達（・）が永遠のまま完結させてやる！』

だからよくわかる。

その通りだ、小萌の言葉は、とても的確に、風斬氷華を表していた。

（――私の、大好きな人を！）

「助けるための力をください！」

幸せを、神に願う、そのときにはもう風斬は足を踏み出していた。辺りにまう白い羽が落ちてくるまで数秒も無いが構うものか。

助ける理由等、考えるまでもなく、胸のうちに抱いていた。

やっと、やっとインデックスを助けられた。

上条当麻が感じることは、ただそれだけだった。神裂から真実を告げられ、真に救うと風斬と決めたときから、時間はかかった。

タイムリミットまでほとんど時間はなかった。それでも——間に合った。後に残るのはたくさんの幸せ、そして止まらない笑顔だ。否定するものも、こともないずっとずっと続けられる笑顔——インデックスと、風斬と、そして——

……上条当麻はそれだけを考えていた。

全てが終わった、これからのこと。周りの羽にも、神裂の声や風斬の声も、何も聞こえない。ただしあわせだった。不幸を体現した上条当麻は今だけはただただ幸せだった。

こんな幸せがあるのなら、例え不幸でも、悪くは無い。

巻き込まれて、そして誰かを助けられるなら、上条当麻は不幸でも構わない、幸せをこうしてつかめるならば上条当麻は、立っていただける。

思えることの全てをこめて、万感の元、上条はそして、つぶやいた。

「幸せ……だ」

どれだけのことを想ったか分からない。どれだけの幸せがあった

かはわからない、ただ、持っている感情の全てに、不幸というそれが無い。それだけは間違いようがなかった。

だから、

彼は不幸なのだ。

——トン、と音がして、自身の体は飛ばされていた。

いきなり押されて、なす術もなく吹き飛ばされる。結構な勢いだ、上条は驚きながらインデックスを庇うように自身から倒れこむ。その際に丁度、後ろを振り向く形となった。

「……よかった」

ここ最近、慣れ親しんだ風斬の声、彼女もまた幸せに満ちていた。戸惑う事の無い、まっすぐな幸福、心からの笑顔とは、そう言うものだ。

だが、それではダメだった。

「何をしているのですか！」

神裂の声が聞こえてくる。高い、何も聞こえないほどに高いところに居たはずなのに、今はもう誰とも変わらない、不幸でもあり幸せでもある大地に立っていた。

だが、何がなんだかわからない。意識の無いインデックスに、茫然とした上条当麻、一言呟いて安心したように立ち尽くす風斬。

そして、神裂の声。あせったような怒鳴り声。

「その羽に当たれば命の保障なんてありませんよ！ いいですか、早くそこからどいてください！」

必死に、しかし足が出ることは無かった。解っていたのだ、間に合わないことが、ただ声をかけることしか神裂には出来なかったのだ。

自分が何かをしても、犠牲が一つ増えるだけで誰も助けることが出来ない。悔しい――なぜ、あそこで動けたのが、自分ではなかったのか。

後悔。それ以外に今、神裂が出来ることは無かった。

上条はやつと理解した。完全にではない、しかしおぼろげながらも、自分とインデックスの上にあったもの、今風斬に降りかかろうとするもの。

それは”死”だ。それも飛びつきり最悪の、全ての幸福を奪っていく黒色の死だ。

「かざ……………きり」

声が漏れる。しかしそれは風斬には届かない、上条と風斬を隔てる壁は無色で、本当なら届いていたはずの手を、届かないようにしているのだ。認められるはずが無い、認めようが無い。しかし現実には認めなくとも、そこに在る。

そこに在る壁は何だ？ 現実？ 不幸？ 死？ ……いいや、違う。

「これでやっと、幸せですね」

笑顔だ。

風斬は笑って、そこに居る。

上条はそれに手を伸ばすことが出来なかった。

「だからかな、やつと解りました」

透き通るような声で風斬は言う。

「私は、あなたのことが大好きです」

再び、上条から言葉が漏れる。あ……と、単語にすらなっていない言葉——だが、次につながるには十分だ。

言葉を、自覚を持って叫ぶ。

止まれと、止まってくれと。

「かざきり いい いい いい いい いい いい いい いい いい いい
いい いい いい いい !!」

――風斬氷華は笑顔で光に包まれた。

エピソード『そして希望の夢の話』 I | h o p e | p a i m 『(後書き)

そして“希望”の“夢の話”
要するに幻想。

衝撃は、突然襲い掛かった。

所は天井に風穴を開けた小萌の部屋。

状況はインデックスを助けようと、全てを失いかけた上条と、上条の全てを受け入れた風斬、呆然と見守る魔術師達、そして幸せの中、つかんだ幸せを無自覚に確かめるインデックス。

——かみ合っていないかった。

本来、この場には幸せが無くてはならなかった。上条はインデックスを抱え、インデックスが目覚まし、少し遠くから風斬がほつとしたように息を吐く。

さらに奥から魔術師たちが解放されたように、そして何より安堵の笑みを向けている。それが最良のハッピーエンドのはずだったのだ。

そしてそれは——違えないはずだった。

「……何で、だよ」

ぽつりと、上条が漏らす。それは一種の総意だった。神裂も、ステイルも、目が覚めていればインデックスだって、それを漏らしてよかったのだ。

どうしてなんだと、不満を漏らして問題など存在し得なかったのだ。

だから、

「何で……」

上条が投げかけるのだ。

「なんでお前は……笑ってるんだよ！」

それはつまり形となって、なびく。

——風斬は笑んでいた。幸せしかないと、最高のハッピーエンドを抱えたまま、彼女は永遠のように目を閉じている。

もしこれが本物ならば照れてしまいそうだな、なんだかどうにもならない感情を抱えてしまいそうだな——

目が覚めたとき、風斬が決意を秘めた表情でいて。

意識が落ちる前、風斬が非想に暮れた表情でいて。

地獄に手が伸び、風斬が友を願う。

ソシテ——

ソシテ————

「笑って……ふざけんなよ……その笑みは、その笑みは——」

違うだろうが。

彼の感情が爆発する。

「そうだろう風斬、お前はインデックスと友達になりたかったんだ、インデックスを地獄から救いたかったんだ！ 友達って俺が言ったとき、お前はすごく嬉しそうだったろ！ インデックスに降りかかる身勝手をお前は——怒ったんじゃないのかよ！」

それではなんだ、勝手に怒って勝手に救って、勝手に微笑んで、勝手に——消えうせて、身勝手なのは風斬の方ではないか。

「それじゃあ、ダメだろうが！ 風斬、それは——あの時と——」

言葉を吐露して、それでも足りず、最後を吐き出そうとした。ありとあらゆるものが消えていく、上條の中から、願いが、願いが、救いが、手を伸ばした幸福など当に消え去っていた。

幸福だと呟いた彼は『死んだ』のだ。風斬と、インデックスと、願った結果がこれだ。——何もかもが折れて曲がって壊れて、文字通り死滅して。それは逆に抗うことを拒み、更に強要するように締め付けてくるのだ。だが——

そのとき、それは起こった。

「吹き飛べ」

最初は衝撃だけだった。

なにやらそれは唐突なもので、次に感じたのは自身が後ろへ吹き飛ばす音と、何かとてつもなく嫌な音、そしてインデックスが、自分の腕の中から離れてゆく感覚。

どれもこれもが、不幸だった。

長かったのか、それとも短かったのか、上条には判断がつかず、それでもできれば、長い間、逃避のような衝撃に酔いたかった。

だが実際に流れたのはほんの数秒、吹き飛ばされた自分自身が部屋の壁に叩きつけられるまでの時間の間だった。

視点が黒から元へのものに切り替わり、上条はまず、インデックスが明けたものとは別の穴が開いているのに目がついた。

そこだけが確実に挟り取られたようでヒビもこげ痕もゆがんだ線もない、普通に考えればインデックスのものよりいびつな“円”。

ただそれは上条が倒れこむような態勢であつたため目線がそこにいついて、且つその対象が大きかったからだ。恐らく向いている場所が変われば別のことに気がついていただろう。

たとえば――

「必然。……ではあるが、これは中々に僥倖だ、この子が眠っているのは、行動が楽ですむ」

視線を横に、下にと動かして、更に下に行こうとしたところで上条は“それ”に気がついた。

目の前に青年がいたのだ。18ほどで、白いスーツと、そのスーツの所為で余計不気味に見える強引に染め上げたオールバックの緑髪が目映る青年。

アウレオルスⅡイザードだった。

だが、

それよりも先に気になることがあった。

「アウレオルス……キサマー——！」

ステイルの声が聞こえる。あいつの名前はアウレオルスというのか……いや、疑問点はいいい、まずは、まずはそうだ、彼の居場所に気がつくべきだ。

彼の抱えている“者”に気が向くべきだ。

「その子を……放せ！」

アウレオルスはインデックスを抱えていた、捕らえた獲物は放さぬとばかりに。

激昂したステイルが、そのアウレオルスに対して顕現されたままの魔女狩りの王を差し向ける。

「な、何故その場所に、いるのですか！」

続けて神裂が、居場所を指定する。そこは先ほどまで騒動の根本であった場所、舞い散る光の羽が地獄を作り上げていたはずなのだ。それなのに、今はその羽すら存在しない。あの地獄が、すべて救

われてしまった天国の様に、全てを失ってしまった空虚のように。

「憮然。そんな事も解らないのか、魔術師」

吐き捨て、アウレオルスは全てから背を向ける。上条の視線はそちらを追いかけ、それとほぼ同時にステイルの魔女狩りの王が飛び出す。

元々間合いなど合っていないようなもの、魔女狩りの王のような巨体が、一歩動けば全てを焼き払えるツ状態で、アウレオルスはそれを見向きもしなかった。

いや、ただ一言だけ。

「失せろ」

と、宣言するように呟いた。

その瞬間には、彼は全てを失わせていた。魔女狩りの王など、最初から存在しなかったかのように、跡形もない。

同時に、アウレオルスの姿も掻き消える。

「つく！」

ステイルと神裂が不自然に開いた丸穴から外を覗き込む、アウレオルスはここに体を向けていた、出て行ったのならはこの近くに何か手がかりがあってもよさそうなものだが、何も存在し得なかった。つまりアウレオルスは、魔術師二人からまんまと逃げおおせたのである。

「追うぞ、神裂！」

「解っています！」

二人が軽く声を掛け合い、そこで上条がハッとする。意識が全て覚醒したかのように、一瞬にしてクリアに成っていく。

「な、なあ！」

あわてて二人に話しかける。ぽかりと開いた穴に足をかけ、今にも飛び出しそうだった二人、軽く視線を合わせ、そのうちステイルが上条に視線を向ける。

至極不機嫌そうな表情であった。

「……………なんだい」

「お、俺も——」

一緒に行くと、言葉には出されることは無かった。神裂が手でさえぎったのだ。

「馬鹿ですか、貴方は……それよりも先にやるべきことがあるでしょう」

改めて気がつく、二人には二人の信念と使命があるように、上条にも信念がある。——要は優先順位と役割分担だ。

インデックスを攫ったアウレオルスを追いかけるならばステイルたち、魔術師の方が有利である。

そして——風斬に関しては上条が有利だ。

それだけの話。

それからの話。

神裂がいうと、上条は一瞬それに意識をとられ、気がついたときには二人は消えうせていた。

少しの間上条は沈黙していたが、唐突に回帰する。あわててあたりを見渡して風斬を下がして回る。――直ぐに見つけた、横向けになって、少し遠くに倒れている。

大丈夫なのかと、ゆっくり、恐る恐る近づいていく。正直な話今までの地獄は現実味がなかったし、夢でも見ているようなそれは、今も思いのほか続いていた。
つまり、だ。

上条は自身から発せられる警告に、一瞬気がつくのが遅れた。

違和感があったのだ、最初に聞こえた鈍い音、そしてアウレオルスが先ほどまでいた場所、それは光の羽があった中心、つまり風斬が羽に打たれたところではなかったか。

その警告がありながら、彼は気がつくことは無かった。

止めるには、やはりそれは遅すぎたのだ。

そう、

ゆっくりと痛みを抱える右手を使わず抱き起こした風斬の、顔の半分が消し飛び、その中には人間であるといえるものが何も無かったのである。

プロローグ 『救われぬ子羊と救う咎人』 Chaos | i n | t h e | c h a o s

皆さん予想はついていたと思いますが、第一部と第二部は完全に地続きです。

第一章『汝聖なる守手なり knight of knight』

1

眠らない夜は今もまだ続いていた。眠れない底のような時間はまだあった。あと少しで手が届くというところですり抜けていつてしまいう手を見送るしかない、その状況を味わい続ける世界は、いまだ居座り続けていた。

抜け出せない、どれだけ手を伸ばしても、すり抜けて堕ちていつてしまいうその場所を、人は一つの単語で呼称していた。

“地獄”と。

「ステイル、奴の居場所は！」

「解るわけがないだろう！消えうせたんだぞ！？そんな場合の対処なんてできるわけがないだろう！」

何の意味も、何の力も無くただその場から消えうせた。アウレオルス自身の技術か、それとも不可思議な神秘の成せる業か。判断などできるはずは無く、検討など付けられるはずもない。

「では如何しようもありませんね……」

重々しい口ぶりだが、悲観はしていない。何せここは学園都市、悲観するには少しだけ早いのだ。――要するに、まだ打てる手が残っている。

「余り打ちたくない手なんだけどね――」

いいつつ、ポケットから携帯を手取る。かける先は一つ。

と、そのとき、唐突にステイルの携帯に着信があった。

登録してある名前は“変態”。

今から連絡を取ろうとしていた学園都市に潜入するスパイ、土御門元春だった。

『まあそう言うわけだから、ローマ正教が討伐にむかっているんだにゃー、あんまり近くに行くと巻き込まれるぜい』

繋がった途端かかってきた言葉はそれであり、思いのほか意外な答えであった。アウレオルスが以前からこの学園都市に潜入していたことは想像に難くない。

しかし、それをこのタイミングで討伐というのは少しばかりできすぎているとも思える。

——いや。

（別におかしなことはない……か。時間は十二分にあったからな）

「そんなのに頼れというのか？ いいか、直ぐ居場所を吐け、僕達は直ぐにそちらへ向かう」

『別に構わないが……行くなら行くで急いだほうが良いかもしれないな

いな』

どういふことだと、ステイルが割り込むよりも早く、というよりも、間が空いたほうが不自然に感じてしまえるようなタイミングで、土御門が二の句を告げる。

『あいつら、アウレオルスのアジトごと、奴をしとめるつもりだ』

その瞬間、ステイルの持つ携帯から、ミシリと、嫌な音が響く。

神裂もそれを感じ取ったのだろう、一瞬、元から険しい表情を更に険しく変え、そしてそれを改める。険しいことは変わらないが、しかし芯を持たせた表情だ。

『まあ、俺としては一番最悪なのはそこが“学園都市の生徒が通う学習塾”ってことなんだけどな。……いいか、お前ら、場所は今から説明する。——この学園都市のため、何よりお前等が苦しめ続けてきた事への贖罪のため、必ず助けて来い』

（相変わらず、むかつく物言いだ、こちらの事は二次な上に、耳が痛い——だが）

神裂に少しばかり先行される形で移動を続けていたステイルは、一気にその速度を緩めて停止する。自身の力でもって、無敵の壁が立ちふさがるように、しかしそれでいて、辺りを覆う一面の黒が、ふさがるだけでなく進軍を開始したかのように、立ち止まる。

彼の表情に笑みは無い、しかし普段彼が抱いている、——抱いていなくてはいけない、絶対の余裕を湛えている。

「当然だろう、僕達を誰だと思っているんだ」

解ったと、土御門の言葉が聞こえてくる。立ち止まり、コチラへ近づいてくる神裂の音が聞こえてくる。場所を伝える土御門の声が聞こえてくる。

通話を終えたステイルは、携帯を閉じる。その音はとても力強く、軽快な音がした。

——準備は整った。

だが、それを引き裂く雷鳴のような何かがとどろいた。

驚愕は、二度会った。

一つ目は唐突に放たれた。光、音が消え、衝撃が消え、気がついた時には全てが終わっているかのような一撃、何の目的で放たれたのかはステイルには一目瞭然だった。

何せそこはつい先ほど土御門から聞いたアウレオールの拠点『三沢塾』なのだ。

一瞬、全ての思考が逆流する、前も下も後ろも右も上も下も何もかもがわからなくなった後、志向がどんどんクリアになる。今までにないほど激昂しているのだと、ステイルは他人事のように判断した。

その間は本当に何秒、何分ほどだっただろうか、判断はつかない、何せ思考がクリアになりすぎて逆に何の判断もつかない状態でただ

一点を睨みつけているのだ、相当に時間を感じざるを得ない。

なにより——その後が唐突過ぎて、どれくらいかなどと、思い出すことは不可能だった。

「——なんですか、アレは」

最初に我に返った神裂がそれを見やる。驚愕に釣られたように、足が動き始める。

「あそこにあの子がいる……だが、コレは一体どういうことなんだ！」

驚愕だけではステイルたちを止めるには足りない、しかし驚愕は彼らを完全に支配していた。神裂はインデックスがいることにも驚いたのだろう、一層その表情を深めるが、そんな事を言っている仕方が無い、今二人に存在しえるのは怒りではなく驚愕。それ以外存在しないだろう。

何せ、一度消えた『三沢塾』が、再び姿を現したのだから。

とはいえ先述の通りステイルたちの足はその程度では止まらない。驚愕は所詮驚愕でしかないからだ、一過性の感情で戸惑うほど、彼らは二流ではない。

神裂が数歩歩き出しつつ振り返る。その視線の意味は“先に言っている”だろうか、異論はないので頷いておく、どうやらそれで正解のようで、神裂は直ぐにその場から消えうせた。

暫く——いや、実際には一瞬間の間、ステイルは全ての動きを止め、

それから改めて再起動する。今度は止まることなどないように、彼の意思を再び現出する。

「さて、くそつたれの幸せを手に入れに行こうか」

思えば、長かった――インデックスは既に自分たちの元を離れ、ステイルは彼女に近づくこともできない。だがそれでも……決めて
いるのだ。失い、失わせたあの日から。

黄金に輝き続けた、あの過去から。

「僕は……」

足は既に歩んでいた。

炎の魔術師、犠牲の上に立つ天才、ステイルⅡマグヌス。

「君のために、生きて死ぬ」

最上の結末の一端は、彼にゆだねられた。

第一章 2

2

意識が崩れていくような感触の中、ゆっくりとなんでもないように浮遊していた。

ここは一体何処なのだろう。そもそも自分は何をしているのだろうか。考えがおぼつかず、思考がまとまらない。だが——この感覚には何となく覚えがあった。

黒であったものが白に変わり、一瞬前までは確かであったものが不透明な何かに変わっていく。不気味で無様な、自己の無い陽炎のような何か。

そう、自分はずっと、この不気味な空間にいたのだ。

（思い、出した）

それを境に、だんだんと全てが明確になっていく、ブラックとホワイト。光の明滅がまるで輪廻転生のように繰り返され、記憶が、感覚が、視界が、少しずつ目覚めていく。

——ここは『陽炎の街』、確かにあるようで何もない、全てが生きているかのように、意志のために動く傀儡。とはいっても、ここに在る意思是風斬だけなのだが。

（私は、そう）

あたりには人間がいる。辺りには事象がある。風斬と同じような制服を纏い、談笑する二人組みの女子高生。時計を気にしながら一歩一歩を足早に進んでいくサラリーマン。楽しそうに動き回りこの世の影をまったく知らない子供達。

ほかにもたくさんいる——場所としては学園都市に重なるため、同じような科学力と住民の具合であった。

風斬はその中に立ちすくみ、やがて操られた人形のようにふらりと歩き出す。目的地はビルの壁、何の変哲もない、夏の日差しに焼かれた灼熱の鉄だ。

それに触れる。——瞬熱さを覚えるが、無視をすると直ぐにそれは引っ込んだ。風斬は改めて、その鉄でできた要塞に力をこめる。

「化物、なんだ」

暑さしか訴えないはずの鉄が、いとも簡単に砕け散る。

自分の存在を再確認した風斬の意識は、再び闇にまぎれ始める。仕方のないことだ、ここはあくまで自身の中に構築した夢であり、風斬自信は現実には、自身が作り出した地獄のような場所にまだいるのだ。

これは一種の逃避に過ぎない。風斬は夢の中で無意識に追いやっていたことを確認した、それは目が覚めたときに必要な逃げの知識だった。

全部諦めて、全部から逃げていくための、そんな知識だった。

——闇に吸い込まれていくような感触だ。辺りの景色が黒に塗りつぶされて、再び全ての感触が掻き消える。夢だとわかっていてもなお、不気味だった。

あたりを塗りつぶす黒は、その黒自体が更に大きな漆黒に移り変

わっていく。

(当麻さんに、嫌われちゃうな)

目覚める一瞬、少し考えた時の黒は、もはや黒ではなく、闇だった。

——風斬の顔の半分がごっそり抜け落ちて、そこからは三角の立体図形のような何かがくるくると回っている。

……これは、何だ？

「おい、風斬……風斬!？」

救急車でも呼ぶべきなのだろうか。いやしかし、彼女のこれはまるで人間のそれではない。判断し兼ねて暫くその状況が続く。

——その中で上条は驚愕こそ抱いたものの、嫌悪などはまったく抱くということにいたらなかったのだが、結局は余談だ。

何もできないまま時間が流れる。一分だろうか、二分だろうか、いや、三分ほど立っただろう。多少は長さを感じる時間を、それ以上の長さですごしていた上条の前で風斬が目を開く。

ゆっくりと、うめくように。

……まさしくそれは人間そのものだった。

「風、斬……!」

息が詰まる。言葉に詰まる。

だが、直ぐにでもいわなければならないことがある。

「――馬鹿、やろうッ！ 何で、何で――」

お前は笑って、そうつなげようとして、風斬の意思がはつとする。

次の瞬間、上条は吹き飛ばされていた。

壁に叩きつけられるのはこれで二度目だ。今度も運よく何無い場所に激突し、骨も折れてはいなかった。折れそうなものだが、無事だった。

「な……あアッ！」

思わず色のついた息を漏らす。

風斬は上条に抱えられた状態で、片手で上条を突き飛ばしたのだ。上条に触れた感触は一つだったし、目の前で片手を軸にして立ち上がるそれは、何となく風斬がそうであるということをあくまで何となくではあるが、表していた。

「近寄らないで、ください！」

風斬の突き刺すような言葉が上条を射抜く。信じられないような、考えられないような言葉を振りかざして、風斬は上条に襲い掛かってくる。

信じたくない、そんな言葉、考えたくもない。

「なん、で」

少しずつ足に力をこめて、立ち上がる。――風斬までの距離は数歩、間違いないそれは届く距離、だが、届かせない距離だ。歩けるはずの足が、動かない。

「だって――」

ゆらりと、風斬が揺らめく。風斬の行動、言葉、挙動、その一つ一つが風斬と上条を遠ざけているかのように、風斬が陽炎の先に消えていってしまうかのように。

風斬の体が反転する。

「私は、化物だから」

涙をこらえるその顔に、光が宿り、風斬が元に戻る。笑顔がかわいい、いつも通りの風斬氷華という少女に。

だが、涙ぐんでいた。
泣かせたのはだれだ？
そんな不条理は何だ？

何で、何で世界は上条の救いたい人を傷つける？

「まってくれ、風斬――！」

やっとのことで足が動く。
右手を伸ばして、風斬をつかもうとして。
だが、伸ばせなかった。

——伸ばすべきではない、彼の理性がそうさやいた。
右手では、だめなのだ。

右手では風斬がどうなってしまうかも知らない。

「さようなら」

言葉が流れて、結局、上条が間に合うことは無かった。

風斬の背に開いていた“円”に風斬が飛び込む。彼女が流して、
見せた涙もまた、闇の中へと、吸い込まれてしまった。

「風、斬——ッ！」

上条の言葉は、認めてしまったような右手は、虚しく空へ消えて
いくしかなかった。

それから、いくつかのときが過ぎて、上条はそれでも動くことが
できなかった。一步も、一つも、上条は動き出せなかったのだ。

生きているだけ、それだけの存在は——やがて崩れることになる。

「な、何なのですかこれは——！」

声の主は当然というべきか——月詠小萌、この家の主だ。

「家の中が一大スペクタクル！ 涙をそそる私の巨編！？」
ふざけ

るんじゃないですよー、何故か今日もらえた臨時ボーナスが全部パ
ーなのですよ!」

今までの上条たちを全てぶち壊すかのような彼女の声が聞こえて
くる、というか、ほかの人間とちがい表側だけの人間なのでそのま
ま裏側に来てしまっているのだ。

いや、覗いているだけ、か。

「か、か、か、上条ちゃあああああん! このテロ攻撃は一体何
事ですか! 私のお肉を返しなさい
!」

「こ、もえ——先生……か?」

上条が少しだけ意思を現実に戻す。声をかけられて、やっと気が
ついたその様子。そして何より上条自身の声音を小萌が聞き、表情
をきつく結ぶ。

一瞬にして雰囲気切り替わる。小萌自身の不幸から上条へと、
思考一新する。

「……上条ちゃん、何があったんですか?」

少し以上の間をおいて、彼女は言葉を聞く。語りかけるように、
諭して、宥めてゆっくりと閉ざした心を切り開いていくように。

ぽつりと、それに反応して、上条から言葉が漏れた。

「なあ、小萌先生。俺って……不幸、——なのかな」

暫く上条はこれまでのいきさつを非常に簡単に話した。インデックスが危なく、それを救うために右手を振るい、救いこしたものの、今度は風斬が犠牲になり、更には救ったはずのインデックスも攫われてしまい、風斬も自身を化物だといって何処かへ行ってしまった。

肝心なところを説明していないものの、それが幸いして小萌に教えてはならない情報は無意識的に省かれることになった。

そして、

「なるほど……」

小萌は納得したように一つ頷く。――その後、続けるべき答えは決まっている。その中身までは、上条に推し量れるものではないが。

「いいですか、上条ちゃん」

ピッと、目の前の上条に人差し指を突きつける。意義あり、と、座り込んで小萌と同じくらいの目線になっている上条に放り投げる。一瞬、びくつとしたように上条も反応するが、小萌はそれを無視して話を続ける。

「上条ちゃんは今まで、不幸だったかもしれませんが」

特に、学園都市に来るまでは……小萌は言外にそう告げている。

上条の昔話を彼女は聞いたことが在るのだ。

――上条当麻という少年はとても平凡な少年だった。右手に力があることなど知らず、平凡な彼は、ただ不幸であったのだ。だが、それは異常なまでの不幸だった。

何もないところで滑って転ぶまでならいい、しかしその先で丁

度ガラスが割れている。そんな事が日常茶飯事だったのだ。
故に、避けられた。

周りから不幸が移ると避けられ、いじめを受けた。そして最悪な
ことに、刃物すら持ち出されたのだ。

それもあったか、上条は不幸だった。

「だけど、風斬ちゃんは上条ちゃんを好いてくれていたのですよ、
それはとーへんぼくな上条ちゃんでも解るはずなのです」

何せ、告白しているのだから。

上条のことが好きだと、語っているのだから。いや、小萌にはそ
れを話していない。つまり、そのこじがいで、上条が風斬の感情
を知っているのだと、確証しているのだ。

たとえば——と、例を挙げる前に、小萌は次に移る。

「そんな上条ちゃんは自分を不幸だとは言えますか？ いえないで
しょう？ つまり、今の上条ちゃんは……」

はっとする。そこまでいわれて、やっと解った。

上条当麻は一度へたり込んで、失っていた気合を入れなおしてか
ら立ち上がり、小萌の横をすり抜ける。

「ありがとうな、先生」

「——いえいえ、解っていたただけで何よりなのです。……そうそう、
上条ちゃん、風斬ちゃんのことですが……」

少し調べてみると、小萌は言う。——小萌いわく、風斬氷華とい
うのはAIM拡散力場によって形成された存在であり、たとえば目

の前に熱を放つA I Mと感触を伝えるA I M、視覚に捉えさせるA I Mがある。それは人間のそれとまったく変わらない。つまり、人間はそれを“人間”と認識するのだ。

だから、風斬氷華は人間なのだ。

「解った、ありがとう……いつてくる」

「次は病院であいましょうなのですよー」

意味深にといえ意味深に、しかし実際上条はこれまで相当ダメージを受けている。今の状況でも病院送りは確定といえは確定なのだ。

結局、上条は解ったと答えて、外の闇へと切り裂くように消えていった。

第一章 2（後書き）

何か書き溜めがどんどん溜まる。これからもどんどん溜める。

第一章 3

3

先を急ぐ、どうしようもないほどの時間を通り越して、神裂火織は未来のために手を伸ばしていた。

あたりは薄暗闇、時間は真夜中で正しかったが、残念ながら学園都市は不夜城なのだ、神裂の今いる場所は暗くとも、その直ぐ近くで明かりがもっている場所がある。

故に学園都市からは星が見えず、そういった類のことはできない。要するにただの都会なのだ。どれだけ世界がおとなしかりうと、学園都市という場所は、そういった神秘をことごとく拒絶する。

能力者事態が、そうであるように。

（確か、能力者が魔術を行使するとその肉体を損傷し、最悪即死する。……もし魔術を行使できる超能力者がいるのならば、それは魔術のダメージ以上の自己再生が可能な能力者しかいませんね）

どうでもいいことを考える。

そうでもないと自身の感情に自身が押し負けてしまいそうだ。驚愕、怒り、悲しみ、彼女の中に渦巻く感情はそれだけではない。

救いたいものを救えない無力感。それが彼女にとってもっとも大きい錘となっていた。

（つまりそれは本末転倒というわけです。それでは超能力に何の意味もないわけですから、魔術師は超能力者になれず、なれたとしても超能力はただの無駄、もし何かしかの要因で回復が遅れた場合、即死する可能性もある）

救われぬ者に救いの手を（Salvere000）。
それが神裂火織という魔術師が背負う証であり、失われることの無い名だ。

——彼女は幸運であつた。幸運であるとはこうもいえる。“幸運で在りすぎた”。神裂火織は恵まれすぎていたのだ。魔術師としての素質、聖人としての力、そしてなにより、女教皇プリエステスという地位。これらは彼女を幸運にした。しすぎた。

（魔術とは、才能の無い物が才能のあるものに対抗する為に作られたもの、故に才能ちやうのうりよくしやあるものは、魔術を行使できず、使えたとしてもその才能をつぶさなくてはならない、よくできています）

彼女は元々イギリス清教、必要悪の教会ネセサリーウスの人間ではない。天草十字凄教の女教皇プリエステス、つまりは最高指導者の地位にあつた。その中で神裂は幸運であつた。

幸運であると同時に回りに自身の不運を押し付けてしまったのだ。一発の凶弾が襲えば、別の人間にあたり、絶望的な状況で襲い掛かれ、仲間を皆殺しにされたのに自身だけは生き残る。

そういったことが神裂の“幸運”であつたのだ。故に、周りに不運を押し付けなかったため、神裂は必要悪の教会に身を置いた。

そんな中で彼女は、自身が救われ、そして世の中に救われなかった人があるならば、自身はそれを救おう。そう決めて、生きてきた。そう名乗って、救ってきた。

それが神裂火織、今も昔も彼女という存在はどうにも変わらない。

だが、

聖人として、優秀な魔術師として、絶大な力を誇る彼女でも、インデックスを救うことはできなかった。

インデックスに存在する枷、一年という呪縛から、解き放つことなどできなかったのだ。

（だけど上条当麻はあの子を救って見せました）

何故か——考えてみても直ぐには答えなど出ない。出ていれば、神裂だってインデックスを救うことが可能なはずだったのだから。

（私たちと、彼の違いは一体何なのでしょう）

そうだ。

まずはそれを考えてみよう。上条当麻という人間は不幸ではあるものの、その不幸に負けない少年である、そのあたりは必要悪の教会の人間となんら変わらない。違いがあるとするならば。それは平凡であるかプロであるかの違い。

だがそれはむしろ、上条当麻が助けたという事実を可笑しくしてしまう。

つまりそれではない。

上条当麻であるという必要性など、何処にも存在しないのだ。

確かに彼の右手はインデックスをすくった。だがインデックスのそれは魔術によるものだったのだ、故に魔術師である神裂たちも、気がつくことができたのなら救えたはずだ。

既に鍵が壊された今となっては、その魔術の正体を知る術はないのだが。

ならば、最大の原因は別のことにある。

目的地へ向かうため、高速で移動しながら考える。速度は人間のそれや人間の技術である車のそれをはるかに超えて、直ぐにでも目的地、『三沢塾』にたどり着けそうだ。

その間、神裂は自身の螺旋のようなざんげから逃れるため、免罪符を探し続ける。上条たちにあって、神裂自身にはかけらも無かったこと。

確かにそこには在ったのに、手を伸ばすことも無く、ただ失っていつてしまったもの――時間のような何か。

そう、と神裂は暫く考えて、一つの答えにたどりついた。

（なるほど、確かに、コレならば納得がいきますね……）

彼は、上条当麻は、

諦めを知らなかったのだ。

立った一回の失敗で立ち上がることを忘れ、地面にのた打ち回り、インデックスをそれよりも下、地獄へ叩き落す選択をした自分たちとは違い、彼が立ち上がらなかったことがあったか。

彼はスタート地点に着けといった。そんな彼は、ではずっと何処にいたのか。

……簡単だ、彼は既にゴールしている。

幸せという存在のため、彼は確実にもう目では収めることのできない場所に立っていた。

ならば、

「私もまた、貴方に追いついて見せましょう」

それが神裂にとって、贖罪と自身の名を名乗ることに値するのだから。

『三沢塾』の中は閑散としていた。

まだ人は少数いるものの、ほとんどの学生は家へ帰宅していることだろう。時間としては申すぐ深夜、そういうレベルになるのだ。ゆえに人が少ないのも当然といえば当然、どちらかといえば、残っている生徒や人間のほうが奇特なのだ。

よって、神裂は元从不審者であるのに、さらに不審者になってしまった。そも、それを周りが気づいている様子はないのだが。

（外界と今私がいる界層を隔離している。ここは同じ場所にあるのに無い、さながら『陽炎の街』と呼ぶべき場所……）

どうして神裂がその単語を持ち出したかは本人にもよくわからない。だが、奇しくもそれは風斬がいた場所だった。

ともかく、その特性を考えれば、ここが陽炎であるということは非常に的を得ている。

（今のところインデックスたちの痕跡は無し、別の入り口からはいった、ということですか？）

わからないが、ここ以外にも入り口があるのかもしれない、何せこの三沢塾は四つの棟でなりたっているのだから、その四つの棟そ

れぞれに入り口がある、そう考えるのが妥当であった。

よって神裂はただ入り口で立ち止まるのを良しとせず、中に踏み込むことにした。実際はすでに数歩踏み入れているが、まだ自動ドアは開いたままだ。

外界とは別の界層があることをかんがみるに、どこかに入り口があるのが普通、そしてその入り口がこの自動ドア。

これがしまれば、神裂は外に出る方法を失う。あくまで正規の……ではあるが。神裂はまず一步と踏み出す。

おそらく自分はこの界層にとってまったくの異物、つまり白いキヤンパスに真っ黒の絵の具をぶちまけているのと変わらない、向こうには居場所が筒抜けだろう。

(ならば、一体何が出るか、蛇か、蛇か、錬金術しか……)

その判断は、残念ながらつかなかった。

三沢塾内部もそれほど人は居らず、あまり入り組んでいるというわけではない。ただ神裂は目指す場所が定まっていけないのだ。

残念ながら神裂にはインデックスの居場所など判断がつかなかった。

近づけばわかるかもしれないが、そもそも向こうが近づかせてくれるかすら危うい、かといってただ歩き回っているだけでは進展などしないのだ。

よって、まずは目標を決めて先へ進む必要がある。判断材料は向かう方向と階段を上るか否か、しばらく迷った後、神裂は最上階を目指すことにした。

選んだ理由はいわゆる“悪役と馬鹿は高いところが好き”というやつだ。

……まあ、神裂にはアウレオルスは悪役にも馬鹿にも見えなかったのだがほかに判断材料が無いのでとりあえず物語的なお約束に従うことにしたのだ。

そんなわけで進むこと少しと程よい時間。

大分あたりを歩き回って、階段を見つけては登り、ということを繰り返しているうちに、ふと窓が見えてきた。

ほのかに明かりが見える学園都市は今、大分力を失っているように見えた。……蓄えているともいえるか。

入るときに見えあげた高さ比べると今の場所はちょうど三分の一、随分と高い建物なのだと、考えを端に浮かべる。

だがすぐに益の無いことだと切り捨てて、神裂は次の階へ居場所を移す。

こつ、こつ、と何度も音が繰り返される。ここにくるまで、ずっと繰り返されてきた音だ。無骨で、無様で、不躰な音。

その音に、いまだ変化は無い。

とはいえ階段も永遠ではない、精々ほんの二十か三十段ほど、それも折り返しを含めて、だ。神裂ならば一気に飛び越えることも可能である。

その階段を抜けた先は、随分と大きな広間だった。

不自然に大きく、そこはおかしいと神裂に判断させるには十分だった。つまり——神裂の判断は正解だった。

（仕掛けて、くる――）

神裂の視線の先には闇がある。

聖人である神裂の視力をもってしても見通せない、つまり、魔術的な闇が――

それが一気に晴れる。

現れたのは騎士だった。

王に仕えるに恥じない騎士、その姿は、勇猛であった。そして、気高かった。

「――名、は」

神裂の声が当たりに響く、刀を構え、その答えを合図として、開戦しようかという、そういった意思。

騎士は、それに対して、自身の剣で持って答える。

「我^{われ}が在りしは――パルツイバル、主の敵を切り裂くものなり――ッ！――」

神裂にせまるかという勢いで、騎士――パルツイバルは切りかかってきた――！

第一章 3（後書き）

ちよつとだけ、間接的に触れられる前作主人公。

第一章 4

4

パルツイバル。

アーサー王の物語というのはご存知だろうか、一人の少年が剣を抜き、王となる物語だ。

彼はその中に登場する円卓の騎士、その末席を汚す一人である。円卓の騎士として有名なのはやはりランスロットや物語の主人公でもあるガラハッドが上げられる。

だがパルツイバルは彼らに負けず劣らず有名な騎士である。

彼の出自はさまざまだが、大体が高貴な身分であり、彼は15の頃まで騎士とは無縁の生活をすごす、しかし父が亡くなるとパルツイバルは母にウェールズの森へ連れて行かれ、そこで騎士と出会うこととなる。

彼は後にアーサー王の物語の中でも特に大きな聖杯探索の物語にかかわってくる。

その中で彼は一度は探索に失敗するものの、最後にはガラハッド等と共に聖杯を見つけた三人の騎士のひとりとなる。

そして目の前に“居る”『パルツイバル』はローマ正教が擁する十三騎士団の一人だ。

（十三騎士団といえは本来ならば英国の騎士である円卓の騎士を愚弄するような贋作、所詮は偽者です）

何故その十三騎士団がいるのかは解らない。だが――

抜き打ち際に火花が散る。神裂の剣と『パルツイバル』の剣が拮

抗しているのだ。——聖人である風斬の一撃を、平然と『パルツイバル』は受け止めている。そう表現することもできる。それはつまり可笑しなことだ。

『パルツイバル』はただの人間だ。聖剣を抜く王の証もなければ、ましてやその贋作にしかなることのできない『パルツイバル』では神裂と拮抗できようはずが無い。
だのに。

（可笑しい、この一撃は、間違いなく本物です）

更にもう一撃、返すように横振り、高速で襲い掛かるそれは間違いない。常人には決して見切れぬもの、上条当麻との戦いでは見せなかった神裂火織の本物の一閃。

だがそれを、『パルツイバル』は平然と切り返す。

一度受け流すように剣を弾き、自身も一步で神裂の刀の範囲から外れる。更にそこから一瞬のタメを持って神裂とほぼ同速で切りかかる。

「ッ——！」

不意をつくような一閃、受け止めこそするものの、その衝撃が手のひらに伝わってくる。……恐らく、神裂に聖人以外でそれを感じさせたのは彼、『パルツイバル』が初めてだろう。

とはいえ、それはほんの少しの痺れに過ぎない。

すぐさま神裂は力をこめて押し返す。

一瞬、隙ができる。——だが踏み込まない。この程度は隙にもなら無い。一瞬が如何した、その一瞬は瞬き以下ですらない。到底、踏み込めるものではないのだ。

よってその一瞬を使って神裂は間を開ける。このまま近距離戦だ

けを行って意味がないし、神裂の手数も使えない。

だが、『パルツイバル』もそれを簡単には許さない。すぐさま復帰すると神裂に追いつき、一閃を浴びせる。

人間では視認などで着ないはずの一撃に、『パルツイバル』は容易に追いついてくる。いや、間があったというのに追いつけたというのは、つまりそれは『パルツイバル』の方が優秀であるという事になる。神裂は別にステイルのように自身の力に絶対の自信を持っている——持たなくてはいけないわけではない——しかしその強さに、驚愕を覚えざるを得なかった。

追いついて同時に、二つの剣閃が激突し、両者が出現する。その後、神裂と『パルツイバル』は掻き消えると同時に別の場所にて火花と共に激突——出現。

それを二度、三度繰り返しただろうか。

やがて二人は中央で剣を交え、互いに吹き飛ばされる。

どちらかという神裂が押された形になるが、それでもコレで、距離はとった。

「……いきます」

一時、神裂は目を閉じる。その間、辺りの時間は無に等しく、たとえ聖人や『パルツイバル』もおそく感じられただろう。

とはいえ、その中では自分自身ですらも遅く動くのだが、それ事態に意味は無く、神裂は目を見開くまでの集中という行為に意味があった。

目を閉じるという事には『意識を集中させる』意味があり、実際それが作用され、その中で神裂は自身の意識、感覚をこっそりと入

れ替える。

救われぬものを救うための魔術師、神裂火織から途方の無い強敵と退治する聖人、神裂火織として、意識を改める。

「これが私の全力」

自身の刃を一度、収める。

それを違和感と感じ取った『パルツイバル』が動く、一瞬、構えるように、一瞬、放たれるように、高速で神裂の前へ出る。

「――七閃！」

神裂の刀、七天七刀が揺らめく、同時、文字通り七つの閃きが高速で迫る『パルツイバル』に襲い掛かる。確実にしとめる一撃。

それを『パルツイバル』は全て自身の動きで回避する。前へ、後ろへ、左へ、右へ、更には三次元すら掌握して神裂の一撃を回避してみせる。

しかし、それでも。

「まだ、まだあ！」

神裂が動く、ただ一撃を煌めかせるだけでなく、自身すらも動き、神裂の剣が振るわれる。それとほぼ同時に七閃が一気に襲い掛かる。上空にとどまる形であった『パルツイバル』は初撃を防ぎきると、残りの一撃に対し、自身の力を振るう。

――地水火風、四の天使を表す一撃。

地が割れるような一撃で閃きを叩き返し。

水のような勢いで斬撃を押し返し。

火の一撃でもって文字通り燃やし。

風でもって最後の数本もまた、切り替えした。

余波は神裂を襲う。どれもが単純な魔術だ、地水は本物ではなく、その意味を切り取ったもの、三流だろうと可能な魔術ではある。

だが、特筆すべきはその速度、恐らく『パルツイバル』はこうだったことが得意だったであろう。それが更に高速化されている。可笑しなことながら、彼は単純な魔術ですら、聖人に迫っていた。

ただ、神裂とてただそれを受けるわけにはいかない。そのために神裂は七閃を放ったのだ。――元々、七閃とは聖人の力を利用し、一瞬にして七つの煌めきを放つ技……に見せかけた鋼糸を使用した『天草十時凄教』独自の技術である。

これにはただの擬態以外にもいくつかの意味がある。それは糸を使った三次元的な魔法陣の形成にある。

コレを利用することで彼女は三次元を掌握する魔術的な力を行使できる。

切り裂かれ、燃やされ、流され、叩き返されて、それすらも神裂の魔術は意味に変えるのだ。切り裂かれることは流れを断ち切ることを意味し、燃やすことは切り裂く対象をなくすことを意味する。流すことは叩き返す勢いを弱めることを意味し、叩き返すことは燃やしたものを祓うことを意味する。

どれもこれもが、神裂にとっては自然であった。

あつという間に『パルツイバル』の一撃の余波は形を崩した。後に残るは刀と剣によって拮抗する神裂と『パルツイバル』のみであった。

それも直ぐに消え去り、二人はほぼもとの位置に戻されることになる。

仕切りなおし。そうともいえる状況の中、今度先に動いたのは『パルツイバル』の方だ。彼の高速詠唱により、あたりには大量の砲撃が現出する。

どれもこれもが必殺の爆弾であり、対処が必須の一撃。それがあたりを所狭しと動き回っている。勢いによって圧されるのを待ちわびている。

思わず気圧されてしまいそうな光景、状況ではあるが神裂はまったく動じず、自身の刀にこめる力を強める。更にさまざまな行動をじりじりで行う。

やがて、痺れを切らした砲撃の数々が神裂に襲い掛かる。

その種類は数多にのぼり、地水火風威風堂々、ありとあらゆる一撃であった。

神裂はそれを滞空時間の間に仕込んだ魔術をもって切り裂き、引き裂き、叩き裂く。どれもこれもが確実に、完璧に、勢いをそいでいく。

時には切り、時には避け、時には跳ね返す。

神裂のその動きは、一つ一つが洗練されていた。

ただ、神裂はこの程度では終わらない。

「――伝承に置いて」

拮抗する両者、荒れ狂う波に波紋をたてたのは『パルツイバル』であった。開戦以降、うめき声すら漏らさなかった敵の言葉が、広がっていく。

一瞬、息を吞む神裂、それでも手を休めることはしないが。

「『パーシヴァル』……『パルツイバル』が得意とした武器を、キ
サマは知っているか？」

「ッ!？」

その意味を理解し、それよりも早く、数多の渦の中から、それを
うがつ槍が神裂の心臓部へと突き刺さる。何とか回避に成功するも
のの、神裂のこれまでの行動で積み上げた魔術の連鎖が途切れてし
まう。

まずい、とは思う。隙ができてしまった。とはいえ周りの魔術は
ただ高速なだけ、高速で出来上がり襲ってくるだけ、だが、この状
況で、それを含めた上で――

騎士、『パルツイバル』の本命である一閃は、厳しい。

(ならば――)

考える。この危機を脱するのに必要なのは、まず……

ゆっくりと、目を閉じて神裂はもう一度意識を集中させる。一本
に、一筋に、全てを束ねて見せる。よって、全ての世界が、神裂に
とって止まった世界になる。まず……

しゃがみ込んで、神裂は世界から消えうせる。上条には効かなか
ったが、今回はかく乱程度にはなるだろうと、やらないよりはまし
だと、判断した。まず……

行動の中に魔術を組み込む、先ほどのまでの連鎖は途絶えてしまっ
たものの、周りの一撃がまだ生み出され、襲い掛かってきている
のだ。

それを一気に、切り崩していく。

時には、偽の斬撃から本物の風撃を生み出し。

時には、吐き出す息から熱線を生み出し。

時には、時には――

そして、その行動の末に、目の前には『パルツイバル』が迫っていた。

ここまで、『パルツイバル』は高速で魔術を展開することによって神裂と拮抗していた。その間、本人は槍を作り出していたのだ。魔術によって形作られたよくできた偽者にして同等の効果を表す本物。

槍は高速で投擲され、神裂へ襲い掛かる。更に自身も飛び出し、神裂へ肉薄する。

『パルツイバル』は投げやりを得意とする騎士だ。その威力は並みの……神裂の全力ではないが今の状態の威力を軽々と超えてくる。もしかしたら神裂の全力を超えてくるかもしれない。今の一撃には、それほどの威力はこめていなかったようであるが。

とかく、『パルツイバル』は目の前に居る。縦に振りかざした剣を一直線に振り下ろそうとして、神裂の消失、それにあわせて『パルツイバル』は一度静止ともいえない静止をかけて、剣の振り方を大きく全てを巻き込める下からの切り上げに切り替える。

神裂としてはそちらの方が好都合なのだが、どちらにせよ、二対の刀剣は激突するのだ。

必然的にその中には鋼糸による七閃も含まれている。

少しだけ思案して、神裂はそれを周りの攻撃を防ぐことに使うことにした。何せ『パルツイバル』の一撃と同時に相当数の砲閃が襲ってきているのだから。

ガガギイッ！！ と、その中で刀剣が火花と共に散らす。

両者は拮抗に近い状態に居た。やはり神裂の方が圧されている。だが、それは些細な違いではなく、神裂が何度もの激突に耐えうる程度でしかなかった。

それは『パルツイバル』とて承知している。だから、だからこそ、動いたのは『パルツイバル』だ。

少しだけ飛び上がり、神裂の刀の範囲から外れつつ高速で剣を翻した。

先ほどとは反対から襲い掛かる剣、神裂は回避を選択した。飛び上がり——同時に、ほぼ意味のなくなっていた魔術は解除され——神裂はほぼ半歩下がる。

——神裂と『パルツイバル』、砲撃戦に置いてはほぼ互角、剣戟においては今の所若干『パルツイバル』が有利、では、神裂には何があるだろう。……考えてみればわかるはずだ。まず、絶対的にある神裂と『パルツイバル』の違い。

それは、

神裂の横向きの閃きが、『パルツイバル』に襲い掛かる。

ガガグアギイ！！ と、先ほど以上の轟音が吹きあらされた。

そう、神裂と『パルツイバル』の違い、それは完全な“己の得物の間合い”だ。神裂は2メートルに及ぶとてつもない太刀、対す

る『パルツイバル』は一般的な騎士の扱う一メートル超の長剣。
これは二人の一閃の威力の違いを、埋めてなお余りあるものがあった。

（けれども、『パルツイバル』はこれだけの剣士です、ならば私と同じほどの長さの、いわゆるグレートソードを操れても可笑しくない。だのに、彼はそうではない、それが指すことはつまり――）

両者、一歩ほど間合いを取る。同時に神裂の操る七閃が、『パルツイバル』の操る投げやりが、空を切り裂く。

（元々、『パルツイバル』は贋作そのものであり、この力は、まったく別のものである）

――と、神裂の意識が一瞬、隙にもならないような一瞬、思考に割かれる。この状況の可能性、それについて探っているのだ。

とはいえ、手を緩めることは無い。幾色かの鮮烈が辺りを舞う中、神裂は確かに刀を振るっていた。そして――いたる。一瞬考えただけであどり着ける該当物。それを探れば、直ぐにそれが正当であることが知れた。

（天使^{テレズ}の力^マ）

どうやら、彼の扱う魔術も天使――^{みずのちから}神の力、^{かぜのちから}神の火、^{つちのちから}神の葉、そして神の如き者を根本として扱っているようだ。

そして何より『パルツイバル』自身がおびただしいほどの天使^{テレズ}の力^マを帯びている。

ならばその原因は何か、まず他者の力によるものであることは確実であり、そしてそれがアウレオルスの力であること、ここまでは予想することは難くない。

では、何が原因か。

神裂はある一つの可能性に至る。アウレオルスⅡイザードが錬金術師であるが故に真っ先に思い浮かんだ考え、だがそれは直ぐに打ち消す。

アレは絶対に使用することの叶わない魔術だ。なによりアウレオルスが使うのは戦闘的には強力ではあるものの学術的には何の意味もない瞬間錬金^{リメンマダナ}だったはずだ。ならばこれはありえないはず。

次に浮かんだ考えは、先程よりも納得のいくものだった。

——カーテナの再現、そう考えれば、これは少しばかり納得がいく。

だが、それでも神裂は疑問を覚えざるを得ない。

（ありえない、とはいいません、ですが、一介の魔術師に、そのようなこと……）

できるわけが無いと、そう思うしかない。

戦闘は激化し、その中で神裂の思考は渦巻いていく。七閃が揺れ、神裂の横薙ぎが響く。『パルツイバル』の一撃も段々と勢いを増し、互いが互い、更なる舞台へ戦いを移そうとしていた。

その中で神裂はいまだ答えに至らない。

とはいえ、解る筈がないのだ。最初に神裂が打ち消した答え、
『
アルスマグナ
黄金練成』が正解であることなど。

たどり着けるはずが無い。

——戦いの陣のなか、風が吹き、揺れた。

第一章 4（後書き）

第一部の中でも相当がんばってる戦闘、『パルツイバル』戦、前編です。

第一章 5

5

刀剣が激突する。

轟音により、それは更に勢いを増し、二度、三度、角度を変えて打ち付けあう。それを加えて、両者無駄だと悟ったか、一撃を中断して行動に移る。

神裂は一步退いて、それでも相手は間合いの中、先ほどまでの打ち合いの中、七閃で形成した魔術の準備も同時に開放、大振りの一閃と、数色の弾丸、二重の構えで『パルツイバル』に襲い掛かる。

『パルツイバル』は引くことなく、もとより展開していた魔術を増やす。神裂周辺の魔術を駆逐する。更に自身の必殺である投げやりを構え、神裂のさっきに真っ向から抵抗する。

——いまだ、両者は互いの底にたどり着いては居ない。神裂は『パルツイバル』が何故襲い掛かるか、何故これほどの力を持つか、そして『パルツイバル』の全力がいかほどか、検討がまったくついていない。

『パルツイバル』も、神裂の七閃の本来の姿に気がついてはいない、斬撃が実際に切り裂いているのではないことは気がついていないものの、それ以降にはマダ届かないのだ。

お互い、それは同時に全力ではないことを示す。

うなりを上げ、魔術が鼓動し剣術が脈動する。世界は二色ではなかった。ありとあらゆる咆哮と、ありとあらゆる火花が、あらゆる角度で散る。

上空を魔術が行きかい、神裂の横薙ぎと、『パルツイバル』の穿つ槍が激突し、神裂の七閃を剣で『パルツイバル』が対処する。

どれもこれもが勁烈であり、苛烈であり、鮮烈。全てを全てが全
てに伯仲した。はくちゅう

グガガガイ！　それが一気に破裂する。

激甚のそれがあたりに散り、魔術は余波をもって撃沈する。辺りに飛び散ったものこそあれ、神裂に、『パルツイバル』にたどり着いたものはその攻防のなか、終ぞ無かったのだ。

神裂と『パルツイバル』自身はといえば、神裂は横を振り切り、『パルツイバル』は斜めを切り裂き、その切っ先の延びたが地面に突き刺さり。

静止していた。

一種の芸術品のようだった。決戦の中、両者の一瞬が、停止しそれを生み出したのだ。秘術をつくした死闘の中、一つ現れた結晶のような造詣。美しいと、もし他人が居れば、だれもが思っただろう。――だが、

この戦いに、入り込むものはなにもない。

「ハ――」

「フ――」

『パルツイバル』と神裂、互いに笑う。軽く、一つ、吐く息と同時に偶然もれたそれは、互いが互いを鼓舞している。

そして、それ以上の笑いは何もない。ただ、これは、合図だ。

両者が再び動く。

返す刀の両者がガガッ！ と音を立て衝突、続けようと思えば永遠に続く拮抗、それを先に破るのは神裂、一步退いて、相手の間合いの外から七閃も交えて切りかかる。

『パルツイバル』は大きく、床を叩く音を鳴らしながら後ろに下がる。飛び上がる一步目と着地の二歩目をそれぞれ、更に神裂の一閃と、七閃の終了を持って、踏み込む。一直線に繋がる風斬に、では無く少しだけ横にずれて、フェイントを入れる様に斜めに移動する。

あわせて、神裂は大きく剣を引き、構える。

地を跳ねる音を響かせて、『パルツイバル』は更に飛び込む、大きく、音がなるほどに、彼は自身のいる場所とは反対側に、これまた斜めに踏み込む。

やはり、と神裂が頷くようにしてみせ、太刀を振るう。とはいえ高速で動く相手、完全に先制をとられ、このまま刀で追いつくことはできない。

だが、彼女には変幻自在の鋼糸、七閃がある。七度の断殺を行うそれは、『パルツイバル』の剣へ襲い掛かる。

ガッガグアングアッ！！ と、何度も凄烈な音を立てる。

その最中、神裂は背後に気配を覚える。これは先ほどまで感じていたもの――魔術による追撃だ。色が何か、判断する術はないが、そんな事よりも……神裂は一気に刀を引きぬいた。今まで以上に、不意をつく、痛烈な抜刀。

思わず、『パルツイバル』は弾き返される。大きく、一步後ろに飛んで、間合いを取る。着地をしたとき、小気味のいい音がした。大きく振りすぎたため、次の“タメ”までに時間が掛かり、追撃ができない。だが目的はそこにはなく、七閃を動かすことが神裂の最大の目的である。

後ろから迫る魔術、それに対抗するいくつかの迎撃魔術と防御魔術が展開される。それらは当然といえば当然だが、空を裂く『パルツイバル』の魔術を防ぎきった。

神裂は刀を引き、構える、眼前を見据え、待ちの体制で『パルツイバル』を待つ。呼吸を整え、独自の状態を作っていく。

対して、『パルツイバル』は剣を構える。縦、一刀両断の下切り伏せる態勢だ。

お互いがそれを認識し、息を一つに『パルツイバル』が飛び出る。一步、彼は地を大きく踏みしめる。

「ッ！」

神裂が驚愕し、焦りを見せるものの、直ぐに意識を切り替える。

少しだけ振りぬこうとかった刀の軌道を修正して放つ。

前に出て、縦に剣を振るう『パルツイバル』と神裂の刀が拮抗――

しなかった。

前に出た『パルツイバル』は一種の幻影、蜃気楼か、それとも錯覚か、神裂はそれを感じ取ったのだ。故、神裂は一撃の軌道を修正した。本命を別のものに切り替えたのだ。

そしてお互いの本命――七閃と、後発の『パルツイバル』が合間見える。

ガグッガガガガ！！ と、何度も七閃は襲い掛かり、その度に『パルツイバル』の剣は跳ね上がる。もはやそれは完全に攻撃の手を失うはずの一撃、だというのに『パルツイバル』はいまだ神裂に

喰らいつく、互いの交錯まで数歩、退かぬ『パルツイバル』に、神裂は窮地に立たされた。

そのときだった。『パルツイバル』が糸の切れた人形のように止まり、すぐさま後ろに退いた。そこに――爆発が襲い掛かる。

炎上ともいえるか――神裂の七閃によって編み出された、一つの保険のようなもの。

神裂とてこれで決着がつくとは思っていない、これはあくまで七閃で『パルツイバル』が止まらなかったときの保険であり、次へつなげるための――布石なのだ。

爆発、炎上するその中から、神裂が高速で飛び出てくる。要は爆発は目潰し。炎自体も、一瞬であれば熱さを感じない。

切り抜けて、神裂は目の前に居る。高速で、相手が相手ならコレで間違いなくチェックメイト。

それでも、神裂の一撃を『パルツイバル』は受け止める。相当ギリギリだっただろう。だがそれでも結果は結果、神裂は徒労に終わり、『パルツイバル』は生き残った。

お互いに、まだ戦える。

とはいえ、

（そろそろ終わりにしないといけませんね……これが、最後だ）

神裂は一人決め付ける。

別に如何という事はない、インデックスは今も囚われアウレオルスの計略は少しずつ進んでいるはず。ステイルがいるが、彼にもまた刺客はあるだろう。こちらほど協力かどうかは判断がつかないが……恐らくはそれなりに時間を喰われる。

ならば、自分はここで終わらせる。

これまで、神裂は何度も剣を構えてきた、剣を振る、その動作は

当然七閃以外にも意味を持つ。

「汝主の敵なれど、その強さ、賞賛に値する——これが最後だ、名を聞こうか」

『パルツイバル』もそれは解っているのだろう。甲冑越しに神裂を見据え——その意思を向けてくる。

鋼鉄のような、激鉄のような、それは神裂にもわかる。ならば、それにふさわしい名は何だ？ 神裂火織が純潔の騎士と相対して、ふさわしいものは、何だ？

もし、この場に彼が——ツンツン頭の青年がいれば、答えてくれたか？

解らない。

神裂には結論が出なかった。

「——その前に、聞きたいことがあります。貴方の主とは、一体何か」

だから、言葉を開いた。訳は単純には判断できない。ただ自身の行動一つ一つに訳をつけていたらがんじがらめになってしまう、これはそんな事で済まされる単純な問題ではなかったが、神裂はそう決め付けた。

出なければ、自身の弱さをさらけ出してしまいそうだったから。

「当然、」

騎士は——『パルツイバル』は、思いのほかすんなりと答えを明けた。聞く耳を持たないかとも思えたが、彼は答えた。

主に、絶対の自信を持ち、絶対の忠誠を誓っているのだろう。そ

それはそう、神裂も当然だといえた。何せ。

「私は、アウレオルス様に忠誠を誓っている」

何せと自分で考えて、その答えに神裂は一つ——ずっこけるような、そんな感情を持たされた。肩透かし、それに似た困惑。

だが——直ぐに神裂は怒りの意思を向ける。

何だと、彼は今、一体なんと言った？

「それは、本気で言っているのですか」

ふざけるなど、神裂は言った。ならば何なのだ、自身の前で立っている彼は何なのだ。主を違えば、魔術的にも、精神的にも、神裂に並ぶことなど、できようはずが無いではないか。

ならば、これは一体何なのだ。

「当然、私は唯一つの主、アウレオルス様に忠誠を誓っている。それ以外になんの正答が必要だというのだ」

「っ！ あな、たは……」

何だというのだ。神裂は一層表情を険しくし、目の前の騎士を睨みつける。いや、むしろ睨み殺すような——本気の殺し。

「ふざけんじゃねえぞ！ 異教徒！」

噴出した意思に、乗った言葉は、たとえ怒り、口調の乱れた本来の神裂からでさえも、神裂火織という人間からは出ることの無い言葉だった。

そも、神裂の所属は天草十字凄教、その成立、及び経緯からして、本来ならば異端の側に属しているのだ。それは神裂もよく解っている。だのに、神裂は言った。

異教徒、と。

それは存在の否定ではなく、肯定の否定によるものだ。

「な……に？」

『パルツイバル』の表情が険しくなる。互いが互いをにらみ合い、一種の決闘のそれが、殺し合いのそれに変わっていく。

血が、赤く赤く紅い血が、空と共に彼らを染めようとしていた。

「それは、違う——違うでしょう、貴方は、謙虚なる騎士のはずだ！ 私との決闘の際は、少なくともそれが確かだと判断できた。それは、偽りだということですか！」

「キ、サマ——」

神裂と『パルツイバル』、両者の表情はさして大差は無く、二人は果たして、殺しの瞳を、向け合っていた。

「言わせておけば、我が愚弄なら兎にも角なれど、我が主を愚弄するとは、許すことはできんぞ」

「たがえてしまった主に、何の義理があるのですか、そも、私はた

がえてしまったあなた自身を攻めているのです」

神裂が刀を構え、抜き去るために引く。

対する『パルツイバル』もまた、剣を王道の構えと見せた。そのまま、本来なれば始まるはずの無かった始まり方で——一撃が定まる。

そして、神裂の手前——それは神裂の刀の性質を考えれば、中央と何も変わらない——両者が激突する。踏み込み、見極め、互いの一撃を、一心にこめてぶつける。それは——

完全に拮抗している。

世界が、一度だけ静止した。

「ふざ、けるな！ 我が主の嘲弄は我が嘲弄と同等、さすればキサマのそれは、神をも恐れぬ、愚考なるぞ！」

「何がふざけていると!? 貴方の剣は——やっと解りましたよ——ゆがみがある。それはそうでしょう。本来ならば、私の一閃など貴方ならば振り切れるはずなのです。それなのに貴方はこうして私と拮抗している。それをゆがみと呼ばずして、貴方は一体なんと形容するつもりなのですか！」

少しずつ、神裂が圧し始める。怒りによって彼女は、一瞬ではあるが迷いを、振り切っていた。だというのに、ある一定から、それが届かなくなる。

「ゆがみ……? 笑わせるな、私にはゆがみなどありはしない……教えてやろう、私の剣は、完全だ！」

煌めき。

それは神裂の刀を押し返した。——おそらく、ここまで続いた戦

闘で、初めて起きた動き。——とはいえ、本来ならばもう、決着はついていたはずなのだ。

だが、そうはならなかった。ならばそれは何故か、簡単なことだ。

「いや、むしろ、迷いのあるのは、キサマの方だ、名乗らぬ騎士よ、キサマの剣——いや、刀か……その迷いは、一つでは無いな？」

「ッ！」

神裂だ。神裂の刀が、全てを鈍らせているのだ。本人にとってはほぼ自覚の無いことであつたし、例え在ったとしても神裂に答えなど、自答できるわけがないのだが。

騎士は——『パルツイバル』は怒りと共に、見据えるような目線で、見下すような目線で神埼を見やつた。

「たった一人のシスターも救えないキサマが、それに迷うのだ。当然だろうか？」

見下し、軽蔑し、反面鼓舞するような言葉に、神裂がまずい抱いたのは疑問だった。怒りでも、対抗のための意識でもなく、まずは疑問。

単純ゆえか、そういった複雑な思考よりも前に出た。

「な、何故、あのこの子のことを……！」

「そんな（・・・）事は……事はどうでもいいだろう、キサマのゆがみ、それは間違いない唯の一つではあるまいて」

その時、神裂の意識が全てまとまった。

答えが出たわけではない。だがつかんだ。願いをかなえたわけではない。だがつかんだ。全てを終わらせたわけではない。だが、神裂は突破口を得た。

真相、それによってわかる彼という存在、それが一気にまとまっていく。

「なる、ほど——騎士……あなたは、ゆがんでなどいない、ただ、反らされただけだ」

恐らく『パルツイバル』はローマ十三騎士団のなかでも実直な騎士だったのだろう。身勝手で救えない“必要最低限の犠牲”に反発して、単身乗り込んだと見える。

そこで彼は何かを変えられたのだろう。それが何かはわからないが、それによってこの破壊と再生の中、生き残り、そして目の前に立つことになったのだ。

つまり、『パルツイバル』は何も間違っただけでなく、ただ、彼の意思とは、まったく別の何か関わってきただけなのだ。

「ようやく解りました。これは正しい答え、ではないでしょうが……私にはやるべきことがある、それを然りと認識させていただきました」

そこに来て、神裂は呼吸を切り替える。

「救われぬ者に救いの手を（Salvere 000）！ 意味は……必ず救う！」

一つの開放と共に、神裂はその名を宣言した。

その中にはいくつもの意思があっただろう。そして、『パルツィバル』もそれを感じ取ったか、もしくは彼女の気色に応じたか、剣を構える。

いや、その前にその剣を鞘へ納めた。鞘に収められ、柄を正面に向けたそれは、槍だった。

「しかと聞き届けた。ならば、決着と往こうか」

両者が、その線をつなぎ合わせる。激突のためのレールを敷く。

そのときだった。部屋のあちこちから小さな柱が立った。

なるほど、と神裂は納得する。何故、という疑問よりも早く、納得の答えが出たのだ。コレまで『パルツィバル』は何度も行動の際に大きく地を鳴らしていた。

気がつきはしたものの、特に気に求めていなかった事だ。その結果は、そうかコレか——そういったところだ。何せこの程度では、カモフラージュにもなりはしない、神裂はそう結論していたのだ。とすれば、これは納得こそすれ、驚きはしない。

そして、この先も読めた。

行う魔術はマダいくつかあるが、この形からするとあれだろう。

そう考えている最中に、柱が消え、天井に光が残る。

上を見上げればそれはまるで星の様だが、それはまさしくその通り、これは占星術の類だ。——オリオン座を表し、その力強さを再現したもの。名は『北星狩人』ソウルオブオリオン。

これはその中でも願掛けの類に当たるのだが、さすがに強大な力

で行えば、それは相当な出力になるということだろう。

「我が名の開放と共に、一つの究極を、お見せしましょう」

神裂はそれを対して、自身の中に正解を作り出す。

十字教に不可能なことを仏教で。

仏教に不可能なことを神道で。

神道に不可能なことを十字教で。

全てが全てを補い、最善をたたき出す。それによって神裂の聖人としての力を引き出す。——いわば最終奥義。

「——参る」

『パルツイバル』は、槍と化した剣を構え、投擲のための動作を行う。彼の中に内包する一使の力（テレズマ）が、極度にその勢いを増す。

今まで以上であることは確実、ならば——その限界はいかほどか。

そして、神裂もまた、豪語する。

「名を——唯閃！」

間もなく、両者が激突した。

やがてそこからは音が消え、光が消え、闇もまた、消え……衝撃だけが残った。神裂の一瞬を越える剣筋が、『パルツイバル』の光速を超える一つの矛先が——

両者、力をこめる。神裂は直接的に『唯閃』の気迫を高め、『パ

ルツイバル』は自身の一撃に内包された天使の力を洗練させ、更には高める。己の限界と、他の限界、それがそれぞれのぎを削り、最後には当然の答えをたたき出す。つまり——結果だ。

二つの勝敗が、ここに決定する。

「剣の折れた貴方では……それはもはや剣ですらありませんね、では、私はこれで」

神裂は、その言葉だけを残して消えた。

行間 2

それは一つの偶然だったのだろう、風斬氷華は一人、あるビルの前で佇んでいた。

できることならば絶対に誰にも届かない“現実の”場所で、風斬は一人になりたかった。陽炎の街には戻りたくなかったが、それでも風斬は一人になりたかった。

自分は化物なんだという、脅迫概念のような自覚、ただそれでも、自分を本物の化物だと認めたくないという、悲観的な願望、その二つが、ぐちゃぐちゃに、どろどろに、染み渡るように考えが回っていく。答えは出ないが、結論は見える。――どれだけ考えをまわしても、答えはまとまらないということだ。

「……ハッ……ハッ………ッ！」

思わず漏らした息に、風斬は思うの他驚いた。本来ならばこのようなことは無いと思ったが、それでも風斬は肩で息をしていた。動悸もいくばか激しい。

少しだけ嬉しくなるが――直ぐに気がつく、つい先ほどまで切れていた息が、あっという間に整っていた。

自身は既に立ち止まっているのだからそれは可笑しくなどないのだが、それにかかる時間が明らかに可笑しかった。

つまり、体の異常を、化物である自分は直ぐに修正してしまったのだ。

「あ、――」

それに風斬は結論としてたどり着く。

……今まで、風斬は自身が化物であるということを思い出しては

いたがそれでも確信してはいなかったのだ。衝動的に上条の下を放れてしまったが、それでも風斬は心のどこかで自分自身が人間であると、願っていた。

だというのに、その願望は完全に消え去ってしまった。

「そん……な」

それは一種の諦めであり、そしてそれは一種の絶望でもある。彼女にとっての全て、上条当麻、インデックス、月詠小萌、そして彼等とすごした少しばかりの、それでもとても大きな思い出。

楽しかった。上条当麻と会話して、彼を――自覚はしていなかったけど、少しずつ好きになる基盤を作っていた、とても、楽しかった。

嬉しかった。最初は少し戸惑ったけど、話しをして、笑って、インデックスと友達になれて、大切な人が増えて、とても、嬉しかった。

面白かった。月詠小萌は突然転がり込んできた自分たちに対して、何も言わずに面倒を見てくれて、その上いろんな話を聞かせてくれて、とても面白かった。

それなのに、

「全部、間違いなの？ 私って……」

上条とジュースを飲んだ。笑顔がかわいいといってくれて、楽しそうに話をしてくれた。あの時は少しおどおどしてしまっただけ――それでも上条は自分を受け入れてくれた。

そんな事など些細な事だというように。

インデックスが傷ついて、それを助けようとした。助けて友達に

なろうとしたら、上条がそれを間違いだといって、ほんとの友達の作り方を教えてくれた。

神裂によって物語が大きく傾いて、その時でも上条は拳を握り締めていた。彼を好きになったときは多分そのときだ。

そうやって――風斬は人間でいたはずなのだ。けれど――

「私って、化物なのかな……」

教えてほしいと、続けたかった。だけど、言葉は出なかった。――向ける先は、わかっているというのに、風斬は自分が化物だとは思えなかった。

その時、だった。一つの声が、風斬の後ろから声をかけられた。少しだけ、怒りを含んだ声だった。

「無然、一体何をしている？」

――風斬がいる場所……その目の前に存在するビルの名を、『三沢塾』といった。

一つ、風斬は風を感じた。それが一体どのようなものかは判断がつかない、安堵かもしれないし、絶望かもしれないし、悲嘆かもしれない。ただいえることは、今の風斬には到底及ばない答えだろう。ただそれを深く考えるよりも早く、目の前の彼は風斬の元へ近寄っていた。

何処かへ行っていた帰りか、若干ビルの方を意識しながら、その

青年は風斬に怒りの表情を向けてきている。ただそれは風斬個人に對するものではなく、もっと内面の――感情に向けられているように思えた。

「あ――え？」

思わず一つ声を漏らす。それが彼にとっては余計にいらだたせるものだったらしい。元々隠していなかった表情を更に露骨にして、出す声にまでその色は移りこんできていた。

「憤然、何をそんな不自然な顔をしている。そのようなものは認めん」

いいか？ とへたり込んでいる風斬に顔を近づけて、脅しかけるように彼は続ける。

「私は今やらねばならぬことがある。そのためにはキサマの様なばかみtainな顔をした絶望がとてつもない氣に喰わんのだ。何故私が餌を放ったと思う？ キサマの様な絶望を引きずり上げるためではない」

言葉一つ一つに段々と韻を踏むように怒りが籠って、最後には怒りしかない声で、表情で、風斬を無理やり引き上げる。拒否するでもなく、風斬は否定できない何かに引っ張られ、立ち上がってしまう。

……いや、そういったものではないか、風斬は、文字通り引き上げられたのだ。

「俄然。ついて来い、あの子にもできたのだ、私にできないはずも

ない。――キサマのその表情、ぶち壊してやる」

脅しかかったような声、だがその内面はとてもやさしかった。

そして――それを見つめる一人分の瞳が、何処かにはあった。

上条当麻は通りすがりの少女に感謝せざるを得なかった。

宛も無くあたりを走り回って数分か、数十分か、上条当麻は夜の街で始めての人影を見つけた。元々人も折らず、ダメもとの状態、ならばと放しかけたその少女が、なんと正解だったのだ。

驚きつつも居場所――少女の示す『三沢塾』に向かって上条は走っていた。その少女は『私。魔法使い』だとかなんだとか一定滝がするが、正直そんな事気にしている暇もないのでスルーせざるを得ない。

悪く思わないでくれと思いつつもそれ以上はその少女のことを考えることも無く上条は走る。

つまるところ上条のやることは決まっている。

（風斬を連れ立ってそいつがビルに入るとき、風斬にたいして『その表情をぶち壊してやる』といったらしい。それはつまり、そいつは風斬の感情が気に入らなくて無理やり吹き飛ばそうとしているんだ）

考えろ、考える、考えろ、考える、考えろ、考えた！

思考が、上条の思考が何度も交差し回転し困惑する。結論は一概には言えないが、しかし上条の中にはある感情があった。

それは一つの意地であり、罪悪でもあった。

「ありがた迷惑とか、そんな事はない、絶対にない。けどな」

俺は――風斬に■■■■■。

それは間違いなく事実なのだから、気づいてしまったのならば上条は止まらない。偽善が何だ、自分勝手か、だから如何した。これは自分勝手な偽善使いのちっぽけな意地。

上条当麻は風斬氷華を助けたい。

夜のトバリはこうして降りる。運命は叩かれて、空は一つ、星を仰いだ。光に包まれた学園都市をそれでも照らす一月、変わらず世界は廻っていた。

上条の眼前に一つの建物、その入り口が見えてくる。四つの塔に、四つの入り口、ここがその何処かはわからない。だが、入ることは決まっている。

全ての終わりの舞台、『三沢塾』

十数年間の、『禁書目録』という集大成。その延長線上にここはあった。

たった数日間の、愛しい心。その決着のときがここにはあった。

神裂火織――愛しい我が子を守るものとして。

ステイルⅡマグヌス——心でも守ると、決めたものとして。

アウレオルスⅡイザード——今度こそ救うと、地獄から這い上が
ったから。

禁書目録——インデックスいくつもの地獄から助け出されて、今もなお。

風斬氷華——好きなものを、傷つけないために。

上条当麻——それが■だと気づいてしまったから。

それぞれの思いが交錯する。

答えは、交錯の行き着く先は一つではない、上条は、答えのその
先をマダ知らない。

例えそれが、彼女の笑顔でなかったとしても、上条は足を止める
ことはない。踏み出すと決めた、そのときから、上条は止めること
を知らなかった。

こうして、最後の役者が『三沢塾』に足を踏み入れる。

自動ドアが閉まり、こうしてこの長い長い夢のような数日間、そ
の最後の一夜は、幕を下ろし始めた。

——気がついたのは、いつのことだっただろう。

——いつ、そうなったのかは解っている。

——あの時だ。

行間2（後書き）

三沢塾だよ、全員集合。

そして当初の予定通り出番を忘れ去られる■■さん。
次回から、一気にクライマックスへ向かいます。

第二章『だから君を好きだと言おう I | l o v e d | y o u』

1

ステイルⅡマグヌスは少し息を切らせながら『三沢塾』に足を踏み込む。

時刻は夜の帳も下りる頃、まだ日をまたいでこそいなものの、辺りは完全にともし火なしでは動くこともできなくなっていた。永遠の不夜城、学園都市ですら今は小康状態のようで、あたりにはちらほらと光が見えるだけ。

学生寮などに目を向ければ、灯りを落としている部屋も少なくな、鼯目で見積もれば半分はあるのではないだろうか。

とはいえステイルはそんな場所へ目を向けているわけにも行かない。今は急ぐべしと、目の前のビルに意識を向ける。

そこはマダ多少ながら明かりが残っている。だがそれは今日が特別なのか、それとも毎日こうして最上階の方だけ明かりがともっているのか。

判断のつかないところではあるが判断してもどうしようもないところでもある。ステイルは雑念を捨て去るべく、顔を振って意識を切り替える。別に何が如何した、何が変わったというわけではないが、少しばかり気が引き締まる。

——中は人も居らず、先ほどまでいたような形跡はあり、中はそれなりに涼しいものの、外も夜だ、大した変わりなど何もなかった。変わりがあるとすればステイルの今たっている場所が変わったこと、そしてここが——戦場であること。

（魔力の鼓動を感じるね、この様子からすると中で誰かがどんぱちしている……か、さっき様子を探った限り先にここに来ていた十三

騎士団は全滅——というか行動不能みたいだね、となると今戦っているのは神裂と……アウレオルスかな？)

あたりをつけながら、ステイルは歩を進める。目的地など確かではないが……神裂もここに来ているようだ、とにかく、無駄にならないように気をつけなければいけない。

その間にインデックスがどうにかなくなってしまったては困るのだ。

(神裂とアウレオルス、あれらがどうやって対等に戦えるのかは甚だ疑問だが、今はまあいいだろう。ボクとしてはあそこを通らなければいい話なわけだし)

さて、ではどうするべきかなと、改めて考えながらステイルは歩を進める。とりあえず如何するべきかは決まらないが、神裂と同じような考えでいいだろう。

彼女のためであるならば、たとえ地獄の道だろうとステイルは進むと決めたのだから。この先に何があるうが関係なく、ただ彼女がいるから進める。

だったらまずは階段を登ることからはじめてみようか。

一步、一步と階段を登る。一つ一つはかみ締めているがかといって遅いといえる速度ではない。強いて言うならば歩に力をこめている。といったところか。

陳腐ではあるが、こうしていると少しは自身を鼓舞できるし、ちよつと魔力をこめてみると身体能力が上昇したりする。神裂の受け売りだが。

(呪いというのは本職がやって効果を発揮する。噂や何かで“そう

言うもの”が溜まることはあるけれど、こういったことはやはり魔術師じゃないと……ね)

ここから、敵の目的地に向かう間、ステイルは特になやむようなことはない。昔、救い死ぬと決めたそのときからこうやって歩いてきた。

今更考えるべきことも、今更思い直す必要性も無い。そうやって適当なことに意識を向けるステイルと適当なことに意識を向けていないと、何がしかの思いに囚われてしまいそうな神裂、その方はまったく別物だが、それでも行き着く先は同じようだ。

考えずに目的だけを持つステイル。

考えから逃げるために目的へ向かう神裂。

ただひたすらに目的のため考える上条。

(“さて”――)

今のぼっている階段、その最後の一段を踏みしめ、登りきる。――そして、目の前のそこから感じられる魔力の奔流、勝ってきた。ということは無いだろう。何せマダ神裂の魔力は生きて、そして上を目指している。

となると、“逃げてきた”――か。

もしくは――いや、どちらにせとステイルはその先を凝視した。

(お出ました)

アウレオルスIIイザード、白と緑の青年は、その細長い目をしかめながら、ステイルの眼前へ現れた。対し、ステイルは“ぶち殺す

”笑みで迎え撃つ。

「やはり現れたか、贋作」

「それは一体——どういう意味だ？」

言葉を交わす。殺し文句を何にも包まず外気へさらしたまま投げ出したステイル。それを真っ向から受けて、まずアウレオルスが覚えたのは、怒りと疑問だった。

——彼には矜持がある。同時に自信もある。

そも、ステイルとアウレオルスでは年期が違う。

「無然。何を言っている。キサマと私では明らかに“格”が違う」

確かにステイルの特性からして、年齢以上の努力を重ねていることは明らかだ。だがそれはコチラも同じなのだ。むしろ——

「あの子への思いも、己自身の決意も、キサマと私とは段違いだ！」

ステイルの思い。

アウレオルスの思い。

それは本来同一のものだ。そしてその向けた先も——同一だ。だが、その差は、年数によって歴然としていた。

「ああ、そうかい」

ステイルはそれでも、至極下らなそうに懷からタバコを取り出す。口元を左手で隠しライターに火をつける要領で、手元から火を灯す。

ルーンを使っているのか解らないくらい単純な炎の魔術。アウレオルスはだからどうしたと見逃した。

揺らぎを持っていたためらうような煙は、ゆっくりと当たりに分れ、しばらくするとステイルはタバコを吐き捨て、踏み潰す。

「残念ながら、僕は事実を言っているんだ。彼ならばまだしも、君はまさしく偽者だ」

「ふざけるな——私以外に、何処に私の本物がいるというのだ」

「さてね……これから向かうとしようか」

一歩踏み込んで、左手を払う。

ルーンが舞い、払われた。

今はマダ、どちらが有利不利という事はない。となれば、まず一手、そうステイルは判断する。

それを動かしたのはアウレオルスだった。

唐突に襲い掛かる金色の鎖。

一秒に十回という人間以上の速度で襲い掛かるそれを、ステイルは確実に予期した。本来ならばその一撃はあたりの暗闇も合い間つて回避は困難であったはずだった。

だのにステイルは回避し、ましてやその内に潜めたルーンのカードを、あたりにばら撒き反撃にまで出ようとしている。

「悪いね」

そういつて、速度であれば段違いであるはずの、二度目の襲撃を

迎えようとしているアウレオルスに対してステイルは反撃を行う。
炎一閃、爆発と共にそれが錬金術師に襲い掛かる。迎撃のため、
アウレオルスは一つ構え、しかし――

到達するよりも早く、炎は王に転じた。

イノケンティウス
魔女狩りの王。ステイルの切り札にして、全滅の魔人。

「な――」

「……どこに驚く必要がある。ここは敵地なんだ、対決を想定して
こういった装置を用意しておくのは当然だろう」

「――ぜだ。そんな時間は無かったはずだ！」

激昂し、炎越しに揺らめくステイルを睨みつける。一つではなく、
二つ以上の別種の激昂を持って、その中には多大の驚愕を潜めて、
アウレオルスは片手を払って叫んだ。

嘆息――ひとつ肩をすくめて頭を振る。何を言っているんだと、
煙のごとく息を吐いた。

「君の目の前で燃やして見せただろう」

「……つまり、どういうことだ」

声を潜めるように言うアウレオルスにいいよステイルの表情が
呆れに変わっていく。完全に書く下を見下す表情で、彼はアウレオ
ルスに視線を投げる。

「馬鹿だね、君も……目の前でタバコを燃やしたのに、それを可笑

しいと思わない君も君……か」

「……………っ！」

「やっと気づいたか……だけど、これ以上は閉幕だ。——悪いね」

魔女狩りの王が進軍する。ステイルは右手をできうる限りまで伸ばし、開き——

「な、なあっ!?!」

アウレオルスは焦りからか、それともどうしようもない驚愕からか、手元を狂わせながら鎖を振るう。無造作に放たれたそれは、何の慈悲もかけらも無く、王によって踏み潰された。

後ずさるアウレオルス、それをステイルは——

「今日の僕は機嫌がいい、何も残さず——殺してやるよ」

容赦もためらいも何もない、純然たる一撃を持って、握りつぶした。

第二章 2

1

初めて、そうなのだと気づいたのはいつだっただろう。

最初に会ったときか、二度目にあったときか、三度目で遭遇したときか、それともそれともそれともそれとも――

正直に言えば好きになったのは始めてあったときからだ。彼は少女を見て、きれいだなと思った。かわいいとも、また、思った。

そこに偶然は無く、彼もまた断然とはいえなかったものの、それでもその時から彼は少女に好きになってもらいたいと思ったし、少女と一緒に居るのが楽しかった。

少しくらいおびえられても、まあ性分なのだろうと、直ぐにわかる。――それはむしろ、そういった処女の姿が見れて、嬉しかったのかもしれない。

だからきつと彼は――

少女のことを好きになっていたのだ。

本当に単純なこと、別に誰かに言われたわけでもないし、誰かが気づいて見守ったわけでもない、ただ彼が少女を好きになって、いつしかそれに気づいていたというだけの話。

ああそうだったのか、ああそうなんだそのとおりだ。それを彼は誓ったから、絶対に彼女を守ると、それでも守ると、誰かを殺しても守ると。

少なくとも彼は誓った。

――待っている、そう、誓った。

ステイルは自身の歩が少しの間止まっていることに、思考から復帰して初めて気がついた。

目的地、最上階へ向かう途中、どうにも暇をもてあましてしまい、とりあえず何かを考えながら動こうとしていたのが根本の原因。魔術的ではあるけれどもすさまじく無駄な考察をしていると不意にその思考が禁書目録インデックスに行き着いてしまい、回想してしまったようだ。

それ自体は別にいい、思考がころころと回転して道でもいいようなろくでもない思考にたどり着くのはよくあることだ。

だがそれで足を止めてしまったのが問題、さてどれくらい時間を無駄にしたかと、改めて歩を進めながら辺りを見る。

とはいえあたりはもはやどれだけ暮れたのか、どれだけ明けたのか解らなくなってしまうほどの暗闇、さきほどのアウレオルスときは向こうが照らしていたのかそれなりに光はあったものの、今は自分自身の光がないと身動きが取れなかった。

ルーンを自分自身の服の裏側に貼り付けて、炎を起こしながら先へ進む。

因みにこの服の裏に貼り付ける方法、炎剣を生み出すには丁度いいが、それ以外のことは不可能である。たとえば魔女狩りの王は出せば自分自身を燃やしてしまうし、炎剣を爆発させると、ルーンの爆発で自分が死ぬ。

「やれやれ、これも改善しようかな？」

とはいえ考えるだけ無駄だろう。ステイルⅡマグヌスは超一流の魔術師だ。それはつまり魔術が完成しているという意味であり、ステイルの場合、ここに来るまで相当な無駄をしてきた、これを改造

——しようと思えばできるが、適当に、たとえば今この場でやるようなことをしても、自滅するのがオチだ。

ルーンを記す紙自体の改善案が、つい先日でてきたものの、そう簡単にステイルの魔術は進歩しない。進歩できない。

だけれども、

（これからはもう少し魔術を考える必要があるね、元々僕の魔術は斥候用ではなく迎撃用、だがこれからは彼女を本当の意味で守らなくてはならない、だったらこれ以上の防衛策を作らなくてはならないし、何より——）

インデックスを守るためには、ただ守るだけではダメだろう。

「さて——」

ふと、タバコを取り出してステイルは火をつける。大きくそれを取り込んで、吐き出すようにかき消す。意識をそこへ向けながら、最上階、救い始める彼の、最初で最後の戦い。

救い続けるために必要な、ステイルⅡマグヌスの最後の戦いが、少しずつ始まる。

神裂火織と本物のアウレオルスⅡイザード、暗闇の中にらみ合い、対決している。インデックスと風斬、アウレオルスが誘い、招いたものを除けば、最初にこの場にたどり着いたのはやはり神裂であった。

その神裂の視点はアウレオルスではなく風斬に向けてられている。どうということかと、予定調和以上の感情が、そこへまた、向いている。

それほど広くは無いが、それでも人が二、三十は余裕で詰め込められる室内に、大きなすとそれを囲むいす、その置くには大きなデスク。神裂はその入り口にいる。

この場には神裂のほかにアウレオルスと眠ったままのインデックス、そして風斬がいた。インデックスはデスクに背を向けた、一番近いソファに寝かされ、風斬はそ子から見て左側にちょこんと、座っている。アウレオルスは風斬と向き合っていた。先ほどまで何か会話をしていたようだ。

彼女はちらりと神裂ほ方をみて、それから再び視線を伏せた。

「どういことですか、アウレオルスⅡイザード」

「疑然。何を言っているのだ……ああ、そうか、貴様等こいつを放って出てきたのだったな」

ゆらりと、彼は神裂の元へ振り向く。

彼の表情は、憤然というよりも、毅然というよりも、楽然というよりも、これは何か違う気がした。インデックスを攫う際に現れた彼は少なくとももう少し何かがあった。

だがこれは違う。

神裂は自然とそれに不自然を思った。

なんだろうコレは、わからない、アウレオルスは何を抱いている。そも、それは風斬にもいえることのはずだ。

何故彼女は無事なのだ。あの一撃、防御していないと例え神裂でも命を落としかねない、本来ならば多少の猶予も無いはずなのだが、あの時は魔術的に不安定な要素があったのか、大分高く舞い上がっていたが、——いやこれは余談だ。

少なくともあそこで無防備に入れ替わった風斬氷華は、こうして無事でいるはずはなうい。

少なくとも今は上条の手によって病院へ送られていても可笑しくはないのだ。

少なくとも不幸なれど彼女はまったくコチラとは関係のないはずなのだ。

ならば、

「一体どういことですか！　アウレオルス！」

「こいつがこのビルの前でぼつんとしていた。その表情が気に喰わなかったからつれてきた、それだけだ」

「それでは、解りませんよ」

「その通りだがマダ話の途中だ、横槍はもう少し待ってからにしろ」

何か可笑しい、口調や何かに差異はない、ただ彼の中の何かが違う、根本的な何かが彼の中で変化している、それは神裂にはわかるが詳しくは探れそうにもない。

本当に、彼を取り巻くあの感情は何なのだろう。

「随分と憂鬱な表情をしていたのが気に喰わなかった。私にとってはいいつはそれだけだ」

怒るように言って、しかし彼に怒りなどない。何だ、何が変わった。

解らない、が今神裂のやるべきことは決まっている。ならばそれをただ実行するのみ、彼女の中には一つ決意がある。それは確実に

あるはずだ。

「そうですか——では救わせていただきます。彼女も——あの子も」

刀に一つ手をかける。“聖人”神裂火織、その到達点でもある一つの力を、少しだけ引き降ろして、真っ向からアウレオルスを睨みつける。

一掴みの意思の元、彼女はアウレオルスと対決する。

「そうか、だが無理だ」

断言するようなアウレオルスの口調に神裂は少しだけその歩を緩める。そこへ——

「だから倒れ付しているがいい」

瞬間、神裂は叩きつけられるように地に伏せられた。

——なんだ、これは。手を上げようとする、持ち上がらない。地面に手をつこうとする、つけない。顔を上げようとする、相当きついがとりあえずあがった。——なんだ、これは。

そこまでやって改めて神裂は自身の異常を自覚する。ありえない、そう考えつつも呼吸を独自の方法に整え、更に魔術をくみ上げていく。

体は動かない、だが思考は十分動いている。

「ぐっ——ああああああっ！」

雄たけびのような悲鳴、嗚咽のような絶叫、神裂はそれだけの力をこめて、しかして結果は何一つ代わることはなかった。

どうして——どうして聖人である神裂の本当の全力が届かない。

刀を振らなければそれは多少の影響はあるだろう、それでも今自身の力は“破格”であるはずだ、ならば――

「無駄だ、キサマでは絶対に立ち上がれない」

「そんな事……はあああああああああ！」

否定する為に力をこめる。だが動かない。

なぜだ、なぜだ、なぜなのだ。どうして守らせてくれない、どうして伸ばさせてくれない、どうして、どうして救わせてくれない！
違う、こんなもの違う、神裂は出せる力の全てでもって少しだけ体を持ち上げアウレオルスを睨みつける。

「何度も言う、貴様では不可能だ」

それにたいして返答は何も変わらない、神裂の力では届かない、彼はそう宣言して見せた。それは――なぜだ、一体どうして神裂の聖人を無力だといえる。

疑問はいくらでもある。だがその疑問にはいくら時間があっても答えを出せそうにない。

ならばと、あたりに視線を這わせる。それで何かがわかるというわけでもないが、とにかく今は何かヒントを探すしかない、たとえば……風斬氷華、そう考えて意識を向ける。

向こうはコチラにまったく意識を向けていない、視線にすら気づいていないのだろう。というよりも先ほどの戦いとも呼べない行動の中でも、彼女は行動を起こさなかった。

ただ、自身の世界に耽るのみ。

「ぐっ」

それ以外には、眠り続けるインデックスしかない。だが、解りきっている。救いを待つ彼女には、今はマダ何もない。

そうして辺りに視線を向けて、やがて終わらせる。アウレオルスは神裂を意識していない。完全に神裂を無力化したと“思っている”のだろう。

彼の意識は少し遠く、いまだ神裂によって開け放たれたままの扉に向けられている。

少しの間、空白があり、そのときだった。

「やれやれ、見てられないよ、神裂」

一つの声がした。同時に炎が舞い、突き進みアウレオルスをつかむ、そのまま彼を中心に火柱が立った。

探ってみればその魔力、なじみがある。

当然だ、扉の奥の魔力――さらにはそこから向かってくるその魔力、どちらにせよその魔力は彼女が先ほどもで共に行動していたが、移動速度の問題で放れていた仲間、ステイルⅡマグヌスの物だ。

「……少し無駄が過ぎたか」

ステイルは悪びれた様子もなくそういった。実際に見たわけではないがその言葉に多分に含まれた雰囲気がある。それを物語っている。

それ自体の意味は神裂には読み取れなかった。

ステイルだけにわかっている事実、それを見極めることはできなかった。

当然だ、神裂はその選択肢を一度退けているのだから。

「出てきなよ、錬金術師^{はけもの}」

突き刺すようなステイルの言葉、それに先ほどまで、炎が飛んできて反応が小さかった風斬が反応する。びくりと、体を震わせておびえたような表情でステイルを見る。

そして、ステイルの不思議そうな返しの視線を見て、それが自分自身ではないことを悟る。

その間は本当に少しだけ、それでもそれなりの間があって、やがて彼は姿を現した。

「必然、解っているのならばキサマには消えて貰おうか」

その発言と同時に、ステイルの体が透き通っていく。突然のことで神裂はひどく驚き、ステイルはしまったと表情をゆがめる。

「ッ！ か、神裂、あいつの魔術はとんでもないものだ、恐らく君が一度は切り捨てたもの、それで間違いなく正解だ。あの魔術は――」

そこまでだった。それ以降の続きを告げることなく、ステイルは消えてしまう。ただそれでも神裂は彼の言葉の意味を理解しなくてはならなかった。

理解せざるを得なく、理解するしか、選択肢は存在しなかった。

アウレオールの魔術に触れ、それから繋がってきた疑問が全て切り払われる。それに対するあせりか、それとも驚愕以上の何かか、判断はつかないが、それは神裂を揺さぶっている。

理解したくないといえはその通り。

うそだと叫びたいのはその通り。

その魔術は、聖人である神裂ですら手の届かない、高みの中の高みの魔術。

「然り、気づいたようだな、ならば改めて一つの名と共に名乗ろうか」

見上げる神裂を、見下すアウレオルス。

「我が名誉は世界のために（H o n o s 6 2 8）それが私の名であり、我が魔術を」

黄金練成（アルスⅡマグナ）という。

第二章 3

3

「元々、私はこの子を救おうとしていたのだ」

重苦しいというべきか、もはや言葉を出せる環境でないとも言
うべきか、辺りには沈黙が包まれていた。それは実質意図された偶
然であつたし、そこに介入できるものはや二人しかいなかった。
眠り続けるインデックス、驚愕したままの神裂——消えてしまっ
たステイル。

後に残ったのは、黙りこくりに、実質介入の意思の無い風斬と、そ
の場の全てを制圧しきつたアウレオルスだけであつた。

「三年前に祈り続けるこの子とであつたときから、恐らく私はこの
子に全てを奪われていたのだろう」

ただ一人、悠然と、歩き続ける彼は、しかし立ち止まった。数歩
神裂から遠ざかるように歩き、まったく関係などなく、インデッ
クスの前に立ち尽くした。

そこに感情は無い。向けるべき感情に迷っているのか、それとも
やり場の無い感情を押し留めることしか彼はもうできないのか。

どちらにせよ、これはもう——壊れてしまっている。

「だから、私はこの子を救おうと思った」

誰に向けた言葉でもない、だが聞くべき人間は限られている。聞
くしかない人間は、限られてはいるが、存在した。

アウレオルスは顔を伏せインデックスを覗き込むような態勢にな

りながら、焦れた様に、拗れた様な表情を向ける。
それが何処へ向いているか、判らなかった。

「吸血鬼を呼び寄せ、彼女を鬼と成し、その記憶の容量を引き上げるつもりだった」

だが、と彼は言う。

そう——この場に在る誰もが知っている。アウレオルスの目論見は完全に徒労、もはや無駄ですらない、それは完膚なきまでの——失態。

いや、失態ですらあるのか、それすらわからない、底の底
完全完璧駄完の——道化。

「だが、そこに在る不幸な小娘に話を聞けば、既にこの子は救われているというではないか、それも——」

私がそこに現れる、本当に数瞬前に。

それはもはや、言葉ではなかった。回想、独白、どれもが違う。嘆くような、しかし嘆きですらなく、言葉でもアウレオルスは定まらず、彼はありとあらゆる感情が——煮え切らない。

言葉ではなく、感情として、感情ではなく、存在として。

「まったくもって道化だとは思わないか？ 全てを手中とする術を得ても、その結果がコレではしまらない、私の願った幸せが、私の黄金の外にあることなど、本当にくだらない」

だけれども、と彼はいう。

もはや完全に何もかもを失い、情念など、情動など——情感など、完全に不要になってしまったというのに、彼は少しだけ、安らかな

顔をした。

「最初は怒りもした、拒絶もした、絶望もした、何もかも排してしまいそうになった。本当に、時間にしてみれば指して過ぎてはいなかった。だがその中で私は、人間のありとあらゆる激情を全て味わったのだ」

どうしようもないほど、それはつらいと彼は言った。

だが、その言葉に神裂が反応した。

「全ての……激情？ ……！ では、貴方は」

「必然。そういうことだ。どれだけ感情を描いても、行き着くところは同じだった」

コレがもし、ぶつける先があったのならこうは行かなかっただろう。たとえば目の前に、今のように神裂が居て、それを告げられたのならば、アウレオルスは神裂に矛先をぶつけていただろう。

だが、彼の目の前には絶望にぬれた少女しかいなかった。

彼が愛した純白の、崩れを知らぬ希望とは正反対の絶望だけの少女。

だから、彼は言葉を、感情をぶつけられなかった。インデックスを救うという目標にだけ、救われてきた彼にはどうしても風斬と自分が被ってしまい、何もすることはできなかったのだ。

無様といえばその通りだろう。

惨めといえばその通りだろう。

それでも、彼は、アウレオルスIIイザードは。

「私はどうしようもなく——この子が救われて嬉しかったのだ」

笑って一つそういった。

だが、

その表情はすぐさま憤怒へと変わる。

「だから、私は許せなかったのだ！」

それと、もう一つの声は、同時だった。

「風斬いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

鍊金術師の世界、その最後の乱入者、上条当麻の声だった。

息を切らして肩を揺らし、それでも倒れることも弱音を吐くこともせず、上条は更に歩を進める。それに呼応するように、風斬が反応を示した。

「当麻……さん？」

それは今まで言葉を発してこなかった風斬の、最初の言葉であり、

恐らくコレまでの中でもっともの驚愕であったのだろう。

その心中は間違いなく、何故来たのだろうという疑問しかなかったはずだ。

そしてそれに最初に反応したのは上条ではなく、アウレオルスだった。

「憤然」

その一言と共に、アウレオルスは片手を上条に向ける。その手はまるで何かを握りこむようで――

「銃をこの手に、弾丸は必殺、数は一つで十二分」

針を自身に突き刺し、それを抜いた直後には、既にそこにそれはあった。

無骨と威圧でもって敵を制す、黒塗りの一丁。

それを怒りと共に、上条にぶつけた。

確実に人を必殺できる弾丸が、上条の真横を通り過ぎていく、次は殺すぞと、その弾丸には間違いなく描かれている。

「次は殺すぞ」

そう宣言して、上条に二の句を渡さず、アウレオルスは言葉をつなげた。

「……キサマはあの子を救ったのだったな」

そういいながら、ちらりとインデックスの方を見る。――上条は、今までアウレオールの目的がわからなかったが、ここに来てはつきりした、彼もインデックスを救おうとした、インデックスが救いになった人間の一人なのだ。

少しあたりを見渡す。もう一人、ステイルⅡマグヌスはどうにも姿を見せてはいない。

――再び、そうしてから両者の視線が邂逅する。その瞬間、アウレオールの表情が、今までに無い憤怒からそれ以上の、もはや形容すら難しい、鬼の形相とでも言うべき怒りの表情を上条に向けた。

「ならば、何故キサマはそいつを救わなかった!!」

ギリッと、音がした。聞こえたのは自身だけだろう。

アウレオールスⅡイザード。

彼の視線の先には、彼女がいた。――上条を好きだと言った。風斬氷華。この塾長室において、インデックスと変わらず不動のまま立ち尽くす少女。

絶望に身を浸し、自身を怪物だといった、少女。

「――ッ」

上条は気圧されて、風斬は絶望に押され、ほぼ同時に息を呑んだ。手を伸ばしても届かない、届かせてはくれない、所へ、少しだけ遠くへ、風斬が行ってしまうような気がする。

「違う」

否定する。

戻って来てくれと、戻らせに来たんだと。

「俺は——今救いに来たんだよ！」

それが上条の意思、たとえば絶望のふちへたたされようと、共に堕ちていつて。そして共に引きずり上げる。それが上条の意地、それが、それこそが上条当麻。

救うと、そう決めたのなら、立ち止まることだってしない。
しかしアウレオルスも、それだけでは納得しない。

「ならば何故、絶望に触れたときに救わなかった」

アウレオルスに吹き飛ばされて、怪物だと一目で判ったときに上条は手を伸ばせなかった。右手を伸ばそうとして、ためらった。

それは正しい選択だろう、直感にしてはよくやった。

だが、風斬に対しては最悪の選択だ。

何故伸ばせるところで救えなかった。伸ばせば救えたのに、伸ばすことでここまで、地獄の中の地獄まで来る必要なんて、無かったのに。

そういつて、一発上条に弾丸を撃ち込んだ。

必殺の威力は、しかし右腕で弾き飛ばされた。黄金練成で生み出したのはあくまで本体、それ以上は黄金練成が必殺を満たす為にアウレオルスによって作り上げられた魔弾。

アウレオルスが驚愕する。

右手を払って、上条は宣言した。

「だから、今救いに来たんだ。絶望の分、希望を与えに来たんだ」

終わりよければ全てよし、そういつて上条は、一步進んだ。

それに反応したのはアウレオルスではなく——絶望を嘆く風斬本人だった。

「な、何ですか!」

立ち上がって、絶望に身を潜めて風斬は問いかける。；

自分の胸に手を当てて、まっすぐな、しかし疲弊仕切った瞳で上条を見る。一步、一步と進んでくる上条へ、抵抗のように、同じく後ろへ下がりがりながら。

「私は化物ですよ、どうしようもない力があって……どうしようもない正体で!」

風斬氷華は能力者が無意識に放つ能力——AIM拡散力場によって構成されている。

たとえば、一人の能力者が無意識に熱を放つ。

それは人肌の熱で、触れば人とまったく同じように感じられた。

たとえば、一人の能力者が無意識に光を放つ。

それは人影のような光で、見れば人とまったく同じ姿に見えた。

たとえば、そう、そういった能力の塊が風斬氷華。

陽炎の町に生まれた意思にして、虚数学区・五行機関への、鍵。

それはつまり風斬が人間ではないと言う事で、それ以上に。

風斬が化物だということだ。

上条はそれを知っている。

小萌から推測のような真実を聞いて、それを知っている。

それでも、

「だからどうした」

それでも、上条当麻は、それを知ってなおここに來たのだ。

それは紛れもない事実、だから風斬はわかってしまう、抱いてしまふ。上条当麻という、自身の最も大きな希望が、まだあるのだという、幻想を。

上条の右手が虚空を払う。

風斬の幻想は壊される。現実として、上条は手を伸ばしているのだから。

左手、幻想を壊し、現実であることを指し示す、風斬をつかむための左手。

上条の右手は誰かを守るためにある。

上条の左手は、風斬をすくうためだけにある。

「帰ろう、現実げんそに————氷華」

やっと気づいた。

赤面ものの回想をした。

本物だと、確信して上条は立っている。

「俺は氷華がどうしようもなく好きなんだ」

そして、

第二章 3 (後書き)

やっとここまで来た……
上条さんと風斬、実は……

第二章 4

4

全て静寂していた。たった一言、それだけで揺れるような血なまぐさい戦場が、閑古鳥の鳴く無音の場所へと変貌していた。変質していたといってもいい。

驚愕と、納得と、呆然と、それは誰が誰だっただろう。

ただ確定として最初に動いたのは納得——アウレオルスIIイザードだった。

「そう、か。キサマは気づいていなかったのか」

言うアウレオルスの手から、偶然か必然か、どちらとも取れない魔弾が飛び出る。風斬の隙間を縫って上条にピンポイントで、それは当然ながら右手に阻まれる。

「なあ、私はいま、何を思っているんだろうな」

ポツリとアウレオルスから出た言葉、同時に消え去っていたステイルが復活する。同時に上条に十の魔弾が襲い掛かる。同時にアウレオルスの右手から剣が出現する。

上条はすぐさま風斬を左手で庇うように突き飛ばして、右手を振るう、ほぼ帯状に並んだ弾丸は、これで都合よく消え去った。

「悪い、氷華……答えを聞かせてほしい、けど少し待っていてくれ」

自分の都合で上条は答えを先延ばしにして、その上で呆然とした風斬がおぼつかない思考の中で頷く、そのまま言われるがままに後

ろへ下がると、驚愕するステイルと、立ち上がり同じように喫驚する神裂がいた。

「あの、これは……」

「僕達が知るか」

問いかけようとした途端、答えが返ってきた。

つまり、この場に居るのはほぼ二人だけ、上条とアウレオルスだけになっていた。

「なあ、私は一体何をしているのだろうか」

「しらねえよ」

上条は右手を、アウレオルスは剣を、それぞれ振りかぶる。

先に踏み込んだのはアウレオルス、自身が上条と比べると大分長身なのだ、当然といえば当然だろう。更に、間合いもまた、広い。

縦に大振りで振るわれる剣、上条はここが突きどころだと、一気に踏み込んで右手を振るう。

アウレオルスは身長、間合いから完全に上条よりも有利だが剣の心得が無い。これはステイルも似たようなものだろうか。……いや、ステイルはメインウェポンとして炎剣がある。アウレオルスよりはましだろう。

とはいえ、そこが弱点であるのは確かだが、上条の右手も確実に当たるというわけではない。アウレオルスの術式はありとあらゆるものを思い通りにゆがめる、自分自身さえも。

よって上条の拳も、あたりはしない。

後ろ、アウレオルスは少し放れた場所へ立ち尽くし、その直ぐ後

ろにある塾長室の机にもたれるように重心を寄せる。

そして剣を構え、それが射出される。

「ッ!？」

上条が体を反らした直後、そこを剣線が引き裂いた。鈍いような音と共にそれが何処かに突き刺さる。アウレオルスはすぐさま自身も行動に移し、後ろに意識が向いている上条の目の前に出現する。

不意を突かれた上条へ、アウレオルスの右腕が襲い掛かる。

あわてて直ぐ隣にあるソファーに足を引っ掛けて上条が跳ぶ。ソファー越しに両者の視線が邂逅する。それも束の間、上条が足を地につけると右腕を振りぬいた。ソファーがあるとはいえ、そこは右手が触れるほどの間しかない。

それはアウレオルスに回避され、上条はすぐさま右手を引き戻しながらそこを離れる。追い討ちをかける魔弾は、全て右手が吹き飛ばした。

少しの間、それは時間的にも、空間的にも存在した。じり、と音を立てるように間合いを計り、上条が再び動いたのはその直ぐ後だった。

時間的には数秒、空間的には数歩。

「おおお!」

そこからはさながら殴り合いだった。右手を振りぬく上条、回避、アウレオルスの左、それは右手を巻き戻しながら上条が回避する。続けてもう一度右、それはすぐさまアウレオルスに襲い掛かり、コレも回避される。

とはいえそこでアウレオルスは態勢を崩してしまふ、回避にあせった彼に、テーブルの足が激突したのだ。

必然、見逃す上条ではない。右を思い切り振りかぶり、振りぬく。しかしそれはアウレオルスですら見える、大振りすぎるテレフォンパンチ、余裕を取り戻しながらアウレオルスは回避する。

しかし、それは余裕ではなく油断だった。

ゴガンッ！！ と、上条の“左”がアウレオルスへ突き刺さる。

それを悟ったアウレオルスはすぐさま上条の追撃——本命の本命である右での一撃——から逃れ、すぐさま後ろへ下がる、先ほどと同じ、デスクに寄る。

アウレオルスの右手、左手、両方から刀剣が出現する。

——発射される！

上条は体を落とし、刀剣をやり過ごす、そのままクラウチングスタートの様に構え、一気に飛び出す。インデックスに当たらないようソファアを踏み、速攻のまま、着地と同時に右腕を振るう。

そこでアウレオルスが又消えうせた。

すぐさま辺りへ視線を這わせる上条、そこでステイルの叫び声が聞こえる。

「上だ！ 大馬鹿！」

対応して、上条が上を向く、浮遊するアウレオルスと、それによりそう振り子のような刃。

判断に多少迷うが、上条は回避は不可能だと判断、ならばと右腕を突き出して賭けに出る。刃が現実とまったく同じ幻想なのか、それともそのまま現実なのか。

賭けといえればそれ以外にも——

そして刃が振り下ろされた。

——それは右手に激突するかしないか、上にいるアウレオルスでは、そも、横から見ているステイルたちにすら判断できない場所では消えた。

ただ、上条の判断でいえば、これは……

（当たっていた。消し飛ばす可能性もあった。けどあいつはそれを無視した）

つまりアウレオルスは上条の右手を無視した。結果としては賭けに勝ったが、アウレオルスは上条の右手に触れる前に、消えてしまいうのではと考えれば、それで終わっていたはずなのだ。

（あいつがどういう能力、もしくは魔術を使うのかは判らない、刃を出現させるかもしれないし、空間転移のようなものかもしれない。だがそれでも、それらの力は間違いなくあいつの意思の赴くままにゆがめられるんだ）

燃えろと思えば燃やせて、凍れと思えば凍らせられて、死ねと思えば——殺せて。

黄金練成とはそういった能力だ。上条も戦って何となく感じ取っている。

（俺にとって、アウレオルスと戦う理由は無理、あいつを自滅させられるのならば間違いなくそれでも構わない、だけど）

アウレオルスは言っている。示しているのだ。

ふっと、彼がインデックスの目の前に現れる。そのまま少し屈み、インデックスに触れると、たちどころにインデックスは消えうせた。

(どこへ……いや、多分探せばいるな、存在自体じゃなくて、インデックスを何処かへ隠したんだ)

傷つけない、今更といえばその通りだが、恐らくアウレオルスが願いつける限り、上条が右手で触れない限り、いつまでも眠り姫であり続けるインデックスを、彼はまだ意識の中にあつたのだ。

「なあ、あんた……」

上条がいまだアウレオルスと戦いつけるのは、戦いが続いているのは、彼が望んだからだ。アウレオルスがほぼ無為のなかで、それを願っているのだ。

「今、何を考えているんだ？」

それは、恐らく決壊のキーワードだったのだろう。その直前にアウレオルスがインデックスの居場所を移したのは果たして偶然か、いや、必然であつたはずだ。

怒ればいいのか、絶望すればいいのか、喜べばいいのか、喜びを表した彼は、しかしそれでも迷っていたのだろう。怒りを表したかれは、しかしそれでも嫉妬していたのだろう。

風斬を好きだと言つた上条に嫉妬して、インデックスを助けた上条に対して、意識を迷わせて、上条を偶然のように、必然のように襲つた魔弾から、彼は崩れ始めていたはずだ。

「何故………だろうなあ………！ 私………は、キサマに………示した………い、私の力………が………キサマを——刺し示せることを！」

「……………」

沈黙が、少しの間辺りを征服する。終わり無きが如しと、狂乱する、それでもそれは、上条の右手によってはられる。

右手を払い、上条は宣言した。

「言葉でもいいだろう。助けたかったといって同情を求めたっていいだろ！ てめえはインデックスを救いたかったんだろ？ そこに命を賭けてきたんだろ？ 外道へ堕ちようが救ってきたんだろ！？」

だったら、

「だったら加わってもいいじゃねえか！ 俺はてめえを救えない、俺も同じだから、だけど！」

それは自分にも、風斬にも又向いている言葉のように、

「救ったって、救いたかったって、力を尽くしたんだって、どんな感情でもいい、お前自身を、誇ってもいいじゃねえか、俺はお前を救えるんだぞって、高らかに宣言してもいいじゃねえか！」

判らないのか、と上条は、

「評価される評価されない、許す許されないの問題じゃない、誰かを救おうとした自分自身を、だれが認めるのかなんて決まってる――」

上条の言葉には説得力も何もない、平和ボケした子供の言葉、だがそもそもそれは相手だけに向けたものではない、上条の言葉はま

るで魔女の鏡のように、正直を答えるようなものだ。相手の立場、存在を何も考えずただ心のありようを、小学校の道徳のようなきれいなだけの言葉を投げる、必要以上に不愉快な言葉だ。

けれどもそれ自体、鏡自体にだって、言葉は向けられる。

『世界で一番きれいな人間はだあれ？』

答えるまでもない。

「——自分自身、だろ！」

それは一体何の合図だったか、アウレオルスは一つ目をつぶると、崩れ落ちた。それが何かの、限界だったかのように。

そして同時——

黄金の練成が、全てに広がった。

幻想にも似た、それはもはや地獄であった、アウレオルスが“存在”していた場所を中心に、塾長室を囲む全てが黄金に包まれる。

ソファアー、テーブル、塾長のデスク、それら全てが、黄金の広がりによって、塗りつぶされるように消えうせた。後に残るのは、上条と、風斬と、ステイルと神裂。

事実を、最初に理解したのは上条だった。

「そうか……やっぱりお前は救われないんだな？ だったらやってやる」

その右手はアルスマグナ大いなる術を貫くように、突きつけられる。

「まずは、その幻想をぶち殺す！」

第二章 4（後書き）

黄金練成、ラスボスにふさわしいといえはその通り。

第一巻分から続く二部構成、実質ボスのいなかった一部を含めてのラスボス。

実質的にはプロローグなわけですが、それでも一つの節目を迎えようというわけです。

第二章 5

5

黄金に染まった空間の中で、ステイルは神裂に問いかける。

「神裂、君はコレをどう見る？」

「難しい質問ですね……少なくとも私たちを直接殺そうという意味はないようです」

見た限りですが、と彼女が言う。

つまり、本来の黄金練成ならば可能である“死ね”や“爆ぜろ”と思うだけでそのとおりになるという事はないのだ。

ただこれは……

「どうもあたりを破壊したいようだね、まったく、それならモノに当たればいいだろう、何で消したんだ、それを」

恐らく上条自身は感じ取れないであろうが、今上条の目の前で少しずつ蠢おうごんしよくいている黄金色の化物。吐き気を催すほどの重圧と、それを感じざるを得ない媒体たる魔力。

「あ、あの……」

「……なんだい？」

戸惑う風斬の声と、それを怪訝な雰囲気のまま聞き返すステイル。少しばかり怯んでしまった様で神裂が息を吞んでたじろぐ。一連の

流れをみた神裂が嘆息しながら、文句をつむぐ。

「魔術……というのは少しばかり懐疑的かもしれませんが、今日の前にあるのはもはやその中でも最上級の魔術である黄金練成……いえ、この場合は大いなる術と表現しましょうか」

前置きをして、

「大いなる術というのは簡単に言えば“人が神と同等の力を得る術式”です。人間は精製途中の神であり、己を鍛えあげる事で神の肉体を手に入れ神の業を自在に操る事ができる。いわゆる完全なる知性主義にあたります」

今は関係ないとは、神裂の談、いやそれよりもと、風斬が反応したのは大いなる術の本懐であつた。

「それは……神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの（SYSTEM）、ですか」

「人が神にいたる事ができるという思想であれば、それは恐らく同質のものでしょうか」

それを飲み込んで、噛み碎いて、少しでも自身を安定させようと風斬は思考を繰り返す。それに加え、更に情報を求めるため、先を促した。

「では簡単に説明しましょう。今回私たちがすべきこと、この暴走した意識の空間で何をすべきか」

言って、神裂は上条の目の前でほぼ分裂を終えた三方向へと広が

る黄金のそれを一つずつ指差しながら。

「黄金練成は現実を術者の思い通りにゆがめる術式です。曲がれと思えば曲がり、千切れろと思えば千切れる、そういった状態なわけです」

「それって……反則じゃないですか」

「ええ、その通りです。ですからそれを発動するために数百年かかるのです」

普通なら不可能なのだと、風斬は頷いた。

「本来ならば発動できないそれを、あの錬金術師は発動させてしまった。どのような方法で、などとは恐らくもう判断が付きませんが、その中で黄金練成は、錬金術師の意識の下、暴走してしまった」

「意識の……下？ それは暴走って、いうんですか？」

制御できているのではないかと問いかけると、ああ、と神裂がはっとして、申し訳ないと訂正を入れて更に続ける。

「暴走、というのは正しくないかもしれませんが。あくまで錬金術師がそう願ったから、というのが正しいのです」

「つまり、あの人が全部無かったことにしてしまいたいと願ったから、こうなったんですか？」

「端的に言えばその通りです。彼は恐らく、そのための演算のようなことを、今は無意識下で行っていることでしょう。我々はそれに

巻き込まれたということですね」

「……もう直ぐだぞ、神裂、早くしないと“動く”。まったく、いい迷惑だ、僕も神裂も、これからやらなくちゃいけないことが大量にあるっていうのに」

ステイルのせかす声が飛んでくる。説明がめんどくさくて今まで黙っていたが、さすがにしゃべらなくてはいけなくなったのだろう。初めて、そこで神裂は黄金の以上が悪化していることを悟った。

「では、これから私たちがすべきことを話して終わりにしてしましましょう」

そもそも、と神裂が言う。

「大いなる術には三つの――いわば黄金があります。一つは『知識』、一つは『力』そして最後に――『不死』、これらによって構成されています」

三つの黄金は繋がっており、ここを突破するにはその三つを各個撃破しなければならぬらしい。因みに何故判っているのかと風斬が問えば、それがセオリーなのだという答えが返ってきた。

そして、

「これら三つは、私たちが役割を分担して撃破しなくてはなりません」

自分は『力』だと、神裂は明かした。何でも大いなる術を操る力は『大天使』クラスのとんでもないものらしい、風斬にはその『大天使』というのがいまいちピンとこなかったが。

とかく、それにまともに対抗できるのは、速度で何とか付いて行ける神裂だけらしい、上条もしかしたらいけるかもしれないが、上条ではダメだ。

「……力不足だろうが、僕が『知識』を担当しよう。本当ならばあの子がいればよかったんだけど、たとえ既に取り返し、目を覚まさせていたとしても、あの子は“飲まれて”いたから結局僕がやるしかないのだけどね」

“あの子”はインデックスだと、ぼんやりと頭の片隅で風斬はあたりをつける。

「それだと、当麻さんは『不死』なんですか？」

「ええ、その通りです。彼は『不死』、ありとあらゆる力でもって殺せない幻想を、殺して貰います」

上条は『力』を相手してもいい。だが上条以外には『不死』は殺せない、焼こうが切ろうが、『不死』は当然のように生きている。

「だ、そうだ。聞こえているんだろう！ 上条当麻！」

「ああ、聞こえてるよ！」

ステイルの投げかけと即答の返事、上条の言葉に合わせてか、びくりと風斬は肩を震わせる。そして力の弱い、おどおどした目で、

「あの、私は――」

言葉をつむごうとした。しかしステイルから待ったが掛かる。

「悪いが時間切れだ。答えが出たら誰かを追うんだね、まあ足手まといになりたくなければここにいてもいいんだが——っと、もう無理か」

そのステイルの言葉に合わせて、三つに分裂した黄金が表れる。

一つは体、黄金色透明の、何処かで見たことのある少女の体。
一つは本、黄金輝く分厚い本。
一つは帯、幾重にも重なる不可思議な“物体”。

『力』

『知識』

『不死』

それらが一気に、場所をとるように広がった。

薄っぺらく、狭苦しい黄金の間もまた拡張され、上条たちを囲むような状態へと変化した。

そして上条とステイルと神裂、三人がそれぞれ対応した場所へ移っていく。

上条はそのまま。

神裂は横を向いて。

ステイルは大量のルーンをばら撒きながら。

その中で、風斬だけは取り残された。

『知識』は遠い。

ステイルはそれをわかってお、ルーンをばら撒く、紙製のルーンが大きくお持ち上がり、浮遊すると、すぐさまそれにあわせて紅蓮の人間が浮かび上がる。

イノケンティウス
魔女狩りの王。

それが最強を誇る魔術の名だった。

黄金練成——大いなる術、その核はある意味『知識』だといってもいい、本来の本体は『不死』だが、それでもその『不死』と、『力』は知識から来るものだ。

よって『知識』は核にして、欠ければ風穴の開く場所でもある。とはいえ、『力』は無秩序である者の、最も危険な存在であるし『不死』を排除しない限り、『知識』も『力』も再び再生するのだが。

例えるならば、『知識』は星を喰うものの左側だろうか。

『不死』が右。

『力』が本体といったところだろう。

「さて——」

『知識』は遠い、物理的に、直接振るわれる『力』やどこまでもうごめく『不死』と違い『知識』は黄金の奥底にある。今この場所から、ステイルは『知識』によって発生する魔力しか感じ取れてはいないのだ。

「——燃やしてしまおうか」

そこまで到達するには強行突破以外には方法が存在しない、絡め手を使おうモノならば、ステイルは『知識』の奔流にふれ、自滅する。

ならば自身の最強でもって示すしかない。

我が魔法名こうしなのごとく。

手始めに、魔女狩りの王が進軍する。それを『知識』が対抗するため、いくつかの砲門が出現する。現在に置いてもっとも高性能とされる砲台で、当然ながら学園都市製である。

戦車のキャタピラをとっぴらったような造型、その円筒は人を飲み込めるほどではあった。

名をなんと言ったか……いや、今はそんな事はどうでもいいだろう。

「なるほどね『知識』とはそう言うものか」

一人納得しながら、ステイルは魔女狩りの王を進ませる。同時に自身もそれに繋がるように後を追う、そして盾のように鎮座する魔女狩りの王へ、砲台が発射される。

ゴウンゴウゴウゴウッ！！ と、何一つ狂うことなく、寸分違わず魔女狩りの王の中央に激突する。

ステイルの持つ最強の炎神、しかしそれでも最新鋭の科学には叶わないか、一瞬揺らぎを留め、一步進軍を行ったものの、その直ぐ後に崩れ落ちるように消え去った。

だが、ステイルは特に焦った様子もない、当然だ。——大量にばら撒かれた紙束の一つが燃え尽きる。

「やれやれ、残念ながら科学とは魔術の踏み台でしかないらしい」

その言葉と同時に、ゴオウツツ！！と魔女狩りの王が消え去った場所に、再び魔女狩りの王は降臨する。
イノケンティウス

「いいか？　僕の魔女狩りの王は、後四千回生き返るぞ？」

新たにルーンをばら撒いて、ステイルは簡単に宣言して見せた。

『力』はほかの『知識』や『不死』よりもいくらか単純である。その性質は何となく上条の幻想殺しに似ていた。全てを滅ぼすのであれば、全ての幻想を殺すのとなんら変わらない。

それは間違いでもなんでもない『力』とはすべからくそう言うものであるし、なにより神裂の振るうそれもまた、見まごう事なき同等の『力』なのだ。

それは誰よりも、神裂自身が理解している。

「理解していなければ、剣を振るうに値せず——そうでしょう？　天使の如きもの」

投げかけるように、神裂は刀を構える“七天七刀”、二メートルを超える神裂の盾。

音速、いや、光速にすら迫ろうかという速度で、両者が激突する。黄金は片手で、神裂は刀で、横に振るわれたそれは弧を沿って、静止している。

静寂は一瞬、硬直もまた、一瞬。

切り裂くのに力はいらず、一度絡めて、再び盾に振るう。金色の

少女は後ろに飛び降りるように下がり、対応する黄金の碇にもた何かをぶつけてくる。

丁度体よく拮抗した。

神裂の刃と、黄金の一閃が、ぴたり同一直線に交わる。

押し勝ったのは当然、黄金だ。

聖人と天使では、その『力』に圧倒の差がある。

それでも神裂は一步下がり、刀を振るう、一閃を持って、一度下がり、改めて踏み込みを持って。黄金はそれを何もせずに受け止める。しかしそれでも、十分だった。

こがねは軋むことすらせずに拮抗する。神裂はそれを知ってなお、もう一閃咆哮した。

激突、しかし光すら上げることなく、神裂は押し返された。衝撃によって20mバウンドする。

一回転、しかし二回転目には着地、引きずられるようにすべり、やがて停止する。大分放れていたはずだったが、風斬の近くまで着てしまっていた。

「ッ!？」

それによってあがる悲鳴のような息を呑む音、それを無視して神裂は射出する。

一步、二歩目、まばゆい球体が襲い掛かる。有無を言わさぬ光速に、神裂は対応しようとするが、不意に感じた悪寒、それにしたがって横にそれる。

間一髪、黄金のそれは果たして通り過ぎていった。

攻守交替、と行きたかったが残念ながらまだ遠いようで、一喝、轟音が縦から縦へ、神裂へ伸びてくる。活断とでも呼ぶべきそれは、受け流されるように神裂の刃に流され、阻まれた。

返しざま、神裂は前へでる。

射出される砲弾のように伸びていくそれは、黄金の少女によって答えられる。両腕から放たれる光速以上の超速。音を超えて接近した神裂の一薙ぎを難なく往なし、更には追撃を仕掛けてきたのだ。

一度停滞し、何とか攻撃を受けきったものの、次はない。

態勢が崩れたところを狙われ、神裂は何とか――無様に転がる形で飛びのいた。

右か左か、それは神裂の命の分岐点になった。

続けて放たれた斜めの一閃が、神裂の丁度反対側を打ち抜いたのだ。もし逆にうごいていのであれば、神裂に次はない。

とはいえ、神裂はまだ立っている。偶然ながら、これは二分の一で元から得られるチャンスなのだ。神裂は態勢を整えんとすぐさま射出した。

弾丸、砲弾、どちらが正しいかと問われれば、どちらも、というのが正しいだろう。

一気に詰め寄ると思いきり切り込んで、途中で止まったのを確かめると黄金の少女をけって後ろに下がった。

（やはり、無理ですか――ならば）

神裂の空気が変わる。一瞬の間が、同時に開いた。

その後、攻撃に移る。更に横から伸びる刃のようなそれを飛び上がり無視して、付けて放たれた先ほどと同じ形状の“碇”。

それは空中にいる回避のしようがない神裂を、その放たれた横薙ぎごとのみこみ――

はせず、ガガギィ！！　という鈍い音と共に神裂に断ち切られた。

一瞬、意志ある『力』はそれにひるんだようで、たじろぐ。そこへもう一閃、

「教えて差し上げましょう。これが“聖人”神裂火織の本領」

溜め。

「唯閃です！」

一刀両断、切り裂いた。

自身に向け伸びた黄金の帯を右手で払いながら、上条は危機感を募らせる。続けざまの帯、左右に伸びた一つ、右側の帯をなぎ払いながら、上条はそれを脱する。

拒むようなそれは偶発的なものだ。

不死は全てを拒むように帯を流し続け、それによって“防衛”が成り立っていた。

前へ進もうにも二本から三本、大挙して押し寄せてくる帯に上条は右手をふるってなぎ払うしかない。

そう、上条は帯を右手でつかみ投げ捨てているのだ。

（右手で消しきれない。それほど強力なことかよ）

息を吞むも、それ以上のことは何もできない。

薙ぎはらった帯の後を追うように再び幾重もの黄金色が喰いかかって来る。両手、両足、思いのほか隙間を開けて狙ったかのようにピンポイントで打ち抜いてくる。

それを足の位置を変え、右手をタイミングよく薙ぐ。すぐに次が襲い掛かってくるだろうが、とりあえずはコレでいい。

（とにかく、今は前にすすまねえと、あんまりここに長いもしたくないしな）

何かの事故で風斬がやられてしまっただけは元も子もない、自分は風斬を救うためにここに来たのだ。——たとえ致命傷を負おうが風斬ならば再生する。そんな事はわかっている。

だが、傷つけたくは無かった。風斬をこれ以上、地獄へ向かわせたくは——無かった。

続いて、上条に至る帯の一つをなぎ払い、そこでやっと一步踏み出す。黄金の不死まではまだ長い、百は歩数が必要だろうし、これから如何によっては戻ってしまうこともあるのだ。

（だけど、それは止まる理由にはならねえよな）

もう一步、踏み出そうとして帯が弧を描き振るわれる。あわてて体を落として、更に突き刺さるように襲い掛かってくる低空の一撃をかわすため、大きく後ろに跳んだ。

着地、と同時に遠ざかった分を取り戻す為に一気に踏み込む、途中、空をなでる帯に襲い掛かれたものの、回転しながらもぐりこむように回避し、更に踏み込む、それで飛び退る前よりも距離を稼いだ。

しかしそこまでが限界。そこで一気に現れた無数の黄金、上段に脳天と顔を平等にえぐるように二つ、中弾に星座のようにまばらな星屑が四つ、下段に両足をピンポイントで射抜くものが二つ。

（いや、そもそもコレは止まる理由じゃない——）

体を落とし、反らし、組み換え、まず上段の二つを範囲から反らす。続いて下段を先ほどの両手両足のときと同じく場所を変えて対処して、最後に体を二つに分けるように反らし、半分を回避する。

残りは絡めとり、投げ捨てる。これで大群は整理することができた。

だがまだ偶発的な暴走は止まらない。

故に上条は右手を振るう。

「これは——前に進む理由だ！」

宣言、同時に踏み込んで、なぎ払う。横一直線、都合よく帯は塊流れていった。同時に一步と、何とか踏み込む。

一步ではない、二歩、二歩でとまる、だがそれでも三歩。

上条は何度でも後ろに下がる、体を横にして、反らして、半歩下がって又前進する。

「だったら進まなくちゃなあ！　今まで俺が怠慢だった分——あいつに、何もしてやれなかった分、絶対に進まなくちゃいけないんだよな！　俺に、俺が、何もできなかった分——やらなくちゃいけないんだよ！」

他人に向ける意思は言わば権利だ。こうしたい、だったらすればいい、有限実行、しかしそれは不実行でもなんら問題はない。

他人は他人、たしかにその通りだろう。上条のやっていることも所詮は偽善でしかない。

それは上条だってわかっている。『フォックスワード偽善使い』と、だから上条はそう名乗ったのだ。何処にでも存在する、善だとか悪だとか、そん

なものは関係ない、上条の赴くまま、誰かを助けたい、それが偽善だと、上条は思う。

人の為の善、偽者とは確かにそうだろうだが、誰かに向けるものは、誰かの為、偽であることなのだ。

だから上条は幻想を殺す。ひとをすくつ

そしてだからこそ、今上条がやっていることは偽善ではない。自分のための善、それは間違いなく本物だ。誰かの笑顔、風斬の笑顔を守り、自分自身もまた守る。それはまさしく本物。

多分――

『笑ってるほうが、風斬はかわいいぞ』

風斬が笑い。

『じゃあ、こう、ですか？ ”また会いましょう”』

上条も笑う。

（正義ってのは、自分自身に向けて笑うことなんだ！）

上条にとって風斬は自分自身、風斬にとっては、わからない。だけれども、好きだといってくれたのは間違いではない。

だったら、正義の味方になってもいいではないか。

誰かを救う——自分を救う、それは上条にとっては、なんら可笑しくはないことであり、少しだけ珍しい、上条の本心であった。

第二章 5 (後書き)

というわけで説明↓前哨戦の流れ。
ボス戦はもうちょっとだけ続くんじゃない。

第二章 6

6

爆発力を最大限に利用された砲弾、破壊のベクトルは必殺にまで到達し、更にはそれが連なり、魔女狩りの王を貫いていく。インケンティウス

まず半分がえぐられ、それを再構築しながら再び前進、しかしそれが終わる前に、残りの半分もえぐられ、消滅する。

そこから暫くは無音、その数秒後には再構成された。

（今の所強引な突破で大分進んでいるね、今の所三分の二は進んだといったところか、あいつらはあくまで現代の知識でのみ抵抗している。それが“今の全世界の知識”としては正しいのだろうが、好都合だね）

ここまでは順調、しかしそれでももう少し進めば抵抗は激しくなるだろう。ステイルの知識が何処まで対抗できるかは知らないが、恐らく増援はある。

恐らくそろそろか——今回何度目かの、もはや覚えていられない特攻回数を向かえる魔女狩りの王、その数歩後には駆逐される様子を眺めながらステイルは判断をつける。

（本来なら、最初に再生された時に増援をだすべきはずなのに、こいつらは今の今まで渋っている——まだ余裕だということなのかかな？）

だとしたらなめられたものだ。憤りと呆れの混じった嘆息をステイルは吐く、大分遠くへ小さくなった魔女狩りの王が再び消滅する。

確かもう五十は超えただろうか、大体瞬殺されていたから、もう数える気も起きない。ステイル自身は進むことなく、安全圏でそれを眺めるだけだ。

さすがに前方向にしか盾がないのに生身で突っ込んだら三秒で蜂の巣である。蜃気楼は使うだけ、魔力とルーンの無駄にしかならないので一回しかやっていない。

（思いのほか時間が掛かっているかな？ あの馬鹿の方は大丈夫だろうが、神裂の方は相当な高速戦闘だろう、間に合うかな？）

『不死』の方はこのこと対して変わらないだろう、抵抗が必然か偶然かの違い、更には無理やりごり押しの特攻ができるコチラと生身である以上身長にならざるを得ない向こうでは、距離はコチラが圧倒的に遠いものの、ほとんど必要時間は同じだろう。

あの馬鹿——上条がしくじらない限り、ステイルに対してなんらかのイレギュラーが向けられない限り、ここ二つは問題ない。

だが問題は神裂だ。

神裂と『力』は間違はなく一秒が一時間になる世界で戦っている。そんな戦いに対して、ステイルのように一秒が一瞬になってしまう世界の戦いが、間に合うことができるのだろうか。

上条は必死だ、築かないだろう。

だがステイルは違う、どうしても考えてしまう、間に合わないのではないか、そうやってなやんでしまう。

マデナ
今現在、ほかと違い自分が優位だから気づける悩み、この大いなる術は同時に倒さなければいけない。

“同時”の受付時間はいつまでなのだろう。

正直やってみなければ輪からないだろう、黄金練成がこういった意識下での暴走を行うことは知られているが、それが実際に行われ

たわけではないので、受付時間など、細かいところは推測でしかない。

結論、ステイルは祈るしかないのだ。

そしてただ進むだけの魔女狩りの王と知識の戦い、それが動いた。

黄金の、人形のような戦士が浮かび上がったのだ。

神裂は剣閃を走らせる。

もはや神裂の一撃は比喻でも何でもなく、閃光と化していた。そしてそれが神裂の聖人たる所以でもある。速攻によって切り伏せる、一撃必殺唯一の閃光。

迷うことすらせずにただ切り伏せる。切るだけならば迷わない。恐らくそれが神裂という人間だろう。

「ハアッ！」

目の前の少女、黄金によって包まれた神裂のよく知るシスターに向けて、なんらためらい無く切り込めるのは、そういったことが一因としてあるのだろう。

もちろんそれだけではないだろうが。

黄金の『力』はその神裂の一撃を多少の混乱と共に回避した。その一撃は先ほどの攻撃とは確実に全てが違った。速度、威力、そして勢い、何もかもが先ほどとは比べることすらおがましい。いやそも、そうやった比べるとという考えすら、及ばない。

そして次の一撃、もはや止まって見えた。というのは間違いではないだろう。本来の速度で襲う神裂の一撃、回避はたやすかった。

神裂の最強は“見えない”のだ。故になれることはないだろうが、それでも“見える”一撃に非常に余裕が持てる。黄金に意思のような意思はない、だが人間らしい戦闘思考で、黄金はそう判断した。

神裂と黄金、お互いがお互い、踏み込みと退きを何度も何度も度も繰り返しながら刀とがねをひねりつぶしていった。

斜めに振るわれる抜き身のままの一撃を、黄金が片手で受け止め、それに力を込めようとするやと放され、刀と神裂は一回転した。

隙といえば隙だが、それが確実にヒットする前に、神裂の一撃が間に合いそうだった。

仕方なし、と黄金の少女は一步下がり、範囲から抜け出る。

おおよそ数歩分を一気に浮遊してわたり距離をとる。黄金の少女と、同じ程度の背丈が二人分、神裂と少女にできた、一時の間合い。時間稼ぎにすらならず、一秒すらたたなかつただろう。

再び神裂が軸足を踏み込んで切りかかる。真正面からの一撃。そしてそれと同時に、少し早くに少女の黄金が、斜めを滑るように現出した。

「ハアッ！」

呼吸は切り替えず、しかしありったけでもって切り込む、弾き返すように神裂の一撃が、襲い掛かる横線を飛ばした。

驚愕のように揺れる少女に、それが目的だと肉薄する神裂、一閃、先ほどと同じく、我武者羅にして少女を切り裂き、そして二閃、揺れながら元の形をとり続ける無傷の少女に、呼吸を切り替えて襲い掛かる。

それは雰囲気すらも変わり、“それ”が狙いであることを如実に表していた。

ぷつりと、あたりの全てが消え去り、変わりに神裂の覇気が全て

を切り裂こうと、飲み込もうとしてくる。それを黄金の少女はまざいと判断したか、大きく下がる。

相当の全速で、一気に下がり神裂の一閃を牽制する。

「……大いなる術はいわゆる三位一体トリニティに当たります。本来三位一体は父と子と聖神が一体であるという十字教の中心教義です。一部では認められていないこともあります。天草式十字凄教、イギリス清教など、ほぼ全てがこれを軸としているといっても過言ではありません」

つまり、と神裂は遠のく少女へ向けて。

「三つ、『不死』『知識』……そして『力』これら全てが相乗され、大いなる術は天使と同等の力を得るわけです。そう」

純然たる神速で切りかかる。

その威力は常道における神裂の威力と変わらず、それでも追いつかれることを想定していなかった黄金の少女はその一撃を何のガードも、何の準備もなしに位、怯む。

「何度でも起き上がる『不死』、どんな物にも勝る量を誇る『知識』、それがなければ『力』など、たんなる力持ちの聖人と、変わりはないですよ」

そこへ、神裂の本命、唯閃が襲い掛かった。

上条は少しだけ不幸で、少しだけ幸せな、何処にでもいる普通の少年である。

別に比喻でもなんでもなく、少なくとも今の上条はそういった存

在だ。世の中には不幸があるし、それを上条はよく知っている。しにかけたこともある。けれど、今は違う。

今は――ただ一人の少女に恋をするだけの、ちっぽけな子供なのだ。

間違いはない。

風斬氷華という存在に、いわば一目ぼれのように惹かれて、それは笑顔が原因だ。だが何故風斬だったのかは判らない。あの時は不幸だったが、いつもの事だ、慰めに惹かれるわけがない。だったら上条にとって――風斬とはなんだったのか。

黄金に右手が振るわれる。

二重三重の帯は、一つで無く二つで無く、ありとあらゆる箇所襲い掛かる。それを屈み、反らし、曲がりながら上条はすすんでいく。

立ち止まり、一歩進み、二歩下がって、立ち止まる。その直ぐ後に、四歩進んだ。

遠い。

『不死』が遠い。

しあわせが遠い。

風斬氷華が遠い。

一つだけではなく、二つでもなく、きっかり三つ。伸びてくる帯はそれだけだ。顔を貫くような下からの角度、腹部

を貫くような上からの角度。そして下方。

上条は一步踏み込んでしゃがみ込み、下方を右手で払って回避した。

止まらない。

両手へ向け、ふるわれるように横から伸びてくるそれを、立ち上がった上条は一つに絞る。はじけ飛ぶような豪快で豪奢な色がね色を片方掴み、払い、前進する。

なぎ払うようにそれは、左右合わせると挟み込むようで当然迫ってくる。ほかにも数個、上条の周りを好き勝手動きまわっていた。それは背景のようなもので、上条の意識へは浮かび上がってこない。

どれも同じ、そう、どれも――結局上条は、反対側のそれもまた右手で対処して、進むことにした。

止まらない。

切り裂くように、縦から縦へ、一直線に進んでくるそれと、きれいに十字を描く一本の帯。

上条が立つ中央で交差し、上条を黄金に返す一撃だ。体をほかへ向ければ当然そこにも帯がある。横に跳べばなで斬りにされ、縦に転がれば横から激突される。

今この場所に、上条が立っていること自体奇跡のような空間でのことなのだ。

ならばどうするか、一瞬だけ上条は迷い、そして後ろに下がることを選択する。

右手を前にのぼしながら一步下がり、黄金を交差する中央で、一気に受け止めてしまう。しばらく黄金は右手に食らいつき、やがて消えていく。

ぴりりと、処理が強引だったために右手が焼ける感覚を覚える。若干の錯覚も合わさって、上条は何度か右手を握り、振り払うよう

に回しながら開くと、再び進みだす。

無理に右手を使うのがまずいというのは分かっているが、やらな
いわけにもいかない。

止まらない。

とまれなかった。

上条当麻は、不思議と止まろうとはできない。

そういう意思すら、彼は振り払って、絶望の幻想の中で、それを
殺せる自分自身で持って、彼は――

黄金の人形は、黄金さえなければ現代の迷彩服を着た兵士であっ
ただろう。個性のないそのヘルメットを被った兵士はライフルを構
え、腰には物理的な眺めのナイフが飾り程度についている。恐らく
は学園都市製、その威力がどれほどかは今の所は知れないが、それ
でももしかしたら、魔女狩りの王を一度や二度吹き飛ばせるかもし
れない。

とはいえ兵士の目的はそれではないだろう。

（コチラと同じ、蘇生と数任せの特攻……か、少しつらくなるかな
？ これは）

魔力の心配をしたほうがいいだろうか……少し考えて打ち切る。
そんな事はない、ステイルはその程度のことと魔力を枯渇させ
るほど、単純な魔力の洗練を行ってきたわけではない。

血の滲む、比喻ではなく文字通り命すら削り取るような研磨のす
え、ステイルはここに在るのだ。

（違いがあるとすれば、プライドだよ、錬金術師――貴様と僕では、
持ちうる覚悟の“核”が違う）

格ではなく、核。

そのプライドと、貴意の高さは錬金術師、アウレオルスⅡイザードが最もであろう。何せ“世界”すら作り上げてしまうほどだ。

自分個人で完結してしまうステイルⅡマグヌスとは、存在からして何もかもが違う。

だが、核は間違いなく、ステイルの方が、この状況は適している。

たとえば、アウレオルスⅡイザード。

彼は世界すら敵に回し、世界すら掌握し、インデックスを“救いを与えよう”とした。独善的といえはその通り、彼はまさしく自分のためにインデックスを救おうとしたのだ。

正義とは自分自身のためにあるもの、彼もまた、一つの正義の形を現したに過ぎない。

たとえば、上条当麻。

彼は失敗を否定し同情と哀れみでもってインデックスを“救いという名の手綱”で引き上げた。偽善的といえそれは最適解だ。上条は自身の偽善と、助けを求める声を頼りに、右手を伸ばすのだ。

正義も、信念も何も関係なく、ただ救おうとして、もし絶望の中に居るのなら、たとえ敵だろうと引きずり上げる。

そして――ステイルⅡマグヌス。

彼は幸せを与えようとして、しかし自身が幸せになり、インデックスの“幸せを守ろう”とした。彼は独善でも偽善でもなんでもなく盾になったのだ。

ほかの二人とは一線を描き、まったく別の答え、同じ状況にありながら、似通った答えをだした二人とは明らかに違う、正反対の別解。

共にいるのではなく、前に立ちただかる。絶対の、防波堤となる。

つまり、ステイルとは、すべからく魔術師であった。

第二章 7

7

左手を引き、片足を振り回し、体を反らして右手を伸ばす。

それだけではない、上条はもう一步踏み込むと、目の前に迫っていた帯の群れを瞬く間になぎ払った。一つ絡みとり、二つ巻き込んで、三つ引っ掛けていく。

うまい具合に、上条の目の前が一掃された。

しかし上条は一歩行動にテンポをおく、ためらうような上条の後ろから、黄金の帯が上条の真横を通り過ぎて言った。

一瞬の違和感がぬぐえたのを感じ、上条は再び踏み込む。

黄金が伸び、払い、そして踏み込んでいく、何度も何度もそんな事を繰り返した。少しずつ上条は前へ進み、それも大分という量になってきた。

それにつれ、襲い掛かってくる黄金の本数も大分増えてきた……というよりも、ただ単調に伸びてくるだけだった帯が絡み合うように振り回されたり、こうやって後ろから伸びてくることも多くなった。

一步、二歩、ステップを踏み、回転する帯と勅撰する帯を、すり抜けるように駆け抜けて、右手で帯を払いつつ、さらに迫る群体を纏めて払った右手で返す。

二度、三度、再びを駆けて襲い掛かるそれを、とうとうとうと、避け払う。二重螺旋の両方向、あわてることなく上条はそれをぶつけさせた。そのまま右手で解きほぐす。

偶然か、必然か、あるいはなんだろう。

回り、踊り、そして振るう、止まらない、理由がない、訳がない。
上条当麻には一つしかない。

願え、願う一つだけ、唸るような高速、ギリギリ避けて右手を振るう。一度、続けて踏んでもう一度。止まらない。一步、一步。

一つ、一つ、一つ。

どれも変わらない。

だが、どれも止められない。

「おおおおお！」

唸るような叫び声、響き渡るのは世界の両面だ。

届かないことを知らない。度々いていることを確信している。

永遠ではなかった。

刹那ではあった。

上条と、風斬と――

こうして考える。

――だったら、上条にとって風斬とはなんだったのか。

原因と呼ぶべきか、上条が風斬を好きになったのは良くも悪くも、
自覚的にも無自覚的にも笑顔が根底にあるだろう。

ハジメテであったとき、上条は笑顔を素直にかわいいと思った。

そのときから恐らく、上条は風斬を好いていたし、だから珍しく
上条は自身の呼び方を親しくしてほしいと頼んだのだろう。ふと自
然に、もれるように。

そして上条は、どうしようもなくここにいる。
偶然ではなく必然でもなく、上条自身の、意思として。――運命
のようなそれは、決して運命でもなく。

思う。

運命というのは、確かにある。上条が風斬と出会ったように、上
条と風斬が会わなかったかもしれないように、間違いなく運命と
いうものがある。

目の前には、運命がある。

（なあ、そうだよな、黄金^{うんめい}。てめえは俺に対して何故救わなかった
って言ったよな）

右手を伸ばす。

届かない、だがそれでも、言葉は届かせる。

全てを拒否するような黄金の暴走。実際その通りだろう。『不死』
とは、そう言うものだ。たとえば目の前で最も大切な人が死んでし
まいそうでも、『不死』はそれを否定してしまう。

あくまで、自分だけ。

他者を他者がどれだけ殺し合い、奪い合おうとも、『不死』だけ
は残る。

知識が消えても、力が減んで、不死だけは、呆然と立ち尽くす。

上条にとってもっとも遠いところにあるものだ。

何せ風斬氷華という存在は、たとえば化物だとしても間違いなくそ
こにいるのだから。――化け物だろうと、人間だろうと、上条にと
っては、風斬がただそこにいる、それだけでいいのだから。

（少し気づくのが遅かったってのもある。俺にとって氷華がどれほどの存在か、正しく認識できてなかったというのはある。だけどな——）

触れてしまえば消えてしまう。

そんな事はわかってる。だから上条は、救える手を、伸ばせない。

（やっぱり、あの笑顔は反則だったんだよ、理屈じゃなく、アレじや絶対救わせてくれない）

救えたことが満足なのだと、それだけでもう十分なのだと言風斬は、笑っていたのだ。後のことも、残すことすら考えず、風斬氷華は笑っていた。

それが原因、上条が自覚した、最大の理由。

つまり上条は、その笑顔に見惚れてしまったのだ。

結局の所、『力』は単なる力でしかない。たとえば、世界を崩壊させる術式があって、それを使用するに足る魔力が存在したとしても、それを実行するための知識が無くては意味がない。

であるとするば魔力は宝の持ち腐れに成り果てる。

この場合本来ならば三位一体としての力を使っても問題はないのだが、上条、ステイル、そして神裂がそれぞれ相性の問題はあるも力と戦っているため、実質、一対一が三つではなく三対三が一つの戦いをしているのだ。

そも、こうして三対三をはじめたのは大いなる術の方なのだが、

とかく。

神裂の唯閃によって、黄金の少女に風穴が開く。それは一つの突破口にも見え、それへ向け、神裂は更に追撃する。

しかし少女はその風穴のような疵痕を修復しつつ、二三度ブレ、攻撃を仕掛けてくる。それはもはや防御となんら変わらない一撃で、神裂はそれに阻まれることになる。

「くっ……！」

二度三度、息を吐き出して、元の状態へ持っていく。同時に黄金の方も不安定になっていた存在を固定させて、再びあの子と同じ姿をとる。

だがそれに揺れるほど、今の神裂はぶれてはいない。

それすらも救ってみせる。

少なくともその程度の気概を、今、彼女は持ち合わせていた。

そして、そこまでが一種の休憩時間、間合いを詰める、息を殺しながら待つしんとした空間と空間。時間と時間の刹那。

それが一気に冷え切って、再び神裂の刀身がその身を削る。神裂の全力、一閃——いや、同等の一閃を含めた交互のそれが、中央で激突する。

黄金のそれは、先ほどの広がるような防御と違い、今度は貫くような攻撃。

耳を切り破るような轟音が、グゴウツ！！とあたりに襲い掛かった。

ビュウウ！と衝撃の余波が跳ね、何もない黄金野原に散らばる。もしや別の戦場にも響いただろうか——いや、さすがにそれはない

だろう。

「ハアッ！」

神裂が吼えた。

虎穴にいらずんば虎子を得ず。

それが、神裂のような獅子であるならばなおさらだ。

一気に攻撃を払い、続けざまに一閃、今度は滑るような速度で斜めに切りかかる。少女はそれを片手で受け止めた。

『力』には人間のように力を込めるべき場所のようなものはない。全体に力があり、それを何処へでもまわすことができる。防御に関しては、先ほどのように不意を疲れない限りそこの天使とはそれほど変わらない。

実力に関しては、単体であれば『力』は神裂と拮抗する程度、しかしそれでもその力の運用方法が人間とは違うのだ。

どうしても限界が来る人間は、力をセーブしなければいけない。神裂が『唯閃』を要所所でランプの札のように切ってきたようにたとえ同等以上の力でも、セーブしなければいけない。

しかし『力』にはそれがない。百パーセントの力を百パーセントのままに使用できる。

これだけを見れば、神裂は『力』には絶対の勝ち目などない。

だが、神裂は『力』の一撃を切り返している。

これはつまりこういうことだ。

『力』には技術がない。

『知識』がなくてはダメなのだ。あくまで『力』は本体である『

知識』や『不死』へたどり着くことを阻止する外装にすぎない。

それをこのようにうまく分断されては、『力』は技術もなにもなく、神裂と戦うほかない。

それが神裂と『力』の拮抗。

両者は再び、剣戟を押し返し、奔らせた。

黄金の戦士が魔女狩りの王にまわり付く、そのまま崩れ去るのを耐え、何とか切り込もうと剣を片手で引き離し、そしてそこで魔女狩りの王に叩きつけられる。

更に二人襲い掛かるも、魔女狩りの王の炎にいとまやすく、打ち抜かれ、焼き尽くされた。

だがそれでも、遠めから襲い掛かる散弾によって一度、魔女狩りの王は散らされた。

それも束の間で、再び起き上がる精鋭と、更に攻勢を極める兵士たち、ライフルが飛び交い不屈の最強たる魔女狩りの王をえぐっていく。

しかし砲弾とは違い、決定打にはならない。ただし砲弾とは違い、有効な足止めにはなった。

一歩進もうにも兵士が壁となり立ちふさがる。

振り払おうにもライフルが王の行動を狭める。

そして力を込め、叩き伏せようとしたところを砲丸によって霧散させられるのだ。

そんな事をされては進めない。

だれよりも、ステイル自身が一步も進むことはできなかった。それはつまり、ステイルではインデックスの元にたどり着けないと、言外に言われているのだ。

それが“前任”であるアウレオルスから、宣告されているのだ。無様だとあざ笑えたらどんなに良かっただろう。

考える。

（このままじゃあダメだ。僕はこのままじゃあ、守れない）

ならば自分自身に一体どれほどの意味があるといえよう、存在として、根源として、信念として、ステイルⅡマグヌスに、一体どれだけの価値があるというのだろうか。

答えは簡単だ。

「僕は、たとえば死んだとしても君を守る。それは、それは――！」

ステイルの絶叫、魔女狩りの王がついに、兵士のライフルで崩れ落ちた。

もっと単純なものだと思っていた。

もっと確かなものだと思っていた。

ステイルⅡマグヌスにとって、世界は単純で確かなもので、あったはずなのだ。単純な、少年としてのステイル、彼女に出会うまで、一体ステイルはどれほど確かでいられただろう。

世界はとてもとても、反吐が出るほど単純だった。

世界はすぐくすぐく、声が出ないほど不確かだった。

救おうとすれば救おうとするほど、欲しようとするれば欲しようとするほど、守ろうとすれば守ろうとするほど、ステイルは深みに嵌っていく。

インデックスという、ただ一人の少女のため、自分は守り、生きて死ぬ。

そう決めるのに、一体どれほどの時が重なっただろう。刹那だったはずだ。

そう、そして

それなのに、

死すらも、自分の希望すらも賭けて、それなのにステイルはいまだにたどり着けない。

「っ！」

魔女狩りの王が“ライフル”によって消し飛んだ。必殺の弾道ではなく、ほんの極単純な、人の力。そしてそれは続けて、砲弾が放たれ、再生した魔女狩りの王が、一瞬にして消え去ったことを意味する。

ここまでではないだろうと、最初は思った。

突っ込んで、最悪ではないと判断したはずだった。

時間がない。

この状況を打開しなければ守れない。

（ルーンの数はまだ百分の一も減っていない、そもそも、今はそんな事よりも、何とかしなければならぬことがある）

完全にひっくり返されてしまったといえるだろう。状況としては魔女狩りの王はほぼ一箇所に留まり、ひたすら殲滅され続けている、向こうもこちらへの対処法が殲滅しかない以上それで揺らぐ王ではないが、それではどうしても滞ってしまう。そこでステイルはまだ微妙に残っているルーンを取り出す。

数は微妙に三桁に届かない程度。

まあ、魔女狩りの王に使用されるルーンと別物で、これは『k s（松明と太陽）』である。この場合炎剣と太陽的な爆発で、それぞれステイルのメインウェポンを形どっている。

（コレを使って状況の打開をすることはできる。だがその場合僕自身危険になりかねないし、それを防ごうとするとどうしても僕自身の攻撃がおろそかに、不確かになる。それは絶対に避けたい）

避けなければいけない。

だがほかに、方法はない。この方法が唯一の打開策、しかしそれですら問題はある。そもそも防御に意識を割くと攻撃が不確かになるのは、距離をとって回避することで、標的があやふやになるのである。

魔女狩りの王自身に当てるのは問題なくても、ほかのものにまったく当たらないことだってある。そも、これが成功して、魔女狩りの王が進み、遠くへ行けばそれでも今の場所にいたとしても距離をとったときと変わらなくなる。

例えばはずしても攪乱にはなるだろうか……いや、確かに相手を惑

わすことはできるだろうが、それもほんの時間稼ぎだろう。

その間に前に進むうにも砲弾で対処されるのが落ちだ。

（だったらもう一つ、もう一つ何かないか？ たえば蜃気楼の僕を動かして周る……いや、それでできることもここからの遠距離砲撃と同じか——なら）

そして、だから気づかなかった。

ステイルは自身の意識を自分にだけ向けていた。だから遠く、『知識』を表す書物よりももっと奥から、ステルスし、魔術師を狙うスナイパーを、

それは今の今まで狙い続けてきた『知識』側のチェックメイトだ。

予兆も予感も何もない。

思考しているのはステイルだけだった。そんな中で、思考を動かせるのはただ一人。

『知識』が放つ一砲は、すぐさまステイルを貫いた。

どれだけ遠くとも必殺を保つスナイパーのマグナム、ステイルに命は——

神裂と『力』の戦闘は拮抗している。

どちらが勝っても可笑しくはないしどちらが負けても疑問はない。不条理でもなんでもなくこれは全うな決闘、だからこそ、神裂は自身の全力を振るえていた。

両者は交錯し、一度距離をとる、その後再び接近し、二度三度打ち合い、神裂が大きく横へ跳ぶ。底へかかる追撃の黄金、見慣れて

はいないが何となく感覚的に“わかってきた”黄金の礎、一度ではなく二度目へ、襲い掛かる攻撃を、軸足を回転させ、遠心力をもつて激突する。

少しばかり神裂が切り込んで、それでもやはり力では足りないか、そこで押され始める。それを神裂はうまく後ろに流し、自分は回転する様に体を回し、飛び上がる。

まるで棒高跳びの選手のように、華麗に、軽々と神裂は切りかかる。がしかし、上空からの一撃を黄金の少女は衝撃と共に弾き返した。

少しばかり遊びが過ぎたのだろう。実際速度は中々のものだが今までと比べるとあくびが出る。

それをわかった上で神裂は弾き飛ばされたのだ。思い切り飛んで、その後少しすると回転を始め、着地は完璧に決めて見せた。

茶番といえば茶番、しかし意味がないわけでもない。

神裂は笑み、そして深め、飛び出した。

何となくキラじゃないかと、昂騰した精神の中でどうでもよさげなことを考えながら。

体を落としてからの全力疾走、短距離を走りきることを目的とした様子で、神裂が呼吸を切り替えるのはその中でのことだった。

間違いなく速攻、紛れもなく神速。

それを黄金の方も感じ取ったか、今まで以上に『力』を集中させ、構える。

聖人、神裂火織の全力と、大いなる術を支える一つの化身が、全力を持って双方に答えた。

そこから、一気に火蓋が落ちる。

空間、三百六十度を縦横無尽に両者が掻き消える。

力を込める、といった表現は正しくない、“力をつぶしあう”。

もはやそれは戦闘ではなく、芸術だった。黄金の中、置き折散る火花と、それを先行する形で切り結ぶ両者。

速度と音と迅雷が、中央で爆発し、左方で激突し、右方で衝突する。

大きく振るった連撃、対抗してくるのが必然で、それは縦に対応して襲い掛かった。

一度、それは火花だろうか。黄金にも見えるそれは刹那のまま似たような黄金の中へ消えていった。それが瞬間、そしてこれからが永遠。

もはや光速ですら捉えられないと感じさせるような速度で、両者が動く、少女が下がり、神裂が追いかけた。速度はほぼ同速、一度きり結び、さらに跳んだのは神裂のほうだ。

数歩分、大またに距離をとり追撃する黄金のフックを切り込むように払い、自身は少女の内側へ滑り込む。ぎりぎりの場所から、巻き込むように神裂の一閃が放たれた。

ゴガギギッ！！ と耳を劈くような音と共に両者の中央にして際極端にて少女の片手と神裂の刀が激突する。

一瞬神裂は思考するも、もしもの場合を考え、そこは一気に降りぬいた。

どちらの選択も間違いではないが、ここで“アレ”を入れても次の一撃でしとめられるわけでも無し、ならばと弾かれるように下がる少女を神裂は追わなかった。

代わりにあまってしまった力を収めながら、飛び出していく。

轟音がした。号砲がした。業火が散った。

一瞬ではなく、一時、一時ではなく、刹那――

――何度きりあったことだろう。――『力』に限界は無く神裂には限界がある。それは人間という存在と、化物という存在の、根本からして決定していること。

当然先に疲れを見せるのは神裂のほうだ。

だが、勝負を優勢に、圧しているのは神裂のほうだ。

神裂とて自身が疲労し始めている解っている。

ならばどうすればよいか、話は簡単だ、それが支障をきたす前に叩き潰してしまえばいい。それは唯一にして絶対の方法。

あと少しで押し切れる。それを確信したとき、その瞬間は来た。

中央へ両者が舞い降りたときのことだった。黄金の少女は当たりを払うような無差別攻撃を、神裂のいる場所とは見当違いの場所にたたきつけたのだ。

それで理解する。

速度が――神裂が『力』を超えたのだ。

なれば後は速い、予定通り神裂は射出し、少女へと切りかかった。

『不死』の力は当たりを穿つように暴走を続けている。

あたりを破壊し、全てに絶望をもたらすそれはまるで廃棄されたゴミのように、それを吸い込むごみためのように、あたりを貪欲に、意思なく飲み込み続けている。

決して拡大しようとしているわけではない、決して全てを蹂躪し

たいというわけではない。

それは正しくない。

ただ、黄金の廃棄物が辺りへ、そして上条当麻がそのうちへ、八つ当たりを続けているだけなのだ。

伸びてくる帯の威力は上条の予感が正しければ必殺、不死が存在する以上、その周りには『死』がなくてはいけないからだ。――上条に、そんな判断はできないが、とかく。

世界はまるで彼を、そして黄金を飲み込もうかととどろき続けている。

身動きを封じるような鎖を描く、あたりに襲い掛かってくるそれはまさしく茨の棘だ。

人一人が立っているのがやつとなほどこか、いや、恐らく立っていることすら難しいだろう、存在することは困難だ。それを可能にするのは、上条のように絶え間なく伸び、消えていく黄金の帯を都合よく払えなくてはいけない。

つまり、本来ならば不可能という事だ。

あたりには自分自身、上条当麻と言う存在を真っ向から絡めとり、消し去るような光の群れ、背景ともはやほぼ同色の、背景そのもののそれを、上条はその速度と密度から何とか見分けていた。

自身に迫ってくるものを敏感に察知してそれを的確に回避、絡みとっていく。

絶え間などなく、たとえ一つの山を越えたとしても、その次に待つ大きな山があり、上条はそれを超えなくてはならない、一種のスパイラルのような、螺旋階段だ。

息を付く間など最初から用意されていない、立ち止まろうものな

ら、その瞬間に上条は黄金の中に埋もれ、消えてなくなる。

それでも、それだから上条は動く。

珍しく二歩踏み込んで、体を回転させながら踏み込み、反るように横一直線の上方を回避、あわせて真一文字、奥から伸びてくる帯を回避する。

さらに右手を構え、もう一步踏み込みながら態勢を元に戻す。

構えられた右腕が右手側の黄金を弾き飛ばした。弾き飛ばされたこがねは直角に折れ曲がり辺りに飛び散っていく。

それに、上条は意識すら向けない。

睨み付けるように前だけを見据えて、再び数歩分踏み込んだ。

先は長い、後は長かった。何度も何度も右手を振るう、一步二歩、その度に進んでいく、少しずつ少しずつ“何か”に近づいていく、上条にはそんな不気味な感触があった。

不思議なものではあるがそれは一つではない、三つ分――確かにそこに、歩きがした。

恐らくは『不死』と『知識』と『力』の三つ分なのだろう。不死の奥に、その核があるに違いない。コレは感覚というよりも勘のようなものだ。

そのためにも、まずは進む。

振り子のように左右襲い掛かってくる群れを上条は右手で全て纏めて強引に叩き落とす。こんじきとこんじきを叩き合わせたのだ。

両者は弾け、あたりへ飛び跳ねていく。それを見届ける間もなく、次もまた同じ動作をした。とはいえそれ以外にも迫ってくる黄金は幾重にもある、よって上条はその帯一つ一つを、辺りをなぎ払うように弾き飛ばした。

一瞬ではあるが、道ができる。

もはやあたりに隙間といえる隙間がなくなってきた今だからこそできる方法。大分進んだが、もはやここは人が立っていい場所ではない。

今までも大量の帯はあった。だが上条に向かってくるものは一度に多くても五つが限度だったのだ。それが一気に跳ね上がった。それによってこういった芸当も可能になったといえよう。

上条は、前を見て、黄金すらも利用して、一瞬の活路を切り開いた。

——まだ最奥は見えない、そもそもこの場所が端からは最奥に見えてしまう。根元ではないが、もはや目の前、ならば話は簡単だ。

そして活路の先端で、再び上条は希望を描く、大振りにたたきつけた黄金の道は思いのほか短く、そこを上条は走る。

届かない場所に、それは無かったのだ。

背景とまったく同じ黄金の壁が、バギッ！！という音と共に消し飛んだ。

第二章 7（後書き）

最初は全部5000文字の予定だったのに。

第二章 8

8

抜けた先は外とは又違う、気味の悪いような黄金だった。それは成金の悪徳商人が溜め込むような、ギラリと脂身の掛かった金貨。それは一種の目晦ましのようなものだったかもしれない、――ふっと湧き上がって、そして消えていく。

そしてそれが巻き戻るように消え、現れたのは一つの教会だった。狭くはない、上条はこういった知識には疎いが、恐らく相当な教会なのだろう、人が数百人、優に収まることができる。

そこはまさしく大聖堂、神に人が祈る場所。

そしてその中央には黄金の塊があった。『不死』はまさしくこれから伸びているのであろう、コレ自体が背景ですらある黄金の、全てを担っているのだらう。

つまり、

「おまえ自身が神だって言うのか？」

『不死』と『知識』と『力』、大いなる術が振るう強さの本体そのものではなく、『核』が収まるこの神殿において、それがあのだとすれば、上条はそれ以外に判断ができなかった。

だから上条は、怒りを抱くことをせず、ただ淡々と問いかける。

『違う』

否定したのは、その黄金の固まりだった。
その声を、上条は知っている。

「――！　アウ、レオルス……ッ！！」

『それは正しく無いな、少年、私はアウレオルスⅡイザードに内包された黄金練成の意思、確かにその意思、記憶、感情はアウレオルスⅡイザードのものと同一だ、だが私はあくまで黄金練成だ』

「んなことはどうでもいいだろ、俺がお前を殺しにきた、今はそれだけでいいはずだ」

『ああ、その通りだな、私とてそうやすやすとやられるわけには行かない――とでも答えておこうか？』

それが開始前の挨拶か、早々に両者――片方を者と表現するのに
はすこし無理があるが――は動き出す、さいしょに二面から上条に
襲い掛かってくる黄金の球体、上条はその片方をつかみ、投げつけ
る。

確認もせず投げ、当たったかどうかも確かめずにさらに前へ進む。
追いかけてくるかとも思ったがそう言うことはないらしい。もしくは
当たったか。

続けざま――と、いうよりもそれが本命だったのだろう、上条へ
向け幾つもの連弾が、カーテンのように並べられ、発射される。

一瞬あたりを嘗め回すように見渡した上条は、一点に意識を向け
るとすぐさま飛び出した。

体をできる限り隙間に対応させ、右手を振るいながらあたりを威嚇する。

それが過ぎ去ると、一気に前へ飛び出した。

距離はほんの数メートル、二度の砲撃の最中にも、上条はそれなりに前進している。そこまで進まれて、もはや遠距離戦では意味が無いと判断したか、アウレオルスの意味は上条を引き寄せる選択をする。

そして、近づいた上条に、もはや隙間すらなく、回避もまったく持って不可能な壁の一撃をぶつけた。

当然上条の右手がそれを防ぐ。

『やはり貴様には、直接的な死は無意味なのだろうな』

「かもしれないな」

両者は何の意味もない、冗談のような無駄口をはき捨てると、その勢いに力を込める。若干ながら自身の右手に掛かる負担を危惧する上条と、自身の思い描ける全力をぶつけたにもかかわらず消し飛ばない存在にあせりすら覚えるアウレオルス。

互いに、全力を込め、打ち勝ったのは当然ながら上条だった。

若干の痺れを覚える右手を開閉しながら、残り数mの空間を駆け抜ける。一息に、次をつなげさせる暇すらなく、上条は自身の最後の敵へと、右手をかざした。

「その弾丸に命無し（LWB）」

——瞬きの刹那にして、ステイルの意識無く、消え去るはずだった。

気が付けば、ステイルは自身のうちを弾丸がえぐっているのに気が付いた。一瞬のことですこしだけ動揺する。だが直ぐにそれを見舞いと断じると前に意識を向け、凍りついた。

ステイルは何一つ傷を負っていなかった。

必殺を喰らってもなお、彼はなんら問題なく立っていた。立ち尽くしていた。

そして、それをなしたのは目の前の少女、そう、“少女”願っても願いきれない幸せを、やっとのことで手に入れたステイルの“親友”。

そして“初恋”の人。

「ふうん、この状況なら、黄金練成は私の詠唱下におけるんだね、やっておいてアレだけど、ちょっと意外かも」

白いシスター服に、そこから見える流れるような青髪と、欧米特有の白い肌。感心したように言いながら少女——禁書目録インデックスはステイルへ振り返った。

「始めまして、君の名前はなんていうのかな？ 私の名前はインデックス、よろしくなんだよ？」

「え——あ、え？」

困惑していた。

ここにインデックスがいること、それはそれで疑問だ。だがアウレオルスが意識を失ったこの状況ならばインデックスが起きてても可笑しくはないし、この異常な状況を、魔導図書館であるインデックスが察知できないわけも無く、たどり着いた彼女が自分の最も適した戦場へ赴くのも可笑しくはない。

だからここにインデックスがいる、というのは疑問ではない。

そうやって、冷静に考えるステイルの部分があった、冷静に考えなければ可笑しくなってしまうような、ステイル自身がいた。

だから疑問は別のもの、

つまりなぜインデックスがいるのか、では無く、何故インデックスはコチラへ名を聞いて、且つ笑っているのだろうか。

「ああ、もしかして自分が私を傷つけたことを気にしちゃってるのかな？ 大丈夫だよ、こうして生きているんだモノ、ひょうかと友達になれたんだモノ、そんな事は問題じゃないんだよ」

別にある、と少女は言う。

「私はね、怒ってるんだよ？ ひょうかに聞いた、君達が私を追いかけた理由、私が逃げ回ってた、その間私を追いかけていた本当の組織、そして君達の苦悩——色々聞いた」

だから怒ってるんだと、言う。

叫ぶ、泣き叫ぶように、懇願するように——！

「だって、何でなの？ 何で君達はつらい選択ばかりしちゃうの？

私を傷つけて、楽しい記憶にふたをして、それで君達は大丈夫なんだと言い聞かせちゃうの!？」

可笑しい、それは可笑しい。

そんなことでは幸せはだれもない。

「地獄へ私を送って、本当につらいのはいつも君達、つらいから、さびしいから、かなしいから、でもそれに蓋をしても、つらいことには相違ない。だったら――!」

だったら笑えばいい。

だったら泣けばいい。

かなしいと、さびしいと、つらいと。

そうすればインデックスは――

「私はずっと、幸せで、不幸でいられたのに!」

自分はまだ消えてしまう。

記憶が無くなれば、死んでしまうのと変わらない。

「私はとっても怒ってるんだよ? だって、私は君達を不幸にしてみようんだから」

笑顔で笑って、笑顔で泣いて。

ずっとずっと願っていただろう。しかし記憶はない、インデックスは何を思い、何を持って希望としていたか、それはずっとわからない。

裏切られたのかもしれないし、絶望したのかもしれない。それは

自分自身ですら判らない。

過去の“インデックス禁書目録”と、今の“インデックス”。どちらがどちらで、正しかったか。それすらもあいまいで、インデックスは願います。知らなくて。

それでも、これが不幸だと、インデックス走っていたから。

インデックスは手を伸ばす。

「私と一緒に地獄のそこまでついて行ってくれる？」

かつて、インデックスに手を伸ばした上条当麻を、拒絶した言葉。彼は言った、彼は誰かを救“得る”ヒーローだから『地獄の底から引きずり上げてやるしかない』、と。

そしてステイルは、その手を迷うことなく叩いて払った。

「馬鹿を、言わないでくれるかな？ 地獄なんて何処にもない。いか、僕の名はステイルⅡマグヌス」

迷うことなく、ステイルは救われた。救われて救って救われきった。

「インデックス。僕は君のために生きて――」

一つ息を吸う。

「生きる」

それから改めてステイルは手を伸ばし、インデックスはそれに応えた。

二人はそのまま、互いに引っ張り合うように並びあい、遠くに見える『知識』を見据えた。

「さあ、ここからが私が相手なんだよ、人類数百万の歴史のなかで、語り継がれてきた伝承に、たった一刻の世界一つが、たとえば夢でも適うかな？」

悠然と歩き出す。

そしてステイルの炎が忌まわしい『知識』を燃やしきるまで、新しい世界を開くまで、ただただ、過去と未来の全てに、インデックスの唱^{うた}だけが響いた。

——神裂の一撃が、唯閃が、再び黄金の少女を切り裂いた。黄金は形を失い、背景とほぼ似たような薄さにまで、一度は存在を落とした。

それを何とか持ち直させて対決、それでも動いたびに少女はぶれ

ている。

確信した、後一発でいい、それさえ当てれば勝てる……と。

だがそれを前にして、神裂の体が悲鳴を上げた。

後一撃、というところに来て、少しずつ距離をとる黄金が遠ざかっていく。速度は間合いを見極める一種の休憩時間のようなものでほとんど意味を成さず、追いつこうと思えば追いつけ、それが会戦の合図になる代物だ。

だが、それが非常に速く感じられた。

のっぺりと伸びるような時間が、距離と共に遠ざかっていく。

（これは……錯覚だ）

後一步、それが踏み出せるところまで来た。

踏み出さない理由は無かった。考えることすら必要ない。

それなのに、踏み出せない一步があった。

（これは……錯覚だ）

遠のいていく一步、飛び出せば、飛び出す必要すらなく届いてしまえる。

恐らく、黄金の少女もそれを待っているのだ。それを当然だと断じて向こうもまた次へ向け構えているのだ。

（これは……錯覚！）

神裂自身、それは解っているし、動かせるはずの力があることもわかっている。

だがそれでも動かないのは、恐らく神裂が救えなかったからだろう。誰に対してではなく、自分に対しての、まさしく錯覚だ。

——立ち上がる。

ギリギリの所で神裂は立ち上がる。一步踏み出して、そこから速攻を仕掛けた。動ける、と一部の安堵を描き、そして吹き飛ばされた。

それは——神裂が動かした力は唯閃を使用した高速ではなかった。

精々が『パルツイバル』と相対した際の最高速だ。

回転しながら、神裂自身それを理解する。

つまり、と。

(これも、錯覚だ！)

今もまた動かないことが確かな錯覚であったように、先ほどまでの殺陣も、錯覚だった。もはや神裂では黄金の少女に追いつけない。ならばここまで、

「もう、無理かもしれませんね」

一度たりとも切らなかつた札を切ろう。

絶望か、もしくは希望か、どちらにしろそれは——黄金の『力』の不意をつける。だからどうしたといえどそれを否定する選択肢はない。

だが、だからこそそれは意味がある。

(七閃——解放！)

自分にすら聞こえているのかいないのか、辺りの沈黙にすらかき消されてしまうような小声で、神裂は宣言する。これまでの戦闘に置いて、神裂が使わなかった鋼糸による戦法。

全てはこのための布石、ありとあらゆる場所にばら撒いた、刻みつけた魔術を解き放つ。

炎があった。

水があった。

風があった。

雷が会った。

乱雑とした混沌が、黄金の中で引き裂かれた。

その中を掻い潜って神裂が駆ける。自身から黄金めがけ、一直線。呼吸を整え、切り替え、補って、そして神裂は——

間に合わなかった。

ぎりぎりの所で、少女は振り向いた。周りではなく本命に、いや、本命でもなんでもない一つの攻撃に向けて、意識を切り替えたのだ。

「本来——」

一つの声。この空間の中で言葉を発せられる人間は限られる。
当然、上条やステイルではない、彼らは男だ。この声は十代後半の、少女の声。そしてそれは――神裂のものではなかった。

なれば、この場に存在し得るのは一人だけ。

「大いなる術、でしたっけ？ ……それは『知識』『力』『不死』を分断させる必要は無かったんです」

風斬氷華、AIMによって出来上がった、科学の化物。

「だって分裂したのは向こうじゃないですか。でも、本来はそんな必要ないでしょう？ だって三つの『存在』を合わせれば、大いなる術は無敵なんだから」

では何故か。

答えは考えてみれば簡単だ。――上条に一網打尽にされかねないという建前はあるだろう。実際無限の力を持つ大いなる術に生身の人間である方が一にも上条が勝てるわけがない。

ならば、その理由は簡単だ。

「倒してほしかったんでしよう？ インデックスちゃんに、だったらちょっとだけ任せてください。いま、終わらせますから」

刹那、風斬は黄金を輝かせると、『力』にすら察知できない速度で接近し、無造作に拳を放つ。

それは初心者らしい、大振りで見え見えのテレフォンパンチ、しかし回避はまったくといってできなかった。風斬の速度が、それを

させてくれなかった。

「……やっぱり」

少女は消え去る。風斬の初めての友達の姿をしたシルエットが、崩れ去っていった。その中で、風斬は先ほどの、今までの態度とはうって変わって、さびしそうな表情をした。

そして何かの音を聞いて振り返る。

——多少、体重を刀に預け、こちらへ歩いてくる、神裂がいた。

じり……と右手のこげるような感触を感じる。あまりにも巨大すぎる力に幻想殺しの処理が追いついていないのだ。何せこの黄金は大いなる術、天使とほぼ同等なる存在の、その『核』たるモノなのである。

ただでさえ『不死』を焦がすにも数秒を有したのだ、当然これもそれ以上の時間が掛かる。

その中で、黄金のそれは掻き消えていくように当たりに散っていき、逃げていくとも表現できるだろうか、上条の右手に当てられたそれは、洗剤から遠ざかる油の様だ。

あたりに散って、蛍の光のように消えていく。

『ぐ……う、やはり——やはり、その右手か！』

恨めしそうに、核が呻く、それしかできないのだろうか、さらにそれ以上の言葉はない。その言葉は、嘆く様でもあった。

「なあ、錬金術師、てめえはどうして救えなかったんだ？」

消え去ってゆく黄金へ、予断ならぬ意識をむけたまま、上条は問いかける。

『……なんだ、それは』

「解らないわけじゃねえだろ、錬金術師、てめえはインデックスをどうして救えなかったんだ？」

沈黙が降りる。そこに残るのは上条当麻が幻想をかき消す音だけ、後には、ただの意思しか残らない。抜け殻のようなそれしか。

『私は、すくいたかった。すくおうとした、だがそれは不可能だったのだ。結局私はあの子の前で立ち尽くすしかなかった』

「やっぱり、判ってんだよな、てめえも——なあ、てめえなら、“今年”のインデックスをどう思う？」

『最悪だ、あの子を幸せにできなかった自分自身の逃避のためにあの子を不幸にした——少なくとも、それを選んだ人間にあの子を救う権利はない』

「インデックスを救えるなら、正直誰でもいいと俺は思うんだが、まあいいさ、そうだ、そうだよな錬金術師、お前はわかってる」

ガガギガガアッ！ 上条の右手からあふれ出る黄金と、それを抑えかかるような上条自身、そしてそれに向かい合う、黄金と意思。

「やっぱりあんたはすげえよ、俺にはあんたに何かをいう資格はないし、何で風斬を救わなかったってのは、確かにそのとおりだ。だ

から——だからさ、あんたはここで、消えようとしてるんだろ？」

救われない、本当に救えない。上条にとってアウレオルスは、どこまでも遠く、まったく同じ存在だった。一人の少女に心を奪われ、救おうとし、それでも少女を絶望へ、自分自身を絶望へ送り、浸してしまった。それは両者、何も変わらない。

ただその長さが、間違いなく違ったのだ。

『私は、単なる敗北者だ、貴様の言うようなことはまったくもってありえないし、この暴走も、結局は八つ当たり過ぎん』

「んなわけねえだろ、だったらなんで、こうして意識を手放さない。コレだけの暴走を、どうしててめえは制御してるんだ」

大いなる術の今の暴走はアウレオルスⅡイザードという一人の人間によって制御されている。それはつまり、核がアウレオルス自身であることを示し、今こうして上条とアウレオルスの意思が会話しているのがそれを肯定している。

ならば、その『核』を消し去ってしまえばどうなるか。

簡単な話だ。アウレオルスという人間は消え、その結果この魔術そのものが消滅する。

「自分自身、判ってるんだろ？ 宣言したいんだろ？ 自慢したいんだろ？ だったらそれでいいじゃねえか、インデックスという女の子を救おうとしました。でいいじゃないねえか。花丸の一つくらい——誇って見せても、いいんじゃないねえかよ！」

そのために、どれだけの人間を犠牲にしたかはしれない——もし、もっと別の知り方を、関わり方をしていれば、上条は怒りをアウレオルスに向けただろう。

だが、上条はこうしてアウレオルスを知った。だから上条はともとても狭い視野で、自分だけの正義を振りかざしながら、言葉を叫ぶのだ。

アウレオルスはそれを、ただ一言――

『愚かだ』

そう、返した。

「そうかよ――じゃあいさ、俺はてめえを殺す、てめえ自身は、消えてなくなる。だから、俺はテメエのことを――覚えておくことにするよ」

そうして上条は、自身の右手にある種の感触のようなものを感じ、握り締める。

削りきった黄金の中に生まれた壁のようなもの、それを上条は。

全力を込めて崩しきった。

『っ――小僧！』

それは警告か、それとも迎え撃つための活か、アウレオルスの声
が上条の耳元に響いてくる。――現れたのは先ほどと何も変わらな
い、はずであるのに何故か感じる事ができる、確かにそこにある
一本の道。

上条はそれを認識すると何のためらいすらなく踏み込んだ。

これが、本当の本当に、最後の行軍。

こうやって右手を伸ばすまでに、上条はいろんなことを考えた、救いたいと、笑顔であってほしいと、それだけを思っ、上条はただひたすらに考え、ただ我武者羅に暴れまわった。

つらいと思うこともあった、楽しいと思うことも会った、感心することもあれば、憤慨することも、なんだったであつた。

そも、上条はこれまで、不幸な人生を送ってきた。

その不幸は上条を他人から遠ざけ、さらに不幸を呼んだ。だがそれでも、今は違、不幸だろうと、未来は違、上条は幸せだからだ。

インデックスがいる。小萌がいる。親友と呼べる者達も、多くいる。

そして、

風斬がいる。

愛しい、とても大切な、上条自身。

走馬灯のように、浮かんでは離れて行く。

上条は、黄金に囲まれた中を突き進みながら、自己の消滅を知った、あまりにも大きすぎる黄金に、上条の精神が耐えられなくなっているのだ。

その先に迎えるのは、アウレオルスと同じ、記憶の消失。

（忘れ……ねえ）

それは不幸かもしれない。

どれだけ幸せになろうとも、死んでしまっただけは終わってしまう。だから不幸かも知れなかった。

それでも、それだからこそ上条は、覚えていると誓った。

（忘れて、たまるか！）

上条には自分のことを大切に考えてくれる両親がいる。

上条には、自分の不幸を笑って、認めてくれる親友がいる。

上条には、例えば不幸だろうが絶対に受け入れてくれる恩師がいる。

上条には、不幸だからこそ出会えた、不幸だからこそ救えた存在がいる。

そして、

そして、そして——上条には、はっきりと好きだと自覚できる、少女がいる。

例え記憶を失うとしても、それだけは覚えていると、絶対に自分の中にあるのだと、その事に誇りを持ち続けると、上条は笑みすら浮かべて、

前へ、前へ。

笑顔を浮かべ、それをずっとの永遠にしていられる最高の元へ、ただ、右手を。

第二章 8（後書き）

フィニッシュ、そして――

エピローグ『ずっと一緒に笑い会おう Frozen Time』

ぱたぱたと、白光の世界の中をひかえめな足音を立てながら、同じように白い修道女がいた。当然ながら彼女はインデックスである。せわしなく駆けていく彼女の姿が、ドアの影から、窓の外から、ちらりと移っていく。

ここは病院だ。一面の白に、人や機材が、ちらりと多色を塗りたくっている。

その中をインデックスは、人を探しながら駆けているのだ。探しているのはここに来ているはずの彼女の友人だ。

その表情はなんだか複雑そうに揺れている、楽しそうではあるが、しかして同時にさびしきところでもある。少しばかりの恐怖も、透けて見えた。

大丈夫だとは判っている。ハッピーエンドで間違いはない、しかしそれでも——そういったところか。

駆けながら、彼女は先ほどのことを思い出す。

一人の男性とであった。極々平凡な外国人男性で、年のころは18程度だろうか、少しふけた印象を持つが、対して年齢と差異があるわけではない、インデックスの知り合いにはもっとすごいのがいる。

——今現在インデックスは人探しで忙しい、だからその男性に意識を向ける必要は無かった。

だが、いつの間にか向けていた。

「……どう、したの？」

ぽつりと漏れる言葉。

「なあ——」

男性は言葉をかけられたのを、待っていましたといわんばかりに、一つ、こぼした。

「私は、一体なんなんだろうな」

「……判らないんだよ、私は君の事を知らないし、どんな事情があるのかもわからない、だから何も言えないかも」

自分から問いかけて、その答えは少しばかり酷いような気もしたが、インデックスは何故か、自然とそう答えていた。どういうわけかは判らない

——なんともいえない沈黙があたりに降りてきて、それを自覚するインデックスは、しかしぽつりと、それでもという。

「それでも、君はがんばったんだよね、多分——誰かにほめてもらいたいって思うくらいには」

「そ、それは違う、私は——」

自分でも何を言えいいのか、何を言っているのかわからないという様子で男性は狼狽する。そも、インデックスの言っていることのわけが判るはずもないのに、何故か言葉を否定してしまう。

インデックス自身、何故そういつているのか、疑問に思いながらも、言葉は止まらない。

「そうかもね——でもいいんだよ、がんばった、そうやって自分を誇って、君にはその資格があるはずなんだから」

それで終わりだった。

全部終わり、その男性——アウレオルスⅡイザードの長い長い放浪もこれで、これでやっとお終い。

後は一つ——あの二人だけだ。

そうやって考えを纏めて、インデックスは目の前の扉を開く。

風が吹いてきた、今までは吹かなかった風が、ここを屋外である、屋上だということを示してくれる。そこに一人、人間がいた。

風斬氷華だ。

ゆっくりと、あたりの時間が流れていく。

風斬は昨日——その最後を思い出していた。これまでであったいろいろな時間の中で、最後のそれ、神裂に話しかけられたその時のことを、回想する。

「なぜ、こちらを？」

最初に神裂は、そう聞いてきた。三つあった選択肢のうち、神裂が相対している『力』を選択した理由を、問いかけてきた。

そこに特に意味はなかっただろう、気になったから、この少女が、一体どういった答えを出したのか、それが。

「私は——見ての通り化けものです、こうやって、あなたみたいに

何かをしているわけでもないのに、馬鹿みたいな力を使って、それが当然の化け物なんです」

だから、と風斬はいう、適材適所、化け物の相手は化け物か英雄がふさわしい。そう、言った。

神裂は英雄で、風斬は化け物、そうやって、神裂を畏怖させるように言った。

「生まれ持った力というのは変わりません、受け入れられないのは私も貴方も同じです……が、今はそれは関係ないと思えますね」

神裂は、しかしそれをどうでもよさげに切って捨てた、知ったことではないと、受け入れてしまった。――肩透かしのように風斬は無言になる。

それよりも、と神裂は呆然としている風斬に声をかける。

「貴方はここに来るべきではなかったはずです」

そうやって神裂は、他人事のようにいう。――三つの戦闘の中で、神裂が最も苦戦しているように見えたのはある。それを理由に、言い訳することもできる。しかし、させてはくれない。

「ステイルの所へ行く理由はないでしょう、彼には守るべき存在と、誇るべき意思があるのだから、むしろ助けるほうが無粋というものだ。ですが、だからこそいましょう、何故コチラへきたのですか？」

ステイルを助けることができるのは、ステイルが守る少女以外にありえない。ならば残る二つの戦場、神裂が激突する『力』と、上条が挑む『不死』、どちらを選んでも風斬は助けになることができ

る。

だからこそ、神裂は問いかけた。

「私は確かに苦戦し、あわや敗北という事すらありえました。ですが、それを危惧するのは私だけでいいはずです。貴方がここに来るのは——どうにも納得がいかない」

吐き捨てるように、神裂。

風斬は少しだけ眉をひそめ、問い返す。

「……それは、一体なんで言っているんですか？」

「愚問でしょう？ もし解らないのであれば、考えてみることです」

一泊、呼吸を神裂が置く。

「——あの少年が、一体どんな存在であるかを」

そして、意識が現在に移る。

——物語は収束した。神裂と風斬が『力』を御してから数分ほどか、あたりの黄金は崩れ去り、黄金に包み込まれた者達は全てあの塾長室へ舞い戻った。

それは神裂と、風斬と、ステイルと——意外なことにインデックスがいた。楽しそうにステイルと会話をしているのは、なんだか少し可笑しかった——そして倒れこみ、意識を失った上条がいた。

すぐさま上条は病院に移され、上条が病院に運び込まれたところ

で、風斬はほかの面々の前から姿を消した。彼の傷つく姿を、彼を傷つけてしまうことを、耐えることができなかったのだ。

そうして風斬は、ふらりとこの屋上へやってきた。特に意図があるわけでもなく、ふらりと足がここへ向いていたのだ。

屋上はいくらかの木々が植えられ、申し訳なさそうに噴水が取り付けられている。円を描くその周りに、いくつかベンチと、自販機がおいてあった。

その配置は、風斬がはじめて上条とであつた場所を思い出させる。

あたりには穏やかな風が流れ、普段はここは憩いの場所として開かれているのだろう、居心地の良い、都会の中の自然として、そこにあつたはずだ。

だが、偶然ながら——時刻が夜明けまえだという事も会ってか——あたりには風斬と、そしてインデックス以外の姿はない。

貸切状態。

二人だけが同じベンチに腰掛けていた。

しかしそれを浸る余裕は、風斬にはなかった。

——風斬氷華は『人間』でありたかった。

誰かを好きになり、誰かとずっと一緒にいて、誰かの為に死んでいく、そんな『人間』になりたかった。好きだと言ってくれる人はいた。自分もその人が好きだと、はっきりと自覚していた。

だけど風斬は人間ではなかった。

それは風斬の中に重く突き刺さる。自分が化物であると、深層の内に秘めていた意識が蘇り、幾つモノ絶望を覚えた。

黄金が世界の全てから消え去ったとき、風斬は自身の夢の終わりを悟った。人間としてずっと一緒であると願った希望は、泡のよう

に消え去ったのだと、そう思った。

「……やっぱり無理……だよ、私は化物だから……きつと当麻さんを傷つけてしまう、悲しませてしまう。どれだけ好きだって……言ってくれても……私はあの人を、好きになっちゃ……いけないんだよ」

「……」

「知ってた？ インデックスちゃん……私は——……——化物だったんだよ」

自分自身の意思をかみ殺すように、苦痛に満ちた表情で風斬はいう。それは助けを求めるようであり、同時に自分自身を拒絶してしまう、悲劇の意思にも、見えた。

インデックスは、何もしゃべらない。

ただ風斬の“本当の言葉”を待っている。

「可らしい……よね、化物は化物らしく……英雄に退治されるべきなのに、その化物が英雄を好きになっちゃったんだから。あはは、本当に……馬鹿みたい」

悲しそうに、それ以外にいえる言葉すらなく、風斬は笑う。

「その上、英雄であるはずの……当麻さんまで、私みたいな偽者を好きになっちゃって、本当に本当に……馬鹿らしい」

「……」

「——ねえ」

風斬の言葉が、一層悲痛に変わる。顔を伏せ、自分が座るベンチの、その下を必死に睨みつけながら、歯を食いしばり、拳を握り締め、ただひたすら、耐えるように。

「化物は……人を好きになっちゃいけなかったのかな？」

『だからそうやって、誰かを助けたい、守りたい、そういった想いに人が触れると、恋というものは自然と出来上がるものなのです』

それは風斬がはじめて学んだ、恩師の言葉だ。

ならば、それなら、風斬はどうなのだ、人ではない風斬が想いに触れて出来上がった恋は、一体なんだというのだ。

まさかそれは――

「化物の恋なんて……偽者なのかな」

好きだと言う事に間違いはない。ならばそれは一体なんなのだ、風斬の意思は、一体なんだというのだ。人ではない風斬のそれは、まさか嘘だというのだろうか。

解らない。

だから、インデックスは答える。

「ひょうかは――まだ、とうまのことが好き？」

「……はい」

「これからずっと好きになっていてほしい？」

「うう……は、いい」

「だったら、それでいいんだよ」

そういつてインデックスは立ち上がる。風斬の前へ歩み出て、にかりと笑った。

「ここから先は恋人だけの逢瀬——私は引っ込んでじゃうんだよ」

「……え？」

意味が解らないと、風斬が首をかしげる。

「男の子なら『氷麻』、女の子なら『当華』なんてどうかな？」

なんてね、と、そうやって笑うと、パタパタとその場を離れていく。そうして、屋上には呆然と立ち尽くす風斬だけが残された。意味がわからないと、意識が働かない風斬だけが、その場にはいた。

そしてそれは直ぐに破られる。

屋上への出入り口、開けっ放しのドアから、一人の人間が現れたのだ。

「——氷華」

その声はとても耳覚えのある声だ。

風斬は思わず振り向いた。

そんなはずは無いと。

だって上条は、風斬が化物だというのは知っているはずなのだ。
好きだといって、それはもう過去形のはずなんだ、救いに来て、それでお終い。夢と、希望は、全部なくなってしまっはうはうだった。
だから、だからこんなふうに、

上条当麻が、笑って、目の前にいることなんて、なまえて自分を
呼んでくれることなんて、もうないはずなのだ。

だけど、

「当麻——さん」

彼はいた。

上条当麻という一人の少年は、いつもと変わらない——病院着で
はあるが——その姿で、そこに立っていた。

自販機から缶ジュースが抜けて出る音が響いて、二つ分の購入を
終える。その内一つををばーっとしていた風斬に手渡し、上条は
おぼつかない足取りでベンチに座った。

「返すのが遅くなったな」

冗談のようにそういつて、上条は手を二度三度ふる。そうやってから笑って見せて、自身の缶ジュースの蓋を開けた。

キュポット、小気味のいい音が響き、上条はそれを口に含む。

風斬もそれに習いプルタブをひねりジュースを飲んだ。

暫くは沈黙が続く、ジュースを飲む音と、風が当たりへ薙がれる音、それだけが心地よく、そらを仰いでいる。

風斬は途中でポツリと、口を開いた。

「やっぱり……美味しいよ」

ジュースの缶を持って、それを握り締めるように、抱え込むようにして顔を伏せる。

「本当に、美味しい」

繰り返して、もう一度飲む、それから何度も何度もゆっくりと、味わうように、思い出深い、回想のように、飲んでいく。

「又――買ってやるよ」

自分の分の半分を一気に飲み干して、上条が言う。

「え……?」

「こんなんでもいいなら、また買ってやる」

訳がわからないという風斬に、上条はもう一度繰り返す。

そうすれば風斬は、悲しそうな顔をして、ポツと、答えを返した。

「私だって、どういうわけかお金は持ってますよ、この位なら自分で買えます」

「それは……そうかも知れないけどさ、それでも俺は氷華に何かしてやりたい。小さなことかもしれないけどさ、やっぱり氷華は笑顔の方がいいんだよ」

それで笑ってくれるなら、一体どれほど嬉しいことか、上条は一言そういつて——笑って見せた。あの時の氷華のように、それは少し、ぎこちなくはあったけれど。

「私は大丈夫ですよ、一人でどんなところへだって行けますし、当麻さんの助けは、要りませんよ」

「でも——それじゃあ俺の家に来てくれないじゃないか」

「……………」

呆然と、した。

上条は一体何を言っているのだと、風斬は息を呑む、この人は、自分の大好きな、上条当麻という人間は、まさか——そんなわけがない。

「自分勝手……ですね」

「それでもいいだろ？ 氷華はなんだかいつもふらふらしてそうだから、自分勝手に押さえつけないと、二度と戻ってこない気がする

るんだ」

じゃあ、言ってもいいの？

風斬の目が、そういつていた。上条は無言のまま、その無言を持つて肯定とする。

だったら、だったらそう——万感の思いをこめて、問いかける。

「じゃあ——私のことをずっと、束縛して、くれるんですか？ 笑顔のまま、その笑顔を貼り付けにして、ずっと自分勝手に、満足してくれるんですか？」

肯定して、くれるんですか？

その問いに上条は、無言でもって答える。

唯一つ、二人の唇が重なった。

——：——

そしてそれから、上条と風斬は一度の別れとなった。風斬に上条が相当無理をしていることがばれたのだ。実の所上条はなんでもないようにしているが、実際は松葉杖が無いとたつことすら危ういだ。

だから歩くとき、おぼつかない足取りになってしまった。

故に風斬は、お見舞いも十分したからと、今日は一度帰ることにした。またお見舞いに行くからと、それだけを無言のまま約束して。

そして一人残された上条の下へ、一人の聖女が訪れる。

「お疲れ様」

インデックスだ。何処に隠していたのかは知らないが、上条の松葉杖を持っており、それを上条に手渡した。ここに来るまで、風斬の元を訪れるときこそ見栄を張っていたものの、ずっとこのままだったのだ。

「ありがとな、インデックス」

「ううん、別にいいんだよ。これも二人の愛し合う子羊のため、私はただ祈っていただけかも」

軽く笑って、インデックスは言う。

暫くそれが続いて、でも永遠ではなかった。インデックスの顔が曇る。上条はその理由を何となく知っている。——いや、なんとなくではなく、よく知っている。

「言わなくてよかったの？　——記憶喪失のこと」

そう——上条当麻は自身の記憶のほぼ半分が無い。

上条の記憶は現在、いくつかの出来事が抜け落ちている。たとえば、上条は神裂のことは覚えていたがステイルのことは覚えていなかった。

たとえば上条は母親の顔は覚えているが、父親の顔は覚えていなかった。どちらも思い出はちゃんと覚えているのだけれど。

そして風斬もまた同様。上条当麻は、風斬のことを何一つ覚えていないのだ。

「大丈夫だろ、問題はないさ」

「どうして？ 記憶が無いと、いつかとうまはひょうかを傷つけちゃうかもしれないんだよ？」

そもそも、思い出もないのに、上条は何故、風斬を肯定したのだろう。――出会いや何か、ハジメテの会話は、インデックスから又聞きで聞いている。だから缶ジュースを買ったのだし、ああいった言葉のやり取りもできた。

それでも、もし記憶が無いのならば、風斬にとって上条が偽者ならば、それはとてもゆがんでしまう。

けれど、

「問題ないさ、だって氷華は記憶喪失に気づいてるしな」

へ？ と、インデックスの間抜けな声が漏れた。

「な、何で？ 可笑しいよ、氷華には、一度も記憶喪失のこと、言わなかったのに！」

「可笑しくはねえだろ、一度笑ったときに、随分ぎこちなかったしな、氷華は——自惚れかも知れないけど、俺のことはほかの奴よりずっと見てるはずだから」

気づかないはずが——無い。

「じゃあ——だったらひょうかは何で受け入れたの？ 何で肯定されてほしいって、そういったの!？」

「俺もさ、一つだけ覚えてることがある。氷華のことを、一つだけ覚えてることがある」

いいや、違う、覚えているのではないと、上条は否定する。——ひとつだけ、確かに根付く上条の記憶、それはもはや覚える覚えていないの問題ではない。上条の感情にすらこびりついている。

「俺は、氷華のことが好きなんだ」

だから、判らないはずが無い。

「——そ、っか」

インデックスは笑って、とてもとても楽しそうに笑って、上条から離れる。先に病室か何処かへ戻るのだろう。楽しそうに何度もスキップをして、そしてくるりと振り返る。

「お幸せにね？」

笑って、幸せそうに光の奥へと消えていった。

上条は笑って、それから――

――あるところに、一組のカップルがいた。

――そのカップルは幸せそうで、何ひとつかげりは無かった。

――笑って、怒って、呆れて、それでもやっぱり幸せだった。

――上条当麻には記憶が無い。

――覚えていることは、自分がその少女を好きだということだけ。

――そんな事はわかっている。

――結局の所、当然だった。

――笑いあって、全部全部笑顔で、それできつと、十分だったのだ。

ロングあとがき。

長いです、暇であれば読んでください。
まあやることは一つだけなんです。

それぞれのキャラについて。

【上条当麻】

いわずと知れた主人公。上条さん、そげぶ。
今回は風斬ヒロインの単騎です。

ハーレムなんてありません、インデックスは娘です。

さて、彼についてはやはり記憶喪失が存在の主題の一つでしょう。
結局自分は非常に都合のいい展開になりました。

元々、記憶喪失でないといけないギミック（四巻とか十四巻）が
無ければ記憶は消さないつもりでしたしね。

今回の場合必要だったのでこういう形になりました。
でも、四巻はともかく十四巻って風斬やることないよね。

【風斬氷華】

当然ながらヒロイン。

風斬ヒロイン再構成という事で、風斬を描ききれたかなというのは不安です。

実際上条さんが来るまでの描写はちょっとできて無かったかなと。
まあ実際それを描ける第二部は神裂とアウレオルスが持って行った
ちゃったので、第一章は影すらなかった訳ですし。

と、言い訳を言っても始まりませんが、風斬は化物だという自分を肯定してもらって。

二人の物語は大体完結してる感じなので、六巻とか負ける気がしないね。そうだね。

【インデックス】

個人的にはお気に入り。

というか、前作もそうですが、自分はどうもインデックスが好きなようです。

前回はほぼヒロイン、今回も物語の中心人物となります。

彼女の原作との違いを挙げるとすれば、やはり立場の違いでしょう。

原作ではメインヒロイン（空気）ですが今作では『娘』です。

ほかにももう一つ、作品内でも一度描写しましたが、インデックスにはもう一つキーワードがあります。

それが『聖女』です。

これは多分自分がインデックスに抱いている印象で、その恩恵を受けたのがステイルとアウレオルスですね。

二人称が『君』の場合は聖女モードということ。

【ステイルⅡマグヌス】

風斬ヒロインで恩恵を受けたキャラ。

インデックスと親しくなれるチャンスですよ。

まあ実際、それ以外に彼に何の変更とか無いんですけどね。

立場というか、インデックスとの関係が変わるだけで後は原作どおりです。

【神裂火織】

彼女は今後ピックアップされる予定です。

まだ本番ではないのは原作でも明らか。

第二部第一章は彼女がメインでしたがそれでもまだ何かを書くという事はないです。

恐らく原作十六巻部分が終わったらになるでしょう。
あそこでやら無いと大体ネタバレになるんで。

【月詠小萌】

小萌先生マジイケメン。

ちよいとばかり大切な授業をしてもらいました。

少なくとも最後の回想では出番の問題で両親や親友より優先度高いです。

ほんとありがとう小萌先生。

貴方がいなくても上条さんと風斬はどうなっていたことやら。

インデックスヒロインもありましたね。

【アウレオルスIIイザード】

お疲れ様でした！

因みに最後、黄金が晴れる部分でちゃんとこの人も倒れてます。
その後ステイルによって病院に運ばれ、整形手術を受けてインデックスの回想に至ります。

出番としては今回だけとはいえ、彼が最強だった作品なんてあったかな。

ともかく、やったことは外道ですが、その信念は上条やステイルが尊敬すらしてます。

やはり先駆者というのすごいですね。

バッドエンドといえはその通りですが、それでもやっぱり多少の救いはあつてしかるべきでしょう。

自分は黒かまちー先生じゃないですからね、ハッピーエンド史上主義です。

今回は万人虐殺、それはバッドエンドでしょう……後はわかるな？

【 】

というわけで、本編に登場したキャラは大体こんな感じでしょうか。

最後の空白？ 何を言ってるんですか、ちゃんと語ってるでしょう？ アウレオルスの事。

さて、今回は第三部、三巻までよめ木イイ原くウウウウウウウウンー！！ でおなじみの一方さんですね。

三巻のヒロインは美琴ですが、今作はヒロインが風斬一択なので美琴さんにはフラグが立つ前にヒロイン戦線から退場してもらいます。

というか、どちらかというと今回は上条さんより風斬さんがメインになる予感。

あと一方さん。

あ、現在感想募集中です。たくさん。

プロローグ『愚かもどもの宴 Fool's sacrifice』

最初は、いや最後まで、彼はこの行動に乗り気ではなかった。

彼の名は駒場利徳^{こまばりしとく}、第七学区における有力スキルアウトを束ねるつわものである。その強さは無能力者でありながら、自分の力を過信した能力者ならば赤子をひねるようであるという。

実際彼は、彼らは能力者を手玉に取ることも、条件によっては可能だし、仲間達は今回も可能だといった。

そんなはずは無いのに。

——前提から、過程からして間違っていたのだ。

ことの発端は数日前、今回の標的——学園都市最強の一方通行に^{アクセラレータ}対して広がった一つの噂と、それにあわせて舞い込んできたあやしげな“依頼”。

まず、さいしょの噂、コレは本当にたわいの無い物でこれだけであれば駒場達が動くことは無かっただろう。

——“一方通行”は弱い。

その言い分はこうだ。一方通行は学園都市では確かに最強だ、しかしそれはあくまで能力によるもので、もし能力が特大のA I M ジヤマーなどで使えなくなれば、何の苦も無く倒せるのではないか、という噂。

ばかばかしい、最強を封じ込めることなど本来ならば不可能だ。そもそも一方通行を確実にジャムできるA I M ジヤマーなど何処にあるというのだ。そんなものがあれば、スキルアウトはこの町を制圧している。

そう、それだけでは意味が無かった。

もう一つ、できすぎたようなあやしい依頼が無ければ、彼らは動かなかっただろう。実際その噂はもう半年前からあったものだ。

その依頼とは“一方通行を封じられるA I Mジャマーを提供する。その代わり一方通行を始末しろ”というものだった。

どこからか、というのは当然記されていないが、恐らく一方通行を良く思わない研究者によるものだろう。詳しくは判らないが、一方通行が研究をサボタージュしているという噂もある。

つまり研究者は自身の立場が危ないのだ。これ以上一方通行が研究をサボタージュすれば、研究者の立場は瓦解してしまう。ならばこうすればいいのだ。

一方通行は何かの事件に巻き込まれ、死亡した。そのため実験の継続は不可能。

もはやなりふり構ってられないのだろう。

そしてそれは駒場達もそれほど変わらなかった。ただしそれは受けなかった場合、駒場達は学園都市の暗部におわれることになる。

それを雇っているのがその研究者なのだから研究者が堕ちてしまえば暗部の追手はなくなるかもしれない。けれど、駒場達がそれに期待するよりも早く、暗部の人間に捕まってしまうことだろう。

結局、スキルアウトとはいつでも半端もの、彼らは極簡単に、能力者に叩き潰されてしまうのである。

そして、ほかに、部下——というよりも仲間といったほうが言いかな——がそういったことを考えずに色めき立ってしまったのも問題である。

駒場の考えたことと同じことを考えているのは、彼の“連れ”ともいえる二人だけだった。

とはいえ、用意されたAIMジャマーは優秀だった。

訪れた一方通行を、触れ込みどおりに行動不能にさせたのだ。能力を使えなくさせたというのは、土俵をまったく同じに等しい。

それならば、勝てるかもしれないと、駒場ですら思った。

スキルアウトは能力者とのハンデを自分自身の筋力などで補うために、トップアスリート顔負けに自身を鍛え上げている。

アスリートのような、競技しかない人間ならば手も足も出ないし、たとえば本職の兵士、傭兵であっても同じ装備であればうまくやれば相打ちも可能だろう。

それほど戦力を自負していた。そしてそれならば勝てるかもしれない、とも思った。

しかし、行われたのは強者による一方的な虐殺でしかなかった。

一方通行は何の武装もない、体一つ、もやしのようなそれだけだ。そんな一方通行が、無理に能力を使う以外の方法で、動くことができるとは誰も思わなかった。

だが、違ったのだ。

自分が誘い込まれたのを知り、能力が使えないことを知り、最初に一方通行が行ったのは、馬鹿みたいな高笑いだった。聞くものの体の芯から冷やすようなおぞましいまでの声。

虚勢かとも思った、しかし違った。

会戦の合図を告げる一人の弾丸が一方通行を貫こうとした。

しかしその時にはもう、奴は一人の人間に喰らいかかっていた。

そも、この部屋の中には三十人のスキルアウトがいる。表に立って短機関銃などを構えているのが十人、隠れて待機しているのが二十人だ。

部屋は50人ほどならば容易に収まるフィールドで、表立って立っていた十人は、三つの弧を描くように待機している。

一方通行が襲い掛かったのは最初の弧、三人で囲むその中央である。

油断していたのもあるだろうが——一方通行は速かった。人間の出せる速度の中では、トップアスリートのような天才と、それほど変わらなかっただろう。

そしてそれは——能力を使用していない。

一方通行の残虐なまでの一撃が、スキルアウトの顎を砕いた。

——それだけで判った。

一方通行は群れに追われた獲物ではない、群れを好都合と狩る、猛獣だ。

それからは一方的だった。

一方通行はその後入り乱れの乱戦をわざわざ演出するように戦い、スキルアウト達は短機関銃に頼る余り、誤射を恐れて短機関銃をもてあまし、さらにはそれを捨てるべきだと判断したときには時既に遅し、残ったスキルアウトは三人だけだった。

その三人も、ご丁寧に急所を的確に貫かれ、一方通行に叩き伏せ

られた。

「――はア……」

つまらなそうな嘆息と共に、一方通行が辺りを眺める。

「てめエらよオ、ンだア、この腑抜けた様子はよオ。俺アもうちょっと楽しましてたンだぜエ、わざわざコンなもの用意して、ご丁寧に罠にまではめてさア、だったらもオちよつと楽しませてくれてもいいじゃねエかよオ」

まるで威嚇させるように、萎縮させるように、一方通行は吼える。

「クソ餓鬼全員かかってきなア！　まとめて地獄に放り出してやる！！」

ゴウツ！　と、聞こえるはずも無いのに、絶望の足音はやけに響いた。

――あっという間だった。

結局スキルアウトは恐怖に貼り付けにされ、その場を動くこともできずに一方通行に狩られていく、よしんば持っていた拳銃を撃てたとしても、それすら向こうの予測の範囲内のようで、スキルアウトの弾丸は見当違いの場所へ消えていった。

途中、駒場の連れがほかのスキルアウトを動かし、群れで襲い掛かってきたが、所詮は十人の群れ以上に烏合の衆でしかなく、一方通行にあしらわれた。

そして残ったのは二人だけ、スキルアウトのリーダー、駒場と、この惨劇の創造主、一方通行だけだった。

「まったくよオ、わざわざ俺をどうにかする為に呼んだんだろ？ だったらんだよこの体たらくは。てめエらやるきあんのか？ あア！？」

不機嫌だと、睨みつけるように言う一方通行に、対して駒場はいたって無言だ。

「まったくよオ、楽しめたのもあの黒っぱいやつだけじゃねエのかア？」

結局それも赤子だったがと、吐き捨てる。

心底退屈そうに、心底不愉快そうに。

「てめエはどうなんだろうなア。実際アレだぜ？ こんなもん鬼の側はすっげエ退屈なんぞよなア」

そこで——今まで黙り込んでいた赤子のリーダー——駒場利徳が始めて口を開いた。

「……思いのほか加減しているのだな、能力者」

「あア？」

それを聞いて、意味がわからないというように小首をかしげ、見上げるように駒場を見る一方通行、対する形となった駒場はその陰鬱な、ファックスの中身を直接相手に響かせるような声で。

「思いのほか加減が聞くのだな、といっているのだ、能力者……」

「――……ハッ、馬鹿じゃねエのかア？　こちとら愚かな生贄を追いかける殺戮者を、休日返上でこなしてるつつウのに、よりにもよって加減してるだア？　さすがにそれは笑えちまうな」

「何を言っている。お前は……」

その一言、それがほぼ開戦の合図であった。今まで、ただあくまで威嚇するようであった一方通行の様子が一変したのだ。

純然たる殺気と共に、獣すら射殺してしまうような咆哮！

「つぎけんじゃねエエエぞオオおおおお！　半端モノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

それがその夜、最後の殺戮の、開幕の一言だった。

第一章『犬と猫 Anima|friends』

1

その日はいい加減に暑かった。

朝の初動からして蒸し暑さが押し寄せ、居心地の悪い空間になってしまっていた。上条が寢床にしている風呂がしけしけなのも悪いかもしれないがやはりこの暑さは身に堪える。

そんな中をギリギリでおきて最初にやったことはエアコンの使用だった。

環境にやさしいエアコンという事ではあるのだが、それをガンガン使えば結局環境を壊すのは変わらない、やっぱいなーと、現代人らしく人事のように考えながら、上条は居候をたたき起こすことにした。

上条宅の居候。名前をインデックスという。

——数日前、上条はとある騒動に巻き込まれた。その原因は上条の目の前で眠りこける真っ白のシスターが布団代わりに干されていたためだ。

余談、何でも距離を見誤ったそうなのだが、未だに何故生きているのか不思議である。

そしてその結果、上条の家には居候ができた。何でもその時関わった魔術師いわく、『休暇のようなもの』らしい。確かにインデックスがいなくなって困るのは上条の恋人の友達がいなくなり少し寂しいだけで、インデックス自身は戻ってもなんら問題はないのだから当然だろう。

さて、そのインデックスは現在パジャマ姿（小萌のお下がり）を

着てベッドを占領している。

どうしてこうなったと嘆く上条だったが、そんな事を言っても仕方が無いことにはどうしようもない。よってインデックスを揺すり起こすといういつも通りの工程を踏むことにした。

「むにゅむにゅ……とうまあ、もうおなかいっぱいなんだよお」

「……」

そこに聞こえてきた一つの寝言、上条血涙。

暫くそれが続けていたが、さすがに悲しみでは人は殺せないのが、当然のごとく怒りで思考を覆うことになる。

「どの口が言うか、どの口があ！」

いったいどれくらい食べたと思っているんだうがーと、布団ごとインデックスをひっくり返した。

「ひゃわっ！」

かわいらしい声をあげ、目を覚ましたインデックスがあわてたようにあたりを見渡す。上条は無言でひっくり返した布団のうちから、掛け布団だけを器用にインデックスにかけた。

「もがが」

今度は間拔けに、音にならない声を発するインデックスに、上条は声をかける。

「ちよっと待ってろよー、朝食の用意するからなー」

そういつて何気なく手を振ると上条は体を翻す、布団をおおざっぱに元に戻して、自分は悠然と台所へ向かっていった。

背後に、齒をカチカチと鳴らす、猛獣がいることにも気付かずに。

——というのが、大体の上条とインデックスの日常である。

時刻は過ぎて昼前、朝起きた時の暑さも、もうすぐピークを迎えることだろう。とはいえ今は部屋の中、そとの雲ひとつない世界は、上条たちには無縁だった。

遊ぶには少し暑すぎる日差しの中、上条は珍しく——というか恐らく（これは上条自身断定できない）初めて行うであろう、夏休み末期、もしくは初期以外での宿題だ。

原因は彼の恋人——風斬氷華が原因だ。

今日は特にこれといって補修などがあるわけでもないので、一日中クーラーのこもった部屋に引きこもっていようと決意したところに押し付けてきたのだ。

本来なら彼女は上条の内を知らないはずなのだが、いつの間にか隣人の義妹で、よくこの男子寮に入り浸っている土御門舞夏と親しくなり上条の自宅を聞き出したらしい。

何とも狭い世の中ではあるが、今嘆くのはそれではなく宿題をやっている自分である。

夏休みに限らず、長期休暇中の課題というのは、最終日付近までその存在を忘却し、最終日付近で一気に終わらせるのが醍醐味のはずなのだ。

上条がそのことを風斬に抗議してみると、

『それはまだ最終日付近じゃないからです。絶対にそのころになれ

ばそんな冗談いつてられないよ』

と、風斬らしからぬ偉くはきはきした口調で言われたので、しぶ上条は宿題に取り組んでいるのだ。せめてもの救いが風斬が手伝ってくれるというところか。

そもそも、手伝ってくれなければできない課題がごまんとあったのだろうが。

そして今上条は宿題の片手間に、朝の出来事を話してみた。

「それは……当麻さんが悪いよ、だっていくらインデックスちゃんが大食いだからって、寝言を理由に怒っちゃいけないから」

「うぐ、せ、正論……」

思いのほか普通というか、そのまま率直に否定してきたのでたじろぐ上条、意外だったのもあるだろうが、確かにそれは正論だ。

「で、でも上条さんは世の中には正論だけが正しいとは思いませんのことよ」

「いつも正論で説教ばかりしてる当麻さんが言わないでください」

そこで反論に詰まってしまった。そもそも本来ならインデックスが大食いなのが悪いと、本題のほうで切り返すべきだったのだ。

それでも、風斬は『だったらインデックスちゃんが沢山食べた時に言ってください』と切り捨てたことだろう。

反論できないこともないだろうが、さすがに勝てる気がしなかった。

「それで、何処まで進みました？」

「何処までって……半分？」

ぺらぺらと、五枚分の原稿用紙――『空間転移能力者が使用する11次元計算法について』と題されたそれを持ち上げて振る。

正直な話、この11次元計算法は非常に複雑で、それを日常的に使用する空間転移能力者でさえ目を回す代物なのだ。

何故出したと生徒に文句を言われても仕方がないのである。

とはいえ、

「別に何か論文を書けって言うわけじゃないんだから、それほど難しくはないよ、その枚数だったら計算方法を丸写しでいいんだから、自分で文を書くとなるともっと大変だから、ね？」

という風斬が言うように裏道があったりする。

11次元計算法は複雑だ。だが、複雑ゆえにその計算方法を何の省略もなく零からかくと、一枚四百文字、合計二千文字を丁度いい感じに埋められてしまうのだ。

それもあってか、今上条が行っているこの宿題はよく夏季休暇の課題として出されるのだ。

そのレポートに見せかけたなぞなぞのような宿題は、生徒の反応が面白いと、先生方に評判である。

因みに、学園都市でこれ始めて出したのは小萌先生だったりする。

「なこと言ったって、あの見るだけで憂鬱でわけのわからない計算式をただしく移すとか、拷問じゃねえか」

「そうやってやる気を削ぐのもこの宿題の狙いなの。普段やる気のない生徒をどうやって勉強させるか、ってね？　よく考えられてるよ、この宿題」

うだー、と熱を上げる上条とは対照的に感心したようにぺらぺらと図書館から借りてきた参考書をめくる風斬、こうやって普段読まないような本を読ませるというのにも、この課題は狙っているらしい。

「だー、やってられねえー」

とはいえそれでやる気が出る上条ではない、むしろ風斬の言葉自体に拒絶反応を示したようで、間違えた字を消そうと握っていた消しゴムごと、両手を振り上げた。

——もともとやる気なさげに軽く持っていたのもあっただろう、消しゴムがもはや見事としか言いようが無いほどすぽーん、と手から消しゴムがすり抜けた。

「あっ——」

軽く、上条の声が漏れる。

消しゴムが低速で、飛行を始めた。

それだけならばよかっただろうが、残念なことに上条は不幸だ、それが伝染するように、上条の後ろで不機嫌そうに漫画を読んでいたインデックスにいい感じの音とともにあたってしまったのだった。しまったと思ったときには、インデックスが憤怒の表情で漫画を放り出して詰め寄ってきた。

「とおー、おおー、まあー！」

「あ、あのですね、インデックスさん、これはその――」

血氣迫るインデックスに、たじろいだ上条は言い訳を始めるが、それをするとは今度は風斬のほうに怒気をはらんだ視線を送ってきた。少し向いてみると、曰く『さっきの事も誤ってないのに、言い訳するなバ上条』だそうでギギギと、機械めいた擬音を響かせながら、上条はインデックスと向き直った。

「ゴ、ゴメンナサイインデックスサン」

「誠意を感じられないんだよ、とうまああああああ!!」

がぶりと、いい感じに噛み付き音が響いた。

「ふ、ふこうだあー！」

第一章『犬と猫 Anima|friends』（後書き）

誤字脱字感想その他基本的なところから、恋文の代筆まで募集します。

※都合によりお断りすることがあります。

第一章 2

2

結局、外食でインデックス太閤のご機嫌を伺うことになり、風斬からは自分も払うからと慰められてしまった。どちらかというとそちらのほうが上条の心をえぐるので遠慮しておいた。

というわけか、どういうわけでもなく、上条たちはファミレスにいた。行きつけのお店で優雅に昼食である。大分安っぽいのは否定できないが。

そんなわけでやってきたのだが……

「すごい人、ですネ……」

風斬が嘆くように言うそれは、まあ仕方の無いことだろう。

照りつくような暑さから逃げるように、このファミレスに入って早々、上条たちは暑さとは別の対象でげんなりさせられてしまったのだ。

あたりには人、人、人。すさまじいまでの人の群れである。

特に何の変哲も無く安い意外に利点のないファミレスに、大量の学生が押し寄せてきているのである。必然だったかもしれない、外が暑く、今が昼時、そして夏休み、学生の集まる条件は大体そろっている。

上条たちとて本当はもう少し遠くへ行く予定だったのを、熱さにだれたインデックスと上条が、急遽見つけたこの店に入り込んだのだ。

知らない店ではなかったが、頭からすっぱり抜け落ちていたので幸運だった。

「まあしょうがないだろ、幸い相席を聞いて回ってるみたいだし、運がよければ直ぐにすわれるんじゃないかねえか？」

「こ、この人数で相席って大丈夫なのかな？」

げんなり言う上条に、疑問を呈すのは風斬だ。この三人の中で、風斬が一番汗をかいていない。恐らくは開き直って化物パワー全開なのだろう、うらやましい。

因みに一番だれているのはインデックスだ。ぼろぼろになって風通しがよくなっても、このシスター服はどうにも分厚いらしい、非常にラフな上条と比べると大分厚そうだ。

そのげんなりインデックスが、顔を俯かせていう。

「早く、早くご飯が食べたいんだよう、あ、相席とかはどうでもいいから、はやくご飯を食べたいかも」

「疲れてんなー」

呆れたようにも、自分自身も疲れたようにもいう上条。元々この二人、喧嘩をしていたはずなのだが、あまりの暑さに停戦協定を結んだようだ。

このまま行くと家に帰るころには喧嘩したことなどすっかり忘れていつも通りに戻っているだろう。

と、そこへウェイトレスがやってきた、どうも一人で居座ってる客がいるのでそこに凸ってほしいとのことだった。丁度よかったので了承すると案内してくれることになった。

で――

「おや、また会いましたのね、類人猿」

「名前で呼べよ、モノクロ……」

知り合いだった。上条とそのお嬢様——白井黒子が知り合いというだけで別に三人共通の知り合いではないわけだが、当然ながら上条に風斬が説明を求めてくる。

曰く、昔巻き込まれた事件で知り合ったらしい。臭い飯を食った食わせた中だそうだ。冤罪だったけど。

「おやおやまあまあ、この間初春を口説いていたのに、今度は両手に花ですよー？ やっぱり類人猿は女の敵ですわ」

嫌だ嫌だと手を振りながら、食べかけのスパゲッティに意識を移しかけていた。

「別に私はとうまを好きじゃないよ？　とうまはひょうかが好きだから、私が好きになるといろいろ面倒だしね」

「あゝ！？　何を言ってますの？　じゃあなんですか？　うちの初春をたぶらかした挙句、フラグの立て逃げというわけですよ？　初春の奴、最近ばーっとすることが多くてスカートめくりの被害が多くなってきているというのに……」

「い、いや別に、もっいい人がいつか見つかるだろ、ってか俺はそこまであいつと会話はしてねえし、そもそも俺を好きになるなんて、一人くらいしか……」

ちらりと風斬を見ると、風斬が嬉しそうに笑ってくれた。今にも

踊り出しそうなそれに、上条はしばし見惚れてしまう。で、さすがに鬱陶しくなったか白井が上条に声をかけた。

「あんまりのろけなくて欲しいものですわ、周りに迷惑ですわよ」

周りの見えないバカップルというのはまったく、と余り人のことをいえないような事を呟きながら自身と反対側のテーブルを指し示し、自分はスパゲッティを食べ進む。

はっとした上条と風斬は赤面しながら席に着いた。因みにインデックスは自分が発言した直ぐ後に席についている。

結局、なんだかよく判らないまま知り合いとの相席と相成った。

そして暫く、上条たちの注文の品が届き、それぞれがそれぞれに手を出し始めた。上条はステーキ、風斬はハヤシライス、インデックスはハンバーグ他数品である。一応頼んだ数は一桁に収まった。

「にしても、なんだってこんなに人がいるんだろうな」

運よくこうして席に滑り込めたものの、もし席に座れなかったらインデックスのフラストレーションがマッハで天元突破していただろう。

いやはや危なかったと、ステーキを一切れつまむ。

「夏休み効果に野次馬効果と暑さ効果ですの」

答えたのは当然といえる人物の片方である白井だった。スパゲッティを飲み込むと、ゆっくり放し始めた。ゆっくりというか、ぐつたりといった様子でもあるが。

「野次馬？　どういふことですか？」

答えられる人物のもう片方——風斬が問い返す。因みにインデックスは食事中なので言葉を返しようがない。ほかの二人もそうだが、インデックスの様に高速で食料を消費してはいない。

「この近くのビルで馬鹿どもが大きな喧嘩をしましたの、おかげでわたくし私は休日出勤、無償労働ですわ、まったく、こういうのは本来警備アンチス員の仕事ですのに……」

それを聞いた野次馬が集まっていると動きにくくなりその整備のために暇をしていた風紀委員を引っこ抜いて威嚇させているのだとか。

上条はそういった白井本人をじっとみる。この少女、本来ならば警備員の管轄である校外でたびたび活動している問題児なのだ。つまりお前が言うな、である。

「で、興味ありますの？　知り合いのよしみで教えてあげますわよ？」

食べる片手間にそういわれて、上条は何となくこの少女を理解する。つまりこの少女が外でよく活動するのは野次馬と同じだからだ。興味のあることだとか、そういったことを勝手に解決して勝手に怒られるのがこいつに違いない。

そう考えた、が。

「ある」

上条は肯定を即答した。

つまり、上条もこの少女と同じく、勝手に救い勝手に怪我をする人間なのだ。同類という奴である。同属嫌悪でもあるかもしれない。

「では軽く説明いたしましょうか」

そう前おいて、白井はゆっくりと途中でスパゲッティを食べながら説明し出した。

まず、事の起こりは昨日の夜だったらしい。丁度そこを通りかかった人間曰く、非常にうるさかったそうだ。が、君子あやうきに近寄らずとばかりにその時はその場を後にしたらしい。

その後その目撃者は気になったのか、朝になって再びそこを通りかかる際に中をのぞいてみたらしい。

その結果、非常に形容しがたい惨状になっていたそうだ。

「つまりこの辺りのスキルアウトを全滅させたつーわけか」

上条がそう纏める。

その後の話――被害者の身元の事――を聞いて上条が納得したように言う。彼は被害者の一人、駒場利徳という名に聞き覚えがあったのだ。

喧嘩仲間の存在から聞いたことがある。現在、スキルアウトを纏めている奴らしい。

「はあ、まだ喧嘩とかしてたんですね、そんなことだから補導されるんですよ？」

「今は別に、氷華もいるしな」

声を潜める二人、上条が白井に頼み込んだのだ。

因みに実際には聞こえるように白井が調整しているため駄々漏れである。氷華は顔を紅くしていた。インデックスははなからきいているのかきいていないんだか判らなかった。

「で、どうなってたんだ？ そいつら」

顔を離しながら上条が聞く。

白井はスパゲッティをかき込むと租借して飲み込み、一息を吐いて返す。

「それがですの全員死ぬか生きるかのギリギリで生きていましたわ」

生き地獄、だったらしい。

第一発見者は最初死んでるものだと思います。吐いたらしい。死んでいないと判ってとりあえず安心してしている様子だったそうだ。

肩がぱっくり、切られたように裂け、しかしそれが単純な打撃によるものであると、一目でわかるような青あざがその上にかぶさっていたり、確実に折れているだろうなといった様子で足が曲がっていたりもした。詳しくは検査待ちだが、おそらく全員骨は折れているか、砕けているだろう。

「つまり、どういうことだ？」

「死んだほうがマシという奴ですわ、少し見た限りですが、血の痕とか酷かったですわよ？」

「食事中の話題じゃないだろ」

とはいえ、それで食欲を削がれる三人ではない。インデックスはそういった修羅場にはそれなりに遭遇しているし上条と風斬も先日の一連の一件で他人事であれば耐性は着いてしまっている。そもそも風斬は吐く物が無いと思う。

「まあそうですの、でも気になるんですわよ、私、怪我の方もそれなりに見てきましたが、アレは間違いなく人を素手で殺せる人間の代物でしたわ」

解るのか、上条。

解りますわよ、白井。

「私、これでもそれなりに武術には精通しておりますの。とはいえそれなりに齧った程度ではありませんが……それでも実力者と自分の差程度や、その癖は解るつもりですわ」

あなたにはわからないでしょう？ と懐かしむようにも、皮肉るようにも見えるまなざしで上条を見る白井、おそらく前に実力の解らない相手と上条は渡り合ったのだらう。

そして勝ったのだ、間違いなく。

その時上条は一人だったようで、そして今回も、まったく同じ人物がそのスキルアウトの群れを倒したと、白井は言いたいのだ。

「ん……まあいいけどさ、とりあえず今はその達人のことだらう？」

「そうですね、で、本題ですけど、彼らは武器を持っていたわ、学園都市製の短機関銃と拳銃、どちらも一世代まえのようすけれど」

まあ余談ですわね、と自身のスパゲッティを飲み込む白井。

「つまり、彼らは相当な武装を行っていましたの、こんな相手、あなたはたった一人で突破できます？」

ちらりと、片目で上条を流しみる。

冗談ではあるだろうが、少し艶やかな表情だ。

「無理だろうなあ、俺が相手できるのは一人か二人くらいだよ、三人以上は逃げるね、そもそも武装してりゃあ一人だって逃げるぞ？」

「まあ、自分がレベル0なのだから当然ですわね」

上条の場合は例外のようなものだが、それも相手も同じレベル0では意味がない。上条自身、たとえ数人を対して立ち回っても、相手が能力者で、慢心しているなら切り込む余地はある。だが相手は上条と同じ、上条の幻想殺しが意味をなさない無能力者なのである。

「でも、それを倒した相手は能力者ですよ？　だってただの人間が、武器を持った相手を複数倒すことなんてできるはずが……」

風斬が割り込んできて問いかける。白井と上条に比べて暫くの間食事に集中していたので、カレーライスはもう三分の二が減っている。

そして風斬の発言は当然至極のものだったが、白井が途中で割り込んできた。

「残念ながら、その場にはとてつもなく巨大なAIMジャマーがありましたの、壊されて解析できるほど残ってはいませんが、その大きさからしてたとえレベル5だろうと能力の使用をためらわなくてはいいけませんわ」

「……それでも、無理に能力を発動することは――」

「無理ですの、AIMジャマーはレベル5ですら恐らく五分五分で能力が暴走してしまうような代物、まだそんな高性能品、試作の段階でしょうが、それでも五分五分の事実は変わりませんわ」

そして、と黒子が言う。

「無理やり発動した、という線もありえませんが、何せ怪我は全て打撃によるものなのですから」

つまり、能力を使わずに、上条のように殴る、もしくは蹴るだけで、武装したそれなりに戦闘に特化した集団を赤子の手をひねるように惨殺したのだ。

「それだけやって、一人でも生きてるほうが不思議……ってことか」

「それどころか全員無事、暫くすれば何の後遺症も無く動き回れるそうですわよ？ そうなったら独房行きですが」

銃持ってるんですから当然ですわねー。

など、のんきに語る白井、コチラも前から食べていたものなのでもう直ぐ終わりそうだ。上条は自分のペースが遅いことに気が付き、一気にかきこんでいく。

一応味わってはいるがかなり疎かだ。

「それは、わざと殺さなかったんじゃないですか？」

タイミングよく、といえるだろう。上条が引っ込むのと同時に逆

に手を緩め、風斬が問いかけてきた。入れ替わり立ち代り、白井はそれにこともなげに答える。

「さすがに日和すぎですわ、今回は本当に運が良かっただけ、アレは計算でできるような代物ではございませんの、お姉さま……常盤台の超電磁砲レールガンですら、そんな計算は無理ですわ」

できるとしたら、と続けかけて、白井はそれを打ち切った。どうしたのかと聞かれても、白井はただあいまいな返事を返すだけだった。

そこから暫くは沈黙で、四人がそれぞれ料理を食べ続けていた。

最初に終わったのは、今の今まで一心不乱に食事続けていたインデックスだった。続けて、ほぼ同時に前から食べていた白井が食べ終わる。

呆れたように視線を送りながら、白井はインデックスを眺めた。

（年の程はお姉さまと同じくらいでしょうか……体型はお姉さまより貧相ですわね、お姉さまの場合あれ、ちゃんと成長しますわよ、まあ余談余談。で、結局の所、このシスター服はなんなのでしょう）

ぼそぼそと、漏らすように言葉を発しながらインデックスを見てみると、向こうもコチラに気が付いたようでこくりと、首を傾げてきた。

「? どうしたの?」

「いえ、別にアナタはその類人猿の愛人なのかしらと、適当に考えてただけですわ」

立った今速攻で考えたことを、本当に適当に言う。結果、風斬と上条が咳き込んでいた。

「ううん、どうだろう、私は『娘』かな？　ちよつとむずかしいかも」

「まあ、娘って感じはしますけれども」

さてどうしたものか、暫く暇つぶしにはなるかもしれないが、そもそも白井にはもうこの面子と同席している理由がないのだ。適当に切り上げよう。

「……さっきの話だけどね、私はそれを聞いたとき」

ぽつりと、インデックスが口元を拭きながらしゃべりかけてきた。どうもちゃんと聞いていたらしい。会話より食事という事だろう。

そして何気ない様子で、口元を拭いていた紙をテーブルに置きながら、

「西洋の拷問を思い出したよ」

シンと、四人の空気が静まり返った。

第一章 2（後書き）

感想氷華誤字脱字、その他もろもろ募集中です。

壁殴り代行の仲介業を始めようと思うのですが、だれかいいい業者をしらないでしょうか。

・補足。

駒場の装備はSSのときとほぼ同じです。

一方通行さんはA I Mジャマーを壊すなどの戦略はとらず、真っ向から駒場に勝ってます。

第二章 3

3

その日の午後、昼食を食べ終えてから風斬は上条達とはぐれていた。

この発端はレストランを出て、白井と別れた直後のこと、このまま家へ帰る為に直行のつもりだったのだが、いつの間にか上条達がいなくなっていた。

原因を考えてみるが、恐らくは途中でだれてしまったのだろうと考える。

「だったら、シャワーを使うの覚悟で突っ切れればいいのに、何でこうなっちゃうのかな」

はあ、と嘆息して空を見上げる。木漏れ日が、雲ひとつない空に紛れ込んでいた。

辺りに人はいない、ここは風斬が上条と出会った、金銭飲み装置が存在するあの公園である。とはいえその近くにあったベンチは日陰ではないので別の場所を探して座った。

缶ジュースを開けながら――今回も風斬は吸い込まれなかった――今後の予定を考える。今日は上条宅に押しかけて一日過ごすつもりだったので特に行く場所もない、当然陽炎の街にもどるのも何か嫌だ。

因みに風斬はここから上条宅への行き先は知らない。少し探せばあるかもしれないが、この日差しで堪えるのは風斬も同じこと、どれだけ化物性を解放しようとも、キリが無い。

さて、いい加減困ってしまったと、風斬はジュースを飲込む。

からかった。

「北極スパイシー味って……なんなのかな、これ」

相変わらず学園都市っておくが深い……

などどもはや現実逃避のように考えながら風斬は今後のことに思いをさせる。普段ならこのまま陽炎へとぼとぼコースなのだが、今日はそんな気にもならない。なら何か買って帰ろうかと、適当に考え始めているのだ。

たとえば料理の本とか……考えてから打ち消す。そもそも風斬はそういった知識はちゃんとある。経験はないが、レシピは頭に入っているのでそれどおりに作れば食べられる味にはなるだろう。

何故入っているかは学園都市の知識を大体詰め込まれているから、だろう。

「暇、だなあ」

暇といったら上条に出会うまでもそうなのだけけど、昔はそれ以上で考えることがあるので暇と感ずることは無かった。そもそも時間という概念が無かったのもある。

ううん、と一つ伸びをする。

「本屋でも行こうかな、何かあるといいなあ……」

妖怪の本とか、日本神話とか、インデックスに講義を受けてみるのも悪くないかもしれない。インデックス曰く、風斬には魔力どころか、それを精製するための生命力すら無いそうなので魔術は使えないらしいが。

意識をもった自然現象なのだから当然といえばだが。

そのときだった。

「では、犬の飼育法などはどうでしょう。とミサカワンコは横槍を入れてみるワン」

抑揚のない声でそう声をかけられた。

振り返ると、14ほどの少女がいた。頭には何を使うのかわからないが犬耳のようにもみえる軍用ゴーグルが取り付けられており、服装は制服姿であった。確かこれは常盤台のものだったはずだ。因みに風斬は私服——背中が斜め十字にクロスするキャミソールと、黒の薄いカーディガン、同色のロングスカート——である。

「はぁ……」

どうしたものかと風斬はあいまいな返事を返す。

その少女は感情を余り感じさせない無表情のまま、両手を肩の辺りに持ってきて手首をくいと曲げてみせる。そのままぱつりと、

「ワン、とミサカワンコは鳴いて見ます」

一切のイントネーションを廃した声で言ってきた。

「……ギャグですか？」

思わず、似合わないようなツツコミをやってしまう。なんだかキヤラがぶれた気がする。いやいや気のせいだと思っていると、不意にゆがまなかったミサカワンコと名乗る少女の涙腺がぬれた。

ぐずるような涙目になると悲痛な声で。

「うう、酷いです、ワンコは、ワンコは犬が大好きなだけですよう」
「え、えっと……」

思わず不憫に思ってしまったが、それでも風斬は犬を飼えない。
陽炎の街へは連れて行けないし、こっちでは飼う場所がない。向こうだと愛くるしい子犬が次の日にはむさいおっさんになりかねないので無理に決まっている。なったら暫く帰れない。

「だって、研究員の人も、ここじゃあそんなの飼えないっていうんですよ、酷いじゃないですかあ、私だって犬を飼いたいんですよ、それを、そんなのって……ううう、ミサカは、みじやかばああああ」

一人称が安定しないなーと、現実逃避気味に考える。

「そのうえ、飼育本も買ってくれないって、だからせめて呼んでる人の隣で幸せにしておこうって、ワンコはわざわざ家出してきたんです」

何か過去語りを始めた。ペラペラと語る過去に、一体何の意味があるのかと、未来で誰かにいわれることになるのは、この時風斬は知らないが、確かに風斬はペラペラだと、いつか思った。

薄っぺらい紙のごとく、ペラペラとミサカワンコ……ワンコが名前だろうか……は語ってくれた。

曰く、ワンコはとある研究施設に所属しているらしい。

曰く、そこはペット禁止らしい。

曰く、今日の夜実験があるのでせめてもの思い出(?)に街へき

たらしい。

まず最初の事実、とある研究施設と聞いて、風斬は自分がいた研究施設を思い出す。あれは何処かの管制室のような様子で、目的は陽炎の街に存在する風斬の観測だったはずだ。

今はどうなっているのだろう。こうやってこっちがわによく来ているがそういうえばあの研究所には立ち寄ったことが無かった。

そんな感じなのだろうか、研究施設に思いをはせる。

ペット禁止は当然だろう。ペットが暴れた所為で機械が壊れたらこの常盤台の学生はどうするつもりなのだろう、でも本当に動物が一匹もいないのだろうか、実験動物の一匹くらいいても可笑しくはないはずでは……

そもそも何故研究所なのだろう、寮じゃないというのは、どういうことだ？

で、最後。

「思い出作り（？）ですか」

「思い出作り（？）ですよー」

先ほどまでの抑揚のない、感情を押し殺したような様子は何処にも無く、そういうえば目のコントラストもなかった気がするが、今は潤いのあるいい目をしている。

「そういえば、ミサカはなんとかっていうあれもやってませんね」

「周りがそんな感じなので、仲間はずれになりたくなかったんです……女性のいじめって陰湿ですよね」

「受けたの！？ いじめ！」

「いえ、聞いただけです」

「実体験みたいに言われると、ちょっと驚くよ……」

「ごめんなさい、でも周りのまねをしてるのは事実なんですよね、とミサカは嘆息してみたり」

演技っぽく最後を飾られた。どうも初対面のアレは一種のガードだったらしい、ちょっとつつかれると直ぐに崩れてしまうが、とにかく、風斬はこの少女を、普通の少女だと認識した。

ちよっとおっとりした部分はあるが、普通に笑い普通に泣く、そんな子だと風斬は——思った。

「じゃあ——本屋に行ってみませんか？」

「……え？」

ふと、思い立ったように風斬が言うとなんかは驚いたように声を上げる。まさか買いにいかないかといったらギャグかと返された人間に、そんな事を言われるとは思わなかったのだろう。

ぼーっとしたようにして、暫くその事実を考える。そして直ぐ後に、驚愕を喜びに変えていく、一気に表情が変わる様は何かほほえましい。

そしてワンコは犬であれば尻尾をパタパタさせているであろうことは間違いない表情で、

「行きます！」

高らかに宣言した。

「じゃあいこっか？」

「あ……えと、お名前は？ と、ワンコは……」

「風斬氷華、ん。あなたの名前は？」

「み、ミサカ00001号^{ワンコ}です。よろしく！」

ビシッ！ と親指ぐーをしてくるが、風斬はそれにあっけにとられてしまう、それを見たワンコは大分顔が赤くなり、暫くすると俯いて座り込んでしまった。

宥めるのに、三分かかった。

それから、場所を移して、ここは本屋だ、それなりに広い店内へ、クーラーと面白い本を求めて十数の脚が訪れている。

風斬とワンコもその一人だ。

結局は、と風斬がいった。

「別に犬の飼育方法に関する本じゃなくてもいいんですよ、そう言うのは次の段階って奴だと思えます」

たとえば、と続ける。

数段に及ぶ棚の、丁度中段あたりにあった本を手にとって見せる。

「この本、『かわいい犬大集合!』、最初はこういうかわいい犬を

見て楽しむ、それでいいんです」

「ああ！　なるほどお、お金がない場合もありますし、最初はそうやって鋭気を蓄えるんですね？　私は基本欲しいものは実物がないと満足できないのでそういう考えには……」

「まあそう言う人もいるけど、今日一日ってことだったらこういう本の方がいいよね」

これが終わればワンコは研究所に戻らなくてはならないらしい、そうならばこういった本しか見れないだろうから、やはり本物の犬よりも、こちらの方がいいだろう。
で、ここからが本題。

「どれにしましょう……目移りしちゃうけど、一冊しか変えませんよお」

それくらいしか、今日はお金がないらしい。

「また買いに来ればいいんじゃないかな」

「それは……——ですよ」

「？　どうしたの？」

「いえ、何でもありませんと、ミサカはあわてずに取り繕います」

わざわざ外装まで取り繕わなくても……と風斬は微笑してから本棚にある本へと意識を移していった。

選ぶのに一時間かかった。

どれもかわいい犬ばかりでワンコだけでなく風斬も目移りしてしまったのだ。そう言うわけで服を選ぶのと同じごとく一時間、たっぷりかけて店に迷惑をかけながら、選んだ作品は『僕とお父さん』という作品だった。

この『僕とお父さん』、最初はネタのようなタイトルが話題を呼び、その後はネタ目当てで読んだ読者が、その感動的なストーリーに驚愕し、さらに話題を呼んだ。

それが連鎖していき、このたび、映画化が決まった感動の実話である。

因みにこれを買うとき、その前の風斬の学校の制服を着た少女が怪しい笑みで同じ本を買っていったのが非常に印象的だった。

二つ分買って二人であわせて本を読む。

で、数十分かけて読了。

所々に交えられたその当時の写真と、愛くるしい子供と犬の写真、そして感動の物語、一粒で二度おいしい作品だった。

最後は犬が怪我をしてしまったがちゃんと助かり、子供の作文、『ぼくとお父さん』によって締められた。『さびしいけどさびしくない、ぼくにはお父さんがいるから』という、子供の作文は象徴的だったとも、言えるだろう。

「うう、最後の作文……いいなあ」

最後の方はさすがに写真は無かったけれど、それでもとてもよかったと、素直に言える物語だった。いや、実話だった。

一番最後のページに張られた、子供と犬が一緒に眠る写真を見て、思わず涙をこらえながら風斬が余韻に浸っていると――

「う、あああああああ、良かったあ、良かったですよ、お父さん、良かった、ちゃんとお父さんがいるから寂しくないって、幸せにねえええ」

隣で感情移入しまくった結果、大粒の涙をこらえず流すワンコの姿があった。隣で唸り声や息を呑む音が聞こえてきたが、やはりこうなったらしい。

「よかったです、これを買って、最後にお父さん、笑ってくれて、本当によかったあ！」

ごしごしと涙をぬぐいながらワンコは自然と笑顔を作る。

ふと、少し昔のことを思い出しながら、風斬も笑う。

「私、なんだかこの子は他人に感じられなくて……不思議ですね」

「自分のことに感じられるっていうのはいいことだと思うよ？ 人間が誰かと同じなら、たとえ悲しくてもそれはいいことだと思う」

「……？ なんだか変な言い方ですねえ、不思議です。うん、不思議……」

ぼんやりとしたように少女が言う。

何かの余韻に浸って見えるそれはたぶん本に対してだろう。風斬はわからないながら、適当に考えてみる。なんだか自分で自分も感傷に浸ってみたが、この子は本当に感動したのだなど、他人事のよう考えた。

でも、それは間違いだった。

そのまま暫く、二人はこの作品を語り合って……夕刻になると、

自然と解散になった。

そしてそれが――風斬とワンコの、最後の談笑になった。

第二章 3（後書き）

上条氷華ミサカワンコその他もろもろお待ちしています。

現在、ミサカワンコを探しています。寂しがり屋なのでなるべく早く見つけ出してください。連絡先は××ー×××××です。お待ちしています。

補足

・というわけで半オリキャラと化した御坂0000一号、ワンゴウ↓ワンコの発想です。

・妹達は半オリキャラが増えるかもしれない。御坂たちが死ななかつたら、番外固体とかまったくの別物になるしね。

・ちゃっかり私服姿の風斬、多分禁書SSの中で初めて私服になった風斬だともう。

第一章 4

4

上条ははぐれていた。

夏場の日差しにだれてインデックスと一緒に立ち止まり、そうすると風斬とはぐれてしまった。今日はこのまま風斬とはお別れコースになってしまい、大分寂しくなってしまう。

どうしたものかと考えているとインデックスともはぐれてしまった。何かのにおいに釣られたらしい。

「どうしたもんかなあ」

時刻は夕刻、ここまで暫く——本屋に立ち寄って、『ぼくとお父さん』という本を適当に買ってみたいと思ったものの、それも読み終わってしまい、その後の余韻ももうない。

一緒に読んでくれる、もしくは感想を分かち合える人がいればそうでもなかったのだろうか、嘆息。実は今上条がいるこの公園、そして立ち寄った本屋、どちらも風斬がいた場所である。

そして風斬が何処で本を読んだかといえば、この公園なのだ。

「このまま帰るのもなあ……かといって誰か呼ぼうにも、知らない奴だけど俺を知ってる奴を連れてこられるとなあ」

——上条当麻は記憶喪失だ。

いくつかの記憶が歯抜けになっており、それを思い出すことはできない。それでも別の記憶がその該当を引っ掛けるおかげでひたすらに背中がむずかゆい感じを覚えているのだ。

それもあってか、別に上条は記憶喪失を隠していないが、それで

も話す気にはならなかった。因みに風斬には話していないが、わざわざ気づかれていることを話すのもあれだったので話していない。

「はぁ……不幸だ」

ぼんやりと口癖を呟く。

すると不幸虫がわいたのか、それとも空気を呼んだのか、俯く上条に影が覆った。

「何してるのよ、あんた」

今日の昼のこともあってか、少し見慣れた感のある常盤台の制服姿——御坂美琴が一人、怪訝そうな顔で上条の様子を伺っていた。

「で？ 恋人とはぐれてその友人も何処かへ行ってしまう、一人で途方にくれていた……と」

「はい」

「あんた何？ 恋人いたの？ ったく、そいつも好き者ねえ、こんな奴の何処がいいんだか」

「はい」

「べっつに？ それはいいのよそれは。私としちゃあんたが決着をつけてくれないのが気に障るだけだし？ そもそも私とあんた、特に接点なんてないものねえ……」

「はい」

「うん、それはいい、いいんだけど……あんたさあ、なに女の子を一人こんな炎天下に放り出したの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「申し訳ありません」

「世の中男尊女卑で女尊男卑なのよ？ 女の子は男の子に守られて、平等なんかじゃ絶対ないの、判る？ 少なくとも私のような例外除けば、女の子って、強いようで弱いなのよ？」

「深く反省しております」

「どれだけあくどい事考えても、女の子は力じゃ絶対に勝てないの、それをわかった上であんたはその女の子と付き合ってる？ ちゃんと守れるの？」

「前向きに検討させていただきます」

「……………あのさあ」

「申し訳ありません」

「……聞く気になりなさいよ、すつとこどっこい！」

強烈な回し蹴りが飛んできた。因みに白だった。何がと言わない。

「まったくもお、あんたさあ……女の子を守るってどういうことか、

解ってる?」

「それは……退かないこと、じゃないか?　ずっとその子の前に立っていて、ずっとその子の盾になる、そういうことだろ」

「……ま、聞くまでもないか、あんたはちゃんと実践してるものね、特にそういう時は――あんた絶対に不幸って言わないでしょ」

「いえねえだろ、俺も不幸だけど、多分その子はもっと不幸だ」

うつむいた顔をあげて、上条は会話を続ける。
しばらくの間それは続いたが、やがて話題は英雄談義へ移って行った。それも少し流れ、ヒロインについての話題になる。

「戦うヒロインっているじゃない」

「赤い髪のメロンパン好きとかか?」

「そうそう、それ。……思うんだけどさ、私ってああいう作品の後ろで守られてる男ってどーも気に入らないのよね」

「基本的にへたれだからな、煮え切らない優柔不断って、いかにも嫌いそうだな」

「そうそう、その通りなのよ、私ってばそういうタイプが大嫌いだねえ」

「じゃああれだ、相棒系ヒロインとかどうだ?」

「黒子とか?」

「なんでやねん」

「だって、そんな気がして……というか、黒子って知ってるの？」

「さっきファミレスで会ってきた」

「どこの？」

「野次馬……でわかるか？」

「いつ？」

「ちょうど昼ごろ」

「その頃、私そこにいたんだけど」

「まじか」

「マジ、ちょうど変なのと相席してた」

「変なの？」

「白黒ね、黒子じゃないわよ？ 諸」

「ああそう、ってだいぶ脱線したな」

「相棒系ヒロインねえ………別にいいんじゃないの？ だっていまどき男尊女卑は流行らないでしょ」

「男女平等パンチー！　とか？」

「それ、行ってて悲しくならない？」

「？　何が？」

「いや、別に」

あきれ美琴、首をかしげる上条。

「要するにあれよね、ヒロインは立ち上がるならヒーローは立って
いなくちゃね」

「それはまあ、同意」

「精神的支柱とか、戦場に必要なのは違うでしょ、多分そういうテ
ーマのへたれは最終的に死んで逆にヒロインを不安定にさせるわね」

「死ぬわけじゃないだろ」

「生き返るかもしれないわよ？」

「生き返ったら最強でも倒せそうだな」

「そうね」

「倒さなくちゃな、最強」

「そうかしら」

冗談のように言葉を交わしつつ、二人は自販機の前へ自然と移動する。上条が立ち上がり、美琴が付いていく形になった。

ともにヤシの実サイダーを購入、どうやら他人がいると上条は不幸にはならないようだ。

「わざわざ買う必要なかったのに……」

「ん？ 何言ってるんだ？」

「べっつにー？」

ベンチに戻って話題も戻りながら、自分自身のことへ転換していく。

「ところで、お前っていつも何やってんだ？ ヒーローっぽいこととか」

「此間でかい化けモノ倒したわよ？ 幻想猛獣——AIMバーストとか言ってたかしら。あれは大変だったわよー？ 三角柱つぶさないと倒せないんですもの」

「それって……」

風斬と同じじゃなかったか？ と考える上条、美琴本人はその詳しい顛末だと誤解したのか、ふっふーんと、鼻を鳴らしながら語り始めた。

「レベルアップ幻想御手ってわかるわよね」

「ああ、あれか……確かうちの学校でそれを使ったやつの補修やつ

てたなあ」

「あんた使った？」

「いや、正直俺の幻想殺しがそれを使って成長するとは思えなかったし、そもそも手に入れる術も、金もなかったんだよ」

「というか、確かその頃はインデックスの事件真っ只中なので事件が終わった後、ニュースでやったのを見ただけだ。だから結局上条は関わることもできなかった。」

「そうよねえ、あんたの場合最強のレベル0ですもの、例外でもなければ負けるはずないわね」

「肉体強化とかは無理だぞ？ 後昨日の事件の犯人、能力使わないのにアレだからな、勝てるわけねえ」

「え？ アレ能力使ってなかったの？ だとしたらすごい話よね、レベル0とはいえ武装した集団を全部叩き潰したんだから、しかもあんな凄惨に」

私も能力ありならあの程度いけるけどねー、と自慢げに言う美琴、そこは自慢する所じゃないと上条。

「つか、見たのか？」

「現場だけね。あんたは……あ、黒子と同席か」

ふんふんとうなづく美琴。

「まったく……末恐ろしいわね、この街は」

「まあそれはいいだろ……で、結局さ」

ん？ と美琴が首をかしげて、上条は最初から気になってたんだが……と前おいて。

「名前なんだっけ？ お前」

空気が固まった。

そのまま数秒、そして。

「ビリビリビリ言いすぎて名前忘れたんかあんたはあああああ
あああ！」

電撃が舞った。

時刻は夕刻、午後の六時かそのあたりだろうか。本来ならば夏の夕暮れはもう少し先のはずだが、その夕日が雲に隠されてしまったため、一足速く、まるで追いかけてくるかのように夕暮れ時の暗さを得てしまった。

上条はその中を走り回る。原因は後ろから飛んでくる雷撃である。高速で飛んでくる紫色の矛にさらには連続して襲い掛かるなでるような雷撃。

こちらが逃げていることを加味して必殺が可能な槍を直撃させようとはしていないが、それでも肝を冷やすことに変わりはない。

不意に襲い掛かった違和感に対して、反転し、投げられた雷撃を無力化する。

どうしたものかと打開策を考えなくてはならなくなったとき、その逃走劇は終わりを迎えた。

「っ！ 氷華！」

叫んで、振り返る。そのまま立ち止まり、風斬とは若干距離をとった場所に陣取った。両手を広げ、できうる限りまじめな顔でもつて、

「すみませんでしたー！」

同時に、とび蹴りが顔面に突き刺さった。白だった。何がと言わないが。

「な、何があったのかは知らないけど、大丈夫？　とうまさんに、それにワンコちゃー！」

あわてたように風斬が近寄って、それが起因だった。

「あんた、誰？」

美琴のその一言が、原因だった。

第一章 4（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
傾物語面白いです。

補足

- ・無駄話フェイズ。
- ・物語シリーズの伏線回収ってすごいよね。

第一章 5

5

美琴は言った。

風斬のことなど知らない、初対面だと事も無げに言った。

会ったのが十数年前だとか、そういったことではなくただ単に美琴は知らなかったのだ。風斬のであったワンコと、上条と英雄談義をしていた美琴、同じ場所にこの二人は最初からいたのだ。

それが疑問から、膨らむような嫌疑に変わり、行動に移された。

最初に行動したのは美琴だ、風斬からことの顛末を話されるとすぐさまその真意を探ろうと、その場を離れた。その際連絡が取れるようにと、上条と電話番号を交換していた。風斬が持っていなかったからだ。

そして上条と風斬は暫くその場で黙りこくっていたが、それでも動かないわけには行かない、美琴だけに任せておくわけには行かないと、自身も場所を移すことになった。

それぞれ分かれて、風斬はワンコを探す為に、上条はインデックスが待つであろう自宅に、一度戻るために。

物語は大きく動き出す。

それが当人たちの、思いの外であろうと、中であろうと。

風斬は何処とも知れぬ場所にいた。

ワンコの居場所はいまだ知れない、そもそも分かれたのが大分前なのだ、向かう方向が同じでなければ向こうが逃げるつもりが無くとも、追いつけるはずがない。

それでも追いかけるしかなかった。

何処とも知れないダンボールの中でおびえる捨て犬、そんな想像が、風斬の脳裏にちらついたのである。

（なんで、だろう。解らない、美琴ちゃんとワンコちゃん、どちらも“まったく同じ顔をしていた”二人の違いは多分気性の違いから来る気のせいだと思うけど、美琴ちゃんは釣り目で、ワンコちゃんは垂れ目だった）

あとは何故かつけていた軍用ゴーグルだった。

あれが何かはわからないが、美琴はどうも電撃系の能力者らしい、だったら、もし風斬の予想が正しいのであれば――

（能力者は、たとえばまったく同じ能力であろうと、個々の自分だけの現実リアリティによる違いでその能力は変質する。例えるなら、魔術師がその宗派によって魔力量を変えるのと同じ）

これはインデックスからの知識だが、魔術師というのは、まったく同じ人間であったとしても、その形態、および宗派、その他が変わるとそれだけで使える魔力量が変質するらしい。

軽く聞いただけでその原理はわからないが、だがそれは能力者にもいえるだろう。

周りの環境や何かで、能力者の能力の成長具合、使用用途は変わってくる。たとえばまったく同じ遺伝子を持つ、俗に言うクローンと本来の能力者が同じ炎系能力者でも、自身の手元から放たれるか、それとも相手を直接燃やすかは、その人間が行う演算などで変わってくる。

（だとすれば、そうなの？　もしワンコちゃんを犬に触れさせない原因が、単なる意地悪や、思考に邪魔を生まないためではなく、一

種の親切であるのなら……！）

考えるうちに、予想は段々付いてきた。

御坂美琴という少女と、ミサカワンコという少女、そのつながりが。そしてこの予想が正しければ、そして今日行われる実験、この内容が風斬の予想と違わないのならば。

恐らく、ワンコは今日の夜、死ぬ。

それは、それだけは――

（絶対にさせない、当麻さんみたいには、絶対にしない！）

上条当麻には記憶が無い、それはあそこで上条に肯定されたときからわかつている。わかった上で認めてくれた上条に、風斬は甘えているのだ。

記憶がないのであれば、上条は風斬が化物だといっても、実感が持てないだろう。だから記憶喪失だということに、気が付かない不利をしているのだ。

それが本当に、何の意味の無い事だと、気が付かずに。

上条当麻は一時の帰宅を行った。

インデックスがいなかった場合は恐らく小萌宅だろうから、電話をかけておくつもりだった。さてその結果、果たしてインデックスは家にいた。

それだけでなく、電話を取って話を聞いていた。

おぼつかない様子だったが、上条が帰ってきたのを見て、喜び勇

んで近づいてきた。それを見るにどうも通話相手の目的は上条だったらしい。

さて誰か——両親か、それとも小萌先生か、はたまた……などと考えつつ、受話器をとる。

『始めまして、根性です』

反射的に指が通話終了を押した。
直ぐにもう一回なった。

『何をするんですか、アナタが上条当麻だというのは超解っています、ですがそんな根性なしだとは思いませんでしたよ!』

「何の話だ……つか、だれだよ、あんた」

『アナタに名乗る名前は……まあいいでしょう、私は絹旗最愛、またの名を超ど根性絹旗ちゃんです』

「タイトルじゃねえか」

『読んでくださいね?』

訳がわからない会話をすこし続けて、こほんと絹旗が咳払いをする。

『ちよいと時間はありますか?』

本題だというように、そう切り出してきた。

電話越しに、声音が変わったのがとてもよく響いてくる。それは何となく、怖さだとか、そういったものを感じてしまった。

「悪いが今は忙しい」

『——それが、御坂のことであっても、ですか?』

「っ!？」

息を呑む音が、いやに大きく響いた。誰かのうめき声のようにも感じられたそれは、しかし上条のもので間違いなかった。そしてそれが伝わったのだろう、怪訝そうな顔でインデックスがこちらをのぞきこんでくる。

「どうしたの？」

「い、いや——」

ごまかすようにそう言って、しかしすぐに打ち消す。——それじゃあだめだ。そう考えて、

「後で話す」

「……」

しばらく黙り込んでいたインデックスは、やがてにっこり笑って。

「わかった。待ってる」

そう言って、その場を離れた。離れて、行った。

『超お疲れ様です、といっておきましょようか？　よく聞き取れませんでした、あなたが根性を見せたというのが、少しだけわかります』

「対したことじゃない、ただ必要だったただけだ」

『だったらそれはいつまでも必要です、根性はいくらあっても足りませんから——少なくとも今は、ワンコのために』

「……教えてくれ、そいつの事を」

『超当然です……が、電話越しにというのもアレですし、場所を移しませんか？　今からそこに、ワンコも来るはずですし』

場所は——と声が続けられ、そしてそれを上条が聞き取る。……偶然ながら知っている場所だった。第七学区のとある公園、ちょうど上条が御坂と会話し、風斬がワンコとであった場所だった。逆戻りといえばそのとおり、だが構わない、示されたならそこへ向かうまでだ、今はとにかく情報がほしい。

絹旗の提案を、上条はすぐに了承する。断る理由もないからだ。

『それでは、根性とご健勝を』

つーつーと、電話の切れた音が響く、すぐに受話器を元の位置に戻すと、上条はインデックスのほうを向いて、

「行ってくる」

「……ひょうかを危険に晒したら、怒っちゃうんだよ」

「その時は盛大に噛み付いてかまわないさ、頭洗って待っておく」

軽く笑って、上条はその場を後にした。

ひとつ、

「夕飯は小萌先生んちでもらってくれー」

素晴らしい残して。

絹旗最愛、彼女がいるのは公園、ではなくその近くのビルだった。樋口製菓・第七薬学研究センターと呼ばれるそこは表向きは筋ジストロフィーの研究施設、実態は絶対能力進化実験にかかわる研究所のひとつだ。ワンコはここに所属している。

その入り口付近で、絹旗は待ち合わせをしていた。今はビルの壁に背をつけて寄りかかっている状態だ。

「間に合いますかねー」

つぶやきながら、ぼんやりと空を仰ぎ見る。朝まであればほどに照りつける日差しが襲い掛かってきていたというのに、今は生憎の天気。生粋の曇天である。

これは一雨くるかとぼんやり思いながら、ふとひとつの気配を感じ取る。

さて、師匠かワンコか——どちらかだろうと体を向ける。

風斬氷華が、そこにいた。

息を切らせて、ちょうどそれを整えようとしているのだろう、暫くするとそれは急に引っ込んだ。絹旗は少し驚いたようにしながら風斬をマジマジと見つめる。

「あ、あ……えっと」

「……んー」

唸り声を上げながら思考を切り替えつつ、それを一気に加速させ、脳を走らせつつ考える。師匠はともかくワンコが来たのであれば直ぐに切り替えたのだが、どうにも驚きが来てしまいおぼつかない。

風斬はいえば、息を一瞬で整えたのを目撃されさらに驚かれたように自分自身を見つめられているのに気が付き、おびえたようにしどろもどろになる。

暫く考え事をしていた絹旗だったが、どうも自分が煮え切らない所為で風斬が慌てているということにきがつき、思考をさっと切り替える。

きっかけがなければ、もう少しおぼつかなかっただろうが。

そして、ぽつりと一つ一つ単語を漏らす。

「――風斬氷華――霧ヶ丘女学院に所属する、能力名は便宜上『正体不明』とする。その実態は能力者が無意識に放つAIM拡散力場の集合体であり、人間ではない。本来ならば意思は生まれなかったの固体であったはずだが、現在は意識が確立され、頻繁に“こちら側”で観測がなされている。こちら側で観測される理由、及び意思の確立の原因は定かではないが、どちらも幻想殺しが関わっているものと推察される」

ペラペラと、資料を朗読するように機械的、俯瞰的に絹旗は談じる。

「え？」

純粹に驚いたように風斬が目を瞬かせる。

どうということかと啞然としながら、言葉を沈黙させる。

「アナタのことはちゃんと調べてありますよ、にしても超偶然ですねえ、ワンコってば、どうやってたらこんな学園都市のブラックホールを引っ張り上げられるんですか……」

「ぶ、ブラックホール……」

「いいネーミングでしょう？ 別に他意はありませんよ、他にもブラックホールと呼べる人はたくさん居ますしね、実際あのセロリもそうですし」

「せ、ロリ？」

「いやいや、気にしないでください、超独り言ですから」

それよりも、と絹旗は体を反転させる。

「あなたの目的はわかっていますよ？ まさかそちらから来るとは思いませんでしたが、まあいいでしょう。こっちの方が超好都合ですから」

全部解っています、と絹旗は言う、曰く根性に不可能はない、ら

しい。よく解らないが絹旗が語るに、根性は彼女の信念らしい、そう言うものかと、納得しておくことにした。

なんにせよこの少女は風斬の正体を知っていても、動じない、それにはとても、安心した。

何せつい先ほどまで、風斬は自分自身の正体を隠した上で他人と行動したのだ――その間心のどこかで感じ続けていた不安が形になって、そして消えていく。

正確には拡散する、というのが正しいのかもしれないけれど。

絹旗はといえば風斬に背を向けたまま一言、

「そろそろですね」

とだけ呟いていた。

「あ、あの――」

それを聞いたからか、それとも意識に余裕ができたからか、風斬はやっと本題に言葉をかける。そもそも風斬はワンコを探しにきたのだ。

「――ちよつと待っていてください、あなた……今までの私の言葉の中で超疑問を覚えなかったんですか？　いろいろ言いましたよ？」

問いかけはさえぎられ、呆れたような声を帰ってきた、ついにて害虫か何かを馬鹿にしながら見るかのようなジト目を投げかけてくる。

完璧に馬鹿にされている。少しむっとして口を尖らせるが、絹旗は鼻で笑って返してきた。取りあうつもりは無いらしい。

仕方がないので思い出してみれば、流石に直ぐにわかった。
というか、何故今まで気にとめもしなかったのだらうと、訝しむ
ばかりだ。

「っ！ あ、あなた、ワンコちゃんを――」

そこまで言って、しかし遮られた、原因は二つ、静かに、という
ジェスチャーと、あわせてビルの中から聞こえてきた足音だ。

人かと驚いて、そして続けざまに現れたそれを見て、さらに驚く。

ドアがゆっくり、何かを宣告するように開く、それは風斬だけに
響いたものではなかったはずだ。ここに居る人間には全員――状況
をうまく把握できていない風斬ですらわかる。

いや、正確には、予測の付いていた風斬も、ちゃんと解った。

宣告の内容……ばかして表現したものの、それは最初から一つし
かなかったのだ。

――死の宣告と共に、ミサカワンコが現れた。

第一章 5（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしてます。

べ、別にコレといって何かあったわけではありませんが、がんばってください。

補足

・そして動き出す物語、根性絹旗ちゃんが先行的に合流です。

第一章 6

6

今、美琴はどんな表情をしているのだろう。

自分自身ですらわからない、意味も無い考えが何度も浮かぶ、意味のある考えも浮かんで、しかし澱んで行く。意識が、ではなく根源が。

——雨が降り出してきた。暗いくらい夜の闇の中で、薄い膜のように辺りへ降りている。まるで全ての存在を滞らせるように。

雨が降りしきる中、美琴は先ほどの公園の前に居た。意識してこへ向かっていたわけではなく、ただ単に足がそこへ向いていて、それが一体何の意味を指すのか、美琴は解っていて、

だからこそ、入り口、公園の前で立ち尽くしていたのだ。

「……結局、さ」

その後ろには、人が居た。

呼び出しを受けてここへ来た上条当麻だ。——ここへ来た当初、美琴は何故きたのかといった。こいといわれたからだと聞かされて——偶然だと知って、希望にも似た思いはしぼんでしまった。

後に残ったのは、なんともいえない、やり場のない怒りのような、希望すらも飛び出てしまったパンドラの箱のような、そんな激情。

「何をすればいいのかなんて、わからないのよ、妹達^{シスターズ}？ 絶対能力進化実験？ それが何？ 私はただの人間なのよ？ 数時間前までそんな事、何も知らなかったの」

「……………」

その感情を自覚したときには、もう言葉は動いていた、上条に向けて、まるで八つ当たりのように言葉を投げかけていた。

上条はただ黙って、それを聞いている。

「馬鹿みたいよね、私、あんたに女の子を守るってどういうことかとか、ヒロインに守られてるだけのヘタレが嫌いだって言ったのに、結局は私もそんな事言える資格ないじゃない」

「……なあ——何が、あったんだ？」

「——……馬鹿みたい、あんた、何でここに来たの？ 来る意味、無いじゃない」

少なくとも、自分の知る限りでは、そう次げて、美琴は振り返る。ぽつり、ぽつり、とゆっくりとしていた雨音がその足を速めてきた、雨にぬれる美琴の髪から、雨水が滴り落ちる。

——雨にぬれる美琴の頬から、雨水が滴り落ちる。

「一方通行アクセラレータって、あんた、知ってる？」

「……いや、知らないな」

「そう……」

暫く考えて、答えを出すも、美琴は興味なさ下にそれを返した。そんな事はどうでもいいと、今はただ、語りたかった。

「学園都市二百三十万人の頂点、レベル5、第一位——最強の名前

よ」

「それ……って——おい、まさか——！」

上条の中で、いくつかの記憶が反芻させる。

——絶対能力進化実験

——絶対能力……レベル6

そして今真っ先にでた単語、学園都市の頂点、一方通行。

これは、簡単に繋がった、

「多分、ご明察、因みに妹達っていうのは、私の遺伝子情報を使ったクローンのこと、それを纏めてそう呼ぶらしいわ、私とまったく同じだけど、まったく違う存在、それを妹っていうのはなんともはや、って感じよね」

自嘲気味に、美琴は笑う。

そこに明の感情は一切無く、ただ負だけが、濁り、澱んで、沈んでいた。

「纏、めて——複数いるのか!？」

「……二万人」

ぼそりと、か細い雌鹿の鳴き声のような、弱弱しい声が、聞こえてくる。

「な——!？」

上条の声が、完全に死んだ、意識すらも理解を追いつかせていな

いだろう。その事実には驚愕し、そして――畏れている。

「二万人の妹達を殺して、それによって一方通行を絶対能力者へ押し上げる、これはそう言う実験よ」

そして、凍りつく、紛れも無く世界の時間が止まった。俯く美琴と、固まり、動くことの出来ない上条、その意思に、どれほどの違いがあっただろうか、上条は驚愕だけであつたか、それとも恐怖や、絶望のような畏れもまた、抱いているのだろうか。

いや、違う、上条の表情は驚愕はあるだろうが、畏れも絶望もなにもない、ただそこに在るのは――

「いろいろ考えたわよ、たとえばレベル5である私が、あつという間に無様にやられたら、とか、レベル0……あんたが一方通行を倒しちゃって、実は一方通行って弱いんじゃないかって、思わせたり、とかね」

同じレベル5だ、一方通行と御坂美琴はそれなりに拮抗できるはずだ。だからもし、御坂美琴が一手も手を尽くせず、死亡したのなら、実験をとめることができるのではないか。

逆に、レベル0が一方通行を倒してしまえば、一方通行は絶対能力に到達できないという事になるかもしれない。

そう考えた、けれども、

「無理なのよ、何でも調べたところ、私と一方通行が殺しあえば、一手すら必要ないそうよ？」

――美琴が何かをする前に、一方通行によって、殺されてしまう。前者の方法は使えない、やろうと思っても、誤差の範囲にすらならないのだ。

「確率は百%、誤差が在ったとしてもそれは一手か二手の違い」

絶対的な壁を越えることは、どうあがいても出来ない。絶対の絶望は、永遠に帰さない。

「一方通行に一手返せる可能性があるのは第二位と第四位だけですって、なんで第四位やってるのよ、そいつ」

もはや現実逃避のように、一言漏らして嘆息する。

それが最後だった、そのひとつ以降、美琴は黙りこくってしまう。無理もないが。

「……俺は行くぞ、一方通行が弱かったと思わせりゃいいんだろ？
だったら、俺は行く」

「何、言ってるのよ」

長い長い沈黙を破って上条は宣言し、美琴に対し、踏み込む、それに対して美琴も、当然返した、もはやよどみなく、それだけは言っておかねばならないと。

「無理に決まってるわ、だって、あんた自分で勝てないって言ったじゃない」

「……なんだよ、それ」

「昨日のアレ、犯人は一方通行だそうよ？」

「っ……マジか、よ……!!」

思い出す、ほんの数時間立っていない程の前、上条は確かに、美琴にいった。

『肉体強化とかは無理だぞ？ 後昨日の事件の犯人、能力使わないのにアレだから、勝てるわけねえ』

それに、

『まあそうですの、でも気になるんですわよ、私、怪我の方もそれなりに見てきましたが、アレは間違いなく人を素手で殺せる人間の代物でしたわ』

白井の言葉。

『私、これでもそれなりに武術には精通しておりますの。とはいえそれなりに齧った程度ではありますが……それでも実力者と自分の差程度や、その癖は解るつもりですわ』

『ん……まあいいけどさ、とりあえず今はその達人のことだろう？』

『そうですわね、で、本題ですけど、彼らは武器を持っていましたわ、学園都市製の短機関銃と拳銃、どちらも一世代まえのようですね』

武装していたという、話だった。

『つまり、彼らは相当な武装を行っていましたの、こんな相手、あなたはたった一人で突破できます？』

『無理だろうなあ、俺が相手できるのは一人か二人くらいだよ、三人以上は逃げるね、そもそも武装してりゃあ一人だって逃げるぞ？』

思い出す。

このことは本心ではあった、他人事の本心ではあるが、実際に自分が戦うとなっても、同じ感想を得る。もしくは同じ絶望を抱くことだろう。

それが今、この時だ。

そう、上条は――退かない。

「それが、どうした」

上条と、妹達は何の接点もない、一度も顔を合せた事はないし、助ける義理も、義務もない。

「何言ってるのよ、あんた、自分から死に行くって言ってるのよ？ 馬鹿みたいに――無敵のような最強に挑んでも、勝てるわけないじゃない！ あんたの右手が何？ 幻想を殺せる？ 一方通行には無敵の盾があるわ、あいつは向き……ベクトルを操る、攻撃を返されちゃうの、だから確かに意味がある。でも、それが何？ ふざけんじゃないわよ、勝てるわけがない、それこそ――」

美琴は、上条よりも、少しだけ妹達に近い、その少女は、現実を突き付けるように、顔を伏せ、スカートを握り締め、雨に濡れ、泣き崩れるように、宣告する。

「あんたの右手が――幻想よ」

美琴の立つアスファルトのすぐそばに、雨粒が落ちた。

上条は少し、沈黙する。

しかしすぐに何かを思いついたように――実際に唐突に思いついたのだろう、気軽な声で、話しかける。

「その妹達と、俺の恋人、氷華が知り合いなんだよ、多分、あいつのことだから、無茶するんじゃないかな」

言いながら思い出して、そして言葉に紡いでいく。

「あいつは強い奴だから、自分ひとりで、頑張って立っていられる奴だから、俺はあいつのことをちよっとしか知らないけど、あいつはすごく強い奴だ」

だからこそ、

『要するにあれよね、ヒロインは立ち上がるならヒーローは立っていないくちやね』

「あいつには俺が必要なんだよ、自惚れだけどさ……自惚れだからこそさ、俺はそうやって言いたいんだ、俺は、あいつのことが好きだから」

たがえない、多分風斬は、ここに来る。あの絹旗という少女がここを指定したのは、おそらくそれを予期していたからだ。

風斬にとって、多分その子は、ワンコは大切な友達だから。

「……精神的主柱とか……戦場に必要なのは………違うでしょ！
多分そういうテーマの……へたれは……最終的に死んで……逆に
ヒロインを、不安定にさせるわね」

先ほどの焼きまわしのように、まったく同じことを美琴は言う、
それが現実なのだと、言うように。

「死ぬわけじゃないさ、生き返るかもしれない」

一泊、上条は間をおいて。

「倒さなくちゃな、最強」

同じように、あの時とは全く違う、確かな言葉で、上条は宣言し
た。

「……そう、かしら」

美琴もまた同じように。

しかし、それはまるで懇願するかのように、聞こえた。

第一章 6（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしてます。

もしもし？ 俺俺、そうそう、あとがきだよ、あとがき。

補足

・4の無駄話フェイズから伏線回収。

・他にもいろいろ。今回は結構伏線をばら撒いてみるので。

第一章 7

7

「……ここまでが私の予想、多分クローンの数に違いは在るだろうけど、三万は行かないよね？」

風斬氷華は、長い長い推理の最後をそう締めた。

ここに来るまで考えていたこと、ミサカワンコは御坂美琴のクローンであること、今日行われる実験で最悪、ワンコが死亡すること、妹達——いまだ風斬はこの名を知らないが——の数もまた風斬は当てて見せた。

正解を聞くワンコと絹旗は、それを肯定するしかない。

「ご名答、よくもまあここまで超解るものですね」

代表するように絹旗が言う。

意味も無く笑って、それから再び柱にもたれかかる。同時に、この雨を予測していたのだろうか、折り畳み傘をとりだして広げる。

「私はもう一仕事を超あるのでここに残りますが、お二人はどうしますか？」

聞かせる気が在るのかないのか、随分と小声で絹旗は話しかける。当然といえば当然だが、それに応える者はなく、無言の回答に、絹旗は一つ、肩をすくめた。

暫くそのまま、ただ雨の音だけが流れる。

その中で、最初に口を開いたのはワンコだった、睨みつけるよう

に、見咎めるように見つめてくる風斬に、無理やりとってつけたような笑顔で笑いかける。

「こんなところで、どうしたんですか？ 氷華ちゃん、ワンコに会いに来る理由は、特に無いはずですが」

親しげに話しかけてくる少女は、しかし途中で何度も言葉につまり、かなり無理をしていることが、容易に知ることが出来た。

だがそれを知ることが出来たとしても、風斬は言葉に困ってしまう。

目の前で死に行く少女を、風斬はただ黙ってみていることしか出来ない。助けを請うように、意思を這わせても、答えなど何処にも無く、絹旗もまた、空気のごとく静まり返っていた。

考えもしなかった。

目の前で苦しむ友人に声をかけるのは、こんなにも息の止まることだったのか。初めて知った事実と、その上で、苦しむ友人、ワンコの存在と相対し、風斬は止まった息を、一つ飲込んだ。

「……ワンコ、ちゃん」

そうすることで、やっと言葉が出た。

ただそれも、ただその少女を引き止めるだけの、単純な言葉、乗せるものも、乗せられた意思も、何もない。

「どうかしました、か？ 私は、何も、ありませんよ？」

つまり、止まりなりながら、ワンコが返答する。

それは返す言葉という意味だったか、ワンコという存在自身のことだったか、ワンコ自身の様子を見れば、それは後者であるように

しか、思えなかった。

どころか、それ以外の意味は、存在しえないかのように、ワンコは言った。

「ワンコちゃん、私は……」

言いかかって、言葉が無いことに気が付く、怖くないかと聞いてもいい、死にたくないかと聞いてもいい、だが、それはだめだ。それじゃあ意味が無い。

この少女が、こうやって笑う意味が無い。

だったら、

「……友達、だよね？」

だったらそうやって、ただ自分自身を思うしかないじゃないか。今この場でワンコを引き止められる人間は居ない、彼女は諦めている。恐らく風斬に話しかけるずっと前から、それが必然なんだと、諦めている。

……まるで、“ぼく”のように。

「当然じゃ、ないですか」

ミサカワンコと、『ぼくとおとうさん』の“ぼく”、この二人はよく似ている。犬が好きで、寂しがりやで、自分の、父親の、死を何処かで諦めてしまっている。

本人はそれを否定するけど、本人はそれをよくわかっていないふうだけど、ちゃんと解ってるはずなんだ。無理をして、笑っていることくらい。

「とっても楽しかったから。とっても嬉しかったから、氷華ちゃんが友達で、本当に良かったです」

それは本音だった、心のそこからでた、本音。

でもそれは、今のワンコには、何の関係もなかった。だからこそワンコは、そのことを誇る。

「氷華ちゃんてよかった……です」

いって、舟をこいでいた絹旗の元へ歩み寄る。そして懐からあるものを取り出した。

絹旗はあくび一つ、それに呼応して、ワンコの手渡したものを受け取る。

それは手紙だ。便箋に包まれたそれは、折り曲げられた後がある。手で一箇所を力強く握りこむと出来る代物だった。

「じゃあ……」

そのままワンコは反転し、数歩歩く、風斬は追いかけようとするが、阻まれる。自分自身の意思が、風斬を阻んでいた。

目の前の少女の覚悟を、揺るがすことが出来ない。

「また、明日」

ワンコは、その意思ある瞳で告げて持って、その場を去っていった。

追いかけられなかった。

風斬はそれを自覚する。どうしても足を動かす気にはなれなかった。なぜならば、あの少女が、憂いを浮かべ、今にも泣き出してしまいそうな、自分に似ていたから。

少し前、小萌の家でとある錬金術師にあけた穴から飛び降りるとき、上条が手を伸ばしてくれなかったように、風斬もまた、手を伸ばせなかった。

ただ圧倒的に違うのは、伸ばしたか、伸ばせなかったか、もしくは驚愕があったかなかったか。

つまり風斬は、いまだ手の伸ばし方を知らない。人を救う方法を、知らない。

「……私は根性の無い奴、信念の無い奴が超大嫌いなんです」

広げられた折り畳み傘をくると回しながら、絹旗は言う。目を伏せる風斬を、直接まっすぐ、正面から見据えて、その意思に、信念無き炎はともっていない。

「だってそうでしょう？ 人間、生きているのならば何かしら出来ることがあるはずなんですから、それなのにそのことを探そうともせず、周りに当たるだけの人間に一体何の価値があるのか、私にはわからない」

当然だとは思う。

だけど否定したくもまた、あった。——上条ならばそれに同意して、そして自身の言葉でそれを語れるのだろうか、風斬には解らなかった。

「人間は生きているんですよ？　だったらその事に何がしかの意味が超えるはずで、生きるってことはそれを探すことなんです」

信念がなければ、人間は生きていけない。

絹旗の場合、それが根性であって、根性が彼女の中で最もかっこよかった生き方なのだ。そうやって、絹旗は語る。

「昔々、とある学園都市の暗部に、一人の少女が居ました。少女はその精神を壊し、自身の死に何の感情も抱けなかった、だけれどそこに、一人の生き方を知った人間が現れた。彼は少女に行き方を、信念を教えた。……少なくとも、私は自分の信念を、二度も疑うことはしません」

それは一体誰に向かって話しかけているものだったか。風斬に対してか、それとも自問自答をしているのか、一人語りは、しかしまだ終わりそうに無い。

「同じですよ、人間って言うのは、あなただって同じはずですよ。生きたいんですよ、誰だって」

聞いて、はっとする。

絹旗はこれを、自分に対して言っている。同時に風斬に教えている。

つまり、

「どれだけつらくても、それは変わらない、死というモノを知って、怖くない人間なんて居ないんです。たとえば試験管の中で、ろくに感情を与えずに育てられた、クローンであったとしても」

だったらなおさら。

そう考えて、風斬は顔を上げる。――絹旗の存在が、間近にあった。自分の目線の高さほどに、絹旗の傘が覆われている。

それがあがって、絹旗最愛は顔を見せた。

「これはワンコが自分の妹達に向けたものです。生贄として待つ一九九九の存在へ、あの子が残した遺書です。伝わるはずのない、彼女の意味です」

便箋を取り出して、絹旗は見せる。

「アナタにはこれを読む資格がある。意思を持たせられなかった妹達よりも、自分を助けてくれない薄情モノの私や妹達よりも、アナタならば、資格がある」

「それ……って」

問いかけようとして、絹旗の傘が持ち上がる。見上げるようにして、無言のまま、風斬を見据えていた。吸い込まれるようなその両目^{うもく}で、大きく大きく灯台を揺らしながら。

「……っ！」

言わんとしていることは直ぐに知れた。無言だろうと、その意思は確実の元、風斬へ下された。

そのまま絹旗は、持っていた手紙を、風斬に手渡す。

「ぬらさないようにしてくださいね？」

そういいながら傘を風斬に対してさす。既に手が濡れているので意味がないような気もしたが、それを払って風斬は気を取り直す。便箋は水玉模様の水色便箋で、中の手紙もセツトのものだった。ゆっくりと中身をあげ、便箋を取り出す。半分が手に収まる程度の、それほど大きくない手紙の中身へ、風斬は視線をさらに落とした。

――違和感には直ぐに気が付いた。

この手紙は今までワンコが取り出して、絹旗に手渡すまでの間しか雨にさらされていない。それはほんの数秒のことで、便箋の外に少し垂れた程度に留まった。

つまり、中身が雨にしみこむことはありえない。

だというのに、何故この手紙はこんなにも濡れているのだ。

最初の、上の方はそういったことはない、下の方、段々と手紙が進むにしたがってそれは強くなっている。水玉模様がそのまま、下の方だけ染み出したかのように、染まっている。

コレはつまり……

読んでみて解った。

それはそうだ。

ワンコには誰も居ないのだ。助けてくれる人間も、すくってくれ

る友人も、守ってくれる親友も、好きになれる人だって、いないのだ。

風斬は本当に偶然話しかけた、極々単純な存在、本来ならばただ一日だけの思い出を、偶然すごすための、一種の材料でしかなかったのだ。

こんな場所で、こんなふうには、唇をかむことも無かった。

「……解りましたか？」

風斬に声が届いた。

絹旗のものだ。――彼女は手紙の中身を読んでいない。手紙の中身を知ろうともしていない。それは一種の当然であり、その上で絹旗は、最適解を、投げかけた。最も欲しかった言葉を、風斬に対していった。

頷くだけで、それは正解だと直ぐに肯定できた。

「助けなくちゃ」

手紙をそつとたたんで、中に戻す。入れられたときと同じように、しっかりと封をして絹旗に返す。

「救わなくちゃ」

ことは本当に単純、あの時とは随分違う、自分のときとは条件が大分楽だった。

どちらも、風斬もワンコも、絶望はした、寂しく、諦めようとも思った。

だが、ワンコには、否定される要素が、欠片も存在しえなかった。

クローンであると同時に、完成品であるあの少女は、出来合いのものとは違う——いや、根本は同じだ。だが、出来合いの未完成品ですら、人間なのだ、人間ですらない風斬が、また人間であるように、

ならば、寂しがり屋のワンコが、

人間でないはずが、何処にも無い。

「手を伸ばしたって遠くない、ただ少し、私が変わらなくちゃいけないだけ。私は、私の大切な人を助けたい、私が助けられたように」

つまり風斬の信念は、

「私たちが、人間であるために！」

人間^{そこ}にあった。

第一章 7（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。
面倒だけど、多分略すとやらなくなるので。

補足

- ・今回は絹旗フェイズ、絹旗永遠のメインテーマ『信念』と『根性』が出張してきました。
- ・風斬はただの女の子、要約するとそう言う話になるはず。

行間 3

『ワンコから妹達へ。』

始めまして、この手紙が読まれてるときには、私はもう死んでると思います。

そういえば私の死体は貴方達が片付けるはずですから、初対面はそのときでしょうか、だったら大切にしてくださいね？ 出ないと私は悲しいです。

皆さんは私がこうして手紙を送ることに疑問を抱いているかもしれませんが、実の所私は失敗作だったのです、ほんの手違いから生まれた完成品、消耗品でないわけですね。

成長から調整まで、全てを偶然終えてしまったのです。なんでも研究員の一人が遊びで組んだ設定を間違えて消し忘れて、別の研究員がそれを確認もせず私を作成したとか。

まあ余談ですね。うん。

ここからが本題。

私にはお父さんがいませんでした。

試験管の中で生まれ、お父さんとかお母さんは、遠くに遠くにいました。

不思議と寂しくはなかったです。皆さんのようにわざと感情を抑制されたわけでもないのに。もしかしたら私は何処かで諦めていたのかもしれない。

私には憧れといえるものがありました。

それは犬です。

研究所に置き去りにされていた雑誌、もう名前は忘れてしまいましたが、そこに載っていたかわいいワンちゃん大特集というスペース、そこに私は目が行きました。

一目見て、簡単にほれ込んでしまいました。憧れっていうのが、一番大きかったと思います。

その日からずっと、犬のことばかり考えていました。一緒に居たい、飼いたい、どんな形でも良かったと思います、犬っていう存在に触れたかったんです。

でもそれは叶わなかった。

だけど、私は大切なものをもらえました。それをここに記します。

私は『根性二号』という女の子の助けもあり外へ出ました。そこで暇そうにしている人を見つけたんです。唐突ではあったけど、思い切って話しかけてみました。

その人は風斬氷華といって、ちょっとおとなしそうだったけど、多分私よりずっとしっかりした人です。

だって私は諦めちゃったから、その人は、きっと諦めなかったから。

少し話をして、氷華さんと本を買いました、お金は根性師匠がくれたお金です。何故か金額はぴったりでした。

ぼくとお父さんっていう本です。

ちょっと判りにくいかもしれないけど、犬の本ですよ？

ほんの中身はお父さんを小さい頃になくしちゃった子供に、せめて寂しくないようにと飼うことになった一匹の子犬、それは子供と一緒に大きくなって、その子供のお父さんになるんです。

そしてそれを読んで、思いました。

この子は私と同じだっ……て。寂しがりで、お父さんがいないことを、心のどこかであきらめちゃってて、だから、似てます。多分ですけど、言葉には出来ませんけど。

だから、だから思うんです。お父さんがいて、良かったって……だってそうですよね、お父さんがいないと、お母さんがいないと私たちは、笑えないんですから。

……ごめんなさい、自分でも何をかいているのかよくわかってません、目が滲んで、手が震えてます。何を書いていいのかも、判りません。

最初は私は幸せなんだって、書くつもりでした。

友達ができて、とってもいい本が読めて、それが最高の幸せなんだって、書くつもりでした。だから最後には親愛なるミサカワンコって書いてしまっているんです。

ぼくとお父さんの、ぼくが書いた作文みたいに、最後は『さびしいけどさびしくない、ぼくにはお父さんがいるから』っていう締め方をしたみたいに、本当はそうやって書きたかったんです。

でも、でもやっぱり、かけません。

お願いです、お願いです。だれか、助けてください。

怖いです、暗いです、寂しいです。

もっと生きて、もっと幸せになりたい。

そうやって願っちゃ……だめですか？

だから、だれでもいい、おねがいします。

たすけてください。

もつといきて、ひょうかちゃんといっしょに、あなたたちといっしょにわらいたいです。

わからないとおもいます、たすけなんてないなんてわかってます

しに

た

くない

よ。

——親愛なるミサカワシコ』

行間 3 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
いえ、他意はありませんが。

補足

・最後のしにたくーの部分はいろいろと迷いましたが、とりあえずコレで。

第二章『それぞれの残照 World|brink』

1

目が覚めたときには、自分は一人だった。

御坂美琴——学園都市の第三位——そのクローンとして生まれ、同じ程度、13か14ほどの年齢になり、様々な知識を埋め込められて、目が覚めたときには自身の状況を一瞬で把握できた。

妹達、二万と一つの固体の中で、最終信号を除けば唯一といつてシスターズもいい、確実な意識を持ち、且つ寿命などの調整も終えた完成品。

研究者の悪ふざけと、別の研究者のミスで、一万円の加算がされて作られた固体。

別にそれを不満と思ったことはない、ミスだろうがなんだろうが、自分は恵まれているのだ。少なくとも本来ならば意思など生まれようはずもない、彼女たちとは違って。

「あ、あの……」

少しだけ前のことだ。

ワンコは丁度暇にしていた研究者に声をかけていた。すこし恥らった様子で、伏せ目がちにぼそぼそと話しかけたのだ。まあ当然だろう、妹達以外で、彼女は人に話しかけたことが無かったからだ。

「? どうしたのかしら」

その研究者の名を芳川桔梗、やさしげな、しかし“何か違う”視線を向けてくる、研究者たちのなかでは思いのほか常識的か、もしくは親身になってくれる研究者の一人だ。

ワンコも、それを解っているからこそ話しかけたに違いない。

「犬を……飼いたいのですが」

おずおずと、おどおどと、心底ためらった様子で話しかける。芳川は驚いた様子で目を見開いて、直ぐにそれを窄めると考え事をしているように唸る。

心当たりを探しているのだろうか、数秒間沈黙した。ワンコはその間焦らされまくったが、漸く芳川が何か思い当たったようで、口を開く。

「ああ、彼の所為ね？ ……だめよ、この研究所はペット持ち込み禁止なの、彼だって変えなくて我慢しているのに、貴方が許されたら、彼に文句を言われちゃうわ」

結果は案の定というべきか、否定だった。

最悪の、必要ないといった答えではなかったが、結果は結果、行き着くところはみな同じなのだ。ワンコはがくりと肩を落として、嘆息する。

芳川はそれにね、と続けた。

「貴方の場合どうやったって動物と触れ合うことは無理なのよ、不可能ではないけれど、動物に嫌われてしまうから、どうしても無理よ」

宥めるような、諭すようなそれは、やさしくもあり、しかし何処か足りなくもあった。本当にやさしければ、解決法の一つや二つ、考えそうなものである。芳川は研究者なのだ。

——言うなれば“甘い”性格である芳川は、本人もそれを自覚し

ているようで、ごめんなさいね、と謝ってきた。

怒るわけにも行かず、悲しく訳にも行かず、ワンコは一言、

「そうですか……」

そういつて、退出した。

——少しばかり、走馬灯のような記憶を見ていた。

場所は公園、思い出の場所であり、死に場所、少しばかりの憂鬱と、多量の絶望で。ワンコは辺りを眺めていた。

惨劇の主はいまだ現れず、生贄たるワンコは自身の装備である演算銃器トウェポンを手元でいじくっていた。

安全装置を二度三度切り替えて、結局外さないで構えてみたり、少し腕が震えて、それも直ぐに止めてしまった。……動作の一つ一つが重く感じられる。

よくは無い、つまりこれは絶望と何も変わらない、退屈な、苦痛と感じられる時間が長く続くのと、何も変わらないのだから。

リミットは後数分、これまでの傾向からして惨劇の主——アクセラレ一方通行はやってこない可能性がある。今まで彼は何度もこの実験をサポートイタージュしていた。何が気に喰わないのか、随分と実験の数日前から文句を言っていたのをその度に記憶している。

正確には実験の中止を知らせにきた妹達からの又聞きではあるのだが。

そして先日、数ヶ月間のバックレ（実際は能力の動作を誤った事故、ただし誰も事故とは思っていない）を敢行し徹底抗戦の構えを見せていたらしい。

が、研究者側も業を煮やしたらしく、一悶着の末、何とか一方通

行を引きずり出したらしい。

（何があったのやら……もうちょっとサボタージュしてもいいと思うんだけどなあ）

考えるも、その一見暢気に見える現実逃避に、思わず憂鬱になっ
てしまう。気持ちが下へ下へと向いていて、行動の一つ一つがどう
しても下を向いてしまう。心境がどうあがいても絶望に行き着いて
しまう。動きたい、動けない。

動けないからこそ、そのときだった。

「よオ、はじめましてだなア、子羊さんよ」

地獄の拷音は、嫌に大きく響いた。

――雨が滴る。

場所は公園内の一角、丁度夕方上条と美琴が会話していたところ
だ。噴水が一つとベンチが一つ見える。それともう一つ、忘れ物の
ようで、本が一冊おいてあった。

題名は『ぼくとお父さん』、落とし主は上条である。

それはいわゆる、皮肉というものだろうか。

「実験開始時間を既に過ぎています。直ちに戦闘行動に移りますが
……IDなどの確認は？」

ワンコは震える自身を押さえ、酷く冷静な言葉で言った。

それを一方通行は鼻で笑って、

「誤差だどが、ンなものはよオ、にしても驚いた。テメエ、完成品なんだろ？ だのに、随分落ち着いてるじゃねエか。命乞いをするなら今の内だ。逃げ回るなら——いや、おせエな」

両手を軽く振り上げて、一方通行は宣告する。

無駄だと考えながらワンコは演算銃器の安全装置を外す。前者は一方通行がそれを了承する人間だとは思えない。後者は例え逃げ切ったとしても、暗部に消され、差し替えられるだけだ。

「では、よい終末を——お眠りなさいって、なァ！」

振り上げた両手を叩き落とし、腰を落として前進した。

一気に、人間の速度を超えた速度で、砲弾のごとく飛び出してくる。ワンコはそれを確認するよりも早く後ろに下がって、さらに自分が居た直ぐ前方に弾丸を撃ち込む。

ワンコの持つ演算銃器は反動を最小限に押さえ、最大限の威力を放つよう設計された代物だ。その威力は並みの散弾銃ショットガンの初速を超える。

今のような至近距離であればそれはもはや拳銃ではなく爆弾である。

つまりワンコの狙いは、その一撃で一方通行の着地点を消し飛ばし、体制を崩すことである。

だが、

「読めてンだよォ！」

一方通行の、磨き上げられた戦闘センス、その本能にすらこびりつくようなそれはしかし、確実にワンコの策を看破していた。

ただ、ワンコもそれは驚愕しない。

ワンコもまた、目的が別に在るからだ。

（勝負は、ここ、この一瞬で決まる。お姉さまの場合、一方通行と戦闘を行えば一手すら撃てない。でも私には知識がある。一手ならうてる。だったらそれを、もぎ取るしかない！）

ワンコが取った策はこうだ。

まず、一方通行の着地予測地点（戦闘開始前に入念なシュミレーションを行った）へ弾丸を撃ち込み、さらにもう一発、実際に着地した地点へ打ち込む。

ワンコでは一方通行の速度には追いつけない、だが、ワンコの得物なら追いつける。

——そこで一方通行は転倒する。ないしは体制を崩す、本人がそれに驚愕する内に用意していた薬を使用する。ここまでが一連の策だ。

この薬は能力開発に使用されるもので害はない。ただ強烈な睡眠に襲われる。用途としてはいわゆる睡眠学習への導入剤である。

本来、通常の毒薬では吸引の段階で一方通行のベクトル操作に弾かれる。だがコレなら問題ない。能力開発は、彼にとって日常茶飯事だからだ。

その中から吟味に吟味を重ねこの薬を選択したが、大丈夫だ、問題ない。

そして――

迫る一方通行、開いたクレーターの直ぐ前に着地して、そこへ銃弾を打ち込む、一方通行自身には当てないように、タン——と目的を射抜いた。

途端そこへ現れる小さめの穴、一人が建っていればバランスを崩してしまうようなそれに、一方通行は引っこかり——

（とったッ——！）

ワンコは踏み込む、少なくとも油断はせず、ただ勝利を確信した。

第二章『それぞれの残照 World|brink』(後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
一方通行が最強すぎるだなんて。

補足

- ・結構無理やり。

第二章 2

2

だが――

無常にも一方通行は動じなかった。

体制を崩し、本来ならば何も出来ないはずの体制から、回し蹴りを放ってきたのだ。能力は使っていないのだろうが、それでも横薙ぎにされたワンコは錐揉み上に回転する。

衝撃に気がついた時には、既にワンバウンドの後だった。数十メートルを軽く吹き飛び、地面に後を残しながら着地とはお世辞にもいえない“墜落”をする。

（そ、んな……あの状況からまわし蹴り？ ベクトルを無理やり操る程度ならわかる。最悪それによる妨害で全部無駄になることは考えていた。だけど――だけどこんなのはッ！！ ありえない、あんな態勢、普通ならけりを放つて言う考えすら浮かばないはずなのに！）

もはや嘆きのように考える。

絶望、だった。一方通行の戦闘能力はワンコも聞き及んでいた。

だが、これほどか――！

「おおおお、いい表情だねエ、テメエの渾身だったんだろうが、残念だったなア」

遠のいたワンコへ、一方通行はゆらりと近づいてくる。――あの

態勢からどう立ち上がったかは……考えないほうがいいだろう。少なくとも沈んではないはずだ。

幽鬼のごとく、悪鬼のごとく。一方通行はその悪意を吐き散らすように、淡々と言葉を続ける、

「実際、これからこオいうことを続けてくなかで、最初で最後なんだろうな、策をぶつけられンのも、こうして殺す側が“絶望”するもの」

「ぐっ……」

遠い、もう一度、今彼は油断しているはずだ。だからもう一度、今この瞬間を生き延びるために、なんとしてでもあの行軍を止めないと。

死神の歩行は一步でも、緩めないと――！

ワンコは絶望の中考える、自分が立ち上がるためにはどうすればいいか、自分自身が生き残るためには何が必要か、わからない、だからこそ、死にたくない。

だが、動けなかった。

よほどの確に貫かれたのだろう。体を動かそうにも、芯からしびれてしまつて動かせない。立ち上がるとしても、どうも体がだるいのだ。痛みがのしかかる倦怠感、なんともいえない、痛覚の痺れ。手を何度も動かして、しかしそれを意識に出来ず、結局ワンコは地面を無様に這い蹲ることになる。

「まったくよオ、まだ立ち上がろうてのかァ？ 無理なんだよ、テメエが生き残るのは無理な話」

一步、また一步とそれは近づいてくる。

自身のまとう死の気配、それは風斬にだって伝わってしまっただろう。それほど大きい気配を、死神の鎌は話そうとしない。

ワンコと一方通行の間は、大よそ十メートルという位置に来ていた。阻むものは、何もない。

見下す一方通行。

見上げるワンコ。

両手を広げたまま、一種のノーガードにも見える姿勢のまま、一方通行はしかし何の隙も無く近づいてくる。狩りの獲物をいたぶるように。ゆっくり、ゆっくりと歩を進めていた。

両手を地に着けたまま、何とか顔を上げ、絶望のかげりを隠せず、しかし一方通行をにらめつけるワンコ、もはやそれ以上、何か出来ようはずはないのに、それでも彼女は諦めない。自分の生に、すがっていた。

「油断——なンざするわけがねエ、俺ア今まで一体どれほどこうしてきたンだと思ってやがる、テメエの知識だけのそれじゃあ、俺に何かするって事自体、間違えなンだよオ」

格が、違う。

一方通行はそういった。

最強なんだと、宣言して見せた。

一方通行とミサカワンコの距離が零になる。

後は一方通行のワンステップで、ワンコを殺せる。

そこまで、来た。

「終わりだァ、中途半端な生贄ちゃん」

ワンコをその場に叩きつけるように、踏みつける。ゆっくりと力を加え、能力をあわせ、脳髓をかち割る。少なくとも今一方通行が考え付く中では最も残酷で、最も時間をかけたものだった。

「ぐあ、あががあうあああああ！」

痛みに、思わずワンコは声を上げる。絹を引き裂くような——もしくは木をへし折りかねないような悲痛なそれは、大きく大きくそらへ響く。

一方通行がねじりを入れる。上からの強烈な響く痛みと、下からのじやりじやりとした切裂かれるような痛みに、しかしワンコは声すら失う。

（う……ううう、死ぬ……のかな？）

思い浮かべるまでもなくそれは無様極まりなく、もういつそ意識を失ってしまったほうがいいのかもしれない。だが、まだだ。

自問自答、ワンコの心はそうだった。

ならば、堪えは最初から決まっていたのだ。

「あああああ！ う……あああああああああああッ！
！ まだ——死にたくな……いいいいいいいいいい！！！」

「ンァ？」

それは悲痛な宣言だった。痛みの中で振りぬいた拳のような、固められた意志、曲がらない、ただ一つだけの瞳。一方通行の動きが止まる。

不思議そうに、あからさまなまでに不機嫌そうに、

「なに言っただ？ テメエ」

聞き間違いを正すような様子で一方通行は話しかける。

それは至極当然で、くだらないことだった。——しいて言うならそれは狩られる者が狩る者に対して行う命乞いとは、程遠いところに在った、ということだろうか。

「だって、死にたく、無いんですから——私はもう一度、生きたいんですから！」

——今の今まで、自分は一体何を考えていたのだろう。

立った一発の蹴りに叩き伏せられただけで地面にはいつくばって、立ち上がれない？ そんな訳ない。たとえ一方通行がどれほどだろうと、ただ一発の蹴りで、人間を行動不能には、出来やしない。

それも、あんな中途半端なものでは。

だったら、

「私には、友達が居るんです。初めての友達なんですだから生きて、生きて……生きなくちゃいけないんです！」

両手に力を込める。

相手は世界の全てを叩き伏せてしまえるような地獄の風向きベクトル。だが、それがどうした。逆風がどうした、今この場で立ち上がらなければ、意味が無い。

「死ぬくらいだったら、せめて、泥沼のように、生きてやるッ——」

宣言、両手が、砂利交じりのアスファルトをつかむ。
自身の存在全てに、力を込めて。

しかし、

「そオカよ、じゃあ死ね」

一方通行は無情の力を、振り下ろした。

どれだけあがこうと抜け出せない、絶望の泥沼、いまワンコが立つその場は、もはや地獄ですらなかったのだ。地獄の先の、無の世界、全てが消滅した正真正銘の、虚無。

（——あ……むり、なんだ）

自覚する。

絶望ではない、全てを諦めたその先に待つのは、ただ——死と、そして。

（ごめん、ひょうかちゃん）

少しの間だけ語り合った、風斬の笑顔を思い出して、そしてそれはいずこかへと消えた。

遠のくように、太陽のそれは、散っていった。

死の中で、ワンコは意識を墮とした。

——いや、墮とそうとした。

世界はまだ、終わっていない。

(……?)

疑問に思っ、顔を上げる。

そしてその動作自体に、違和感を覚えた。——確か自分は一方通行に頭を押さえつけられていたはずなのだ。ならばコレに一体何の意味がある、つまり、つまりこれは……

一つの希望、幻想のようなそれ、ワンコの視線に、一人の少年が移った。

「おい、てめえ」

上条当麻だった。

「離れろよ、その子から——あいつの、大切な奴から、離れろよ」

彼はただ自身の愛する少女のためだけに、その場に立っていた。

雨が大地を叩いていた。高速で飛来するそれは地面を一定のリズムで音を奏で続けてる。例えるならリズムミカルな太鼓の演奏、小太鼓のようなそれ、といったところか。
まさしく、雨が太鼓を叩いていた。

叩きつけていた。

何度も何度も、跳ねるような雨音のそれは、まるで生きている様でもあり、この世界の傍観者だ。

「なんですかア？　もしかして正義の味方とか気取っちゃったりしてますかア？　……ざっけンじゃねエぞオオオおおおおお！」

一方通行は飛び出して、しかし能力は使わずに踏み込む。

——それはつまり、油断だったのだろう。

「お、おおおおおおおおおおお！！！」

無駄のない一方通行の踏み込み、付け入る隙を上条は見つけられなかった。

だから、破れかぶれのようなそれで、上条は踏み込んだ。

目は閉じていない、だが殆どそれと同じような要領で、もはや一方通行が考えもしなかったような近距離から上条当麻は襲い掛かった。

——右手が、偶発的に叩き込まれた。

第二章 2 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしてます
更新をナチュラルに忘れていた。書き溜めならたくさんあるんよ。
具体的に言くと11個。

補足

・特に無し

第二章 3

3

それは最強特有の、油断というべきものだった。——つまりは、慢心である

一方通行は上条に声をかけられる前から、上条の存在に気が付いていた。だがそれを知った上で放置したのだ。理由は簡単、素人だったからだ。

わけもわからずこの場に紛れ込んだのだろう、そう考えた。

だから、その素人——上条を威嚇する意味も兼ねて、一方通行はワンコに死ねと告げた。ワンコはそれで絶望以上の何かを感じたのだろう、足の裏に伝わってくるベクトルは、消え失せていた。

——まあ、代わりに後ろの方から尋常ではない怒気を受けたのだが。

そしてその後の、この状況、相手が素人ゆえの慢心、そして反射を持つが故の、過信。

これがもし、一発で人間を致死したらしめる、拳銃ならば警戒はしただろう、実際ワンコの銃撃に対して一方通行は油断なく、あの結果を示して見せた。

——自身の体をぐらつかせることくらい、想定済みだったのだ。

だがこれは違う。

上条には何の装備もなく、使えるのは四肢のみ、それでどうやって上条は一方通行を倒そうというのだ——ワンコがそれなりに戦闘の知識を持ち、上条がずぶの素人であったのも原因だろう。

油断していた。

想定外だった。

一方通行の頬を上条が打ち抜いたのは間違いなく、そういった理由が原因だった。

だから、次はない。

軽くよろけた一方通行は、再び襲いかかる上条のストレートを、軽く体を振るだけで回避する。そのまま一気に膝で上条を小突いた。小さな衝撃で、上条の動きを止める。

そのまま右手を固め、油断なく一発を打ちこむ。

「ぐあっ……」

上条が呻き、しかしそれ以上はない。

取った、そう判断しつつも、しかし二度の油断はせず、右足を思い切り踏み込んで、上条のみぞおちに左を押し込む。

「おふ」

息を大きく漏らして、上条は吹き飛んだ。

ノーバウンドで数メートル、そこからバウンドしつつ同じほど、上条は転がって、そして終着する。一方通行は一つ舌打ちをし、それに追撃をかける。

立ち上がった上条の顔面に容赦なく膝をぶつける。

持ち上がった上条、そこへ二度三度両手の握りこぶしを叩き込ん

で、さらには止めとばかりに左のストレート、先ほどと同じように吹き飛んだ。

「ごおががほふう……」

上条の悲鳴にもにた絶叫は、明確な言葉にならず、音だけで響く、どうしようもなく、届かない。

「っはん、結局はこオなるわけか、いきなり人様の面ア殴りつけたっつーのによオ、テメエ結局、これだけかよ」

言いながら、一方通行は地面を踏みしめる。それだけで、一人を軽く宙へ上げる一撃が放たれた。それは直ぐに上条へ襲い掛かり、チェックメイトとなるはずだった。

だが、その一撃は上条の右手で簡単に吹き飛んだ。

一瞬一方通行は何事かわからなかった様子だったが直ぐに全てを理解した表情になる。

「あア、なるほどね、テメエあれか、イマジンプレイカー幻想殺しか、なるほど、だったらテメエの右手もどオいう理屈わかるってもんだ」

科学的には何も解決していないが、一方通行はそう宣告して、一歩踏み出す。

——上条の表情は驚愕だった。切り札、というわけではないだろう。右手が力の起点であることは直ぐに知れることだ。それ自体は何も可笑しくない。ただ一方通行が幻想殺しそのものを知っていたことに驚愕しただけだ。

「別に驚くことじゃねエ、俺ア学園都市が誇る最高級の頭脳だぜ？」

当然流れてくる情報は大量にあんだよ、幻想殺しとか、正体不明とかなァ？」

——上条がさらに驚愕する。何故驚愕したかは、記さずとも知れている。

さらに進む一方通行、上条は倒れたまま、唇をかむ、

「や——めてください！」

進軍する一方通行に静止がかけられた。

所在は後ろで何とか立ち上がろうとするミサカワンコだ。

「あァ？」

「その人は、実験とは何も関係が無いはずですよ。今すぐこの場から立ち去るよう勧告して、それでもダメだからといって、殺す必要は……」

「ないってかァ？ 馬鹿じゃねエのか？ 俺がわざわざこいつを生かさなくちゃなンねェんだよ、わかってますウ？ 俺ってば今人を殺そうとしてるんだぜエ？」

「で、ですが」

「関係ねェよ！！ かァンけいねエェんだよオオオ！！ こいつら無能力者の代わりなンぞ、腐るほどいるんだよオオオオ！！」

すべてを拒絶する一方通行の言葉、願うまでもなくそこは絶望で、定まらないそれは世界すべては発散される。ワンコも、上条も、一方通行のそれに充てられて、息をのむ。

例外はなく、しかし特例は存在する。

ワンコはそれだけでひるんだ。

のどが渴いて、世界自体に拒絶され引きずり込まれるような感触を持つ。これは死ではない、絶望でもないしそれ以上の虚無もない。つまり、これは、

――恐怖。

純粹な感情だった。万人であればこれ以外の感情は抱きようがない、抱けて慄然だろう。それはどちらも大して変わらない。だからこそ、

だからこその特例だ。

上条当麻は、

「つぎっけんじゃねえぞ！！ ふぎけんじゃねえ！」

むしろその一言でこそ、立ち上がった。

誰かを拒絶するからこそ、上条はそれに手を伸ばす。たとえ敵だろうがなんだろうが、上条は反発するからこそ答えを返す。

「その何処に、俺が倒れなくちや行けねえ理由がある」

「なっ……」

上条の宣言に、ワンコは思わず絶句した。上条が何を言っているのか、単純に理解することができなかったのだ。然もあらん、上条は否定するからこそ、こうして、立ち上がる。

幻想を壊して殺して叩き潰す。そうしてから――救う。

「何を、言っているのですか？ 一方通行はあなたが適う相手ではない、あなたがそもそも同じ土俵で戦っている相手じゃないんですよ！ それがわからないんですか！？」

ワンコは何とか体を起して、前のめりになりながら叫ぶ、少しでも前に進もうとして、頭が痛い自分を嘆く、削られるようなそれは先ほどからずっとずっと響いている。

虚無はまだ、彼女を巢食っている。

「知ったことじゃない、そんなこと」

上条は立ち上がって再び一方通行と相対する。

片手で顔についた砂埃をぬぐって、払う。雨水が軽く当たりへ散って、すぐに雨に濡れる。それを見て、上条は開いていた手を思い切り閉じた。水が払われたのだけを確認し、自分の中へ頷く。

十二分に、体は動いた。

「何で……ですか！ 何で救おうとするんですか！ 自分が死んでもかまわないと、アナタはそんな、そんな事を言うんですか！？」

死にたくないからこそ、死んでほしくはなかった。

ワンコはもう直ぐ死ぬだろう。一方通行に殺されて、顔面をもらや跡形も無く粉碎されても、可笑しくはない。だからこそ、死んでしまうその時に、共に死ぬ人間は、いない。

不幸であるなら自分だけでいい、全ての幸福を誰かに上げて、不幸のままならそれでいい。

だから、

「お願いだから、死を、恐れないで！」

だからワンコは叫ぶ、しかしそれを言い終わった直後に、頭痛でその場にうずくまる。

その時、グゴォッ！！と大きな音が嫌に響いた。その直後、ズドサッ！と聞くのも嫌な音が聞こえてきた。――人が殴られる音、人が地面に叩きつけられる音。

上条がやられたのだ。

そう判断して、ワンコは顔を上げる。

そのときにはもう、上条当麻は立ち上がっていた。

両足を大きく開いて、大地を踏みしめるように、右手を前に構えて、再び闘志を握りしめ……

「死ぬ気なんぞ、どこにもねえさ。生きて帰って生きて倒す。それ以外に選択肢は――何もない」

上条と一方通行の“間”はほんの数メートル、恐らく互いの一歩か二歩で埋まるものだろう。開戦をためらう理由は何もない。――お互い、無言の同意で間をつめる。

速度は一方通行、勢いは上条。

先制は当然ながら上条だ。

言うまでも無くそれは先ほどと同じように上条を一撃で叩き伏せるものだ。速度は目で追える様な代物ではない。追えたとしても、それでは速度が遅すぎる。

だったら、最初から回避を前提に動けばいい。

だが上条は素人だ。打ち込まれる場所の予想など出来るわけがないし、それを確信にできる度胸も残念ながら無い。——いや、それしなければ上条は確実に実行するだろうが。

ならば上条は、無理やりそれを行う他ない。

つまり、上条はごろごろと、後ろへ倒れこむように下がった。

さすがにそれは予想していなかったか、一方通行の打撃が思い切り空ぶる。それが上条の、踏み込む隙へと直結する。体勢を立て直して、思い切り軸足を踏んだ。

それは、しかして——

ゴグオツ！！　　と思いきりのいい、しかし鈍い音が聞こえた。

「があっ！！」

——上条が、痛みに赤色の息を上げる。

そもそも一方通行は十分対応できると踏んだからこそ、あの回避を容認した。彼は驚愕はしていないし焦りも何もない、問題など何も無かったのだ。

だから、直ぐに態勢を建て直し、こうして左手を叩き込んでいる。

けれどもそれで、上条が倒れなかったことまでは、予想外だった

ようだ。

上条は前のめりになり、しかし倒れない。一方通行を見上げ、睨みつきこの一瞬、勝利を確信した一方通行の一撃を、耐え切ったこの瞬間、少なくとも上条はコレを待っていた。

右手を固め、踏み込む。

「――はアッ!？」

驚愕した一方通行は、しかし直ぐに自身を取り戻す。左手を引き戻し右を打ち込む。

右手を振りかぶった上条は、支えになっていた左が消えて、少しぐらついたもののそれを歩を踏み込む起点にして、そして殴りかかった。

両者の拳が、同時に突き刺さる。

姿勢を低くした状態で、持ち上げるように、自身の頭よりも上へ、一方通行の顔に叩き込む。

通常の構えで、下から引き上げるように、自身の腰の辺りから、上条の鳩尾にねじりこむ。

どちらもがその一撃を等しくうけ、そして数秒の沈黙を迎える。

その先に残ったのは――

上条が、崩れ去る。

もう一度は、立ち上がらない。

雨の足音は、さらに強さを増していた。

空は雲に覆われ、見上げるべきものは何もない、そも学園都市では星を見ることが叶わないことが多いのだが、それでも空を見上げることに、ここまで意味がないという事は珍しい。

空気が死んでいた、

風も無ければ音もない、時間という概念から置き去りにされてしまったようで、それを理解しているのはこの場には誰もいなかった。

上条当麻は倒れ、しかし立ち上がりとはしない。できない。

一方通行は拳を握ったまま、その場に立ち尽くし、俯いている。ミサカワンコは顔を伏せ、倒れた上条から目をそらそうとしている。

誰もがこの時、外を見ては居なかった。

それが崩れるのは少し後。

一方通行の中の何かが、そこで壊れたからだ。

時間が再び戻る。

一方通行が伏せていた顔を上条に向け、そして誰もいない虚空へ、吐き出すように、もしくは漏れ出すように、叫んだ。

「何なンだよ！ ふざけンじゃねエぞオオオ！ テメエは何度でも
立ち上がる英雄ヒーローなんだろオ！？ だったら、だっおれたらなンで、最強
を倒せねエンだよオオオオオオおおおおおおおおおおおお！
」

それは今まで、一方通行が隠し続けてきた、本音だった。

第二章 3（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしてます。

悪セラレータさんの行き着く先は大体むぎのんの言動です。

補足

- ・ 肉を切らせて骨を絶つ。強者に対する上条さんの基本戦法ですね。
- ・ ほんと、コレしかできないから困る。
- ・ 最後の一方通行さんについては次回にて。

第二章 4

4

一方通行は、人を一人も殺したことが無い。
アクセラレータ

たとえば、今日の前で作り上げようとしている地獄は、最初の地獄なのだ。シスターズ妹達を二万人虐殺する実験、しかし今の実験の殺害対象は、最初の妹達、ミサカワンコなのだ。

本来ならば数ヶ月前から始まっているはずの実験は、一方通行のわがままによって今の今まで延期されていたのだ。

これは、わざと自身の体調を向きを操ることで悪くし、更にはそれが良くなっても実験当日にサボタージュした。もっともらしい、彼の中の最悪の悪役の言葉でもって。

だが、それが長続きするわけが無い。

結局の所、捕まったのだ、実験という時間に。

——科学者という、本物に。

そも、なぜ彼がかたくななまでに人を殺すことを拒むかといえ、簡単だ。一方通行は悪役のハリボテを回りに見せてはいるものの、実際の所、不良におびえる気弱な少年に過ぎない。

それでも狂ってしまえば同じだっただろう、たとえ不良でも狂人にはおののいてしまう。

原因は一つ、彼がまだとある”教室”にいた頃の話だった。……

いつのことだったかはもう覚えていない。そこで彼はとある少女にであった。

「What　どんな怪物が出るかと思ったらもやしじゃないか」

最初にあったときはそんな事を言ったか。

その少女本人曰く”監視”らしい。

だがそれ以上に、彼女は彼に踏み込んだ。

「ああ、私？　私は布束砥信、もやし工場の研究員よ」

「……はア？」

当時——というほどだろうか、数年前の一方通行がよくわからないと声を上げる。

「別に監視員というわけではないけどね、Speaking　あなたの名前はなんと言うのかしら？」

砥信と名乗った少女は11ほどの少女で、一方通行とは一つか二つしか変わらない。——一方通行が言うのもなんだが、この少女はこの場にはふさわしくないように見えた。

「ンだア？　こりゃア、あの糞原君の陰謀ですかア？」

聞こえてんぞーと遠くから一言、どうも外にいたらしい。

一方通行は舌打ちをして、砥信を見る。

「————だよ、覚えンな、胸糞わりィ」

「布束砥信は深く心に刻み込んだ」

「なつかしいな！　おィ！」

それが邂逅だった。よく解らないというのが正直なところ、この後直ぐに実験の予定が入り、会話がおざなりだったのも原因のひとつだろう。

だが、砥信は直ぐに一方通行に踏み込んできた。

この当時は人を殺すということもなく、ただ力を持っただけの少年であった彼に。

「そういえば、知っているかい？」

「何なンだい？」

おざなりな一方通行に砥信は軽く笑って話しかける。

時刻は夕方、“教室”の放課後に当たる時間だ。

「wait　そう邪険にしないでほしいものね、別に悪気が在るわけじゃないわ」

「悪気が在ったとしてもテメエの場合絡ンでくるじゃねエかよ……」

「げんなりしないでよ、暇なんだから」

「家に帰れよ、持ってンだろ？　ゲーム」

「もうクリアしたから、いつの話よ」

「一ヶ月まえだっけねエ」

「O o p s そろそろ本題に戻りましょう、これ以上続けても意味は無いしね」

「その言葉自体に意味が無いことに気づいてくんねエかなア」

うんざりげに指を突きつける一方通行。

砥信はそれを完全に無視して本題に移る。

「学園都市七不思議って知ってるかしら？」

「聞けよ、おい」

「文字通り七つ在るんだけどね？ 気になる？ 気になるでしょう？ 気になるといわなければ絶好よ」

「……何で七不思議の興味あるなしで絶好を突きつけられなきやいけねエンだよ。つか、俺達ってそう言う関係だったか？」

「酷い、私のことなんて遊びだったのね？」

因みに、意味は知らずに言っている。

「……はア」

疲れたように、というか実際疲れていた。彼女が来て以来、その言動に振り回されっぱなしだ。——子供っぽいというのもあるだろうが、何故かこの少女には上手に出れないというのもある。

その感情の意味を知るのは、それが募り積るのは、暫く先のこと。

「それでね？　それでよ」

そして……――

二人は少しずつ行動を共にするようになった。自分の中へ入り込もうとする砥信を一方通行が少しずつ容認、もしくは妥協し始めてきたのも在るだろう。

だが二人には、元から二人しかいなかったのだ。

“教室”の研究員は一方通行を研究対象、砥信を単なる監視人、ないしは置物としか思っていないのだ。だからこそ二人がこうして行動を共にするのは、必然だったといえる。

たとえば実験の無い日に砥信の買い物に付き合わされたり。

「Like　大量じゃないの」

「……なあ、砥信ちゃん、それ俺のお金なんですけど？」

「いいじゃないの、大金持ちなんだしね？」

「だからって数万もすられてたまったもんじゃないんですけどオ！
砥信ちゃアアん！？」

「あら、スリ？　学園都市とはいえ物騒ね」

「砥イイイ信ちゃアアアアアアアアアン！！」

実験をサボろうと持ちかけられたのも初めてではない。

結局、一方通行のお前はそれを止める側じゃないのかという突っ込みと時間切れで大体流れ流れになっていた。成功したのも一回だけだった。

正確には――それ以降、実験をサボるという提案が無かったただけなのだが。

――一方通行と布束砥信、出会ってから半年が過ぎようとしていた。

それは雪の振る冬のことだった。

大雪ではない、軽く舞うようなそれは、都会のコンクリートに簡単に溶かされる。これが田舎の道路であれば割れた土の間に多少は雪が積るはずなのだが、残念ながらここは学園都市、二十年、ないしは三十年先に行く整備された道路に死角はない。

在るとしたら天災くらいなものだろう。一方通行が暴れてもいいが、大きな力は天災と何も変わらなかった。それを嘆く人間はいないが。

「寒いわねえ」

「……そオだな」

砥信の朝から行われた必死な懇願により、実験をサボタージュしたのが一時間前のこと、涙まで流して説得が行われたのだが、後から目薬が出てきた。

すさまじく古い手に、一方通行は呆れるほか無い。

——何か、焦っているように見えたのは、恐らく気のせいだろう。

「折角抜け出したって言うのに、もっとテンションを上げていきましようよ」

前を歩いていた砥信が振り返る。

ウェーブの掛かった髪に、特徴的なギョロ目、そして冬化粧をした淡雪色のマフラー、吐き出る白い息が、マフラーに、空にかぶさっていた。

両手を後ろに組んで至極楽しそうに砥信は笑う。

年相応というべきか、ませた、というべきか、それは何処と無く恋をする少女に似ていた。

「ン……アー、まあ別に、たのしみじゃないっつーわけじゃねエ」

思わず目をそらして、頬の紅葉を一方通行は止められない、彼が操れるのはあくまで肉体のベクトルだ。——操れないわけではないだろうが、わざわざする理由もない。

砥信はそれを可笑しそうに笑うと、再び反転し、楽しそうに息を漏らす。白く透き通ったそれは、一方通行にも流れてくる。

「Good さて、マズは何処に行こうかしらね」

大きく歩を広げながら、砥信は先へ進む、そっぽを向いていた一方通行は、それにあわてて付いていく。

時刻は午前九時、一日はまだ長い。

それから。

それから——一方通行と砥信は色々な場所を巡る。コレまでの半

年、二人で築いてきたこと全部を凝縮させたかのようにだった。

買い物に行って、食事をして、ゲームセンターで遊んで、警備員に補導されそうになったのを危うく逃げて、今は公園の、雪を少し被って冷たくなったベンチの上で、二人は休憩している。それを、楽しかったと一方通行ですら素直に言えた。

ずっとこんな事が続けばいいと、素直に思えた。

ただまあ、

「楽しかったかしら？」

「……べつにイ」

砥信本人を前にするとそれは途端にいえなくなってしまう。ただ砥信もそれはわかってのことだし、楽しんでくれるなら何より、そして普段はここだからかいの一つでも入ってくるのだ。

しまったと思って一方通行は砥信の方へ、身構えるように振り向く。

けれど、

「そっか……—よかった」

砥信は至極安心したように、凄く嬉しそうに、呟いた。

一瞬きよとした一方通行だったが、直ぐにはととする。

目の前で、普段のお姉さんぶった笑みとは違う、子供らしい、やわらかい笑みを浮かべる少女——

——布束砥信とは、ここまで可愛かったのか？

今まで、些細なことで砥信をそうやって認識したことはあったものの、ここまでだったことは一度も無い、こうして、どうしようもなく胸の高鳴りが押さえられなかったことは、一度もない。

暫く見惚れていた……それに気が付かれたのだろう、砥信ははつとすると両手を振っていつも通りの笑みで、

「な、なんでもないわよ！」

と、ごまかしてきた。

その顔は真っ赤に染まり、それもまた見惚れてしまった一方通行の顔も同じように赤く染まる。どちらもがどちらを意識して、顔を伏せながら、ちらりと互いを見やる。

それが一分も続いただろうか。

「――ハ」

「――フ」

二人から自然と笑いが漏れる。

しきりに笑って、思い切り笑って、互いに笑って。

やがてそれも収まった。

一方通行は座り込んでいたベンチに大きくもたれかかり、空を見上げる。薄く張られた膜のような雲に、空から降りてくる冷たい雪、息を吐けば、空気の白が、途端に浮かんで、途端に消えた。

言葉を選ぶように何度か口を開いて、そのたびに白が上へ上へと

消えていく。

そうして、やっと選んだ言葉を持って、砥信へと振り返る。

「なア、またこうやってどっかいこうぜ、どこだっていい——砥信となら、どこだって行けるきがすんだよ」

砥信は驚いたようにきょとんとして、それから状況を飲込んで——否定の方向に首を振る。けれどもその表情は何処か期待をしているようでもあって……

「だめよ、実験をサボったら怒られてしまうわ」

「ンなこと知ったこっちゃねエよ。俺が誰だかわからないはずねエだろ？」

「——じゃあ、私を地獄のそこでも守ってくれる？」

「当然だア、天国だろうが地獄だろうが、お前は俺が、絶対に守ってやるンだからよォ」

一方通行は砥信の英雄^{ヒーロー}になる。

笑いあって、すごせる日々は、砥信の笑顔は、絶対に守ると、一方通行は笑って決めた。

その次の日、砥信は一方通行の前から姿を消した。

唐突に、何の前触れも無く、いなくなった。

そもそも砥信はこれが暗部へ堕ちる寸前のテストだったらしい。

彼女は幼いながら非常に優秀な科学者であった。だが、同時に人間でもあり、研究対象へ感情移入してしまう悪い癖があった。

非人道的な、学園都市の研究にはまったくもって向いていなかったのだ。

これがもし被験者を労わる科学者で、もう少し立場のある科学者がいれば、別だったのかもしれないが。

それでも、砥信は研究対象に感情移入し、その結果“事”を起こしてしまい、暗部へ堕ちかけた。その最初のステップにして、まだ研究する側として使用できるかのテストが、ここだったのだ。

コレは後々、とある科学者から聞いた話だ。

砥信は堕ちかけても、その生き方を変えなかったらしい、一方通行に感情移入し、今度は恋までしてしまった。それでも彼女は構わなかったのだろう、確かに彼女は“生きた”のだから。

それでも、一方通行の心は大きくゆがんでしまったが。

まず、彼が最初に決めたこと、それは最強になることだった。

誰もが恐れ、誰もが怯える最強に、そして――誰も殺さない最強に。

それは学園都市への一つの抵抗だった。

誰よりも強く、けれども誰も彼も、ギリギリの所で殺さず、生き地獄を作る。

二度と戦いたくないと、ありとあらゆる人間に思わせる孤高の最強。そのために彼は、あらゆる手段で強くなった。

体を鍛え、戦術を学び、能力を研ぎ澄ませ。

そうして彼は立っている。

二度と、誰かを目の前で失わないように。

——それは、一方通行の回想だったのか、それとも単なる残照に過ぎなかったのか。

彼はただ倒れ伏す上条に、怒りの眼差しを向けるだけだ。雨と共に、自分の視線を落として叫ぶ。

「ざっけンじゃねエぞオオ！ ヒイイロオオオオオオオオオオ！」

幻想殺しは一方通行を倒せる。

それは一方通行にとって一つの希望だった。

——彼はこの実験に半ば無理やり参加させられている。原因は研究者の誤解によるものが多いが、しかし彼はこの地獄を、作り上げることを望んでいなかった。

だから、本来ならば一手もかける必要のないワンコに対して一手を譲ったし、立ち上がるとうとするワンコを見逃して、力を緩めた。

上条を吹き飛ばそうと風を飛ばしたことも在った。

けれども彼は同時に、自分が負けければ彼女たちは救えるかもしれない、そういった気持ちと、自分は英雄ヒーローに慣れなかったのに、何故こいつはなれるんだという、怒りを同時に持ち合わせていた。

感情を制御できないのは一方通行の悪い癖かもしれない。

「ちくしょう！ ちくしょう！ ちくしょオオオオおおおおおお！
！」

助けてやって欲しい。

けれど、成功した自分は見たくない。
それを彼は、いつしか世界に吐露していた。

「あ、一方通行……あなたは……」

ワンコが、後ろから声をかける。死にたくないと願った彼女は、何となくだが一方通行の感情が理解できた。彼のそれは死と同じ、孤独なんだ……と。

「アあ？ ……ンだよ、テメエ」

一方通行は幽鬼のごとくワンコへと振り返る。
顔を伏せ、反射することもせず、雨にぬれて立ち尽くす一方通行は、もはや悪役だとか英雄だとか、そういった善悪関係なく、ただ悪魔のように見えた。

「テメエに何がわかる。救う人間の何がわかる。悪を味わった人間の……何がわかるンだよ!!」

「解らない！ 解るわけがない、私は救ったことも救われたことも無いから！ ただ、孤独は怖いってことしか、知らないから！」

だから、けれどもワンコは立ち上がれない。
地べたに這い蹲って、一方通行の進軍をただ見守る。

「ああ、そうかよオ——じゃあ、死ンでそれだけに、なるンだなア！」

速度を上げて、ただ突撃。
彼らしくもない後先考えない砲弾のような突撃。そしてそれは——

第二章 4（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
強いて言うなら白……かもね。

補足

- ・全員集合。

第二章 5

5

ミサカワンコ。

上条当麻。

そして――風斬氷華。

生き残るために。

戦えたから。

守りたかったから。

三者三様、それぞれの思いの元に、地獄の舞台、一方通行の戦場へと、足を運ぶことを許された三人の人間、共通項は無く、ただ確かなのは、三人が狩られる側がということ。

そしてこれまで、二人の人間が戦いを挑み、敗北した。

ミサカワンコはなす術も無く虚無を味わい。

上条は実力足らず、立ち上がる意思を持ちながら倒れ付した。

最後の英雄、風斬氷華。

彼女は、果たして敵として一方通行の前に立つか、それとも獲物として一方通行の前でうずくまるか。どちらにせよ彼女に後退の選択肢はない。

守るべき場所を守るべき人がいて、その人のために一番大事な人が戦っていて、それなのに自分は逃げ惑うなどと、少なくとも彼女は肯定できなかった。

風斬は臆病な女の子だ、それでも大切な友人や、大切な恋人のためなら、芯を通す覚悟もまた、持っている。たとえ化物である事を

知られ、全てを失おうとも、それは退くことの原因にはならない。

風斬氷華はそうして、この場に立っていた。

雨は少し、その雨脚を弱めていた。

場所自体は聞いていたものの、多少迷ってしまったため、到着が随分遅れてしまった。けれども間に合った。ワンコは死んでいない。上条が既にいることには驚いたが、恐らくは御坂美琴のおかげだろうと、判断をつけた。

「なんだあ？　なんだよ、何なんですかあ！？　今日はここでセルでもあるつつウのかよ。愉快だねエ……………そんなだから——ぶち壊したくなっちゃうんだろオがよオ！！」

一方通行が吼えた、ワンコは救われ、砥信は救えない。その怒りと、倒しても倒しても現れる“英雄”に対する、ある種の歓喜でもって。

「…………わ、たしは——」

風斬はおびえたように、何かを決心したように、言葉を手繰る。

「守りたい、から…………絶対に、壊れません！」

当然といえば当然だろう。

彼女にとってこれは初めての戦いであり、初めて化物の力を自分から使うときでもある。今だ風斬は“真に”自身を受け入れられたことは無いのだ。

意識そのものは守ることへ向いているものの、それを忘れたこと

はない。

今も片隅に、それが小骨のように引っかかっていた。

「そオかい……じゃあ、死ンじまえ！」

動き出す一方通行。

風斬は視覚から送られてくる情報を鮮明にする。鋭く、そして細く。一気に集められる情報は一秒と一秒の間を、まるで一つのカットのように流れさせる。

十分の一、世界の全てが、それほどの速度に感じられた。

それでも目の前に迫る一方通行の速度は、通常の人間の歩行速度と変わらなかったが。

一つ、息を吸い込んで風斬は踏み込む。速度は一方通行のそれと変わらない。

他方から見れば、両者は一気にその体を激突させたように見えただろう。

グゴガァッ！！ と、世界が震えた。

一方通行と、それを真っ向から叩き潰さんと殴りかかる。初心者特有の、見え見えなテレフォンパンチ、一方通行であれば当然回避が可能だ。

ただし、それが一般の攻撃であれば……だが。

さすがに一方通行も銃弾を発射された後に回避することは、意識外からの攻撃では不可能なのだ。

故に、両者は激突する。

それでもただ速度をぶつけ合うだけでは風斬の体が消し飛んで終わりだろう。後々再生するとしても今この場で風斬は紛れも無く死亡する。

だが風斬には策があった。

絹旗から一方通行の情報を聞いてから考えていた、風斬だから出来る最大の搦め手にして最強の正攻法。

そも、一方通行の反射は自身能力によるもの、つまり演算によって成り立っている。ならば、

その演算を上回る攻撃を叩きつければ。

単純なことではない。

何せ普通に攻撃したところで一方通行の反射は核兵器すら通さない、一度の攻撃では、絶対に一方通行を突破することは出来ない。だが、それを無限に繰り返したら。1の攻撃を行い、その1の反射を2の攻撃で押し返せば、

必ず一方通行の脳に限界が来る。

それが風斬のたたき出した戦法、自身の体が演算によるものだからこそ出来る、文字通り捨て身の攻撃。

高速で一方通行にベクトルをたたきつけた風斬は、それを上の段階へ持ち上げる。何度も何度も、一方通行の限界にたどり着くまで。

そしてそれは、一方通行本人も感じとっていた。

不意に繰り出された自身と同速の一撃、完全に不意を疲れる形になった一方通行は、しかし衝撃の無さに安心し、それを無視した。だが、その直後、彼の脳が異変を訴えた。

（ンだァ？ 頭がいてェな）

どうも反射の演算を異常なまでに行っているようだ、一方通行は判断する。

今は少し頭が痛い程度だが、コレを無視すれば最悪二度と能力行使が出来ないほどに演算能力が低下してしまうだろう。

ならば……

一方通行は体を折り曲げるように後ろへ反らす。風斬の拳は空をきり、一方通行の体は新体操の選手のように一回転した。

そのついでに、風斬から多少距離をとる。

どうしたものかと考える。

今の攻撃、理屈は解る。要は一方通行にある意味で真っ向から勝負を挑んでいるのだ。だがそれは頭の可笑しい人間がやることだ。絶対に真っ向から勝とうとしている人間が取る手じゃない。

少なくともこの核弾頭に真っ向から反射のようなものも無しで挑むような行動が常人のやろうとしていることとは思えない。

だが、目の前の少女はそれを完遂させようとしたのだ。

その証拠に、今も頭が熱を上げている。

ならばつまり、

（こいつは俺と同等、もしくはそれ以上の演算を持つ奴って事になる）

該当者は、超能力者だろうか。

……いやそれは無いだろう。それが可能であるのだとすれば該当するのは第二位と第七位、しかし第二位はそんな方法を取る必要はないし、第七位は——第二位もそうだが——男だ。

ならば、考えを深くへ落とそうとしたところで、潔く該当者にたどり着いた。

正確には該当する現象だが。

「そオカ……正体不明。おめエか」
カウンターストップ

風斬が驚いたように声を上げる。

やはりと、その様子から一方通行は自身の回答に正解のマルをつけた。ついでにいくつかの思考を纏める。

目の前の少女は間違いなくこれが初陣、力こそあるがそれを振るったことは今までに無いだろう。……いや、恐らく一度はあるだろう。勘だが“彼女は落ち着きすぎている”——自分の力を受け入れているという事だ。

力のある素人、何度でも立ち上がれるそれは先ほどもそうだが、厄介なものだ。

（さて、どうしたもんかねエ……）

彼女は死ねない、死んだとしても元に戻る。自身の場所に還るだけだ。だからこそ存分に暴れていいかといえばそうでもない。

そもそもここに来て自分がどういった行動をとればいいのかわからなくなってきたている。

怒りはある。

求めもある。

だが、それを差し置いて彼は、無力すらもあったのだ。

終わりが無い、ただ殺すだけの地獄、巻き込まれただけの自分の感傷に浸るわけでもない、ただ殺そうが殺されようが行きつく場所が同じ、彼女達は死ぬのだ。

そもそも一方通行がこの地獄を作ろうとした原因も――

（まあいい）

やるしか――ない。

今この場でただ敗北しても、逃走を選んでも、後に待っているのはワンコの死、だけだ。今こうして地獄からの奪還の最後のチャンスが用意されているというのに、それを不意にする理由はない。

ただ戦い、ただ負ける。

それでいいではないか――少なくとも、今は怒りよりも、喜びよりも、自身の無力を信じたい。

全力でいく。

全力の敗北でもってこの地獄、終幕としよう。

「さア……終いにするぜ。どれもこれもそれも――あれも……なア！」

両手を広げ、威嚇するように叫ぶ。

実際、一方通行がコレまで磨き上げてきた威嚇するためだけの悪魔、ハリボテの魔王の姿でもって風斬を睨みつける。

常人であれば確実に怖気すら覚えるような姿。

実際、戦闘のプロとしての知識を、少なくとも会得しているはずのワンコが、思わず悲鳴の色濃い息を吐き出した。
だというのに、

風斬氷華は、動じない。

ワンコと風斬は思いのほかよく似ている。寂しがりで、気弱な部分もそれなりにあって、相違点はたたあるだろうが、それでも遠目に見れば、二人にはそれなりの類似点がある。

恐らく違いは、救われたことが、あるかないかだった。

救うという意味を、教わったかどうかだった。

「いいねエいいねエ……さいっこうにぶっ潰したくなっちゃまったじやねエか!!」

飛び出す一方通行と、構える風斬、どちらもそれ以上は無言で、戦闘へとフェイズは移っていった。

第二章 5 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

明日は明日の風が吹く、だったら明日の風くらいてめえが吹かせて
見せろよ！

(本編との関係は皆無です)

第二章 6

6

どちらも初速は同じ、激突までのトップスピードは、さすがに一方通行が上回ったが、それでもその差——激突の場所は、中央から一步程度しか離れてはいなかった。

最初に動いたのは風斬。

初心者特有の見え見えなテレフォンパンチ、それで“覚えた”一方通行を突破できるはずも無いが、しかし風斬は解らない。

当然ながら最初のそれは一方通行が首を振るだけで回避して、変わりにお返しの一発を一方通行が見舞いする。顔面へ向けて一つ。意識が回らず、不意を疲れた風斬は、思わず目を瞑ってしまう。戦場であればほぼ死を意味するようなそれは、しかし衝撃までの時間を与えさせず、疑問に思い、目を開こうと思った風斬は、しかし横合いから不意に叩きつけられた一撃で、思い切り吹き飛ばされてしまう。

今まで一方通行にやられてきたような、ワンコや上条と同じように、数メートルを簡単に吹き飛ばされる。

違いは、その後直ぐ風斬が立ち上がったことか。

痛みを無視して、彼女は再び戦線へ復帰する。とはいえそれを読めない一方通行ではない。立ち上がるとうとする風斬へむけ、一歩足を踏み出した。

それだけで風斬に襲い掛かる突風が完成した。

人間を簡単に吹き飛ばしてしまう一撃、それを風斬は諸に受ける。

とはいえ先ほどの反省を生かすことが出来たのか、目こそ閉じて

しまったものの、両手で顔を守り、吹き飛ばされるのも受身を取るような態勢で行えた。

やがて何とか目を開けて、無理やり風に抗い着陸する。少しそれでも引きずられたものの、直ぐに風の中を闊歩できるようになった。

「やるねェ！」

一方通行は叫んで、追撃のためさらに一步、踏み出す。

今度は風ではなく自分自身を砲丸として。大地を砕かぬようベクトルを操作しつつかけた。一瞬――風斬の認識はそうでもないが――にして風斬に肉薄すると、それとほぼ同時に風斬は後ろに下がった。

恐らくだが彼女は学習しているのだろう。一方通行はそう当たりをつけて、舌打ち一つ、さらに風を生み出した。

威力は先ほどのものよりも上だったはずだ。

しかし風斬は少し引きずられるだけで吹き飛んだりはない。

驚くべきことだが、一方通行にしてみればこの程度なら想定範囲内、すぐさま攻め込んで、二度、三度フェイントを交えながら風斬に打撃を加える。さすがにそれはどうしようもない。

腰の低い態勢からの打ち上げ、上を見上げて、そして浮き上がった風斬に容赦なく一方通行は一撃を加えていく。思い切り後ろへ吹き飛ばしたのだ。

風斬はある程度この戦闘で戦い方を学習している。まずは自分が弱いという事、次に目を瞑ってはいけないということ、学習すれば後は早い、彼女の演算能力は学園都市二百三十万とさほど変わらない。

頂点ではなく全てとして、の話だ。

——風斬の意識はある存在に対する“死の恐怖”によって出来上がったものだ。それは偶然のような必然であり、しかし“今”であることは偶然だっただろう。

そしてその意識を支える演算機関、彼女が従えるそれは学園都市の能力者による無意識だ。

それにより彼女は少なくとも、一方通行の演算能力を上回り、且つ自身の能力を現在進行形で向上させていた。

「めんどオな話だな！」

一方通行が叫びながら飛び出す。速度は高速、何とか立ち上がった風斬が顔を上げたときには、既にその直ぐそばまで接近していた。鼻先一メートル、腕を伸ばすには絶好の場所。

踏み込んで、一撃を放つ。直線的に投げいられた拳だ。

それを風斬は体を思い切り落として回避する。ギリギリまで体を引き絞って、一方通行の第二波もまた回避した。——自身の目線がほぼ半分に墜ちる。

「知り——」

一撃、コレは軽く体を横にそらして回避される。大分踏み込みや打ち込みは良くなったがその挙動は一方通行の模倣なのだ。本人は自身の体をよく理解しているので必然として回避される。

「——ませんよ」

続けざまの返し刃、一方通行の一撃が風斬に突き刺さる。今度は回避しようというわけではなくむしろわざと受け止めたように風斬は耐え切る。

最初から、次が本命だったのだろう。

「そんなこと——ッ！」

風斬と一方通行、どちらもが交錯し、叩きつけられる。

その間は大よそ一秒、多くてそれくらい、恐らく届いているかいないかといえは届いていないだろう。ほんの一瞬の衝突、しかしその短時間で十二分に風斬は攻撃を加えた。

大きく飛んで離れた一方通行の顔が、苦痛にゆがんでいたのだ。

上条に殴られても驚きはしただろうが苦痛は表さなかった一方通行が苦々しげに苦痛で眉を寄らせている。風斬は大きく息を吐き出して、自身を整える。

お互いに一撃、しかしそれでぐらついたのは一方通行だけだった。

考える。

一方通行は自身の思考をクールダウンさせながら、それでも響く頭痛に顔をゆがめる。

（なるほどな、なんつう根性だよ、こいつア……けどなア。仏の顔も三度なんだよ。そっちの様子も大分わかってきた。だがア……終われない。この戦い方じゃあ勝つことも負けることも出来そうにね
エ）

体が動いてしまうと、自身にこびりつけた戦闘勘に思わず舌打ちをする。コレばかりは動いてしまうのだからどうしようもない。

頭がいいのも考え物といったところだろうか。

(まアいい、だったら戦い方をかえりゃアいいんだよ。つまりイ…)

元から大きく距離をとっていた一方通行は、さらに後ろへ跳んで、風斬との間に大きく間を置く。そして両手を威嚇の際に行った時と同じ風に大きく広げた。

一見無防備な、罨としか取れないそれに、風斬は戸惑いながらも踏み込む。

そして一方通行も、距離を稼いだとはいえ完全に隙だらけなそれを、然りと認識していた。能力に胡坐をかいているのならば、これはありうるモノかもしれない。もし一方通行が布束砥信に出会っていなかったのならば、もしかしたら彼は今のようは無防備な戦いをしていたかもしれない。

馬鹿らしい、と今ならば考える。そんな戦い方ではどうしようもないし、安心できない。一方通行は能力に慢心している節はあるものの、過信したことはない。

だからこそこれは風斬の戸惑いどおり、罨ということになる。

つまり、

風斬と一方通行、高速の両者にしてみれば障害にすらなりえない間、そこを駆けた風斬の体が切り裂かれる。

その原因は風によるものだ。突風、つむじ風、何とでもいえるがカマイタチのようなものではない。痛みを覚え、彼女はその場でストップする。

一方通行は更にそのうち片手を前へと揺らす。

それだけで、再び風の流れが風斬を打ち落とす。一度、左足を打ち抜かれ、二度、先ほどぶつけられた近くを再びたたきつけられた。三度、肩の辺りが切り裂かれ、制服の切れ端が空を舞い——消える。もう片方の一方通行の腕。ゆらりとうごめいた。

（……そう、つまり、だ。風を生み、ただそれで吹き飛ばすだけでなく、そこに“威力”を持たせる。念動力を使わない風力使いエアロユーザー見たいなもんだな。これは俺がいつもやってることと変わらないが、威力と数が違う。範囲は小さいが……人一人なら、簡単に細切れにできちまうんだな、これが）

風斬もそれは読み取ったか、感じ取ったか、直ぐに横に跳んだ。範囲が狭く、一度回避されると簡単にそれてしまうのがこの風の弱点ではある。本来ならば不可視なうえ速度が人間の回避よりも速く、銃弾ほどのものがあるので問題はないのだが、風斬相手にはそうも行かない。彼女の速度であれば簡単に回避できてしまうのだ。

（だったら……こうするしかねェんだよ！）

両手をピアノの鍵盤に叩きつけるように、振り下ろす。数は当然ながら二倍……とまでは行かないものの相当数の確保に成功した。それを無理やり拡散させる。一度に同じ場所へ放つからいけないのだ。ならばでたらめに撃ってやればいい、幸いそれだけのことを一方通行は可能だ。

そして、それでもダメなら色をつければいい、厚いところ、薄いところを意図的に作成し、向こうを翻弄して見せればいい。

まずは初手。

複数が迫るそれは、回避行動を取った風斬の、丁度ど真ん中を打

ち抜いた。

マズは一つ、一方通行は大きな突破口を用意して見せた。

体を真つ二つに引き裂かれるように、わき腹の辺りから胸の辺りまで、その一撃は風斬にめぐりこまれた。その一撃の痛みと、そして先ほど受けた傷の修復を同時に、風斬は感じる。

半端ではないが、少し力を込めるとやがてそれも収まった。

初めて自覚したうえで受けた致命傷。

それに一瞬目の前が真つ暗になる。が今は戦闘中、直ぐにそれを持ち直して再び構える。

（今は……乱射したってことだね、さすがに向こうも色をつけてくる……か）

考えなければいけない。ただ避けるだけではどうしても無理が出る。けれど向こうの攻撃は目視することが出来ない。非常に痛いアドバンテージだ。

けれど風斬はこの状況をチャンスと見ていた。

向こうは今、非常に隙だらけだ。わざと作っているのではないかと思えるほど、あの一方通行は潰け込み易過ぎる。そしてそれを利用しない手はない。

少しでもこの攻撃を掻い潜ることが出来れば、後は隙だらけの一方通行に攻撃を叩き込めばいい。

三秒、それだけの間攻撃を叩き込めれば一方通行の行動を封じられる。風斬はそう判断した。ソシテそれに基づいて行動を開始する。

目の前に迫る無数の不可視、自身を切り裂いた痕がゆっくりと消えていくのを感じながら、睨みつける。

そのまま動いて、踏み込んだ。

まず風斬に襲い掛かる風弾はいくつかあった。一方通行が用意した数多のうち、数個を狙ってはなったのだ。それを風斬は感じ取れないが、しかし予測はつく。

この攻撃が、風斬自身を狙っていない限りランダムであると風斬は予測した。つまり、一度自身の居場所から離れれば、後から襲い掛かってくる一方通行の攻撃は、いわゆる『数うちや当たる』の攻撃だ。運がよければ当たらず、向こうに接近できる。

どれだけ層を厚くすることができても、それ以外を厚くすることは流石に一方通行でも難しい。

飛び出す。

一つ体を横へ動かして落とす。射出のため構えるような態勢に移る。が、

一方通行が体を動かすのを見て直ぐにそれを取りやめる。一方通行の動きが風を放つときと重なったからだ。横へ、元の場所から遠のくように。

そこへ数多の風塵が押しかかる。

「ッ……！」

思わず、息をのむように言葉を吐き出す。悲鳴ともいえるだろう。

——常人であれば致命傷のはずの一撃を複数、諸に喰らったのだ、流石にコレは致し方ない。

——刃は絶えずのしかかる。風斬の体を容赦なく切り裂き、さら

には風斬自身を遠くへ遠くへ拒絶するように畳み掛ける。
けれどそれで退く風斬ではない。

「アアア!!」

一步後ろに体を後退させる。けれどもそれだけで、それ以上は風斬の体は動かない。何とか痛みをこらえ、横に転がる。ごろごろと相当無理な行動だがそれでも、脱した。

立ち上がり、念のためもう一度大きく動く。

(さっき……)

自身の体にえぐられた傷が消えていく。痛みもそっと退いていくがしかし、同時に飛び移った風斬に対し掠めるように飛んできた一撃が、左腕を掠めていく。

それ自体は問題ではない。どちらかといえば、自身の思考を振り回さないようにするほうが問題だ。

何とかぶれる思考を正常化させる。

(アレは多分、私の動きを予測していた)

先ほどの大量に迫ってきた一撃は恐らく予測されていたものだ。最初に一撃が放たれ——いくつかの攻撃のことだ——それを風斬が回避する。そこでもう一度攻撃を放つことで風斬に回避を誘う。

そうすれば回避する方向は二択、風斬が考える突破口と同じように、一方通行もまた二分の一で風斬をしとめに掛かっていたのだ。例え回避しない、外れくじを引くという結果でも、一発は当たっていたことだろう。

無駄のない、確実な攻撃。それに歯噛みをしながらも風斬は体を

動かす。今度は前へ——これはチャンスだ。ランダムに迫る攻撃、それが一発掠めるだけで終わった。留めるものは何もないのだ。

目的へ向かい、一步踏み出す。

風と、それを担う一方通行へ向けて全てを見通すように、不動の視線をたたきつけた。風すらも見据えようというそれで、風斬は集中した。

意識と、そして世界が変質する。

先ほどまでもそうだったが、世界の全てを留めるのだ。風斬の集中に呼応して体がそれに応える。あたりを集中する演算を活性化させることにより、時間を止める。もしくは感じを変える。

だから風斬の変化は必然だった。

飛び出そうとして、それに風斬は気がついた。

——風が見える。

非常に顕著な変化だった。

走り出す自分自身の視界が青く染まり、さらにその置くの“何か”も——風も何故か青く感じ取れる。青く染まり、同色であるそれは見えないはずなのに、だ。

走り出しながら、風斬は感じ取ったそれを信じて少しだけ回避を行う。

襲い掛かってくるであろう風は、どこにも無かった。

「——ッ！　そう、いうことか！」

それで、何となく理解した。

今風斬に起きた幻象。それはつまり——能力の行使。

つまり、風斬は元々AIM拡散力場の塊である——能力の行使によって生まれる無意識、それがAIMだ。——そう、風斬はAIMから漏れ出る能力を行使できる。

そもそも考えてみれば当然だった。AIMそのものによって認識されている風斬氷華という熱、風斬氷華という光、風斬氷華という感触、これら全ては能力者によって作られた能力だからだ。

もし、風斬氷華という人格がなく、ただ暴れるだけの化物であったなら、即座に自身の存在を認識し、善悪の意味ではなく、文字通りの意味で正しく震えていたのなら、風斬は能力を使えたはずだ。

もし、この場に御坂美琴が、彼女のような“あの事件”の関係者がいたのなら、その存在をこう表したはずだ。

幻想猛獣——AIMバースト……と。

（これは、この力は普通じゃない）

風斬は駆け出した。

もう既に、種は見えていた。一方通行の放つ攻撃、そのアドバンテージであった不可視という存在はどこにもない。後には、人間の走る速度程でせまる青い刃と、その奥へ鎮座する無防備な将。

（もしかしたら、学園都市で努力を続ける人にとっては冒涇みたいなものかもしれない）

もはや止まる理由も、踏み込まない理由も何もない。

（化物って言われて、大切な人を失うかもしれない）

幾重か襲い掛かる刃のそれに、風斬は一つ一つ対応する。

意識することで、肉体強化——恐らく、風斬の怪力の理由——を鋭く、演算する。

（でも、この力を、笑顔のために振るったっていいじゃないか）

体がさらに軽くなる。止まるものは何もない。

風斬の両手両足、さらには胴体そのもの、ありとあらゆる角度をそぎ落とそうと迫るそれを、屈み、割り込み、そらして回避する。

そして——ついには目の前へ肉薄する。

むき出しの玉に——王手をかける。

（学園都市には、自分のために、誰かのために笑顔を向けられる人がたくさんいるんだ）

——不幸な人だっているかもしれない。

——泣き続けて、死を畏れている人もいるかもしれない。

でも、

（笑えない人間が、笑いたくない人間は——いない）

それは、殺戮の笑いかもしれない。

それは、卑屈の笑いかもしれない。

それは、自嘲の笑いかもしれない。

けど違う。

裏を返せばどれも同じ。

（そうですよね、当麻さん——私の一番、大好きな人）

幸せを求める笑みに、否定はない。

風斬の拳が、然りと放たれた人間のそれが、絶対の元、一方通行へ叩きつけられた。

そして一方通行が大きく、後ろへ吹き飛ばされる。

第二章 6 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
そういえばユニークが一万です。ありがとうございます。

第二章 7

7

自身の握った拳を振りぬいて、風斬は違和感を覚えた。

——一方通行は一体、どこへ行った？

気がつけば、敵はどこにもいなかった。殴りつけ、三秒とは行かずとも、二秒は叩きつけて、それを突破口にもう一度、そう考えていたのに、その対象はどこにもいない。

左を見る。見覚えのある自販機。

右を見る。見覚えのあるベンチ。

前を見る。——奥を、見る。

一方通行が立ち上がり、片手で腹部を押さえていた。

簡単なことだった。

人目で見れば一方通行が何をやったのかが簡単に理解できる。学園都市そのものを誇る頭脳だ。わからない理由はどこにもない。

むしろ、解らないほうが不自然だった。

風斬が叩き込んだのは鳩尾、丁度一方通行が押さえている部分だ。威力は人間のそれと余り変わらない。まさか限界があるとは思えなかったが、余裕をもって攻撃した結果だ。威力は風斬を吹き飛ばしていた一方通行のそれとさほど変わらないだろうか。

——つまり、

（こっちの攻撃を、わざと受けた！？）

恐らく一方通行はコチラが尋常の速度で攻撃することは読めていたのだろう。卓越した戦闘センスを持つ彼のことだ、可笑しいことはない。

そしてその上でわざと反射を切った。

賭けだっただろう、失敗すれば風斬の一撃は確実に人を殺せる。だが、一方通行は風斬が人間大の一撃を叩きつけてくることを確実に読みきって、選択した。

風斬本人に自覚は無いが、しかし驚愕はする。――その選択に。

が、それは風斬だけの評価だった。

ほかは違う。

少なくとも一方通行は、その驚愕に対して、そしてその直後のそれに対して、怒りを覚えていた。

風斬の体がぶれていた。

これは風斬自身直ぐに認識し、理解した。

限界が来ていたのだ。――風斬は陽炎の街からこの学園都市へ、ある一定量のAIMで持って現出する。それは陽炎の街でなければ集めることの出来ないもので、能力を使用している能力者に延々と触れ続けられずと現出していられるが、元々一週間二週間は“無茶をしなければ”現出し続けられるので問題はない。

だが今回はそうもいかない。

彼女はこの戦闘において怪力を発揮し、さらには途中から何度も力を浪費し、最後には数少ないAIM――つまり搾りかすのような

もの——で能力まで行使してしまった。

当然ながらその姿はブレ、消えかけてしまう。

別に消えてなくなって、二度と現れないわけではない。風斬氷華
という意味は死なないし、そもそもただ戻るだけだ。数日かければ
再びいつものように上条の元へ訪れることが出来る。

そう、数日かければ。

風斬も一方通行も、それは理解していた。

だからこそ風斬の顔はこわばり、一方通行の顔は憤怒へゆがむ。

この戦い、風斬の敗北だ。

風斬の目的からしても、一方通行の目的からしても、それは非常に
不味かった。

立ち上がってしまった。それは一方通行の重くのしかかる。もし
立ち上がるだけの力が無ければ、ここで正しく一方通行が負けてい
れば、しかしそれは『たれば』でしかない。

反射的に、戦闘的に立ち上がってしまった彼は、もうふらつくこ
とはないし、能力行使に何の影響もない。

それはもう、絶望だった。

（ツくしょう！ なんでだよ！ なんでだよ！！ なんでなんだよ
オオ！！！！）

吐露し、俯き、拳を握る。

握られたそれにはゆっくりと力がはいり、人を殴る力がはいつて
いく。——もし反射が無ければ、そこからは壮絶な赤がにじみ出て

いたことだろう。

（ふざっけンじゃねエ！　なんで英雄ヒーローがかてねエンだ！　誰かの為に戦って、勝つのが完全無欠の英雄じゃねエのかよオ！）

そうでなくとも、反射がそれぞれに適用され、一方通行の演算は無理をきたす。

その程度で何とかなる一方通行ではないが、それもあつてか、それとも無くてか、やがて無気力に手を話す。無意味なそれを、手放す。

（そオだよな。結局はそオなんだよ。結局俺はかわらねエ——無敵つてのはつまり敵あいつすらいなくてこつたア……滑稽だねエ、笑えるねエ）

アクセラレータ

一方通行はバケモノ——風斬氷華すらも超えてしまう。絶対無敵の、人。それはつまり孤独であり、孤高であり、それは——そう……——それは一方通行が、求めてきたものではなかったか。

好きになった少女——砥信を救えず、やけっぱちの様に繋いできたここまでつまり、このためではなかったか。

最強になる。

誰も殺さない最強に。

だったらつまり、そのための無敵じゃないのか。この戦いに勝つ、それもある。最強すら超えた人畜の化物、それすら越えた先にある、無敵。

その為に、自分はまさか、生きてきたのではないか？

ならば何でもいい、無敵になれば、なんでもいい。

世界の全てが一方通行に対して、戦いたくないという選択肢を、

戦う前から選ばせる。そんな無敵であれば——地獄の帝王であつても、いいはずじゃあないか。

——それで、いいんじゃないか？

一方通行のなかで何かが切れた気がした。

アクセラレータ

一方通行自身、わかつてはいたのだと思う。——所詮、彼は一方通行なのだ。文字通り、文字以外に皆無。

どれだけ願っても、どれだけ誓っても、それがかなうことは無い。ただ一度だけの一方通行。

それが彼だった。

「——やる」

言葉は、自然と漏れた。

切れたのは防波堤か、それとも理性か。一方通行にはわからなかった。

——風斬は、

「……？」

疑問をそのまま、しぐさにあらわす。

一方通行がそれとともに、ほえた。

「全部——ぶち殺してやるっつてンだよオオオおおおお!!」

そのまま飛び出して、そのまま風斬に激突した。

彼にしては珍しい隙を考えない一撃。——それでも風斬は回避で
きない。一方通行もそれはわかっていたのだろう。

A I Mを、自分自身を維持するのに、風斬は精一杯だった。
その風斬に、ぎりぎり一方通行の能力が襲い掛かる。
ベクトルで風斬そのものを吹き飛ばそうというのだ。

それを、真正面から耐えている。

一方通行は疑問に思ったのか、少し眉をひそめる。
だが、今は耐え続ける風斬に集中しなくてはいけない。切れてし
まった意思が、そう告げる。

それからしばらく膠着が続く、どちらも退こうとはしないし、限
界だとも思えない。それが、長く、長く、長く保たれる。
決着は、感じられないようにも思えた。

やがてベクトルと化け物の対決は、言葉にも侵食していた。

「ンだよ！ テメエは！ まだ、まだ倒れねエつつウのかよ！」

「知りませんよ、そんな事！ 倒れるか倒れないか、負けるか負け
ないか、平伏すか平伏さないかなんて、知りません！」

「っざっけンじゃねエぞ三下ア！ テメエらは全員そうじゃねエか

よ！ 自分のため、誰かを救えなくとも、言い訳をして納得すんだろオ！ それじゃあ、最初から救わないのと同じじゃねエかよオ！」

「前提から違うじゃないですか、それ。誰かを守るのに納得なんて
 いらないし、妥協をするなら救いません！」

「だったらテメエはこういいてエのか！ 私は違うんですウ」

「それがどうしたって言うんですか！ あなたの言ってることは結局、ただの不幸自慢じゃないですか」

何度も何度も、ベクトル任せのこぶしをたたきつける一方通行、風斬は回避しない。回避自体はたやすい——今の一方通行は周りを見てはいない。目を瞑っても回避できる。だがこれは、回避してはいけなかった。

「うつせエエンだよ！　倒れろ！　負けろ！　平伏しやがれ エエエ
エエエ エええ えええ えええ えええ えええ えええ えええ えええ
えええ えええ えええ！」

グッゴガガアアアアッ！と、一方通行の最大がたつきつけられる。だがそれでも、風斬は顔をしかめるだけで、倒れようとも、負けようとも、平伏そうともしなかった。

そしてそれが終わってひとつだけ。

「お断りします」

一方通行の奥を見て、そう答えた。
その先には、

少し前――

風斬の体が揺らいだ頃か、それとも一方通行が立ち上がった頃か。
おそらくどちらでもよかっただろう、どちらもが風斬の危機である
ことに間違いは無かったのだから。

その危機に立ち上がれない人間では、ワンコは無かったのだから。

はじめ、風斬が一方通行に追いつく速度で戦闘を行ったときには
驚いた。

さらに、風斬が一方通行の反射をものもしなかったことには、
助かるのかと、希望を持った。

そして、風斬が一方通行に切り裂かれ、それが修復されたとき、
ワンコは素直にすごいと思った。

自分が持った友人は、強くて、凛々しくて、一人でそこへ立って
いられて。そんな友人を持つことに、一種の誇りすら、持てた。

親友になりたいな、と。心のどこかで、そう思った。

だから自分の親友がピンチになったとき、助けようと立ち上がる
のに、躊躇はいらなかった。――もうどこにも、ワンコの中に虚無
も絶望も恐怖も無かった。

求めた先は一人の少年。

突然現れて救おうとしてくれた、もう一人のヒーロー。

倒れ付すその少年に、ワンコはただひたすらの嘆願を行う。

「――あの人は、私の友達なんです」

思い出すのは風斬との思い出。それは回想か、それとも走馬灯か。

「私が突然話しかけても、へんな風に見るだけで、すぐに受け入れてくれました」

一つ一つは確かなものだった。

「私のために、本を選んでくれました」

不変で、不動で、不敗の記憶。

「一緒に本の感想を語り合ってくれました」

絶対に、違えない、ワンコの黄金。

「死ぬのが怖くて、そんな私が見られるのが怖くて、逃げたのに、あの人は私を助けに来てくれました」

どうか、どうかとワンコは涙を流す。

「あの人を、私の一番大切な友人を、助けてください。守ってください――救ってください！」

吐き出して、泣き出して、倒れ込む上条へ、言葉を向ける。

上条当麻は――そして、

確りと、その眼差しが一方通行をつかむ。

「な……アあ？」

思わず一方通行が間拔けな声を放つ。

上条当麻は、正しく、右手のこぶしを握る。

驚愕する一方通行に、上条はただにらみ返して、そして右手を振りかざす。

『私が突然話しかけても、へんな風に見るだけで、すぐに受け入れてくれました』

『世の中男尊女卑で女尊男卑なのよ？ 女の子は男の子に守られて、平等なんかじゃ絶対ないの、判る？ 少なくとも私のような例外除けば、女の子って、強いようで弱いなのよ？』

知っている。

『死ぬのが怖くて、そんな私が見られるのが怖くて、逃げたのに、あの人は私を助けに来てくれました』

『どれだけあくどい事考えても、女の子は力じゃ絶対に勝てないの、

それをわかった上であんたはその女の子と付き合ってる？　ちゃん
と守れるの？」』

わかりきったことだ。

風斬氷華を好きなのは誰だ。

風斬氷華が好きなのは誰だ。

風斬氷華に世界で一番近いのは、どの人間だ。

ギリッと齒軋りをして、一方通行が飛び出す。距離はほんの二、
三分。速度は間違いなく、今までの一方通行と何も変わらない。
それでも、受け止める。

上条は、突発的に放たれた一方通行による右腕の横薙ぎを、弾い
て返す。直線的なそれを下から掬いあげた。一方通行の体が持ち上
がり、両者が交錯する。

長い戦いだった。

死にたく無くて、

助けたくて、

守りたくて、

逃げられ無くて。

いろいろな意思が、そこに在った。
ただ一夜の地獄が、築かれていた。

——上手の一方通行。

——下手の上条。

「誰の彼女に、手えだしてんだ——クソガキ」

最後の最後。

上条の一撃は一方通行に突き刺さる。

どさりと、ひとつ。

ぱたりと、ふたつ。

一方通行が先で、上条が後。

その後、あたりからは一切の音が消えた。

最強はもう、立ちあがらない。

第二章 7 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。
恐らくこれも、上条さんらしさ、かも知れない。

エピローグ『助けた未来の証明 Then | light | a—』

雨上がりの街を、御坂美琴は歩いていた。

あたりは昨日の雨で出来た水溜りが多少残るのみで、それも数時間すれば夏の日差しで消えていくことだろう。

時刻は朝方、通勤通学の時間だが、今は夏休み、その姿はまばらだ。

そして世界は昨日の雨などどこ吹く風で流れている。

——雨は、もうどこからも消えてしまっていた。

美琴が目指しているのは学園都市に存在するとある病院だ。

知り合いの話——今日の朝突然掛かってきた電話によるものだ——によると上条当麻の入院先がここらしい、詳しくは現地という事だが、美琴としては上条がどうなったのか気になって仕方がない、（『たとえお姉さまでも、弱りきった女の子を、戦場に放り出すのを、黒子は許容できませんの』……か、ありがと黒子、おかげでちよっと冷静になれた）

「——か、さか——御坂！ 聞いていますか！？」

「っ！？ な、なに？」

不意に横合いからかけられた声、それによって美琴は自分が随分と物思いに耽っていたのだと自覚した。あわてて辺りを見渡してみれば、前述の知り合い——絹旗最愛の不機嫌そうな顔が見えた。

「聞いていませんでしたね？ まったく、御坂はもしかや超御坂では

ありませんか？」

「ちょっと、どういう意味かしら？　それ」

「べつに？　超御坂に教えることは何もありますよー、今回のことだって、私がちゃんと説明してるのに、超聞く耳持たないんですから」

やれやれと嘆息する絹旗は、なんだかんだで疲れたのか、大きく伸びをして視線を美琴からはずす。

「ご、ごめんごめん、やっぱり何があったのかって、私としては気になる所だから……ね？」

「別にいいですけど……」

視線で美琴に促すようにしながら前を見る。

「まずは病院に入ってしまったでしょう。超長話って訳でもないので、病室に行くまでで終わりますよ」

「随分断言するのね」

目の前にはもう病院だ。

少し歩けばそこへ到達できる。――上条当麻が、そこにいる。

「一度説明しましたからね。それほど時間が掛からない事は体験済みです」

説明したのは恐らく上条だろう。

美琴は何となくそう結論づけて前を進む絹旗の後を追う。

「それにしても不思議なものね、偶々知り合った知り合いがこう、向こうの住人っていうのは」

「根性が足りないからですよ、御坂」

「どういう意味よ！ それ！」

軽く駆け出した絹旗の後を追いかける美琴。少なくとも部外者であつた彼女たちは、随分と落ち着けているように見えた。

「この始まりは私とセロリ……一方通行が顔見知りだったのが原因ですね」

コレがなければ、この結末はありえなかっただろうと、軽く笑つて、誇る様でもなく、冗談めかす様でもなく、困つたように絹旗は言った。

いつも根性根性いつているイメージの絹旗からは、余り想像できない表情だった。

本当だったらそういつた“信念”——人を助けようという人間は自分ではいけないのだ。絹旗は基本自分本位の人間で、それが偶々他人にも悪い影響を与えないだけだ。

だから本来なら、これは上条当麻が単体で十二分に片付けられたはずだ。

最強なだけではない最強、一方通行がいなければ。

「一方通行は数日前、唐突に私へ連絡を取ってきたんです。携帯の方にかけてきたのは、直接私に頼むつもりだったんでしょうね」

それを聞いて、美琴はあることを思い出す。

たしか絹旗には、絹旗自身が師匠と呼ぶ、同居人がいたはずだ。美琴の知っている人物らしいが、あった記憶は一度も無い。

「一方通行……もう超セロリでいいですよね——セロリは私にこう頼んできたんです」

『助けて欲しい』、と。

正直その一言を信じるのに大分時間が掛かった。

「セロリは腐っても学園都市の頂点ですからね、何も出来ないとは思えなかった。過去になにかあったらしいですが、私が触れていい過去では、超ないでしょうし」

超びっくりだと、今度こそ冗談めかして絹旗は言う。

「何でも自分が逃げればモルモットでしかない妹達シスターズは処分されてしまう。研究所を叩き潰しても妹達は複数の研究所にいる。されか一人でも人質にとられれば言うことを聞くしかなかったそうです」

ですから——と、続けようとした絹旗に、そこで美琴が割ってはいらる。

「ちょっと待って……聞いてて違和感しかないんだけど、私は多分前提から解ってないわ。結局一方通行ってなに？ あいつは妹達を殺そうとしたんでしょう？」

美琴からしてみれば一方通行は二万の地獄を作ろうとした虐殺者でしかない。そんな彼が助けてくれ？ 処分されるのを危惧する？ 一体どういうことなのだ？

そのところを、美琴はいまいち理解できていない。

絹旗はああ、と息を漏らして、ハッとする。

「そういえば行ってませんでしたね、セロリは人を殺したことがありますよ？」

「はい？」

疑問によって暫く、美琴は病院内で立ち尽くした。

美琴が意識を戻すまで数十秒、現実を理解するまで一分ちよつと。最終的に二分ほどの時間をかけて美琴はそのことを飲込んだ。

いろいろと葛藤はあっただろうが、絹旗は納得するまでずっとまっていた。

「……わかんないわよ、虐殺者なんだって、多分憎んですらいたやつが突然いい人なんですって、そんなのわかんない」

「セロリは超良い人ってわけじゃないですよ？ 人は殺さない代わりに、ギリギリまで痛めつけて二度と立ち向かって来れないようにって……結局それは、超言い訳ですからね」

むしろ憎むべきなんだと、絹旗は続ける。

「超背負いすぎですよ、御坂は悩む必要なんか無かったんです。あ

あなたは巻き込まただけ、そもそも悩むなんて柄じゃあない。私としては、少し怒ったくらいで超電磁砲レールガンをぶっ放す超お嬢様な御坂の方がいいんですけどね」

「……知った口聞いちゃって」

私だって悩むこと位ある……と口の中で転がす。

言葉にはしなかった。できなかったけれど、絹旗はそんな美琴のことを過敏に感じ取ったのか、軽く苦笑して、言葉が続ける。

「向き不向きですよ、たとえば私には超自慢じゃありませんが悩みなんてありませんし、悩むつもりもありません、根性があればそれでいい。迷いも不安も悩みもなにかも、全部吹き飛ばすのが私、絹旗最愛なんですから」

同じように、美琴は悩むことはあっても悩みを抱え込むことはないほうが良い。完全無欠の超電磁砲。美琴はそれ以外の何者でもない。

絹旗は笑みを緩めて、天井を見る。

灯りがポツリポツリと灯っていてそこが建物の中なのだと実感する。いつもとは違う、病院という場所なのだと、辺りを見渡して体感する。けれど御坂を見て、そこにいるのが御坂美琴なのだと、絹旗は確認した。

「……なんだか馬鹿みたいね、あなたが」

「馬鹿で超結構、とりあえずは……話を戻しましょうか」

そうね、と美琴は肯定した。

「御坂00001号は確固とした意思を持った完成形でした。偶然出来た代物でしたが、その妹達……本人はワンコと名乗っているのですがね、ワンコのことをセロリが知ったんですよ。それですね、その超セロリが私に思い出作りをさせてやって欲しいっていつてきたんですよ」

受ける気はなかったのだけれど、受けたらしい。

気になったからというのと後一つ、それを絹旗は話さず。

「それで適当に外に放り出したら超不思議、セロリを倒せる人材が超出てきた……っていうのが今回の詳しいところですかね」

不思議なものだと、絹旗は言う。

「まあ——も——しれませんし超——スターの考えることはわかりません」

「……？」

「いえ、超独り言ですよ、口止めをするつもりはありませんが話すつもりも超ありません」

よくわからないと首を傾げる美琴。

それで構わないと、立ち止まって絹旗は言う。

「つきましたよ、ここが上条の病室です。——複数部屋なんですが……あいつ、この名前で入院してるんですか」

くるりと回って一言。

よく解らなかったが美琴はその理由に直ぐ気がついた。

上条当麻様

一方通行様。

入院している人間の名前だった。

中に入ってみると、上条が白いシスター服の物質に噛み付かれていた。もごもご動いていてよくわからないが右手を執拗に攻撃しているらしい。ちよつとのぞきこんでみると、怒った表情のアンティークが見えてきた。人形の様だ、とは間違いではないだろう。

上条はそれを甘んじて受け入れているようで神妙な面持ちで終わるのを待っていた。一方通行が隣で興味なさげにそっぽを向いている。

よく解らない状況に、絹旗ですら驚いてしまう。

「……誰ですか、この子」

「ふえ？」

絹旗の呟きに上条に噛み付いていた白いシスター服がそれを解いて絹旗の方へ振り返る。美琴は今だ名前が書かれたプレートの前で立ち尽くしていてその場の会話に入ってきてそうには無い。

一方通行も期待するだけ無駄だろうし、実質その場には絹旗とシスター服と上条しかいなかった。

「よ、よお」

「よく解りませんが、超お疲れ様です」

とりあえずねぎらってみた。

どうもシリアスのようなので変態とかいっちゃいけないだろう。
半分くらいそう思ってるけど。

「ん……誰？」

「こっちの台詞です。っていうか先行は私でした」

「私？ インデックスっていうんだよ、君は？」

「絹旗最愛です」

軽く返しながら思考する。

インデックス
（目次？ 随分と偽名臭い……というか聞かない。普通こんな目立つのが目立つ人間の近くにいれば情報がないなんて事はない、というと——アレイスターが隠してる？）

解らない。

のでそこで思考を打ち切り、体を反転させる。

「ちょっと御坂ー、折角来たのに固まってないでくださいよ、それとも緊張してます？」

「ふえ？」

先ほどのインデックスと同じような感じ——だが妙に固まった感じで答えが返ってきた。どうにも落ち着いていないようで、そもそ

も一方通行のことを飲込めていないようだ。

もしここで怒れば、うらめばいいのだろうが、美琴個人として、その感情が固まっていない様子だ。

まあしょうがない事だろう、立ち位置が微妙だったのだから。

「ん？ 御坂と知り合いだったのか？」

「少し前に知り合いましたね、友人ですよ、偶々」

コレばかりは何の意図も無いだろうと思考の中だけで言葉を転がす。

「そっか……よう、御坂、よく来たな」

「え、あ、うん。おはようございます」

声をかけられた美琴は思わずかしこまって恭しく挨拶をしてしまう、普段の美琴らしくはないが、つまりそれだけ緊張している。もしくはパニックを起こしているということだ。

絹旗は困惑しているのだから楽しんでるんだかどうにもあやふやな笑みを浮かべる。上条は顔を引きつらせて驚いている様子だ。

「ど、どうしましたのですか、御坂さん」

「べ、別になんでもないわよ、ちょっと落ち着かないだけ……ちょっとだけ」

どうしたものかとオロオロする御坂。絹旗に視線を向けると目をそらされた。上条には向けられず、インデックスには首を傾げられ、

思わず一方通行にも視線を向けるが、向こうは昼寝中だ。

因みに御坂が目をそらした後身じろぎした。この一方通行、実は起きている。

「まあその……さ、ありがとう。いろいろ言いたいことはあるんだけど、浮かばないから……ごめん」

「別に、そういうんじゃないんだろ。救えたから救った。礼を求めてやったわけじゃないんだから」

「いやまあ……うん、そうね、本当にありがとう。結局私は何も出来なかったから」

「しなかった……じゃないんだろ？ だったらそれでいいさ。何せ御坂はまだ始まってすらいらないんだ。シスターズ 妹達は今後お前が関わっていかなくちゃいけないことだ。問題はまだ残ってる。だったらまずは一步、踏めるんならそれでいい。そうだろ？ 一方通行」

上条の視線が、迷うことなく一方通行を射抜く。眠った振りをしているのは近くにいます上条からすればマル解りだ。もしかしたら絹旗も気がついていられるかもしれない。

別に上条がそう考えるわけではないが。

とかく美琴はといえば驚いたように再び一方通行へ意識が向く。見ると一方通行は鬱陶しそうな視線を全員に送っていた。

「なんでそこで俺に振るんだよ」

暫くの沈黙から持って、一方通行が声を上げた。不機嫌そうな、全部拒絶するかのような声、実際一方通行の感情の半分は拒絶である。

上条はそれを軽く笑っていなし、さらに言葉を続ける。

「お前だってそうだろう？ 一方通行、お前、あそこでワンコを殺してたら絶対に後悔してたぞ」

「……否定はできねエ」

「だろ？」

否定はできないと言った一方通行の感情を理解しているのかしてないのか、上条はそれも笑って受け入れる。そして今度は美琴の方を向いて。

「だから結局、ハッピーエンドでいいんだよ、敵も味方も全員笑って——笑顔って、そのためにあるんじゃないのか？」

「ンなお涙頂戴で何でも出来るンなら、俺ア今頃おめエの立場だったはずなンだがなア」

「出来るもんならやってみろよ、相手になるぜ」

上条は軽く返して右手を振るう。軽く手首を一回転、そのままぐつと、力まかせに握りこんで見せた。

「……………ふン」

一方通行は不愉快そうにそれを返す。

上条は何もいわず、ただ美琴の方を見た。暫く世界が沈黙して、やがて美琴は答えを描く。

自分にとって上条当麻とはなんなのか、ワンコという少女はなんなのか、一方通行とは一体なんなのか考えて、迷って、悩んで、答えを模索する。

正解はないだろう。けれど答えはあるはずだ。

だから美琴は其中で、最も自分が妥協できる考えを選らんだ。

「解んないわよ……結局私はあんたみたいにバカにはなれないし関係者にもなれない。じゃあどうすればいいか、何て私には解らないわよ」

「そっか」

「だからね、もう気にしないことにする。どうでもいいわ、そんな事」

「そっか」

「じゃあ私はワンコって子の方に行くわね」

「そうだな」

「あ、じゃあ私も行くんだよ、ひょうかがまだいるかもしれないしね」

インデックスが上条から離れ美琴の方へ向かう。

「それじゃあ、ね……と——一方通行」

美琴はドアに手をかけて、振り返る。上条、絹旗、そして一方通行、その場に残る人間が順繰りに視界に入った。

最後に一方通行。

そのことを確認して、美琴は答えを出す。

この事件、部外者であり、原因でもあった少女は、そうして答えを、一つに見せる。全部を込めて、美琴は言った。

「ありがとう」

——彼女の出した答えは“肯定すること”だった。

憎もうにも憎めず、恨もうにも恨めず、感情を定めようにも、定められなかった御坂美琴が出した答えはいっそのこと全てを肯定してしまうということだ。

聞くに一方通行は実験を止めようとしたらしい。そんな人間が、自分から実験に参加したわけでもない、何か理由があったはずだ。ならば“一方通行は何も悪くない”。

恐らく不器用ではあるけれど彼は優しい人間だ。

だったらむしろ、妹達と出会うチャンスを与えたと考えるべきだ。美琴はそれを9割の本音と1割の嫌がらせで選択した。

最後に軽く笑って、美琴は外へ出て行った。

その直ぐ後に絹旗もその場を去って言った。上条と一方通行の元へは一度やってきていて、説明を終えている。あくまで彼女は美琴の付き添いだった。

後に残ったのは上条と、一方通行の二人。この二人がその場に、取り残された。

「おい」

「ん？　なんだ？」

「殴ったりしてこねエのか？」

「……それこそ何でだよ」

「俺アおめエの彼女をああしたんだぞ？　少なくとも、おめエは怒る権利がある」

「……………はあ」

上条はそんなことかと、嘆息する。

「目を覚まして、目の前にお前がいたときは殴りかかりそうになったんだけどさ、氷華に止められたんだよ、『彼はそうするしかないから』だってさ」

「そオかい」

そうだ上条が返して、その話題は打ち切られた。

起き上がっていた上条が倒れこむ。両手を枕代わりに、天井を仰ぎ見る。体は痛むが、特に気になるほどではなかった。

「なあ――」

暫くは無言で考え事をしていたようだが、不意に、飽きたのかそ

れとも思い至ったのか、一方通行に声をかける。当然ながら反応はない。

「結局さ……お前、何がしたかったんだ？ お前だったらまどろっこしいことをする必要は無かっただろ。そもそも殺しをためらう理由も、そんなに無いんじゃないか？」

「……………」

一方通行に答える様子はない。

「お前は結局の所、一人だったんだろ？ だったら何で諦めなかったんだ？ 殺さないなんて決意をして、それを実行できてたんだ？」

解らないと、一方通行の方を向く上条、反応を返してくる様子はない。ダメかと少しそこから意識を反らす。

「……好きな奴がいるンだ」

そのときだった。

一方通行がぽつりと、そんな事を言った。

「ん？ なんだ？ 彼女自慢だったら負けないぞ？」

「おめエの惚気話をききてエわけじゃねエ……六年前にいなくなっちまったがな」

「六年前……ねえ」

「ンだよ」

「いや、長いな、って思ってる」

「そオカよ」

上条も一方通行も、そうやってから押し黙る。それ以上一方通行が過去を話すわけでも、上条が問いかけるわけでもない。ただ無言で時間が過ぎる。

それを最初に打ち破ったのは、案の定と言うべきか上条だった。

「助けようとしなかったのか？」

「……………アあ？」

そっぽを向いている一方通行の表情が歪んだ。最初は単純な呆けから、その直ぐあとは純粹な怒りから。――それは、別に誰に向けられたものではないが。

「助けられたんじゃないのか？ お前なら……最強なんだろう？ 助けるなんて簡単なことじゃないか、誰にだって勝てるなら、負けるわけねえだろ」

そこで一拍、上条は間をおく。十二分に言葉を差し込めたが一方通行は何も挟んだりしなかった。何も言わなかった。言えなかった。

「むしろ、何で助けなかった。何で救わなかった。何で守らなかった。わかんねえよ。お前、その一つのことが好きなんだろう？ もしか

したらいなくなってから気がついたかもしれないけど、それでもお前にとって大切だったことに変わりは無かったはずだ」

失っちゃいけないものだったはずだ。

「解ってるんだろ？ お前だって。今はもうわかってるはずだ。気づいてるはずだ。だって――」

「――うるっせエぞ、クソガキ！！」

「っ！」

一方通行の怒声に、思わず上条は息を呑む。――人を殺す視線、一方通行のそれが、上条へと突き刺さる。怒りと殺気、威嚇の赤は上条を違わず射抜いている。

「そオだその通りだ。わかってるに決まってる。俺ア学園都市二百三十万の頂点だ。解ってる。解ってンだよンなこたアな！」

だが、と続ける。

「救えなかった、守れなかった。助けられなかった。俺アはいつを守るって誓ったンだよ、だけどな、遅すぎた、何もかもがな！ 意味がねエ、おめエのそれも、どっか行っちゃまったあいつも、もうナも意味なンざねエンだよオオ！！」

守りたかった。でも誓うのが遅すぎた。

救いたかった。でも手を伸ばすのが遅すぎた。

助けたかった。でも気がつくのが遅すぎた。

なにもかも既に、一方通行の手に入らないところへ行ってしまう。
ていた。

「そうか……そうだよな……でもさ、何で死んだって決まったわけじゃないのに諦めるんだ？」

「……あいつは暗部に堕ちた。少なくともあいつの能力はたいしたことのない能力だ。多少俺の能力と共通点はあるが、それだけなんだよ」

少なくともほんの12程度である少女が生き残れるとは思えない。一方通行はそういった。

「でも、その子ってお前が一番大事な人だったんだろ？ だったらそんな重要人物を使い捨てるか？ 普通人質にでも何でもつかいそうだけどなあ」

言い終わるが早い、聞こえるが早い、ギギッと、隣からベットの軋む音が聞こえてくる。見れば一方通行が驚いたようにこちらに視線を向けていた。

段々とそれが笑みへ、至極淒く楽しそうな、愉快的笑みで。

$\begin{array}{c} \nearrow \\ \leftarrow ! \\ \end{array}$

しきりに、声を出して嘲わらった。何度も何度も、静かに、しかし響く声で。

「そおか——救えるのか、守っていいのか、助けられるのか………」

…ンだア、そりゃア」

ドスンと、一方通行がベツトに倒れこむ。上を向いて、上条よりも先を見て、一方通行だけの未来を見る。希望を見る。世界を見る。最強の、幸せを望む。

「最っ高じゃねェかよォ！」

心底痛快の混じった声が、響いていた。

外から夏らしい明け透けとした日差しが舞い込んできく。厚くなるだろうと感じさせるには十分で、それもまた夏だと、笑っているような、そんな陽の中だ。

風斬氷華はそんな陽が漏れる病院の待合室でミサカワンコと共にいた。

辺りに人は無く、それは偶然か、はたまた必然か、どちらとも取れるような取れないような、世界はそんな空間だった。

静けさが残る二人だけの空間、同じ椅子に腰掛けて、二人は談笑をしていた。

昨日の事や今のこと、上条のことや風斬のほかの友達のこと。話すことは無数にあって、話し足りないほどに、時間は過ぎていく。なんでもない、普通の日常だ。例外があるとすれば――

風斬の体が透けて消えかかっていること位か。

一方通行の風斬に与えたダメージは甚大であり、それは風斬が“こちら側”へ出てくるための力自体を削いでしまうほどのものだった。

何せ学園都市二百三十万のごく一部分とはいえ、全ての力を結集させた風斬がそれを失ってしまったほどだ。どうしたって風斬はこちら側にいることができない。

上条は風斬からそれを聞かされたとき、ただ一言『いってこい』とだけ返した。それ以外は必要ないとも言うように、実際それで十分だった。

「……そういえば、また出てくるにはどれくらい掛かるんですか？」

一つ前の話題が途切れ、さてどうしたものかと言うところで、ワシコはそう問いかけた。

「あんまりわかんないけど、八日……かな？　ずれるかもしれないし、ずれないかもしれない。正直その時になってからじゃないと解らないよ」

「そうですか。氷華ちゃんは強いですから、そんなに時間は掛かりませんよね」

「私は別に強くないよ、うん、一人だったら絶対に、強くない」

二人だったから、守りたいものがあったから、それが風斬の強さだ。——もただ力任せに暴れ、破壊をもたらすのであればそれは、強さではない。

「だってそうでしょ？ ワンコちゃんや当麻さんがなくちゃ、私は何も出来なかったから。あの時勝ったのは私じゃなくて、ワンコちゃんと当麻さんなんだから」

自分はただ立っていただけ。だったら、意味はない。苦笑いするように風斬は頬を書く。

当然と言えば当然、ワンコはそれを否定する。真っ向からちがうよ、と目の前の風斬に言う。

「多分、氷華ちゃんが一発当ててなかったら、上条くんので、あの人は倒せ無かったと思いますよ？ それに氷華ちゃんがあの人を意識を自分にだけ向けていたから、上条くんは接近できたんだから、全員誇っていいと思うんです。私だって誇っちゃいます」

えっへんと、オリジナル美琴に比べると、少しだけ厚いように見える胸をはる。

実際、風斬がいなければワンコは動く勇気を持てなかっただろうし、ワンコがいなければ上条は目を覚まさなかった。そして上条は風斬がいなければ、起き上がれなかっただろう。

それだけ三人の行動は繋がっており、三人の存在は連鎖している。上条が欠けても、風斬が欠けてもワンコは死んでいただろうし、上条は死——良くてスキルアウトと同じ末路をたどっていた。

相手が“殺さない” 一方通行であっても、そこが戦場である以上、“三人” である必要性に変わりはない。

「……そっか、そうなんだよね、うん。きっとそう」

風斬はそれを聞いて、納得したように頷く。何かに気がついたよ

うな様子は、悟った僧侶の様であり、真新しいことを知って喜ぶ子供の様でもあった。

もう体は半分以上消えてしまっている。恐らくあと数分も持たないだろう。

「同じなんだと思う、助けることと、それは」

「……？」

「少し前にね、当麻さんが言ってたの『助けて友達になろうとしちゃ友達になれない』だって」

「よく解りませんよ、助けたっていいんじゃないんですか？」

「助けられた側が恩を感じちゃうから、対等になれないんだって。当麻さんらしいっていえば当麻さんらしいんだよ」

あくまで他人を助けることを自分のためだと言い切れる彼だからこそ、か。

それを解っている風斬は、少し笑う。

「違うとは思わない、けどそれとは別に、こうもいえるんじゃないかなって、思ったの」

たとえば、助けることが一方的な押し付けならば、

「助け合うことって、友情じゃないかな」

助け合うから、笑顔があるはずだ。

そのために、誰かの為に笑ってこそ、多分意味があるはずだ。

「……おな、じ」

一言を、飲込むように、二言を、味わうように、ワンコはぼつりと、言葉を漏らした。

「同じこと、うん、やっぱりそう。同じなんだよ、多分」

「私は、命を助けられました。それに比べれば私のやったことなんて、対したことじゃ……！」

対等じゃあないと、そういったしかしワンコの言葉は、風斬が否定する。目を閉じて、やさしく首を横に振る。軽く笑って、笑みのまま。

「十分助けられたよ、私は。それに友情っていったって、ともだちっていったって、一つじゃないでしょ？」

一人と一人の間には、他者とはまったく違うつながりがあって、個人を結ぶそれには、たくさんの種類の絆ライバルがあって、笑いあったり、話し合ったり、時にはいわゆる強敵ライバルのようなつながりもある。

それがそう、対等であったとしても無かったとしても、ともだちである事の筈だ。

「――ねえ」

結局の所、

「今度どこかに遊びに行かない？ 私が“ここ”に戻ってきたら」

風斬とワンコは、不器用だった。

「どこへ行くかとかは特に考えてないけど」

ともだちもとても少ないし、その作り方も、一から考えてわからないほどだ。

「多分」

上条が自然と、その方法を、自分の中で結論付けていたように。風斬たちは、ともだちの作り方に、たどりつけていなかった。だからこそ今ならわかる。

「とっても楽しいと思うよ？」

これが、そうなんだ。

ゆっくりと風斬がどこかへ解けていく。気のせいか、光が何度かそれに反射して、ワンコを照らす。風斬の幻影は陽炎のように揺らめいて、数少ないそれを散らしていく。

水が集まって、そして再び流れて消えるような、光の舞踊。

一つではなかった。

二つでもなかった。

無限に、永久とわに全てを照らす。

やがてそれも薄明かりへぼやけて、消えていった。

「……はい！」

消えていった風斬へ、ワンコは確りと、頷いた。
笑って、見送った。

ただ楽しみだな、と、それだけを考えた。

……

——……

……——……

声がした。

二人分。

「あ、わんこだ！　　おーい、わんこ！　　ひょうかは？」

「あんたがワンコ？　　なんだかどこかで見た覚えがあるわね」

親しげに声をかけてくる少女に、ワンコは笑って返答した。

エピローグ『助けた未来の証明 T h e n | l i g h t | a | 』（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろおまちしてます。

第四部からは巻きでいきます。具体的に言うところちょっとまってね。

補足

・うっかりせろりんはここでは仕様です。

以下今後の予定。

四巻は一章構成でその後は風斬が余り活躍しない、もしくはいてもそれほど変わらない章はカット。

一気に十三巻、今回の話の一つの区切りまで飛びます。

それとは別に四巻終了後から大覇星祭のときを舞台に番外編も書いていこうかな、と。

後現在根性さんの続編を書いているので、五巻分が終了したら上げるつもりです。

第一章『懷疑的混沌区域 Who are you?』

1

風斬氷華が最初に感じたのは違和感だった。

それは学園都市へ出るための力が失って“消失”してから数日、やつのことで外に出てきたときのことだった。

辺りは大きめのストリートで、夏らしい照り付く日差しが空気を焦がしている。

彼女が感じた違和感——具体的にいうなれば、自分が至極場違いのように感じられたのだ。A I Mが足りていないのか、どうにも体がゆがんで、自分自身が立体映像のようになってしまう……のもあるだろう。

だが、風斬自体は何も間違っていない。少し現出の仕方を間違えた気がするがそれでもここは学園都市、全人口の八割が学生である近未来都市であるならば、立体映像でも特に問題はないし、本題はそこではない。

周りが問題だった。

周囲で風斬を囲み日常を進む“若者たち”制服姿で時折物珍しげに風斬を眺めてくる人の群れ。そのどれもが通常ではありえない状態なのだ。

その最も足るものが丁度今、風斬の横を通り過ぎていく制服姿の風斬とまったく同じ服を着たほぼ同年齢と見られる少年二人。

コスプレか、罰ゲームなのかと考えて風斬は振り返るが、その後姿はどう見ても着慣れている。自然体にしか見えない。

ありえないと、風斬は首をかしげた。

それもそのはず、風斬が通う学校は“霧ヶ丘女学院”男性が入れるはずもない。

そう、今現在街中を歩いているのは、本来そのような姿をしないような、そんな人ばかりだったのだ。

たとえばキャミソールにジーンズというラフな格好の八十代。同行するのはきらびやかな装飾が目立つフリfrisカートの六歳児だ。たとえばアンチスキルの制服に身を包んだお花畑みたいな少女。他にも『お前絶対そんなの着ちゃだめだ』と言った感じの状態になっている。

(どうということなの……)

びっくりと、見られるたびに怯えるように後ずさりながら、考える。――なんだかんだで、風斬は小心者なのだ。成り行きで会話が進むか、非常時ならば問題ないが、流石にこんなときは怯えてしまう。

まあそれでも、考え事をする余裕はあるようだが。

考えていてもしょうがないと、風斬は歩き出すことにした。目的地はない、上条宅に上条自身がいらないことは陽炎の町からの監視にストーリーキングよって解っている。何せ非常に暇だったのだ。陽炎の街には食料はあるが娯楽はない。

そういった役割に変化する理由は無いからだろう。食品はコンビニやスーパーが普通にあるため問題なく並んでいるが、娯楽はない。

流石にこの間ワンコと買った本だけでは、どうにも飽きが来てし

まうのも問題だった。

大分脱線したが、つまるところ風斬は暇だった。ワンコを探すか美琴を探すか、とにかく知り合いを見つけないと今日は暇な一日になってしまいそうだ。

いっそ上条の所へ——とも考えたが、止めておく事にした。何せ

電話も上条を困らせて、迷惑をかけるだけなので却下、出発の前日、風斬を置いて行く事に一人すさまじい後悔をしていた上条を知っている風斬は、電話をかけることができない。

「……なんだろう、不幸かなあ」

上条の口癖が移ったかのような台詞を吐きながら、嘆息する。考え事をしながら今までいた場所から人気のない公園へと足を運ぶ。人気のない、とはいってもそれはあくまで先ほどまでの喧騒に依っての話。

一応公園には数人ほど子供——なのだろうか、子供服を着た年齢性別ばらばらの男女——が遊びまわっていた。——不思議と子供服はサイズが合っている。流石におかしいといぶかしむが、正直どうしようもない。

「何なんだろう」

どういうことかとベンチに腰掛けながら考える。辺りを見渡ししながら、首を傾げるばかりだ。——後ろは芝生であり、日陰のそこは思いのほか涼しい。

「もしかして私を驚かすためのドッキリ？ いやでも、流石にそれはないかなあ、お金も相当掛かるだろうし……一方通行さんプレゼ

ンツとか？ いやいや」

お金を持っていそう、で思い浮かんだのは学園都市の能力者で最も奨学金を貰っているであろう一方通行だ。が、流石にコレがドツキリには思えない。

先ほどの人の群れや今風斬の前で遊ぶ子供（？）達が非常に現実的だったのだ。

それに、これほどの人間——もし演技しているのだとすれば相当な演技力を持つ人間だろう——を雇うのであれば相当のギャラが必要のはずだ。

（流石に一方通行さんでも無理……だよな？）

正直解らない。実の所風斬は彼のことをよくわかっていない。

一方通行——学園都市におけるただ七人の超能力者、レベル5。

その頂点であり到達点、この先を目指すのであれば絶対能力者を目指さなくてはならないほどだ。

その能力は呼び名の通り一方通行アクセラレータという、ありとあらゆるもののベクトルを操る孤独の能力だと、風斬は思う。

少なくとも一方通行は孤独にしか見えなかった。

数日前の死闘、そこで一方通行は風斬に『納得して救えなかったことを言い訳する』といった。恐らくあれは風斬に対していったことではなく、自分自身に言ったことなのだろう。

考えてみれば、彼は非常に自虐的だった。

自身が圧倒的に有利なはずの接近戦から風を操る遠距離戦へ戦闘を切り替えた。その時は至極当然のように振舞われたが考えてみれば近づければ勝てるというあの状況、風斬の方が圧倒的に好条件だった。

それに自分から吹き飛んだアレも、誰がどう見ても負けた、と言う状況を作るためのものだろう。
結局、失敗してしまっただけだ。

「じゃあ結局一方通行さんって、不幸、だったのかな」

風斬は一方通行の背景をまったく知らない。ワンコは一方通行の回想が一方通行自身の口から漏れていたためあらかた知っているし、上条は“あの時”に聞いている。

あの死闘を演じた人間の中で唯一、一方通行と言う人間を知らない。

と、風斬がぼんやり一方通行のことを思いながら時間をつぶしている、その後ろに迫る影が一つ。風斬自身は自分の内へ意識が向きすぎているのか、それに気がつかない。

影は抜き足差し足で風斬にゆっくりと忍び寄り、そして。

風斬の目を隠す。

「だーれだー!」

どこかで聞いたことのある声、前回消える直前に聞いていた声と一致する。風斬は最初にあわてたものの、やがてその意図を理解し、堪える。

「え、っと……一方通行、さん」

それは風斬が消える直前に聞いた声の内一つ、一方通行のものだった。

堪えにあわせて目隠しを取り外される。

風斬が後ろを振り向くと、

「違いますよ、私はワンコです」

極上の笑みを浮かべる学園都市の頂点、一方通行さんご本人がいた。

いや、いやいや――

やいやいやいやいやいやいやいやいやいや
 やいやいやいやいやいやいやいやいやいや
 いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや

大よそ四十回プラスアルファの“いや”ループ。

多大な混乱に見舞われた風斬を一方通行は不思議そうに見つめて
いる。

目の前の一方通行……腕を後ろに組んで、前かがみになってコチ
 ラを覗き込んできている。少女——それこそワンコがやったら似合
 うだろうが、一方通行だと害悪にしかない。

服装が常盤台の制服と言うのもアレだ、どうも一方通行までやられたらしい。ふざけんな反射はどうした。

とかく、そんな中で一際目立つのは笑顔だ。そう、笑み。コレがもし人を殺せるようなタイプなら“らしい”だろう。勝手なイメージではあるが、一方通行は楽しくて笑うときも、多分不器用に笑うタイプのはずだ。今の彼の笑みは似合わない。

まあ、何がいいかと言うと、ぶっちゃけ気持ち悪い。

「……どうということなの」

本日二度目の疑問符、どうやら暫くはこの言葉にお世話になりそうだ。

「ン？ どオしたンですかァ？」

目の前で首を傾げる自称ワンコこと一方通行、どうしたものか、こいつ。

「……何か変えた？」

とりあえずジャブ、様子見。

「べつにイ何ありませんよー」

からからと、明朗に笑う一方通行、風斬は精神に多少のダメージを受けた。周りの子供かっこ笑いも合わせて、大分傷は深い。

とはいってもまだ混乱が大きいのが巧を奏したのか、それを自覚することは無いが。

これがもし可愛い女の子の水着姿な青髪のヤローがキャピキャピと迫って来ようものなら意識を手放しても仕方はない。

もしそんな人がいるのならご冥福をお祈りしますと、風斬は心のどこかで考えた。丁度その頃上条は死んでいた。南無三。

「ううん、えっと、どうしよう、これから」

「それは私にも解りませんよー、今日あったの偶々なんですしねエ」

フフ、と軽く笑う一方通行、行動が気持ち悪いが、口調も気持ち悪い。なんと言うか、こう……余り私をしゃべらせないほうがいいと言った感じだろうか。正直気持ち悪いし怖い。怖い怖い。

が、風斬の願い虚しく、一方通行は風斬から離れ、日向を出る。明らかに何か言いますよと言った様子で、軽快にクルリと反転して。

「じゃあ、ちょっとお話ししようよオ、私も暇だったところなんですから」

死刑宣告に近かった。

今日一日生きて生きて生き抜くことができるだろうか、何かかっこいい戦士の台詞みたいなことを風斬は大よそ思考の全体で考えていた。

その後、暫く移動しながら会話を続けていた風斬とワンコ一方通行――面倒だからワンコラレータでいいだろう――の二人。

孤軍奮闘、慰めてくれる人間も、心配してくれる人間もない、もしくは心配されているはずなのにダメージを受けると言う状況で風斬はよくがんばった。

時間にして大よそ一時間、何とか時計の短い針が二桁になる、そんな時間帯にまで持っていたのだ。

褒め称えてやって欲しい。

尊敬してやって欲しい。

彼女は大きな戦場を駆け抜けた英雄なのだ。

とはいえ英雄は戦場で散るか暗殺されるか女性関係で死ぬのが運

命、この場合風斬はどこぞのアキレスやらなんやらのごとく戦場に散った。

南無三。

というわけで、灼熱の地獄へと散った風斬の精神を癒すため現在ファミレスに拘留中である。机に突っ伏して目の前のワンコラレータを直視しないようにしながら、『ヴォアアアアアアア』というよく解らない声をはいている。

因みに目が死んでいるので再起はそう簡単ではないだろう。

と、そこに飛び込んでくるのは風斬の反対側、背を向けている場所に座る数人の――おそらくは友人同士の――会話である。

本来なら気にしないところだが、と言うかそもそも先ほどまで気にも留める余裕が無かったのだが、ある単語に反応してしまった。

「いやあ、いいですよね、“御坂さん”って、こうなんていうか、凛々しくて、それでかっこよくて」

「言いすぎですわよ、お姉さま”はどちらかと言うと可愛いもの好きですの」

「ちょ、な、何いってんのよ“黒子”！　べ、別にそんなことないわよ！」

とまあ、知っている単語が聞こえてきたためである。御坂――お姉さま――黒子、確か聞いたことがある。ワンコと一方通行の一件の際か、もしくは上条監視中ストーキングに（上条が）出会った黒子からこの単語が出たことがある。

ただ、その声に若干の違和感を覚えたが、それでも振り返らずに

は入られない。

びよんと起き上がって、ちらりと後ろを見る。

敗北した。

確かに美琴はいた。ただしお姉さまと発言したのが美琴だった。ほかには、一つ年号が古いのではないかと思わざるを得ない昔の番町見たいな感じの少年に、何となく育ちのよさそうな、大人の女性、そしてホスト風のイケメンさんだった。

(当麻さんの方がかっこいいですけど)

適当にのろけつつ、風斬は会話を盗み聞きする。のろけることと盗み聞き、どちらにもいえるが、こうしていないと精神が長い永い終焉へ向かっていってしまいそうだ。

「でもなんていうか、憧れちゃいますよー、御坂さんって何だかお嬢様っぽいじゃないですか」

と、ホスト風。

「お姉さまは一応生粋のお嬢様ですよ？ 認めたくはありませんが」

と、美琴さんご本人。

「なんていうか、アレですよ、普段親しみやすいから、偶にキリツとしたところを見せられると、何だか同姓なのにキュンときちゃう

と言うか」

と、お姉さん系の女性。

「なんというか、ほめられてるんだか馬鹿にされてるんだか解らないわね……まあ嬉しいけど」

と、昭和番町。

（解らないよ、全然解らないよ）

再び机に突っ伏す風斬。

そろそろ情報を整理したほうがいいかもしれないと、ぼんやり思った。

第一章『懷疑的混沌区域 Who | are | you?』（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

ギャグ回だよ！

補足

- ・基本風斬は男性は苗字＋さん、一方通行の場合苗字すら読んでくれない。
- ・まあぶっちゃけ名前教えてないんだけど、一方通行さん。
- ・後バックボーンであってるの？ 教えていつものエロイひと。

第一章 2

2

「それで、なんだっけ？」

「ほら、都市伝説ですよ都市伝説」

「毎度毎度飽きませんわねー、ほんと」

「それはほら、他に話す話題が……こほん」

上から番町、お姉さん、美琴（仮）、ホスト。

「ねエねエ氷華ちゃん、注文、何にするんですかア？」

ワンコラレータは笑みを浮かべて、問いかけてくる。実際にはそれを見ているわけではないが、もしこのワンコラレータが本当にワシコであるのなら浮かべているであろうそれを、風斬は予測した。因みに風斬の予測は正解である。果てしなく余談だが。

「とりあえず冷たい飲み物と……ご飯まだ食べてないから……えつと、あればサンドイッチ、味は決めて？」

「了解」
ラジャー

机に突っ伏しながら風斬は考える。

とりあえずはどうしてこうなったのか、大体三度目の思考を通過点のように過ぎて、本題に入っていく。

（そもそも可笑しいのは最初から、だよな？ 怖かったなあ、見られるのは怖いよ）

意識を若干ながら遠くへ飛ばしつつ、先ほどの視線と、その主のことを考える。見覚えなどあったものではないが、しかしそれでも奇妙を覚えるのが現状だ。

そもそも現状からして可笑しいことはなにも変わっていない。

まあ、殆どはここが学園都市だからおかしいと言えることなのだけれど。

そして、遠のいた意識の端に、かすかに隣の会話が聞こえてくる。意識が何となくそちらを感じたか、それともただ単に少しばかり会話が気になっていたか。

「で、最近気になったのは“独り立ち” って言うのなんですよ」

「独り立ち？ 何だかわたくしたちみたいですよわねえ」

「そういう独り立ちじゃありませんし、別に私たちも自立してるわけじゃありませんよ？」

「この場合は削ってない鉛筆を縦に立たせるって感じですよ」

多分、と付け加える。どうも表現に迷ったらしい。

とかく、同時進行で風斬は思考をまわす。

「で、結局なんなのよ、その“独り立ち” っていうのは」

（じゃあ何で可笑しいのか、何が正しいのか、だよな）

「んーと、ですね。独り立ちっていうのは文字通り立体映像が突然なんでもない道路の上とかに“独り立ち”しちゃうんです」

「……？　つまりどういうことですか？　聞く限り、ただの能力者のいたずらでは？」

「話はこれからなんですよ！　何でもその立体映像が誰かと話をしているのを見たことがあるっていうのがこの“独り立ち”の特徴なんです」

ホスト風の青年が少しだけ興奮気味に言う。

（私自身はこれを可笑しいと認識している。でも周りの人……ワンコちゃん？　とかは気付いていない。……そうだとすると、つまり今現在、本来可笑しいのは私なんだ）

「それはまた難儀な立体映像ね、噂があるって事は、ある程度姿形がわかってるんでしょう？」

「そーなんですよ、何でも独り立ちは霧ヶ丘女学院の制服を着ていて、こう、おおきくて、結構解ってますよー、髪はストレート、一房束ねてて、めがねかけてるんですってー」

「怖がりなのか、見られると微妙に怯えるそうです」

「……？」

「……んー、ですよ」

(じゃあつまり……あれ?)

美琴? 番町、風斬の三人が、それぞれホストとお姉さんの言葉に反応する。まったく同じような反応で、——言うなれば、何かに気がついたような反応だ。

「どうしました?」

「いえね、何か知り合いにそんな子がいた気が……」

「奇遇ですわね、お姉さま、わたくしの知り合いにもそんなのがいますの」

(……それ、私だよ……)

それぞれ、風斬が机に倒れ付して、他の二人は考え込むように腕を組んでいた。風斬は見えていないが。

「え? マジですか?」

「んー、もしかしたらそれは普通の人間かもしれないの」

「え? でもあの子って……いや、なんでもないわ」

「……?」

何かを言いかけた番町に、ホストが首を傾げる。

(うーん……昨日の今日で噂が広がるとは思えないし、そもそも確かに私は立体映像みたいになってたけど、それって本当に数時間前

だよね？　もしかしたら消える前にも添うみたいだったことがあるのかな？　それともあそこで私を見た人がそう言うサイトに投稿したのを読んだか……うーん？）

考え事をしつつ、言葉に耳を傾ける風斬。因みに今現在の彼女は普通の人間と何も変わらない。ワンコラレータとあった前後に、ちゃんとA I Mを固定させておいた。

“能力”を自覚するとういうったことも出来るのだ。

「それでそれで、なんとその独り立ちは凄いですよ、何でも怪人悪・セーラーレターを倒してしまったそうです」

「深夜の大決戦！　周りが火の海！」

楽しそうに単語を並べるホスト青年。コレがもし中身が美琴と同じくらいの少女だったらかわいらしいで済むのだろうが、ぶっちゃけ気持ち悪い、凄く。

とはいえ、風斬はそれよりももっと聞き捨てならないことを聞いてしまったので、それ所ではない。というか、思考すら完全に沈黙している。

（……）

「他にも謎の雷で崩壊するビルの中を悠然と歩いた、とか……覚えてます？　この間の“三沢塾”の話」

（……え？）

少し理解が進む。

「確か、暴走して、カルト宗教みたいになった挙句、学園都市に崩壊させられたとか言っていた“アレ”ですの?」

($\vdots$ え? $\vdots$ え?)

疑問符に何度も首を傾げる。

「実は……その三沢塾、一度文字通り“崩壊”しているそうなんです。学園都市はただの噂だって言ってますけど、実際に見たって人は多いんですよ」

(え? え? ... え?)

連続的に二つ、一度間をおいて一つ。そしてやつとのことで、現実に風斬自身が帰還する。

「つまり、そのかぎ…… “独り立ち” っていうのは三沢塾に直撃した雷みたいなのを受けても無傷だった……と」

[illegible]

最終的には混乱のきわみを迎えたようだ。恐らくコレまでの幻象に対するストレスや混乱も合わさっての反応だろう。そして、それゆえか、てんぱった風斬は、思わず変なことを考える。

(け…………消さないと)

ゴクリ、とつばを飲む音がゆっくり聞こえた。

とはいえそれは風斬らしくもない、随分と極端すぎる答えだ。ワンコラレータはそれを何となくか、それともはつきりか、悟ったのだろう。怪訝な声を向けてきた。

「……氷華さん？」

「ッハ……！」

正氣に戻る風斬。

何ゆえか、今どうにもトランス状態にあったらしい。危ない危ない、こんな状況だ。自制できないとどこまでも堕ちて行ってしまう。そうなのが怖い。

ワンコラレータにはなんでもないと乾いた笑いで返した。

（と、とにかく、その……なんていうか、その……何とかしないと）

考えを切り替えて、正確には切り替えようとして、しかし答えが出てこない。どうにも落ち着かないなど、他人事のように考えて、そして上条ならばこんなときどうするだろう、とも考えた。

案外どうしようもなさそうだなと適当に考えて、そしてそこで何か引っかけかりを覚える。

（……そうだ、当麻さん）

そういえば最初の方で少し考えた気がする。

そういえば、何故それ以上風斬は考えを進行させなかったのか。

そういえば——これはまさか、風斬の存在以上の何か関わっているのではないか。

（私の想像の外、多分……魔術だよね？）

——間違いない。

コレばかりは間違えようもない。魔術であるならば、上条は確実に吹き飛ばしているはずだから。自体が解決しない理由は何となくわかる。上条が風斬を殺せないのと同じだ。

（だったら当麻さんと話がしたい……迷惑をかけるかもしれないけど、でもやっぱり、助きたいから）

……上条が風斬を守ろうとするように、風斬もまた、上条を守ろうとする。

互いが互いの、全てであるから。

（けど、無理なのかな）

しかし叶わない。

風斬には上条への連絡手段がない。今どこにいるか、もしくは何をしているか。それを知り、伝える手段が何もない。

この間のワンコの一件も合わさって、携帯を所持していない事が惜しまれる。

だが、この場には適任がいた。ワンコの一件、風斬が歯噛みするそこで、体よく上条の番号を手に入れた少女が一人、いたのではないか。

立ち上がり後ろを向く。

「み、美琴ちゃん！」

助けを求められる先へ、風斬は求めた。

第一章 2（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしてます。

だからさあー、正体不明なんだってば、そのカウンターストップ。

補足

- ・ 苦渋の決断、だからこそ風斬は――
- ・ ってかつこよく言葉を並べても結局は気持ち悪かっただけです。
- ・ 因みに、この作品では一方通行は魔術、特にこういう精神に影響するものは防げない設定です。

第一章 3

3

TELLLLL……

TELLLLL……

TELLLLL……

何度も、何度も、通話のために挟まる音が聞こえてくる。場所は学園都市には何となく似合わない、公衆電話のボックスの中だ。

現在、美琴に上条の電話番号を聞いて、覚える意味がなかったから、覚えることは無いと思っていたそれを覚えて、それから昼食をかきこんでからここへ来た。

——電話の着信を待つそれは、今だになっている。

空気が少しずつ冷えてくる。外はまだ夏の熱気を残したまま、夕暮れを向かえ、そして風斬自身の心身は寒からしめている。

それだけではない——不安は、多分どこかにある。

そして。

『——だ、だれだ!?!』

それもやがて、終わりを迎える。電話越しに聞こえてきた。それでも生の、本物。風斬の表情が自然と緩んでいく、本人もそれをどこかで自覚しながら、言葉を聞いた。

「当麻さん!」

会話をしてきた、聞いてきた中で、当麻の声は唯一、風斬の記憶と違っていなかった。

『……氷華、か？』

「ん、そうだよ。私は風斬氷華だよ」

『そっか……』

向こうも、安堵したように言葉を返してくる。恐らく何かあったのだろう。それが何か風斬の推測の範囲外だが、その事案に関する心当たりは、その範囲内だ。

軽く笑って、しかしそれを遮るように上条が再び問いかけてくる。

『なあ、氷華、できればいいんだ。聞きたいことがある』

「え？ いいけど、私も聞きたいことがあるよ？」

『そっか……でもごめん、忙しい用事だから、聞いて欲しい。笑ってもいい、でも真剣に答えてくれ』

一拍、軽く呼吸を入れ替えているのだろう、上条の息遣いが届いてくる。ざらざらと、音が揺れて、そして意識をのせた上条の声が響く。

『風斬は今まで、服装と外見が一致しない人間と出会わなかったか？』

風斬もまた、何かを飲込んだ。息か、唾か、それとも果たして――そう考えたそれを一度意識の隅へ追いやって、少しの緊張を覚えながらもゆっくりと答える。

「……うん、私の周りを歩いてる人全員が、可笑しく見えるよ」

『……………解った、ありがとな』

「――当麻さん、私の聞きたいことも、それだったの」

『……?』

「聞かせて、今、この世界で何が起こっているのか。当麻さんは一体何に巻き込まれたのか」

『いや……それは』

芯ある風斬の言葉に、上条はうろたえる。

その真意を存分に風斬は受け取って、しかしそれでも曲げずにもう一度問いかける。

「教えて、ください。私は当麻さんを助け、たい」

『けど……!』

「私は! 当麻さんの事が、好きなんですよ?」

苦言を呈す上条のそれを遮るように、風斬は言う。そして――沈黙、両者譲らないと、電話越しに意思を無言で伝えあう。

助けたい。危険にさらしたくない。最初に折れたのは、後者だっ

た。

『……解った。話すよ』

卑怯だろ——そう訴える上条に、思わず風斬は笑みを浮かべた。

『エンゼルフォール
御使堕し』

開口早々に、上条はそういった。

曰く、天使の魂を世界に引き摺り下ろす事を目的とした魔術。

色々とかまごまとした影響はあるものの、一番大きなものは天使は人間の魂を追い出してのつとるため、どんどん魂が入れ替わってしまうらしい。

つまりそれが今の状況ということだそうだ。

そしてセフィロトとかなんとかの元で肉体の座標のみが入れ替わるため、上条や風斬には肉体が変化して見えたらしい。

ただし変化に巻き込まれた人間は記憶のすり替えが行われ、その事実がつかないそうだ。またそのためか、女性に見えるはずの人間を少年と呼んだり、男性に見えるはずの人間を美少女と表現することもあるそうだ。

「や、ややこしい、凄くややこしい」

『だろ？ でもコレが真実なんだよ……今はその関係でな、正直氷華が電話かけてくれなくちゃ、多分あせってたと思う。今もそうだけど、でもありがとな、おかげで何とかなりそう……だ』

電話越しにせわしない声が聞こえてくる。
かしやんと、十円玉の落ちる音がした。

『後二、三時間したら欠けなおしてくれないか？ そうしたらまた話すこともあるだろうから』

……それは、心配するなど、来ないでくれと、そういつているのだろうか。

だったらこっちにも考えがある。正直本当に出来るかどうかは解らないが、それでも多分“ある”のなら可能だと思う。

「……当麻さんの近くに、能力者っている？ 誰でもいいから、だれか」

『ん？ いや、いるけど？ どうかしたのか』

「当麻さんみたいなゲテモノじゃなくて、本物の能力を行使できる能力者です……無能力者でもかまわないから、誰か」

『いや、いるけど』

気圧されたように上条が聞く。

疑問と言えば疑問、間違いなく何かある。けれど、それを同行することにはもう出来ない。そもそも風斬は能力者がいるかどうか解れば、それでいいのだ。

「そっか、じゃあ……気をつけてね」

言って、電話を切る。最後に上条の『ああ』という肯定が、小さく聞こえた。

風斬氷華の存在はA I Mによる。半ば寄生のような、自然現象としての無意識のような存在、それが風斬だ。故にその体はA I Mが存在することによって初めて現すことが出来る。

故に風斬はA I Mが存在しない空間には行くことが出来ず、行っても消えて陽炎の街へ戻されるだけだ。本来上条が不安に思わなくとも、風斬は上条の元へ行くことは出来ない。

しかしそれも、現在は解決された問題だ。

現在世界にはA I Mが存在している。蔓延しているとも言っていない。

原因は先の一方通行の一件に置いて二万人の妹達が放逐され、唯一肉体の調整が行われ、人並み程度の寿命を手に行っているワンコ以外は著しく寿命が短い。それを何とかするために、世界各所において、妹達の調整が行われている。

世界に二万の超能力がそんざいするわけだ。

薄いながらも、風斬が行動するには何の支障も無く、今現在風斬は完全に普通の人間と同じように行動することが可能だ。

そしてもう一つ、風斬が引き出した一つの単語、能力者がいるか、いないか。――風斬はA I Mの存在する場所に出現する。つまり、上条の近くに能力者が居れば、そこへ向けて転移のような形で移動できる。

こうすることで移動時間をほぼカットできる。

まさか本当に居ると思っていなかったが、もしいなかったのならば上条の居場所を突き止めて、その近くにある妹達のいる研究所へ転移するつもりだった。

まあなんにせよ、好都合だ。

「……待っててくださいとはいわないよ。でもこれは私のためだから、危険だって解つても、やるよ」

だって同じだから。

風斬はそういつて電話ボックスから外に出る。時代錯誤の電話ボックスは、黒塗りの不透明なものだった。中と外、交差しない二つの世界の、唯一の境界線を開くと、

ワンコが無言で、待っていた。

「……、」

思わず、息をのむ。

何故ここにいるのか、会話は聞こえていないだろうが、それでも様子は何となく知られているだろう。今の風斬の雰囲気は“何かある”とは思えない。

何の変哲もないストリートの、端と端を、互いに結ぶ。

人はいない、いてもいいはずだったが、当たりにはただ静けさがあつた。

「何を、しているんですか？」

ただ単純な疑問と、同じ感情から来る不安。

風斬は対して狼狽する様子も、動揺する様子もなく、

「わずらわしい夏の日差しを、どこかに捨ててくる……のかな？」

「それは……」

「いやね、ワンコちゃん」

軽く笑って、

「お互い様、だよ？」

お前が言うなと、そういった。

結局じゃあ、自分ってなんなのかと、風斬は考える。

他人を大切に想って、助けたいと思うことが自分なのか。

好きな人のために立つのが自分なのか。

自分のために、世界を、誰かをすくおうとするのが自分なのか。

恐らく違くと、風斬は思う。

これは風斬だけでなく、多分誰でも同じことだ。

じゃあ何か、自分が自分であるために必要なのは、自分を自分で
あると自覚するために必要なのは、自分は自分だとはっきり伝える
ために必要なのは、一体何か。

今日をとってもそうだ。

一方通行の姿をしたワンコはワンコなのか。

よく解らない人になっていた美琴は美琴なのか。

姿が何も変わっていない、風斬や上条は、己自身なのか。

考えるに、それは違う。

ワンコはワンコでなければワンコではないし、ほかもまた然り。誰もか誰も、正しい姿、正しい自分を持っているのだ。

ならばそれは何か。

きつと……信じることだ。

信じて、疑わず。

信じて、曲げず。

信じて、違えず。

それが多分、自分自身。

風斬氷華はゆっくりと外の世界へ踏み出す。

時刻は最初に学園都市へ出たときからさかのぼって、半日分。

たっぷり混沌の中へいた風斬は、混沌から混沌へ、懷疑から懷疑。躍り出る。

あたりはすっかり暗くなっていた。

風斬には外を観測できるときと出来ないときがあるので、どうしても移動中何があったかは知らないが、しかしその経過時間は数分も掛かっていなかったはずだ。

ならば。

既に全ては始まっている。

真実は風斬を置いて何処かへ、それに気がついた風斬はやがて、海岸へ出ていた。クラゲ大量発生を知らせる手前側の看板。

その奥には、二つ、何かが存在していた。

片方には見覚えがある。

あの長い長い夜の末、彼女は風斬に行っていた。

『貴方はここに来るべきではなかったはずです』

それは――そうかもしれない。

けど、そうでもないかもしれない。

あの時風斬は上条を信じていた。実感はないけれど、多分信じて、客観的に考えて、そう決め付けた。今回も同じ、そして今回こそ、風斬はここに来るべきだったのだと、思う。

「――唯閃の解放と共に一つの名を」

神裂火織。

「救われぬ者に救いの手を（Salvere 000）」

氷翼^{ひょうよく}の天使と、対峙していた。

第一章 3（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもおまちしてます。
べ、別に俺入れ替わってねーしい。

補足

・青髪ピアスじゃないです。よく見ればわかりますが銀髪が青髪になっただけという変化です。

第一章 4

4

それは無限なる無垢のように見えた。

あたりへと突き刺すようなそれは典雅の施しで、蒼穹か、もしくは青碧の海との対比か、夜闇とも取れる暗がりには照らされた蒼白な雫のそれと、白銀たる透明の翼になる。

一つ、二つと枝分かれのように分れ、世界のように広がる無窮の流麗。

根源たるそれは天使のようで、いやまさしく、その少女は天使であった。

対比か、もしくは対立のように紅く、遠めに視れば日の出のようにも感じられる。そこに在るすべてがまるでこの光景のためにあるようで、幻想か、そして砂上の楼閣は露と消える。

そこに、風斬氷華は降り立った。

戦闘が始まる本の少し前、既に神裂が刀に手をかけ、臨戦態勢に入っている。上条の姿はなく、上条の近くにいるはずの能力者も、どこにいたのだか解らない。

あるのは天使と、聖者だけ。

風斬氷華は、果たしてどちらか。

「っ！ 何故——」

戻ってきたのか、そう告げようとしたのだろう。

神裂火織がこちらに気がついた。軽く振り向いて、しかし驚愕す

る。上条か、誰かだと思ったのか、遠目に見えた風斬に呆然とする。

「アナタはっ！」

驚いたように、しかしそれを直ぐに引き締めて。

「よく解りませんが、手伝いますよ？　そうしたほうが多分確実ですから」

近づきながら風斬は言う。

目の前の存在が止めるべきモノであることは一目瞭然、今でこそまだ動いてはいないが、今すぐにでも動き出しそうだ。――二、三言会話していれば、あつという間にあちらに飲込まれてしまう。

そうすれば風斬はともかく、神裂に命はない。

それは神裂とて解っているのだろう。

何か言いたげな表情であったが、直ぐにそれを引き締めて向きなおす。直ぐに風斬が横に並んで、固唾をのむ。

「“アレ”はこの間の黄金練成と似て非なるものです。あちらは偽者、こちらは本物、強さは単純に三倍以上、不完全であるため十分に相手は出来るはずですがそれでも、格がこの前とは違います」

三つに分かれていた『力』『知恵』『不死』が纏めて襲い掛かってくるようなものらしい。

ならば、風斬は考える。もしかしてと、ある考えが軽く頭の隅をよぎったのだ。

「……倒すのが目的じゃあ、ないんですか？」

恐らく倒すのではなく時間稼ぎ。二人がかりならば倒せるかもしれないが、相当危険だろう。神裂は恐らく無謀の手を選んでいるのではなく、最善の結果がこの無謀なのだろう。

だから、神裂はそれを即座に肯定する。

もう、戦闘への猶予は殆どない。

「その通りです、この幻象の原因を“彼”が打開するために動いています。私はそのために時間を稼ぐ必要がある」

目の前の存在は世界すら滅ぼせる。何のためらいもなく、滅ぼす選択を取ってしまえる。
ならば、

「解りました」

意識を集中させる。

——上条当麻は戦っている。

風斬は、自分が抱く最愛のため、戦う。

その姿は、かの英雄に酷似かみじょうしゅうましていた。

ゆっくりと、表現的にはそうだが、しかし実際には常人では感知すら出来ない速度で天使が動き出す。その姿は、赤の拘束具と相まって、囚われの偶像に思えた。

攻撃は、一瞬。

氷壁とも評すべき蒼白が連なって襲い掛かる。

風斬はそれに対して回避を選択。何とか見える速度にまで意識を集中させ、それ以上の力で横に跳んだ。高速で姿すらぶれて消える。神裂はそれに対して迎撃を選択。見るのではなく、感じて、極限にまで構築されきった聖人の一閃でもって槍状の氷白を裁断した。

とはいえ、弾丸は一つではない。

致死性のそれは、二十三十四五十、三桁にすら届く数で襲い掛かる。満遍なく広げられたそれは、恐らく様子見と言ったところか。

風斬と、神裂。

共に前へ進むため、一步踏み出す。

続けて襲い掛かるそれを、互いが互い、先ほどと浜逆の選択をした。

風斬は襲い掛かる投擲矛の下に割り込んで、手のひらを乗せる。

瞬間的にその場に空風の爆発がおき、槍はその進路を変える。

神裂は真正面からの襲撃を、抜き身の刀を鞘へ戻しつつ、上へ飛んで回避、最中、突き進む鉾の上辺をけて、一気に高度を稼いだ。

風斬は下から。

神裂は上から。

目的の存在へと接近する。

距離にして数十の歩、それを一気に速度で補って、それでも接近する刃に向かっていく。一突きで刺し貫くどころか肉片を全て消し飛ばしてしまうようなそれを、風斬は絡め手で、神裂は真正面から叩き潰していく。

これはまあ、単純に扱う力の威力の問題だが、とかく。

天使の刃は幾ら威力と数、勢いがあるとはいえ狙う相手がたったの二人、しかも攻撃自体が様子見である以上思うようには立ち行かない。

両者一気に距離を詰める。

恐らく両手を二回使っても足りないほどの攻撃を対処して、先にたどり着いたのは神裂だった。

当然だ。一直線に、全て粉碎してきたのだから、ジグザグに移動していた風斬とは到達速度を比べることは出来ない。

切りかかる神裂から身を守るように氷の群れが形成される。

氷山と呼ぶのが正しきろう、人間が二人か三人、縦にも横にも、三次元上どこにでも存在しうる透明な――しかし中を望めない氷の群れ。

それを神裂は、薄氷を踏み抜くように、極単純に切り裂いた。

しかし切り裂き進軍する神裂の元へ、氷が再生し、襲い掛かる。

「つぐ――」

何とか身をひねり、それを回避、そして目の前にそびえる氷のオブリエを、剣の持ち手で叩いた。結果大きく神裂は跳ぶ。

何とか着地して睨みつけながら叫ぶ。

「やはり海をバックに戦われると、何度でも氷が再生してしまいますか！」

それは風斬に注意を促すようであり、風斬は軽く神裂の方を見やっ
つてから、再び天使の元へともぐりこむ。氷の針山へ、後数歩、続け
ぎまの風斬が攻撃する。

取れる選択肢は二百三十万ほど存在するが、その中で風斬は純粹

な威力を選択する。
演算による能力の強化。

「ああっ!!」

一息に左手を振るう。

一瞬、神裂ほどの確ではないものの、威力を持たない氷のそれは、あくまで簡単に叩き壊された。続けざま、再生を開始する氷に、風斬の右手が激突する。

熱を持つのか、一瞬にして氷は蒸発し、同時に風斬の次が飛ぶ。風斬自身も、冷やされてしまったようだ。

こちらは純粹に威力による一撃。

再びその奥へと手が進む。

そこへ、

「来ます! 避けてください!」

神裂の警告が飛んでくる。

同時に覚えた自分自身による違和感とそれを頼りに、風斬は大きく横へ跳んだ。

先ほどまで立っていたその場所に、頭上から空色がつきささる。氷に今だ包まれた天使と、風斬の視線が交錯する。微動だにしないそれと、あわただしく辺りに視線を動かすそれ、一瞬の邂逅は直ぐに戦火の最中へと消える。

再び攻め入ろうと風斬は構えるが、さらに真正面から降りかかる刃に、ギリギリの状態で横へ飛ぶ。続けざまに振りぬかれる刃の群れへ、風斬は回避を余儀なくされる。

迎撃の間もなく迫り来るそれは確実に風斬を狙っていた。

その隙か、天使との間を離れていた神裂が攻勢に出る。一步、二歩、三歩。一気に詰め寄ると、さらにそこから一撃を持って迫る刃もまた弾く。

神裂にもまた一撃はあった。しかしその程度では神裂を止めようがないことは先ほどの攻防ではっきりしている。

流石に上限こそあるものの、ここで攻め込めば何も問題はない。

「行きます。出来るならあわせてください！」

迫りながら、風斬に声をかける。

風斬自身はそれどころではないが見るに神裂は生身の人間だ。何がしかの対策かなにかがあるだろうがそれでも限界はあるだろう。ならば、出来る限り早くあわせたほうがいい。

目の前には氷の大群。まずはコレを何とかしなくてはいけない。

（しょうがない……かなあ）

一つ大きく息を吐いて、風斬は回避から着地する。

体を落として、本来ならば既に回避に移っていないと間に合わないが、それを選択せずに腰を落とす。出来るだけ体を引き絞って、一気に低い態勢から射出した。

とはいえそれだけで激突を免れうる事はできない、体を横に反らしながら、やり過ごすような形になる。

氷塊は風斬の横を通り過ぎる。一瞬の間、そこは無音で、風斬はギリギリまですり抜ける選択を選んだが、それでも少しのほど、風斬自身に当たってしまった。

それだけで、右腕が消し飛んだ。

「つぐあああ！！」

痛み、凍りつくような、引き裂かれる。

実際のそれは、例えようなない痛みであり、風斬の動きが一瞬鈍る。神裂は苦々しげにコチラを見る。風斬は痛みに関心を示さず、声を大きく張り上げる。

「行ってください！」

自身も再び動き始めながら、その風斬の姿に、そして神裂は元に向き直ると、一気に歩を進める。距離は両者同じほど、速度もまた、同様。

何とか風斬は消し飛んだ右腕を再生させながら、天使の下へ肉薄する。

左手側から、風斬。

右手側から、神裂。

同時の速度、即時の威力、そのどちらもが、シンクロし、共鳴された破壊となる。

世界感覚そのものを消し飛ばしてしまうような、豪の音と共に響く一撃の下、叩き伏せる。

純粹な拳と、純粹な一閃。

どちらも威力はほぼ同等——洗練されている分、直接ぶつけ合えば神裂が押し勝つだろうが——面として広がる氷の山脈には、十二分の威力でもって同質の炸裂を叩き込む。

「——ッ！」

息を呑む風斬。

「——っけええええ！」

それを全て受け持つように吐き出す神裂。

どちらも向かう先は同じであり——そして。

全ての氷が、吹き飛んだ。

中から紅身の天使が躍り出る。空中へ、無数の枝を持つ翼でもって、湛えられたその一対で、飛び上がる。

「やりました……か？」

風斬が疑問をそのまま吐き出す。軽く隣の神裂に問いかけた。それを一つ、横に首を振って神裂は否定する。

「恐らく届いてはいないでしょう。何とか追撃……と行きたいところですが」

軽く風斬に向けていた視線を正しく敵の元へ戻し、刀を定位置へと持っていく。

「どうやらあちらはここからが本番のようです」

言われ、見直った先の両翼は、不気味に青白く光って見えた。

第一章 4（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。
人外系バトル、さて臨場感はいかほどでしょう？

補足

- ・きつとなかった。

第一章 5

5

昨日と、今日。

混沌と化した日常の中を走り回ってきた上条当麻も、ようやくのこと、終着点を迎えようとしていた。

朝、御坂美琴が突撃してきたことに始まって、インデックスの聲が何かよくわからないイカミたいなのに変わっていたのを皮切りに、母親が何故かイメチェンをしていたり、その原因が魔術によるものであることを知ったり。

大分時間をかけてしまったが、上条は事の真相にたどり着いた。

忘れてしまっていた上条刀夜——自身の父親の顔——

「——なあ、土御門」

「どうした？ カミヤん」

数条の狭い部屋の中で、両者はにらみ合う形で交錯していた。睨みつける上条と、それをサングラス越しに交わす土御門。

両者とも、目的は同じだ。

混沌とした世界。

その世界の修復は、誰にとっても急務であった。——そうだとし
ても、両者は対立しあうしかない。殺す方法と殺さない方法、土御
門 元春と上条当麻。

「何でお前はそれを選ぶんだ？」

「解らないか？ カミヤん。世の中にはどうしたって守れないもの、助けられないものが必ずあるんだ」

動いたのは土御門だった。

態勢を低くして、拳を固める。

そのまま迷いのない鋭い動作で上条の間合いへ侵入する。上条がそれに反応して構え、そして両者が交錯する。少なくとも上条は、そのつもりだった。

「そんなの、やってみなくちゃわかんねえだろ！ 化物だろうが、道端の隅っこに咲いてる雑草だろうが、人間は救えるんだぞ！」

軽く溜めて、右を放つ。少なくとも当たれば必殺、もしくは必殺へ繋がる一撃を、上条は自爆覚悟で叩き込む。しかし、

土御門は予定通りといった体でそれを回避する。

「解らないんだろうな」

そもそも土御門は上条の一撃を、最初から回避するつもりで迫ったのだ。まさに殴りかかるぞ！ というその態勢じたいがフェイク、握り拳はそのままに、回避を行い、それを振りぬく。

「つぐがあ！」

大きく後ろによろめいて、上条は隙をさらす。

「カミヤん、人間の手はな——すごく小さいんだよ、それに二つしかない」

救えるものなんて、限られている。

土御門はそれだけ言うと、拳を放ってそのままの左手で、上条の首をつかむ。そしてそれを容赦なく、後ろへ退いた。手を伸ばせる一杯へ、上条は弾き飛ばされる。

「もしかしたらカミヤんならその手をつかんで、伸ばしてくれる人間がいるのかもしれないが……」

手を離しながら、土御門は言う。

「あいにく、俺には両手しかないんだ。そして片方にはもう、先客がいる」

右手を握り、左手を構え。

裏拳を上条に叩き込んだ――上条の芯にすら響くような、そんな痛みでもって、上条はゆっくりと倒れこんでいく。

「だからな、俺は空いた片手で、他人の背中を刺すことしかできないんだよ」

本の、一つか二つ、本来ならばまだ立てるはずだった。

土御門の一撃は致命的なまでには至っていない、ダメージこそあるものの、行動のための器官は健在、ならば立ち上がらない理由はない、そのはずだった。

だというのに、その一撃は圧倒的なまでに重い。

恐らく、土御門の言葉に、反応する理由がなければ、このまま上条当麻は倒れていただろう。

だが、

ゆらりと倒れこむ上条。

その右足は、確かに地を踏み抜いた。

まだ上条当麻は、倒れない。

「――あいつは、違うんだよ」

「……………ん？」

軽く土御門は促すような、はっと飛び出たような声を漏らす。

「あいつは俺の右手を握れない。あいつは俺が手を伸ばしても、救えない。だけど、違うんだよ」

伏せていた顔、それを上条はあげる。

「それでもあいつは、一緒にいてくれるんだよ、あいつが一番、大切なんだよ！」

右手を、左手を、全身を。

力を込めて、構える。まだ終わってはいない。あらゆる場所に、

土御門の痛みは響いてくる。けれど、それは決して、上条の想いを冒す事はない。

「行くぞ、土御門——てめえのそれは、ぶち殺せる幻想なんだ」

「やってみろ、カミヤン……悪いが、俺の隣には、舞夏以外ありえないんだよ」

それは見るだけでは、紛れもなくただの無謀だった。

上条当麻ではどうやったって土御門には勝てない。それは先ほどの、たった二、三手の攻撃で素人ですらわかってしまうほどだった。そしてこの場には、それを止めるべき人間が、一人いる。

「待ってく——」

「父さん」

上条刀夜は一言、止めようとした。

けれど、上条当麻——息子自身が、待ったをかけた。彼は刀夜に振り返って、軽く笑う。

「俺、彼女ができたんだ」

それだけ言って、戦場へ舞い戻る。目の前の強敵と——渡り合う。

「……そうか………そうか!」

刀夜は、嬉しそうに、ただそれだけを感情に表して、言ってこい、

と誰に聞こえらなく、送り出した。

（つつても、ただやっても俺は土御門には勝てない）

上条は自身の思考をフル回転させる。

猶予はほんの数秒しかない、その間に実行すべき作戦を、運命、敢行しなければならぬ。いってでも間違えればもう余裕はないし、作することも出来ない。

だからここで、上条は考えるしかない。

（ただ殴りかかっても、向こうが絡め手で来る事を予想しても、間違^{イレギュ}いなくあいつは俺を上回ってくる。完全に格上で、しかも幻想殺^ラしが通用しない相手……完全に詰んでるじゃないか）

ジリ……と距離を正すように、間合いを計るようににらみ合う。

この状況を何とか長引かせて——思考の時間を稼ぐ。土御門は動く様子もなく、こちらの一手を待っているようだ。それは強者ゆえの油断か、それとも上条の真意すらも理解した上でそれを許しているのかもしれない。

（だとしても……それは逃げる理由にはならねえよな）

拳を一度解いて、握りなおす。

仕切り直し、上条は腰を静めて、死力を溜める。

（だったら方法は限られる。……やる、しか……ねえ！）

一気に数歩分の間合いをつめた。

若干見上げる形で、上条は拳を振り上げる。

それを軽く、ゆらりと退ける空気のように、土御門は回避した。

（――回避）

二歩目、踏み込んでもう一度、これも土御門にとって回避はたやすいうだ。

もともと、そのつもりで攻撃しているのだから、当然か。

（――回避）

そして、三歩目。

「少し甘いな、カミヤん。パンチってのは、こうやって繰り出すんだぜ？」

上条の拳を受け流すように、片足を後ろにそらして、体を斜めにする。そこからタメを一切せず、土御門は一撃を繰り返す。

（――迎撃！）

それを待っていた。

上条はそれを無視してさらに踏み込み、殆ど一步も二歩も動けない状況で、拳を喰らう。顔面に思い切りはいったクリーンヒット、先ほどと同じだ。体の全身に痛みが走る。

.....
それを待っていた。

これで上条と土御門の距離は零。
阻むものは、何もない。

「つう、おおおおおおおおおおおおお！」

痛みをこらえ、予定通りに拳を振るう。

「が……あ」

土御門にそれがぶつかる。

両者の拳が、両者の顔面を正確にヒットしていた。

静寂。

それは一瞬と少しの間だった。

「――るほどな、やはりそれか、カミちゃん」

「ぐっ、お……土、御門」

「いいぜ、カミヤん。カミヤんはそれしか出来ない。この方法でしか俺と同じ土俵には上がれない」

笑み、それは笑み。

土御門に浮かぶ、痛み越しの、笑み。

両者は再び交錯する。

「だったら受けて立ってやるぜ、カミヤん。俺は正々堂々真正面から――」

第一章 5（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします
記憶があるから、わかってるんです、この上条さん。

- ・ 補足
- ・ 無かったのだろうか。

第一章 6

6

天使はその身をゆらりと世界へ揺らす。

無音と無風の空間の中で、絶無と化した世界の生氣。例外は二つの存在。風斬氷華と神裂火織。どちらも人ならざる力と、然りと人である信念を抱いた少女だ。

「――来ます！」

神裂の号令。数秒の間沈黙していた世界がようやく動き出す。

あわせたかのように、いくつかの刃が風斬を襲う。対して、音速を超える境地の中で、例外的に風斬は何一つ変わらない、速度の塊を見ていた。

一閃、通り過ぎる風斬へ、それは舞い散る。

瞬きすら許される時間なく、消し飛んだ。――風斬は一気に踏み込んで、先へ進む。

たん、と大きく飛び上がり迫る。とはいえそれを許す存在は敵にあらず。天使もまた迎撃の視線を風斬へ向ける。

交錯。

すぐさまそれは本物の殺意へと変わり、そして一撃へと指し換わる。

二十の方向から襲い掛かるガラス細工の刀剣。冷たく凍えるそれは氷の走駆。白に包まれる風斬と、それを見下ろす大天使。

瞬間、風斬の姿が解けて消え、その痕を氷が貫く。

行き場を失ったそれはそのまま地面へ、もはや大地そのものが取り返しのつかないことになってしまふかのような惨状と共につき刺さる。

例外として、いくつかは夜闇に消えていき、さらにその中の複数も、神裂に叩き落された。

直後、風斬が神裂の左隣に出現する。

原理は単純な空間転移である。計算事態は非常に面倒だが、やってみれば案外簡単なもので、回避に使うには相当楽が出来る。

ただしコレは自分自身の移動に関する計算がすさまじく簡単な風斬にしか出来ない芸当だが。

コレが実際の器物であれば動かすことは不可能であろうし、人間の移動などもってのほかだ。

行う場合、多大な時間とA I Mが必要になる。

それを自分の中だけで確認しながら、風斬は次を考える。

相手は非常に強力だ。

上条ならば、と考えてみる。……直ぐに思い浮かんだ。上条ならば間違いなく、格上の敵には骨を切らせて肉を絶つしかないだろう。よくよく考えてみれば風斬もそうだ。自身の再生能力、もしくは不死身性に任せ突貫する。泥臭い上条とは少し図柄が違うものの、結局、上条と風斬はよく似ている。

二人がそれぞれ同じように無理をして、同じように心配する。その姿は、とてもよく似ている。

（何だか……嬉しいな）

そう考えて、はっとする。

——脱線してしまった。……が、どうやら答えは一つしかないようだ。

（無茶、しよう）

目の前を見据えて、考える。

そもそもこれ以外に何か答えがあったのか。最適解はなんだったか——関係ないのかもしれない。

「えっと……アレって、攻撃あててダメージってあります？」

「ない……とは言いませんが効果は薄いでしょう。せめて背景に海という向こうにとって非常に都合のいいフィールドから離せればまだ効果はあるでしょうが……」

少なくともただの攻撃で上位の天使は打ち抜けない。神裂の場合、魔術を組み合わせる三分の一が殆ど使えないためそれが顕著だ。

風斬にしたって神裂の全力ほどの威力を自分が出せるかは疑問だ。AIMもそれなりに温存したい。確実にないのならば止めておいたほうがいいだろう。

「じゃあ……ッ！ と！」

考え、言葉が続けようとしたところで、天使の次が来る。

浮かび上がったそれは、視界を全て埋め尽くす氷山の群れ。漏れ出る隙間はほんの一つか二つ、しかもそれら全てが人間の突破できる隙間ではない。

それ以外も例えそこを突破できたとして、余波で吹き飛ばされる

だろうが。

——つまり、それほどの弾幕と言う事だ。

カーテンコールが、正しい呼び名かもしれない。

「終わりにはしませんよ……絶対」

「とはいえ、流石にコレは面倒ですね」

「チャンスですよ、——当麻さんなら、多分そう考える」

なぜならば、これ以上は絶対にありえないのだから。——少なくとも、全体を穿とうとするこの一撃は間違いなく敵方の最大であろうし、これ以上はどうやって作りようがない。

これで四方上下埋めたとしても、結局突破するのに必要な手順は大よそ変わらない。

「これさえ確実に越せるのなら、あっちに対抗の手段はありませんよ」

「ですが……いえ、何でもありませんね」

神裂が何かを言いかけて、止まる。

それはここに必要のない戯言か、それとも覆い隠しておきたい事実か——どちらにせよ、と考える。戦闘を始めてから大よそ25分ほどか——

戦闘は後数分で、完結するだろう。

神裂はあせっていた。

目の前の壁に、ではない。アレはなんとでもなる。何とかしようと思えば、何とかなる。

けれど、『一掃』が近い。

世界を三桁焼き払える最強最悪の一撃、いや、それが神罰であるのならば、最善の一撃なのだろうか――それを切り捨てる。

目の前の天使は神の命を受けない一介の存在、敬うべき対象を吐き違えるべからず、俗物は、俗物でしかない。

「……次の一撃で終わらせることは、可能ですか？」

「不可能じゃないとは思いますが……」

難しいと、風斬の答え。

神裂はならばと考えたが、確かに難しだろう。

「……策自体はあります」

ほんの少しの間において、風斬は説明する。

「いや、策じゃないですね、無理やり突破するだけですから」

結局は風斬の能力に頼っての強行突破が一番確実だろう。

恐らく敵の攻撃はどうやったって突破できる類のものではないだろうし、ならば風斬は強引な方法を取るしかない。

まあ、神裂は止めるだろうし、風斬自身取りたい戦法ではないが。

「……強行突破ですか……ありかもしれませんね」

「……え？」

と、思っているからだろうか、神裂からポツリと出た言葉に思わず耳を失う。

正直無いと思っていたのだからその肯定は以外だった。とはいえ実際にそう言う意味ではないだろう。そうだね？　と風斬の方を見る。

「いえ、無茶な話ではないという事です。単純に、あれをどちらかが打ち抜いて、そこをどちらかが飛び越える。それしかないと言う話ですよ」

「えっと、まあ……確かに」

「普通にせめて、またあんなふうに盾を作られても困りますから」

先ほどの氷山、なんだかんだで突破することは出来たものの、恐らく一人だけであれば風斬が文字通りの強行突破を狙わない限り破ることは不可能だっただろう。

「んと……アレ、一人で突破できます？」

風斬は目の前の氷を視線で指す。

「前提として、一人で戦っているのであればああいったものは出てきませんよ」

指差すそれはいまだ動く様子はない。

どうやら時間を稼ぐような壁にもなっているようで、コチラがど

うにかしなれば何かをする様子もない。好都合と言えば好都合、風斬はそう考えて、神裂も同じように判断するが、多少の危惧もあった。

当然か、風斬にこそ伝えていないものの、この先に待つのは『一掃』だ。

出来うることなら、次で決めてしまいたい。

だからこそ考える。

その最上は恐らく風斬の言うとおり“強行突破”しかないだろう。考えてみれば当然か、目の前の敵は次元の違う強敵。ならば取れる戦法は策を練るか自爆覚悟の特攻をするか。この場合は“どちらも”だろう。

「兎に角、突破するのは私がやりましょう……アレに風穴を開けることは、可能ですか？」

「やってやれないことも、ないと思いますよ」

結論、定まった。

風斬はそれを示すかのように、電撃を迸らせて見せた。

そうして、ようやく時間が動き出す。

作戦会議を終え、戦場へと、タイマーが回り始める。

辺りは完全に静まり返り、夜闇はそれを無言のまま推していた。沈黙の世界、会話を終え、動き出すまでのどうしようもなく短い一瞬。

幻想だっただろうか、考えるまでもなく、答えは出さなかった。

無数の氷、壁と化した必殺。

風斬ですら当たれば全部消し飛んでしまうだろう。ならばそれはもはや凶器ですらない、兵器だ。それを自覚し、目の前の存在を認識し、大きく息を吐く。

激突してしまえば全てを焼け野原のような何かに変えてしまう戦
略兵器。

ただしく風斬は、頷いた。

そうして、ポケットから十円玉——上条と連絡を取る際に余ったものだ——を取り出して、風斬は構える。両手を伸ばし、ゆっくりと狙いを定め。

「私が撃ったら、突っ込んでください」

言いながら、コインをピン！と上に跳ね上げる。

高速で演算を行いながら、目の前に“それ”があるのを自覚する。氷の壁、化物のような力の塊。

「いっけエ――！！」

じゃあそんなものは、自分にはいらない——！

閃光、瞬くように伸びていくそれは一秒すら掛からずに凍てつく氷山を打ち貫く。全部溶かして消える、灼熱の燃え盛り続ける炎、否定しても否定するからこそぬぐえない一撃。

氷山が、その一撃に対応して動き出す。

速度は一万分の一の世界にいた。

残るは翼を持つ人形ひとかたの存在。無限のようで、無垢のようで、無法のようで、何もかもがそのためだけにあるようで。

少なくとも神裂はそうだ。

だったら、

それを切り裂いても、いいではないか。

人は一人ではなく、同時に個人でしかない。

風斬は考える。

あの時ワンコが、ワンコであったように。
電話越しの上条が、上条であったように。
ここにいる風斬が、風斬であったように。

神裂の目の前に、氷の礫が生まれ出る。

それは予想済み——当然だ。相手は今だフリーなのだから、阻むものは何もない、それはどちらも変わり得ないのだから。

小細工は通用しない。

目の前の天使はなにをしても動揺しないし元々そういった存在ではない。不意を突く意味はないし、異議もない。だから、ここにはもう、何もない。

だから、解っている。

だから何も考えず、風斬は刀を振るう。

氷ごと天使を襲う一撃。

二メートルはある刀のリーチは、遠めに見えた天使すらも確実に射抜いた。刃の切っ先が天使、ミーシャⅡクロイツェフに襲い掛かる。

だがそもそもそれ自体威力は落ち、速度も半端なものになっている。

礫を切り抜いた以上、それは仕方のないことだが。

——礫が再び出現する。

今度は一つではない、神裂を取り囲むよう、複数。上下左右四方八方、隙間のない一撃は全て同じ位置へ、同じように放たれようとしているのだ。

それに氷の壁、今は無視しているものの、アレをどこかに着弾させたりしようものなら、取り返しをつかないことになる。

これで押し切るしかない、少なくともこの状況は、そういうモノだった。

けれど、神裂は知っている。

軽く笑って、前を見た。

「お願いします——本命！」

そこに移るのは風斬氷華、音もなくその場に現れ、右手を思い切りよく構えている。

訳は説明するまでもなく空間転移。

本来なら天使はこれを警戒していたのだが、原理がわからない。解ろうが、一瞬で移動され、音もない。これでは手のうちようがどこにもない。

「今、世界は狂ってます。誰かが誰かじゃなくなって、正しいものは何もない」

もはや防ぐものは何もなかった。

風斬最大の、渾身をそこに込める。

「それじゃあ、ダメなんです。私は化物ですから、正しくないとダメなんです」

振りぬいた。

「お願いですから、邪魔をしないでくれませんか？——部外者さん」

そして、

第一章 6 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしてます。

今回の趣旨、とりあえず解決だけど誰が解決したのかは秘密。どっちか、っていうことになったら片方が意味なくなりそうですし。

補足

・ 上記参照。

その日、上条当麻の所へ手紙が届いた。

差出人の名前は『上条刀夜』、上条の父親である。何かあったのかと、丁度そこにいた風斬とインデックスに覗き込まれながら封を切った。

中には前略と添えられて、こんなことがかいてあった。

『当麻へ、この間は何だかすまなかった。いろいろあって折角の旅行も随分うやむやになってしまったな』

そんな出だしに思わず上条は苦笑する。

そもそもうやむやになった原因はこっちにある。結局土御門の策略にのせられ怪我を下のは上条が悪いのだ。

『そういえば聞いてくれ、なんと折角新築した我が家が吹っ飛んでしまったんだ。幸い保険も出たしローンの方は何とかなったんだけど、これで元のマンション暮らしに元通りだ』

それは一大事ではないのかと手紙越しに心の中だけで突っ込む。

因みに根本的な原因は上条にあったので口には出せない。

風斬もそこを読んでいたのか、少し苦笑いしていた。

『で、ここからが本題だ。当麻、お前彼女が出来たんだって？ 母さんも私も驚いているぞ？』

びっくりと、後ろで風斬が跳ねる。

『当麻の口からそんなことが聞けるとはなあ……なんで連れてなかったんだ?』

後ろからなにやらすさまじい音が聞こえてくる。ちらりとインデックスの方を見ると、そそそ……と上条から遠ざかっていた。そんなに怖いか。

……実際怖いのだろう、何せ上条も風斬の方を向けないのだから。

『本当なら見舞いがたらどんな子なのか見に行こうと思ったんだが許可が降りなくてな。次に会えるのはいつだったかな……まあそのときまで楽しみにしておくさ』

手紙を読んでいきながら、決心をつけたのか上条は後ろを振り向く。すると風斬と視線が合ってしまった。風斬の顔が爆発する。

いい感じに湯気を上げながら赤くなっていた。

そんな風斬が可愛かったのもあってか、上条まで顔が赤くなってしまう。

暫くはそうしていたが、インデックスが戻ってきたのを合図に再び手紙を読み始める。

『……悪かったな。私は当麻の事を誤解していた。勝手な思い込みを押し付けていたと言ってもいい、私は当麻が不幸だとずっと思いつ込んでいたんだ』

いきなり謝ってきて何事かとも思ったが、直ぐにそれを切り替える。

ただ無言で、無表情で、上条はそれを読み進める。

『私を見てきた当麻は不幸でな、正直、見ていられなかった。だから

らかもしれない。私は当麻に何一つしてやれなかった』

沈黙が全体へ広がっていた。

上条だけではない、インデックスも、風斬も表情を変えず、それを読む。

『当麻は私の知らない間にこんなにも大きくなっていったんだな。私達の知らない間に大人になって、大切な人も出来たんだ。何だか少し寂しいな』

もう、終わりだった。

あと少し、最後の一文を、上条は言葉にして読む。

「ありがとう。親愛なる上条刀夜……か」

その一言に、一体どれだけ感情をつめただろう。手紙には何度もそこを消した後があった。最終的には修正テープまで持ち出して、それでもあととはくつきり残っている。

上条はそつとその手紙をたたんだ。

少し暑い、夏の日差し。

窓はどこにも開いていないはずなのに、何故だか風が、彼の頬を掠めていった気がした。

エンゼルフォール
御使墮しの一件から早数日。

世界は再び元通りに、いつも通りの日々を迎えていた。あの一件で大分無茶をした影響か、暫く風斬の体はぶれっぱなしだったが、それを見る視線も、場違いなものから普通の、少年少女のものへ変わった。

上条はと言えば土御門に手痛くやられたのもあり数日の入院生活を余儀なくされ、その間大体の事を件くだんの土御門から聞いていた。

そして現在、やっとの事で退院して部屋に戻ってきた上条と、着いてきた風斬がここにいる。

インデックスに関しては常駐なので論外だ。

「……俺さ、ここに来るまではすっげえ不幸だったんだよ」

ぽつりと、上条は語り出す。それは独り言のようで独り言ではなく、しかし隣にいるのが風斬であることを考えると、半分ほどは独り言であるかもしれない。

場所はベランダ、インデックスとであったその場所で、今は風斬と二人きりだった。

「今も不幸だけど、ここに来るまではさ、不幸な所為で避けられてたんだよ、お前の不幸が自分に移るってな感じでな」

昔は避けられて上条は弱かった。
それは本人もよく自覚している。

「それでさ、拳句の果てにはそうやっていた親にまで不幸が移るって言われ始めたんだよ、んで、最後には包丁でさされかけたりもした」

昔のことだけどな、と上条は笑った。風斬は少し、笑えなかった。

「……多分、父さんと母さんがあの二人じゃなければ、俺、こういう風にはなれなかったと思うんだよ、学園都市に行くのもそうだし、氷華に出会えたのもそう、父さんと母さんが支えてくれたから、俺

「はここにいるんだ」

今度は軽く、風斬も笑う。

「俺は幸せなんだよ、幸運なんだ、ついてるわけだ。本当に今は楽しい。単純な話だけだよ、……氷華と、それだけじゃない、インデックスに土御門、小萌先生もいるな」

ベランダに重心を置いていた上条が風斬の方を見る。軽く笑って、見続ける。

「ありがとな、俺、氷華を好きになれてよかったよ」

何気ないように言って、風斬は思わず顔を赤くする。

「わ、私も、だとおもうよ……当麻さんが隣にいるから、凄く幸せなの」

ゆうらりと笑って風斬は、上条をまじまじと見つめる。
変わらない風斬の笑顔、上条が覚えている唯一の感情、どうでもいいといえどもいいことだし、どうしてもよくないといえどもうでもよくない。

結局つまり、何も変わらない。

上条は上条で風斬は風斬、感じることに、思うことに違いはあれど、惹かれあうこと、好きあうことに変わりはない。

——ゆっくりと、風斬が目を閉じる。

——そのまま、二人の姿が重なって、そして放れる。

「……俺は父さんに、母さんに凄く助けられたんだよ」

ゆっくりと、一つ、一つ。

上条は――

「だからさ、今度は二人がこっちに来て貰おうぜ。……幸せな俺の、この日常にさ」

エピソード『日常はかくあるべし One day from one day』

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
これが自分の限界なんです。

補足

・とくには、

プロローグ『月下の進軍 Just | reach | out』

なんと言えぱいいのやら、その日は何もない日だった。

雲もなければ事件もない。

雨もなければ災害もない。

霧なければ修羅場もない。

結局、まったく持って平和な一日だ。

夏の日差し照りつけるため息すら覚えそうな憂鬱と快気の間にある天気。歩き行く人々は暑い暑いと天に文句を言いながら、楽しいと自分の心を癒していた。

そしてその中に、二人の少女が歩いていた。

片方は常盤台の制服に身を包む14ほどの少女。少し生い立ちが複雑で、基本的にはミサカワンコ、ワンコと呼ばれている。

もう片方は霧が丘の制服を着込む15、6の少女。コチラも似たような者なのだが、普通に風斬氷華という名前である。

同じ学校に通っているわけでも無し、そもそも年齢からして違う。そもそもからして、両者の出会いすら偶然と変わらなかったのだ。

まあ、因果と言えぱ因果な出会い。

「あ、あの……ワンコちゃん」

現状は、といえぱ少し照れた様に風斬がワンコに話しかけているといったところか。

「どうしたんですか？ ……じゃなくて、どうしたのですか、とミ

サカは親友に問いかけてみます」

「んと……」

ワンコの問いに、風斬は少し間をおきながら。

「戦い方を教えて欲しいなって」

そう言ってきた。

思わず変なことを言われたワンコははあ？ と呆ける。そのまましばらくして、我に返ったワンコは直ぐに問いかける。

「何があったんですか？」

「この前にね、力の使い方を覚えないとダメだって、言われたの」

あの混沌とした入れ替わり事件の最後、神裂に言われた事だ。

なんでも風斬は今まで格上の相手しか闘ったことがなくどうしても力の加減が出来ていないのだとか、つまり下手に格下と戦って、それを木端微塵にしかねないのだ。

故にこうしてワンコに頼んでいる、と言うわけだ。

「一方通行さんに頼んでも面倒だから嫌だって言われるし、当麻さんは勢いだけだから、正直参考にならなかったんだ。だからワンコちゃんしか知り合いには教えてくれる人がいなくて……」

「酷いいいようですね……」

ワンコは呆れたと言うか、なんというか、なんだかなあと嘆息した。

「というか、それならやっぱり一方通行の方がいいはずですよ？
何せ彼は加減の天才ですから」

「元々全部天才だけだね」

天災とも言う。

まあ実際の所一方通行に何とか頼み込もうとしたのだが、どういうわけか直ぐに逃げられてしまったのだ。何だか急いでいるようにも見えた。

「まあ……いいですよ、氷華ちゃんは多分どうやったって厄介ごとに関わり続けていくと思いますし、そもそもあの人の彼女ですからね、似たもの同士でしょう？」

「……すつごく」

それはもう、シンクロしまくってるように、非常によく似ている。

「んじゃあちよつと場所変えましょうか、実戦とかも多少はするかもしれないませんし、ここは動くと疲れますからね。今ちよつと気分悪いんですよ？ 私」

言われてみればそれなりに肌がいつもより青白い。

たいしたことは無いだろうが、気になってしまふとどうしようもない。肉体再生で体調を整えることって出来たっけ？

「じゃあ、どこがいいかな」

「ここからだったらやっぱり公園でしょう。あそこは木陰があって、

私達の聖地ですからね」

文字通り、聖地。

あそこからいろいろな物語が始まっていたりする。

今回はニアミスの様だけど。

——そしてその頃、闇に浸りかけるある場所で、一方通行は一人、うごめいていた。

事の発端は上条当麻。

彼の言ったこと、布束砥信は死んでいないのではないかと言う可能性。アレから知り合いの伝を使いながら総動員で探知を仕掛けたものの、反応は無し。

どうやら砥信は一方通行が触れることが出来ない場所にいらしい。

（俺ア……結局なんだろうな）

ならばと考えたのは、戦力の入手。

圧倒的な最強でも、触れることすら出来ない化物でもなく、究極的に無敵に近い力を、そう考えた結果がとある事件だった。

（自分つてもンがなアンにもわかってねエ）

レベルアップ
幻想御手。

使用した人間の感覚を伝って脳をいじり、脳波を同じにすることで演算能力を単純計算で二倍にし、能力の底上げを行うことが出来る力。

それを万人分集め、ツリーダイアグラム樹形図の設計者の代用品を構成試みられた事件。

（結局俺ってなア何なんだ？）

最初は一方通行自身その力を一笑に伏した。

だが今、彼はこうも考えたのだ。もしそれを自分が使えば、能力は一体どこまで進化する？ と。

単純な話だ。恐らく話を聞いた科学者の誰かも、そういった発想はあっただろう。しかしそのためにはデータが足りない。

（最強としての一方通行、あいつを諦めきれない俺、失敗してしまった惨めな能力者）

なにせ研究データ事態は一方通行の知り合いであるクソやろうに全て持っていかれてしまったようだが、そもそもそのクソやろうが協力してくれているのだ。

問題は何もない。彼自身あの研究データは持て余していたようだし、そもそもその首謀者自体、既にこれを不要としているようだった。

（わっかんねエよ。マジでわかんねエ）

一度ダメだったが故に切り捨てる。

のではなく、あくまで不要、ということだ。

（未知ってのは誰だって恐れるもんだ）

問題は脳波を書き換えると書き換えたものが昏倒してしまうことか。

けれどもそれも問題はない。

一方通行は既に答えを見つけている。数日考えて、模索して、たどり着いた答えはいわゆる“仮想OS”という代物だ。

一つのOSの中にまた別のOSを形成する。

同じように一方通行は一つの脳の中にまた別の脳を作る。

（だったら、だからこそ、なんだよ）

実際、一方通行はコレを成功させている。

そもそのソフトウェアがなかったためそれを動かすことは出来なかったが。

（こうやって進んで、答えを求め歩いて、それでだからこそ、解らないことがある）

とかく、彼は急いでいた。

彼自身の準備は済まされている。後は、ネットワーク。

外部に設置されるスーパーコンピュータだ。

（俺……ってなア、何なんだ）

ブログ『月下の進軍 Just|reach|out』(後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろおまちしています。
そろそろマジメに感想がほしいでござる。

補足

- ・特には無かったはず。

第一章『悪と正義と力と守護と Endless Struggle』

1

安彦製薬特別薬剤研究センター。

学園都市の郊外に設置された研究所で、メインストリートからは一つか二つ、道を外れた先にある。何故わざわざこんな場所に立てるのかと、見てる側の疑問を誘い、そこは実際とある実験の後処理を行う後ろぐらい研究所だった。

絶対能力進化実験。

数週間前に行なわれた地獄にも似た実験。今研究センターの目の前に立つ一方通行を中心とした実験プロジェクトだ。

実際それは上条当麻、風斬氷華、そして何より一方通行自身の妨害もあってか、凍結へと追いやられ、今この場所は“とある”代物を保管するための倉庫のような場所へ成り果てている。

「つつたってまだ警備員は残ってるわけだが……」

目の前、研究センターの中には無機質な人の気配があり、無人の様子、廃墟の様子はどこにもない。実際目の前の自動ドアは取り付けられたままであり、開きこそしないものの、今だそこに人が存在することを示している。

——今、一方通行がいるのは多少の薄暗闇を覚える研究センターの入り口、正門に当たる場所である。

あたりに人の気配はない。

当然。こんな人気のない場所は一般人は通りたいとは思わないし、わざわざ通る必要性も覚えない。その上こんな無機質で娯楽どころ

か入るべきモノすらない場所だ、薄く浅い闇の中を闊歩する、スキルアウトやそれ以外の不良や何かもここへは寄り付かない。

暗部の人間であればわからないが、生憎一方通行はここに来るまで抗争に巻き込まれたりはしていない。

「つたく、馬鹿みたいなんだよ」

……あくまで、無人。

ゴーストタウン一步手前のそこにおいて、一方通行はもはや唯一と言ってもいい人の気配への在り処を手取る。自動ドア、無機質で不透明なガラス張りのそれを、軽く触れる。

それだけでガラスは全て吹き飛び、道が出来る。

いくつもの破片が雨のように飛び散り地を叩いていく。その中で、一方通行は何の怪我を負うこともなく、ひたすらに前へ進む。

——もう一つ存在する、今度は透明なガラス。

中は三方向に別れ、それぞれ別の道へ繋がって言える。少し遠くから見た限りでは、明かりは殆どともっておらず、精々外から漏れているのかそれとも微妙な豆電球なのかよくわからない仄かな物が灯る程度。

それは恐らく必要がないからだろうと、一方通行はあたりをつける。

ならば、

「だからよオ、始めようぜ……それで十分なんだろうが！」

全て纏めて、叩き潰す。

一瞬、一方通行の右足がタップを踏む、一つそのまま間を置いて、すぐさま辺りが砕け散る。

結果それに反応するように横二方向から銃弾が飛び交う。フレンジイファイアなどまったくもって気にしてすらいらないようで、無数の弾丸が回避する隙間のすら用意させず、カーテンのように空気を裂いて叩いている。

舌打ち一つ、一方通行はそこへ手を伸ばす。

常人であれば一瞬で手がひしゃげ、血を引き出し、痛みによって意識すらも危ういほどになるはずのそれ、けれども一方通行はその全てを無視し、ただ拳を握る。

それだけで、衝撃が舞った。

風と共に全部殺して、全部叩き潰す、一方通行が行なったベクトル計算の下、音速にすら匹敵するような威力。速度。殺傷力。

それは銃弾を揺らし、叩き、潰す。

結果、無数に飛び交っていたそれは姿かたちを銃弾ではない何かへと変え、ついには地面に転がす。

中には表面が剥げ落ちたもの、つぶれたもの、可笑しな方向にひしゃげたもの、あらゆる方法で叩き落されている。

やがて遠くから何かが吹き飛ぶ音がした。

当然、威力は一切の加減をしていない、恐らく中の人間もしにはしないだろうが動けはしないだろう。――たとえ生身であったとしても、一応死ぬほどのものではないと、一方通行は考えているが。

「ツチ、鈍ったか? ……いやア、そういうばそうだったな」

それもそのはず、一方通行の行なった一撃は、本来であるならば地面に零れ落ちている鉄を、小さな円盤に変えなくてはいけなかったのだ。

少し舌打ちをしながら、一方通行は中へ入る。

二方向、左右を見るとパワードスーツ駆動鎧を装着した警備員と思われる人間が倒れ伏していた。

一方通行は先ほど拳を握った手でポリポリと頭をかく。その時、手から鉄の円盤のような小さい物が落ちてくる。これは予定通り、一方通行が握りこんだ際につかんだ弾丸である。

成功例が無機質な速度で落ち、激突する。

「しゃアねエ。こいつを用意してくれやがったあいつにちよつと挨拶でもするかねエ」

行使した能力のブレ、仕方ないものだと考えつつ、カン、カラン。と広がる音を一方通行が無視して、先へ進む、方向は迷わず前へ進む、どちらかと言えばそちらの方が左右よりも薄暗かった。

廊下の内部は思ったよりも広く先ほど遠めで広がっていた駆動鎧、あれが二つあっても問題なく動き回ることが可能だろう。

何故だか一方通行にはその情報が、再び駆動鎧が襲い掛かってくる前触れにしか、思えなかった。

一方通行は今継続的に能力を使用しているのだが、それが少々危なくなっている。外に出していないためか暴走もしないし、それほど問題はないが、しかしどうにも調子が悪い。

体の動きも鈍るだろうし、そうであるなら多少戦闘方法も切り替えなくてはならない。

その感覚に、多少一方通行は覚えがある。

「まったくよオ……少し消極的じゃねエのか？」

名前を、口に出そうとしてしかし、遠くからの気配に、一方通行の言葉は消えて言った。

現れるのは駆動鎧一体。黒く光るそれは、重厚な鉄のにおい、ツン、と鼻にくるような火薬のにおい。それを感じさせる間もなく一方通行へ銃弾が乱射される。

そもそも一方通行はそれを感じ取ろうとする気を持たず、駆動鎧へ襲い掛かる。

一步、横にそれ、まず狙いを定めていた銃弾を最初から回避、続けて襲い掛かるそれはそもそも眼中になく、何の滞りもなく横を通り過ぎる。

一方通行と駆動鎧の間は十歩ほど、それより多いかそれより少ないか、判断を一方通行はせず、ただその程度だと認識する。

ここから、駆動鎧まで、暴走の危険がある以上、能力の使用は極力避けたい。とはいえ一方通行が能力以外に決定打を持ち合わせてはいない。

駆動鎧程度ならば予想はついていたが、まさか“これ”を使用されるまでは予想できなかったのだ。

（だったらよオ、どうすればいい）

迫る。

二歩、三歩と次を待つことなく踏み込む。

駆動鎧は何度か狙いを定めなおしながら接敵せんとする一方通行に対抗する。その銃の威力はそもそも駆動鎧自体を破壊することを目的としたもので、如何せん発射に時間が掛かる。

衝撃は全て駆動鎧が逃がすとはいえ、結論として、その銃が一度に連射できるのは大体二発、多くて三発程度の短い代物だった。

それ故に、一方通行からしてみれば好都合。

少しでも体を斜線からずらしてやれば簡単に銃弾は避けられる。そうでなくとも向こうは気をつけなくてはいけない、少しでもミスをすればジ・エンド。

ある程度能力を封じているとはいえ、目の前にいるのは学園都市最強の能力者。

能力だけでなく、その頭脳自体が、脅威であることに間違いはないのだ。

（急がなくちゃならねエ、この先に手に入れなきゃいけないもんがある。それを手に入れるためには、せかされるのが当然なんだ）

右手を振るうように、右手から滑り込むように。

体を折りたたんで前に踏み込む。

銃弾が横をそれ、続けざまが一方通行を襲う。回避しようのない人間以上の速度。けれどもそれは一方通行の思考能力と大差ない。一瞬で能力を構築すると、構えたような状態になっていた右手を振るう。

出来上がったのは風の壁――銃弾を真っ向から吹き飛ばす強力なもの、当然ながらそれは銃の元である駆動鎧にも影響はある。

突風に晒されよろめく駆動鎧、暫くそれは続いたが、やがて風がブレ、何処かへと消える。原因は当然一方通行を真っ向からジャマする“あれ”だ。

舌打ちしながら、接近を続ける一方通行。

残り一步、非常に急接近した両者。

よろめいて、体を後ろへそらしたような態勢で駆動鎧は銃を構え

る。

体を伏せ、激突を行なうような態勢で、一方通行はそれを迎え撃つ。

どちらも一瞬で決まる。

（急がなくちゃ、ならねェんだよォ！）

思考。

グゴウウツ！ と、銃声がこだまする。

同時に、天井へそれは突き刺さった。

現状の説明は簡単、一方通行が駆動鎧の足元を掬った。

両者の間では一瞬だが、一方通行の方が素早かった。

それだけで全てが決まってしまう。駆動鎧はゆっくりと態勢が保てなくなり、倒れていく、立ち上がった一方通行はそれを見送った。手を出すでも、逃げるでもなく、ただたって見送るだけ。

訳はといえば、倒れた後の方が楽だったからか、

倒れこんだ駆動鎧の、銃を握る腕へ、足を振り下ろす。それだけで駆動鎧は簡単に砕け散り、少し若い男の手が露出した。

したうち一つ、一方通行はそこから放れた銃を拾う。

人間が持つにしては大分大きい、散弾銃だ。

「こいつは借りてく。悪いが、お前の地獄に、俺ア干渉しねェ」

それだけ言って、去っていく。

後を追うものはない。

——その時だった。

そういったそれはいつの時だっただろう。

少し進んだ先、目的地までは総遠くない、恐らく後ろから高速で接近しない限り、コレが最後の襲撃になるだろう。

目の前に二つ。

後ろに一つ。

合計三つ。

数えてみれば簡単だ。

けれどもそれらは至極もったいぶったように、現れた。

第一章『悪と正義と力と守護と Endless Struggle』(後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。

必殺、一方通行斬！

補足

・研究所の名前は架空のものです。凄く適当につけました。

第一章 2

2

拳銃を手馴れた……とはいえないものの、だぶつきない動作で構える一方通行。逡巡はなく、引き金を引く動作はそれなりの技術を擁したものだ。

本来一方通行は自身の能力以外のものを得物にしたりはしない。能力によって行使される派生ならばまだしもこういった独立した武器、独立した兵器はよほどでなければ使用しない。けれど、知識がないというわけではない。

最悪の状態は落ち度はあるだろうけれども何度もシミュレーションしているし、そのためならば様々な技術、武器に一方通行は触れている。

あくまで何の知識もないというわけではない程度だが。要するに無いよりは数十倍マシ。一方通行自身の頭脳がなければ初心者もいいところだろう。

だからこそ彼は、こうしてこの状況でも立ち回れるのだが。

——既に弾丸をはなつて一度、多少のベクトルと、それに基づいた動作で衝撃を逃す。本来ならば人間の扱える武器ではなく、一方通行出なければ肩が吹き飛んでいるだろう。

そしてその弾丸は狙いを運命、一人で展開している一方通行の後方へつき刺さる。

とはいえそれは予期されていたようで、大きく横へずれた駆動鎧の、横をギリギリで通り過ぎていく。

そのまま、一気に迫った一方通行の回し蹴りが突き刺さる。防御、ギリギリ両手でガードする。

一方通行は回し蹴りに使った足を軸に、前へ踏み込むとそのまま片手で銃を発射、二対の駆動鎧の内の片方、さらには片隅の腕を掠めて飛んでいく。

駆動鎧二つ分、銃弾が飛び交う。一つは正しく一方通行へ、もう一つはズレ、あらぬ方向へ乱射する。

一方通行はそれを無視し、片足ずつ大きく飛び上がる。
左を持ちあげ、駆動鎧へ突き刺すと、続けて右も押し付けると、一気に両足でけりつける。

ベクトルも合わさって、二メートルほどある天井の、すれすれを跳躍。

一回転しながら、反対側の駆動鎧に蹴りを振り下ろす。

ゴガウツ！ という濃密な激突音。

一つ響く、同時に銃を構え、隣の駆動鎧へ銃弾を放つ。

一発、唐突に放たれたそれは確実に突き刺さる。

そこで、一つだけ瞬きが起きる。単純ではあり、短い本の少しの感覚。その中で、一方通行が動く！

突き刺した片足をバネに、後方へバク転を敢行する。回転しながら、その中央で再び銃を、今度は蹴りを放った駆動鎧へ解き放つ。
衝突の衝撃を風で感じながら、着地。

同時に後ろへ振り返り、反対岸の駆動鎧に鉛弾を打ち込む。
寸分違わず駆動鎧に突き刺さる。これでこの場に存在する三機に一発ずつ叩き込んだことになる。けれどそれで終わると思うほど、

一方通行は日和ってはいない。

それもそのはず、駆動鎧の持つ、対駆動鎧用の銃は基本一発目で動きを止め、二発目、三発目でしとめるためのものだ。故に二、三発の連射が可能になっている。

逆に言えば、それ以上は不可能という事だが。

「ところでよオ」

油断なくあたりを見渡しながら、しかし同時に酷く愉快な殺戮者のように、一方通行は笑う。酷く凄惨なそれは一方通行にずっと昔から張り付いていたものだ。

駆動鎧はそれに耳を貸さないとでも言うように、無言で、機械のように立ち上がる。

けれども、駆動鎧の中身は有人だ。中の人間は聴覚自体をカットしない限り聞こえてしまう。

“よく響く声で”、“何故だかともない音になったりしながら”一方通行の声は響く。

「鉄の処女って、知ってるか？」

立ち上がる駆動鎧。

一方通行はその最も近くにいて二体のうちの片方へ接近する。交錯、両者は一気に距離をつめると、その場所を切り替える。振り向きざま、駆動鎧へさらに一方通行が接近する。詰めに詰め、削りに削った両者に間合い。

もはや文字通り目と鼻の先に、一方通行はいる。

同時、対駆動鎧用の銃を上放り投げ――

「西洋のオカルト染みた拷問器具なんだがよオ」

駆動鎧は既に銃をはさめる隙間もないことを悟ると、それを投げ捨て、構える。

ギリギリの間合い、ギリギリの状況、ギリギリ放てるかどうか、駆動鎧の力を借りれば可能か、最適化された運動能力であれば一方通行へ一撃を見舞うことくらい出来るか。

「棺桶みてエな人形の中に罪人を入れて、そこに針を突き刺すつつ代物なんだがよ」

けれども、

「で、この鉄の処女にはこんな伝説がある」

一方通行のそれは反撃すら許さない。

一瞬にして二発、同時に放たれたそれが駆動鎧を穿つ。

もはや砲弾と何も変わらない。その一撃と、砲撃のような銃弾、どちらも威力に大差はないだろう。――つまり、それが一方通行^{アクセラレータ}なのだ。

「なんでも、とある伯爵夫人がメイドの心臓をぶち抜いたところ、その手が黄金に見えたんだと。ンで、処女の血を集めるために作られたのが――鉄の処女ってエ訳だ」

その両手は、黒く淡い光を湛えたように見えた。

必殺を放たれた駆動鎧のが吹き飛ぶ音をバックに、残り二体の駆動鎧が、己の武装を解き放つ。

どちらも一方通行が持つ者と比べるといささかコンパクトであり、

どうやら威力は一方通行のものと比べると劣るようだ。

遠くから、吹き飛ぶ駆動鎧を気にすることなく、連射され。

近距離から、回避不可能の絶対の空間から、乱射される。

おそらくこの銃は乱射に特化したマシンガン、態々三体同時に襲いかかるため武装を変更しているのだろう。遠くからの銃弾は一部吹き飛ばされた駆動鎧に着弾しているのだが、どうにも傷が付いていない。

「わかるか？」

おそらく、本来ならこれは絶体絶命以前の状況、どれだけ屈強な兵士であろうと、すでに回避ができないと決定している銃弾を避けることはできない。

「拷問ってエのはする側の欲望、される側の非力がなければ成立しねエ」

だというのに、一方通行は動かない。

あくまで彼は戦場にいない、あの雨の中のような死刑執行のための断頭台にすら、彼はいない。戦場になり下がることも、敗戦した都市になり下がることも、あり得ない。

——あくまで、

「つまり、される側が非力ですらなけりゃア、拷問すら成立しねエンだよォ！」

あくまでそこは、化け物躍る災害の地。

化け物はただ一つ、英雄がいなければ、死闘を繰り広げるもう一つの化け物もない。上条も、風斬も、戦える人間はどこにもいない。

「叩き伏せてやるぜ？」

振り向く、彼が攻め入るのは手近の駆動鎧ではなく、吹き飛んだ駆動鎧の延長線上、その先にあるそれだった。

とはいえまずは銃弾の雨。

食らいつくように、一方通行を攻め立てる。

回避する暇も、回避する隙もない、王手ですらない、詰み。チェックですらない——チェックメイト。

けれども、一方通行は笑う。死の決定された掌に、死、そのものを宿してしまう。

——右手が舞った。

それだけで、空中を飛行していた銃弾が形をとどめず破壊される。大小さまざまに砕け、散った弾丸、それを突破口に、一方通行は攻め入る。一步、踏み出してから跳躍、障害物であった駆動鎧を飛び越える。

続き、滑り込むように、駆動鎧の先へ着地した。

銃を構え、下から見上げるような態勢で、見下ろすように銃を構える駆動鎧と相對する。

どちらもどちら、銃を構え、ならば、早いほうが穿てるといったところか。

——一瞬、それだけで、後はただの蹂躪だ。

両者の一撃が何のためらいもなく放たれる。

一つの必殺を積み重ね、一方通行は一撃を作り。

複数の連撃を積み重ね、駆動鎧は必殺を組んだ。

威力でみれば一目瞭然、しかし速度で見れば、果たして――

ガンゴグガンガン！ 複数の弾丸が、金属音に跳ね返る。

駆動鎧は吹き飛んで、一方通行の一部と周りに、銃弾はつきささる。

とはいえ、それは能力で守れる範囲内だった。あたりに適当にそれを散らすと、一方通行は振り返り、残った最後の駆動鎧を見据える。

狩るものの目、まさしく今の一方通行の目は、それだ。

「さア、最後じゃねエか。折角だしよオ、楽しんでまおうぜ！」

駆動鎧はそれに答えることなく、銃弾を向ける。先ほど、二体の駆動鎧を葬るまでは高速で狙いをつけようがなかったが、今は違う。今一方通行はただたっているだけ、言葉をかけて、それだけだ。狙うならば、丁度いい。

当然、一方通行もそれは解っている。

だからこそ、ただのノーリアクションで、何のためもなく疾走のフォームに入る。体をギリギリまで折り曲げて、手を振るのが逆に

邪魔になるような態勢で飛び掛る。

大よそ二、三十数歩、地面に転がる駆動鎧を斜線上に据えて、一気に飛び出す。

次いで銃弾が襲い掛かるが、右手を振るい吹き飛ばす。

幕のように展開していた銃弾の一部が、まるで紙くずのように散っていくのは、中々如何して爽快なものだった。それを放った駆動鎧本人はそうでもないようだが。

一方通行はそれを喜ぶ子供のように笑って見せて。

接近する。

両者の間は、一気に縮まった。

一方通行が足元にいた倒れたままの駆動鎧を蹴り上げる。

非常に硬い駆動鎧ごしでは、大した威力にはならないだろうに、いい加減立ち上がったでもいいと思うのだが、それは先の戦いで幾度となく立ち上がった上条に慣れ過ぎたか。

とかく、一方通行が蹴り上げた駆動鎧は一手に降りかかる銃弾を抑える。

ヘルメットを拳骨で叩くような衝撃が、恐らく駆動鎧に殺到しているのだろう。空中で微妙な静止を行いながら、一方通行はその下を、微妙に入りきらない隙間を左手でこじ開けつつ先へ進む。

それだけで、後二残された距離は十もなくなる。

一方通行も、駆動鎧も、次の行動で勝敗が決まることは見えていく。

だからか、駆動鎧はすでに己の武装をかき捨てていた。

代わりに現れたのは一方通行が先ほどもで操っていた銃——先ほど駆動鎧を倒すのに使用した弾丸で弾切れだったが——だ。とはいえ連射的にはコレでないほうが無難だろう。けれども、駆動鎧は威力を取った。

つまりそれはどういふことか。

単純だ。

一方通行の先方にある天井を、駆動鎧の強力な銃弾が何度か射抜く。

それだけで天井は崩れ、一方通行を生き埋めにでもしようというふうに襲い掛かる。

既に一方通行の速度は一瞬では止まれないと言う様子にまで達している。一方通行自身それを見て減速する様子もなく、ただひたすらに、飛び上がる。

驚きすらもたせず、一方通行は落ちる岩陰に飛び乗ると、一気に踏みつける。

岩は大きく砕け、一方通行はどうしようもなく加速する。

もう一度間に合う状況にないと悟ったか、駆動鎧は一方通行へ向け銃弾を構える。

恐らく放てるのは連射が効こうと一発程度。こちらで選択に間違いはなかっただろう。

ならば、これが最後、という事だ。

だから放つ、駆動鎧は渾身のように、それを——

「馬ア鹿」

一方通行は、ただ踏みつけた。

先ほどの岩と、なんら変わりなく、何のためらいもなく、踏みつけた。そして、けりつけて射出する。――声すら上げる暇はない。

「最初から袋小路に、詰ンでるンだよ！」

砲弾のような一方通行の右手が、突き刺さる。

それは同時に、戦闘終了の合図でもあった。

ギリギリ一回転しつつ、駆動鎧を地面に叩きつけ、一方通行は着地する。

一つ、大きめに息を吐いて、

「まったく、面倒な相手だしやがって」

思いのほか、自分のギリギリを実感する。どうにもこのAIMジヤマーはきつい、どこの誰が造ったのかは知らないが、中々高性能というレベルではなかったりする。

「いつ吹っ飛ぶかわかんねェつつウのはなンともなア」

さらにもう一つ、息を吐く。

暴走の危険はいつでもあった、能力を連続的に使用しているが、

ここまで精神的にきついのも初めてだ。本来ならばここから二度と立ち向かえないと思うように虐殺ショーを始めるのだが、さすがにそんな事を始める気力も、それを実行しうる勇気もなかった。

「まアいい、そろそろだったはずだ……」

待っている、それだけは口の中で呟いた。

意味はない——言う必要すらない。

「——ミサカネットワーク」

そうして、一方通行はここへ来た目的を、端的に口にした。

第一章 2（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
縦横無尽系の高速戦闘。

補足

- ・一方通行さんは結構無理しています。

第一章 3

3

大よそ歩くこと数分。

体感時間ほど当てにならないものはないが、とにかく一方通行は
アクセラレータ
目的の場所へ到達した。無骨で無様な、排他的であるそこへ。

あたりは非常に簡素な作りだった。装飾を最初から放棄したデスクに、ただ座ることだけを目的としたパイプ椅子、それ以外に特筆すべき家具は何もない。

一方通行の目の前にある試験管とでもいうべきそのためのだけにある場所なのだろう。

いくつかの装置につなげられ、デスクの上においてあるパソコン、及び電力供給のためだろうか、どこそこかへと繋がっているケーブル。

乱雑な部屋、もしくは殺風景で何もないとまったくもって感じさせられる部屋。

そこに、それはいた。

それ、と言う表現は正しくないか。

年齢、十のほどに届いているかいないかと言った様子で、容姿はそのまま御坂美琴を幼くしたもの。

手を伸ばせば、試験管のようなそれに届けそうだ。

打ち止めはただ意識なく、螺子を巻かれるのを待つ人形のように、弱く、細い腕を試験管の中からさらしている。

ラストオーダー
ゆっくりと、打ち止めへと近づいていく。
丁度、デスクの所で立ち止まる。

ラストオーダー
「最終信号……ようやく見つけたぜエ」

軽く笑って確かにする。

ラストオーダー
最終信号、打ち止め、ミサカネットワークを統率する二万の上の
一の固体。

一方通行がここへやってきた最大の目的。

——幻想御手とミサカネットワークは同じタイプの代物である、
といえば大体わかるだろう。

力が必要だと、そう考えた。

ただ最強なだけで、結局砥信は救えない。

そのとおりだ。

やはり、と考える。

しかしそれもパソコンに触れるに辺り、切り捨てる。答えがまっ
たくもって、出す気配も、現れる気配もなかったからだ。

パソコンに触れる。大体の情報はここに詰め込まれているはずだ。
セキュリティが存在したが、無理やり突破して中身をじつくりと
読み込む。

実験が終わってからの経過が詳細に記されている。どうやら打ち
止めの調整は終了しており、このまま外に出しても普通の寿命を生
きて普通に死ぬだろうとの見解だ。

ならば、と手を伸ばすが、ふとそれが止まる。
これをこじ開けるには能力が必要だ。

だがここには恐らくAIMジャマーがある。

能力を使用するのであればそれ相応のリスクを加味しなくてはならない。最悪自分自身の死が、能力の暴走によって一気に決定付けられるかもしれない。

そも、誰かが一方通行に『いいのか』と問いかけた。

力を手に入れる。その目的を一方通行は忘れたつもりはない、だが、目の前の少女を、ただそれだけの道具にしているのか？ 誰かがそう問いかけた。

それ自体の答えは直ぐに出た。

単純な気の迷い、けれどもそれは彼の手を鈍らせた。

そして、もう一つ。

「久しぶりだな、一方通行」
アクセラレータ

不気味にささやかれる一つの声。

聞き覚えのある声だった。忘れようがない、忌々しさを覚える一人の声、男性のものだ。少ししわがれてたとえるなら追い詰められ、すり減らされた人間の声。

けれども、同時に張りがある。

追い詰められながらも、彼はナニカを得ているのか。

「ご無沙汰だなア、天井くんよオ」

「その通りだが、そこまでだ、一方通行。それ以上の行動は残念だが認められない」

あまいあお
天井亜雄、この『絶対能力進化計画』における中心人物の一人であり、一方通行に対する連絡や打ち止めの調整など、実質最も重要

な部分を任されている研究者であった。

プライドが高く、研究者としては大分頑固なタイプであったと推察していたが、天井は随分と余裕を持った笑みで話しかける。

計画が中止になったことにより、相当焦っていると一方通行はかんぐっていたのだが、なにやらそうでもないようだ。

先ほどの声も、若干一方通行による聞き違いがあったことも否めないだろう。

一方通行自身へ言葉を直接送る彼の声音に、一切のためらいも、一切のあせりもない。どうやら本当に余裕綽々といったところだった。

「……お前、なにをやっている？」

疑問に思ったのならば、既にそれは言葉へと出ていた。

一方通行は眉をひそめて睨みつける。

「別になんでもないさ、懇切丁寧に語ってやるつもりもないし、勝ち誇るつもりも私にはない」

「随分と余裕たっぷりな発言だなア、天井くん、お前、今の状況わかってんのか？」

若干のいらだたしさをぶつけるように、殺気を込めて問いかける。脅しかけると言い換えると、さらに殺気が増すだろう。

——少なくとも彼の知る、もしくは彼が会話した天井のイメージはここで怯えるような人物だった。そして優位を安心し、それに胡坐をかく、ただふたをしただけの状況に目をそらす人間だ。……そのはずだ。

だというのに、天井は顔を笑みに変える。

「……ここにはA I Mジャマーがある。私の手には拳銃があるわけだが、ソレを跳ね返すようなベクトル操作をすれば君の能力は暴走する危険性が高い、精々二十パーセント、ここに来るまでのことを考えれば、一パーセントも存在しないのではないかな？」

「アーン？　おい、天井――」

「事実だよ、一方通行、キミの目的は二万の脳、自身の演算能力の補助と、万が一の予備、と言ったところか、だとしたらそれはお終いだ。私の立場として、許すわけにはいけないのでね」

――可笑しい。

天井という一介の研究者は、こんな男だったか？　ただ拳銃を構え、A I Mジャマーという、結論だけ見れば可能性でしかない方法を絶対の選択肢にして、余裕をもてる男だったか？

研究者としては優秀だが、人間としてみると随分と御しやすい、それが彼に対する大体の印象だったはずだ。

何かある。

一方通行が至ることはできない、どこか遠いナニカ。

手をつかんでいたはずの砥信が、いつの間にかどこかにいつてしまったような何か。

だったら、

「はン、だったらお前を倒せばいいじゃねエか、解ってんだろ？　この距離だ、何の心得もないお前は、そんなおもちや程度じゃ俺にはどうやってもかてねエことくらいよオ」

両者の間はほんの数歩、二桁にも満たないその間で、天井は簡単に攪乱されて、弾を放つことなく叩きのめされる。

ソレくらいは天井も理解しているのか、軽く笑い声を上げる。

「ハハ——その通り、だが、お前が私に接近する間に、私はその最終信号を打ち抜くぞ？ この銃に装填された弾丸は特別性でな、あのガラス管には多少の防弾性はあるが、これはそんな物水を打ち抜くように砕いてしまうぞ？」

「……っ、そういうことかよ、おい」

「流石に三度目となれば、意図的にこういう状況くらい作れるさ」

必然か、偶然か、その問いはさておき、天井は言う。

優位ゆえに語るか、ただ研究者として、探求するからこそ語るか。それは一方通行に対する天井個人からの、それはなんでもない言葉だった。

「驚いたよ、本当に」

「俺がここに来たことに、か？」

「違うさ、全然違う。それは又別の事、それ以外に私は今まで二度驚いている。解らないでもないだろう。何故実験を断ったのか、私の言葉に反応したのか、それだよ」

なるほど、と頷く。

そもそも一方通行は『絶対能力進化』の実験を断った。

自分は今まで誰も殺さなかった、殺さずにすんだできたのだ。そ

れなのに、二万人？ ふざけるな、そう憤りながら、威圧するように断った。念入りに、脅しかけるように。

天井自信それに圧されたのだろう、拒否は難なく受理された。

……一方通行にとってはそれで終わりだったのだろう。

シスターズ

妹達も用無しとして処分されただろう。それを考えると、天井が何故一方通行に脅されただけで拒否を認めたのか、疑問が残るが。

ただ、天井の一言で、本来だったら終わっていた妹達の運命は、狂い始める。

回らない歯車が回ったのであれば、それは狂ったとしか、言いようがない、例えそれがどんな動き方であったとしても。

『そうか、では妹達は処分しなくてはいけないな』

心底残念そうに、けれどもそれだけの様子で天井はいった。

それに一方通行は反応する。――もしかしたら、それは必然だったのかもしれない。

そして、“二度目”――いうまでもない、時系列的には、一方通行とスキルアウトが激突した直後である。

「アレはやったほうも随分あせていたよ、私もコレの実力を試したかったから力を化したが、まさか能力なしで鎮圧してしまうとはね」

トントんと、床を軽く足蹴にする。

「アレは鎮圧じゃねエ、虐殺だ」

「かもしれないが……そうはいっても一方通行、結局キミは残虐非

道で、生きた地獄を形成する天才だけど、その実やっていることの真は大分子供じみている。素直じゃないものだ」

いや、素敵なのかな、それは。

軽く天井は肩を揺らす。心底愉快そうに、けれども一方通行から目を話さず。

「うるさい、無敵だ」

切り捨てるように一言、それすらも天井は楽しそうに笑うだけしかない。

「ああ、一方通行、やはりキミはどうしようもなく弱い人間だ。解るものだな、言われてみれば、いや、いわなくてもそのとおりだ」

「どオいう意味だ」

唐突な天井の言葉、一方通行は鬱陶しげに睨みながら、言葉と一緒に殺気を飛ばす。

どれもこれも、天井を超えて、すり抜けてしまうのだけれど。

「……誰も一人じゃ守れない、誰かの力を借りたって出来るのは時間稼ぎ程度か……なんにせよ、キミの能力は節穴さ、隅々まで至らなくて、節々が足りていない。力不足役不足、一方通行自身が、まったくたりていない」

「……………」

一方通行は沈黙する。心当たりがあるわけではない、そもそも一人でなくとも救えないし守れていないのだから、心当たり以前の問

題だ。

天井の言うそれは空物語、妄想がすぎる。
一方通行の妄執など、今はどうだっていいことだろうに。

「守れない鎧に意味はないよ、騎士様」

まるで騎士のようなニヒルな笑みで、悪役は嘲笑^{ヒール}った。

「そオいう事かよ」

流石にそれは関係ないとはいかない。

天井は一方通行を馬鹿にしている。それもそうだ、元々こんな状況で長々と最強である一方通行を野放しにして会話をするほうが可笑しい。

何かしか、要求があるのであればすばいい。
でなければこんなこと、する必要はないのだ。
だとしたら。

（何か時間を稼ごうとしている？　しかしそんな物の意味なンぞ、俺にはわからねエぞ）

至る。

けれどもそれを切り捨てた。

答えは当然出ないと解りきっていたからだ。パーツが、さらに前進するための鍵が少なすぎる。――わかりきって、いたことだ。

「……どうした？　一方通行」

天井が反応する。

一方通行が行ったのは単純で、右手を試験管に伸ばし触れたこと

だ。何をしようとしているか、天井には理解が及んでいるのだろうがそれを信じようとはしていない様子だ。

当然だろう、一方通行だって信じられないのだから。

「なんつウか……変な話だよなア、これは一番ありえねエ選択肢な
ンだよな、本当だったらよオ、こうするンじゃなくて、たとえばお
前の言い分を聞いて交渉したり、それをする不利をしてだまし討ち
したり……安全策なんざ幾らでもあるンだよな」

「……………一方通行、キミは——！」

余裕綽々と、一方通行が笑う。どこまでも響きそうな声で、天井
は最初は驚いていたようだが、ふつふつと笑いがこみ上げてきたの
か——肩を震わせる。

「だが、それよりも銃弾の方が早いはずだ。恐らくソレにつなけれ
ばある程度リスクをかき消せるとはいえ……数分は掛かるはずだ」

解っている。

解っていないながら天井は問いかける。

「ンなもン、最初から全部準備できてるに決まってるじゃねエかよ
オ」

ミサカネットワークと接続し、自身の能力を補強する。それが一
方通行の目的だ。——ただの最強では砥信にはたどり着けない、か
といって絶対能力者になろうというのなら、二万の妹達を虐殺しな
くてはならない。

本末転倒、ならば——ミサカネットワークを乗っ取ってしまえば
いい。ミサカネットワークの演算を手に入れることで能力を強化す

る。

もしくはミサカネットワークからの副産物を奪取する。

そのためには、仮想OSが必要だ。ただミサカネットワークに接続してもそれだけでは意味がない。むしろミサカネットワークに食いつぶされる可能性すらある。

複数の思考を同時に用意するというのが、仮想OSの根幹にある。それを用意するのに、一方通行は数分掛かるのだ。

故に間に合わない、ことここにおける数分は、そもそも隙ですらないというわけだ。

けれど、最初から——ここに来る以前からそれを用意していたとすれば。

一瞬、それだけでいい、一瞬で接続し、脳波を同じものにする。仮想の脳を、脳の中で作り上げる。それだけの事が、一方通行には出来る。

だが、

「本当に最悪の選択肢だよ、キミは自分から死地に向かおうというのだろうか？」

それには能力を使用する必要がある。

おおよそ二十パーセント、やればやるだけ不利になるのだから、多分一パーセントもない。それは告げた天井だけではない、一方通行も同じだ。そう言うふうを考えている。

十中八九、失敗するだろう、そうすればむしろ、一方通行は演算能力を失い、能力すらも失う。

彼が残してきた——砥信の元へおいてきた名前。

そうして持っている、新たな――

それすらも、彼は放棄して、

だというのに、彼は笑っていた。

知ったことか。

確かに一方通行は弱者だ。甘い言うとおり、彼には一番大切な人は守れなかったし、どこをどうしても詰めが甘い、至るべき答えに至れない。

――けれども、

少しずつ、手をめり込ませる。

天井は無言で拳銃を構える――指を引き金にあわせ……

――いや、だからこそ、

「博打の一つもうてなくちなア、強者^{えいゆう}にはなれねエンだよ」

放たれる。

銃弾の音だ、耳に響く、一つだけ、空中を静止し、空中が動いて、切り抜けていく。

「いいことを教えてやろオカ、俺がコレに少し力を加えるだけで、こんなガラス、簡単に破れちまうンだぜエ」

銃弾は違いなく打ち止めを狙っていた。
一方通行が握る最終信号、さいごのきぼう ゆっくりとソレは――

第一章 3（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

少し原作をイメージさせる一方通行さん、ただし上条さんに影響こそ受けているものの、上条さんが行動方針の全てじゃないのがミソ。

補足

・大体上記参照。

第二章『決意するからこそ Protect the vision』

1

『始めまして、一方通行、ミサカは打ち止め、検体番号20001、マザーコンピューターとして、貴方のアクセスを歓迎するよ、ってミサカはミサカは話しかけてみたり』

唐突に、そんな声が脳内から聞こえた。

文字通り脳に直接、響くようだ。——これは精神系能力において、他者と交信を取る能力と同じ感覚だ、何だか引っかかるような可笑しな感覚。

(ンだよ、やかましい)

声の主は恐らく今背負っている打ち止め——近くにいた妹達に持つてこさせた水玉模様のワンピースを着せている——だろう。
ワンコではない

しかし、意識はないはずなのだが、この信号は一体どこから……

『私はいま体だけを休めている状態だから、脳の微弱な信号を下位固体に渡して、言語化したあと貴方に届けてもらってるの、ってミサカはミサカは懇切丁寧に事情を説明してみる』

「そオいうことかよ……」

人ごみを避けるように歩く路地裏、軽く言葉を漏らしても聞かれるようなことはない。

『とりあえず後数分で目を覚ますはずだから、そうしたらどこかで

お食事したいな、ってミサカはミサカはおねだりしてみたり』

「順応がはえエンだよ、お前今まで眠ったままじゃねェか」

『そうはいっても貴方の“先生”に預けられてるミサカから話は聞いていたから、来るって事、貴方が何をするつもりだったのかって事は聞いてるんだよ？　ってミサカはミサカは裏話をしてみる』

「あいつかよ……」

『彼は冥土返しと同じくらい信用できるから……そう言ったのは貴方だよってミサカはミサカは問いかけてみたり』

「確かにその通りなんだがなァ」

『ミサカに話を通しておいたほうが後が楽だからって、ミサカはミサカは後日連絡！』

まあいいと言葉を吐き出し、ゆっくりと打ち止めを地面に降ろす。先ほどから少し唸っていたのだ、起きる兆候、ついでにミサカネットワークを一時切断する。ログインからログオフ、思考を常時行っていた脳の一部を意図的に休止させた。

ぱちくりと打ち止めが目を覚ますのはそれから数秒後、大分意識ははっきりしているようで先ほどから眠りながらも意識を稼働させていたためか、それとも元々こういう体質なのか。

少なくとも一方通行はそれを考えとして思考に並べる前に、打ち止めの言葉が飛んできた。

「ぶう、もう少し話を聞いてほしいかもって、ミサカはミサカは遺

憾の意を表明してみたり」

「……ったく、こいつも“アレ”の所に預けようかねェ」

「残念だけどミサカは貴方の能を一部占拠してるの、だからへたにマザーコンピュータのミサカを無視すると痛い目見るのさ、とミサカはミサカはニシシと笑ってみたり」

「ミサカネットワークの演算に割いてる演算部分は俺の本来持つ演算能力の三十分の一もねェわけだが、さて、何か言うことはあるか？」

外部に任せてるから、USB見たいなものだと一方通行、語気を強め、小動物を射殺す視線で打ち止めを睨みつける。当然ながら打ち止めは子犬てきな小動物なのでびくりと怯える。

ぶっちゃけアレだ、禁書目録風に例えるなら火破りの刑である。

魔女裁判に無罪はない。

拳骨一発最終信号。

いまだに痛む頭を擦りながら一方通行を追う少女を確認しながら彼はファミレスに入店する。大人子供一人ずつ、禁煙席でお願いします。ヒヤッハー。

何も可笑しいことはなく、二人は席に着く。

「何だか新鮮な気分かも、潤いばかりがミサカの障害なのだよー、ってミサカはミサカは何の意味もないことをそれっぽく言ってみたり」

「障害一生涯してろ」

「間違えたーっ！　ってミサカはミサカは驚愕に慄いてみたり」

「わかんねえよ」

どう考えてもわかってるくせに、バックグラウンドミュージックをこっそり用意して、一方通行はメニューが並んだ一覧を見る。

ここは無難にステーキあたりかと思案をめぐらせて、ふと、前にもこんなことがあったと思い出す。

その時は偶然、打ち止めの元となった御坂美琴と相席したのだ。

「？　どうしたの？　ってミサカはミサカは首を傾げてみる」

「インヤア、生き別れの姉と再会しましたって所かア？」

「流石にそれで解れは無理だぜー！　ってミサカはミサカは渾身の訴え！」

テーブル越しに打ち止めが抗議の声を上げる。目立つと言うほどではないがやかましい、少し黙らせたほうがいいかと拳に意識を向けつつ、

「半分独り言だっつウの」

軽く返して、注文をする。結局ステーキで、打ち止めもオムライスと無難なところを頼んだ。

「手ェ拭けよ、顔拭くなよ」

「な、ミサカはそんな親父臭くないぞ！　とミサカはミサカは聞き捨てならないあなたの言葉に異議を申し立てる！」

「口癖だよ」

誰の、とは言わず、ムキーと腕できせきの大車輪を行う打ち止めを静止しつつ、片手でおしぼりを使う、ビニールに包んでだったそれを破いて広げて、軽く放り投げる。

ひらりらとどちらかを舞って、やがて一方通行に落ち着いた。その頃には大分打ち止めも落ち着いた様子だった。

「きゃっはー、めしだー、ってミサカはミサカは汚物を消毒！」

「オマエはもう、喰っている……はア」

一体どこからそれを、と思い立ったが、よくよく考えればあいつの愛読書だった。

気にせず食を進めていく、いつも通りおいしくもなくまずくもなく、適当に評価するならおいしい、適当に食べるなら最高、そんな料理を収めていく。

「せめて痛みを知らず安らかに喰われるがよい」

打ち止めがそんな事をいいながら書き込んでいく。大分急いで食べていたので鬱陶しげに何時咎めようかと思っていたところ、少し打ち止めがこぼした。

それを手掴みで拾う。

「おい、手づかみでなんだ手づかみで、食べ物つつうのはそうじゃねェだろ」

「な、なにさー、行儀が悪いというのはミサカは効かない！ なぜならばミサカにも意地があるからだ！ とミサカはミサカは女の子だもん！」

「砥信に毎度毎度言われてたなア、癖になっちまったンだよ、他人がやってるとむしろに気になるくらいにはなア」

「ふうん、そオカよ」

「なんで真似をする必要があるンだよ」

「べつつにィ、ってミサカはミサカは目の前で語られる過去の女に嫉妬してみたりィ」

ジト目で見られる。

「過去じゃねエ、現在進行形だ、つかオマエがここにいるのは何のためだと思ってンだよ」

「ふっふーん、今はただの代わりでしかないかもしれないけど、ミサカ00001号^{ワシコ}の感情講義が終わったら必ず伏兵が四桁単位で現れるんだから、ってミサカはミサカは四天王の最初の一つになってみる！」

「あいつ何やってンだよ……」

お前四天王どころか大魔王じゃねエか、と一言。

そういえばそうだったと驚愕の事実^{ワシコ}に身を染める打ち止めを他所に残りの食材を味わっていた^{ワシコ}。一気にかき込むのはこの礼

儀ではない。

暫く、ギャーギャーとわめいていた打ち止めが、ふと静かになる。どうしたことかとやっと視線を向ける一方通行に、打ち止めはゆっくり笑いかけた。

「……何から何までありがとね、ってミサカはミサカは数え切れない感謝の意を表明してみたり」

「……………」

沈黙する一方通行、言葉を選んで、どうにかしようとは思うものの、言葉が出てこない。まだ一方通行は何も見つけていないという事だ。

そうして、ナニカ意味のないことを言葉に使用と思ったはいいの、結局打ち止めに先を越される。

「確かに貴方は私達を殺そうとしたけど、同時に殺されないようにもしてくれたんでしょ？ だったら私達がするのは感謝だよ、ミサカはミサカは素直な感情を表してみる」

そんなものではない、断じて、一方通行が助けたかったのは殺したくなかったと言う、自分自身への納得のためなのだ。

だからワンコは酷い目にあわせたし、もう少しで死んでしまうと言うところまで言った。

踏ん切りがつかなかった、それだけのことだ。

もし、風斬も、上条もいなければ、間違いなく一方通行は殺していた。

だから感謝すべきなのは、一方通行を止めた上条と風斬であり、そしてそれをサポートした絹旗であるべきなのだ。自分は、打ち止めたちと同じだ。

立場が違うだけで、助けを求めると言うのは変わらない。

「知ったことかよ」

だから切り捨てて、聞かなかったことにする。

それに意味はまったくない。

一方通行には、まだ答えなんてないのだから。

第二章『決意するからこそ Protect the vision』(後書き

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。

ツンツンデレツンツンツンの割合。そんなのないけど。

補足

・テレーッテー、が趣味のあいって？

第二章 2

2

場所を移して、

一方通行と打ち止めは公園にいた。

単純に移動中疲れたので休憩、というのを打ち止めがごり押ししたのだ。因みに、一方通行は知らないし打ち止めも教えていないが、ここにはワンコがいる。

ワンコと一方通行はなんだかんだで間がギクシャクしていて、落ち着かない。

……と、ワンコが数日前に嘆いていた。

とうのワンコにも、件の一方通行にもそれは内緒なのだけど。

「暑さが厚くにじみ出て熱くなるぜーって、ミサカはミサカは貴方を言葉でもてあそんでみたり」

「意味くらいわかるつつウの、なんですかア？ 高々二万の脳が俺に適うとも思ってたのか？」

日陰にて、左手で顔を仰ぎつつ、ぼーっと言葉を並べる打ち止めを、一方通行は日向から、何かへんなものを見るような目で答える。どうやら暫く打ち止めはスリープモードな様子で、動きそうにない。

仕方無しにあたりを眺めてみると、どうにも人がいない。丁度今が昼時、と言うのと、このうだるような暑さが原因だろう。

一方通行とて、反射を行っていない現在、その暑さに身を焦がしている最中だ。

因みに、一方通行は基本反射を行わない、必要ないというのが実際か。

「とりあえず、何か買ってくるかねエ」

珈琲の一つでも飲みたい、あれは至上の飲み物だ。アレさえあれば一方通行は生きていくことが可能だし、折角電気系の能力を手に入れたのだ、いろいろと応用して見るつもりだ。

……くはは。

「……番外固体00001、コード『アクセラレータ一方通行』、直ちにミサカネットワークの接続を要求します。これは運営権限です。繰り返しします——」

ふと、機械的な声が両者に響く。

ラストオーダー最終信号のものだ。言葉は打ち止め自信へ向けた一種の合図みたいなものだろう。同時、一方通行の元へ信号が伸びてくる。

稼動を切っていたパソコンの電源が勝手に起動する。

『何か私達の力を馬鹿みたいな方法で利用しようとしてるんじゃないかな、ってミサカはミサカは貴方の心中を探ってみたり』

『馬鹿だろ、オマエ、俺が接続してるのはあくまで仮想OSだ。通常のOSである俺自身の考えなンぞ読み取れるかつつウの』

『なっ、ってミサカはミサカは分割思考の真髄を味わってみたり』

こうを垂れる打ち止め、フン、と鼻を鳴らして一方通行は大振りに反転する。丁度自販機はコレの目の前、少し歩いて少し戻ってくる、それだけの簡単な話だ。

けれども、一方通行はある事に気がついた。

一瞬の驚愕と、ためらい、嫌悪ではなく、かといって好意でもない、なんとも形容のし難い複雑な感情が一方通行を襲う。一方通行にとって、彼を一体どう評したものか。

なんともいえない。

憧れは間違いなくあっただろうし、妬みも当然あるだろう。

けれどもそれは当然のように、どこか心の奥へしまっておくようなもの、行動の根底にしく、感情であって勘定ではない何かであるべき場所にあるモノ。

だとしたら、一方通行が抱くこれはなにか。

やはり答えはどこにもない。

――上条当麻が、そこにいた。

軽く目を見開いて、一方通行はまず驚いてから、よくもまあお互い気づかなかったものだ、と考える。向こうはナニやら自販機の前でぶつぶつと何かを言っており意識が向いておらず、一方通行も一度も振り返ってはいなかった。

まあ仕方のないことだろう。

(なにやってんだ? あいつ)

特に打ち止めに話すでもなく、恐らく打ち止めも気づいただろう。何か考え込むような動作をする。

『……んー、ってミサカはミサカは思案中』

『どオした』

『ん？ なんでもないよ、ってミサカはミサカはごまかしてみたり』
答えてくれそうにはないので思考を切り変える。

あくまで一方通行はミサカネットワークにおいてはゲストだ。直接、物理的に打ち止めの思考へ介入しない限り他の妹達に干渉はできない。

思案中の会議も、精々壁越しに盗み聞く程度しかできないと言うわけだ。

「にしても、何やってるンだろうかね、あの馬鹿は」

「いつてらっしゃーい、ってミサカはミサカは知らぬ存ぜぬ」

「そオかよ」

適当に返しつつ少し近づいてみる。

とはいえ、ここで話しかけるつもりはない、ただちょっと気になった、上条当麻がこんなところで自販機にかじりついて、お金も入れず、何も選ばず、ただ立ちすくんでいるのには一体どんなわけがあるのか。

それを確かめるため、少しだけ一方通行は上条に接近した。

そうして聞こえてきたのは。

「ふうふうふうこおおおおおだあああああああああああ」

という、息を吐くのと同時に行われる、生存からの言葉。

一瞬何をやっているのか訳がわからなくなる。それから立ち上が

ると、何事もなかったようにもとの場所へ戻り、上条が放れるのをまとうと――

バゴンガガンッ！
そんな何かを蹴るような音と共に、上条は思
い切り吹き飛んだ。

数メートル、派手にローリングしながら吹き飛んでいく、少し飛ぶとやがて着地し、立ち上がる。何の問題もなさそうにコチラに近づいてくるが、確かアレは普通に気絶するレベルのものだ。

「な、なにするんでせうか」

と首を傾げる上条に雑学だと往なす一方通行。

エ」

「それは悪うございましたね、上条さんは現在、少し前と同じ轍を踏んでしまったのですよ」

言われながら、一方通行は財布を取り出す。あ、と上条が声を上げるがもう遅い、十円玉を取り出すと自販機の中に放り込んだ。

「さアて」

と、声をあげ、次を用意したところで気づく、何の反応もない、お金が幾ら入っているかを示す場所は黒のまま、動く様子もない。あちゃー、という上条の言葉に、なるほどと納得する。

「吞まれたか」

「吞まれたな」

グツと、どちらからともなく握手した。

少し前に殺し殺されをする程度の中だったはずだが、随分と息があっている。

「にしても、こんな所であうとは……何してたんだ？」

両者手を放し、上条が一言。

ふと漏れでたようなそれを一方通行はそのまま放り投げる。

「ちょっとな」

答えになってない答え、こたえる気がないのか、言葉よりも解り

やすい答えがどこかにあるのか、上条への場合は一割前者、九割後者と云ったところだ。

事情を知る上条ならば、見たほうが早いだろう。“アレ”もそういった容姿をしている。

考えて振り返る、少し遠く、日陰の端に、一方通行は打ち止めを捉えた。

軽く手招きを退く、手葉煉をする。

小首をかしげて打ち止めが疑問の様子だった。無視して動作を続ける。とはいえその間は数秒であり、直ぐに向こうも合点が言ったようだった。

……上条がいることは向こうも気がついているのだ。

そして数秒。

「呼ばれて飛び出てミササカーン、ラストオーダー打ち止めだよ、ってミサカはミサカは奇抜なのか使い古されたのか解らない自己紹介を試みたり！」

「初対面の相手に対する自己紹介としては奇抜どころか丸罰つけられねェよ」

「……ミニ御坂？」

「その上位固体だ、妹達の方のな」

なるほどと頷く、昔の御坂がどういったものかわからないが、多分こんな感じだったんだろう。この完全にミニ御坂な少女は、そんな想像を掻き立てられる面白い少女だった。

そんな上条の様子を感じ取り、一方通行はやれやれと嘆息する。
笑うわけでもなく怒るわけでもなく、なんだかなあと、呆れにも
足りない感情をあらわにする。

「なんか、妹達とあんたが一緒って言うのは変な感じだな」

「やるべきことがありゃ、俺ア誰だって利用するンだよ」

「……そうか？」

「ななな、何言ってるのよ！ そんな事言われてうれしいなんて感
じるわけじゃないじゃない、馬鹿じゃないの！？ ってミサカはミサカ
はお姉さまの真似」

「似てるな、つつか、御坂ってそんな感じだったけ？」

面倒ないちゃもんで突っかかってくる御坂美琴と、友達のように
親しみやすい御坂美琴しか知らない上条からしてみれば、何だか変
な話だ。

よくよく考えれば前者はこのツンデレ美琴から来るのだが、元来
鈍い上条は普通に気がつかない。

「お姉さまの中の人が私に電波を送ってくるの、ってミサカはミサ
カは驚愕の事実！」

「完全にオカルトじゃねエか……いや、ンなこと事態聞いてねエン
だよォ！」

「仲いいな」

「相性がいんだよ、これからもっと仲良くなってやるんだから、
ってミサカはミサカは将来の展望を明らかにしてみる！」

「ンな長期戦みてエなことやってンじゃねェ！」

馬鹿みたいに怒鳴りあう両者。

乾いた笑みを浮かべる上条、その笑みにどこか余裕が感じられる
のは、果たして一方通行の気のせいなのだろうか、というか、よく
よく考えればすさまじくうらやましい人間だ。

まあそんな事解りきっているし、無い物ねだりをするつもりはな
いのでさつきを飛ばすだけにしておく。

うつ、と軽くおののいて、上条が後ずさりする。

そのとき、だった。

上空から――音、風、衝撃、すべてを切り裂く爆撃が降下する。

最初に気がついたのは一方通行だった。上条たちを吹き飛ばし反
射を有効にさせると、自身も軽く横へ飛ぶ。

一閃、彼の目の前を凶悪な機械の腕が掻き切った。

――白銀のメタリックなボディが光る、従来のそれと比べると随
分コンパクトな駆動鎧パワードスーツだった。

人間大の大きさで、本来のものが二メートル近い大男であるのに
対しこれは随分とひよろい印象を受ける。かといってそれが正当な
評価かといえばそうでもない。

むしろ無駄のない、それは洗練されている、と評されるべきだろう。

コンパクトに纏められたボディはまるで人間のように確りとしたものである、多少、四角張った面はあるものの、それが人間でないと証明できるのは精々背中に取り付けられた同色の機械だけだろう。

駆動鎧らしからぬ……ということはないが、そのボディに惚れ惚れれとするものは多いであろう、それがその機体だった。

「ンだあ！ オマエはよお！」

怒鳴り散らすような一方通行の声。

そうして、悠然とした間を持って最適なその時に——言葉を聞く。

『待たせたなあ、一方通行！』

機械からの宣告。

宣告布告ともいえるその声の主は、先ほど研究所で相対した相手、思わぬ不遜振りを見せた男。

——天井亜雄あまいあおだった。

第二章 2（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

久々の感想に思いを乗せて、次回からは前々からやってみようと思
っていた三日に一回の定期更新を、五巻分終了まで、やってみよう
と思います。

第二章 3

3

あたりは死んだように、一瞬の時を抑えていた。

一方通行と、上条当麻と、打ち止めと、天井亜雄、そこに在るのはただそれだけでしかなかったのだ。一つ、二つ三つ四つ、それぞれの意思がありそれぞれの言葉がある。

たとえば、一方通行が天井に睨みつけ、立ちはだかったように。

たとえば、上条当麻が打ち止めを守るように、体を移動させたように。

たとえば、そも、天井亜雄がこの場に、突然現れたように。

それらはこうして、交錯している。

「おい——」

天井に立ちはだかって、軽く視線を上条に向ける。それから打ち止めを示すように視線を動かして、元に戻した。一瞬の簡単な動作だ。

上条はそれを察したのだろう、一方通行に急いだように声をかける。

「気をつけろよ！」

「わアってる、解ってんだよ、そんな事」

返しながら思わず感心する。上条はちゃんと理解している。自身のなすべきこと、無茶と無謀を履き違えず、ただの勇気をただの勇

猛と誤解しない。理解せざるを得なかったのかもしれないが、一方通行からしてみればうらやましい。

完成した強者というのは恐らく彼の事だろう。

——二人分、音が途切れて言った。

天井はそれをジャマするようではなく、ただ待っている。一方通行が入るため踏み込むに踏み込めない。と言うのもあるだろうが、やはりなんだろう、踏み込めないではなく踏み込まない、真意がどこにも、見えてこないのだ。

「さアてよオ、戦闘前の口上と行こうぜ、どうせこんな場所にそんなもンもって現れたンだ。わざわざ本日はお日柄もよく、だけで変えるわけでもねエンだろオ？」

『解ってきたじゃないか一方通行、刈り取るのならば、有用な目であることが好ましいのだからな』
アクセラレータ

さもそうであることが当然のように、天井は簡潔にそういった。ただし、簡潔すぎて何の説明にもなっていないが。

「まア実際の所よオ、オマエはどうでもいいンだよ、オマエが何をしてンのかつつウのが、本題なンだよなア」

『解らないのか？ この私が』

「解るンだったらとつくの昔に答えにたどりついてるはずだぜエ」

『それもそうか、キミはそういった情報を整理……いや、制御か、するのは得意だが、そういった思考の発展は苦手だったな』

普通だったら考えに至っていて当然のはずであることにもたどり着けない、自分がなんなのかも見当がつかず、どうしようもなく迷っているだけ。

行動は正確だ。

しかし信念が足りない。

『それはつまりどうだ？ 傀儡か、道具か、暴れまわるだけの化物か。結局一方通行という個人は、今だ何のパーソナリティを獲得していないということになる』

「……ごちゃごちゃうるせエぞ」

『老婆心だよ、私はアレを知ったときは驚いたものだ、別にキミの味方をするわけではないが、私はアレの味方でもないのだからね、キミは何も成長していない……もし少しでも進む気があるのなら、考えてみる事だ、あの研究者の事を、先ほどの少年の事を、そして――』

「……………うるせエつつつてンだろうが、オマエに俺の何がわかる！」

『事実がわかる――キミはまだ、』

それが終わりだった。

一方通行が先行して動く、両者の間はわずか数メートル、数歩の間合い、必殺の空間。

飛び出して、そのまま滑り込むように天井の下へと走る。迫る間合い、ギリギリまで近づけて、一方通行は挨拶代わりに拳を放った。軽くジャブのような一撃、引き締められた脇から一切の油断なく、

天井の持つ、駆動鎧のボディへと叩き込まれる。

鈍い、響くような感覚。

どうしようもなく一方通行は違和感を覚え、後ろへ下がる。

瞬間、一瞬にして地面が割れた。先ほど一方通行を襲ったときは違い、天井の一撃は地を穿ったのだ。強力な痛撃によって、まるでそのコンクリートは、色あせた豆腐のように砕かれた。

パタパタと、あたりに吹き飛んだ破片の一部が一方通行を叩く。ただ、どれも一方通行に弾かれ、零れ落ちていった。

——行動のインターバル、続けて次のステップに移る。

突き出すように、倒れこむような態勢の駆動鎧の肩から、銃口が突発する。モーゼのきせきのように、少々突き出した肩の扉が開き、同時に黒く光るそれが見えた。

反射は既に効かせている——普段は反射を展開していないとはいえ、周りのベクトルを読み切り、高速で不意を打たれた場合はスイッチが入る仕様となっている。

ミサカネットワークあってこそその仕様だが、中々重宝する。

閑話休題。

銃口が一方通行を、正確には一方通行の足元を狙っている。放たれるまで一秒、狙いはやはり牽制か、考えながら踏み込む、所詮銃弾は銃弾、気にしたところで何の意味もない。

それを肯定するように、畳み掛けた一方通行の横を、鉄砲玉はびゅんびゅんと通り過ぎていった。

もはやその程度では一方通行は止まらない、当然だ。それ以上の速度を知っている。風斬氷華という無機物以上の有機物を一方通行は知っている。

必然か、俄然か、悠然か、一方通行が迫ると同時に起き上がった天井が接近する。

遠めの間合いから敵を翻弄しようと言うのが天井。

近めの間合いから敵を封殺しようというのが一方通行。

どちらもどちら、己のもっとも適した戦術を選ぶ、体の小さい一方通行はしたから、体の大きい天井は上から、それぞれが穿つ。

同時ない、最初から正しく定められていたかのように、両者は拮抗する。

攻法の関係上、先に踏み込むのは天井だ。一度なでられるだけで神経の全てが逆なでし、吹き飛んでしまいそうなのはまさしく、一方通行を決り取るうとしている。

交錯、軽く体を落とし、左へ振った一方通行が、そのまま内側から潜り込む。

次の行動へ、正確な時刻は置き去った。誰もが手の届かない瞬間の全てを詰め込んだ一方通行の一撃が問答無用に、情け容赦なく、白を切り取る。

驚愕の一点が、天から地、真っ向に天井を貫いた。

再び感じる謎の違和感、それに任せて一方通行が地を舞った。

振り切りざまに地へ沈み、限界ギリギリからたたき上げる。その道中、天井の駆動鎧が後ろへ退いた。回避のためか間合いのためか、はたまた何かの策ゆえか。

逃がすものかと一方通行が追う。

一つ、それだけ下がり、それだけ上がり。両者の狭間は一向に違わない。

動いたと言え、向こう岸の天井だった。

先行、二打目。

極限以上の速度で戦うこの場に置いて、ミスは即ち敗北という意味であり、ならばこそ、どちらもそれを最大まで狙う。

振り落とすギロチンのような、ギリギリまで間合いを縮めた天井の一撃、グォン！ と縦に回った一発を軽くそれるだけで回避する。返しの一撃、顔面を直撃させるべく、右手が引き絞られる。

——速度は既に音の領域、そしてそれが、さらに上へとステップアップする。

両者の攻撃が連打へ変わる。

左へ穿ち。

右へ断つ。

一方通行が動けば天井も既に動いている。

天井が動けば一方通行も既に動いている。

左を撃って、一方通行が右へ、追いつかるように横へ天井がなぎ払う。それを斜めにかざして受け流返す形で足払いを振るう。

しかし天井はびくともせず、先ほどから感じ続けていた違和感も合わさって、一方通行は追撃を止める。変わり、足を少し退いてベクトルによる体の転換を行う。

足を軸に、駒かなにかのように一方通行は天井の横へ回った。

途端、コレは回避が難しい、横へ振りぬくような天井の機動、流石に移動に時間をかけすぎたか、向こうへ一手を渡してしまった。もしここで無理をして逃れようものなら、次の一撃で完全に詰みだ。

つまり、次を狙うならここで受けるほか方法はない。

ベクトルでの回避も、向こうの駆動鎧は難なく追いつがってくる。銃弾以上、果てはただの戦闘機程度では追いつけないかもしれない。そして、

グゴガァッ！！
痛みを伴う衝撃が、一方通行を襲った。

思い切り吹き飛ぶ。

“交差させていた”両手を振りぬいて、勢いのままに後ろへ飛ぶ。暫く吹き飛んでやがて一回転するとそのまま態勢を整え着地した。

「やっぱりなァ」

思わず言葉が漏れる。

天井に抱いていた一つの違和感、その全貌が、多少ながら見えてきた。

——先ほど、一方通行は確りと反射を適応させていた。それなのに天井の一撃は反射を突き破って、一方通行を穿ち取ったのだ。その正体が——少しながら見えた。

「オマエの自身の源……コレなんだろう？　なあ、天井くんよォ」

天井の持つ何がしかの技術。

彼を一步先へ進ませた……化物たる一方通行と、同じ土俵を叩いたのだ。

『大よそ正解……かな?』

「大よそ? ど奥いうことだ」

『ノーヒントだ、答えにたどり着くのを楽しませてもらうさ』

不遜な天井の発言、同時に一方通行が軽く、いらだたしげに地を蹴った。瞬間的に吹き上がる爆風。当然必然、一方通行の能力でもって、寸分違わず天井を射抜く。
けれどもそれは、ただたたずんでいるだけの天井、その駆動鎧を砕くことすら出来ない。

『おっと、なら代わりに“これ”の説明をしてやろうじゃないか』

言って、軽く腕を振るう。

それだけで一方通行が起こした、人一人なら簡単に数十の距離を稼げてしまうそれを中心からかき消した。文字通り、殺すのではなく消す。

上条のそれとは少し違う、何もかもが無かったことになるその感覚を、一方通行は苛立たしげに舌打ちする。

端的に言えば、拒否の証明だ。

『――AIMストッパー』

そして天井がその名を告げる。

AI M ストッパー、能力者が無意識に発する能力拡散力場、通称 AI M へ直接干渉し、能力を阻害させる。駆動鎧に直接搭載されていることからわかるように、通常使用される AI M ジャマーの完全上位互換である。

能力を乱すのではなくこじ開けて停止させるという原理のため AI M ジャマーのように暴走を危惧する心配性はない。

欠点があるとすれば、ストッパー自身が能力者に触れなくてはならないことか。

『まあそれも、こうしてキミのように対外的な壁を持つ能力者とも渡り合えるのだから安いことだ』

「ふん、そんな虫のいい代物、オマエみたいな一介の科学者が得られる技術じゃねェだろオがよ」

『そんな事はないさ』

減らず口のように即答される天井の言葉、一方通行の侮辱にも、なんらこたえた様子はない。あくまで彼は自身を崩さず、淡々と、しかしどこか余裕だけを持った声で。

『いるんだよ、世の中には。二十年三十年先をゆく、学園都市の技術すらも、四十年五十年超えていってしまう、そんな研究者がね』

「馬鹿みてエな話しだな」

『事実さ——そして、真実でもある。そう、全てだよ』

それが、答え。

天井が知る研究者——彼はそれを教えようとしなが——その人

間が、天井にとっての恐らく原点、こうしてここに立つ、一人の男の頂点。

『さて、再開しようか——考えてみるといい、真実は底にある！』

飛び出す。ワンテンポ遅れて一方通行も続いた。

中央で衝撃を交差させる両者、一方通行は左に天井は右に、それぞれ回避行動を取る。その流れる動作の中で、勢いのまま一方通行は左を回りこませた。

グゴンッ！ とボディを叩く一撃。けれどもそれに威力はない。

その間も機体に任せて天井が動く、振り上げるようなアッパーを右から左へ、豪快に薙ぎ切る。途方もない衝撃と威圧を伴ったそれを、一方通行はまるで神か何かのように回避する。

上空へ、軽く体を躍らせて、回避と同時に蹴りを放つ。

勢い任せのベクトルを持たせたそれは、天井の左肩を揺らし、方向を改める。

そこへもう一度、蹴った足とは反対で一回転と共に顔面を打ち鳴らす。

天井はものともせず踏みかかり、一方通行へ思い切り叩きつける。とはいえそれも、回転しながらベクトルをあわせ、後ろへ回る一方通行には当たらない。

数回転、そして着地、体を落とすに落として、着地ざまに振るわれる裏拳を素のままに回避する。

もう一度そこから足払い。ただし今度は全てを吹き飛ばすべく、もはや回し蹴りの威力で放たれた代物だ。流石にそれは不味いと感じたか、天井も距離をとって回避する。

追撃、クラウチングの状態から、一方通行がロケットスタートを

決める。

軽々と、そう軽々と、天井があけた相当な距離を、それだけでつめる。

着地直後、一方通行のように回避前提では動いていない天井の状態は隙だらけだ。当然一方通行は連打をかける。

二度、三度、四度。

幾度か天井を揺らし、しかし五度目のそれを、天井の手で受け止められる。

しまったと思うよりも早く、反対側の天井の手が一方通行をぶちあてた。

「ぐっ……ごお！」

反射をしても通じる痛み。

奥へ残るように響くそれを受け一方通行は後ろへのけぞる。天井はそれ以上一方通行を拘束しても意味がないと判断したのだろう。手を放し、両手で連続の追撃を始める。

左へ振り上げ、右へ振り下ろし、左で回し、最後に蹴り。

一方通行はふらふらと態勢を立て直しながら、さながら酔拳のように体を震わせる。それら一つ一つは確かな回避行動であり、伏せ、反り、下がって、しかしそこまでだった。

今だ態勢が整わない一方通行では回避は不可能。可能である回避方法の一つくらいしかなかった。

大きく一方通行が飛び上がる。直上に一回転、そのまま後ろへ――

その時だった、天井の全身から、銃口が見えたのは。

（な——ま、さか）

少し、そう考えた。

『そのまさかだよ、“考えれば”わかるだろう？ これら全てがAIMストッパーだ。正確にはその媒体だが、効果が同じ以上、わざわざ実戦で区別する必要はあるまい』

（回避は……無理か、空中で方向転換しても、向こうは合わせてくる。少なくとも瞬間的な速度は同じ、それはこの戦闘で見えてることだ）

空間が、遅く感じられた。

天井の声も、一方通行の思考も通常通りのはずなのに、ただ、周りで回る時だけが、延々と遅々とした速度で廻り続けていた。

『キミは今、一体何を考えている？ 次の一手の選択か、それとも何が間違っていたのかと言う反省会か……私の知ったことではないが、結局どちらも無駄な事だ』

天井の声、それは一方通行に半分も届いていない。

届いていても響いていない。彼にとっては何の意味もない言葉だ。

——多少、どこかに残りはするけれど。

（ダメなのか？ 誰かを助ける英雄^{ヒーロー}みたいにな。こんな状況を逆境のまま回避することな^ンぎできね^エのか。何も言わずとも、あいつを

連れて行った、あの幻想殺してみてエな、そんな英雄には、そんな強者にはなれねエのかア……！）

『そうだろう？ キミは考えがひとつ及んでいない、キミ自身が何も出来ないように、それは何もしていないのだから』

（……考える……か。……っ！ ——いやまて、そもそも俺は何を守ろうとしている。何を助けようとしている？ 俺にとって一番大切なのはなんだ、俺が守るべきなのは、一体なんだ）

幾ら周囲が遅く感じられようとも、それが永遠に続くわけではない。

延々と続く一方通行の思考も、物理的な掃射によって、防がれるのだ。

何者も避け得ない砲弾の嵐。

無常な死を告げる黒鉛の弾丸は——果たして違わず、

ドラを叩き割るような、無法の暴音が、地を、空を、一方通行を、たたきつけた。

そして、全てが止む。

第二章 3（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
眠れる獅子、眠ってる人の四肢。特に意味はありません。

補足

・あの人がいてよかった……わりとマジで。

第二章 4

4

あたりは一瞬の時が死んでいた。

風もなく、音もなく、声もなく人もなく言葉もなく。

かといってそれが廃墟のような情景であるかといえそうですが、人々が暮らす動脈と動脈、せわしなく働き続ける混沌の中で、少しの瞬刻に見える、そういった静脈だった。

故に、そこには人がいる。

まばらにめくれあがった弾痕をはじめ、辺りはまるで謀ったかのように点々と、規則正しく地が割れ裂け、コンクリートの奥をのぞかせている。

その中でも無傷で残るのは自動販売機と、人間のような、不可思議な白のボディ、――

「ハッ――ハハッ――ハハハハッ――ハハハハハハハハッ
ッ！――」

平和ではないが、しかし可笑しなだけの風景に、一つ切り貼りされたメタリック。スマートな体型を持つ駆動鎧パワードスーツが主、天井亜雄。

彼は平常では考えられないほど、痛快に笑っていた。

最強である第一位“アクセラレータ一方通行”、化物のような力を持つ規格外の能力者、その彼に対する勝利からくる愉悦……ではない。

その彼が、極々単純な、こんな策に嵌り、敗れ去ったことによる侮辱――でもない。

——目前にあるのは、まるでそれが当然だと言う、蒼白の稲光。

一方通行の肩から突然出現した二本の電撃が、腕の形を取り、弾丸を吸い寄せる形で防いだことによる、嬉々とした笑みだ。

そも、目の前にある危機を放置して反省を、後悔を行うのは彼らしくない。ずっとずっと、自分の未熟を後悔し、しかし諦めきれず、捨て切れなかったそれを、やっとの事で抱え込む決心をした彼が、眼前に広がる死を伴った危険に、諦めという選択をすることはほばありえない。

天井自身わかっていたことだ。そのわけまでは、彼は理解していたわけではないし、そもそも理解しようとも思わなかったのだが——つまり、一方通行にとって危機は既に危機でなかったのだ。

両者、既に合点が言っている。

一方通行自身は仕掛け人であり答えはそもそも彼のものだ。対して天井も、天才たる研究者として、そして目の前でそれを見届けた張本人として、答えに至っている。

「そうか！　そうしてきたか！　一方通行ア！」

ミサカネットワークに接続したことによる付属品。

能力関係の妨害を防ぐ事、能力機関が使用不能になった際の保険。そしてそこから派生した、奇妙なおまけ——そう、マルチスキル多才能力だ。

彼はコレを自身の生体電気と、概念的に接続することにより、この電磁アームの作用する場所であれば能力の行使、ベクトル操作が

可能になった。

同時に、第三位である超電磁砲が可能な行動は、ほぼ全て可能になった。

流石に、砂鉄の剣を使うよりは、普通にアームを振り回したほうが効率がいいし、超電磁砲にいたってはまったく行使することが出来ないが。

「いいじゃないか、一方通行、答えが出たのだろう、それは」

天井が言う。その言葉で指し示すのは一方通行の表情、先ほどまではまったく違う、余裕ゆえの強者の笑み。そこから来る圧倒的な決意。

そして少量の自信。

「ああ、流石にここまでくりゃアわからねエってのが馬鹿なんだよなア」

「それはキミが馬鹿だというのを認めたということか」

「うるせエぞ痴呆。――そもそも、俺が助けたかったのは、守りたかったのは一つだけなんだよなア」

大きく伸びだ電磁の二の腕、それを軽く払って少しずつ歩み寄る。一步、一步。戦場へ向かう遅々とした歩み、けれどもそれを甘いは静止しようともしない。答えを待っているのか、この程度では開戦ですらないのか。

果たしてそれは、後者であることが当然だろう。

「打ち止めだろオが、なんでもねエ他人だろオが——そんな事は関係ねェんだよ、俺が守りてエのは、たった一人しかないんだよ」

布束砥信、どこでもないどこかへ、一方通行の知らないいつぞの場所へと消えた少女。それが一方通行にとって、共に隣にいていい人間であり、ただ一人の、恋をした少女なのだ。

「そうか——では、諦めるなら、早いほうがいいだろう」

「ハッ、こっちはもオ、数年モノなんだよオ！」

今更腐りきった一方通行の性根が、ただ一度天井との激突でおられるわけがない、少なくとも一方通行自身そう確信しているし、今の一方通行は間違いなく強い。

あらゆる意味で確実な超能力者の第一位、たとえば風斬氷華だろうと、最強と化した一方通行にはかなわない。

そういう意味でも、精神という意味でも、一方通行は今、強い。

——ずっと遠くから、ずっと昔から、交差し続けなかった一方通行と天井が、当然のように、交差する。一方通行が迫り天井が応える。

一方通行から伸びる電磁アームが、一気に両者の先手を打つ。

まるですべてをとらえるように、双方の腕が、天井の機体をとらえるべく交錯する。

一瞬のこと、全身を行う天井が停止した。

電磁スレスレ、目先を敗北に据えたまま——腕かいなが通り過ぎて、消えていく。

両物の腕は物理的に透りすぎ、離れていく。両双が両双を貫き、そのまま伸びていく。やがて根元にまでそれが達すると、はじけて消えた。

あたりに静電気のように這い寄って消えていく。

それが前哨、接近前の単純な空間。

そうして両者は接近する。

左を、突き出して右で帰されて、軽く飛んで両端でけりこんで、二つめで一気に襲い掛かる敵の強襲をまいて、飛び上がる。――一方通行。

地を砕く勢いで踏み込んで、それを追いつがる。裏拳の様に、自身のリーチで持ってひたすらに振りぬく。一気に接近して、さらにもう一度。――天井。

左右から。

上下から。

前後から。

両者の一撃が一気に舞う。

一方通行が不意打ち気味に電磁アームを振るえば。

天井が強引にそれを振り切れば。

一方通行は同じように踏み込んで、

天井は振り切りながら振りかぶった白銀の鉄球を振り下ろし、一方通行を穿つ。

天井を狙う。

ドガガァッ！！ と、両者の拳が両者に突き刺さった。

ここにいない存在が演算する能力は、流石にA I Mストッパーでも効果が薄いようで、天井のボディは叩かれた部分がごっそりへこみ、一方通行も体をそらす程度で終わっている。

元々このために行ったミサカネットワークへの接続だ、むしろ全て防いでしかるべきだ。

となると驚愕すべきはやはりそれを突破するこの装置――A I Mストッパーにあると言える。A I Mジャマーの完全上位互換、間違いではない。

ピクリと、動かなかった風が動く。

両者は奏して再起動した。

何度も何度も、繰り返し繰り返し、拳と拳、ぶつけ合う。

もう、回避をするような状況ではなかった。回避不可能からの泥沼な殴り合い。――それが壮絶に見えるのはやはり速度ゆえか。

一人の胴体を確実に吹き飛ばす速度と威力で両者は確実に叩き合う。

痛みを無視し、交互に連打を叩き込む。

上、右、下、右、左、上、下、左、右、左、右、上、下、右、上、左、下、右上下左右下上下左右――――ツツツツ！

迫って迫って迫って迫って迫って――叩きつける。

痛み、衝撃、鈍痛、震撼、激痛、激震！

「オ——」

「ア……」

死の目前まで、両者は殴りあう。

もはや完全な気合の勝負、速度と威力と、何より気力。このどれか一つでも取り落とせば勝利はない、後に残るのは一方通行か、天井——少なくとも、立ち上がるのは一人だけだ。

「オオオ——ッ」

「アアア……ッ」

終わりは近い。

単純なこと、もう既にゴールにはたどり着いているのだ。後はどちらがそれを先に自覚するか、どちらが先にそれをもぎ取るか。倒れなかったものの勝ち——当然だ。

「オオオオオオオ——ッ！」

「アアアアアアア……ッ！」

そうして、最後。

何だか全ての時間が遅く感じられる。空気も風も空も地面も、あらゆるそれが、ありありと自覚する。何より、天井も、一方通行も、それを確かと実感していた。

本当ならば、音速以上の戦いを繰り広げているはずだと言うのに。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——ッッッ
！！！！」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア……ッッ
！」

激突。

「——ッッッッ！」

「……ッッッッ！」

既に、唸るような声は、既に音にすらなっていなかった。

グガン——いやに響く衝突音、そして終局。

戦い——殺し合い、決意し、破壊し、そうして立っていたのは。

その時だった。

今までずっと——誰もが訪れることのなかった戦場に、乱入者が
現れる。

「何を、しているんですか？ 一方通行さん」

戦闘の終了を告げるようにそれは、風斬氷華だった。

第二章 4（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろおまちしています。

外道一方通行。何かヒーローっぽいことしそうでしたが、結局この道へー。

補足

・今回の一方通行が出したアームの形状の凄くわかりやすい例えはむぎのんアーム。

行間 4

それから、気絶していた天井を戻ってきた打ち止めと上条、ちょうどそこにいた風斬とワンコ、合計五人で知り合いであるカエル顔の医者へ送りつけた。

その際、大体の概要を説明する。

余り話すようなことではないが全ての概要を知っている打ち止めが既にいる。そこから確実に漏れてしまうのだから、自分が手っ取り早く説明してしまったほうがいい。

砥信を取り戻すために、知り合いの研究者（と言うよりも、恩師、と言うほうが正しいのだが）と共に捜索を行ったこと。

結果、やはり一方通行ですら届かない場所に砥信はいるのだという結論に至る。

そうして次に一方通行が考えたのは能力の補強だった。

これから先、一方通行が相手取るのは学園都市の最深部の最深部、もはや闇ですらない、どろどろと詰め込まれた真っ黒の泥といった場所へ踏み込もうとしている。

そう考えたとき、一方通行は自身の立場すらも崩壊させる“敵”を想定しなくてはならない。

だからこそその保険——ミサカネットワークを使った演算装置の予備。

そのために打ち止めを回収すべく向かった研究所——そこから先は……思いのほかあっさりとしたものだった。結局それは一方通行自身の内面にたいする事柄だからだろう。

——直ぐに話題は天井本人へと移っていった。

地獄の戦場、絶対能力進化実験に関わった研究者で、大よそ全ての妹達は彼のプロデュースによる作品であり、打ち止めの調整をも彼は担当していた。

名実共に実験の責任者であり、実験の失敗で最も打撃を受ける人間——のはずだった。

「あいつはどうも実験自体が戯れ、もしくは予定調和だと思ってる節がある、わざわざ俺に対するジョーカーで殲滅を仕掛けてきたのもその一環なんだろうな」

何せ、わざわざ一方通行を導いているかのように言葉をかけたのだ。目の前に居るのは絶対の死を持つてたたえる第一位、ベクトル操作の一方通行であるからだ。……とは言葉にすることはないのだけれど。

一方通行は、そうやって説明を終えた。

それから天井を病院のベッドに放り込んで、外に出る。
その時、声をかけられた——気がした。

気のせいかな、それとも現実か。

——良かったのか。……と。

単純な話し、それだけだった。

だから極自然と、言葉は出た。

「知ったことじゃねエンだよ、ここをどこだと思ってやがる。——俺を誰だとおもってやがんだ」

答えた言葉を鼻で笑われたのは、果たしてこれも幻聴だったのだろうか。

「……で？ 全員集合？」

「私まで集合しちゃうんだよ？」

——これはそこに偶然合流した美琴とインデックスだ。なんでも妹達の件から少し交流はあったが、その時に携帯の番号を交換しており、今回は上条が出かけていたため昼食を美琴に頼ったらしい。因みにその美琴、そして風斬とワンコに確り上条は怒られていた。

まあ実際、上条はご飯を作らずにインデックスを放置して、自分は一人外をぶらぶらしていたのだ。もし美琴のように知り合いがいなければ数時間放置の後かじられるパターンだっただろう。

それを回避してくれた点は非常にありがたかったし、一方通行が襲われて、打ち止めを預かっていたため戻るに戻れなかったと言うのはあるが、それでもインデックスに連絡の一つも入れなかったのだ。

なんにせよ、暴力からの『不幸だー』コンボでなかったのはいいことだろう。お互いに。

そしてその後、一方通行ほかから纏めて説明を受けた二人の言葉が、コレだった。

確かに妹達の件を知っている——少なくとも概要以上の事を——人間が大よそそろっていると言っているだろう。インデックスは上条が無茶をして殺されかけた程度の事は聞いている。

というか、説明事態はしたがよく理解できていない様子だった。

ここにいないのは絹旗だけだが――美琴が先ほどあって話をしたらしい、顔を合わせてこそいないものの近くにはいるという事だろう。

因みに、なんと美琴と絹旗は知り合いらしい、何でも風紀委員の知り合いであるとする人物の同僚とであったときについてきたらしい。

なんとも不思議な縁だが、彼女も上条と同じく変な縁に好かれるらしい、両者の違いは静か動か、程度だろう。

「とはいえさあ、ナニカするって訳でもないわよね、この面子で」

「正直メンバーが混沌としてますからね……ゲームセンターにでも行きますか？」

どうしたものかと頭を抱える美琴に答えるワンコ。三つめにつながるのは美琴でもワンコでもなく、インデックスではあったが。

「げーむせんたー？」

小首をかしげ、問いかける。

「未経験者か……でもそこしかないわよね」

「えっと……皆で遊んで楽しむ場所、かな？」

美琴は腕を組んで考えをめぐらせる。質問に答えたのは風斬だ。

「なんにしてもさ、行くなら早く行こうぜ？」

「ミサカはUFOキャッチャー！　ってミサカはミサカは希望を宣言してみたり！」

「よく解らないけどがんばるんだよ、ってインデックスは……あれ？」

特に何も考えていない組が声を上げる。

「……あんたも少しは考えなさいよ」

「いやいや美琴さん、ぶっちゃけ上条さんは肉体労働派な訳ですよ、どちらかと言うと帰りに荷物持ちをする係な訳ですよ……つか、別に考える必要はないか？　この面子でいけるところなんて、そこしかないだろ」

「……まあ、ねえ」

頷くように美琴が打ち止め、インデックスの順に視線を這わせていく。

そして最後、この会話に入ってから一切答えを寄越していない一方通行へ、当然ながら目が向く。

興味なさ下にグループの最後、殿を務めつつ、彼はその視線を叩き落す。

「ンだよ」

「いーえ、べっつにい」

美琴はあからさまにやれやれといった様子で語尾を延ばす。
いやみったらしいと言うか、馬鹿にしているといった感じ。

「ただ学園都市第一位は絶対能力者になるような実験で毎日いそがしいのかなあと」

死者が出ていないからあれだが、大分きつい嫌味である。

なんだかんだでうらんでいるだろう、自制して捨て置けるレベルなのだろうけど。

「はン、一応こちらら知り合いに付き合わされてた頃の名残である程度の娯楽はできンだよオ」

「へーえそう？　じゃあ私と勝負する？　日ごろの恨み、軽く晴らさないで置くべきかつ！」

「日ごろ感じるような恨みを持つほど俺とオマエは見知ってねエぞ」

「ふっふーん、この美琴サマはね、普段嫌なことがあると、基本あんなのせいにしてんのよ」

「ンだよそれ……それを俺に言うのは完全な嫌がらせじゃねエか」

「……ありがとね、妹達の事、守ってくれたんでしょ？」

「ちよっ、オマ……」

あわてたような一方通行の反応に満足したのか、美琴は笑いながら駆け出す。

実の所、この二人以外は既に移動を始めていたのだ。

少し……といっても十歩も離れてはいないが、おおよそそれほど距離を開けた彼等に追いつくべく、美琴は勢いよく飛び出したのだ。

やれやれといった様子で一方通行がそれを追いかける。
走ってはいない、自分の速度で。

——彼等と一方通行の居場所はずいぶん遠い。

けれど、少しでも歩み寄れば、簡単に手が届く、そんな場所を、一方通行は何となく気に入っていた。

行間 4 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。

というわけで実質エピソードですが、このまま部を変え第八巻分へと進みます。

とりあえず更新忘れてたぜー！ というわけで

補足

・一方通行さんに違和感を感じたら多分それは正しいです。

第一章『叫ぶ』 I | only | one | lonely

1

季節は茹だる様に人々を襲っていた夏から、気色が季節を色濃く移す、秋のそれへと姿を変えようとしていた。

まだ残暑がいくらか残っているものの、おおよそ真夏から初秋へ。少しづつ、少しだけ、少しから、衣を切り替えようと、していた。

上条たちもそれは変わらない。

よく解らない組織の魔術師に襲われたり、休み明けに襲来した魔術師を撃退したり、逃げていたシスターさんを助けたり、いろいろと、事変があった。

上条がそれに関われば、当然ながら風斬もついて行き、時にはそこにインデックスや何かが加わったりもしていた。

ただ、そのどれもにいえるのは、上条当麻と風斬氷華は共に、無茶をして、無理をして、道理を筋書き通りに引っ込めて、怪我をして、互いを心配させて帰ってくる。

全ては、誰か——手を伸ばしたい誰かの為に。

学園都市はもう直ぐ、大覇星祭を迎えようとしている。

ことここにおいて、恐らく最も大きなイベント、学園都市内部も公開され能力者たちのド派手な能力合戦が、この時のみ全面解禁される。

それによって浮き足立つ生徒たち。

——少しづつ、世界が動き出す。

誰とも言えず、誰がために。

――事件が起きたのは学生が既に帰路へ突き始めた放課後の時間。
――多少ではあるが空が白みを帯び、やがてゆつくりと淡い朱を
抱き始めた頃。

――最初にそれを発見したのは初春飾利だった。
――とある学区で謎のトランクケースが強奪された。
――それは白井黒子に知らされ、彼女主導で回収へと至ることにな
った。

――そこで、彼女は一人の空間転移能力者と出会うことになる。
テレポーター

――名を結標淡希、座標転移ムーブポイントの能力者である。

――白井は彼女に惨敗した、折角手に入れたケースを、何も出来
ずに奪われたのである。

――この時、白井黒子はある違和感を感じた。

――既視感と言いつ換えることも可能だろう。

――座標転移の名に、聞き覚えがあったのだ。

――はて、一体どこだっただろうか。

――そう考えたときに、なぜか親愛なるお姉さま、御坂美琴の顔
が浮かんだ。

――その後、自室に戻り怪我の応急処置を行う白井。

――丁度その時になって、美琴が寮の自室へ帰ってきた。

――会話し、そこで美琴が何かを隠していると悟った白井。

――帰ってきたのは忘れ物を取りに来たからだ、再び外に繰り
出す美琴。

――追いかけるように、処置を終えた白井も外へと躍り出た。

——これが、レムナント残骸争奪戦、その冒頭部分の、概略である。

——

御坂美琴は焦っていた。

主に原因は二つ。

先ほど自室で会話をしてきた白井黒子の事、もう一つは今まさに現在進行形で追いかけている残骸……つい少し前に空中で爆散したツリダイアグラム樹形図の設計者の使用可能な破片。

白井黒子は怪我をしていた。それに向こうもこちらとの会話で何かを悟った様子、どう考えても自分と関係があるだろう。とすれば間違いなく、白井はこの事件に関わっている。

もしやすれば、いま自分が追っている空間転移能力者——の結標淡希とも既に接触しているかもしれない。

それは不味い。

もし白井が彼女に出会い、なおかつ追おうとしているのであれば、それは非常に不味い。何せ“白井では結標淡希に絶対に勝てない壁がある”のだ。

下手に戦おうと思えば、軽くあしらわれ、最悪死んでしまうこともある。

（私ならともかく——あの子ならともかく——あいつならともかくッ！）

白井はダメだ。

そもそも言われている。この戦い、自分が参加することすら無茶なのだ、この追いかけっこに参加している鬼は三人、御坂美琴と、

そして樹形図の設計者の再生を良しとしない物。

樹形図の設計者。

かつて学園都市上空に浮かんでいた人工衛星。いわば学園都市の科学の結晶。最大技術にして最高傑作、この人工衛星は、あらゆる計算が可能だ。

たとえばそれは明日の天気予報であったり、たとえばそれは学園都市に住むただの学生、上条当麻の夕食の献立予測であったり。――一方通行が絶対能力者なるための方法であったり。

そう、絶対能力進化計画は樹形図の設計者の故障により、あの敗北以降、計算のしなおしが出来ないから中止に陥っているのだ。

本来は計画を中心になって推し進めていた科学者が、失踪したことによる計画の失敗なのだが、少なくとも学園都市上層部は、計画の中止をそう認識している。

だから、もし樹形図の設計者が使用可能となれば、彼らは実験を再開しかねない。

それだけは避けなければならないだろう。

すでにワンコはともかくとして、他の個性を最低限しか植えつけられなかった妹達も少しずつ個性を持ち始めている。それなのに、もし実験が再開すれば、――二万もの人間が、望まぬ死を迎えることになる。

既にもう、妹達は誰かの為に、一人として死んでやることは出来ないのだ。

（絶対……そう、絶対によ、あの子たちは生きてるんだから）

だからこうして美琴達は破壊を目的に、残骸争奪戦へと乗り出し

ているのだ。

この争奪戦に参加している美琴陣営は三人。

御坂美琴本人と、御坂1号、そして――ワンコ一方通行だ。アクセラレータ

（当然、だったあの子は友達だもの、友達を守ることに、私はためらいなんて出来ない――！）

御坂本人は当然の事。既に周知の事実といったところ。

ワンコも又ありえなくはないだろう、今現在調整を終え、自由に動き回ることの出来る唯一の妹達、戦闘能力は申し分ない、何せその知識ゆえか、何の実戦経験もない美琴と五分五分で戦えるそうだし。そして意外なのが一方通行。実際の所彼は最初それを断った、今はそれどころではないと、なにやら誰か、助けたい人のタメにがんばっているらしい。

けれど、唐突に、なんと言うか“タイミングを見計らったように掛かってきた”電話にでて、暫く怒鳴りあったところ、電話を切つて、やるといった。

急にやる気が出たらしい。

これで、三人。

本来なら絶対能力進化計画の、止める側における主役、上条当麻と風斬氷華、このコンビも参戦願ったのだが、これ以上の迷惑はかけたくないという事で、この三人と相成った。

……なんだかもしばれたら怒られそうだし。

何せ自分たちが相手をするのは、一方通行ですら苦戦を強いられる相手。

そう――

白井黒子は夜の街を転移する中、あることを思い出していた。

「……初春、ちょっと探してほしい情報がありますの」

原因はこの事件の冒頭に置いて感じたある違和感。

結標淡希のことだ。——彼女の顔を、白井はどこかで見たことがある。それも、御坂美琴を同時に思い出す状況で。

『一体なんなんですか？ もう決戦ダー、って所のはずですから、今更ほしい情報なんて……』

「物語のクライマックスにおける怒涛の伏線回収ですの、少し気になることがありますわ」

言って、白井はある単語を告げる。

それは——超能力者、レベル5、全八人の名簿だった。

『そんなものですか？ だったら御坂さんを……ああ、だめでしたっけ』

「今すぐお願いしますの、どうしても、どうしても気になることがありますの」

『解りました、直ぐに出ると思いますから待っててくださいね』

言って、携帯越し、パソコンのキーボードを叩く音が聞こえる。

それ以外が聞こえないのは、初春がヘッドホンか何かを使用して
いるからだろうか。

『出ましたよ、どこから読み上げます？』

「一位から、念のため」

『解りました、行きますよ——』

第一位、一方通行、本名不詳、通称一方通行。

第二位、ダークマター未元物質、かきねていどく垣根帝督。

第三位、超電磁砲、御坂美琴。

第四位、……座標転移、……結標淡希。

第五位、原子崩し、麦野沈利。

「矢張り……」

『どうしました？ 白井さん、御坂さんとの妄想ライフは全部終わ
ったベットのの上でお願いします』

「死ぬわけには行きませんわ……相手はとんでもない奴らしいです
わね」

『ああそうそう、こんな情報もありましたよ？』

覚悟を決める白井に、状況をわかっていない初春はなんでもないように告げる。

『第四位、座標転移は超能力者の中で唯一、第一位、一方通行を地に着けることが出来るだろう』

って。

第一章『叫ぶこと I | o n l y | o n e | l o n e l y』（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

一気にスキップ！

補足

- ・第六位は原作に出てきても多分居ないことになります。

第一章 2

2

一方通行は夜を駆け抜けていた。

自足は音速へと一息で抜き去って、あたりを走り回る。時速数百メートル、人間以上の速度を、能力者として算出していた。

上空から、一定を描くように動き回っている。

訳は言うまでも無くこの周辺に結標淡希がいるであろうから。

……この辺りで風紀委員と激突したことはわかっている。その時は極単純に勝利し逃げおおせたようだが、それでもわかる、そこから一キロ以上先には出ていない。

何せそこには結標淡希のデータ上、一息でわたりきれないむき出しの空間が囲まれているのだから。

それに関しては向こうも不運といえるだろう。

風紀委員が動いたためどうしたって回収を急がなくてはならなくなっただけからだ。

流石に、能力者や対能力者のスペシャリストたる警備員の大群相手に一人で立ち回るのは無理がある。

淡希の場合一度に動かせる分の足止め道具を超えて襲い掛かれれば、アウトだ。

それこそ彼女は最強ではないのだから。

『磁気にヒットはなし、あなたはそのままフライトを続けて、つてミサカはミサカは定時報告！』

そんな折、脳内に直接響くのは脳から接続された先であるところのミサカネットワーク司令塔、打ち止めである。空中移動など言う芸当は流石に一方通行でないと不可能なので現在は地上で留守番中である。

確か今は一方通行が自宅としている場所でワンコと一方通行、二人同時に指令をだしている。

今回、この残骸をかぎつけたのはおおそ彼女の功績である。ミサカネットワークを使用して学園都市の情報を盗み見ていたところコレを見つけたらしい。

発見が早かったのはプラスだっただろう。

何せ遅すぎれば一方通行の説得に時間をかけられず、失敗していた可能性も十二分にあるのだから。

「そオかい。こっちなンも見つからねェよ」

『それでも注意はしていて、ミサカ達の公算では、あなたが一番最初に結標淡希を見つけるはずなんだからって、ミサカはミサカは最大限の忠告を試してみる』

「そこまでマジになるモンかねェ」

今回、一方通行はこの騒動を教師から出された宿題のように考えている。実際その通りともいえるのだけれど、ともかく、現在一方通行には一種の油断がある。

『それは必ず命取りになるから、今すぐ取り除いておくべきものだよ、ってミサカはミサカは忠告を続ける』

「へいへい」

『……バリを取るにはやっぱりペンチが必要かな、ってミサカはミサカはとっても大きい独り言』

「最強はなァ、油断してよォが慢心してよォが最強なンだよ、そんなでもって俺は、暫くの間、最強が前提でなくちゃァならねェんだ」

『ひゅーひゅー妬けちゃうね、ってミサカはミサカは棒読みー』

信頼のかけらも見当たらない会話。

けれども距離感は悪くない、気の置けない悪友か、もしくは犬猿の仲である万年ライバルか、どちらにせよ好い距離感、好い心地よさだ。

「……感謝はしとくぞ？」

ぼそりと、一言。

手を煩わされず、それでいてサポート万全、多少なりとも心を休める場所としても、最高。一方通行にとって打ち止めは間違いない最高のパートナーだろう。

『……どうしたの？　ってミサカはミサカは疑問符を提示してみる』

「なんでもねェよ……見つけたぞ」

言いつつ、視界に入っただのはかの結標淡希。

ごまかすには丁度いいと、一方通行は当然のように声をかける。

『一応ワンコをそっちに向かわせるよ、それじゃあ言ってるっしい、ってミサカはミサカはこっさり笑みながら言ってみる』

「おい、そりゃどオいう意味だ！」

『ふふふふふ』

コチラの真意を汲み取っているのかいないのか、そんな打ち止めの声をバックに、一方通行は降下を始める。ミサカネットワークは通信を切斷。

——ここからは、戦場だ。

——

結標淡希の持つトランクケース。

そこへ向け、一方通行は激突した。

方法は至極簡単。空中への浮遊へ向けていたベクトルを全て地上へ向け、狙いをつけると急加速を行ったのだ。上空、それも数百という単位ではない場所からの不意打ち。

うまくいけばコレで全部終わっても良かった。

けれど、

「あら——」

回避された。

地面に激突し、大きくクレーターを建造した一方通行。それを出迎える淡希の声。

「いらっしゃい、第一位」

まるで最初からそこが自分のフィールドであるかのように、まさしくその声はお迎えといった様子。――館の女主人は、子羊を刈り取る悪魔のように。

「残念ながら、あなたの梓はないのよ、出来ればご退場願える？」

「あいにくだなァ、物語はこれで終いなンだよ、オマエがどれだけ強がろうと、目の前にいるのは最強なンだよ」

「あらそう、貴方はジョーカー、……うらやましい立場ね」

長い赤毛を後ろに二つに結んで、冬服のミニスカートに金属製のベルトを付け、桃色の布で胸を隠しただけの上半身にブレザーを引っかけている。

結標淡希はその格好で、トランクケースに腰掛けていた。

あたりはだだっ広い工事の現場、あたりに散らばった鉄骨は今日放置されたばかりのようで、無作為に何の意味も介すこと無く置かれている。

まだ工事に入ったばかりのそこは開けた空間にいくつかの塔、不恰好な全容を、さらけ出してすらいないようだ。

そこに君臨する女王の如く、というのだから淡希も大分対外だろう。

一方通行に、結標淡希、どちらも当然のように、油断と慢心と余裕を繰り返している。

「ジョーカーなンざくれてやる、俺に必要なのはキングだ。ジョー

カーすらもぶっ潰して、全てを犠牲にしても、一番に立てるキングこそが、俺に必要な居場所なんだよ」

「――強者は、強者である以上、自覚しているにしろしていないにしろ、なにがしかの闇を抱えている。だってただ強いだけの人間なんていないもの、光だけの英雄だって、泥臭く立ち上がって、何度だって挫折するのが定石よ」

「そオだろうな」

上条当麻を、まず一方通行は思い浮かべた。

彼は強者だ、それも光だけの、けれど挫折が無かったはずがないだろう、敗北が無いなどありえない。なればこそ、彼は自身の闇を理解しているはずだ。

「だからね、結局は一匹狼なのよ、孤独ってこと……どれだけ強がろうと、頂点に立とうとすれば、周りには敵しかありえない。もう少し下の段階であれば、味方もいてよかったのでしょうけど」

「そんなもの、誰かが決めるってわけじゃねエだろ、山が一つなわけがねエ、隣の山にだって、味方はいるはずなんだよ」

「いないわ、いるわけが無い。解らない？ 私達はどこまで言っても一人でしかないの」

勝手に決め付けるんじゃない。
叫びそうになった。

けれど、

「そオだろうな、オマエみたいな奴は孤独でないと耐えられない……御山の大将気取ってんなら、そうでないとなア！」

「気取るつもりは無い。けど強がっている自覚ならあるわ、だって強いんだもの」

なるほど。

これが、結標淡希のパーソナリティだ。

自身は強く、そして孤独である。

残骸をこうして奪取し、何に使うとしているのかと思えば——
一つしかない。解りきった事だ。だから一方通行は、それを聞いて。

「ッハ」

一笑に伏した。

至極くだらないことであるように。

「何が可笑しいの？」

眉間に皺を、淡希が寄せる。

不可解であると言うように、しかしそれ以上の感情は見せず、ただポツリと、疑問で言葉を表した。

「くっだらねエ。そんなもの餓鬼のままごとじゃねエンだぞ、遊ぶなら一人でやりやがれ」

「……それで？」

促すように、淡希の声が響く。

「馬鹿はオマエだ、つってンだよ、子供の駄々は聞き飽きた——俺アそれで十分なんだよ」

「ッハ」

それを、淡希は何のためらいも無く、一方通行とまったく同じ動作で返して見せた。

「そんな小さい物差ししか貴方は持っていなかったのね」

程度が知れると、淡希は笑う。

「その程度の事、私が認識していないとでも？ 私ほもっと下から全部を見ているの」

「だからどォした」

「最強、あなたこそハリボテの一匹狼よ。……器じゃないわね、貴方なんて」

可笑しく、冒しそうに結標淡希は嘲笑する。ひたすら、響く声でもって全体へ。

「――過去語りは嫌いじゃないわ、でも、貴方との会話は凄く不快ね、幼稚な人は嫌いな」

「わざわざオマエと話しをするためにきた訳じゃねェんだ。さっさと終わらせてやる」

返し、その瞬間だった。

むき出しにされたぼろぼろのコンクリート。

小さな破片が空中へと浮き上がる。――原理は単純、電磁アームの応用だ。本場、御坂美琴であればもうすこし大きなものを、遠くの距離から操れるだろう。

「さっさと自分の穴倉へ、引き返しやがれ！」

数十にも当たる無数の破片が、高速で飛び出す。

速度は銃弾に勝るとも劣らず――拮抗できる速度であった。

当たれば一撃で当たった箇所が吹き飛ぶ威力、とはいえ牽制のためだ、当たるとは思っていないしあてるつもりもない。

恐らく彼女は転移で回避してくるであろう。それを予測した上で、その転移先を見極める。

そこで結標淡希のクセを見抜ければ、といったところ。

しかし、

後方で音がした。

何かが何かに激突する音。それは――そう。

「なっ」

振り返る。

地面に着弾したであろう銃痕。その中心は間違いなく先ほどの小石だ。

つまり、それは――

（あれを転移させたっつーのか？）

音速で飛ぶ速度を、まさかこの能力者は……

「ありえないなんて、そんな事いうわけないわよね？」

声、先ほどと変わらぬ位置に、淡希が腰掛けていた。

――彼女は、何もしていない、何も動いてはいない――ッ！

「単純な話じゃない、攻撃が来る座標を、あらかじめ転移させ続けていただけよ？」

帰ってくるに決まってるじゃない。

笑って、いった。

「それでこれは――プレゼント」

言葉。

瞬間、一方通行に深々と、一本のナイフが突き刺さる。

驚愕した。

痛みよりも先に、驚愕が来た。

直ぐ後に、痛みもまた訪れる。認識すればとうぜんだ。

「が、アアアあああああああああああ！」

大きくのけぞって、最大限に自己を発している痛覚に意識が囚われる。

「傷を負ったことが無い最強は、やっぱり痛みに弱いのでした——
ってね」

二本目。

三本目。

それぞれ肩、足、そして最初に突き刺さったわき腹と、じらすように突き刺さる。

「ごっがアアアアアアあああああああッ！」

激痛。

痛みを耐える、叫び。

「殺すつもりはないわ、けど、チェックメイトよ」

言う淡希。

その間にも、一方通行は何とか意識を冷静に持っていく。
衝撃から——平静へ。

ナイフを抜き去り、自身の能力で止血する。

本業ではないが、こういったこともほぼ可能だ

けれど。

一方通行は、なすすべも無く倒れこむ。

「……どうしたの？　もしかして、効きが悪い？」

淡希の声。

解ったように一方通行を挑発する。

「ぐ……ア、オ……マエ……！」

「ああ、じゃあ先に説明しておこうかしら。それは能力鎮静剤よ？　暴走した能力者に投与する時間稼ぎの薬。この場合はそれで十分だけど、貴方は暫く低能力者くらいの力しか使えないでしょうね」

ペラペラと説明する淡希。原因については自明の理であろうからか、省略された。

「ついでだし、能力突破の原理も教えて上げましょうか」

まるで勝ちを目前とした強者のように、実際その通りに結標淡希は口を開く。

「簡単な話し、貴方は自分の能力で自爆したの、私達空間転移能力者の能力は十二次元上のベクトルを行使するわ、だから普通にやっても貴方の能力で反射する」

だけど、淡希であればその前提をひっくり返せる。

「文字通り、ひっくり返すの、貴方の能力でベクトルが反転した物体をそのまま、ね」

まさか、そうそのまさか。

「自分のベクトルを反射する設定になんて、貴方はしていないでしょう？　だから、私が何も手を加えずそのまま反転したベクトルを、貴方は受け入れてしまったの」

単純でしょう？　にこりと笑ってそういう。

単純……？　そんなわけが無い。

結標淡希の行ったことは本当に相当な無茶だ。

一つでも計算を間違えれば能力は自分に帰ってくる。

たとえば、転移を行うにしても、確実に座標を握っていなければならぬし、それが間違っているはず失敗する。

たとえば、反転を行うにしても、空間移動の速度は超高速で、タイムリングを確実に知っていなければこんな方法行おうとも思えない。

——間違いない。座標転移、結標淡希は、一方通行と同等、もしくはそれ以上の演算能力を持ち合わせている。

そうなるように、彼女が演算能力を、磨いている。

「さようなら第一位、精々そこでくたばらないよう願うのね」

息も絶え絶えといった様子の一方通行に声をかける。

能力は既に何の意味も介さず、自分自身も動くことすら間々ならない、コレが敗北でなくて何が一体敗北だろう。一方通行は負けたのだ。

完膚なきまでに、完敗である。

淡希はそう判断してその場を去ろうと身を翻した。

そう、“した”。

「おい、待てよ」

その声を、聞くまでは。

振り返る。

そこには、

蘇り続ける悪鬼羅刹の如く、体中を血に染めた一方通行が、立っていた。

「え……なん、で」

ココに来て、余裕のみを保っていた淡希の表情が驚愕にゆがむ。

当然だ。一方通行は既に終わっている。能力を取り戻すまでには間違いなく一日以上がかかる。だから——だからこんなこと、あり

えない。

はず、なのに。

「チェックメイトなンぞ、そのままそっくり返してやる——オマエは、最強に一步、たりてねエンだよォ！」

急接近。

従来一方通行が使う能力そのままに、淡希へと一方通行が迫る。

このままでは回避が間に合わない。

すぐさま転移し、淡希はその場を離れる。当然だ、このままでは餌食になる。あいつは——最強ではない、化物だ！

「くっ」

逃げた、はずだ。

だと言うのに、既に一方通行は目の前に居る。

ワンテンポだけ遅れて、回し蹴りを放っている。

回避は間に合う。けれど、もう、無理だ。

転移後、上空で、しかし淡希は囚われた。

一つ遅れているはずのテンポは、恐らく転移先の予測と、回し蹴り最中からの移動で補ったのだろう。一方通行は、確りと淡希の左足をつかんでいる。

「なっ、間にあわ——」

すさまじく、嫌な音がした、足自体が壊れてしまったような、そんな音。

声は、出なかった。

一方通行と淡希、どちらもゆっくりと自由落下を始める。

痛みに耐えながら淡希は転移を行う、本来なら能力の行使など考えられ無い状況でのこれは、さすが超能力者といったところか。もしくは、化物みたいな精神力を恐怖すべきか。

なんにせよ、転移は半分失敗に終わり、ゆっくりと地面に降り立ったものの着地でできず、地面に転がる。それによって生まれた更なる痛みに耐えながら、何とか淡希はあたりを見渡す。

絶望は、目の前に居た。

あ——と小さな声が聞こえた。
誰のものは、言うに及ばず。

一方通行はゆっくりと地に降り立ち、トランクケースめがけて――

そこまでだった。

一方通行の体がふらりと倒れる。

——一方通行が行ったのはミサカネットワークによる代理演算だ。これを行い、彼は能力を取り戻した。しかし専用の機材を使用しない限り、現在の一方通行がおかれている状況は幻想御手の使用者——ホストコンピュータと何もかわらない。

ある程度接続すれば当然、脳は活動に支障をきたす。

壊した壁を、ミサカネットワークが復元すれば問題はないが、それにしても動けるようになるのは一日後、既に一方通行は、行動不能へ陥っていた。

「ハ——」

ハハ、と、笑いが漏れる。

淡希のものだ。

「ハハハハハ！ アハハハハハハハハハッ！！」

助かった。

勝ったのだ。

足は一本使い物にならなくなったが、結標淡希の能力は座標転移、なんら問題は無い。

結標淡希の目標はまだ、揺らいでいない。
パーソナリティ

それが解れば十分だ。

自覚して、今度こそ——

「さようなら、第一位」

一方通行は、敗北した。

第一章 2 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
という訳でしばらく一方通行さん無想。

補足

- ・多分なかったはず。

第一章 3

3

白井黒子は大きなビルの頂上から辺りを見渡していた。

全十二階、最上から上を見れば、人など点にしかなら無いレベルだ。これ以上の建物は、とある窓の無いビル程度だろう。

そこには人はおらず、ただ白井のみ、当然、ただ一人取り残されているというわけだ。

現在白井は人を探している。結標淡希、とある事件において、白井を妨害してきた能力者だ。

とはいえ、こんな場所から見下ろしても彼女は見つからない。それも当然、白井自身はあくまで学園都市全景を見ようとしているのだ。

搜索自体は、同僚であることの初春飾利に全て任し、自分は現在待機中である。

本来なら自分自身もあたりを飛び回り、淡希を搜索したいのだが、その淡希自身につけられた傷があるため初春に止められている。

傷を痛めないよう、こうして学園都市を見渡せる場所で待っているのが現状である。

「それで初春、経過の程はどうですか？」

『包囲網は張っておきましたけど、ヒットしますかねー、って所で
す。建物の中は流石に無理ですし、相手は空間転移能力者ですから、
中々厳しいと思います。はい』

「それはそれはご苦労ですの、出来ればコチラとしてはもう少し見える場所を探したいのですけれど」

『場所を説明するのにそっちの方が楽なんです、もし本気で探したいなら怪我を今この場で治してからやってくださいね？』

「再生系能力者はどこですか？」

『しってます？ 自己再生ならともかく、他者の再生って結構大変なんですよ？』

確かに他者の細胞や何かをいじくるのであれば、それこそ一方通行の領分にすら入るのだから。それを意識しているわけでもないが、初春は言った。

「そんな物、今は動けてるのだから問題ありませんわ」

『それは物事の先送りです。白井さんは本来、病院で寝ているべき人間なんですから』

それこそ重傷なのだからここにいないべき人間ではない。

けれど。

「知ったことではありませんわ、黒子は目の前でお姉さまが戦っているのを、守られながら見守っている人間ではありませんの」

『……あくまで御坂さんなんですわね』

「一度やられたからには一矢報いなければ面目が立ちませんの、と

でも言っほしいのかしら？ まさか、そんな事お姉さまに言われたってしませんわよ」

一拍。

それだけの間をおいて、白井は軽く笑う。

「私のような人間に、復讐だとか、リベンジだとかは似合いませんの」

『だったら……笑って帰りましょうよ、白井さん』

解っていると、一言だけ告げた。
続けて、

『……白井さんから見て東の方向で発見しました、どうやら誰かと交戦中のようにです』

「ありがとうございますの」

一瞬にして白井は虚空へとかき消えた。

——遠くへと走る、御坂美琴へ追いつくために。

——

戦場は既に零となっていた。

たとえば絶望が、たとえば闘志が、たとえば衝撃が、諸行無常とはよくいった者で、実際の所、零のなった戦場は、再びただの虚無へと帰ろうとしていた。

あたりが暗がる夜のトバリは、降りることなく見下ろしている。
閑散とした世界ではあったが一人、結標淡希はまだそこにいた。

当然一方通行もまだそこで倒れているのだが、痛みゆえか、ミサカ ネットワークとの接続を修正した時点で気絶してしまった。

もはや一日どころではなく、彼は目覚めないだろう。

「……そろそろ移動しないとね、それにしても足が片方使えなくなつたか。これ、後に残るんじゃないの？」

淡希のあたりには、工事現場らしく、仮組みされた鉄骨やら、これから使うのであろう布にくるまれたもの、まだ最初の最初らしい様子だ。

とはいえ淡希の意識が向いているのはプランと、力なく折れた自分の足。

痛みはある程度引いて、残りも精神力で捻じ曲げたが、流石にこのままは不味いだろう。

「まあ、何を言ってもしょうがないわね、それこそ今はコレなんてどうでもいいんだから」

言って動き出す、その糧のタメに、淡希は言葉を出す。
けれど、

「あら、それではその足は無駄にして返してもよろしいのですね？」

あざ笑うように、上方から声と、そして痛みを感じるほうとは別の足からの――激痛。

「があああつ」

見れば、骨が折れ、駄目になっている足とは違う足に、見覚えのあるコルク抜きが突き刺さっている。これは――そう、先ほど残骸

を奪い取る際に使用する――
振り返る。

白井黒子が、上方の鉄骨に腰掛けていた。

抜き去ろうとして――止める。今は止血手段がない、ならばこのままであるほうが、むしろいい。

「ツハ、また出たって訳？ 懲りない奴は好きじゃないわよ！」

「むしろ、私としては貴方に邪魔をしていただきたくないのですけれど」

痛みに耐え、痛み自体をねじ伏せるような凶器的な。

見下ろすように、笑みと共に。

どちらも、視線を合わせる。

「――そう、じゃあ返してあげる」

やがて、淡希もその表情を笑みに変える。

手で自身が座る残骸の入ったケースに触れ――それごと虚空へ掻き消える。

なるほど、動いたかと白井もまた空間転移を使って鉄骨から飛び降りつつ――しかし驚愕する。

目の前に残骸が出現したのだ。

正確にはそれが入ったトランクケース。

「なっ！」

何て物を——完全に不意を突かれた形となる。

さすがに、コレをなんとかしないわけにはいかない、白井の目的はあくまで淡希の確保と、この物体の確保なのだから。

もちろん、淡希はそれを狙ったのだが。

手を伸ばす、その時だった。

入れ替わるように、残骸の在った結標淡希が入り込む。

「空中は、流石に身動きが取れないわよねえ！」

テンポが遅れた、演算は間に合わない、そんな白井の状況で、それを解りきったように淡希が声をかける。苦々しげに白井は顔をゆがめ——

グゴガアッ！ 防御に入った腕へ、淡希の拳が突き刺さる。

とはいえ、本命はこの後の墜落、それを見渡せる場所へ、淡希自身に移り、ついでその隣に残骸を移す。場所は中に浮かべられた一つの鉄骨だ。

墜落、とはいえ結局はビルの二階ちよつと下から落ちたようなものの、落ち方が悪くても行動に支障はないだろうし、淡希自身それはわかっている。

ならばこそ、本命はココからという事になる。

「くあ……う」

白井が苦悶の表情と共に立ち上がる。先ほど痛めつけたのもある、痛みは相当だろう、それが目的なのだから当然だ。

本命はココから、けれど、白井はそれ以外でも倒れる理由をもっている。

持たされている。

「無様ね、完全にさっきと立場が逆じゃない、いえ、そうね……あの場に置いても、元から私と貴方はこういう立場だったわね」

なでるように、挑発する。

上から目線、当然だ。

「うるさい獣の声が聞こえますわね……私、負け犬という言葉は知っていますが、勝ち犬なんて言葉、てんで聞いたことがありませんの」

けれども、白井はまるで最初からそれを待っていたかのように、そんな言葉で返してみせる。したうち一つ、淡希は視線を地面の鉄骨へ移した。

幾つも横たわるそれ、そのうち一つをまず白井に飛ばす。

それを察知したか、白井が動いた。

「あら！ 随分とまあ手の早い子供がいたもので、そんな未熟な野獣が、まさか人間様に、たてつこうなど——」

まずは、足で回避。

接近を転移して行う。

「ご存知ありませんでしたわ」

……言ってくれる。

あの一方通行のバカみたいな演説よりかは、よっぽど腹が立つ、ならば——今度は一つではなく豪勢に、大盤振る舞いといった様子で、連続して降りかかる。

白井を囲むように、一つ、二つ、三つ四つ、前から後ろへ、中央へも当然襲い掛かり白井を狙う。

けれど前へは既に衝撃が訪れ、後ろへ動こうにもまだ衝撃が待っている。横にはやはり白井自身を狙う鉄骨が待っている。

なんとも悪趣味な事だ。

「私だからかわせる、それをわざと用意している、というわけですよ」

もったいぶったように降りかかる直前、白井の声が唐突に響く。

続けて目の前に現れた白井を、鉄骨を挟むようにして淡希は笑顔のまま防いだ。そこから襲い掛かる鉄骨を相手取るため、一気に後ろへと引く白井。

地に迷って、一気に振り出しへと展開する。

再び現れる鉄塔の群れ、今度はまず一つ、白井が足で回避できるレベル。

軽くうごいて回避を済ませ、サラに掻き消える。動いたそこをピンポイントで狙われたのだ。ガンゴガンッ！ と、激突した音が何処かへ響く。

言うまでも無くそれだけでは終わらない。淡希の若干上、見上げ

なければわからない場所へ移った白井の視線が、淡希が上向いたのと交錯する。

もう一度目の前に転移、一気に距離をつめる。

「悪趣味な遊び、ですことね！」

誰に言うまでも無く、ただそこにいる一人の人間に向かって、白井は手を伸ばす。

「――それを返すなら、無様ね、と返すべきかしら」

唐突に現れた鉄の棒が、当然如く、白井の手を貫いた。

「が、ぐあ……っ!？」

驚いたように、悲痛と共に声を上げる。

意識が保てずゆっくりと地面に落下していく。何とか鉄の棒が突き刺さった手を見て、再び驚愕する。これは――そう、これは、白井がいつも使う鉄の棒だ。

「本来、もう少し時間があれば、貴方の相手をしたのだけれど、ごめんなさいね? 私、一度に一人しか相手をしたくないの」

だって、二人がかりを遊ぶのは、とっても手間なんですもの。

そうやって笑って、

白井の意識が地に墜ちる。

不味いと、最後にそう思った。

こんな所で墜ちて、その上先ほど淡希が落とした鉄骨のある場所で、落ちれば、――墮ちれば、ひとたまりもない、ただでさえ怪我が酷いのだ、もう――

けれど、白井は最後に、走馬灯すら描くことなく――

「大丈夫？」

これは……誰かに、抱きとめられたような感覚だ。
それが、本当の本当に最後だった。

無音のなかで、残った一人と、新たな一人が会話する。

「やっぱりきたわね？ 失敗品」

「完成品……って言うてくださいよ」

失敗なんてないと、彼女は言う。

「……失敗だ何て、誰にだっていわせませんよ！」

――ミサカワンコは、そう叫んだ。

第一章 3（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
ワンコさん大暴れのターン。

補足

・高威力低強度、知る人ぞ知るSSの方で先行公開したものですね。
・強く見えますがこれと同じことがこれ以上にできるのが超電磁砲、
超能力者はホンマ化け物やで！。

第一章 4

4

ミサカワンコが連絡を受けたのはそも、一方通行が淡希と接触した最初の段階だ。とはいえ場所はそれなりに遠く、たどり着いたのは一方通行との戦闘、白井との戦闘ともいえない戦闘、というその一連の流れがあつたからこそである。

当然ながら一方通行があそこでミサカネットワークに演算を任せなければ、白井がそもそも、あそこへたどり着ける場所で見下ろしていなければ、どれにとつても、偶然のリレーは偶然として繋がれる。

淡希はあの場で白井を叩き落すという選択をしたのはワンコがたどり着いたから故ではあるが、どちらにしろ白井はあそこでやられ、最悪命を落としていた。

淡希自身に殺す気はないとは言え、殺すことにためらいは無い、一方通行のように対等の相手というわけではなく、格下である白井が、最低限命の保障が成されている——そんな事、絶対にないのだ。

間に合つたと言うのは何も間違いではない。

思いは繋がっている。

それをゆつくりと確かめながら、ワンコは軽く顔を上げる。

手には意識を落とした白井黒子——抱えていたそれをゆつくりと地面に降ろす。そのまま数歩、後ろへ下がった。

「ようこそ三人目……とはいっても、ここは私の庭ではないのだけれどもね」

どこそこの鉄骨に腰掛けて、おおよそ二メートル程度の高さから、ゆらりと見下ろす。視線は当然衝突していた。言うまでも無く、反目して。

ワンコが声を荒げる。

「私は貴方を止めにきたんです。私は二度と死にたくないから、貴方のそれは……ジャマなんです」

それは、何にも包まれない、ただ純粹な意思だった。一方通行のように自分をごまかす風でもなく、白井のように気取った、しかし完成された風でもなく、ただ一人の人間の言葉。

「へえ……あなた、ちゃんと生きてるんだ。じゃあ失敗品じゃなくて成功品ね」

完成されてるかとはともかく、と後置きして。

「まあいいわ、私にとって障害はただ視界のジャマなだけ、ただその奥へ飛び越えればいいだけなんだから……そうしなければ、私は私ではないのだから」

「……それでも、私は貴方を止めます、壁にならなくとも……道は壊させていただきますよ!」

「自分語りは嫌いじゃないけど、趣味でもないの、貴方の意思はある程度理解しているつもりだけれど、それをぶつけるつもりなんて私にはないわ——」

一息、淡希は言葉をつむぐ。

「やってみなさい、今回限りの特別サービス。貴方の全力——真っ向から飛び越えてあげる」

手を伸ばし、一つそう求めた。

「……私の能力は極単純に、異能力……レベル2程度の電撃です、他の妹達もまたまちまちですが、大体は2かギリギリ3といった強^{レベル}度ですね」

「聞くまでもないわ、最初からそう知っているもの」

「普通そんなわたしたちがこうして出張ろうなんて思いませんよね、だって相手は超能力者一人だけ、こっちは二人もいるんですから、どちらかが普通は勝てる、けれどもあなたは強力です」

戦闘に置いては、特定条件化で一方通行とすらも拮抗できる人間、かつて、かの樹形図^{ツリーダイアグラム}の設計者がたたき出したシミュレート結果——美琴は一方通行に一手すら撃てないというあれだ——は、結標淡希の戦闘結果を、こうたたき出している。

両者が合意の上、同じフィールドで不意打ち無しに戦う場合。

淡希が戦闘によって確実に敗北する相手は、第五位と第七位。

第五位はそもそもからして能力が他者を圧倒している、第七位はその第五位すらも凌駕する特異点、この両名を超能力者の戦闘における順位を比べるべくもない。

問題はその両名以外。

それ以外には、淡希は勝ちを拾える可能性が大なり小なり存在するのだ。

ある種戦闘に置いて、空間転移とは、それほどまでに強固な能力でありはする。

「それこそ無駄と言うものでしょう、そんな相手に挑むなんて、勝算が無い限り馬鹿のすることではないじゃない」

ちらりと、淡希はワンコが地に下ろした意識の無い白井黒子を見る。

「馬鹿じゃないから、勝算があるから挑むんですよ、私だって、ただ日用雑貨クローンをしていたわけじゃないんです」

バチ、と体から電気を迸らせながら、少しだけ奥の方で倒れる一方通行に目を向けながら、しかし直ぐに淡希へとワンコは目を向ける。

「ふうん、言ってくれるじゃない、貴方の秘策、本当に私が敗れるとでもいうの」

「やって見せますよ。――本来、能力の強度っていうのは本人の演算能力だけでなく、その希少性も査定の範囲内となっています」

ぽつりと、ワンコが一つ語りだす。

「空間転移能力者の強度が、軒並み高いのも、その演算能力の有無だけでなく希少性もまた考慮されるが故な訳ですからね」

確かにそうだと淡希は頷いて、それを持ってワンコが次の言葉を示す。

「つまり、その反対、たとえば非常に有り触れた――たとえば電気エレクトロマスター使いのような、その中でもとりわけ強いだけの能力は、どうやって強能力者程度にしかありませんよね」

何せその強さを持った上で、あらゆる事が出来るのが超電磁砲だ。どれだけ強かろうと、電気使いやあらゆる汎用能力には、超電磁砲という前例がいる。

電気使いに限って言えば、その強さは超電磁砲にも存在する。学園都市にとって第三位は一種の広告塔だが、同系統の能力者には、むしろ挫折を促す、でかすぎる壁となる。

けれど、ワンコはそれでも何の問題もない。

「強さだけなら、能力者は超能力者と同等の席に立てるんですよ、確かに壁はありますが、超え方なんて一つではないんですから」

「……なるほどね、そこで出てくるのが、軍用クローンであるところの貴方、というわけ」

「その通り、私には学園都市が生み出した対人への最高峰の戦闘技術が詰め込まれています。その中に、こんな一節があります」

一呼吸。

それから、

『一は多には絶対に勝てない、故に、多と渡り合える一は、絶対に一には負けない』

よって、

「お見せしますよ？　——これが私の最終兵器、ストームボルト砂鉄の蛇、そしてそれが作りうる対複数戦闘用能力——」

——『ボルトタイフーン砂蛇の目』です。

その声と共に、ゆっくりと、沈んだままであった工事が起動する。直接的に言えば、辺りにあった鉄骨が浮かび上がり、やがて一つの形を取る。

「蛇……ね、とても巨大な」

「ご名答。当たれば痛いですよ？」

何せこれはホーミングモードなのだから、と笑顔で言って、余裕をもったいぶって、宣言する。

「だからまあ、当たってください」

全力で宣言して、右から放つ。

それは無骨な一つの蛇だったぐつぐつと蠢きまわり、ただひたすらに狙う獲物を穿つ。まずは目先、少しのほど上手にいる、淡希へ向かって。

「いいことを——」

速度は恐らく銃弾ほどではないがそれでも十分に人へ挑める速度、回避には相当な手間を要するだろう。例外として、

「――教えてあげる」

後ろへ、淡希の声が移り変わる。

当然そこへ、先ほど淡希を狙ったモノとは別の蛇が、真正面と襲い掛かる。先ほどのモノは反発するように空中で跳ねると、一気に瓦解し、崩れ去った。

「どれだけ強度^{レベル}を上げてても、物理で殴っては私には適わないの」

さらにそれも、再び回避される。

当然、理不尽など何もない、ワンコ自身それは当然解っている。

そもコレだけやっても、たとえばお姉さまのような、ちゃんと戦闘が戦闘といえる次元の人間とは戦えるものの、淡希や一方通行のような、戦闘が虐殺になる人間と戦って勝てるとは思えない。

これは戦争には耐えうる能力だが、虐殺の対応には不向きなのだ。

故に、

結局、ココまで来て、ワンコの目的は正面からの勝利ではない。

――淡希は強い、間違いない。

彼女に勝つには戦闘も、戦争も、虐殺も、何もしない人間で無ければならない、故に、戦争を選んだワンコではダメだ。

けれど、挑戦権はある。

「だからごめんなさいね？」

真後ろ。

「私と貴方じゃ、少しだけ位が違いすぎるの」

その瞬間を、ワンコは待っていた。

——ワンコにギリギリまで近づくその一瞬。

——ワンコがペラペラとしゃべった内容で油断して、余裕ぶって襲ってくるこの瞬間を。

——全て、予定通り、予想通り。定石、通り。

結果、瞬く間にワンコは淡希の後ろへ回る。

……ミサカワンコは、辺りに磁場を作りそれを操って戦争を行う。それが砂の蛇でありもう一つ、ミサカワンコは自分自身を磁場と扱っている。普段は絶対の反射を、ワンコに磁力を定義できる代物全て——当然自身の能力も当てはまる——に反発する磁場を形成する。

もしそれを突破したければ木剣を投げて突き刺す程度の事しか、出来ないだろう。

そしてこの時、ワンコはある磁場に対して、自分を吸い寄せる磁場を操った。

コレにより瞬間移動を行う、着地は磁場を元通り、反対にすればいい。

そうして、後ろに回る。

ありえないだろうと、思わせ油断させた、それがワンコの狙い、唯一の勝機。

手を伸ばす。

ワンコ自身は電撃を使えない、演算を組み替えたため、使えなくなったのだ。——けれど、自分の体から体に向けて、帯電程度なら出来る。

よって、それをぶつける。

不意をつき、計算を鈍らせる、絶対の状況で。

けれど、

「残念でしたあ！」

淡希の声は、無情にも上から響いた。

「っ！」

驚いたように顔を跳ね上げる。

結標淡希が、鉄塔に揺れて、座り込んでいた。

月が妙に明るく見える、——淡希が逆行になり照らしているのだ。それはまるで、全てが悪魔のように見えた。

「お見通しよ、貴方のたくらみ、私を油断させようと思ったんでしようけれど……」

――ああ、

「強者はね――油断があつてこそその強者なの、けどね」

――勝てない。

「私は覇者なの、油断があろうとも、勝って相手を蹂躪する、それが私なのよね」

目の前が、真っ暗になった。

――

そうしてワンコは夜の闇を走っていた。

逃げている、と言い換えるのが正しいだろう。

勝ち目が無いそれを悟った瞬間、ワンコはすぐさま身を翻した。怖かったから、というのは少しならばあっただろうが、やはり、そこにおいても意味がないというのは大きかっただろう。

一瞬でその場を離れると、こうして自分の足で町を歩いていた。

――辺りは死んだようにくらい。

時間はまだ夜の半ばへ移るころ、夕と夜の境目を越えた大体先。だと言うのに何故だろう、光は本当に少ししかなく、ポツリポツリと浮かんでいるだけ。

今日は皆眠りが早いのだろうか、それにしても今は早すぎる。

……足が、重みを増してきた。

当然だ、何せここまで数キロ、全て全力疾走で駆け抜けてきたのだから、

「――ア」

足が止まる。

疲れゆえ、ではない、軽く呼吸を整えれば、まだ十二分に動ける程、ならば何が彼女の足を、ふと何の変哲もないマンションの前で止めさせたのか。

デジャヴだ。

そう、ここは……

そも、自分はこのために走っていたのではないか？

「……やっぱり、ダメ、なんですか？」

――空を、とあるマンションの、誰かが干されていそうなベランダを見上げて、ワンコは一人、呟いた。

第一章 4（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。

とりあえず、次回更新は絹旗ちゃんじゃなくてこっちにしてみます。

補足

・ワンコに関しては何も言わないでおいてあげてください。

第一章 5

5

「ふざけんじゃないわよ!」

御坂美琴は悪態一つ、同時に電撃をあたりへ放つ。飛び込んできた淡希の姿が、再び掻き消える。

吐いた悪態、それは淡希へ向けた怒りであったか、あせるが故に、戦場へ現れた不満か、それとも自分へ向けた一種の啓発か。

なんにせよ、苦々しげに、その瞳を美琴は揺らす。

そこは何にも無い、少しの広さを持つ道だった。美琴はここがどこかは知らないし、辺りにある、有象無象のような高層ビルが、何のために学園都市を照らしているのかも、知ってはいない。

夜の闇は深くなり、しかしここ、永夜不城の学園都市では、残念ながら星空は眺めない。むしろそれが当然であると、暗に誰かに語っていた。

当たりに激しく電撃が散った。ただその本命であるところ、淡希には一度として当たらないのだけれど。

「甘い甘い甘い甘いわよ!」

何度も何度も繰り返し繰り返し練り上げて、一つの作品を作るように、何度も何度も言葉を手繰る。言うに勝らず、それが淡希を体現した。

連続で出現と消失。

その度に言葉が加わり、そしてその度に美琴が電撃を散らす。

「一方通行は私に唯一恐怖をさせた!」

右から左、切り裂くようにあたりに飛び散らせながら、美琴の目の前を電撃が横切る。何故だかそれは、極彩色の花火に見えるような代物で、確かと淡希を照らしている。

「空間転移能力者は私に生意気な不意打ちを食らわせて見せた!」

上空から、天罰の如く雷が降り注ぐ、淡希は美琴の目の前で、動かずにやりと笑って見せた。

「二万分の一は私に勝機を見出した!」

無数に散る電撃模様。

まるであたりに絨毯でも広げるかのように、無数ではなく、無限でもない、けれど数えることすら不可能な電撃の筋が広がっている。それでも、

「じゃあ」

淡希は、今美琴の目の前で。

「なんで貴方はここにいるの?」

ひたすら地獄のように、笑っている。
無茶苦茶無駄のように、踊っている。
からから愉快のように、語っている。

そう、これは悪魔だ。

「う……っるさい、私は学園都市第三位！ 超電磁砲と呼ばれる人間なのよ！」

「あら、そう……いえ、もしかして知らないわけではないでしょう？ 私は学園都市第四位、座標転移なのだけど」

「知ってるわよっ！ その……くらい！」

「じゃあ、これは知ってる？」

決着をつけるぞ、淡希はどこかでそう語った。

それは、より一層に狂った笑みであったか、ゆっくりとはなれる、フィナーレを示すかのような淡希の行動であったか、両手を広げ、ただひたすらに空中の一点を見据える、淡希のしぐさであったか。

——それとも。

「私はこれから、覇者になる！」

無情か、無法か、無限のかなたへ、しかし美琴を吹き飛ばす。唐突に後ろへ回り、そして一閃、重量のある残骸は、美琴そのものへ、どうしようもないほどクリーンヒットする。

「あ……っぐ」

情けないといえは情けないが、堅實的、至極全うに、美琴は意識を失った。

これで、この戦いに参加していた者達を、淡希は撃退したことになる。気になるはワンコだが、あそこでためらいも無く逃げたのだ、恐らく戦う気力か、もしくは手札が残っていないだろう。

ならばこれで、

これで淡希は王手をかけたことになる。

残骸があれば――そこから手に入る、樹形図の設計者をもってすれば、学園都市などもはや、赤子の手をひねるようなものだ。問題は一方通行との再戦であるが、それもぼんやりと、淡希の頭の中でイメージが浮かんでいた。

「――思い出すわね」

アハ。

笑いが、一つ漏れる。

「確かいつだったかしら？　もう数年前になるはずだけれど、六年前だったかしら――私が実験で一つの失敗をしたのは」

その時の実験は、ドアの目の前から、中へと、空間転移で移動する、そんな単純な実験だった。普通にやれば間違えなかったし、実際“その”直前まで、ミスを犯した自覚は無かった。

何せ――

「気づいたときには足は壁にめり込み、出せば足の皮と言う皮がす

りむけていたんだもの、やっぱり最初には驚いてしまったわ」

もし、それがただのミスであれば、ミスがトラウマになり、自分を転移しようものならば拒否反応を起こす、そのような状況に、淡希は陥っていたはずだろう。

けれどもそうではなかった。

それだけでは、覇者を目指す結標淡希は、生まれすらもなかったのだ。

「治療が終わり、ある程度動けるようになった私は、その研究所を訪れた。報告のようなものが必要だったし、一応私はその研究所に所属していたのだから」

そこで、ある会話を聞いた。

半開きの扉から、大声の楽しい会話が、ふと、聞こえてきたのだ。――それだけならば無視したのだろうけれど、それが自分の事だから、思わずそこに、耳を傾けた。

『いやはや、此度の実験は成功ですな』

『ええ、あの目障りな座標転移を弱体化させ、縛り付けた』

『さらにはあれほどの高位能力者をだましえたAIMジャマーの性能、コチラも中々なものですな』

『天井先生には頭が上がりませんなあ』

――その会話から、半日も立たず、研究所は壊滅した。

研究者は、生死不明、何せ研究所が完全に瓦礫と化していたのだから、確かめようが無かった。

「その時から、私は学園都市を憎んだ！ 学園都市は私の敵だと、だから！ だからこそ、私は学園都市の全てを取り込んだ。あらゆる実験を重ね、あらゆる演算の改良を施し、私は私を形成した！」

それを、今。

「こうして！ 学園都市への反逆の時が来たのよ！ やっと、こうして！」

——それは、本当にただの、独り語りだった。誰へ向かうでもなく、ただ自分の中で完結する言葉たち、それをどこかに向ける必要も、それが誰かに突きつけられる必要も、淡希には無かった。

淡希は覇者である。

同時に、覇者は孤独であり、しかし誰もが彼女を、見上げる存在となる。

だからこそ、

「知ったことかよ」

その覇者への階段を、登りきり、そして又降りる人間など、淡希には想像もつかなかったのだ。

――

上条当麻はその日、少しばかり豪勢に夕食を作っていた。理由は今日が学園都市からの補助金が振り込まれる日であったから――そ

れを理由に、いとしき風斬を自宅に呼んだから。

今まで、風斬が上条宅に訪れることは幾度と無くあったが、それは風斬が何気なく家へやってきたり、外で上条が偶然であったりしたからであり、上条が最初から風斬を家へ呼ぶつもりで、且つその目的が食事であるというのは、初めてであったりする。

「楽しそうだね、とうま」

聞こえてくるのはインデックスの声だ。

まあ、当然ながらこのシスター少女は上条宅に同居しているわけで、現在は漫画の山に埋まりながら、ごろごろと上条を眺めていた。

「そうだなー、そうかもしれないなー」

料理上手……というわけではないが、少なくとも男性にしては大分料理がこなせるほうである上条は、今日風斬に料理を食べてもらうのがなんだかんだ言ってたのしみなのだ。

インデックスの様に、いただきます！ うまい！ ごちそうさま！ で感想が終わらないであろうからというのも、原因であったりする。

早食いというのは、中々作る側としては、食べさせ概の無い相手であったりする。

——そうやって、一日を楽しく過ごそうという、不幸と幸せが同居する上条の日常は、しかし。

その時間こえたチャイムで、かき消された。

「ん？ 誰だ？ インデックス、ちょっと出てくれないか？」

インデックスは内緒で一緒に暮らしているのだが、この時間に来るのは多分風斬だろうと判断し、上条はインデックスにポツリと声をかける。

のそのそと立ち上がるインデックス、わかったんだよー、と軽く一言。

とてとてとドアへ近づいた。

鍵をはずすインデックス、同時。

「上条さん！」

ミサカワンコが、飛び込んできた。

――

大きな大きな、学園都市らしくない、しかしどこからしくもある、そんな夜の闇の中で、上条当麻と、結標淡希は対峙していた。

「あんたが学園都市をどう思ったって知ったことじゃない」

繰り返すように、上条は言う。

「俺が何を言っただって、あんたは歩みを止めないんだろう」

ほんとはもっといろいろな事を言いたいのだけけれど、上条はもっ

と大事なことがあるのだから、誰かに向けて叫ぶのではなく、ただ守るだけ。

そうするのが、今、上条が一番すべきことなのだから。

「だから、だから俺は先に謝っとく、ごめん——あんたのジャマをするよ」

「っ——なによ！ 行き成り現れて、貴方が一体何を出来るの？」

「……守ること、それだけじゃ、ダメか？」

「ふ、ツざけんじゃないわよ！」

瞬間、淡希はコルク抜き——白井に対して使ったもののあまりだ——を取り出して、空間転移を行う。狙うは心臓。高速で移動する空間転移は、つまりそれだけで、必殺以上の致死を持つ。

だから、本来であれば上条は、なすすべも無く淡希に殺されている、はずだった。

両者の間、コルク抜きの直線状に、上条がかざした右手がなければ。

バギッ！ と、音を立ててコルク抜きが空間転移を解除する。

「なっ！」

そこでやっと思ひ当たる。

彼は、調べたときに名前の出た――幻想殺しではないか？

「そん……な、幻想殺しは、ここまでなの！？」

「……あんたがそう思うなら、そうなんだろうな」

少なくとも、あんたの中では。

口の中だけで上条はつぶやいた。それが淡希に届くことは、ついで無いが。

上条が、ゆっくりと淡希へ近づく。

――ここに上条が現れた。多少時間が掛かったものの、それは美琴が電撃を遠くから見ても解る方法でぶっ放していたからだ。

淡希は、動けない。

――今、淡希は混乱のきわみにあった。もし本来ならば動いて回避をすればいいのだろうが、しかしそれも両足が封じられ、適わない。

上条は、あと少しすれば淡希へ到達する。

――転移も、混乱により不可能となっている。移動を転移に頼りすぎたのだって、問題の一つだろう。

淡希は、もう動かない。上条にも、わかっている。

――ここで決着をつけるのは上条だ。

――けれど、ココに来るまで、一方通行が片足をつぶし、白井が

もう片方をつぶし。

——ワンコが上条宅にたどり着き、美琴が信号にならなければ。

——上条は、ここで淡希の前に立つことすら出来なかっただろう。

——けれど、

届いた。

——みなの叫びが、淡希を止めた。

——それが一体どんな意思であれ、結標淡希は、その姿をココにとどめたのだ。

「いくぞ——あんたが自分を覇者だと思ってるなら」

——だから、結局。

「その幻想をぶち殺す！」

結標淡希は、強者でしかなかったのだ。

第一章 5 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
第五部、やつのことで終了です。

- ・補足
- ・ありましたっけ？

エピローグ『繋ぎ続ける存在未来 Certain words』

結局それから、インデックスの話を聞いて一瞬で飛んできた風斬が偶然その場にあった残骸を破壊したことに、この事件は解決した。

というのも、ワンコがどこからとも泣く取り出したパチンコ玉で残骸を射抜こうとしている最中に、その直ぐ近くに高速で現れた風斬が地面へ激突したのである。

何でも、能力者のA I Mを辿った瞬間移動は、あたりにA I Mがあふれていると相当座標がずれるらしく遠くに現れて、目的の場所へ高速で移動していたのだとか。

だからといって、それが人をひき殺せる速度でワンコの目の前に撃墜した言い訳にはならないのだが、主にワンコの精神的な意味で。何やらトラウマを負ったらしい、暫くは風斬が現れるたびに怯えることになるのだろうか。

一方通行、白井黒子、御坂美琴の三人は直ぐに病院へ搬送された。因みに、一方通行は次の日になると直ぐに回復、そのまま検査を終えて即退院、美琴はそもそも気絶させられただけで、そのため以外の怪我もないため、直ぐに退院と相成った。

ただ、問題は白井だ。最初に淡希と邂逅した際に負った傷と、その後の淡希の戦闘でそれにかけた負荷及び骨も数本粉々になっていたようで、カエル顔の医者でも、これを元通りにするのは大分掛かるらしい。

大覇星祭にも間に合わなくなってしまうそうだ。

そんな折だった、白井黒子の下へ、同僚の初春飾利が見舞いへ訪

れたのは。

――

「それで白井さん。悪いニュースと良いニュース、二つありますが、どちらがいいですか？」

「……別にどうでもいいのですけれど、なんだかそれ、釈然としませんわね」

「まあ元が子供が出来たっていう良いニュースの後の悪いニュースが貴方の子供じゃない、ですからね」

「凄く複雑なブラックジョークですわ、現実だったらこの後凄くことになってるのでしょうね」

ハハハ、と軽く笑う二人。

「それで、本題は一体なんですか？ いいほうから聞きますわ」

「そっちから聞くんですね？ あんな会話をした後」

「正直な話、別にいいとか悪いとか、そんな事はいいんですの、ただ貴方が妙に引っ張るので苛々してるだけですわ」

「うわー、凄くその通りですねー」

「というわけで、いいほうのニュースは？」

乾いた笑みを浮かべる初春に、白井はなんでもないような様子で

聞く。

「いい方のニュースは、まああれですよ、例の荷物、壊しても問題なかったそうです」

「あら、それはありがたいお話ですの、私もお姉さまにカツ丼はোগりたくありませんものね」

まあ破壊した本人曰く、事故だったそうなのだが、どうやればあの残骸を偶然出来る状況になるのかは知らないが、どうもその破壊した本人が事情を知らないようなので、まあそれはそれか。

「中身が何かまでは教えてもらえませんでしたけど、よく壊してくれたって、言っていましたね」

「一体誰があれを壊されて喜ぶのかは知りませんが、一体誰ですの？」

「なんだか理想のお父さんみたいな人でした」

「ふうん……それで、いいほうは終わりなのでしょう？」

「ええ、ココからは困った話になりますよ？」

悪くて困った話、なるほど……それを口の中だけで転がして、

「初春、訂正しなさいな、それは悪い話ではなく――」

当然その中身はわかっていただろう。

頷いて、さらには引き継ぐ形で初春が口を開く。

「――最悪な話、ですよ」

一つの間、それを持って、もったいぶったように初春は表情を曇らせた。

「――今回の事件の首謀者、結標淡希が、警備員アンチスギルの護送中に、逃げ出した、そうです」

――

「なるほどなア、たしかにそりゃア面倒な話だ」

病院の程近くにある大きめの広場、あたりには喫茶店と屋台、暑い日差しを遮る木陰と、その日差しを避けるにはもってこいの空間だった。

流石に八月を超え、残暑というにも少し物足りないほどになってきたとはいえ、まだ辺りは夏の暑さ、水浴びでもすればすっきりするだろう――そんな気候。

そこで、病院からたった今退院してきた一方通行と彼を待っていたミサカワンコが合流していた。この後、美琴がここにやってくる、はずなのだが。

現在、それを待たずして、会話は本題へ入っていた。

辺りに人は少なく――当然だが、今日は平日である――そこにいるのは一方通行、ワンコ、そしてなぜかいる風斬のみである。

「ンでまア、そこにいる霧ヶ丘のお嬢様は、今なんで暇なんでしょ
オかねエ」

「あの……私はあくまで研究対象としてあそこに所属してるんです、
パーソナリティ意思を確立する段階で、衣装はその制服を借りていますが、だから
らといって……」

「ああいいい、俺アそんな事務的な説明なンぞ聞きたかねエんだ
よ、本題は」

ベンチに座る一方通行が見上げる先、殺気を飛ばしはするものの、
しかしそれに堪える様子はない。たしかワンコが稽古をつけている
のだったか、一回二回程度だそうだがこのAIMならば、それだけで
全てを吸収するだろう。

それを認識して舌打ちする。

これじゃあ、風斬も一方通行も化物みたいだ。

「――なんでオマエが俺たちの問題に首を突っ込んでるンだつウ
話しなンだよ」

「……それは」

少しだけ言いよどむ、けれどもそれが突破口になるかと言うとそ
んな事はなく、風斬は直ぐにその意思をまっすぐ伸ばして、

「むしろ、怒ってるんです、凄く。だって、友達でしょう？ あな
たも、ワンコちゃんも、美琴ちゃんも、私は友達だって、ずっと思
ってるんだよ？」

「迷惑をかけたくなかったンだろオが、オマエ等は勝手に人を助けて、勝手に守った気で嫌がる、その事実が、いや嫌だったンだろ？」

返す一方通行は、その視線をワンコへ向ける。

一方通行に淡希の事を伝えてから、正確には一方通行が風斬に言葉を向けてから、ずっと俯いていたワンコの顔が、がばっと跳ね上がる。

「わ、私は氷華ちゃんの友人です……でも、氷華ちゃんは、恩人なんです」

目を一方通行に向ける。一瞬その視線が合うが、直ぐに一方通行が舌打ちと共にそっぽへ反らす。

「でもそれじゃあ、ダメなんです。迷惑をかけちゃうだけで、私は氷華ちゃんと、上条さんに、ずっと助けられっぱなしなんです」

美琴だってそうだ。

一方通行だって、ただ救われただけと言う事実はあるだろう。本人がどう思っているにしろ上条と風斬は三人を救った、その事実は根底に残り続けているのだ。

「……でも」

言いかけて思い出す。

——そうだ、これは前にもそんな事があった。

『風斬はインデックスを救って、それを切欠に……って思ってるのかもしれないけどさ、それじゃあダメだよ』

——恩人たる上条の言葉。

——昔、まだ風斬氷華にとって上条当麻が、友人以上では無かったころ、インデックスとはまだ、友人ですらなかった頃。

『話せばいいんだよ』

——上条が言った、友達の作り方。

『笑えばいいんだよ。』

楽しめばいいんだよ。

食事をすればいいんだよ。

遊べばいいんだよ。

一緒に勉強すればいいんだよ！

それだけじゃねえ！

喧嘩すればいいんだよ！

仲直りすればいいんだよ！

友達を作るってのは、風斬の思ってるほど難しいことじゃないんだよ！』

そうだ。

話した。笑った、楽しんだ、食事をした。遊んだ！

勉強だっていつかすることはあるかもしれない、喧嘩はそうだ、今している。巻き込みたくない、そうだこれがそうだ——

意思とは、つまりそう言うことだ！

「答えられないじゃないですか！ 私と氷華ちゃんは違うんです…
…ただ手を差し伸べてきた、“あなた”とは！」

「違う！」

瞬間、氷華は叫んでいた。

「何が違うんですか！ 氷華ちゃんは——」

「——昔、当麻さんが私の事を、風斬って呼んでた時があるんです」
遮るように、そんな風に話かけた。

「ッ！」

ワンコの声が詰まる。

——そういえば、聞いたことが無かった。まさか出会った最初から、この二人はそういった距離感、立ち位置ではなかっただろう。どちらかが守り、どちらかが立つ、そんな立ち位置だったところがあるはずだ。

今までそれは……考えても見ないことだった。

「まだ自分がこういった存在だって言うことに私、気づいてなくて……当麻さんも知らなかったんです」

知られれば、もう自分は上条に会えない、そうとも——意識してはいない意識下の、どこかで考えてはいたのだろう。

そして実際——最悪の形でそれは露呈した。

「そのときは、顔の半分が吹き飛んでたみたいです。……最悪ですよ、ね、そんなバレ方」

でも、と風斬はつむぐ、完結したそこにあるだけの事実を、ただ淡と告げる。

「当麻さんは私をすきだって言ってくれた、私はこうしてここにいます……こうやって友達を、心配できるんです」

お願いだから。

「お願いだから私から友達を奪わないで、私は皆が心配なんです。いつか、私の側から、皆が消えてなくならないかって」
がくえんとし

「……私は、ずっと貴方の友達です。だから……だからお願いだから、そんな悲しそうな顔をしないで」

上条は、恩人はフェアじゃないとそういった。だけど、友人はたとえそうであろうと、どこまでもフェアなのだ。

話して笑って楽しんで食事して遊んで勉強をして。

——喧嘩をして、

——仲直りをする。

そこに、恩も怨もありはしない。

「——はン……結標淡希が逃げた以上、今後データベースを見張らなくちゃならねエ」

一方通行が、ふと割り込んでくる。

立ち上がり離れるように歩き出しながら二人をちらりと見やって。

「俺は俺のやるべきことをやる。俺はオマエ等を利用してただだ……」

だが、けれど、

「俺はオマエ等が回りへ向ける友情^{それ}を、否定するつもりはねエ」

言っただけで肯定して、一方通行はその場を離れていった。

後に残った二人は、すっかりと視線を合わせ、笑いあっていた。

――

帰り遅くて夕方くんだり、日が沈み始めて、だんだんとその日の短さを実感させられる。

時刻はおおよそ五時をくだり六時、流石にこの季節ではあたりも薄暗い。

上条当麻は、来る大覇星祭の準備のため、そんな折に帰宅していた。

そんな折に、彼女とであった。

「はぁーい」

結標淡希、昨日あそこで殺しあった人間だ。

「ッ!？」

唐突で、唐突過ぎて警戒する。軽く飛びのいて、しかし後ろに現れた淡希へ、何の意味もないと悟れされる。

「別に逃げなくてもいいわよ、貴方をとって食おうって訳じゃないし、貴方を相手にするとなぜか勝てる気がしないしね」

「勝てる気が……しない？」

「そこに食いつくのね……まあ単純に言えば、戦えば勝てるでしょう、私の能力を一方通行以外に防げる人間はいない、最初から殺すつもりでやれば実際貴方にも勝てるでしょう……でも勝てない」

実力差などない、淡希のクイーンに、上条のジョーカーは通じない、けれど上条のジョーカーは、全てのキングを打ち破れる。

「貴方に勝てるのはそれこそ覇者で無ければいけないのよね、何もない——後ろも無ければ前もない、前進後退などという一喜一憂には惑わされない、そんな力を持つ人間でなければ、貴方のそれは突き刺さる」

そこまでで、一度切る。

上条は言葉を漏らさずただ淡希と少しだけ距離をとった。

「私は学園都市が憎い、今喧嘩を売って勝てるのであれば私はあい

つの元へ間違ひなく飛んでいく」

だけど、そのための構想は全部上条たちに叩き潰された。気づけば自分は既に捕まっていた。――上条は無言で、謝らない、既に言葉として、彼女にそれは継いでいるから。

当然彼女もわかってるから、心底楽しそうに体を揺らす。

「けどね、貴方と合間見えてわかった。――私はまだ弱い、貴方の右手で玉座を粉々にされてしまうハリボテの人間……力はあると思ってた、後はそれを世界に向ける拡張機があれば良い、そう思ってた」

けれども、違った。

両足は簡単に行動不能にされ、更にはほんの一回起きた偶然で、全てを台無しにしてしまった。それでは決して、淡希は強者ともいえない。

「だから暫く学園都市から離れることにしたわ。――魔術結社、名前はなんだったかしら、そこに少しお世話になるの」

前々から考えていたのだが、終ぞ実行されることのなかった選択肢だった。

「……魔術」

「形体に興味があるのよ、超能力とは正反対の方法で、よく似た結果を導き出す。才能無きものの才能……超能力者は使えないそうだけど、それでもなんだか楽しくなる話でしょう？」

それに、この足も治療しなくちゃね？

そういつて締めた。――足は、両足に包帯が一つずつ無造作に巻かれており、そこからは青く晴れ上がった足と、血の滲む包帯が見えた。

今、淡希がいるのは、上条の背の半分ほどはあるキャリーバッグの上だ。

「俺は……俺たちは」

「止めてもいいのよ、その意味があるのなら。いつておくけど、私がコレから行くのは米の方にあるしがない魔術結社、私が超能力者であることすら知らない偽善者集団」

だったら、それに何の意味がある？

「学園都市の事を諦めたわけじゃない、けれどね、貴方には語っておきたかったの、簡単に言うならそうね……」

すうっと上条に近づいて、

「ありがとう、私を止めてくれて――もし私があのまま学園都市と対決していれば、私は未熟なまま、けされていたでしょうね」

言うど、直ぐに離れる。

ギリギリ顔が接触する寸前で、耳元から、吹きかけるように、そして再び元の位置へ。

「貴方にだけは話をしておきたかった。……脆くて、弱くて、立っているのすら不思議な人間なのに、あなたは私すら……あの一方通行すら倒してしまったのでしょうか？ だったら、私は貴方と話がしたい。……もし、私が敵を持っていなければ、貴方を私のものに、

したかったほどに」

言うだけ言って、上条から離れる。

「じゃあ、さようなら」

——本当に、それでさようなら、上条が何かを言う間もなく、淡希は何処かへと、去っていった。

――

「なるほど、とうまはそれで遅れたんだね？」

上条の自室、夕食をちゃっちゃと用意してインデックスと向かい合うように食事を取る。因みに帰ってきて直ぐに、言い訳をする前にご飯を用意しろとのインデックス女史のお達しである。

ならばさっさと準備を済ませ、大覇星祭の事と淡希の事を軽く説明した後のインデックスの言葉である。

「別に怒ってるわけじゃないんだよ？ これでもしとうまがひょうか以外の女の子を助けにいったって言うなら、ちょっと噛み付こうとか思いうかも。だけど私は謙虚なシスターさんだから、こんな事じゃ怒らないんだよ？」

ゴゴゴゴゴゴゴ。

とはインデックスの背後から聞こえてくる効果音である。確かに怒ってはいない、普通ここでインデックスは噛み付いてくる。けれどもそれをしないのはつまり。

「……今度から、遅くなりそうなら電話の一つでもかけます、はい」

無言の圧力と言う奴である。

「よろしいんだよ」

さあ、君も食べましょう。なんて格好つけながら、インデックスはご飯に食いつき、ゆっくりと租借して飲み込む。そしてふと目の前で何か考え事をしている。

どうしたのだろうかと軽く首をかしげ、しかし直ぐに言葉へと変換する。

「とうま、ご飯、冷めちゃうよ?」

「ん? あ、ああ……」

言われてはっとしたようで、軽くご飯を掴まんで食べる。けれどもそれだけだったようで、よく噛みもせずに飲み込むと、再び何かを考え込んでしまった。

コレはどうしたことだろう、インデックスは考えをめぐらせる。

……当然その間も箸と口は動いているのだけ。

「さっきとうまがあったって言う女の人、昨日の敵だったんだよね?」

しかも、敵でなければフラグが立っていたと言うのだから可笑しな話だ。というか、昨日の話は、本当にあって殴り倒しただけと聞いているのに、どこにそんな要素があったのか。

「……俺は、勝てるんだけど、勝てないんだって……どういう意味なんだろうな」

それはそれは難解だ……というよりも、状況がインデックスにはわからない。淡希の考えなんて予想しようがないし、答えなんて決め付けられるものではないだろう。

……けれど生憎と、インデックスは前例を知っている。

「ひょろろかが自分を化物だって言って、自分から周り……自分自身を否定したとき、とうまはその時の敵に、負ける気はした？」

アルスマグナ
黄金練成。

自身の中の絶対を、現実の絶対として顕現させる、天使の如き力を振るう、現在世界に存在する“存在を確立された魔術”の中では、最高峰を誇る大魔術。

本来ならば一生かかっても発動が不可能なそれを発動させた稀代の錬金術師、アウレオルスⅡイザードを相手に、上条当麻は自身のタメに戦った。

インデックスがそこにいて、風斬氷華がそこにいたから。

その時、上条当麻は、

「……考えても見なかったな——負けるとか、勝つとか、そういうことは」

少し考えたようなそれを、確固としてこたえる。

やはり、とインデックスは予想通りの考えに苦笑する。

「そういえば、氷華と一緒にあいつを倒したときも、御坂から絶対に勝てないって言われてても、負ける気はしなかったな……考えなかった、のか？」

「……そういうことなんだよ」

「ん？」

上条当麻が、下向きだった視線をインデックスへ向ける。

他者と向け合わせた視線、インデックスはそれに満足しながら言葉をつなげる。

「君はそういう勝ちとか、負けとか、そういうところにはいないんじゃないかな？」

「……？　つまりどういうことだ？」

「深く考えなくてもいいんだよ？　だってそんなの君らしくないじゃない。それだったらいつそ、君は自分の意思を、直線的に信じても良い」

ようは上条の意思が、誰かに影響するということだ。

完成した人間など早々いない、完結した思考を持つ老人ならばともかく、そこまで練成された精神はどこにもない、だからこそ上条の意思は誰かに影響する。

それが上条にとって戦うと言うことで、

勝つとか、負けるとか、そんなのどうだっていい。

ただ、目的のタメに、倒さなくちゃいけない敵がいる。そう考えたなら、上条は右手を振るう、誰かの為に拳を握り、誰かを心配して、誰かに助けを求める。

「意思っていうのはつまりそういうこと、私達が意識する意思が、

膨大な人たちの、叫びの結晶である――叫ぶっていうのは言葉ってこと、誰かと繋がるって言うこと――それに繋がっている」

上条当麻は、その架け橋でいい。

「君は信じてごらん？　きっと解ってるはずだから」

一つ、息を置く。

二つ、それが重なって、三つめには、もう単ではなく多へと、それは姿を変えていた。

「ねえ」

箸で軽くご飯をつつく、全体が少し揺れ、直ぐに元へ戻った。

「とうまが誰かを助けたいのと同じように……」

インデックスは、悩み戦い、そして傷つきながらも立ち上がる。そんな上条が子供のように愛しいように。

ワンコが、美琴が、一方通行が、打ち止めが、あのゲームセンタ―へ言ったメンバー全員、そして風斬が、それぞれの意思を上条に、それぞれに向けているように。

「とうまは、ひょうかの事が好きなんだよね？」

ああ、と頷く人の意思。

壊れずただそこに、あるだけの事。

エピローグ『繋ぎ続ける存在未来 Certain words』（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
フラグを立てかける辺りは上条さん。

- ・補足
- ・なかったはず。

番外編『大層のお弁当』

住人の八割が学生である、学園都市。

今日はここで、ある祭りが開催されている。

——『大覇星祭』と呼ばれるこの催しは、学園都市が一般に公開され、能力のしようが全面的に解禁される大運動会である。

学園都市全ての学生が参加し、時には自分と、時には誰かと競い合う、誰かが笑い、誰かが楽しむ。そんな大きな大きなお祭りは、この晴天の空の下、ゆっくりと執り行われていた。

これは、そんな大覇星祭において、笑って、驚いて、楽しんで、いろんなことを思い出した、そんな一幕である。

――

上条当麻と吹寄制理は現在凄く凄くすさまじく、もう心の底から全世界に眩きを発信するかのごとく呆れていた。というか現在進行形で雰囲気的に呆然まくりである。

「それで……上条さんがいない間になんでやる気の塊が屍にかわってらんでしょ」

「こいつらの不徳でしかないでしょう？　と言うよりも上条当麻、貴様が原因じゃないことが、むしろ驚きね」

「まあそりゃ驚くのも仕方ないかもしれないな、諸悪の根源その一角とその二がまったく関わってないんだから」

「ちょっと、その二とはつまりどういう意味かしら？」

現在、上条と吹寄が校長講話代表としてを全学校分エンドレスで聞いて帰ってきたその時である。本来、このデスメドレーに代表の生徒しか呼ばないのは、学園都市全学校の校長を収容するために生徒の数を少なくする必要があったのと、代表の生徒以外が鋭気を養うためである。

因みに上条は現在十年近く連続でこのデスメドレー代表の座を頂戴しているデスメドレーのプロであり、吹寄はその元来からあるまじめな性格で、それほどダメージは無い。

なのに、それを体を休めながらゆっくり待っているべきほかの生徒が全員死屍累々となっているのは、逆に自分たちが元気な上条としては、何だか納得のいかないうところである。

「いやあー、昨日の内から随分と派手に話し合いが進行してないやあ企画倒れっちゅうのはこういうこというんやなー」

「……何か言い訳は？」

「せめて全部終わった後でよろしゅうたのんます」

その頃には全部うやむやになっているだろうが。

「……不幸だー」

「ちょっと、なにその――」

周りの状況と自分の状況、それを鑑みて思わず上条からポロリが出る。それが癪に障ったのだろう、文句を言おうと吹寄が反応する。

正確には、しようとした。

周りのざわめきが、それをかき消したのだ。

「じゃあ——私がいれば不幸じゃなくなりますか？」

後ろから声がした。

ざわめきもコチラから——そして、この声には至極聞き覚えがある。というか、絶対に忘れてはいけない声だ。

「ああ、ひょう——」

聞きなれた声、なんとなく耳に好い澄んだ声に、思わず聞きほれながら、返事をしようとして、少し硬直する。

原因は、極単純に服装だ。

普段、風斬は制服姿であることが多い、極まれに私服であることもあるが、今回はそれだった。白いレースをあしらったワンピース、肩は大きく開いて、どこと無く健康的で、日除けのためであろう麦わら帽子がよく似合っている。

「あ……その」

思わず見とれる上条に、周り……というか一番近くにいた吹寄が、上条と風斬の顔を交互に見やる。そのまま怪訝そうな顔で、

「……誰？」

「あ、えっと……風斬氷華って、言います。はじめ、まして」

「コレはコレはご丁寧に、私は吹寄制理、よろしくね？」

って、

「そうじゃなくて、上条当麻！ これはどういうこと！ “又”どつかからフラグでも立ててきたの？」

「又って……いやなんていうか、立ったっていうか、立てられたっというか……」

もそもそと答える上条。

周りにはまったく聞こえておらず、間近で聞く吹寄も、結局聞き取れていない様子である。

「んでー、結局、カミヤんにとってその子はなんなん？ 第三側室くらい？」

そんな様子に業を煮やしたか、周りで屍に成り代わっていたクラスメイトが声をかける。ピクン！ と風斬の肩が震えた。

その後もなんやかんや周りから囃し立てられたり、攻め立てられたり。

なんだかんだいって終始一体上条のなんなんだ！ とか、またフラグか！ とか、どうしようヒソヒソ！ だとか、なんだかかったいな、しかし風斬が上条ハーレムの一員である、とさして疑っていないかのような物言い。

それに怒りを覚えたのか、段々と風斬の肩がプルプルし出す。

気づいたのは上条のみ、というか、それに気づいて撤退を始めた。
そんな折、

「せ、正室です！」

蛸のように顔を紅く染めて、風斬は堂々と叫んだ。

というか、堂々過ぎて相当やかましかった周りがしん……と静まりかえり、全員が風斬へと視線を向ける。向けまくる。

興味の視線には少しだけ慣れて来た風斬だが、流石にこんな驚愕、慣れたくてもなれる機会がない、当然びくりと震えると、今度は怯えたように体を締めこませる。

「えっと、つまりそれって……」

最初に復帰したのは吹寄ことマジメな人だった。

「あ、うう……」

更に更にちぢこむ風斬。

流石に逃げの体制だった上条も戻ってこざるを得なくなってきた。

「もしかして……恋人？」

検索結果一件、ウィキペディア参照。

そんな感じの表情で、風斬は無言の肯定を行う。

「え……」

それによってやつと周りの空気が動き出す。

最初に言葉を漏らしたのは倒れこんだままの青髪ピアスだった。それがつまり、全員が一斉に。

[illegible]

とある高校、第一番、合唱コンクールにて。

「本当は、今日のお昼は頑張ったからって、それだけ言いに着たのに……なんでこうなっちゃったのかな」

「……はは、楽しみにしておく」

その後、なんやかんやで再び騒がし混じりの大合唱。すさまじく混沌とした空気を作り出し、かつそれが再び全員が燃え尽きるまで続くのではないかと言う状況に陥って、最終的には小萌先生イズ涙目イベントまで、そのまま騒ぎを続けた。

文句だったり、嫉妬だったり、説教（by 吹寄）だったり。

まあ吹寄のそれはどちらかと言うと警告が近いのだけれども、けれどけれど。

まあ、最終的には小萌先生の姿を見て、一致団結したのだけれど。因みにこの際、風斬からの応援補正、恩師補正で通常の三倍頑張っていた。

というか、誰かの為に説教する時よりも頑張っている気がする。

「えっと……なんだか凄く意気消沈してるけど、何が、あったの？」

「いやまあ……あはは」

軽く笑って、お茶を濁すようにする上条。けれど流石に風斬からの非難の目線が来る前に、洗いざらい白状した。因みに内容は、風斬と合流する前、携帯を教室に取りに行ったのである。

因みにこの際吹寄が教室内にいて、その前の競技を行った際に、随分と体操服が汚れてしまっていた。

また、今日は大覇星祭なのだから人が来ることはないだろうと吹寄が油断していたのも、原因の一つだろう。

そんな話を上条から聞いて、風斬はぶーっと、口を膨らませながら、頬を少しでも赤らめて、

「……謝った？」

とだけ、問いかけた。

「いやまあはい、見たのは一瞬だけでしたし、謝りながら締めましたけれども、まあ向こうからいろいろと説教をいただきましたが、お許しはいただけましたです、はい」

そんなしどろもどろな上条の言葉に、暫くはぶーっと、頬を膨らませていたが、やがてそれも止めて。

「そっか……」

軽く笑う。

「じゃあ、うん、許します!」

「ありがとうございますー」

笑顔で、手をはたく風斬。なんだかんだで、一連の流れに少し上条もドキッとしてしまった。

――

それから、少しごたごたがあって、インデックスを心配させたり、風斬には事情が説明されていたり、というよりも、インデックスを見張る一番都合のいい人間としてあてがわれたり。

いろいろなことがあった。

水面下で躍動する、魔術師と、それを追う上条たち。

裏腹に、楽しみひたすら楽しんで、思い出を築き上げる学生たち。

時刻は昼食、折り返し、上条も一度家族の元へ戻り、鋭気を養うべく、ハーフタイムを満喫するのであった。

そんな昼の出来事。

「えっと……み、美琴ちゃん」

「何?」

「素数って、幾つだっけ」

「……てんぱり過ぎ、というか、その素数ってどこから出てきたの？」

上条と、風斬と、御坂美琴、そしてインデックス。それがこの場にいる全員である。

偶然美琴と行き会って、上条の家族と美琴の家族をそれぞれ探すことになって、行動を共にしているのだ。というか、向こうも向こうでなぜか合流しているそうなので、携帯待ち合わせ場所を決めて待っているところ、といった感じ。

そんな折、インデックスは素直にご飯を待っているのだが、風斬はそうも行かない。

何せ上条の両親である。いわゆるご挨拶である。

現在、それが原因で風斬は普段の数段階上で、あわてた状態となっている。というか見てられない。

「あ、あはひゃ、ふくくくく」

「対に笑い出したわね……」

なお、ツツコミをしているのは美琴のみである。上条は心配そうにちらりちらりと見てはいるものの、自分自身も境遇は同じだ、緊張はあるだろう。

インデックスに関しては完全に昼食に頭が言っているので、ここではまったく当てにならない。

「む、むーむむー、むーむむー」

「唸り出した……ってか、あんたも重唱するんじゃない！」

右と左のステレオ放送、インデックスまで反応した。

「な、何事なのかな!? この地獄絵図は」

「上条当麻と風斬氷華は恋人同士、これから上条当麻の両親と邂逅する予定」

「……なるほど、というか、それだと私達は少しまずいかも」

「今更っ!」

ケツ、と吐き捨てる美琴。

少し考え事をするようにして、結論に至ったのか、インデックスも、ケツ、と吐き捨てていた。最近はどうでもないが、女の子を助けてフラグを立てるのは上条の趣味——（誤解）なのでしょうがない。

「まあ、ぶっちゃけ私達がここにいればからかいのネタになるし、逆に楽しいかもね」

「それは……まあそうかも」

「泣くぞ、泣きますよ、泣きますのことよ、上条さん」

けれどやっぱり涙は出ない。上条当麻は結局上条当麻なのだ。泣くよりも前に出る。当たり前じゃないか、それが上条という個人を形成する今であり、助けた少女——今その代表が、目の前にいる。助けた実感が確かとある。

それで、いいじゃないか……

などと、ちょっとばかりシリアスに決め込んでみたものの、しま

らない、本人たちは間違いなく真剣だが、状況は普通にラブでコメディである。

シリ阿斯は、夜の祭典に取っておくべきだろう。

特に、上条は。

と、

その時だった。

「やあ、待たせたな」

そんな、確りとした男性の声。

「あ、美琴じゃない、一緒にいるって本当だったのね」

凜とした、意思を確固として持つ女性の声。

「あらあら……刀夜さんみたいで中々愉快的な光景ね」

おっとりとした、しかしどこまでも響く鈴のような女性の声。

——上条刀夜と上条詩菜、そして御坂美琴の母親たる御坂美鈴。

この面子の親メンバーである。インデックスは不明、風斬はなし。

「あ、ええと……」

人と人が無限に交差し続ける大きめの広場にて、そこを掻き分け近づいてきた三人に、まず風斬が声をかけようとする。

「んー？ 美琴、もしかしてさっきも見たけど、あんたこの人に……」

「ああ、違う違う、私はただの友達、実はね……」

ゴニョゴニョ、なるほど。

「ハハーン」

キラリと目が光る。それが中々に似合うのは、なるほど、凄く若々しい人のようだ。

「それで、そちらが御坂美琴さん？ そっちはこの前あったかしら？」

「インデックスっていうんだよ！ とうまにお世話されてるかも」

「……どういう言い方だそれは」

呆れたように突っ込み、というか結構迷惑をかけてる自覚はあったのだろうか、この大食いハラペコシスター様は。

「なるほど、じゃあそっちは誰なんだ？ 見かけない子だけど」

「あ、か、風斬氷華っていいまひゅ、よろしくおねがいしま——ッッ！！」

噛んだ——それはそれは凄い勢いで風斬は噛んだ。なんだかんだで両親だから、とそこまで気負わず、かつインデックスの言葉である程度緊張をほぐせた上条と違い、風斬は極限状態に、今の今まで

あつたのだ。

口を押さえながら、もごもごとその場に座り込む。

「ンッ——！　ンッ——ッ！！」

凄く痛そうである。意識すれば直ぐに直るはずだがそこまで意識が回っていないらしい。完全にてんぱりまくっている。

「ん？　ちよつとまてよ？　当麻、そっちの美琴ちゃんは友達で、インデックスちゃんは違うんだろ？　だったらお前がわざわざココに……ということは」

考えをめぐらせる刀夜、何かピン、と来たらしい。

「その子が、例の彼女か？」

おおっと外野……御坂親子が色めきたつ。

「えっ、えっひよ、あの、はひ、そのほおりへふ」

完全に痛みから復帰しないまま、風斬が肯定する。なんだか先程のあれで一気に緊張の糸が途切れたらしい、気力すらも何処かへ行っているようだ。

「あらあら、刀夜さんと違って、身を固めるのが随分はやいわ」

「それを言われるときついなあ、今も昔も、私が好きなのは詩菜ただ独りなんだがなあ」

「ひゅー、皆熱いわねえ！」

ひゅーひゅーと囃し立てるのはその場に相手がいない組、完全にいないのそこにはいないのが独り、インデックスは何のことやらといった感じ。

「と、とりあえずさあ、場所を移そうぜ！ 今日には氷華がご飯を作ってくれたみたいなんだ」

「ち、な、み、に、私とあの子プロデューサーよ、レシピ通りにしか作れなかった凡百、風斬氷華ちゃんが天才シェフに大変身したんだから！」

「あの子？」

「そっちの二人にわかればいいのー」

「あらあら、どうしようかしら、今日は当麻さんがたくさん食べると思って多めに作ってきたんだけど」

「安心してほしいかも！ 私のおなかはペコペコなんだよ！」

何て会話をしながら、全員が全員、学園都市の喧騒へと、消えていった。

――

そわそわ、そわそわ。

先程の緊張からひと段落明け、それでも風斬はなんだか落ち着かない様子だ。それもそのはず、現在風斬の目の前で、上条がお手製弁当に舌鼓をうとうとしてるまさにその瞬間なのである。

喧騒溢れる学園都市の、穴場のように用意された休憩所、個人で運営しているようでレストランとも喫茶店ともいえない変な場所だった。

基本的にメニューが少ないためレストランに入るためという客よりは、持ち込み自由なお弁当を食べる避暑地として利用されているようだ。

こんな、よく見つけたなと感心するような場所で、現在運命のときである。

ドドドドン、ドドドドン、運命がそうして扉を叩くように、心臓の鼓動のような、緊張の胎動のようなそんな音が、どこからか聞こえてくる。

上条の端が動く、いただきますと手を合わせ、それからゆっくりとお弁当に手を伸ばしている。

ひどく時間が長く伸びた。嫌がらせではないかというほどに風斬の中であたりが遅く感じられる。仕方がないと言えば、仕方がない、無尽蔵にある風斬の集中力が、故。

上条とて、それを気づくことなどそうそうできない。

まあこのそわそわしまくりな風斬を見て、早く一口食べたほうがいいというのは、思うわけだが。

ならばと、すぐに弁当そのものへ意識を移す。ご飯をつめた下段と、おかずをつめた上段の、二段構成。どれも卵焼きや野菜いためやと、簡単なものだがそれ一つで一つの食材、といった野菜単品や冷凍食品のようなものはなく、手作りかつ実用的な、日常的に食べられるものだ。

美琴に料理を習ったそうだが、さてこれは美琴の判断か、風斬の

考えか。なんにしても、この内容はもしやこれからこの弁当を毎日食べられるのかと、期待せざるを得ない内容なのだが。

内容の確認を終え——ゆっくりと口の中へ、

そして、

「……」

なんだろう、これは。

あらゆる補正を込みにして、身内鼯鼠に恋人鼯鼠、色眼に色眼を重ねかけ、そんな状況でいうのであれば、

「めちゃくちゃうめえ……」

息しか漏れない、そんな感嘆の言葉だった。

ただおいしい、のではない。最初の感触、口の中で転がる味、そして後味、そのどれもがすべて、最上級にそれぞれの旨みを放つのだ。

ただ一言で評価するにはおいしい、けれども何かで飾るにはあまりにも圧倒的すぎる。

だからこそ、上条からはそんな言葉が出た。だからこそ上条は、すぐに次へと箸を伸ばした。

——笑って、風斬と、一緒に。

番外編『大層のお弁当』（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
番外編、本編完結まで気が向いたら書いていきます。

プロローグ『罰ゲームよん! Mikoto | misaka』

「というわけで、本日集まっていたいたのはほかでもありません」

「あの、それは最初に上条さんたちを呼びつける前に行ってほしいのですが」

何て会話が繰り広げられるのが、衣替えを終え、かつてあれほどまでにあたりを照らした日差しも、柔らかいものへ姿を変えて、ここが地下でなければそれを満喫できたことだろう。

現在、最初の声の主、御坂美琴、そして突っ込みを行った上条当麻。最後に、

「なんで私達だけなのかな、いつもの人たちって言うわけには行かなかったの？」

と疑問を呈す風斬氷華である。

人が行き来する地下街、食の広場とも呼ばれるココは、洋食店和食店リッチなレストラン庶民派定食屋などなどの店をメインに、様々な施設が併設された食を主とする娯楽スポットである。

ここの目玉はやはり食べ歩きをしながらゲームが出来るゲーセンだろうか。

そんな地下街の人ごみから少し外れた、一直線に広がる店と見せの間に、美琴と上条たちは集結していた。とはいえ、普段集まるメンバーの半分ではないのだが。

「いつものメンバーの中でアベックがあんた達しかいなかったのよ」

というのは美琴談。

なにやらいつものメンバー——ここにいる三人に加えて、打ち止め、ワンコ、インデックス、一方通行が加わる——の中から上条と風斬のみを集めて何かをしたいらしい。

「それにね、そっちのあんた、あんたよ……忘れたとは言わせないんだからね?」

ピシッと上条を指差して笑む。

勝気な、余裕綽々と言った様子のそれで、というか——日常にそんな物必要ないのかという攻撃的な笑みでもって睨みつける。

体全体を射抜くように——美琴は言葉を溜めて、

「罰ゲームよん!」

自信たっぷりと言い放った。

——その割には、少しばかり二人の反応が冷たいのだけれど。

「……ばつ、ゲーム?」

「えっとあの……こんな所でそんなに叫ぶと、迷惑かって……思うんですけど」

首をかしげる上条に、嗜める風斬。

見れば、周りの視線は美琴に奇異を向けていた。流石に、ポーズを決めてしたり顔で宣言して、それがこんな人ごみであるのなら、視線を集めない理由にならないのだけれど。

「ね、ねえそのあんた、本当に罰ゲームって聞いて覚えてない？
たしか今月の事よ？」

流石にそれはあせったようで、美琴が声をかけてくる。どうやら本人としては『げ、罰ゲームかよ』、『罰……ゲーム？』という反応を期待していたらしい。

距離感が本人が思っていたよりも近かったらしい、まず気遣いが風斬から浮かんできたようだ。

「いや、んー？ 罰ゲーム、ビリビリ、罰——んーあー」

とはいえ、悩んだ様子の上条当麻、心当たりは小骨が引っかかる程度の感覚としてあるようで、喉元を何度か叩きながら思考する。

「ビリビリじゃない、御坂美琴よ」

何て、適当に返しつつ、久しぶりに呼ばれたなど、何となく回想、最後に呼ばれたのはボロアパートの時だったか、自販機にお金を飲まれたときだったか。

「えっとあの、そういえば……大覇星祭の時に、美琴ちゃん、何かそんな感じの事、話してなかったっけ？」

確か、結構しきりに話題を出していたはずだ。
なんだったか、

「そ、ってというか、本人が覚えときなさいよそのツンツン」

「いえあの、何故上条さんはビリビリてきなニュアンスで呼び名を

つけられているのでしょうか」

「べっつにいい。っていうかさあ、その可愛い子ちゃんが答え出したじゃない、あんたちゃんと分かれるはずじゃない、大覇星祭の時に罰ゲームの話したじゃない」

「ああーあーいや解ってますとも、上条当麻は今日一日貴方の奴隷として働きますとも……で、一体何故氷華様と一緒に呼んだのでしょうか」

ペコリとお辞儀、因みに、美琴に対する奇異の視線の中に、上条自身への嫉妬てきな視線が混じっていることに対する仕返しである。とはいえ、美琴自身はまったくぶれた様子も無く。

「二人で契約して携帯をもってよ」

何て、笑いながら言ってきた。

――

「んーと、つまりだなあ」

「そのペア契約を私達がすれば、ゲコ太マスコットってのが手に入って、美琴ちゃんはそれがほしい……と」

「いやまあ、風斬さんって携帯持っていないじゃない？ 折角だしここで持ってもらおうかなって言う、ほんとよ？ マスコットはおまけなんだから、ほんと……まあゲットできたら貰うけど」

なんてことが移動中。

「おや、お姉さまではありませんか、とミサカは驚きを隠さず声に出します」

御坂モドキというか、謎の妹達に出くわしたのもこの時。

「始めまして、シリアルナンバー10032号です、1号がお世話になってます。とミサカは行儀よくお辞儀をします」

ミサカワンコと御坂美琴はワンコが髪を伸ばしているので大分その姿の違いがわかりやすい、けれどもこの御坂10032号は完全に容姿が美琴と一致し、且つ服装も――ワンコが始めてあったときはそうだったが――常盤台の制服だ。因みにこれは冬服である。

「あれ？ ワンコ以外の妹達ってまだ調整が済んでないから研究所暮らしだって聞いたんだけど、終わったの？」

「リハビリです。今日、ここで動作の確認をし、問題が無ければ最終調整へと入ります、来月の半ばまでには世界のミサカ達全員があの1号野郎と同じように活動できます。とミサカはちゃっかり1号へ毒を吐きます」

言い終わった後に、ペツと唾を吐き出す。どうやらワンコに随分と恨みがあるようだ。

「いえあの、それをココでやられても上条さん他数名はついていけないわけですが」

「簡単に言えば一人だけ一歩進みやがってお姉さんぶってるんじゃないかねえおめでとう！ ということです、とミサカは簡潔に説明します」

つまり、妬みと羨みみたいなものらしい。

「それで私達はこれから予定があるんだけどあんたどうすんのよ」

「折角ですし、傍観派のミサカとしては、この面子にくっ付いてそれぞれの派閥の恨みつらみの声を聞きたいのでついていきます、とミサカは謎の単語を持ち出しつつ、この三人の中に溶け込みます」

「溶け込むって……美琴ちゃんと同じ容姿な時点で無理だと思うなあ」

なんというか、御坂美琴とこの妹達は似すぎているのだ。端から見れば見分けがつかないし、双子と言うにはなんだか違和感を感じてしまう。

「別に何の努力も無いわけではないですよ？　ただ何かをしても1号が先に行くのですよね、たとえば髪を伸ばそうにもそれはもう1号ですし、一部の急進派かつこ笑い以外は大分手間取ってるのが現状なわけです、とミサカは切実な恨みを放ちます」

「上条さんとしては傍観派とかの方が気になるわけですが」

釣られる上条、

釣る10032号。

「おやおや見事な上条当麻様、ではお答え致しましょう、急進派や傍観派というのはえすえ——」

「ストロップ、そこまでよ」

「……何故止めるのですか、とミサカは不満たらたらにお姉さまを睨みつけます」

とはいえ10032号のジト目はいつも通りといった様子で、それ以外の表情に変化も見られない、何か変わったかと言えば少しだけ四人の中で10032号の距離が変わって美琴に近づいただけ。

「お黙りなさいってことよ、なんかややこしくしそうだし、というかあんた、話題を妙にするのが特異なのね」

「毒舌弁舌御坂ちゃん、です。と、ミサカは自分のシリアルナンバーが大きすぎて丁度いい通称が1号のように出てこないという本音をぶっちゃけます」

「……そんな理由かよ」

げんなりと上条が呟く、やれやれといった様子で10032号を見る。

「む？ どうやら私達を馬鹿にしているようですね、こちらの涙ぐましい努力も知らずに、とミサカは……ミサカはあ！」

「なにやら凄まじい執念を感じますが、それ以上上条さんにどうしろと言うのでしょうか」

「別に気にしないでいいんじゃないの？　なんか、こいつの言うことの半分がでたらめな気がするし」

「失礼な！　この潔白であるべき、清く正しいミサカに何を！　と

ミサカは主に純——ゴボボッ！」

言いかけて殴られた。

一体何を言おうとしたのか、そのままピクピクと地面に倒れ伏して震える10032号、大分重症のようで立ち上がれそうにない。下手人である美琴はそれを無視して先に進もうとする。

「え、あつと……いいの？」

「べつつにい、だってどうせ行きずりじゃない、そもそも個性の確立を変な発言と語尾に頼ってる人間なんてまだまだなのよ」

お嬢様口調とか、なんなんですかア！　みたいな。

「だ、ダウンから立ち上がりかけたミサカを、即刻ケーオー、さ、さすがお姉……さま、ガクッ」

「せめて黒子見たくアイデンティティを確率してみなさいよ、主にマジメなときのあいつみたいなの」

「せ、切実だな……」

割と変人は美琴の方に集まる傾向があったりする。上条と美琴の共通ではない、上条の知り合いで、変な人は神裂やステイルしかない。

「一応……一方通行さんはぶっきらぼうなだけで普通の人だと思うけどなあ……」

「いや、私あいつ嫌いじゃないけど、避けておきたいタイプの人間

だし、なんか最近の厄介ごとって大体あいつがらみなきがするのよねえ」

例の初めて全員が集めたとき然り、残骸争奪戦しかり、何かしらあの男はこそそ動き回っているきがするのだと、美琴。

「避けておきたいタイプ……ねえ、上条さんにはよくわからないけど、それこそ嫌いってことじゃないのか？」

「違うのよ、なんていうか。感謝はしてるのよ、多分ワンコとかが生きてるのはなんだかんだであいつのおかげで、気に入っているっていうのは多分ある。からかえば楽しいし、でもね……怖いのよ、少し」

少し、そう、少し。――繰り返して、

「あいつは間違いなく何かを背負ってる。――私達の周りにはいろんな人間がいるわよね、当然全員が全員、何がしかを背負ってる。あんた達なんかいい例よ、お互いが全部、お互いなんだから」

「まあ、確かに」

軽く手を繋いで見たりしながら考える。

何となくで繋いだので、お互いに驚いて直ぐに放したけれど。

「――一方通行のそれは、間違いなく私達のそれよりとんでもなくおおきい。逃げた魚は大きいって言うか、まあそんな感じ。だから……だからよ？」

もしかして、一方通行は。

「自分の目的のタメに、ワシコを殺しちゃんじゃないかな」

そんな、そんなバカみたいな思考、とは、至れなかった。

プロローグ『罰ゲームよん! Mikotomisaka』(後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。

12巻編! ここと十三巻編が終われば第一部完!

補足

・さあ。

第一章『なんで俺なんだよ Accelerator』

1

一方通行はまどろみの中にいた。

程よい温度を保つ室内、寒さだけが一人で辺りを踊りまわるのもなく、暑さだけがひたすらに居座り続けると言うのでもなく、うねるような、しかし流れの途絶えた水のように――波というべきだろうか、雲と言わなければならないか。

部屋の辺り一帯、学園都市製の空調はなんというのだろうか、それを絶妙に演出していた。

一方通行が暮らす学園都市のとある一室。

第一位であるが故にありあまっていた奨学金のおおよそ半分をつぎ込んで丸ごと“買い取った”とあるちいさなビルである。

これはほんの一ヶ月程前にとある目的のための拠点がほしかったのだ。

情報収集のためのありとあらゆる学園都市製、ひいては“木原印”の機械を詰め込んで、且つ隠れ家としての意味を持つ。それも学園都市の奥の奥にあるような文字通りではなく、学園都市を歩いていればどこにでもあるような数十階建の超高層ビルである。

そんなビルの一室を陣取って、休憩のための施設として使用している。元々とある会社のオフィスとして使用されていた経緯から用意されていた給湯室を軽く改造し、生活空間にしているのである。

因みに、ここには所属の無いミサカ――具体的に言うとな打ち止めとワンコである――も暮らしていたりする。

軽く手を左へ振るう。

大きめに設けられたベット、独りで眠るにはどうにも大きいが、それゆえにゆったりとしたスペースを独り占めできるそこは、単純に言えば休憩にはもってこいの場所である。

とはいえこれを用意したのは彼の“先生”であって、彼は文句を言いながらなんだかんだ愛用しているという身なのだけれど。

「シーアー、」

なんだかんだで漏れ出る声。

意識がない一方通行は、当然意識のしようがない、完全な本能の声、動物と変わらないそれは、見てくれからして、悪いと言うわけでもない。

なんだかんだいって——服を着せれば華奢な少年、女装させれば少女に見えないこともないのだ。

まあ中身は六年ほどの特訓を繰り返してきた無駄のない筋肉野郎なのだけど……ぶっちゃけいうと上条よりもいい体しているけど。

とかく、

「……凄く可愛い、ってミサカはミサカは普通に声を出してみたり」

毛布に包まった少女はぴよぴよことその頭に揺れるアホ毛を惜しげもなく、目前の眠れる一方通行へ披露していた。

現在この少女——打ち止めがラストオーダーいるのは一方通行が眠る巨大ベットの隅っこ、顔だけをベットに乗せて、眠りに着いている一方通行を観察しているのだ。

とはいえ、普通ならばそんなところで声を隠した様子無く言えば、起きない人間では、一方通行はないはずなのだが——

「実は、この人、眠るときは音も反射して絶対安眠モードだから、ワッ！ って叫んでも全然気づかなかったり。ってミサカはミサカは虚空へ向かって簡単解説」

一帯誰へ向けてその情報を発信しているのだろうか甚だ疑問だが、打ち止め自身は楽しげに一方通行の顔を眺めている。

「ツフ、ツフフフ、ツフフフフフフフフ！ ってミサカはミサカはたっぷりすぎる余裕を込めた笑みを浮かべてみたり！」

軽く体を持ち上げて、全力の雄たけびを上げる。

「と、いーうわけでえ！ こんなスリーピングアクレレーティさんには、寝起きドツキリの毒りんごをプレゼント！ ってミサカよミサカ、世界で一番一方通行！」

今の時刻は昼半ばを回って、もはや完全に夕方に近い時間帯となっている。

と、いうのも打ち止めは元々ここを特に意味も無く探検していたのだ。その途中、こうして眠りこける一方通行にキュンとキて寝起きドツキリに思い至ったわけである。

「さあて、何をしようかな？ 頭に肉？ かけるかなあ、あ、そうだ、服にかけばいいんだ！ ってミサカはミサカはナチュラルにこの人の弱点を突いてみたり！」

どこからか持ち出した水性マジック、狙うは白を基調とした彼のなんだか変な服だ。ちなみにこの服、上条や風斬と殺しあった当時からこんな感じである。

「服に肉ー、略して肉！ ううん、これはもしかして素っ裸ー？
ってミサカはミサカは言葉に感動を載せてみたり」

「ごそごそ、近寄る。」

「ふんふふーん、ふんふふふーん」

持っていた毛布を離して、変わりに一方通行と寄り添うようにしのびこむ打ち止め。その姿はまるで忍者の如く、正しくはお父さんの布団にもぐりこむ子供の如く。

と、その時だった。

——本来なら打ち止めは気づいておくべきだったのだ。一方通行は眠りながらてを左へ振るっている。彼はそこまで寝相がいい訳でもないのだ。

寝ぼけた一方通行の右腕が、もぐりこむ打ち止めにクリーンヒット、横向きだった打ち止めは仰向けに、一方通行の隣へ転がる。

「ひゃわっ、不測の事態！？ ってミサカはミサカは救援しんど、うわぁ！」

更に、そこへ追い討ちをかけるように一方通行が転がってきた。ぐるんと体を反転させながら打ち止めを押しつぶす。

「ン……オお？」

流石に、それだけ異物があれば起きるのだろう、もしくは、丁度そこで起きたのか、なんにせよ一方通行がそこで目を覚ます。

なにやら感じる変な感触、反射を切って、それが何かを確かめる。

「ん……いう……く、くすぐって、み、みい」

「あん？」

やわらかい感触、そう、これは確か人の体ではなかったか。そう考えながら、ベットに手をついて、少しだけ起き上がる。

——考えても見てほしい。現在、一方通行は打ち止めを押しつぶしている、そしてその状態から立ち上がった。その上その押しつぶしているものが何か、手で触って確かめている。その場所がどこか、もはや言うまでもあるまい。

まあ、つまり解りやすく言うと。

現在一方通行は打ち止めを押し倒しているわけで、しかもそれを堪能しているわけで。

そんなものを、ここに同居している他のミサカが見れば、それはもう誤解に誤解しか呼ばないわけで。しかも打ち止めは基本、寝る時はほぼ最低限の服しか着ていないわけで

「な、何を……しているんですか？」

「……はア？」

完全に空気が固まった。

ものの見事に、基本扉のないこの休憩室、覗けばそこには一方通行と打ち止め、何故このような事に及んでいるのか、そんな疑問はさて置いて、覗こうと思えば覗けてしまうこんな場所で……

さらに、テンパッタのか、それとも固まったまま視線を向けるワ
ンコに気づいていないのか、打ち止めが顔に朱を増して、ぽつりと

「……やさしくしてね？」

何て、誘うように呟いて——それはもう、誤解を呼ぶことしか、
出来ないわけで……

バチバチと、帯電をしながら、元は鉄製である一方通行 a n d 打
ち止め i n ベットが持ち上がった。

第一章『なんで俺なんだよ Accelerator』（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

あなたの心に根性を、今回のお話は、絹旗建設の提供でお送りしました。

補足

・今回のタイトルは実際にしゃべっているか、もしくは本人の心の叫びです。

第一章 2

2

その後、というかことの顛末というか、後日談。

思わず動転して能力が動いたのだろう——持ち上がっていたベツトは直ぐに元に戻った、といはいえ相当乱暴に床を叩いたのだが。

「んぎゃ！」

ドン、コロコロ、などと微妙に響く音を残しながら着地した。因みに一方通行は既に能力反射済み。

「どどどどど、どういことですか！」

詰め寄ってくるワンコに一方通行はどうしたものかと思ひながら、気がついたらこいつがここで勝手に押しつぶされていたと釈明。

「な、何を言ってるの！ すっごく情熱的に押し倒してるくせに、ってミサカはミサカは全力で抗議を表明する！」

当然抗議する打ち止め。

結果しか見ていないワンコとしてはどちらを支持すればいいのかもわからず、本人間で決着をつけてくれと丸投げ。

なんだかんだで口論が始まる中、何となくそれがアホらしく見えて、退出しようとするワンコ、ふと下を見ると、なにやら水性のマジックが、コチラに転がってくる——

「何ですか？　これ」

思わず拾い上げて口に出す。二人も気づいた様でそちらに向いた。

「ンだア？」

「っげ」

「……っげ？」

なにやら面白い反応をする打ち止め。

「おい、その『っげ』っていうのはどオいう意味だ」

「いいいいいや、ミミミミ、ミサカにはちよつと解らないなあ！
ってミサカはミサカは自分の持ってきたマジックから目を反らし
て見たり」

「……ねえ、打ち止めちゃん」

「ひいいいい、ワンコが凄く怖いことになってるう！」

「私、嘘はいけないと思うんだ嘘は」

「ななな、何もやってないよ、ってミサカはミサカは隠し切れない
語尾で真実は悪戯しにきたただけだって暴露してみたりっー！」

墓穴を掘る打ち止め。アーツ！　などと言いながら転がりまわる。

「っはっはっは、ばれてしまっはしょうがない！　っと、ミサカ

はミサカは未来への脱出！」

ベットから飛び降りて、ワンコの横をすり抜ける。

唐突なことで、少しでもだけ反応が遅れる。とはいえ半分以上は油断と慢心からくるものだが。

「……追え！」

「了解！」

高速で飛来する成長した自分、などというトラウマを打ち止めに植えつけつつ、どったんばったんとその騒動は終わりを迎えた。

後には、その階層全体に打ち止めのうめき声と説教を行うワンコの声が響いていた。

――

あたりは随分と静かになっていた。

打ち止めは姿が見えず、どうやら外に出たらしい。このビルはオートロックと指紋認証があるんだが、指紋認証はともかくオートロックを解除する手段をあの少女が持っていただろうか。

……恐らくは探しに行く必要があるだろう。

まあとはいえ今一方通行は特に何かをするようもない。

打ち止めを探すのだって最悪ミサカネットワークをのっとなって捜索させればいいだろうしそもそもネットワークにも見かければ声をかけるように話は通してある。

現在学園都市にいる妹達はワンコを除いて20人いないわけだから、早々見つかると思えないが。

「にしても……つたく」

困ったことになった。言葉は極単純にそう吐き捨てる。

それは当然先程のドタバタの事である。詳しく言えばその原因、打ち止めが一方通行に対して行おうとした悪戯だ。

いや、悪戯自体は対して困ったことではない。別にそんな事をされても一方通行自身は気にした様子はないしそもそもあの結果だ、過ぎたことはどうだっていい。

問題は打ち止めがそれを行おうとしたこと。

端的に言えば、打ち止めが一方通行自身にどれほどかは判断がつかないが親愛の情を抱いていると言う事だ。推測だけでことを判断すれば、恐らくコチラが拒否しても、戸惑う程度には。

どうしようもなく面倒な話だ。

情というのは厄介なものでそれが一体どんな種類であれ、覚悟を鈍らせる。当然一方通行はそんな事でぶれるつもりは無いが、不都合であることは間違いない。

「つたく、ンなこたア一つで十分だつツウのによオ」

ならば打ち止めはジャマなのか？ そんな事はない、超能力妨害の対策は全てミサカネットワーク便りだ、自身の能力を行使できる範囲を単純計算で射程距離内まで拡張できる電磁アームも考えてみれば一方通行の欠点を極端に零へ出来るものだ。

打ち止めのサポートは、中々如何して最適でもあった。——優秀な相棒、それは一方通行の感情で間違いないはずだ。

「ありえねェんだよ。俺はあいつ以外の全てを切り捨てると決めたんだ——ありえねェ」

一方通行が打ち止めの事を、なんだかんだ妹のように思っているなど。

——そんな事を考えていたからだろうか。意識がなんだかんだ回らなくなってきた。というよりも、思考のリセットが必要になってきた。

……ばかばかしい。

そうやって考えて手近、シャワールームが敷設された洗面所の扉に手をかける。

この時ももう少しあたりに注意を向けていれば、そうはならなかったのかもしれない。

洗面所の中から聞こえる音に気づけば、もしくは大丈夫だったのかもしれない。

ただ、そうならなければ――

扉の先には、一糸乱れぬ姿で体を拭くワンコの姿があった。

どうやらシャワーを使っていたらしい。

出てきたばかりで今は手を拭いているようで、丁度手を伸ばして拭いている。要するにワンコの体を隠すのはワンコ自身の湯気程度しかない。

風呂上りだからだろう、体は赤みを差し、どこことなく扇情的だ。

「……はア？」

「え？」

お互い何のことだかといった様子で声を上げる。

「ちょっと、何やってるんですか」

我に返ったのか、随分と落ち着いた声でワンコが一方通行に話しかける。

「早く閉めてくださいよ、あんまり呆けると理不尽に殴られますよ？」

そうでもなかったようだ。どうやら混乱しすぎて現在の自分の状況を客観視してしまっているらしい。コレだけ言っておきながら自分は体を隠そうとしないのがその証拠か。

怒った！　と言う風に視線を送るワンコ。

やれやれと一方通行は頭をかいて。

「その前に自分の状況を思い出してみたらどうですかねェ」

ぶっちゃけワンコがそんな事になっていようとどうでもいいので、適当に現状を伝える一方通行。視線はもはやワンコを意識してすらない。

状況を確認し、そのまま洗面台の前である。

「……っへ？」

バシャっと、あふれ出た水で顔をぬぐう一方通行。それにあわせて少しずつ現実を認識し始めたワンコ、そうして合点が行ったのだろう。

「っくく!!」

元々赤みが差していた顔を更に赤らめてうずくまる。

「そオやって隠す前に服着たらどオだ？」

「ッ！　ッ！」

顔を拭ききって、踵を返す一方通行。

「も、文句は言わせませんからね！」

扉に手をかけ——その時だった。

不意に後頭部へと衝撃が伝わってきた。反射はしているはずだ。何事かと、地面に転がる甲高い音を感じ取る。見れば、どうやら口をすすぐ水を入れるコップらしい。

（あん？　どオいうことだ。反射は切ってねエはずだぞ）

そう考えて、何となく合点がいく、どうやらワンコはミサカネットワークに接続したらしい。自身の脳にアクセスされた痕跡がある。少しばかりミサカネットワークからの干渉率を上げすぎたか。

なんて思考をめぐらせていると。

「あ、貴方が悪いんですからね！　人が着替えをしてる最中に突然入ってきて、謝りもせず、しかも意識すら向けないなんて！」

「ンだよ、興奮して襲い掛かれた方が良かったのか？」

うずくまったままのワンコ、数歩分先から見下ろすように一方通行が視線を向ける。

「一方通行さんはそんな事しないでしょう？ どうせ。……というか、私にだってプライドがあるんです！ 一応結構びしょじよだっと思ってますよ！」

否定はしないが、とりあえず服を着たらどうだろう。
いや、それよりも。

「悪かったねエ、俺はギョロ目で巨乳で少し怖そうだけど内面が凄く可愛い人じゃないと興奮しないンでね」

当時はそうでもなかったが、アレは間違いなく大きくなる。
と、コレも関係ないが。

「そ、そうですか……」

まさかの限定的過ぎる答えに何かを感じたのだろう、ワンコがたじろぐ。

「つつか、さっさと服着ろよ、みつともねエぞ」

それに……と、ドアを開きながら軽く振り返り。

「もう随分寒くなってんだ、風邪引くぞ」

——ガラリ、と音を立てて、扉が閉まる。

「……」

後に残されたのはワンコ独り。
ハア、と一つ息を吐いて。

「ほんと、頑固みたいに一途だなあ」

ぽつりと、そんな事を呟いた。

――

……まったく、吐き捨てる。

何が『一方通行さんはそんな事しないでしょ？』だ。

「そじゃねえだろうが、そんな事、問題ですらねえだろ」

嫌になる。

そんな感情無駄にしかない。

どうしてだ……

「俺アオマエを殺そうとしたンだぞ？」

どうして世界は、今更自分に優しくなったのだ。

だからこそ、理不尽。

こんなやさしい世界ならば、果たしてお前はどこかへ行かなくて
も良かったのだろうか。――いや、

「なア、どうなんだ？ 砥信――」

答えは、考えてみるほどに甘かった。

第一章 2（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
青春の味がするセロリはいかが？

補足

・今回は諸事情で違いますが、所謂理不尽な暴力はほぼ零で行きた
いです。

第二章『え、えっと……ピース！ Hyouka | kazakiri』

1

「というわけで、写真取るわよー！」

「いえーい、とミサカは蚊帳の外であることをいい事に二人をあおります」

まだ快晴である昼下がり。

とはいえここは地下街、様々な娯楽施設が充実する時間をつぶすには中々一向な場所である。とはいえ上条達グループは美琴の指令により携帯の機種変更及び新規契約に乗り出しているのである。

因みに費用は美琴持ち。

「ん……あー」

「え……うう」

なんだか顔を赤らめながら、少し視線を横にそらしている二人、上条と風斬である。現在、先程の美琴の言葉通り、写真を撮ろうというところである。

「ちょっとー、恥ずかしがってないで早くこっち向きなさいよー、見てるこっちがなんだかむかついてくるわよ？」

「確かお姉さまも昔はあの男に少しばかり興味があったのでしたっけ？ とミサカはあそこにいるアレの過去の所業を思い出してみます」

「まねー、フラグとして成立する前に終わってたけど……」

とりあえず早くしなさい、と視線で美琴が語る。

流石にずっと意識できないままと言うのは両者としても歯がゆかったのだろう、ちらり、ちらりとお互いを見る。とはいえまだそこまでだ。

「ねえ、もうめんどくさいから私とあんたでとってそのまま契約していい？」

「え？ いや、それは何か違うんじゃないか？」

「そ、そうですよ！」

「解ってんなら早くしなさいよ、いい？ 命令、罰ゲームなんだからね」

はい、と声を合わせる両者。

息を合わせて勢いよく手を組んで画面に映りこむ。因みに上条が左手、風斬が右手。

「んじゃー、はい、チーズ！」

「え、えっと……ピース！」

二人とも、なんだか困ったように笑って、

「へー、中々良い笑顔じゃないって」

軽いシャッター音がして、美琴が撮影を終える。
後はこれを提出すればいいそうだ。

「カップルですね、とミサカは眼福を堪能します」

困ったように笑う二人はなんだか幸せそうで、すこしの気恥ずかしさが初々しいものの、お似合いという言葉がそれこそベストカップルである。

「んじゃあ後は任せたわよ、私は首を長くしてゲコ太を待ってるんだから」

いいながら携帯――上条のものだ――を手渡す。

「お、おう」

左手を結局組んだまま、右手で携帯を、受け取る。

「んで？　いつまで腕組んでるの？　もしかして私、中てられてる？」

「へ？　い、いや、ちち、違うよ！」

ちょっと心地よかっただけと弁明する風斬、なんだかんだのろけている。

「まあいいわ。あんた達は結構二人で一人みたいなところがあるし、丁度いいんじゃない？　氷華さんは特に“そう”なんだから」

左手で上条が手を使っているのが特に、なんて笑ってみせる。

「……？ それはどういふことですか？」

「あら？ もしかしてあの子辺りから聞いてない？ ……まあいいわ、そのうち話すから、もうちょっと待つかあの子から聞いて頂戴」

「解りました、とミサカはここはさすがと引き下がります」

なにやら風斬に対して何かを感じ取ったのか、意外と素直に10032号は承知した。流石に美琴も意外だったのだろう、軽く驚きつつ、二人を店の中へ送り出した。

「んじゃ、私達はあっちの方で待ってましようか」

言って美琴は近くのベンチを指差した。

――

「それで、お姉さまとあの男の馴れ初めとか聞いてよろしいでしょうか、とミサカは何となく気になったことを遠慮なく聞きます」

「……ほんと遠慮ないわね、というか馴れ初めじゃないわよ、邂逅とかそんな感じ」

ベンチに座って、両者は軽く息をつく。

先程まで随分と中てられていたのなんだかんだ疲れていたのだ。恐らくあの二人はまったく堪えていないのだろうが。

「まあね、あんた達の実験、あいつ等が止めてくれたアレ、アレのあった日の昼にね、丁度あいつを見つけたのよ」

遠慮が無いと咎めつつ、それでも美琴は言葉を聞く。

「そこで彼女云々、最強云々について話したのが最初の思い出かしら」

「それは又随分と運命的ですね、とミサカはあのフラグメイカーめ見たいな目線をこの場にいない誰かさんへ向けます」

「――あいつの、ね」

「？ それはどういう意味ですか？ とミサカはハテナマークと声に出してみます」

「おぼえてなかったのよ、あいつ。冗談には見えなかったし、多分私の事を忘れてたんだと思う」

「それは本当ですか？ 流石に、お姉さまのような人を忘れることは不可能だと思うのですが、とミサカは暗にお姉さまは凶暴だと告げてみます」

バチッ！

「どういうことだゴラァ！」

軽く電流が迸る。

「……まあそれはいいのよ、それは――問題はね、あいつが私を忘れたのと、あいつに彼女が出来たのが、多分、私が最後に会ってからあそこで会うまでの間だって事よ」

最後に美琴が会った時——というか、まだ多少ながらあの男を気になっていたとき。

上条当麻はなにやらボロアパートで本を読んでいた。何の本だったかは解らないし本人も読む気をなくしているようだった。

恐らくは結構面倒な本なのだろう、たとえば明治時代の文豪の本とか。

それから、会うまで、おおよそ一週間ほどだったか。

その間に——何かがあった。

「私とあいつが本当に始めてあったときもそうなんだけど、あいつは勝手に人の事を助けようとするらしいわ、だから——何かあったんだと思う」

「何か……ですか、とミサカは首を傾げます」

「それが何かはわからないけど……別にそれが悪いとは思ってないわよ？ あいつにだって少なからずプラスな筈だし。ね」

それに、と美琴は繋げるように、しかし少しだけ視点をずらして。

「大覇星祭の時、私とあいつわりとガチでバトったじゃない」

「そういえばそうでしたっけ、とミサカは大覇星祭の記録を漁りながら答えます」

「そ、でまあその前、あいつがまだ何かをやらかす前にね、少しだけあいつと喧嘩したことがあるの」

「お盛んでしたねえ、とミサカは記憶をでっち上げながら答えます」
ペシ、と軽く10032号を叩く。

痛くはないだろうが、何をするんだと非難がましい目線で見られた。

「まあいいわ——結論から言うとな、あいつ、凄く強くなった、あの時はああなったけど——」

「そもそも右腕一本でしか防御できないという条件化でお姉さまと互角にバトルできるというのは異常でしょう、とミサカは呟きます」

「もしかしたらあいつは手加減してた部分があったのかもしれないけど、それでも間違いなく、地力からしてあいつは成長していた」

信じられないくらいにね。

美琴は何となく、そんな風に溢す。

「多分、元は喧嘩が出来る普通の高校生程度だったと思うのよ、でも、それが一つ段階を超えた。それくらいあいつの成長はすさまじい」

「……とはいえ、それが一体どうなるのですか？ とミサカはお姉さまに最後の答えを求めます」

「わかんないわよ、そんな事」

——ふと、少し遠くに見える携帯電話を扱っている見せの扉が開く。当然ながらそこから出てくるのは上条当麻だ。
隣には風斬もいる。

手を組んだのは話したようだが、それでもなんだか手を繋いで歩いてきた。

「あいつはなんだって出来る。そんな気になるのよね、自然と」

そんな風に、自然と言葉が漏れて出た。

二人は立ち上がって上条達に近づく、出来れば、この二人の近くにいたかった。

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

十二巻分は基本各キャラの絡み、会話がメイン。

補足

・みこっちゃんのフラグフォロー。

・因みに上条さんの記憶は名前を覚えていない、までが確定です。
美琴が知り合いである、というのは覚えています。後は未定。

第三章『雨、ひどいね Hyouka-kazakiri』

1

時間も大分、既にあたりは夕刻を迎えただろうか。

残念ながらそれを確かめる術は、肉眼では存在しないのだが、現在、学園都市は雨に包まれていた。黒く覆いかぶさるように降りかかり人々の足を止めている。

一方通行とワンコは外に出た打ち止めを搜索していた。

元々探す予定は会ったのだが、あの後なんだかんだギクシャクしてしまい、こうして探さざるを得ない状況になるまで、打ち止めは放置されていたのだ。

「おい、打ち止めア！ 今どこにいる！」

『ちょっとシスターの人と雨宿り中！ ツてミサカはミサカは素直に答えてみたり』

ミサカネットワークを介して、言葉にするのは面倒ゆえと、する必要もないのになぜかギクシャクしてしまう自分への苛立ちか。

トン、トン、と軽く地を叩き苛立ちを発散すべく、更に声を張り上げる。

「具体的な場所だ！ 隣に誰かいるならかまわねエが、そこに迎えに行く奴のこと位ちったア考えやがれ！」

『安心してー、ミサカには強い味方がいるんだから』

「答えになってね……畜生、切断しやがったな？」

ふざけるなど心の中だけで吐き捨てる。

通常の端末であるところの一方通行はマザーコンピューターから一方的に通信を切断されれば向こうの許可なしには通信が出来ない。接続事態は出来ているし、非常事態に向こうからの強制切断などほばありえないのだが、こういった平時には随分と苦労させられそうだ。

「と、とりあえず探しましょう？ ケータイにも連絡かけてみて……」

「ンなこたア解ってる。だがあいつは一緒にいるシスターの携帯も差し止めてるだろオナ」

地力で探すしかないだろう。

生憎と、ミサカネットワークはどこに在ろうと接続は可能だ。場所を割り出す判断は出来ない。携帯であればある程度探す場所は絞れたが……普段のクセが災いしたか。

「しょオがねエ……嫌な予感もする、早く言ってとっと帰るぞ」

そうですね、と予想した、ワンコからの答えはなかった。

軽くしたうちをして、一方通行はビルの中から、雨が降る町の中へと飛び出した。

――

夕闇を遮るように、しとしとと振り出した雨、人を叩くには十分で、無理やり歩こうにもこの冷たさはこの時期きつい。

現状、外を生身のまま歩くには随分と面倒なレベルで、路上に人は無い。

車で出ることすら億劫なのか、それとも元来ここには車が来ないのか、あたりにはてんで人の気配が無い。風斬と上条は、そんな中で雨宿りをしていた。

後ろにそびえるビルはデパート、セブンスミスト、何やら覚えがあるのだが、上条はそれを思い出せない、どうやら飛んだ部分の記憶なのだろう。

「……帰るか？」

「それがいいのかもね……でも、インデックスちゃんは家にいないみたいだよ？」

「最近一人で出かけてることも多いからなあ」

上条宅に居候している所のインデックスはあまり外に出ることはない。風斬はやろうと思えばいつでもインデックスの隣に入れるわけだから、外に出る必要がなかった。

それが美琴、打ち止め、ワンコ、一方通行など、交友関係が広がるにつれ、少しずつ彼女たちと遊ぶ機会も増えてきた。

特に打ち止めとお互い昼が暇な仲間で、（精神）年齢も平時においては似たような物であるからか、一緒に遊んでいることが多い。

「こんな雨だし、それより前に外に出てたら傘も持っていないよ？
だったら探さない……形態は持つてるかな？」

「わかんねえ、とりあえず電話してみねえと」

いって、さっそく新しくした携帯を取り出す上条、何気ない動作で画面を開き……思わず硬直する。なぜか、まだ登録していなかったはずの待ち受けが、先ほどとった風斬とのツーショットにすり替わっているのだ。

「んな……」

まさか、先ほど雨が降る前に別れた美琴の仕業か……彼女は電気使い、しかも第三位、その程度のこと朝飯前ということか。

「……？ どうしたの？」

思わず不審に感じたのだろう。

風斬がほぼ隣に見える上条の顔をのぞき見る。

「あー、いや……携帯を見てみればわかる」

おそらくこちらにも細工をしたのだろう、と予想はしたが、そこで事実を見せたかったのかは、もしかや少しうれしかったのか。

「え……え？ ええ？」

三回繰り返し返す。

一回目は不審に思って、二回目は携帯を取り出して、三回目はその内容を理解して。

「これ、もしかして……」

「多分正解だろうなあ。何してんだよ、あいつ」

軽く顔を赤くしながら携帯を操作する上条。気を取り直して、そもそもその目的はそれではないのだ。

「つと、雨、ひどいね」

「いやな感じだよなあ……雨は好きじゃない、数が多すぎるんだよ」
操作音がどこもない虚空へ消えていく。

何度かそれが続いて、上条は携帯を耳元へ持って行った。

「私も、かな？ 払っても払っても降りかかってきて、きりがないよ」

感じも、悪いしね？ と、同意を求める。

すぐにそうだな、と上条はうなづく。

——携帯の着信を待つ音が響く、機械的な、なにもない白ですらない色。

「雨……透明だよね」

インデックスはまだ出ない。

彼女がそれを手にしていないのか、シスター服から取り出すのに手間取っているのか、それは少し判断がつかない。

「透明、だけどそこにはあるからな」

道路にできた水たまり。

軽く光を反射してぼやけた二人の顔を写す。——ぴちゃん、と水が跳ね、屋根で遮られた雨宿りの場所に、少し水が浸入する。

二人には、当たらなかった。

「邪魔かもね」

「そんなことは……」

それ以上は、答えなかった。

言葉が思い浮かばなかったのと、インデックスの携帯につながったから。

『もしもし……だれ？』

「ああ、インデックスか？」

声が聞こえた。

インデックスのものだ。自分の待ち受けに視線を向けていた風斬が、少し上条をうかがい見る。

『どうま？ あれ？ どうまはひょうかと一緒に出かけてたんじやなかったっけ？』

「今から帰るところだよ。そっちは今、どこにいるんだ？」

『ちょっと頼まれごと、ひょうかもそっちにいるんだよね？ 二人はどこ？ 場所が分かれば地図を操作してくれる人がいるから、多分そっちにいけるかも』

どうやら誰かというらしい、頼まれごとも、その誰かからのものだろう。

「傘はあるか？ それこそ、そっちが言ってくれればこっちで探すけど」

『あるよ？ 雨があったから呼ばれたんだしね、それに、私が見る限りこのあたりに目印になるような物はないから、できればとうまの方を探したいかも』

「ああそっか、だったらそっちに来てもらった方がいいな。セブンスミストっていうのを探してもらってくれ、第七学区にある」

『わかった。少し時間がかかると思うから、ついたら連絡するね？』

同じく、わかったと返して、通話を終えた。

それを待っていたのだろう風斬が、少し不思議そうに問いかけてくる。

「どうだった？」

「ここに来てもらうことになった。とりあえず少し暇だな、中に入つてようぜ？」

それに、と……二人分、上条と風斬の携帯を見比べて。

——どちらもスマートな一色だ。型は同じである。

「なんかこれ、飾りげないし、そのなんつーか……ストラップ、買わないか？」

少し気恥ずかしげなのは、まあ言わないでおこう。

――

結果、なにやら『二人を繋ぐびりびりストーン☆』なるものを購入。

別に何でもよかったのだが、在庫処理のためかセールに上条が心を惹かれ、これを購入した次第である。二つで一つ、いろいろと種類はあったがどちらも無難に星形を選んだ。

ずいぶんとまだまだ初なことである。

申し訳程度についていた札には静電気にはご注意とのことである。どうも電波を発しているようで、冬場には常時びりびりしたりするそうである。買ってから気づいたのは、まあ安かったからいいのだけだ。

「とりあえず……どうかな」

「いやあ、なんか華やかになった気はするけど、やっぱりこういうのって、だからどうしただな」

「無いよりはまし、だと思っうよ？ それになんていうか……こうやって一緒に何かを買っうっていうのは初めて、だから。ちよっと、うん——すごくうれしい」

軽く頷いて、

「そっか」

とだけ、上条は答える。

感慨かそれとも同感か——言うまでも無くどちらもで、上条はついでに買った百円の傘を広げる。ビニール製の透明な安物だ。

「……」

「どうしたの？」

問いかける風斬、黙ったままの上条はただ首を横に振って。

「なんでもないさ」

開く。

やはりとは……声には出さなかった。

「んお？」

変わりに、風斬のいるほうを向いて気づいたような声をだす。

「どうしたの？」

「インデックスだ、打ち止めもある」

助っ人だなんだというのはどうやら彼女だったらしい。年齢こそ外見実どちらも打ち止めが下だが、それでも流石に学園都市が超能力者、インデックスよりかは機械を手繰れるだろう。

そう言う意味では、此処で合流する人間は、全員インデックス以上なので、心配する意味はないのだけれど。

「そうだね……いこっか？ 早く帰らないと、なんだか寒いし」

同じく、傘を自分の分もさして、

傘越しにインデックスの姿が見える。傘の中から右手を出して、

遠慮なくそれを振っている。彼女の修道服はばらばらなはずなので、水がしみこんでいると思うのだが、寒くないのだろうか。

何て心配する二人を他所にインデックスと打ち止めが近づいていく。

急ぐインデックス、待ってと追いかける打ち止め、といった様子。

そんな中だった。

雨の勢いが突然増した。

軽く地面を叩く小気味のいい音から、耳に直接叩きつけるような大振りへ、

同時だった。

インデックスと打ち止め、二人の後ろへ、どこからか白衣を纏った物騒な男が現れたのは。

だれだろうと思う暇は無かった。

単純の事。

——その男は軽く、インデックスたちの首筋へ手刀を見舞った。

ストーン、とまるで彼女達をどこかへ招待するように、しかし鋭いそれでもって。

「なっ！」

一驚する。

いきなりのことだ、瞬きをする暇も無い。

開いた傘を放り出し、飛び出す。——害意でもって、その男に堪

える。

「――にしてやがる！ てめえ！」

直線、距離はそれほど長くない。

気づけばどちらも距離は縮まっていた。

「――ああ？」

刺青を仕込んだ人相の悪い、少しのけだるげでもってその男は上条を見た。

その名前を、木原数多と言った。

第三章『雨、ひどいね Hyouka | kazakiri』(後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしてます。

何となく好きな空間、甘甘よりもほんのりシュガー、夫婦のような二人の空気。

そんな安定感たっぷりのラブコメが自分は好きです。

補足

・特になかったはず。

行間5

雨に揺られながら一つ、二つ。

薄い水色のチェックと、少し無骨な紺色の傘、どちらもそれなりに大きく、片方、打ち止めにはちよつと合わない。

とはいえ大は小をかねる。寧ろ打ち止めを守るならば、これほどの大きさと言うのが丁度いいだろう。

傘がくるくると横に揺れたりパタパタ跳ねたり、生き物と同様といった様子で動きまわる。

二人の体が軽く跳ねた。軽快なステップを踏んで、水溜りを避けている。

「ねえねえ」

上条たちの元へはもう少し掛かる。

先程まで沈黙していたが耐えられなかったのだろう、少し上辺に視線を浮かせながら、打ち止めが問いかけてくる。

「なにかな」

ちらりと視線を右下に落としてインデックスが先を促す。

「インデックスってさ、上条のこと、好き？」

語尾はつけなかった。必要ないと判断したのだろう。

「うん、好きだよ。なんていうか、家族みたいで」

「風斬の事、うらやましいって思ったりするのかな」

「少しだけ、でもひょうかはずっととうまの隣にいたから、ひょうかじゃないとダメなんだって思う」

風斬だから。――ひょうかだから。

こうしてここに、二人はいられる。

そうやってインデックスは、納得せざるを得ないのだ。それほどまでに、その絆は絶対なのだから。

「じゃあ、ってミサカは――」

その答えを受けて、上辺気味の視線を一度インデックスへ向けながら、タイムなしで下に向ける。

「あの人は……ミサカにとって、何なんだろう」

思い浮かべるのは一方通行のことだ。

打ち止めが浮かべる。

彼への感情がはつきりと、取り出せない。

妹達を殺されかけた恨みつらみ――だろうか。

いいや、違うだろう。

自分を守ってくれた背中へ向ける、相性――だろうか。

いいや、違うだろう。

インデックスが上条に向けるのと同じ、親愛――だろうか。
いいや、違うだろう。

ドレもコレも、正解のようでカスらない。自分の感情を一つの言葉にすることが出来ないのだ。……解らない、打ち止めが打ち止めであるが故に、それは絶対に知れることは無い。

「……わかんない。好きも、嫌いも違う、ってミサカはミサカは見つからない言葉に歯がゆく思ってみる」

思わず吐露する。

何故そうしたのかすら、打ち止めは解らない。誰でも良かったのか、インデックスだからなのか――けれど、インデックスには解ったようだ。

「違うよ？　そうじゃないんだよ、感情なんて言葉じゃ足りないんだから」

だって、と、インデックスは繋げる。

「それは言葉のない動物にだって存在する、自然な本能を、言葉にした物なんだから」

見下ろすような高さにある、打ち止めの頭を軽く叩いた。

「君がそうやって悩むように、人は何かを考える。だったらそれは……きつとぐちゃぐちゃ」

だから、とか、なのに、とかそうやって、どんどん思考は切り替わる。

主体は変わり、考え方も時には変わり、将来への悩みも、取りとめもない馬鹿みたいな思考も、それはそれで人間だ。

「……ミサカは、ミサカは、ね？ 感情を教科書で倣ったの、だからきつと理解して、表現することは出来ても、見つけることは、出来ないんじゃないかな」

妹達二万人。ワンコがそうであるように、10032号がそうであるように、打ち止めもまた御坂美琴という人間のコピーなのである。

最低限の感情しか、元々与えられない妹達と違い、ワンコのように感情さえも“調整”されて出てきた打ち止めは、生き生きとしてこそいるものの、ワンコのような個性はない。

——それは時間が解決してくれる事だ。

ワンコが個性を持ったのも、時間があつたから故で、打ち止めがそうでないのも、時間が足りていないからゆえだ。

「——じゃあ」

インデックスはそれに触れ。
自分の感情を表した。

「考えなくても、いいんだよ」

——それが一つの答え。
きよんとする打ち止めに、インデックスは繰り返す。

「そんな事、考えなくてもいいんだよ。答えなんて出ないんだから」
もやもやはするだろう。

何かが残って、しょうがないだろう。
けれど、

「少しすればきっと忘れる。理解なんてしなくていい、生き物なんだから」

生きていくだけで、精一杯なんだ。

「あ、見えてきたよ！　とうまだ！」

切り替えて、インデックスは声を上げる。

手を振り上げて己を示し、その手は雨にぬれている。寒そうだが気にした様子もない。

打ち止めはそんなインデックスを少し見上げて、そうか、と理解する。

だから人間って、悩んでいるのか。

——一方通行に感情は、迷っているのか。

ぐにやぐにやに曲がり続けるそんな思考。

それを最後に、打ち止めは意識を、あっという間に絶ってしまった。

——

この雨に濡れる九月三十日。

ひとりの魔術師が学園都市に襲来した。

敵意に向けた相手を問答無用で行動不能にする、そんな理不尽な

魔術師は、学園都市を潰滅に陥れた。

暗く、放っておけばそのまま朽ちていってしまいそうな、その日に。

世界中の闇は、蠢き出す。

ひとりの少年が、覚悟を決める。

行間5（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
これで、十二巻分、それぞれの憂鬱が終了します。

・ 補足

第四章『さあ、始めようぜ! Amatakihara』

1

その男は不気味だった。

顔半分を覆う異様なまでの刺青、異様で、抱く感情はすなわち畏怖、誰からも向けられる敵意の感情は、まるで彼が死神であると、語っているようでもあった。

雨にぬれ、笑みをみせ、それでいて、その彼は悪魔のように笑っていた。

「てめえ!」

上条が接近する。

その間、その男は――木原数多は自身で意識を落とした二人のうち一人、インデックスを壁に寝かしつけるように放り投げた。

交錯する視線。
激突する両者。

右手を、なんのためらいもなく上条は振るう。

下から上へ、大きく放たれるストレート。

「あつめえんだよ!」

軽く、体を降って回避する。

左から下へ、一気に踏み込んで木原は上条に一撃を返す。

「っ、おとおお!」

ギリギリで、上条は右に退く。

一瞬、両者の目が合う。

ただその感情は正反対であり、すぐに反発してしまうのだが、とかく。

そのまま二、三度攻撃防御を繰り返す。

殴っては引いて、殴っては引いて。

上、右、下、連打連打連打！

「っぐ！」

しかし、それも不毛だと感じ取ったか、それとも後方から迫る気配を感じ取ったのか、上条が後ろへ下がる。刹那、風斬が上条の目の前に現れた。

空間転移！

「きやがるかあ？
カウンターストップ
正体不明！」

瞬く暇なき電光石火！

唸る右、しかし、

「残念でした！ およびじゃねえんだよ！」

それが木原に激突する寸前、彼の左手が跳ねる。

パチンと指を鳴らして、

その時だった、風斬の体のはじけ飛ぶ。

一瞬にして光にかわり、どこかへと消えていったのだ。

「なっ！」

「おっと、そう焦るんじゃないぜ、幻想殺し、これは単純にこの場のAIMを吹っ飛ばしたただけだ。どこかの天井ちゃんがそんなことをやってたが、広域版だな」

つまりい、と木原は笑に顔を歪める。

人を喰ったような、殺せてしまうほどの笑だ。

「この場に風斬氷華は存在できない、そうなれば消滅し、また別の場所に出現しなくてはならない。現れるための力を削がれたわけじゃねえからそれほど時間はかからねえだろうが……情報の再構成は時間がかかるだろうなあ」

特に電子機器のようなものは、ずいぶんと情報が多い。

「それにここに入ってくることはできねえ、ここで俺を邪魔することはできねえっつーわけだ。まあほかのやつは知ったこっちゃねえがなあ」

それでも、AIMが吹き飛ぶのだ、並みの能力者では能力の行使すら考えられないレベルになるだろうし、対策をしていなければ、たとえレベル5だろうがその演算が暴走する可能性があるのではないか。

ならば、ここにいられるのは無能力者である上条か、それこそ魔術師でないとダメだ。

インデックスのピンチーとはいっても、どうも彼はインデックスに手を出す様子はなさそうだ。

彼の手の中にある打ち止めが気になるところだが、さきほどをみる限り、何かをするということもなさそうだ。

「……その子に何をするつもりだ」

考える。

こちらと向こうの実力は、恐らく向こうの方が上だ。打ち止めを抱えた状態で、完全に五角。ならば全力であれば、勝ちを拾うのは難しい。

けれどやるしかない。

この場には、風斬も一方通行も美琴も、だれ一人すら居ないのだ。

「そうだな、いうなりやウイルスをこれのなかにぶち込む。学習装システム置ントつてのをつかってなあ、脳に直接家庭教師って所か」

「なっ」

「安心しろ、害はねえ、だが打ち込むものが打ち込むものだからなあ」

「……っ」

「名前を『天使』エンジェルという。——科学の天使を呼び起こすためのしろものだ！」

「科学の天使を……!?!」

「そう、つまり、A I Mだ……なあ！」

瞬間、上条の足は動いていた。

A I M——そんなものを使って呼び起こされる存在、そんなもの、一つしか該当する存在がないではないか！

「て、めええええええええええ！」

咆哮だった。

喉奥からだけでない、体から、心から、ありとあらゆる全ての“上条当麻”から、その言葉は放たれた。劣化することの無い強烈な閃光。

既に、上条当麻は接敵を終えていた。

「ばあか」

対するように、

木原数多はたった一つでもって帰す。

戦慄する空間。

交互する両雄。

上条は上へ突き上げて、木原は下へ振り下ろす。

それは自然。

射出した上条と、騎士のように仁王立ちする木原。

「おおああ！」

咆哮と共に。

けれど、押し負けたのは上条だった。
一発を打ち込もうとして、横へ飛び込む。

届かなかった。

打ち止めを盾にする様子はないが、正面からでは狙にくい。恐らく彼も事故までは面倒を見ないだろう。ならば考える必要がある。

そもそも、こいつは土御門と同じように物理的に格上の相手。

一方通行のような化け物クラスではなく。

ステイルのような幻想クラスでもなく。

あくまで肉弾戦の相手、喧嘩ではなく戦いの相手。

だというのに、だからこそ。

「――あ、あぐあああああああ！」

木原の左足が食い込む。

カウンターのように叩き込まれた一撃が、一気に上条を吹き飛ばす。ノーバウンドで側の壁へ、かかった時間は一秒もなかった。

「甘いんだよなあ、解んねえか？ お前が一步踏み込むために、対する俺は一度たたきつぶせばいいんだぜ？」

おかしい。

力が出ない、気力がないわけではない、立ち上がろうと思えば立ち上がれるはずだ。だからこそおかしい、上条では木原に勝てない。

「ふ、ざけるな、人を、風斬を犠牲にして、お前は一体何をしようってんだ」

それを解っていないながら上条は言葉を出す——引けないのだから、引いてはいけないのだから。

「あ？　そうか、お前はあいつを人間だというのか」

「当然、だろうが、あいつは、笑って楽しんで、嬉しがってくれるんだ！」

「そうだよなあ、アレは能力を自分のように使えて、体が吹き飛んでも再生する人間だ」

「そう、だろうが」

「じゃあお前は、その人間の化け物足る部分と向き合ったことあるのか？」

「ッ！？」

「わからねえか？　アレは確かに人間だ。だけどよお、アレの力はバケモンだ、たとえ誰からも受け入れようがなあ」

それは、そうだ。

彼女の力は強大だ、だからこそ彼女は悩み、一度はすべてを失うとおもっていた。

記憶が消えている上条だが、それはあの時に知っている。でも、だからこそ、

「俺は、」

「関係ないと切り捨てた、肯定するだけだった」

「ッ!？」

「解らないようなら教えてやろうか。てめえは何もわかっていない、自分の行動が、アレにどれだけの影響を与えるか!　そしてそれが、周りとの剥離を、与えるか」

立ち上がる上条、接近する木原。

打ち止めは既に壁へ横たえられていた。今ココに、彼女の舞台は存在しない。

「だからこそ、俺はあいつを、――!」

回避する。

横へ飛んで迫ってきた木原の拳を弾く。大丈夫反応できる、十分に喧嘩できるレベルだ。

けれど、

「分かってねえ、わかってねえんだよ!　てめえはなんにも分かってねえ!　考えろ、そして理解しろ、てめえが一体何と付き合っているのかを、それが、他者から何と思われる存在か!」

ふらりと体がぐらつく、一撃のダメージが嫌に重い。

このままでは、回避が続かない。

――反撃だっけしなくちゃいけないのに。

「わかってる、わかってるんだよお!!」

言いながら横に迫る木原から飛び退く。

近寄れない、木原のそれは本気そのもの、未だダメージ残る上条では、まだ近寄れそうにない。――いや、そうではないのかもしれない。

「分かってねえ！ てめえはアレを守ろうとしたんだろう、アレはてめえに応えようとしたんだろう、だったらてめえは何でもって答えた！」

「それ……は」

風斬は、自分の力が他者を傷つけるものだを知っていた。だからワンコに協力を求めていた。実際、最近の風斬は発展めざましく、条件が同じなら上条では適わないそうだ。かなわない、そうだ。

回避、する。

ギリギリのところ、あと拳一つ分ズレていれば、顔面にもらっていた。

反撃は、できない。

「何も言えねえじゃねえか！ アレを守るためにてめえは一体何をした！？ 何もしてねえだろうが！」

そう、

「その結果がこれだろうが！ 風斬氷華ははじけ飛び、打ち止めとよくわからないシスターもこうして地に伏している、てめえは何もないんだよ！ それがてめえでしかないんだ！ それがてめえのツケなんだよ！」

既に、回避することはできなかった。

そもそも先程の紙一重もほんの偶然木原が拳をからぶったという事実には過ぎないのだ。だから、もはや上条は戦うことができない。

「う、あ、あああああああああああああああああああああ」

我武者羅に拳を振り出す。

肉を砕いて骨を立つ、上に立つものに対する上条の戦い方すら放棄して、もはや完全に子供の遊びレベルにしか、それは成り得ない。

「ぐ、ごふ」

カウンターは割りと綺麗に決まった。

拳が上条のみぞおちにめり込んで、そのまま10メートル程度をゆうに掻っ切る。

なすすべもない敗北、上条に打つ手はない、このまま地面に落ちればそのまま意識を失って、恐らく復帰には数時間、最悪一日を要するだろう。

だから、おしまい。

何もかも、上条の怠慢によって、台無しになった。

（すまねえ）

それは、誰に謝ったことなのか。

誰に対する言い訳だったのか、

確認する間もなく、上条の意識は――

いや、

「つたく」

なぜだ？

意識は落ちていない。

そも襲ってくるであろう激突の痛みも何もない。そもそも、今自分はどこにいるんだ？

考えて当たりを見渡す。

白と黒と、一つの手があった。

上条を支えていたのは一つの手、電磁にまみれた、何かの力だ。ドサツ、と地面に無造作に放り出される。同時、何かが焼け焦げた臭いが上条の鼻を被った。自分の服、その襟だ。

「ッハ、そうか、そうか」

そうだったよなあ。

と、木原。

「お前はこういう状況のためにそれを手に入れたんだっただけ、当たり前ここにだって来るよなあ」

ちらりと、倒れ込む打ち止めを見る。

たしか、打ち止めは意識を失ったまま彼と交信が取れるのだったか。

彼は、

「木原くんよオ、いきなりいなくなったと思えば、ンダア？ その
思わせぶりの登場は、ついに木原に墮ちたか？」
げどう

「かもなあ、だけどよ、そのメインディッシュはお前に向けたもの
なんだぜ？」

「楽しいじゃねエか、勝手に他人の全てをくだいてンじゃねエぞコ
クヌストやろオ！」

アクセラレータ
一方通行は、

「いいぜ、てめえが俺に勝てると思ってんなら、まずはてめえをぶ
ち殺してやる！」

木原数多は、

最大でもって、急接近した。

第四章 『さあ、始めようぜ! Amatakihara』 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
綺麗そうな木原クン。

補足

・上条さんが圧倒されてるのはいつもの上条さんと同じ戦い方をされてるからです。

第四章 2

2

一方通行。

木原数多。

雨の中両者は邂逅した。軽く足をふみ、前へ出る一方通行と、その場に悠々ととどまる木原、当然両者の間に境はない。

「――、」

「……、」

言うまでもなく、そうしてから二つが激突した。

飛び出したのは一方通行、超特急一直線、言うまでもなく人間のそれとは格段に違う、その上で、木原は待っていたとばかりに回避した。

流れるような動作、無駄も隙も油断もなく、まるでそこまでが一連の防御であるように一方通行へ一撃を叩き込む。

回避。

単純な悪寒を、一方通行が感じたからだ。

（ンだァ？）

軽く首をかしげながら次へ挑む。

先程は左のストレート、今度は右のジャブ、続けざまに蹴りも加える様子で、その流れは通常の間人が打てる一手をかき消していた。

けれど、

木原は反撃する。一発目をまるでそこにはこないと分かっているように、体をそらし、さらには右を返す、蹴りなど省みることもない。

さすがにこれはおかしい。

（俺の攻撃を完全に読ンで来るのは予想通り、あいつのことだからそのくらいは出来るだろオが、っち、めんどくせエ）

なんにせよ、この予感を放置するわけにも行くまい。ここは――回避を選択する。蹴りを諦めて体を後ろへ飛ばしたのだ。

大げさな回避、しかし近くにおいては木原は確実に読んでくる。

けれど、それは回避ではなく、実際には前振り、

攻めへの一手なのだ。

空中で回転する一方通行、それが唐突に置き換わる。天井へ、下降から上昇。軽く回転しながら蹴りを叩き込む。当然速度は、見えやしない。

「ツチ」

それでも一方通行は舌打ちをした。いけるとは思っていなかったが、どうやら不意すら付けなかったようだ。木原は既に一步下がりの回避を終えてそこにいる。

「甘いなあ、一方通行君。こういうのは、俺にテンポを渡しちゃあ！」

完璧なタイミングで拳を木原が振りかぶる。しかし一方通行も、それは重々に承知した上でのケリ込みだ。既に防御の構えをとっている。

ここから直に一方通行へ一撃を当てるのは、流石に木原でも不可能だったようで、

「いけねえだろうがよお！」

クロスした両腕、その中心に、重苦しい衝撃が走る。

気づいたときには飛んでいた。

まるでねまわるボールのように、一方通行の体は宙を描いた。とはいえ、そのまま何事も無く着地する。

「なるほどなア、何となくカラクリが見えてきたぜ」

「一発やられてやっとか？ 随分のんきなもんだな」

とはいえ、分かった。

「ベクトルを変換させやがったか、どこかの誰かさんみたいな奴だな」

アレは一方通行のベクトルを利用したが、この場合、木原は一方通行の反射を利用したのだ。

「名付けるなら“木原神拳”とでもするか？」

「お前好みじゃねェか」

「だろお？　——さあ、始めようぜ！」

いいつつ、今度こそ接近する。

とはいえ平常運転でかかっても確実に返り討ちに合う、彼に対してはまったくもって身体能力のスペックだとか、能力の出力は意味がなさない。

策を弄しても、特攻気味に飛びかかっても、何もかも——意味がない。

なにせ、彼が一方通行のことを知り尽くしているのは、これまでに十分分かっているのだから。ただ闇雲にやっても意味はない。

戦闘を介し、木原を倒そうというならば、それこそ持久戦しかないだろう。

（それも、長く続けたくはねエなア。——少しでも、全力で掛からせてもらうしかねエな）

肉薄する。

単純に一つの動作で、そのまま連打へと移行する。一、二——そのまま上向けに蹴りを放つ。どれもが空を切り、一方通行の体は前へと傾く。

一転、体を傾けながら、一発を打ち込む木原。

しかしそれは既に体制を整え、向かい合っていた一方通行には通じず、払うように手刀が振るわれる。一瞬の高速、回避など考える余地もなく、しかし、

用意された答えを木原はつきつける。

体自体を転ばせながら、本来突き刺さるはずだった左手を体の内側へ持つてくる。もともと無理な体制での一撃だったのだ。しかし

これで手刀は空を切り、木原の拳は腹部で貯められる体制に、整えられた。

ドゥー！！ と拳が切るだけで、辺りに音が走る。

不意を付くその状況、一方通行の体が後ろへと飛んだ、あたったというわけではない、彼自身が後ろへと体を運んだのだ。

着地し、考える。

木原と一方通行の間には絶対的な戦力さがある。

いわば木原が一で一方通行が百。いうまでもなくそれは勝ち負け以前の問題であった。——けれど、そこに一である木原が、百である一方通行を百倍知っているという条件が付けば、いったいどうなるだろう。

当然決着はつかず平行線をたどる。

一方通行絶対有利の状況は変わらないだろうが、下手を打てば敗北、打たなくとも木原という人間の絶対的な顕界を、一方通行は引き出さなくてはならない。

ならば、

この状況では負けと変わらない。

ならば少しでも憂いはとっておく必要がある。

——接近する。一瞬のこと、しかし読まれていたこと、けれどそこから先は流石にある程度予想外だったようだ。木原が手につけていた鉄鋼。

それを軽く触れ、破壊しに來たのだ。

「んだてめえ、一方通行君よ、流石にその選択はおかしいんじゃない

いか？ 分かってんだろ？ これが原因じゃないって」

「そのとおりなんだがよオ、正直なところお前のそれは驚異なんだわ」

いったい誰に対して、というのは流石に発言しないが。

「そうか？ まあいい、もう時間切れだ！」

突風。

いや、これは――

「逃げるか、木原くん！？」

おうともさ、それと共に、木原は消えた。

追いかけるつもりはない――それに意味はないし、どうせ行き先など拠点であるビルのどこかだろう。今はそれよりも――

――戦闘中、ふと感じた気配。おそらくは木原配下のものだろう。木原が時間を稼ぎ、その間に打ち止めを回収する。それが彼らの目的だろう。

妨害しようにも、そういった動きを見せれば木原に大して好きができる。最悪それが敗北の引き金になりうるのだ。

ならば、意味はない。

「ツチ」

地面をけって、呆然と地に伏す上条の元へと近づいた。まずは、こいつをどうにかしなくては。

第四章 2 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。
諸事情で少し木原クンVS一方通行はカット気味。

補足

・……？

第五章『オマエは一体何なんだ Accelerator』

1

雨は、上条当麻を叩いていた。

責めるようでもあり、慰めるようでもあり、しかし上条にとってそれは、絶望の象徴以外、存在する理由はなかった。

できるものなら晴れて欲しい。

けれど、それは単なる妄想でしかなく、秋半ばに訪れたこの雨は、少しずつその雨脚を大きくさせていた。

当たりには、一方通行と、意識を失ったインデックス。既に打ち止め、木原、風斬の姿はない。

「つく、っそ……おおおおああアアアアアあああああああ
！」

唸り声は、やがて咆哮へ、信じることは容易くない、しかし認めなければ立ち上がれない。上条は、風斬に出来る全てを、失ってしまったのだ。

上条は風斬のことが好きだった。その感情は、たとえ記憶が失われようともたしかにあって、記憶がなくなるとも作られた思い出は、確かに上条を射抜くにたやすくて。

だというのに、上条はそれで安心してしまっていたのだ。

風斬も上条のことを好きでいてくれた。風斬も、上条と同じように誰かを守ろうと戦っていた。だったら気づくべきだったのだ。

既に、上条と風斬の間には、どうしようもない差が出来ていたの

だ。

溝ではなく、あくまで差。

両者の感情が薄れたわけではない、離れたわけではない、ただ届かなくなっていただけ、上条たちが自覚できていなかっただけ。

「あ、うあ、あああああああああああああああ——
——」

心の何処から、とめどなく、どうしようもなくあふれ出てくる感情の波、潮を巻いて、それは雨へと加わっていく。

その感情を、ただ言葉として——しかし一方通行に遮られた。

「うるせェ！」

鋭く尖った刃の氷。

唸るような上条はポカンと顔を一方通行へ向けた。

「まったくよォ、人が木原くん追跡プログラムを組ンでる片隅で、バカみてェな唸り声挙げないでくださいますウ？」

「追いかける……って」

「当然木原くんをだよ、解ンねェか三下ア、オマエがそんな馬鹿してンのはなかなか傑作だよなア」

軽く近寄りながら、倒れ込んだ上条の顔をのぞき込む、心底バカにしたような顔で、挑発の意味を多分に込めた笑は、上条の間近まで迫った。

「い、いのかよ……俺になんか、構っててさ」

「別に？ 木原くんの潜伏場所なら大体割れてんだよ、今回は木原くんが個人で受けたことだろうから研究所は使えねエ、となると個人で所有してる隠れ家しかねエ、それが四つつつウ訳だ」

「お前は……最強なんだろう？ だったら一人で」

「ばらけ過ぎてンだよ、そうになると、俺が三つ、オマエが一つ行っただ方がいいつつウ計算になンだ」

心底面倒そうに言葉を紡ぐ一方通行。
困惑し、うろたえる上条を無視して言葉が続ける。

「あいつは結局のところ、研究者だ。喧嘩なれつつウか、戦闘慣れはしてるが、それだけなンだよ、そりゃあただ漠然と日々を消化してたオマエよりは強いだろうが、それでも一段程度しか変わンねエ」

「……無理、だろ。俺じゃああいつに勝てない。そもそもさ——動かねえ、手が……足が……ッ」

震えるように、一方通行の言葉を飲み込む上条。

木原の言葉は恐らく誰もの想像以上に、何よりも上条の想像以上に、上条自身をえぐっているだろう。当然、ナイフは二本だ。

けれど、

「知ったことか」

一方通行は一蹴する。

ずっと、踏み込んで、上条の襟首をつかむ。

「オマエは何もしてこなかったかもしれねエ、それが今、致命傷になっっているかもしれねエ。だがよオ」

持ち上げる。

無理やりの動作、けれど強引なそれに、上条が抵抗する力はない。

「何のタメにあいつらがいる。オマエの周りにはオマエが霞む程度には化け物みてエなメンツが揃ってるはずだ」

ギリッ、と睨みを聞かせ、上条へと視線を極限まで近づける。

「何のタメにそのシスターがいる。何のタメに超電磁砲がそばにいる。何のタメに妹達がオマエを慕っている――」

何のタメ？

そう、なぜ？――考えは、すぐまとまった。

最後に、

「――オマエの女は、何のタメにオマエが好いていやがるんだ」

それだけ言われて、目が覚めた。

突き飛ばす一方通行の手、フラつかせるような威力のそれに、上条はそっくりそのまま理想の動きを行う。

ゆっくりと足を定めて、そして着地。

「悩むなンぞ突っ走った後にやればいい、今オマエは立ってなくちやいけねエ。それをしっかり覚えていやがれ」

ふらつき、力のこもって居なかった上条の右手、それに再び力が戻る。

「――ああ」

悪い、と少しだけ謝って、

「それを一体誰にいえばいいのか、解ってンのかア？」

「お前“にも”言わなくちな、ありがとう、助かった」

「ふん」

興味なさげに翻す。

飾らない一方通行の言葉。

「そうだよな、俺には風斬がいる」

美琴がいる。

インデックスがいる。

ワンコがいる。

打ち止めがいる。

何より、

「最強、お前がいるんだ、負けるわけがない」

「馬鹿じゃねエか？ 最弱。俺アオマエを利用してるだけなんだぜ」

「だからこそ最強さ、——救いに行くぞ、全部！」

上条の言葉は、やがてようやく、辺りに響いた。

第五章 『オマエは一体何なんだ Accelerator』（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

所詮上条さんの悩みなど青春の一汗に過ぎないのさ、それがいいんだけどね。

第六章『お前は、そうか——ッ！ Vento』

1

一方通行は雨を避け、雨雲の下を疾走していた。

反射の膜を、無骨な無色が叩く。

不快な音を立てながら反射されて跳ね返り、やがては地面に落ちていくのだ。そんな仲を、ほとんど全力といってもいい速度で走っていた。

演算の限界は、もう少し先にあるが、これ以上の速度は体に負担が出る。

自分のベクトルを反射するという演算を使用するよりも、純粹な反射のみにして、この速度で走行したほうが効率がいいのだ。

「あぁっ！　ったく、木原くんもバカみてェなことしてないでよオ、人に尻拭いさせんじゃねエ、ばかやろオが」

口から言葉が出る。

それは無差別な独り言であり、意味のない本音でもある。一方通行としてはこんなことをしている暇があれば、さっさと砥信搜索に戻りたいのだ。

だというのに、

「ったくよオ、あいつの病気が移ったか？」

あいつ——上条当麻、今回は珍しく木原に責められてダウンしていたが、少し煽ってやれば簡単に立ち上がる、まさしく不死身とも言えるべきあの馬鹿。

口では他の人間と同じようにバカにしたりもするものの、言葉の

裏では一方通行としては、上条のことを尊敬し、信賴しているのだ。とはいえ自分の信念が、あいつに負けるとは、微塵も思っていないが。

今、上条と戦っても負ける気がしないのがいい証拠だ。

「にしてもよオ」

なんて思考を早々に打ち切って、一方通行は移動しながら辺りへ視線を向ける。

一瞬の内、確かな形を持つ前に欠片のみを残して消えていく雑踏の数々、現在一方通行は車道を走行しているのである。

流石に対抗者でも現れたら、飛行の移動に切り替えるつもりではあるのだが、それが一度もこないのだ。

ココに来るまで、おおよそ十分ほど、既に二つ目的のビルは制覇している。そろそろ上条も目的のビルにたどり着いている頃だろう。

——その程度には一方通行は走り回ったのである。

けれども、現れない。

「雨、にしたってコレは流石に可笑しいだろオが……車一つない？
それどころか、人間が独りも居ない？」

流石に、人口二百三十万以上の学園都市だ。こんな雨の中も、無理やり移動しようとする人間は多く入る。だから、普通だったらいるはずの通行人すら、一方通行は見えてはいないのだ。

「どオなってやがる」

何かが起こっていると考えするには、流石に早計かもしれないが、

それでもコレは流石におかしい。

いや、早計でもなんでもないか、そもそも木原が、一方通行にすら何も言わずあんなことをするのだ。何かがおきてないと考えるほうが無理があるだろう。

ならば、何だろう。

今起きている、学園都市の異変は一体なんだ？ いや、考えるよりもそもそも、知ることなら簡単なはずだ。次のビル。このパターンだと木原がいるとは思えないが、パソコンの一つ位ならあるだろう。

だったら、そこまで待てばいい。

「ンでまアどっちにしろ暇なンだよなア」

流石に三個目、そこを目指す一方通行の心境も倦怠なものになってくる。もしこれがはずれなら既に上条は戦闘を始めているだろうし、そうでなくとも流石に面倒だ。

この全力疾走の後、木原と割と敗北を背中に突きつけられた状態で戦わなくてはいけないわけだからこれまた憂鬱ではある。

止める気には、ならないが。

その時だった。――思考が一気に現実へ引き戻される。辺りへ張っていた複数の感覚、その中で、前方左右を注視していた視界が、それを捉えた。

最初は、うめくような光だった。

——思わず、一方通行の足が停止する。

——不可思議な光景、能力跋扈の学園都市であろうと、それは変わらない。

変化は一度では終わらない、高々とうねり、立ち昇った光は、二つへ分かれ、さざめく。——これは、そう。大きな、それはまるで翼だ。

やがて光は二つ又の奔流に別れ、広がっていく。

まるで一つの個が何の意味もない、ちっぽけな存在であることを、示すかのように。

誰かの意思が、それを違うと言わせまいとしているかのように。

既に、一方通行の視界が見上げる空は、一面の光へと姿を変えていた。

「ハ——ハッ、馬鹿じゃねエか？ バツカじゃねエのかアあアあ？」

心当たりは、一つだけあった。

「いくしかねエよなア、おいそうだよなア——カウンターストップ正体不明ウ！」

これは、まさしく地獄か何かか。

ならば止めよう、あの辺りには木原のビルがあつたはず。

ならば 無事では済むまい、どちらにせよ向かう必要はあるが、それでも戦闘はあそこではない。

向かうべきは止めるため。

あの力は間違いなく以上だ。化物、とはいっても人間の範疇に十分収まる、一方通行のような化物であった風斬氷華とはちがい、これは間違いなく悪魔か何か、もしくは悪夢だ。

「とめてやる、とめてやるぜ上条オ！ オマエの相方は、あそこにいるぞ！」

一瞬で踏み出して、一方通行は疾駆した。

――

唐突な展開だった。

高速で飛び出した一方通行の前に、まるで立ち下がるように、女が立っていた。背を向けていたのだからそんな事はないのだろうが、しかしそれでも一方通行は足を止める。

その女は、どこまでも異様だった。

見ようによってはシスターの修道服に見えないでもない服装、流石にそれを認めるにはすこし派手すぎる色使いであった。

振り返る。

さらにその異様さは増す。

顔中に磔のようにい抜かれた幾つ者ピアス。思わず一方通行も眉をひそめる。

とはいえ、

「――オマエは、なるほど、第一位か……」

その女は口を開く、そこからも十字架のオブジェが飛び出して、人によっては嫌悪を――敵意を引き出しそうなものである。

「オマエは……ふウン、見えてきたぜ？ 侵入者か」

「ご名答、本当なら上条当麻を狙いたいところだが……そうだな、前座にオマエというのも、中々悪くない選択かもしれないわね」

「邪魔だ、どけ」

任せておけば、恐らくこいつは風斬氷華が何とかするだろう。
一方通行はそう判断する。なにせこいつのために、木原が動いたのであろうから。

「つれないわね、コッチはあんたたちが憎くて憎くてしょうがない
って言うのに」

「そうかよ、じゃあどかしてやる、後々面倒になりそうだが、むしろ俺があいつに当たったほうがいいのかもなア」

言いながら構える。

奇に銜った、というわけでもない普通の構えだが、どういうわけかヴェントは怪訝な視線を向けた。

「いいぜ、戦ってやるよ、邪魔でしかない、障害相手になア！」

しかしそれが氷解される間はなく。
一方通行は既に飛び出した。

第六章 『お前は、そうか——ッ！ Vento』 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。
ヴェントって、この綴りでいいんでしょうか。

補足

・一方通行さんが戦える理由は次回。

第六章 2

2

かつて、

ヴェントには、弟がいた。

かつて、

一方通行には、悪友と呼ぶべき人がいた。

大切に。

永遠で、確かで。

失ってしまった。

両者が両者へ押し詰める。

速度をもって一方通行はその距離を一度に零へ、ヴェントは怪訝な顔をそのままに、待ち構える位置へ手にもっているひと振りを落とす。

途端生まれる風の流れ。

一瞬で、人間には見えていなければかわせない速度が近接する。けれど間に合わない！ 一方通行はその一撃が襲いかかる場所を既に通過しているのだ。広い広い道路中央、決り取られたひとつの地面、その端から、一方通行は飛び上がる。

見事な放物線を描いたジャンプだった。

迫る一方通行、舌打ちをしながらヴェントはその場を離れた。ほ

ば同時に一方通行の右足が地に突き刺さり、ヴェントと同じように地を削る。

「何だなんだあ！ オマエは一体なんなんだよ、能力者！」

懐疑と、憎悪と、それから敵意、それを全て剥き出しにしたヴェントの言葉、しかし一方通行は堪えた様子もなく吐き捨てる。

むしろ、

「はン、それはオマエもしてンじゃないのか？」

問う側のヴェントへ、無茶な切り返しを行なった。

間は無い、回避と言葉は同時、既にヴェントは次を放っていた。右と左、連続で撃ち放つそれ、そして同一に一方通行へ襲いかかった。

左右から、押しつぶすのではなく、足を挟み、頭を吹き飛ばすような一撃だ。

それを一方通行は、体を落とし上を回避、そして下は思い切り、自身の体重とベクトルで真っ向から踏み潰した。

「なっ……」

声を上げるヴェント。

しかし驚いたのは彼女だけではない。

一方通行もまた、自身の足裏に感じる、若干の衝撃に驚愕していたのだ。

（ンだア、これは……反射が出来なかったンじゃねエ、成功したが変化しやがった。コンなもン……いやア）

しかし、彼には一つ心当たりがあった。

彼が普段から交流つきあわされているを持っているグループであるところに、一人のシスターがいた。何度か食事中にその訳を問うことがあったのだが、特に隠すつもりもないようで、そのたびにソレについて語ってくれた。

流石に、人類の歴史5000年の中で秘されてきたそれをそんなベラベラとしやべっていいのかと思わないでもないが、シスター曰く。

それは、魔術と呼ばれるものだった。

この世とは別の世界から法則を持ってきてむりやりこちらに当てはめる。

なるほど、それならば反射がある程度しか聞かないのも納得だ。

そしてそれはそれは、面倒な話だ。

考え、そして再び飛び出す。

続けて迫ってくるのは無駄のない縦、横、ななめ。

駆け抜け飛び抜けそこ退けて。

最後の一発をドゴウツ！！と退しりぞけて、一気に再び躍りかかる。しかし、何かに気づいたように大きく後ろへ飛び上がった。

浮遊する一方通行、その元あった場所を、まるで無かったことにもするかのように風の激烈が襲いかかっていた。

見ればそれは後ろから。

不意を打つような一撃だった。

一方通行が気付いたのは、これが振るわれる余波だったか。

「ツチ」

軽くヴェントがつばを吐きだして、しかしそれも雨へ消えていく。変わったはずの一つの空間、しかしそこはただ戦場であるというだけで、何も変化を得ていないように見えた。

たとえばヴェント、舌打ち一つに大きく動き、一方通行から距離をとる。

たとえば一方通行、飛び上がっていた体を元に戻し、再び射出の構えをとる。

交錯までに、一体幾度の時間がかかっただろう。

一方通行の姿が掻き消えて、あたりに風の爆弾がまみえる。驚くべきはヴェントの戦闘センスか。同じように、生身でありながら一方通行を手玉に取ったのは、木原数多もそうではあるが、しかしヴェントのそれは戦術によるそれ。

木原のように、一方通行を単純に知り尽くした、計算上での動きとは違う。

アドリブ任せの、強引な戦闘なのだ。

だというのに。

一方通行は届きすらしない。

戦闘が加速する。

右へ、一方通行、流れるようにハンマーが振るわれ、風が生み出される。無数のそれ、下から舐めるように、上から引き裂くように。横へ、飛びのいた先にも風がある、左右二つずつ、回避は可能、だがすでにヴェントは次を構えている。

すでに一手先。前へ出ても再び距離が離れてしまう。
ならば、強引に一方通行は一手を作る。

両手で迫る衝撃をつかみ――砕く、あつという間に、必殺は無力へなり果てる。

けれど、一方通行の両手にはまぎれもなく痛みが生じる。ピリピリと肌を焼く痛み、強引にということもないが、けれど決して無理をしていないわけではない。

――前に飛び出る。

（解析がうまくいかねエ）

もし、これを見抜けたのであれば、おそらく一方通行は魔術に対して無敵になれる。もしかしたら使い返すこともできるかもしれない。

――降りかかる一撃を前へ飛び込んで回避、さらに足を進める。

けれど、

――左右前後、そして上、まんべんなく、回避の隙間などない、ヴェントがはめてきたのだ。

この一撃は、速く重い。

――つ、上だけを受け止めながら飛び上がる。

風が吹き飛び、痛みを無視し、空中に身を躍らせる。同時にあたりのベクトルを操作、風を生み出し、ヴェントへ対して放ったのだ。いま使える飛び道具はこの程度か、地面を揺らしても、ヴェントが動き回るのに障害はない。岩を使って——たとえば閉じ込めたとして、しかし結局破壊されるのがオチだ。

けれど結局、

「私に風とは——喧嘩売ってんのか、オマエはアアアアアアアア

それもヴェントには、それこそ通用しない。

掻き消える。

着地した一方通行、同時に襲いかかったものはや数多の攻撃に、苦々しげに距離をとった。

「ツハ、逃げるしかないか！ オマエがそうして逃げて、はたしてここに何が残る！」

(考えるんだなア、そオだ考える)

考えが大きく深まらないのは自分の悪い癖、
そうやって意識を思考へと向ける。

戦闘は続行したまま、しかしその本意は意思の中にこそあった。

戦いへ向ける精細を欠いたことが見えたのか、ヴェントの表情が

奇妙に思うそれへと変化する。一方通行は気にすることなく、前へ足を向けた。

「鈍ったか超能力者！ 私はオマエ等を許さないためにここにいるんだよ！」

（結局、あれを何とかすることは、直接にはできねエ）

連続して襲いかかるヴェントの風。

どれもを一方向通行が回避するには少し苦しいか、無理やり一つずつ、叩き潰していく。上へ、下へ、振り下ろしからの回し蹴り。

そのどれもが一方通行の一瞬を食い破り、瞬きするまなく、消えていく。

「逃げることにすらできないか、ああ、本当に——」

（シな一瞬の攻防は、反射演算にのみ氣をとられる。反射との齟齬を氣にする暇を、この風は与えないわけだ。そんな中でこれ自体の解析はどうやっても不可能）

走り出す一方通行。

直線的かつ挑発的なそれは、ヴェントの一撃で碎かれる。

顔面めがけて飛んだ風を、体を落として回避、もはや地面とすべて合わせるような体の反りで、そのまま直線が続ける。

「本当にオマエは私の敵——だなあ！」

（あいつの時と変わらねエ——これのことなシなどうだっ……..
だ。だが、この先にはアレがいる、多分、こいつとアレを合わせちゃいけねエ）

迫る一方通行に左右から、足元をえぐる一撃が。
無理なく回避を終え、しかしそこに、風の蠢きが直撃する。空中における一撃、回避の余地はない。

「ッハ、当たったぞ、オマエは、オマエはツツツ！」

（ツぐ、——いや、どうでもいい。問題は、アレがバケモノだと、こいつなんかに否定されることだ）

軽く後ろへ寄る一方通行、そのまま一気に距離をとった。
憎悪ゆえに歪んだヴェントの顔が、さらに狂喜へと感情を動かすのが、見えた。

「——」

（なア魔術師。オマエはあいつを嫌ってるんだろオ。だったら駄目だ、オマエは駄目だ——なア同類。オマエはあいつを……あいつの世界を否定しやがンのかア？）

体を落とし、一方通行は軽く、目を閉じた。

「ツツツツ——！！！！！！」

（学園都市は、俺の世界だ。あいつの世界だ。そして——砥信の居場所だ。オマエが世界を否定するなら、俺はオマエを——）

その時だった。

ハッと、ある単語が一方通行を駆け巡る。

——敵対すると、そう感情を向ける一歩手前で、

（そうか——世界か）

やがて、笑って。

「見えたぜ、魔術師——オマエの敗北が」

——

ヴェントの感情は、困惑していた。

最初に合ったのは憎悪だった。

学園都市という、科学サイドに対するどうしようもない怒りだった。

次に合ったのは、敵意だった。

上条当麻、幻想殺し、彼に対するありとあらゆる否定の感情だった。

そして今、あるのは——困惑だった。

自信の力に対する疑問、一方通行に対する混乱。

なぜだ。

（なぜあいつは倒れない）

ヴェントの魔術、『天罰術式』。

これは、ヴェント自身へ敵意に向けたものを、問答無用で行動不能にする魔術。たとえ学園都市最強であろうが、それは変わらない、はずだった。

けれど一方通行は倒れない。

何故だ——何故だナゼダなぜだ！

戦闘をする相手に、敵意すら向けないことなどあり得ない。

殺意ならばあり得るかとも考えたが、しかしこの能力者に殺しの意思は感じられない。

それが、とてもとても癪に障った。

そして、

——やがて。

「アアアアアアアアア！」

連打する。

狂気を交えて、憎悪は既に、そこまで昂った。

無作為に見えて、しかし動かすことを許容させない造作的な一撃、前にカーテン、後ろに弾幕、やがて回転するシャワーへと変った。

一方通行は動かない。

当然、動けないはずだ。

動けば死、そうでなくとも、この中を、回避なしでは動けない、動いたら動いたで、今度こそ全力で手玉に取ってやればいい。

動かなければ、上空から今までで一番大きなものをたたき落とす。効きは悪いだろうが、しかし無傷ではないのは確認済み、もはやチェックメイトはすぐそこだった。

だというのに、なにも湧かない。

ヴェントのそこにある憎悪はこんなにも激しいというのに、あの能力者は、それを笑ってすらいるように思える。

もはやしびれを切らす。

最大の一撃、十分だ、これでだめでも、次がある。

——そうして放つ。

回避は不可能もう遅い。これでチェックメイト、一方通行にアトはない。

だのに、

「な——」

一方通行は、

「何なんだ、そのバケモノ見たいな手は——！」

無数の電流とともに、そこに立っている。

驚愕するヴェント。

しかし、目の前の状況は明らかに窮地であると認識すると、すぐに我に返る。

そして気付いた。

先ほどまで襲いかかっていた風の金づちが、跡を残さず消えている。

そして、解っていた。

それはすでに、一方通行の、手の中にある。

「電磁アーム……妨害対策のものだが、こうして役に立ったなア」

どういことだ、これは――

まさか、掌握したとでも言うのか？

「魔術の解析は不可能だった。ただ空間そのものはこの世界のベクトルと変わらねエ、結局のところ、違いすぎたんだよ、そこを合わせて、演算を整えてやればいい」

問題があるとすれば、と言いかけて、しかしすぐに取りやめた。

「チェックメイトだ、魔術師」

そうして、動き出す。

辺りは無数の細い細い電磁式の腕で覆われ、それが振るわれると爆発が起こった。

風が辺りをたたっているのだ。

近づく一方通行、あわててヴェントはハンマーをふるう。

一方通行へ向けて、そしてヴェントへ向けられる一方通行の反射に対して。

――すでに、大勢は決していた。
手数で一方通行を圧倒していたヴェントが、しかしその手数すべてを返されて、そうなれば、反撃の手段はどこにもない。

急接近する。

それはまさしく猛獣、バケモノのごとし形相。

一方通行と前方のヴェント。

両者の距離が、ほぼ十を割った。

牽制のためにハンマーをふるうヴェント、しかしそれを一方通行の腕が塞ぎ止めた。

軽く舌打ちする一方通行、苦々しげに顔をゆがめるヴェント、同時に反対側へと得物を反らし、ヴェントの、自棄を帯びた風が一方通行へ襲いかかる。

電磁の腕が辺りを舞う。

止めすらしらない、風は反射され、どこかいずこを、えぐっていった。

軽く距離をとるヴェント。

解ったことがある。

おそらく、一方通行は魔術と科学、別世界の法則と、この世界の法則、どちらかしか反射できない。

ならば、選択によっては勝利を得られる。

二者択一――成功すればそのまま圧倒を、失敗すればそのまま敗北を。

悩んではいられない。

これはじゃんけんの様なものだ。一瞬の勘。一方通行を圧倒した自分のセンスを信じるしかない。

交錯する。

迫る一方通行、迎え撃つヴェント。

その時だった。ようやくヴェントは一方通行を理解する。

（ああ、）

選んだのは、魔術。
ハンマーをふるい、二段の構え。

（なるほど、この男は――）

しかし、

（私のことなど、見てすら、いなかったのだ）

一方通行は、それを飛び越えた。

迎撃でも、反射でも、先行でもなく。
その行動は、回避。

単純かつ明快。

つまり、一撃をすべて、電磁アームに任せた、ということだ。

ズガガガガッ！！ 電磁アームにとどめられた風が、向きを変え、ヴェントへと牙をむく！

辺りに着弾し、爆風。

吹き飛ばされる中、ヴェントは考える。

（私は、間違っていたのかな？ 敵意を求めて、学園都市を憎んでも、結局そんなの）

問いかける先。

その先にとっては。

（どうだって、いいことだったんじゃないか？）

その意思に、答えるものはない。

ヴェントの意識はどこかへと向かって、消えていった。

――

従来のものよりも細く変わった電磁アームをおさめ、一方通行は考える。

（これは本来、数を分けても変わるようなものじゃない、つまり、俺が使えるミサカネットワークの領域が減っているという事だ）

心当たりは、当然ある。

無限に広がり続ける白銀の翼。

天使の様な、科学の光。

「まってやがれよ、人工天使様よォ！」

飛び上がる。

そうしてから、一瞬だけヴェントを見た。

けれど一方通行は、それ以上、彼女に関心を向けることはしなかった。

上空へと上がる一方通行。

どんどんと小さく、離れ、後ろへと消えていくヴェントと――、

もはや彼は、見る必要など、無かったのだから。

第六章 2（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

ヴェントの突破方法は、まあ考えてみれば割とあるんですよね。

- ・補足

- ・

第七章『上条オ当麻アアアアア！ A m a t a | k i h a r a』

1

上条当麻は、自身の右手と、彼女のことを除けば、普通に巻き込まれた特別と呼ぶべき存在だった。

例えばそれは不幸であったり、例えばそれは誰かを助けるためであったり、例えばそれ誰かに悪意を向けられたためであったり。

けれど、どれもこれもが上条にとっては特別足り得ない。

これを一体なんと呼ぶか、すくなくとも上条自身は、これを特別ではなく努力であると理解している。

少し不幸や悪意にはこういった言い方は適さないかもしれないが、それならば独力と呼び変えてもいい。単純に、上条は、常に力を、努めて振るってきた。

誰かを救おうとした努力。

誰かのためにたたかった、上条だけの結果。

けれど、もしかしたら。

考える。

これまで、困っている人の前に立ち、手を差し伸べて、右手で守って、怪我をしても——満足だった。なんの見返りもない、ハッピーエンドがご褒美。

それで十分、だったはずだ。

いや、

だとしたら。

上条は、その事に慢心していたとも言えない。

成長を求めないわけではない。

むしろ上条は無能力者、むしろ成長を求める方が正しいというものだろう。けれど、もしかしたら。

幻想殺しが、ある種完成されたその力が、彼を停止させていたのだとすれば。

自分のせいで大切な誰かを傷つけてしまうかもしれないのだ。

上条当麻は自分を特別だと思ったことは、一つしかない。

ただそれは、上条自身を軽く見ているということだ。

そんなことでは、なるほど慢心していたというのもおかしくはない。そこまで考えて、上条の至高にハテナが浮かんだ。

確かに自分は慢心していて、何もしようとしなかった。

ならば、それを指摘したあの研究者は――？

そこまで考えて、疑問のままとどめておく。

必要のないことであると、分かっていたから。

それに、

「ここか……」

見えてきた。

大きくあり、物々しいビル群。

一際のようなものはどこにもない、ただそこが一方通行によって指示された、上条が最も効率良く到達できる場所。

「……まってる」

右手を見る。

「絶対に、絶対に助けてやる——俺に、なんの力がなくっても」

けれど、握り込んだのは左腕。

右手には何の力を込めず、ただ前にかざすこともせず。

やがて、上条当麻はビルの中へと消えていった。

――

木原数多は、おかしい人間だった。

周囲を狂氣的な科学者の一族に囲まれ、本人もそれに感化されたのか、幼少期は非常に残忍な性格をしていた。

道端に倒れていた犬を平気でいたぶりそれが当然のように振舞った。

また、同時にそれが“どこまで犬は痛みに耐えられるのか”とい

う知的好奇心にもつながっていた。

そんな人間だった。

もしそのまま生活が続け、ただ生き続けたのであれば、彼は残虐で、非道な科学者に成り果てただろう。

けれど、彼を変える転機は思いのほか近くにあった。

そしてそれは、至極簡単なものだった。

いつものように犬を痛ぶり、そろそろ死ぬのではないのかというところで開放する。

もはや日課のようになっていたそれを終えて帰路についたとき、ふと後ろで気配がしたのだ。当時木原は怖い人物だと周りに印象づけて、人を近寄らせていなかったから知り合いではない。

ならば何か。

そして何故、“その気配はこんなにもこそしているのか”。

振り向いてみれば、ひとりの少女がいた。

同じクラスの、たしか木山といったか。下の名前はもう忘れてしまった。

少女が一体何をしているのか、ふと気になって見ていると、何と木原が痛めつけた犬を助けようとしていたのだ。

これには流石に驚いた。

まさかそんなお人好しが自分の近くにいるとは思わなかったし、なによりそんな彼女が自分にどういう反応をするのか、純粹に興味があった。

だから、目の前に出た。
彼女の前に現れた。

それが木原数多と、彼の人生を大きく変えた女性の、初めての邂逅であった。

突然現れた元凶である木原。
けれど少女は言った。

「なんのようかな？」

別段驚いた様子もなく、困った風に問いかけたのだ。

「あぁん？」

反応が面白くなかったのか、木原は凄んで、威圧した。
けれど、

「悪いけど、そっちに私の家があるんだ。どいてくれないかな」

驚いた。

木原が、である。

まさかこそそと自分に隠れるように動いていた少女が、そんな物言いをするとは思わなかった。

それに、どこか力のある言葉に、木原はたじろぎ、気づけば道を譲っていた。

「ありがとう」

さり際にそんなことを言われ……結局唾然とすることしかできなかった。

詰まるところ、完敗である。

けれども怒りはなかった。

むしろ、持ち得た興味に対して、喜びを感じたほどである。

——それから木原は犬の虐待をしなくなった。

もっと興味を持つものができたからである。

その少女に、なんだかんだ言っ、心を奪われていたのかもしれない。

今になってみれば、今更すぎる話ではあるけれど。

——閑話休題。

話しかけてみると、少女はわりと親切に対応してくれた。

昨日のことを聞いてみると、どうも周りの目が恥ずかしかったらしい。

木原の存在は知っていたし怖い人間だとも聞いていたが別段気にすることもなかったそうだ。

そもそも、むしろあそこで毅然としていたのは木原が見知った顔で、初対面よりも接しやすかったかららしい。

なんとも変な少女である、というのが、第一印象に近かった。

それから、二人は共に行動することが多くなった。

大体は木原が少女についていくが多かったのだが時には少女が木原を誘ったこともあった。

数年して、小学から中学に上がる頃には、両者には切っても切れない縁が、出来上がっていたのである。

そしてその頃には、すっかり木原も丸くなっていた、といったところだ。

木原数多は可笑しな人間である。

長年親友以上恋人未満を続けたかと思えば、ふと思い立って告白して付き合ってみたり、そろそろ結婚も考えたりしている。

けれども、同時にある種マッドサイエンティストな面もある。

極限まで減らしてはあるが、彼の実験には犠牲も有りうる、最悪失敗すれば死の可能性すらあるのだ。けれど、彼の受け持つ被検体は、誰もが彼に心酔し、自分から彼の実験に名乗り上げる。

そんな人間なのだ。

そして、彼は今、かつての教え子である一方通行の希望を、自ら打ち砕こうとしていた。

――

木原数多は一人、ビルの中にいた。

十数人ほどがゆうに収容できるスペースで、活動している人間は

彼一人である。

例外は、彼の立つ机の後ろで眠る打ち止め程度のものか。

打ち止め捕獲のために学園都市から用意された戦力、ハウンドドッグ獠犬部隊は解散済み、通信も完全に遮断され、もしあるとすれば打ち止めを介したミサカネットワークのみ。

それも掌握され、今現在木原を止めることができる人物は、ここにはいないのだ。

あくまで、ここには、だけれども。

——彼は人を待っていた。

ここの場所はあるの一方通行に知られている。

奴がやってくるのも時間の問題だろう。

もしかしたら、と考えはしたが、その可能性は切り捨てた。あの男がすぐにまた立ち上がれるとは思えなかったし、仮にここへたどり着いたとして、木原は全く負ける気がしなかったのだ。

木原は真面目でもなんでもない男だが、しかしこれだけは真剣にそうだと確信した。

何せ——

「っは！」

音が聞こえた。

階段をのぼる音。

なるほどそうか——勝ったのか、自分は。

「木いい原アアアアアアア！」

響く声、弱い声。

気のせいでなければそれは、全く変わらないあの時のものだ。

「ツハ、ハハツツ！ ハハハハツ！ 一方通行も血迷ったかあ！？
こいつをここに呼び込むたあなあ！」

——上条当麻。

木原が考えた万が一にもありえない可能性。

そして、負けることなど絶対にありえない人間。

「氷華を……助けさせてもらおうぞ！」

「すぐわねえのか？ ヒイロオオオ！」

両手を思い切りよく振るわせる。

手を打ち合わせ、勢いよく自分に噛み付く上条へと、拳を構えた。

言葉はそれ以上には、まだ入らない。

両者が、即座に激突する。

第七章 『上条オ当麻アアアアア! Amataki hara』 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

木原数多を変えたのは、外道が少しだけ光を見るような、ちっぽけな救済劇ではないんですな。

……いえいえ、原作一方通行さんのことなんてちっとも思い浮かべてなんていませんよ。

補足

・多分なし

第八章『あゝ、俺が一方通行だ Accelerator』

1

雨のみが辺りを叩く、そこに何があるのかすらも曖昧な、学園都市の闇の底。

一方通行は倒れ込むヴェントに近づくと、軽くその様子を確認める。目立った外傷はそれほど見えないが、意識はないようだ、ずいぶんと眠り込んでいるようにも見える。

何かがあったか、

少し気になったが一方通行にはどうでもいいことだった。

今彼がすべきことはそちらでは無い。現在学園都市を襲っている異変、詳しくは一方通行本人も分かってはいないのだが、ともかくその原因であろうものを、取り除かなくてはならないのだ。

まさかこれを全部木原、延いては風斬が行なっているわけでもないだろう。

ならばこの女が、恐らく学園都市に今、誰もすら居ない状況を作っていると予想するのは難しくない。

「さて、どオしたもんかねェ」

忙しいのだ。

さっさと回収をして、そこらの暗部組織にでも任せたほうがいいかもしれない。

「とりあえずぐるぐる巻にでもすりゃいいのか？」

こんな時に、あのシスターが入れば違うだろうか。

もしくは上条当麻、どちらも、シスターは知識から、上条は右手から、この魔術——だと思われるもの——に対応できる人材である。

今後それが少ないというのは、なんとも問題かもしれないと、一方通行は少し考える。

恐らく、今日を境に世界は大きく動き出す。妹達、残骸、あの八月三十一日のような学園都市内分だけではない、世界中が、大きな動乱へと向かっていくことだろう。

それを止めることは一方通行にはできないだろうし、精々犠牲を少しでも減らすべく、自分が率先して動くことしかできないだろう。

ともかく、

それに合わせて、仮想敵である魔術というのは、少しばかり情報不足なように見えた。

とはいえそれは禁書目録の性能を知らない一方通行だから考えるのであって、本来、上条当麻を中心とするこの勢力は、十分魔術とも対応出来る力をもっているのであった。

「連絡……してみるか？」

あの木原が行なった襲撃の後、シスターはどうしていただろう。上条が起こしたか、それとも未だあそこに放置されているか。

携帯は確か持っていたはずだ。

その番号は、さて誰から聞けばいいのだったか……

「上条当麻……論外、打ち止め……馬鹿じゃねェか？　となると――」

携帯を取り出し、少し考える。
躊躇するのはまあ当然か、

「ったく」

だとしても、やらないわけにはいかない。
自分に対して舌打ち一つ、一方通行は携帯を操作する。

「申し訳ないが、少し時間はあるのであるか？」

その時だった。

不意に、声をかけられた。後方数メートル先、雨の音ゆえか、それともその男が熟達していたのか、声をかけられるまで、一方通行はその男には気づかなかった。

見れば、壮年のがたいが非常に良い男だった。

まるで道を尋ねるような話しかけ方。
言葉だけであれば可笑しくはないだろう、彼は見たところ外人のようだ。道を知らないのも当然といえる。

けれどもそれは、白一色の男が、壊滅した辺りを気にした様子もなく、倒れた不気味な女の前で何かをしようとしているという状況に置いては一変する。

そして、その男の、あからさまな圧力が、それを更に裏付ける。

「……何ですか、おいおい一体何が始まるンですウウウ？」

「まずは名乗らせてもらおうか——私の名は後方のアックア、そこにいる前方のヴェントとは、一応同僚というくりになるのである」

なるほど——納得だ。

相性の問題か、それともこの女は戦闘以外の切り札を持っていたのか。

今となってはわからないが、圧倒こそされたものの、一方通行はヴェントに負ける要素がなかった。

それでもヴェントは強者だ。

あそこまでの事は、通常の人間ではまったくもって不可能だろう。

ならば、納得。

それと同じならば感じた気配は間違いない、この男は紛れも無く、一方通行が能力なしでは戦いの土俵に上がれないほどに、強い。

「——何の目的だ」

「単純なのである、交渉をしにきた、敗戦処理なのである」

「態々言うに書く事か？　それが。……まあいいけどよオ」

「端的に言うのである、そこにいるヴェントをこちらに渡すのであ

る」

「あア、そうかい……それで？」

報酬は、なんだ。

言葉には出さない、けれど意思にはそのみを浮かべて——まさかただこの女を回収するというわけにはいかないだろう。負けたのだから、それ相応の対価が無くてはならない。

強引に、というなら相手になる。

そういった殺気を隠さず晒し、軽く男を睨みつける。——この男は間違いない強い、けれど、倒せない相手でもない、戦うというのであれば、一方通行は誰かのために戦おう。

「——舌に鎖の十字架をこの女は付けている。それは、現在この学園都市を覆っている天罰術式発動のキーなのである」

……なるほど。

「だが、家には魔術のエキスパートだっていんだ、態々教えてくれたのじゃア感謝するが、だからといってそれが条件って訳にもいかねエだろオが」

「……戦争が、始まるのである」

「……あア」

その通り、だが一体それがなんだ？
疑問で一つ、アックアをにらみつけた。

「彼女をお前たちが捕らえておけば——理由になる」

「そうかい」

つまり、

「今この場で、私は貴様を討たなくてはならないのである」

——殺気。

上等なものだ。

「討てるもんなら討って見やがれ——少なくとも、世界を平和にするよりかはらくだろオが」

「……それが貴様の戦いであるか」

「滅ぼしてやる、何もかも、その気があるなら掛かって来い！」

「……ならば、ヴェントをコチラに渡すのである」

「——俺はな、世界よりも大事なもんがあるンだよ」

しゃがみ込んで、少し。

ヴェントの口からは、少しばかり鎖が覗いている。
これか、と、軽く見定めて、少し触れた。

あっという間に、鎖十字は消え去った。

「驚いたのである。まさかそれを壊したのであるか？」

「もう終わってんだよ——俺は行く、そいつなら勝手にするんだな」

「そうするのである」

会話は、そこまだった。

後は、独り言、去り行く一方通行に、アックアが言葉を残した。

「次があるのであれば、恐らく敵同士では、ないのが望ましいのである」

それは、一体誰のためだったか。

言葉を聞きすらもしない一方通行は、既に何処かへ消えていた。

第八章 『あア、俺が一方通行だ Accelerator』（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

というわけで忘れてました。

本編はヴェント戦後始末。

第八章 2

2

一つ、二つ。

雨の数は人の数。

何もなく、何もあり。

何もない、ただ在るだけ――

それは化け物だった。

無限にも連なった光の翼を、一身に受ける。まさしく天使の所業。金色が重なり、その表情はどこまでも暗い。まるで“彼女”の周りには、世界の終わりが行列をなして始まりを待っているようだ。

悲劇――惨劇、エンドロールはまさしくそこに、彼女は何一つとして語ろうとはしない。

どうして、こうなってしまった。

自分が一体何をした。――化け物でもなんでもない、ただ独りの少女が、何をした。

気がつけば、そこにいた。

思い出せば、人間ではなかった。

そんなの、当の昔にすてた事実だ。

今、その少女にあるのは、人間としての行き方。化け物でもなんでもない、誰よりも人間らしい、化け物の生き方。それは、否定のしようがないはずなんだ。

だったら何故、少女は今、ここにいる。

可笑しいではないか。――気づいたときには、少女は化け物として、君臨していた。あたりに顕示するよう光を上げて、ストレッチ代わりにビルを壊した。

ここは廃墟だ。

ゴーストタウン。

人の意思もなく、成長も、滅亡も、勝利も、敗北も、何もかもがうち捨てられた場所。そして、それを作ったのは紛れもなく、少女――風斬氷華自身だった。

「あ……う あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ」

どこに言葉があつただろう。
どこに本来があつただろう。
どこに風斬があつただろう。

可笑しな話だ。

不可思議な、御伽噺だ。

そんなはずはないと、解っているのに。

「ああ……うあ、あああッあつつあああつあ
あゝあゝあゝあゝあゝあッ！！！」

なんで、**何で風斬は――**

違う、

違うちがう違うチガウちがう違う違う違うチガウ違う。

そんなことあるはずがない。

風斬氷華はただの人間だ、少しばかり力があるが、それは風斬の周りだって同じこと、一方通行が周りを威嚇するように、公言してもいい。

御坂美琴のように、日常のごとく振り回してもいい。

ただ、風斬という少女は、少しばかり気弱で、でも根は固くて、ひとつのことに命懸けで一生懸命で、上条当麻の子が好きな――

笑顔の可愛い、そんな少女のはずなのだ。

だというのに、風斬の体は雨にも濡れない。

雨の数は人の数。

何もなく、何もある。

いずれにせよ、ただあるだけのそれは、――化け物だった。

「退治しに来たぜエ！ 化け物オ！」

そんな声が響いたのは、いつしか。

風斬の体が、涙に濡れていた頃だった。

まがい物の雨。

そこに立つのは、一方通行。

濡れた様子はなく、反射を利かせ、斜めに沿った爆心地。

その最上段から――風斬を見下ろしている。

「あ、ああああぐぜられーださん……!？」

「あア、俺が一方通行だ」

こともなげに答える。

砂をける、雨の中だというのに警戒な音が響いて、一方通行は前へ飛び出した。滑るようになったらかな坂を降りていく。

「ふうん、意識はあるみてエだな……いや、その様子だと意識しかねエか？ ……恐らくはそういうコマンドが入力されてるンだろうなア」

「 $\frac{1}{2}$ 」

「わめくな、直ぐに助けてやる。俺がやるわけじゃないがな」

坂の半分を切った一方通行が軽く飛ぶ。
微妙に浮かんで、着地した。

――円形の闘技場が、出来上がる。

風斬を囲むように一方通行の着地した地点から、思い切り良く凹んでいった。なだらかながら反りのあった地面が、完全な平らに変化した。

小気味よく細切れにされた粉々の地面。

中央、白い翼が、妖しく光った。

「ど奥いうわけか、オマエをこうしている理由である魔術師が退治されても、お前はそのままだ。……学園都市側、アレイスターに一体何の目的があるかはわからねエが、予想の付く限りじゃ、その理由は俺かあいつだ」

面倒な話だが、避けて通るわけにもいくまい。

吐き捨てて、一方通行は挑発的に笑う。

「だが、どうすることもできねエ。俺に今打てる手はない、だからオマエを倒す。化け物になっちまったオマエと戦って、それを止めるしか、今、出来ることはない」

ポケットに突っ込んだままでいた両手。

それを取り出し、腰を落とす。特攻を仕掛けるような、攻撃の構えだ。

「あいつには悪いが、俺にも目的がある。だからそのために――死んでくれ！」

風斬は、なんの反応も返さなかった。

返せなかったのか、返すものが見つからなかったのか、それともはたまた返さなかった。

結局それは、一方通行と風斬氷華。

天使と最強の、バカみたいな戦いの中で、見つける他はなかった。

――

風斬の体が飛び上がる。

たまゆらにたゆたう白の翼と、金色の戦闘装飾、圧倒的なまでの威圧でもって、一方通行に応えようというのだ。

急設された闘技場の、ホール最上まで浮かび上がった風斬が、すぐさま行動へと移る。

枝分かれした翼のいくつかは、一方通行に襲いかかったのだ。

――速度は音速、破壊力は――おおよそ考えるまでもないのだらう。

「ッハッッ！」

一笑に伏すかのごとく、一方通行が大きく息を上げる。音を携えたそれは、どこかへと響いて、上空へ思い切り跳ね上がる。

丁度、両者の視線が並行に交錯した。

その瞬間、白き爆音が、大空を叩く。

まるで一方通行を囲むように、帯状に姿を変え、襲いかかった。けれど、その時にはすでに一方通行は動いていた。体を傾け、まるで飛行する戦闘機のごとく、その高度を急激に下げる。

途端、新たな帯がそれを追いかける。

上を、下を、後方を前方を、まるですり抜けるかのように一方通行へと迫り、それは一方通行の移動についていけないがゆえ、からぶった。

そのまま、地面へと一気に着地する。

――予備動作なしで、そのまま体を倒し、動き出す。

旋回するように弧を描き、そこに白が追撃する。

無数の翼はまるで弾幕だ。

迫り。貫き！ 叩き落とし！ 数多のそれは一方通行へ向かい、消えてゆく。

一方通行も負けてはいない。

揺れ。跳ね！ 急加速し！ まるで最初から外れて白が打ち込まれているかのように、回避する。

サーカスだ。

大道芸、まさしく見世物以外の何物でもない。

「どオしたどオした、オマエは俺を攻撃してるンだろオが！ だつたらとつとその無駄な色を叩き込んだらどオだァ！！」

挑発するかのように。

しかし意味はない、あくまで自分自身へと向けたもの。

それが合図であるかのように一方通行は飛び上がる。

当然翼は追いかけるが、ワテンポ、引き寄せるように一方通行が留まり、そうしてからの高速一回転、一気に振り切られた。

輪を抜け出すような気楽さで、一方通行は一気に風斬へ迫る。

一方通行自身へのそれは、たしかにあったが、そのたびに回避し、直前のまっさらな状態へ戻る——結局、風斬へと続く道を滞るものはなかった。

一気に接近し、そのまま裏手へと回る。

風斬は動かない。一方通行はそのまま、白い翼へ容赦なく、無数の連打を叩き込んだ。

一つ一つに願いを込めて、まるでそれを自己否定するかのよう、書き消していく。

重い、一撃が限りなく。

けれど、

「っちィィっ！」

思わず声を上げ、一方通行が飛び退く。

風斬の翼が反撃へ移ったのだ。

転がるようにして地面へ着地、片足が跳ね、それを抑えるように、地面へと叩きつける。

——迫っていた翼を遮るように、槍型の岩壁が完成する。

しかし、それは一秒すら持たなかった。

岩に隠れた一方通行の体が再び雨にさらされる。

改めて、無数が有限に、襲いかかった。

軽く舌打ち一つ。

一方通行の体が棒立ちから一瞬でスライディングへ変わる。

流石に、立ったまま突破するよりも、こちらの方が効率がいい、何せ、白はどこからでも襲いかかるが、今のところ、下からは攻撃が来てはいないのだから。

距離にして十メートルほど、たっぷり滑りきって、立ち上がる。

そのまま一気に移動を開始し、再び風斬に接近を試みる。

白光が、むやみやたらと地面を叩く。

一方通行にも、それは襲い掛かり、行く手を阻む。

旋回しながら様子を見て、機会をうかがう。

そんな一方通行は、その時、あることに気がついた。

（ちよつとまで……おい、俺が更地にしたはずのフィールドが、掘り返されちまつてるじゃねェあ！）

それが意味するのは、つまり。

しかし、手遅れだ。

気がついたときには、進行方向は台になっていた。

問答無用で飛び上がる。

ここまで完全に、まるでプログラミングがされたかのように、誘導された。

そして、鼻先三センチメートル。もはや演算の間に合わない場所に、白があった。

一方通行が、無色のそれへと、染め上げられる！

第八章 2（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしてます。
ラストバトル第一戦、流石に派手さはこちらの方が上です。

補足

- ・因みに一方通行はピンチです。絶体絶命。

第八章 3

3

この時、一方通行は間違いなく反射を利かせていた。攻撃を反転し、あらゆる惨劇から自身の身を守る孤高にして最強たる一方通行の力。まさしく必然、それである。

けれども、一方通行はなすすべもなく吹き飛ばされた。

弾丸のごとく、流線を描いて翼ごと、地面に叩きつけられたのである。淡い銀箔は、一方通行の顔面を銃弾で打ち抜くレベルの速度で、打ち抜いたのだ。

「ぐっアア」

思わず一方通行の声が漏れる。

——実のところ、銃弾というのは比喻ではない。風斬氷華の翼は、その一つ一つが、マッハ3以上、銃弾の——その大きさ、規模で言えば、超電磁砲の方が相応しいだろう——威力を持っているのだ。現状、彼女とまともに戦えるのは、それこそ一方通行クラスでないといと不可能なのだ。

だからこそ、一方通行はまともに一撃を喰らっていた。

反射できなかった、という事はないだろう。精々半分ほどは少なくとも削ぎ取っていたはずだ。

けれども、人間の体は十分それで吹き飛ぶのだ。

「っち、面倒な一撃じゃねェかよオ！」

一方通行の顔面へ叩き込まれた一撃。

けれど一方通行は無事どころか、煽り文句を口にする程度には余裕があった。

それは当然、一方通行がその事を予見していたからに他ならない。

——元々、想定済みだったのだ。

少し前——原理はミサカワソコの一撃を防げなかったのと同じだろう。

「ミサカネットワークからこっちの回線を乱しやがってるな？　その上それをはずせば、今度はオマエ自身——学園都市の能力そのものにのつとられるって訳だ」

よく出来てやがる。

吐き捨てて、睨みつける。

——だから、ギリギリの状況で一方通行は翼を弾き飛ばした。反射——真っ向から受け流すのではなく、翼の向きを^{ベクトル}利用したのだ。

それでも、吹き飛んだ。

上向きに向いた翼、一方通行が受けたのは余波だった。それでもこの威力、人体には嫌に響いてしまう。

余裕は、ある。

勝機も、十分。

けれど、本当は？

実際、あと一つ貰えば、一方通行は再起不能といってもいいだろう。

それも、あくまで受け流しに成功した場合だ。先程のあれは、本当にギリギリの状況だった。もう一度できるかと問われれば、無理だろうと答えるのが人間だ。

出来ない、わけじゃあない。

けれど、するわけにはいかない。

そもそも、どちらにせよあと一回で終わりなのだ、喰らうわけにも行かないから、それはもはや前提にすらなりはしない。

「――たくよオ」

ずっと同じ場所にとどまっている、という事は出来ない。

足踏み一閃、凹凸のできあがっていたフィールドを、平らな面に、無理やり整える。――これで再び元のフィールドだ。

体は痛むが、そんなものは向き変換でなんとでもなる。

そのまま、一方通行は動き出した。

そうしなければ、始まらないからだ。

「何で俺はこんなことをしてるんだろオかねエ」

廻旋し、体を地面に突き出す。

襲い掛かる風斬、一撃は蠢き、貫き、穿つ。

「オマエもそオなンだろ？ 風斬ちゃアン」

決るように、右側を迂回し、迫り来る白煙。

滑り込むように、左側をくだり、打ち込まれる月光。

「戦いたくなンざねエはずだ。だけどよオ、オマエはここをぶっ壊しちまったンだろ？ だから、怖いんだろ？ 自分が」

そのどれもを、一方通行はすり抜けるように回避する。

上へ軽くとび、浮遊の間もなく今度は前へと転がり込む。

「だから俺にぶつけるしかねエ、その不安を俺にぶつけてよオ——
だけど、できるのはなんだ？ 時間稼ぎか？」

足で地面をけずるように滑って、一方通行はうまくその体を方向転換させる。

描かれた弧から、風斬自身へ狙いを定めたのだ。

「じゃあ俺はどオ何だ？ 何でオマエの不安つぶしに俺は付き合ってやがる」

接近する。

浮かび上がった風斬氷華へ、地面から、上空へ。

「可笑しいよなア！ 何せ俺は一方通行なんだぜ？ たった一人、あいつのためなら学園都市がどうなろうと、関係ねエンだよ！」

近づくことに労は要さなかった。

迎撃する光線は、まるで一方通行を誘い込むかのように、すり抜けていくのだから。

「だけどよ、止まんねエンだよ！ オマエを止めようとする手がとまらねエ！ 何でだ！ 何でなんだよオ！」

それは貫く剣閃のようだった。

翼を全て無視しきって、やがて風斬に並ぶ。

そこで、一方通行は風斬の顔を、初めて間近でみた。

泣いていた。

「ッ！」

そのまま通り過ぎる。

狙いは翼、その根源だ。

「――げで」

声が、聞こえた。

翼は回避を選び一方通行の手からすり抜けてゆく。

先程のラッシュは、確かに効いていたようだ。

だからこそ打ち込む、風斬を無視して、ひたすら翼へ、その根源

へ、——天使^{エンジェル}へ。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

唸るような、声だった。

バイクの、無機質なエンジン音に聞こえる。

同時に、生き抜いて生きて、生き切った、百獣の猛者が放つ、雄たけびにも、聞こえた。

やがて、翼は逃避を選んだ。

一度、風斬の周りに浮かんそれが掻き消え、風斬の体が地面へと下降を始めたのだ。

（頼むぞ——）

追いかける。

どちらも高速で地面へ、叩きついた。

「だずげで、どうまざああああああんッッ！！！」

（力を貸してくれ、砥信ウ！！！！）

はっとする。

同時、改めて、風斬の周りを翼が覆う。

盾の様に、一方通行の目前を遮った。

襲い掛かる翼を加味し、そのまま一方通行は後ろへ下がる。一歩ですぐさま、十メートルは距離を稼いだか。——翼に形状や速度の

変化はない、近づこうと思えば近づける。

だから、一方通行は一つ、言葉を吐いた。

「そオだよな」

それは理解だ。

風斬という少女にたいする、理解。

「オマエも、そうなんだよな」

被ったのだ。

自分と、風斬が。

「持っているはずの信念が、確固たる現実が、歪んで、消えて、今はどこにもみえねエンだよな」

砥信が、上条が、

——守るべきものが、共にあるべき、真実が、

だから、

「倒してやる、あいつの変わりにはならねエが、俺は俺の変わりに、オマエを倒す」

——定義しよう。

一方通行の目的は、布束砥信を助け出すこと。守り通すこと。そのためには、あらゆるものを犠牲にすることを誓った。だから、救いたい。

例え寄り道になっても良い、ありとあらゆる道を進み、敢然たる終わりのなき世界を、救いきってやる。

だから、定義しよう。

一方通行の守るべきものは自分自身と、布束砥信。だから、自身を手の届く限り、あらん限りの全てとしよう。広大無辺、無尽蔵なまでの自分自身だ。そうして救っていけば、そうやって手を伸ばしていけば、そうすればそうだ、自ずと見える。

その手が、布束砥信へと、たどり着く未来が。

結論は出た。

何をして、胸を晴れ。どんな世界を選んだとして、それがどんな道だったとして、あらゆるすべてを救って見せろ。たとえそれが寄り道だったとして、恥じるな。ただ違えるな、すべての目標を、寄り道してでもたどり着け。

既存の価値観は全て塗り替える。

不可能を可能に変換しろ。

目の前にある条件をリスト化し、壁を取り払え。

「さア、救うぞ天使！」

そうだ、目指すはあいつ、ただ一人。

「救済の時間だぜエ！ クッソ野郎がア！」

それは、幻想を、現実に変えるために。
あらゆる幻影が襲い掛かったとして、あまねく実像に傷つき、全てを失ったとしても。

ただ一つの真実を守り抜くために。

だから、その時既に、そこにそれはあった。

「ぶっ潰 g y l 5 w k l」

――力を感じた。

無限にもにたものが湧き出る、何か、不可思議で可笑しな力。那由他まで続く、ルールにもにた、人間以上のそれだ。

「アン？」

軽く漏れたのが、疑問。

気づいたときには、風斬の一撃は全て、シャットダウンされていた。

能力から湧き出ているのではない、何かから、一方通行という化け物のそれ以上の、得体のしれない存在から、その力は噴出していた。

「だあ？ どうなって d k t p ; k」

それはノイズだ。

言葉を得ようにもそこを遮るように、一部の音が途切れてしまう。疑問の答えにはならないだろう、むしろ一方通行をより、混乱させ

るだけだ。

今でも襲いかかっている風斬の翼が、尽く防がれているというのも、またその余地を残していた。

——疑問の答え。

ただ巡らせてもわからなかったそれは、ある事柄から察知できた。

感じられたのである。今まで、全く持ち得なかった感覚を、電磁アームのような、感覚とは正反対の、演算から動くようなそれとは違う、まさしく本物の、全く新しい感覚だ。

気が付けば背中に、どこまでも曖昧な二対のそれは、あった。

(……灰色の、翼?)

正体は、分かった。

迎撃方法もなんだかんだで簡単だ。襲いかかってくる白に、そのオーラが直接噴射されているかのような翼の“羽”が食いつき、白を突き破っているのである。

「っ h a。そオいう h a ; d o よ」

飛び上がる。

当然、この翼には本来空を仰ぐ彼らのような、飛行機能は備わっていた。とはいえ羽ばたくような動作はないし飛んでいるというのもどこか今まで行なっていた能力による浮遊と、あまり変わらない感覚があったが。

「あいつとo' ; uか？」

既に飛行を止め、地面からの迎撃を狙う風斬と、自身の翼を見比べる。

その性質、光であるようなそれは、色の違いはあるものの、変わらない。ただし、先端がのっぺりと、まとめられているあちらと違い、こちらは随分と乱雑だ。

まるで、科学的に研究されつくし、それがひとつの完成系となっている建造物と、職人の才覚に全てを委ねる形となる、完了系の建造物との違いのような、

「まア、いい」

単純なことだ。

圧倒してやればいい。

これだけの力を得たのだ。その規模、まるで負ける気がしない。今一度の力であるのだとすれば、少し限りおしくはあるが、この力はまさしく彼女にぶつけるためのものだ。

理解する。

この能力は、化け物だ。

やってやろう。

やってやる。

決めた瞬間。

両者は動き出す。

風斬からせまる無数の白は、そも威力からして一方通行の灰を超えられない。翼が爆撃を開始すればすぐさま天使の様相は、弾け、飛び散り、貫かれた。

そうなればもはや形無し。

一方通行自身の飛行性能向上も合わさって、どうしようもないほど、あつという間に風斬氷華の目の前に、彼は現れる。

灰色に束ねられた天使の象徴。

世界を飲み干さんと広がる翼は、しかし意味の無い物と成り果てた。

——結果は、聞くまでもないだろう。

第八章 3 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。
翼発現までの地の文などは原作準拠です、原作と同じ条件で発言させたかったので。

第九章『その幻想をぶち殺す Touma|kami|zyo』

1

睨み、動にして暴の、むき出しにされた感情。

——上条当麻。

笑み、静にして乱の、突き出された不敵の感情。

——木原数多。

両者は、無言のまま、ほぼ同時に激突した。

拳を左、そして右。

左右同時同方向から突き出された一撃。上条は体を落として、はなからその圏内を逃れ、木原は軽く顔を振って回避した。

前のめりになる上条と、体を反り返らせる木原。

線と戦、その端的な間が、両者を滞らせる。

それは気のせいの領域に、属するもので。

動き出したのは、上条だった。

右で打ち込んだ拳を返し、交わして左を打ち込む。連打ワンツ一の流れだ。

勁烈なダブルストレート、けれど木原にそれを受ける選択肢はない。一步引いて、打ち込んだ左を構え直した。——手を抜いているのか、油断させているのか。

どちらでもないのならば、さて。

とはいえ考える間もなる。お互い手を考える前に打たなくては、そこで敗北するのはそちらなのだ。

思い切り、木原が蠢く。

横へ九十度、軸を描いて上条がそれをなぞる。合わせて、木原もそれに合せて体を回す。

上条が、拳を飛ばした。速度は十二分、単なる回避では間に合わない。――体を落としながら、軸とした足を中心に、木原が構える。

――再び、両者が向かい合った。

セリ上がる形で、上条当麻は駆け上がる。

踏み潰す形で、木原数多は天上を行く。

どちらもがどちらもを一瞥し、――すぐさま連撃へと移っていく。

振り下ろすべく向けられた拳と、それに相對するべく上条。右へ体を寄せて、そのまま振り回すように横合いから木原を殴りつける。受け止めるように、木原の拳が動いた。金属に包まれた、その文字通りの鉄拳が、上条を受け止める。

――若干のしびれ、だが、無視して上条は左の拳を弓引いた。

交錯する。

合わせて――拳を引ききった木原が、さきほどは振り下ろしたそれを、今度は振り上げたのだ。

同時に、両者へその拳が到達する――似た者同士、結果まで同じ

だ。無論、それは回避という結果にほかならない。

顔を後ろに引き合って、すんどめの形に持っていく。

そうして一歩、お互いが引く。

間は無い。

上条がふさぎ込み、ギリギリまで接近する。飛ばされた木原の拳は、もはや無視される形で、くぐり抜けた。

もはや零に近い距離から、上条の手元が離れる。

木原はギリギリまで体を横に引き伸ばした。空間を広げ、自身を掲げ、一気に次へ備える。

いや、しかし意味はない。

「っ！」

気付く、そもそも最初の一撃はフェイント、既に行動そのものから、右を放つ体制へともっていつていた。――迫っていたのだ。

「ぐ、おおお！」

息が漏れる。

それを無視して、木原が拳を振り絞る。

「いいモン持ってんじゃねえかあ！」

「ぐ、っあけんなあああああ！」

肩を擦るように、木原の拳も、上条に少しばかりは突き刺さった。

それでも、木原の鉄拳は十分な威力、お互いにダメージはほぼ同等といえた。

「だよなあそうだよなあ！ テメエは俺がぁんだけ言ったのにここまで来てんだ、よっぽどの大馬鹿者でなけりゃあ、近寄ろうとすら思えねえよなあ！」

その力の有無にかかわらず、と、言葉をつなげて。

「ごちゃごちゃうるせえ！ そんな話をしにきたんじえねえ！ オマエを倒して、氷華を助けるんだ！」

連打。

木原は一度、回避へ回る。

上条はただひたすらに、後ろへ、斜めへ、体を滑らせるように回避を行う木原へと追いつがった。

太鼓のリズムにのるような、軽快とも単調ともいえる一方的な舞道。

無論、木原の言葉も、上条を突き刺すべく回る。

「ハン！ 助けてなんになる。テメエの力は通用しねえ、みりゃあわかるじゃねえか！ 守って戦って、救おうとして、それに一体なんの意味がある」

一転、木原の拳が唸る。

攻守転換、無理難題のごとく、木原が無辺に責め立てる。

「意味何ぞ求めてねえよ。てめえにはわからねえだろうが……俺は氷華が好きなんだ」

回避を続ける。

ギリギリまで木原を引き寄せて、カウンターを狙っているのだ。
……けれど、上条のそれを、疎雨はさせまいと、より一層木原が衝き上げる。

「ただ漠然とそうしていたって、テメエは何処へも進めない——油断、慢心、それを否定しないテメエに、前進なんざありえねえ！」

ゴウツ！！

迫り迫った木原の拳が、耳元を叩くようにカスめていく。
音が響いて、上条はすぐさま反撃に転じた。

「それは十分解ってる、だけど、今は立ち止まるべき時じゃない」

絞り上げるようなアッパー、限界まで力を込めた一撃は、木原の鼻っ柱を間一髪を避け、離れていく。攻撃は続いた。

「悩んで、迷って、決めるんだ！ だからそのために、俺はなんだっていい、前向きだって、後ろ向きだって、前進だって後退だっていい。進まなくちゃいけないんだよオオオオオオ！！」

回し、上部。

直線、左方。

連打、直線。連打、連打、連打！

すり抜け、流れ、蠢き周り。

どこまでも、両者の攻防は続く。

「その先に一体何がある。テメエが何を求めて、そこへたどり着く。

破滅か！ 救済か！」

一步、木原が引く。

体全体をバネに、爆発的な力を溜め込んだ。

上条は、それを分かっただけのお踏み込む。右手と左手、どちらもすぐさま放てるよう、構えを決めて、体が地面に接する状態で。

「決まってる、考えるまでもねえ！」

激突した。

——音が消える。

物理的にも、空間的にも。

立っているのは、二人の男だ。

「に、」

上条の、声。

「たら」

木原の、音。

答えは既に、両者決まっているのだ。

「氷華に、決まってるだろうがアアアアアアアアアアアアアアあああああ

第九章 『その幻想をぶち殺す Touma|kamizyo』 (後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしてます。

さて、前回は上条さん戦術が跳ねっ返りましたが、果たして今回は、

補足

・言葉で動揺しなければ、両者の実力は拮抗する

第九章 2

2

斜め方向、上条の閃光。
振り上げる、木原の拳。

戦闘は続いていた。

周り、狂い、ひたすら叫び、右へ上条が踏み込めば、左へ木原が退避する。振り下ろす木原の腕あれば、上条は下まで引き寄せて、一気に横へ潜り込む。

拳が当たれば、呻き。

時にはそれがかち合いながら、急激に突発する。

「つとによお！」

右へ流れ、拳がうなり、各もそれは唸られり。
しからば下にも上にも姿なく、左へ如何参られる。

「どうにもこうにもやってくれるじゃねえか！」

それは、舞だ。

しかして、武道だ。

そして、――演劇だ。

「決めたんだよ、強くなるって、分かったんだよ、変わらなきゃって、だから止まらないんだ、てめえにそれが、わかるかよッ!!」

数歩、一度後ろへ上条が引く。

奥には机と打ち止め、後ろには扉とビルの中。

図らずそれは最初にこの場で対峙した、二人の状況とそれほど変わらぬ。――体はいくらかふらつくが、この状態は、十分仕切り直しと言えるだろう。

「ハハハアツ！ それを俺に聞くのかよ！ テメエに真っ向の敵である、この俺に！」

軽く顔を上向きにして、高らかに木原は笑う。

いまいましげな、上条の表情。二人分、彼に笑われたように思えたのだろう。

「わからねえなら知ったことじゃねえ、もう決めたんだ、てめえには、何の関係もねえよなあ！」

「あー」

木原は、何かを言いかけて、

「いや、やっぱいいわ、ぶっ潰す、盛大賭けて叩きのめす」

かわりに、両手を軽く打ち鳴らした。

上条が、笑みにも、怒りにも見える獰猛な面で、木原に殴りかかる。一気に姿勢を低くして、右手を伸ばした。

両者の拳が交差する。

カウンターののように、お互いがお互いへ、突き刺さろうというのだ。

回避を行なったのはまず上条だった。

顔を落として、顔面へ向かうそれを回避する。しかし体制を変えたためか、上条の拳も軽く木原をなでるに収まった。

お互い、本命はここからだ。

これはあくまで、再開の合図に過ぎない。

動くのは木原、突き出した腕を引き戻しながら返しの手が突出し、上条をえぐる。

体を左にそらして、上条は回避する。割とギリギリの体制だ。――そこから一気に拳が流れる。とはいえこれは回避されても舌打ちさえできない。

そうして、そこまでが一連の流れだ。

次へ移る。

(……………)

上条は、木原へと視線を向けた。

彼の行動と視線の向かう先、あらゆるものを情報として予見する。完全にというわけにはいかないが、それでもやらない訳には、いかないだろう。

そうしてから、上条はその意識を集中させる。

(……………なん、だろうな)

――違和感だ。

木原を見て、自分を意識して、そうして感じる、木原への違和感。

何か、何か取り違えてはいないか？ 木原数多という敵を、上条当麻は履き違えてはいないか。

そちらへと戦闘中ながら意識がむいた。

——戦闘の手を緩めてはいない、攻撃を抑えたつもりもないし、防御に手を回したり、防御に手抜きがあるというわけでもない。

単純に、攻めへの精彩が欠いた。
決め手をどこか、失ったのだ。

言えば、それは戦闘自体を、先送りにしたようにも見えた。

「ああん！ どうしたどうした！ 縮こまってんじゃねえぞ、この野郎があ！」

木原の声。

それを無視して、意識を潜らせる。

求めろ、求めなければ、だめだ。どこからか、そう声かけられる。

上条当麻が木原数多を乗り越えるには、それを知らなくてはならない。あるはずだ、先へ進むためのパーツが既に、木原数多の存在、その正体が既に！

——上条当麻には記憶がない。

——正確には、記憶の半分ほどが、ではあるけれど。

打ち込まれる木原の拳、片方は折り曲げて構え、もう片方は斜め

下に捻り込むように打ち込んで、上条は横に揺れて回避する。

タイミングが決まりきったような一連の流れ、上条はその振り子が、最も大きいところを、一つ狙った。攻撃に精彩を欠き、多少ながら受けに回っているとはいえ、攻めをやめたわけではない。

——少なくとも、あの病室で目覚める数日のことは、ほとんど覚えていない。

——精々が、インデックスと初めて会ったときの会話、神裂相手に何かを背に戦ったということ、そして、

右を軽く振りかぶり、大きく離れた場所から、一気に木原へと踏み込んだ。

触れ幅の最大点。今、木原の拳は大きく遠くにいる。片方は構え、交差させる形でしか打ち込めない。何より、上条と木原、拳の打ち合いにおいて、二、三步空いていた空間が完全に閉まりきった。

——けれど、その数日、上条のパーソナリティは大きく変化した。——成長した、といえはどうだろうと首をひねるが、大きく変わった立ち位置は、もしかしたら前に進んだのかもしれない。

そこから繰り出される拳は、流石に受け止めることはできないし、無視できない威力だ。木原はなんとか体をずらす、左足を軸に、半回転。

しかし上条の狙いはここから、一気に木原の空けた空間に自分を踏み込ませる。

回避を完全に遮断する態勢。そして、いかんともしがたい肘を、振り回す形で放つのだ。

——次に、上条のパーソナリティ、そして風斬自身との関係が変化したのは、あの入れ替わりの時に思える。

——上条の過去を、自分から少しだけ語り、それまであった相手を守ろうとする遠慮が、何となくどこかに行ったように思えた。

「お、おとおっおお」

木原の焦った声が室内に響く。

無理もない、流石にこの一撃は、喰らえば洒落になるような一撃でもない。なんとかして回避しなくてはならない。そんな状況下で、無理やり体を動かしたのだ。

ほとんど転がっているんだかはねているんだかわからないような、体を斜めにかしげた体制での後退。

聞こえてくるだろう、嫌な音、それは言葉によるものだけではないはずだ。

——他にも、夏休み明けの九月一日、法の書事件、大覇星祭、アドリア海の女王……

——成長のきっかけなら、今の関係へと歩む仮定なら、とてもとても、多くあった。なし崩しのような過程だが、それでも思い出せば、それは黄金だ。

そこへ、上条が追撃をかける。

今度は無理なく、ふらつく木原の顔面へ拳を叩き込んだ。全身を込めた最大威力のストレートである。

「ぐ、あああああああああッッ」

根本から何もかもを踏みつぶすような木原の絶叫。

歯を噛みしめ口を噛みしめ、痛みを耐えるようにして上条を睨みつける。

「やってくれるじゃねえかああああアアアアアア！」

「行くぞ！ てめえが否定した分まで、俺はこいつで返してやる！」

右手を古い、左手を構え。

ただ一直線に、木原を見据える。

——そのどちらにも、それは、あった。

「調子に乗ってんじゃねえぞオ！ たった一発で強者にでもなったつもりか、幻想殺しアア！」

木原が飛び掛かる。

一瞬あいた両者の間は、あつという間に無に戻った。

「強者でも覇者でもなんでもねえ！ 俺は、ただの上条当麻だ！」

——言ってから、思い出した。

飛び交う拳。

両者の差はもはやない、上条は木原の拳を避けようとしないうし、木原は上条の拳を避けようがない。

時にはからぶり、時には盛大な音を立て、けれども両者は倒れないのだ。

理由は、あった。

——残骸争奪戦の次の日、上条の前に覇者を名乗った少女が現れた。

——彼女は結局覇者ではなかったけれど、そのとき上条のことを、

彼女はこう例えたのだ。

「俺が強者と戦えば、勝つのは必ず強者だ。だけど、強者は俺に勝てる気がしない、俺だって、誰にも負ける気はしない」

上条の拳が、木原の鳩尾をえぐった。

確実な急所への一撃、しかし木原は獰猛な表情を、痛みから笑みへとかえ、一気に上条へ返す。――鉄拳を得た木原に、上条は大きく吹き飛んだ。

けれど、数秒もしないうちに立ち上がった。

「それは氷華だってかわらねえ、誰と戦ったって、俺が負けることは、他人から言わせれば、ありえない」

二度三度、上条の拳が木原を叩く。

自分からか、それとも押されたか――木原が数歩分、のけぞった。けれど、追撃に近づく上条を、木原は拳でもって答えた。

「じゃあ、てめえは一体何だよ、俺を倒して、オマエは一体全体、どうしてそれが出来るんだよ」

けれど、疑問は割りとはやく氷解した。

――両者が一気に接近し、しかし体を鏡のように曲げて、交錯する。上条全体と、木原全体が、一度、同じ位置を通り越した。

そのまますぐに、裏拳――ぶつかりあった。

「簡単だ！ 悩むまでもねえよな！ だってそうだろ」

強者でも、覇者でもない、上条が負けない土俵にいて、上条に勝利する。それは果たして何なのか。――言葉にして答えよう。

木原が、一步後ろへ下がる。

上条は、そのままだ。

「――俺とてめえは、同じ場所にいるんだからなあ！」

改めて、両者は激突する。

上条は左へ、木原は右へ、それぞれの拳が唸る。

木原と上条、その立ち位置は時に同じだ。

多分、木原には上条と同じように、木原にも大切な人がいるのだろう。

どんな形であれ、そんな人たちのために戦っているのだろう。

言いたいことはいくらでもある。語りたいことは星の数という奴だ。

けれど、語らない。

何故ならすでに、上条が語りたいことなど、木原自身が、あの雨の中で語り終えているのだから。

それに、誰かと敵対することを選んだ木原は、それを他者に同情のように語られたくはないだろう。

だから、上条は無言で敵対する。

ようやく並んだ木原数多きんごうしやより、少しでも前に進むために。

「ぐ、あっ！」

「い、っお！」

顔面に突き刺さった二つの拳。

どちらも、ふらつきながら、後ろへ下がる。

限界だ。

ここから先は、単なる意地の張り合い、

それも、たった一回で決着がつく、ちんけな物だ。

一撃でも、何かが加われば、ゲームセット。共通見解だ。

それを自覚し、木原は自身を鼓舞するようにも見える笑みを浮かべる。上条は無表情でその時を待つ。

そうして、両者は、動き出す。

――

上条と木原は、部屋の中で激突した。
鏡合わせに、拳を放つ。

そして、

（な、に？）

驚愕する。

木原が、だ。

そう。

ただ腕をのばす二人、

けれど、違った。

上条がそれ以上の行動を起こす。

のばさなかった左を、上条は伸ばしたのだ。

上条の左腕が木原の右腕を捕らえる。

そうしてから、ただ殴るだけに見えた右が、木原の襟首をつかみ、
押しとばした。

（こい、っ!?!）

木原が、驚愕に息を漏らす。

後ろへ吹き飛び、揺さぶられる。
体は動かない。

木原の体が崩れかかる。

上条と、木原。

両者を遮る物は何もない。

「いくぞ木原、俺の勝ちだ！」

全体へ響きわたる勝利宣言。

「——お前の幻想は、ここでぶち殺して、いってやる！」

突き刺さる拳。

木原に立ち上がれる理由は、もはや無い。

第九章 2（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。
終幕、雨の中の戦いも、ようやく止みました。

補足

- ・次回に回します。

エピソード『――行って来ます Hyouka kazakiri』

静寂した部屋の中。

聞こえるのは、上条の荒い息遣いだけだ。

木原も、打ち止めも、既にその場からは退場しており、上条ただ一人が、惜しむように、その場にぽつんと、取り残されている。

無言でどうしたものかと、あたりを見渡した。

「……っと」

上条がココに來た目的は、打ち止めと、恐らく苦しんでいるであろう風斬の救出だ。とはいえ、木原を倒した後の事は、正直考えてはいない。

なんともはや、このあたりは昔と何も変わっていないかもしれない。

（もう少し考えて行動したほうがいいのか？）

そうやって自省にもいた思考はまわすものの、流石に無理と言うものだろう。

今回ここに上条を押し付けたのは一方通行だし、上条の周りには、風斬をはじめとして、たくさんの仲間がいるのだ。

そこまで考えて、まあ、いいかと思考を切り替える。

その時だった。

唐突に、懐かしいアニメの曲が鳴り響いた。

確かジョインジョインだかなんだかの話か、

——木原数多のものだった。

少し、考える。

手に取るべきか、取らざるべきか。常識的に考えればこれは無視すべきレベルだ。危険は犯さず、一方通行辺りに連絡をとったほうが間違いなく効率がいい。

けれど、

（進まなくちゃ、いけないんだよな）

これから、世界は大きく動き出す。

確かではないが、そんな気がするのだ。

そして——その中心には自分がいる。きっと、この事件だって自分が何がしか関わっているに違いない。

判然としたものではなかったが、何となく上条はその感覚を信じた。

そして、木原のポケットに手を伸ばす。

一瞬の間を置いて、携帯——学園都市製のものだ、何やらストラップが付いている——の、通話ボタンを押す。

『おい、こっちは終わったぞ、木原！』

よく聞きなれた声、それは——土御門元春のものだった。

「っ、っ、土御門か！」

思わず、声が漏れる。

意外だったのだ、流石に。

『ン？ カミヤんか、っつーことはあいつ、カミヤんに負けやがったな？』

考えてみれば、当然かもしれない。

土御門曰く、彼は暗部に関わる二重スパイだ。学園都市を火種から守るべく活動しているらしいが、ここでつながるのはやはり意外だ。

『まあいい、この際カミヤんでも構わないな』

「な、おいちよっとまで土御門、どうなってるんだ？」

『詳しい説明をするつもりはない、全部片が付いた、アレイスターの必要な作業も終了、これ以上ヒューズⅡカザキリを運用する理由はない。……端的に言うのだな』

ちやつちやつと風斬氷華を助けるんだ。

土御門の声が、上条に響く。

『工程だけを説明するぞ？ ——』

「わ、分かった。作業は全部そっちの言うとおりにするから、手早く頼む」

『物わかりがよくてたすかるぜい、カミやん』

何故か、土御門は、少しだけ喜ばしげに、しかしそこだけはふざけた物言いで、言うのだった。

――

雨は、止んでいた。

いつまでも続いてしまいそうな、鬱陶しい雨だったというのに、退場はほとんど一瞬だ、過程も工程も日程も全て吹き飛ばして、あつという間の結果のみがのこった。

あれだけ降り続いた雨だというのに、道路は既にそれを吸収し、ちぎれちぎれの雲間からのぞく光を使って、既に一部は乾きを持ち始めていた。

辺りには少しずつ人が戻り始めていた。

そのほとんどはどことも分らない理由で昏倒していた、被害者たちだ。

そしてそのまま、訳も分からぬ状態で、帰路に付いていた。

結局、彼らは彼らなりに、進み続ける日常を謳歌するしかないということだ。

――長い、長い雨は止んだ。

一方通行は一人、そんな日と雲の狭間を歩いていた。向かう先は

特に決めていない。

あの天使、風斬氷華は消滅した。どこへ行ったのやら、上条が探すのが大変だろうに……

それにしても、どこへ向かおうか。

正直なところこれから先の動乱へ向けて、一方通行は自分のスタンスを決めかねていた。

相手は魔術、超能力の能書きすらない完全な反対方向の敵。

自分の目的に、少しでも近づけるとは、思えないのだ。

だったらいつそのまま根城にしているビルにもどるか、それとも……

ああだったらこれはどうだろう。けれどそれでも云々かんぬん。思考が堂々めぐりを始めていた。

『よお、一方通行ちゃん、負けちゃったよ』

「光と闇が、一回混ざって散開はンだぜ、木原くん」

『……なあ……俺と解剖しないか？』

「決めたぜ木原くん！俺は海を守る、学園都市のタメにたたかってやるウ」

『そ、そうか』

「てなこたアどうでもいいンだよ、こんなどうでもいいときに電話かアい？せっかくだからよオ、相談相手になってくれよ」

十年来の親友。

なんて、言い方はお互い似合わないかもしれないが、あくまで親しげに、木原数多と一方通行は会話をつなげていた。

唐突な話だが、電話自体はずっと鳴っていたのだ。

一方通行がそれを無視してただけで、

「俺さア、暗部に潜ってみようと思うんだわ、あそこからだったら学園都市全体に手が伸ばせるだろ」

『そうかあ?』

「そオだよ!」

唸るような木原の声、

『オマエ、何か変わった? 変わりすぎじゃね? 暗部だと人殺すぞ? あそこは箱入り息子を送り込めるほど綺麗なところじゃねえ』

「誰が殺すかよ、むしろ俺が変えてやる、ちよっと思うところがあんだよ」

『……何だか、パーソナルリアリティまで変化してそうだな……言ってみろよ』

「俺は俺とあいつを救うことにした、ンで、その定義として、俺自身を俺の手が伸ばせる範囲とした。そうすればいつかあいつにたどり着く」

そのために最適な場所が、学園都市暗部。

今まで、少しのほどこしか関わらなかった学園都市への、新たな関わり方だ。

『そうかい、勝手にしろよ、オマエはもう「卒業」してるんだからな』

「解ってるつつウの、じゃあな——」

一拍、

「木原せんせい」

直ぐに、電話を切った。

木原数多と一方通行。
アクセラレータ

二人の関係を簡単に表すならば、教師と生徒。

一方通行が学園都市にやってきて最初にして最後に担任となった恩師、十年近くの付き合いになる、一方通行が最も“信頼”する人間である。

――

上条当麻は少しばかり焦りを感じていた。

あたりは雨もやみ、少しばかりの乾きも見えてきた学園都市の路上。それでも水溜りが無いというわけではない、軽く避けるように、飛び越えるように上条は走っていた。

風斬が見つからない。

呼びかけてもどこにいるのだから解らないし携帯は現在上条が持ち歩いている。現実の物質であるため風斬が吹き飛んだときに、同時に消えるようなことはなかった。

雨に思い切りぬれてもストラップごと無事だったのは、不幸中の幸いと言ったところか。

それでも、不幸には変わらないが。

辺りには人の姿がちらほら見え始めた。雨の終わり、あたりは既に薄暗さを持ち始めているが、それでもまだ夕方の位だ。

探したい、探さなくてはならない。もはや強迫概念のようなそれは、上条の足を動かした。

限界は近い。

木原との殴り合い、そこへ向かうまでの道程、そして今。上条は自身を酷使しすぎている。そろそろ歩みを止めなければ、足の一本や二本、逝ってしまうかもしれない。

……けれど、止まらなかった。

上条当麻という存在が、最後の最後に、風斬氷華を求めているのだ。

長い、長くて参る道を走った。

少しずつ、人がはけていく。

そこが夜——存在する機能に意味がないからか、それとも、それ自体に意味があるのか。

やがて、見つけた。

見定めてはいないが、そこは公園だった。

忘れもしない、上条と風斬の因縁の場所。ここには、いろいろな思い出がある。運命的なまでに、二人はここに曳かれている。だったら、

——止まることはなく、上条は足を動かし続けた。

——

あたりは静かだ。

ご丁寧に手を加えられた自然と、人々が安らぐための空間。元々人は少なく、夜には誰も近づかないような、そんな場所だった。

かつてはそこで始まりがあった。

かつてはそこで出会いがあった。

かつてはそこで死闘がつづいた。

そのどれもにいえることは、ここに収束する因縁が、思い出として、上条に刻まれていると言う事だ。失われたものを含め、記憶ではなく、心に。

そこに、まさしく彼女はいた。

学校指定の制服、既に姿は冬服のものへ変わっていた。

——気の弱そうな美少女がいた。上条より低い身長に、わずかに茶色がかった黒髪——染めているわけではなく元々そうだった色だ

ろう——長さは太もも辺りまで伸びたストレートで、そのうちの二房、頭の横で束ねられたものが伸びている。フレームの細い、知的というべきメガネをかけているのだが、少しずれ落ちていた。

「なあ……」

声をかける。

ためらうことはしない、そこにいるのは、上条当麻のよく知る、一人の少女なのだから。

続けようとして、しかし遮られる。自販機へ体を向け、横向きだった少女は、上条へと向き直った。

「えっと、ちょ、ちよっと、力を使いすぎちゃったみたいで、多分、再構成には結構時間が掛かると、おもいます。半月はかからない様にするつもりだけど……遅れちゃったらごめんね?」

申し訳なさそうに、少女は首を軽くかしげた。

「いいさ、待ってる」

上条はそれだけでもって答える。

少女は、少しだけ寂しそうに——かしげた首を塞いだ。

「……私さ、化け物なんだよね、ちよっと力が強くて、やろうと思えばどんな奇跡だって起こせちゃって、当麻さんが右手で触れたら、あっという間に消えちゃうくらい」

それを怖がったときもあった。

苦しく思えて、もうだめなんだっておもったときもあった。

「でも、それでもいいんだよね？ 化け物だって、当麻さんは認めてくれるから、こんな力を使ったって私は当麻さんの恋人だから」

少しだけ悔しい。

上条の体全部を使って、抱きしめて、好きだって言ってくれる、それが出来ないから、ちょっとだけ悔しい。
でも、それだけだ。

「当麻さんは、これからとっても大変なことになるんだよね？ 私の力だけじゃ、助けになりきれない事だって、きつとあるんだよね？」

だったら、

「だったらどうするの？ 当麻さんは、私の大好きな当麻さんは、これから一体どうするの？」

少しだけ、心配なのだ。

だから、問いかける。問いかけて、答えを待つ。

「俺は……さ」

少女を、

決心したように彼女をだけ見て、

「化け物みたいに扱う連中、全部ぶん殴って、懲らしめられるように、強くなりたい。世界を救って、とか、そんなんじゃないかって、ただ、一人の大好きない女の子を守れるように」

強くなりたい。

それだけやって、上条は、一人の少女へ向けて、ただ笑っていた。

「いいんだよ、大丈夫だから。私は貴方の隣にいるから……一緒に強くなることだってできる。だからいいの、ありがとう、その言葉は嬉しいよ、でも何の問題もないんだよ」

だって、

そうやって、彼女の顔は、明るく前を向いた。

——上条と、少女。二人の間には水溜りがあった。

黄金の小麦色がゆらゆらと、空を、少女を、上条を照らす。

「私は——風斬氷華は、上条当麻のことが、大好きなんだよ？」

笑って、いた。

少女は、——氷華はただ、目を細めていた。

天使のような、女神のような。

ただどこにでもいる、永遠に恋する——乙女のような。

そんな笑みで、氷華はほほえむ。

「行って来ます」

少しだけ右手を振った。

上条は無言で、左手を振って返した。

——水面には、上条と、氷華と、空が移る。

それは、どこまでも続く茜色。

時にはつらく、時には快く。

誰かを包み、導く色だ。

そして、まさしくそれは、

二人の道に、他ならなかい。

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしてます。

これにて一幕一段落、ひとつの区切りということで、ちょっと長めのあとがきです。

・上条さんと風斬。

安心の安定感、現状不安要素も特になく、黄金コンビとして話の中心を握ります。

一幕の後半は一方通行やワンコの話になりましたが、第二幕はほぼこの二人の話になります。

・一方通行

本作で最も原作との剥離が大きいキャラその一。

原作がダークヒーローなら、こっちは一種の舞台装置。

最強が更に最強になって、弱体化イベであるはずの五巻が強化イベントに摩り替わります。

デウス・エクス・マキナ、まあ八巻編では敗北しましたが。

・ミサカワンコ

たまに発動するその場のノリで誕生した半オリキャラ。

偶然とはいえ、人間性を手に入れたワンコさん。

いわば、設定さえすればどんな性分、性格でも埋め込められるという実践例。

ちよつとした創意工夫で、戦闘能力はオリジナルに3割くらいで勝利できる程度です。

・御坂美琴

第一巻ではまだフラグが立ってましたが、再登場した第三巻編で

は完全にフラグが折れました。

まあ一番大きなフラグは第三巻で立ったものですし、原作三巻の冒頭も似たようなノリですし。

・絹旗ちゃん

ど根性絹旗ちゃんの最終章か、本編の第二幕あたりで語るので保留。

・結標淡希

原作の正反対に行くキャラ。

消極的な反逆が、自身の力を使う積極的な反逆へとシフトしていきます。

・エピローグ

土御門が出てきたのは上条さんが木原くんを倒すときに取った戦法を意識してです。

一方通行は暗部へ行きますが、ど根性と同じくその動機は殴りこみ。

最後の二人が交わす会話はプロローグのイメージと原作、インデックスと上条のイメージ。

そんなわけで、次回から第二幕、15巻、暗部闘争編を交え、二幕では上条さんと風斬の関係がメインに。

更新はいつも通りです。

『闇の中 Mastermind of the double』

『ふむ、終わったようだね』

「お疲れ様、と言っておこうか」

『全ては順調だ、今回は彼の介入もなかったからね』

「できれば、こんな方法はこれっきりにしてもらいたんだけどね」

『どうしようもない犠牲だろう、あの研究者もそれは理解しているさ』

「まあ、彼らのつながりがこんな一つの出来事で途切れる訳もないが……」

『ここまでは予定通り、次はアピニョンだな』

「そこは通過点のはずだ、恐らく次はピンセットの件だろう？」

『そういえば、彼が動き出しているようだ、順当に進めばそうなるだろう』

「想定内、けれど彼がいかに動くか、まだ解らないのではなかったかな？」

『主役は一方通行の方だ。現状、彼の方が先へ進んでいる以上問題はないだろう』

「……彼女の事だ」

『それは、そうだな、まったく……厄介なつながりを用意してしま
ったものだ』

「だが、あれがなければ一方通行は殺人者になっていたはずだ、恩
師だけでは足りなかったとおもうよ」

『力不足なのは誰も同じだな』

「その通りだ、我々もまだ彼には及ばない」

『もどかしいよ、幻想殺しには悪いことをしたな、必要事項とはい
え』

「妹達シスターズの件を含めてコレで二度目か、やれやれ、我々は少し無茶を
させてしまっているな」

『無茶はさせても、無謀をさせない、それが私達の仕事だ』

「特に僕は……ね、解っているさ、彼と敵対したあのときから、決
まりきっていることだ」

『そろそろ時間だ。処理を終えた彼が帰ってくる』

「そうか、じゃあ通信はきくことにするよ、僕の方はこれからやら
なくちゃならないことがたくさんある」

『では、健勝を祈ろう』

「……いつか夢見たあの日に」

『ああ、いつか夢見たあの日に』

――

この雨に雨が濡れた九月三十日。

ひとりの魔術師が学園都市に襲来した。

敵意に向けた相手を問答無用で行動不能にする、そんな理不尽な魔術師は、学園都市を潰滅に陥れた。

暗く、放っておけばそのまま朽ちていつてしまいそうな、その日に。

世界中の闇は、蠢き出す。

想いと、願いと、そして届かぬ絶望と。

――誰もが目を背けたくなるような、日常世界の片隅が、やがて、

上条当麻と、風斬氷華。

アクセラレータ

一方通行、御坂美琴、ミサカワンコ、インデックス、打ち止め。

彼らの向かう道は同じではない。

けれど、共にあることが、彼らにどれだけ助けになったか。

これは――彼らが自身や仲間と、向き合うための物語。

……そして、終幕への前哨戦が、
獄園へと向かう片道切符が、

切って、落とされた。

『闇の中 Mastermind of the double』(後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。
謎会話、一体彼らは誰なんだ……

- ・補足
- ・次回も2ndプロローグです

第一章『獄宴開幕 Bottom of the blood』

1

世界が人の数だけあるように、物事には様々な側面、見方、場所がある。

偉大なる先人の評価は、時として暴虐無人を振るう悪であったり、勇猛に敵を滅した英雄でもあったりする。

それが善いか悪いかはともかくとして、間違いなくそういった事実が存在する。

つまり、たとえ同じ場所でも、見方を変えれば、地獄にでも天国にでもなる。

ここは学園都市、二三〇万の学生を抱える人々のあこがれだ。

そして同時に、世界全てを敵に回せる、凶悪な闇が、巢食う場所でも、ある。

――

「お前が一方通行か」

どこともしれない路地裏。

高層ビルと、割と大きな学校の群れからなる学園都市は、人目を憚り、無意識のうちに避けることを選ぶような道が多く存在する。

そこは例えば見向きもされず、いかにも、な朽ち果てた路地であ

ったり、同じようにあまり良い目で見られない物達が屯する、乱雑な空間であったりする。

ここはその一角、当たりはどちらかというと前者で、あまり手入れのされていない道路は、地割れし、日々からたくましくも雑草が、街路樹のように端で、伸び上がっている。

秋まっただ中、だんだんと寒さを覚える季節故かその草たちに力は無い。

道はどうにも左手側には長く続く塀、右手側には使われているのか、放置されているのかすら解らないような煤けたビル。

「別に、こんな如何にも、な場所で合わなくてもいいとはおもうがなア」

——アクセラレータ一方通行。

学園都市が誇る、七人の超能力者、その頂点。最強にして、第四位、座標転移が学園都市を離れ、正体不明が今だ再構成を終えていない現状、彼に叶う人間は、学園都市には実質存在しないと云っている。

しいていえば、今だ合間見えたことのない、第二位程度だろうか。白髪赤眼、肌はどこまでも白く、アルビノの様に色素はない、服は白に半数ほどの灰色をまぶした、幾何学的な模様である。

「あとで説明する。それよりも一方通行、お前はここがどこだか理解しているか？」

——つちみかじもとはる土御門元春。

とある何かの幻想殺しが友人にして、学園都市、イギリス清教の二重スパイ。能力は無能力者だがその格闘技術はまさしくプロであ

り、現在は戦争を食い止めるため、二つのサイドを股にかけている。アロハシャツにサングラス、金髪を逆立て、ただのチンピラ風だが、その奥に潜む眼光は、一方通行をそのまま刺し殺してしまいうなほどに、強い。

「闇だろう？ 学園都市の、誰もが目を背けたくなるような一番底」

「そのとおりだが……果たしてお前がそれを理解しているかな？ 温室育ちの第一位にそれが出来るのか？」

「俺は人探しに来てるだけだ、闇だろうが何だろうが関係ねエ、俺はあいつと自分自身を救ってみせる、それだけだ」

「……確か、自分自身とは、手を伸ばせるだけ全て、だったか。やってみるんだな、すぐにわかる、ここがどれだけ、世界の縮図であるのか、な」

踵を返す土御門、仕事だ、ということだろう。

ここに一方通行を読んだのは、いわば現地集合とでも言うべき状況故らしい。

「知ってるか土御門、世界ってのはな、割りと優しく出来てるんだよ、特にもう一度立ち上がったやつには、な」

「……そうかい」

それだけ返して、既に土御門は、歩先を目的地へ向けていた。危なげも、何もなく。

（全くねエ……俺はあの男みたいには、歩かないんだろオナ）

この男は自分のようなタイプと比べれば、よっぽど暗闇の中を歩くことに長けている。上条のように、辺りを光に変えていくのもまたいいが、こういった確かな“悪役”もまた、世界の潤滑油足りうるのだろう。

（その点、俺は身勝手な理由でさきに進んでる、止まるつもりはないが、信念何てあったものじゃない、結局、俺はここで、何かが出るのかねエ）

闇を“カク”、土御門に続く一方通行、その足取りは、まだ前をむいていない。

第一章『獄宴開幕 Bottom of the blood』(後書き)

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしてます。

まだ2ndプロローグのままです。今回が第二幕にあまり関連性がなく、どちらかというと第三幕の導入にあたるからですね。

上条さんと氷華の話、というのに例外を与えたくないというのがあります。

第一章 2

2

その日、学園都市の暗部を舞台として活躍する能力者チーム、『アイテム』は仕事のため、とあるファミレスに集っていた。

都会を歩けば一日で二つ三つ湧き出てくるような凡庸な場所ではあるものの、立地条件の良さは割りと強みである。

「随分と超根性した髪型ですけど、浜面、何があったんです？」

大体四人から六人が座るためのテーブル席（禁煙席）、割と入口から遠くに配置された隅の方を陣取って、ほとんどメンバーの一人、紅一点の真反対、浜面仕上は立たされっぱなしである。

ほかのメンバーは思い思いに、それぞれ、

根性を信念とし、根性と共にある娘、絹旗最愛。

何を考えているんだか、見当がつかない娘、滝壺理后。

フレンダールセイヴェルン。

そしてアイテムのリーダー、学園都市の四番目、麦野沈利。

浜面から見て左に前者二人、後者二人は右である。

「いや、ちょっと知り合いが懐いている子供にジャレつかれてな、酷い目にあった」

なんでも病院で行きあったのだが、随分と手酷くやられたらしい。苦笑する浜面の髪は、ただでさえ割とはねている、はねさせているというのに、それどころか、完全に逆立ち、もはや超浜面人とし

か、絹旗には表現できなかった。

「聞けば今日知り合いが入院してるのを知ったみたいでな、まあ、バレちゃったか、って感じなんだけど」

「ふうん、超心配させたくなかったんですね」

「まあ、そうだな、あの人、俺たちの中で一番死にかけてたし」

なるほど、と何となく絹旗は頷く。

恐らくその怪我が浜面がここに来た根本的な原因なのだろう。怪我を失敗とみて早まったか、失敗自体がここへのキップだったか、本人の意思によるものか。

なんにしても、似合わない。

「まあ、嫌いじゃありませんよ、そういう隠し事をして、隠し通そうというのは、嫌いじゃありません」

まあ、そのあと言い訳をしないのが、最大の根性なのだけど。

「また面倒な話してるわね、そこは笑ってギャグにつなげる所でしょうが」

また妙にシリアスぶった話に、鮭弁をつついていた麦野が反応する。

「私は根性の話と身入りの無い話しか基本しませんよ」

「……それ、なんか逆にダメじゃない？」

言いながら、一口弁当（無断持ち込み）を口に放り込む。軽くそれを噛みながら、呆れたような目線で絹旗へ向けていた。

「私としては、一般人の会話に実入りの超ある話があるのかって件ですよ、例えば麦野、あなたの場合どうです？」

「二応私、このリーダーなんだけど、人をまとめる立場なんだけど」

一般人ではなかったようだ。

「じゃあ滝壺は……って超寝てますね」

軽く視線を向けて、隣の少女はケータイをいじりながら眠っている。何をしているのか、ここからはよく臨めないが、それでも前回――無能力者狩りの件だ――からさらにパワーアップしているのだから侮れない。

仕方ない、と嘆息して、シュールストレミング缶をふあぶろうかと小一時間なやんでいるフレンダへ視線を向ける。

「それじゃあフレ――」

「いや突っ込めよ、視線をそのまま奥の方に持ってくなよ、明らかにおかしいだろ、あれ見えてないよな、目開けてるけど見えてないよな！」

「……もう、超うるさいですね、浜面、もうちょっとツツコミはコメントにできないんですか？」

「悪いが俺は一般人キャラだ」

フレンダ、麦野、滝壺、絹旗、言うに及ばずの滝壺と絹旗以外の二人も、なんだかんだ変人奇人の類であることに間違いはない。

「え？ あなたは凡骨キャラでしょう？ 馬の骨がさらに略されたんでしょう？」

「俺は予告で盛大なネタバレをされるような人間じゃない」

「お願い、死なないで麦野！ あんたが今ここで倒れたら、滝壺さんやフレンダとの約束はどうなっちゃうの？ ライフはまだ残ってる。ここを耐えれば、浜面に勝てるんだから！」

次回、麦野死す！

そこは言葉にはしないけれど。

「逆だろ！ 俺ラスボスポジションじゃねえか！ どう考えたって麦野がそこは似合わねえ、つかそもそもフレ——げふう」

「なんだってえ？」

不穏な声、響く快音。

麦野が放ったフレンダのシュールストレミング缶が、浜面に突き刺さる。不意にせっかく持ってきた缶を投げつけられ、フレンダが涙目になりながら変な声を上げた。

「ぐ、お、おおお」

流石にまだ中身が全て入った缶詰、中々の重量を誇っている。

「き、絹旗、嵌めやがったな？」

「あ、これ超美味しい」

既に意識は浜面から一応置かれていた自身の食事に写っているのか、絹旗は漏れたように言葉を出す。それをみた浜面は、顚界が来たのだろう、力なく、その場に倒れ伏した。

「ああ浜面、倒れないでよ、そろそろ時間だから……おい、倒れんなつってんだろがぁ!!」

どうやら浜面に休憩は成し得ないようだ。

――

「それじゃ、始めるわよ」

気を取り直しての、麦野沈利。
軽く全体を見渡して、

「これから始まるのは、戦争と同じよ」

一言、言い放った。

第一章 2（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちします。

計算が間違っただけならば、この話のエピローグが100部になるはず。

- ・ 補足

第一章 3

3

一方通行と土御門元春。

メンバー総員全二名というチーム編成である名目上のチーム、『グループ』。

彼らに割り当てられた仕事は、学園都市外部から侵入を試みる五千人数の傭兵を排除することである。――中々凄まじい数ではあるが、あいにく通常の相手には絶対に対処のしようがない存在が、こちら陣営には加わっている。

「なんだってこんな数が集まるんですかねエ、そもそも集まった理由も、どうやって侵入するかも解ってねエンだろ？ 大体――」

「知る必要はない以上、俺たちが詮索すべき事柄では無い、いいか一方通行、俺たちは道具だ、闇の中を進む……な」

吐き捨てるようにいう土御門。

いまいまして、というわけではないが、どうしようも無いといった様子だ。そう、見せているのかもしれないが。――何となく胡散臭い男に対して、一方通行は呆れたような表情を取りながら、視線を別に移す。

「そもそも俺アここを叩くよりも本丸を叩かないのかつつウ話をしてんだ」

「それなら問題ない、それを行うチームは既に動いている。俺たちの仕事はあくまでサポートだ」

「サポートが派手すぎんだろ、注文は何だったかねエ」

「……通信をさせる間もなく五千すべてを沈黙させること、だ」

無茶、だとは思いますが、流石にその作戦は大雑把すぎる、ゴリ押しもいいところだ。

「恐らく中にいる本命メンバーでここに侵入するための工作をしているんだろう、ここから入り込むつもりだろうだが、今のところここを突破できるのは、学園都市ではお前だけだ」

言いながら、上を見上げる土御門。

そこにあるのは大きな灰色の絶壁だ。

大きく、かつ目線では既に頂を見ることができない、ミサカネットワークの力を借りて、電磁的なセンサーを探ると、何やら壁に触れただけで反応を起こすものまである。

「……どうだかね」

魔術師は、学園都市にはいないのだろうか。

スパイの一人や二人くらい、間違いなくいるとは思うのだが。

そんな思考を、まさに隣の人間がそうであるとも気づかずに行う一方通行。

「そういうわけだからな、俺はここで叩き漏らしを待つ、……いくらかかる？」

数は五千、銃武装、手馴れた戦闘経験もあるだろう。

乱戦になって、一体どれほどの苦勞が伴うか、言葉の終を待ちながら、一方通行はその考えを巡らせた。

「……三分はいらねえだろ、すぐに片付ける」

結果的に、それは即答だった。

即言実行。

既に一方通行の体は上空へ、思い切り良く消えていた。

――

単純な仕事だと、おもっていた。

危険だがそれに見合った割高な報酬が用意され、やることは戦闘のセの字も知らない子供を脅して、その代表と交渉をする足がかりになること、だった。

自分よりも優れた力が使える。とはいっても相手は所詮子供、喧嘩程度の戦いしか知らないことは明白。

最強のクラスにもなると、一つの隊を相手どれる、どのことだったが、所詮はそれも七つしかないらしい。先に人質を用意すれば手足も出せないだろう。

そうやって、この仕事には割りときい楽観を押して来た。

学園都市を守るのは数千の教師だそうだ。――甘すぎる。そうやって、自身の勝利を、彼等は一度も疑わなかった。

けれど、それはほんの一瞬で覆された。

突入まで後数分、もう少しすればこの壁をよじ登っても何の警戒も要らなくなるらしい。

そうやって、準備の前、おそらく、彼等が最も油断しているときだった。

突然の乱入、一瞬の出来事、上空から現れたそれは、傭兵集団の一角を、丁寧にくぐりとった。

現状、傭兵達は侵入を予定している場所を囲むように、数人のグループに解れ、当たりへ散っている。そして監視衛生を停止させ、学園都市に隙を生ませる、その間に侵入を目論んでいるのだ。

少なくとも、それを前提として、彼らはその場にあつまっている。

プロの傭兵は、流石というべきか、数が固まっているにもかかわらず、割と徹底した隠密を行なっている。精々、そこに彼らがいる、という情報を踏まえた上で、その異様な雰囲気気づけるといった様相だ。

彼らは今、絶対の安心を敷いた上で、緊張と警戒を行なっていたのだ。

詰まるところ、油断していた。それも、最悪の形で。

——気づいたときには、吹き飛んだ一角は辺に飛び散っていた。死ぬような勢いではないものの、その勢い、叩きつけられた風は紛れもなく本物。

傲慢な威力に、吹き飛ばされた数十のなかには、腕があらぬ方向にひしゃげたものもある。結論として、誰も彼も、全てが戦闘不能

である。

近くの傭兵が正気に戻る。

銃を構える、もしくは周りに伝達する。

流石に仕事に慣れている。不足の自体だが、混乱するものはほんではない。

ただし、そうした工程に入る前に、乱入者――一方通行は一つ、行動を起こせるのだが。

続け様に一方通行が両腕を振るう。

大雑把な戦い方だが、これで周りにいた傭兵はほぼ殲滅、スコアは既に三桁である。

ここ以外にも、非常に多くの場所に、彼らは分布しているが、敢えて数名は残した、ここから伝達が行くだろう。

それに際して、考えられる行動は二つ、一方通行の迎撃に出るか、我関せずとさらなる隠密に走るか。

確率としては半々だ。そして実際、傭兵集団はその二つに別れて行動を起こすだろう。突入開始には上空から学園都市の警備を行う、監視衛生のストップが必要不可欠。

言わずもがな、今だそれは行われていない。

ならば、若干隠密のほうが早いかな。

「そっちを探す方向にしたほうがよさそォだな」

軽く一言、漏らしても聴く者はいない。

足を迈りへ、体を周囲へ、言い換えたただだが、ともかく。

気配は無い——完璧だ。とはいえ、これが更に氣を使えばどうなるか、

「逆にわかりやすくなるつつウの、なァ！」

跳ねる。

単純に——一方通行の体が軽く30メートルは浮き上がった。

一瞬にしてその高度を保つと、そこから周囲に狙いを付ける。獲物探し、発見——すぐさま底へ突撃する。

そこは数が多かった。

目測でも100か200、確実にメインのグループ、その一つであることは間違いない。さらに周りには数グループ、こちらも合計すればメインの数倍、すべてあわされば、四ヶタも行くのではないか。よって、最初の一波で、十二分な数、生き残った。

——襲撃者。それも回避のしようがない行動で、迫ってきている。

何者だ、という疑問はあったが、先に手が動いた。拳銃を構え一発、一方通行は二手目を打つが、それでもまだ数は十分。

けれどそのどれもが、一方通行の精密な反射により、腕を撃ち抜かれ、行動不能に陥る。

さすがに、千というのは上空からの目測だ。故にあたりにはもはやどうしようもないくらいの人だからができ上っている。

多少の違いはあれど、動きやすそうな作業服、しかし、これだけ数があれば、隠れても異様なはずだ。

「駆除が面倒ですねエ、ここが一角なンだろオ？ 探せば数キロ先にまで広がってるんだろオねエ、ま、仕方ない」

三分、割と厳しいがやるしかない。

——一秒で周りを片付けながら、嘆息する。

けれど結局、彼らは一方通行の、敵ではなかった。

きっちり三分後、少しの時間つぶしの後、一方通行は土御門のもとへ帰還する。

——どことも知れぬ場所へ進む車の中、土御門とただ二人、どうやらもう一つ、やらなければならぬことがあるらしい。

傷一つ、埃一つ。

当然といえはその通り、圧勝、完勝。どう表現してもいいが、少なくとも。

「文句なし、だろオ？」

軽く笑って、土御門へ視線を向けた。

第一章 3（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。
割りと適当。

- ・ 補足

行間6

学園都市暗部チーム『アイテム』。

その作戦内容は、不穏な動きを見せる同系列の能力者チーム『スクール』の殲滅であった。何でもここ数実、『スクール』は非常に多くの人員移動を行なっている』というのが原因らしい。

昨日までの一週間、既に少なくとも一人は入れ替わっているそう
だ。

「というわけで、相手は同じ超能力者よ」

——『スクール』のリーダー、垣根帝督は超能力者の第二位、未^{クマター}元物質を有している。ほかのメンバーは実際に捨てのためよくわかっていないが、その情報機密度——つまりチームとしての優先度は『アイテム』と同じである。

「どうすんだ？ 勝てるのかよ」

「やってやれないことは超ないでしょう、最悪根性でなんとかします。麦野が」

——『スクール』のアジトは学園都市でも割と寂れた第三学区のホテル用ビルであった。

今にしてみれば珍しい、二階建ての小さなビル。とはいえまあ、なぜこんな場所にある、というのが暗部のアジトであるのだけれど。

「割といい場所陣取ってるじゃない」

噂では、あるチーム、たしか『グループ』だったかはそう言った

隠しアジトは全くなく、精々移動用のバン程度しかないらしい。

『アイテム』に不足があるわけではないが、中々不愉快なものだ。

「じゃあ、私たちが突入から、浜面、あんたは逃走用の足を確保しておくこと」

麦野の宣言、それから突入。

しばらくは中で爆音が響いた。どうやら激戦なようで、しばらく遠くから様子を伺いつつ、車を確保していた浜面の耳にも、嫌に大きく響いた。

大分音は続いたが、やがてその最中、浜面の携帯が大きく鳴り響いた。

——麦野からだった。

曰く、

「フレンダがやられた！ 向こうも一人、絹旗が潰したけどちょっと厳しい、一度退くから、車を入口前にもってきて！」

ということで、浜面は車を急がせた。

現れたのは三人、フレンダの姿は見えない。すぐさま乗り込もうとするが、追ってと言わんばかりに、第二位、垣根帝督が姿を見せる。

「オラ、どこに逃げんだよ、態々そっちから襲撃してくださったくせにさあ！」

白い翼、ホスト風の男に対してはまったくもって似合わないメル

ヘンな代物だが、威圧感というのはそれでも十分らしい。

乗り込もうとしていたメンツの足が、明らかに止まっていた。浜面も発進できそうにない。

進退窮まった『アイテム』の面々、最初に飛び出したのは麦野だった。

絹旗も飛び出て、アイコンタクトで合図を行う、滝壺だけを逃がせ、ということらしい。頷いた浜面、すぐさま滝壺を車のなかに連れ込むと、急速発進、その場を猛烈な速度で飛び出した。

どこへ行ったものか、近くのアジトの場所を思い浮かべながら、何とか曲がりくねった道を滑べる浜面の車、やがてそれは、少しばかり大きな通りに面した場所に出た。

その時だ、猛烈な勢いで、ダンプカーが迫ってきた！

どうやら紛れも無く『スクール』のメンバーが持ち出してきたもののようで、一気に浜面の車に近づくと、押し込めるように車体をぶつけてきた。

呻く浜面、滝壺は携帯を開いたまま無言でそこを凝視している。

何をしているのか聞きだすよりも、まずは目の前の事、ダンプカーは一気に浜面の車を車線隅に押し込め、叩きつけようとしてくる。ずいぶんと容赦のない。

「くっ……！」

一瞬迷ったものの、この車は割と年代物のようで、速度では追い抜けそうにない。このままこちら限定のデスマッチ方式でカーチェイスをすることは不可能だろう。

ならば、一発にかけて、浜面はブレーキを思い切り踏み込む。

車体を押し付けて、壁に激突させようとしていたダンプカーそしてその目的地である壁、もはや一石の猶予もなる状態で、唐突に車が減速する。

何とかダンプカーは追いつくろうとするが、横に振り切ったダンプカーの後部車輪も、ギリギリのところまで浜面の車をカスめていった。

「お、おとおおおお！」

そのまま無理やり車自体を反転させ、アクセルを踏む、行き先は考えていない、がこの近くにアジトはあるはずだ。何とかダンプカーでは入り込めないような路地裏を見つけると、そこへ車を進めた。けれども、それも長くは続かない、道はあるものの、そこは車でははいりこめないような小さな道だった。

致し方なし、今だ携帯をにらみ続ける滝壺を連れて、その道へ体を滑り込ませる。

携帯を取り出し、GPSで何とかアジトに当たりを付ける。そこにたどり着くための道を探し、すぐさま足を向ける……が、

そもそも、そんなものはなかったのだ。

結局、行き着いた先には行き止まり、偶然見つけたのか、気づかれない範囲で後をつけていたのか、『スクール』のメンバー一人が、浜面達を追い詰める。

——そこまでか。

思考が少し、あきらめへ傾いたのは、何とか攻撃へ打って出ようと、拳を構えようとした時だった。何故か目の前の——無防備なはずのドレスを着た少女へ、攻撃することがためらわれたのだ。

能力、であることはすぐにしれた。

けれど、動かない。それは一体何の感情なのか——何の思念なのか、

少女は自分を精神系の能力者だと明かした、抵抗が不可能だと言いたいのだろうか。

滝壺は動かない。

携帯を見て、動こうとして動けない、という風はあるものの、本命はやはりこちらのようだ。

「ゲームオーバー、残念だけど、スコア二つ、私のものね？」

冗談めいた様子でしゃべって、

少女は取り出した拳銃でもって、問いかける。

行間6（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。

ダイジェスト風、この少女はいたい誰なんでしょう。

補足

第二章『死闘世界 Terrace in shade part』

1

「思いのほか、思われてるみたいね、あなた」

ドレスの少女が挑発する。

かばうように立つ浜面仕上と、それを守るように、滝壺理后。

どちらへ発した言葉なのか判断を付けさせるぬままドレスの少女は笑んで、一歩近づく。

後ずさるように、しかしそれ以上は浜面も滝壺も引けない、お互いがお互いをかばい合って、下がるに下がれないのだ。

「く、っそ、どうなってやる」

そして――ドレスの少女は無防備だ。そも、こんな場所で豪奢かつ露出の多い格好は、油断を誘っているのかと、逆に勘ぐらせるほどだ。

だというのに、滝壺も、浜面も、踏み込めない。

浜面は言うに及ばず、滝壺も、一応は学園都市暗部で活動を続け、探査という能力で戦場を生き残ってきた人間だ。どちらもそれなりに――少なくとも、能力以下の戦闘力をもたない相手に勝利できるほどには、戦闘の心得はある。

体格的に見て、先に銃を構えたうえで、必殺の間合いに相手を置かない限り、ドレスの少女に勝ち目はない。

だというのに、

「ごめんなさいね？ 無防備で、警戒させちゃったかしら」

あざ笑うような少女の声、けれども反応は許されない、何よりも自分が、彼女へ危害を加えることを許さない。

感情と、心象が同化していない。

「ま、時間かけるのもアレだしね、ちょっとサックリ行っちゃいましょう」

「な——にを」

「するつもり……？」

息を合わせたように、浜面と滝壺が少女の声に反応する。

ドレスの少女は、単純に、拳銃を取り出すことで答えた——既に引き金に手をかけている。

「っ！」

息を呑む。

「割とお似合いのカップルなのね？ じゃあごめんなさい、一緒に殺せないわ」

軽く品定めでもするかのように、どちらへ向けるか、少女が視線を、二度三度這わせる。——そして、高速で構える。

ただし、後ろに。

そこには少女がいた。不敵に構える彼女は、紛れも無く絹旗最愛であった。

「おっと、残念ながらチェックです。私に拳銃は超効きません。何せ特別性ですからね、私の根性は」

オフエンスアーマー
「……窒素装甲！」

「野暮ったい名前ですよね、……振り向く余地はないですよ、私のほうが超早いんです」

言って、ん？ と首をかしげる。

「貴方……初対面ですか？ 超何とも言えないんですけど」

「っ——逆上するわけでもない、面倒な感情ね、本人が理解していないなんて！」

「どうかしましたか？ とりあえず、貴方のことは“よくわかりませんけど”超えなくちゃいけないみたいです」

「その感情、面倒ね……まああなたの場合、やろうと思えばどんな相手でも戦えるんでしょう？」

「……否定はしませんけど」

「とにかく、忠告させてもらうと、この感情、早めに決着を付けたほうがいいわよ？ 周りから見ている分のは楽しいのだけだね」

いいながら、絹旗の方へ、狙いを付ける。
一拍、そのまま地面をえぐる。

「なっ！」

驚愕する。

それもそのはず、絹旗の足元がその一発だけで綺麗に切り取られたのだから。

「強力でしょう？ 基本、相手の即死を目的とした処刑用なんだけど、こうやって強敵の好きを作るのにも使えるの」

言いながら、少女は絹旗に近づき。

「そ、れでも——私が対応できないわけじゃないですよ！」

倒れた足を支えるように後ろへ足を回し、のけぞりになる。そのまま、不安定な態勢で、ドレスの少女に拳を振るう。

「見えて、居ないんでしょう？ だったらかわすことなんて簡単よ」

軽く体を振って、少女はそれを回避する。

そのまま、絹旗に追撃を——加えるまでもなくすり抜ける。単純に、この状況はドレスの少女にとって、割と大きな窮地であったのだ。

「ま、待ちなさ——」

声をかけようとする。

当然ながら同時に、絹旗は歩を出すのだが、

「おいおい、随分時間が掛かっているわね」

その声に、思わずそれをとどめた。

「っ！」

絹旗——そしてその奥では滝壺が、それぞれ息を呑む。

裏路地と表通り、光と影の境界線に、彼女は忽然と姿を現した。

16, 7...もしかしたら18は行っているかもしれない程度の年齢、ある程度遠目であるから、良くはわからないが、その癖つくと目つきは特徴的だ。

威圧的でも、ある。

「な、おい、どうしたんだよ、絹旗！」

浜面の声。

同時に、絹旗が正気に戻る。

高速で既に並んでいるドレスの少女と、その黒髪の彼女に接近する。

しかし、彼女が手をかざした瞬間、絹旗は大きく飛び退いた。

「くっ！」

危機感、焦燥感、ないまぜの感情は判断がつかないが、しかしと

にかく離れなくてはまずい。

「おい、どうなって！」

「浜面！ いいですか、さっきフレンドがやられたって言いましたよね、あれをやったのがこいつです！」

多少の遠くからかけられる声、しかし浜面の驚愕は絹旗にも十分伝わってきた。

「まあそのとおり、原理を説明する気も、それをあなたが解明出来るとも思っていないけど……ここまでだ、一度退くわよ」

「何だか面倒な話ね、あなたなら彼女を突破できるんじゃないの？」

「行ったはず、私はゲストだから、貴方達の死闘に巻き込まれるわけにはいかないの、だから戦わない……やるなら一人でやることね、状況的に、どうも貴方、ピンチだったみたいだけど」

チラリと視線を向ける。

そのまま体を翻す辺、さっさとその場を離れたいらしい。

「な、超逃がしませんよ！」

「……そんな言ってみただけの言葉に、一体何の意味があるの？ 鬱陶しい、ah——さっさと退くから、そっちも勝手にして頂戴」

追いつがる絹旗、速度を持って飛び出した彼女の体は風を持って切る。けれどそれも、唐突に襲った勁烈な衝撃で、差し止められた。

「BAD、よ」

そういったのはドレスの少女、拳銃を構えたまま、軽く口笛を吹く。

「……、」

もう片方の彼女は、何かを言いたげに剣呑な視線をドレスの少女へ向けるが、しかし直ぐに切り替えて、あっという間にその場を離れていった。

「絹旗！」

思わず声が出る。

人を即死させる処刑用の拳銃、さしもの絹旗とて、吹き飛ばないわけにはいかない。衝撃が体を伝わり、踏ん張ろうと、根性を入れる前に、思いつき吹き飛ばされてしまった。

「あ、おあああ！」

呻きつつも、体を後ろへ持っていく、態勢を立て直しながら着地する。揺られるように体を落とし、一拍おいて顔を上げる。

「超待ちな——」

しかし、既に彼女たちの姿はない、どこへ消えたか、とうまでもないが、既に大きな車の駆動音が、重く重く、辺りに響いていた。

「……絹旗、」

「何も言わないでください、今は麦野と連絡を取りますよ」

「それもあるけど、どうやってここに来たんだ？」

「滝壺の能力は超有用性があります、失う訳にはいかないんですよ、ですので、彼女の携帯は私と麦野………フレンドの携帯に、定期的に信号を送るようになっているんです」

発信された信号を受け取った場合、その情報は滝壺に伝わるそう
だ。そのため、彼女はずっと携帯を睨みつけていたのだろう、軽く
想像して、浜面は納得した。

大分遠いような気もしたが、GPSで確認してみると、どうやら
自分たちは『スクール』のアジト周りをグルグル回っていたらしい。
軽く近づく絹旗、浜面たちも歩を進め、一方通行になっている路
地裏の、中央地点で交差する。

「浜面はここに来るまで超使っていた車、アレをここまで回してお
いてください、私はその間に麦野に連絡をとっておきます」

携帯を取り出してひと振り、折りたたみのそれを広げると、軽く
ボタンをプッシュする、無言の空間、密閉されきっているわけでは
ないが、それでも十分に狭いそこでは、プッシュ音は嫌に響く。

「……きぬはた、私は……」

「滝壺は浜面の方に行っていてください、連絡に複数人なんて超必
要ではありませんから」

「……でも、――」

軽く制するように、絹旗が言って、それでも追いつがる滝壺。

少しばかり悩ましげに、軽く手を伸ばし、けれど、絹旗が振り返り、笑ったのを見て、ぴたりと、それを止める。

「大丈夫です。——今は、大丈夫ですから」

アイテムは、私の居場所の一つなんです、そうやっていって、突き放すように再び翻る。

「……滝壺、絹旗は……」

「……………行こ、」

「——っ！ あ、ああ」

問いかけようとする浜面、けれど少し考えて合点が行ったのか、うつむきながらもその場を離れる。あとには、絹旗一人が残った。

——

「ああ、麦野ですか？ すいません、逃がしてしまいました。滝壺と浜面は無事です、これからアジトにもどって対策を——」

そして、これが、学園都市暗部組織『アイテム』の、ゆらぎとなる。

第二章『死闘世界 Terrace in shade part』（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。

アイテムパート。

・補足

・絹旗の最も大切な人、要するに師匠への感情が“よくわからない”、ようするに今後やるかもしれないど根性絹旗ちゃんの前振りです。

第二章 2

2

結局絹旗は、浜面が用意した車には乗らなかった。

そもそも、気づいたときには、もう絹旗はあの路地裏にすら居なかった。車のあった場所と、路地裏では、ほんの小さな間しかなかったというのに、いつのまに消えていたのか。

滝壺に聞いてみれば、小さくなった絹旗が見えていたらしいが、そちらへ走っても、まったくもって見つかる気配はなかった、先ほどの舞台と同じように続く、いくつもの路地裏、その一つに引っ込んでしまったのだろう。

仕方なしにとりあえずは近くのアジトを目指すことにした。とはいえ今自分たちがいる場所に浜面は心当たりがない、闇雲に走り回ってもどうしようもないので、滝壺にナビゲーションを任せ、車を走らせる。

割りとスタイリッシュなスポーツカー、黒に近い藍色に染め上げられたそのボディは、あのダンプカーにぶつけられたにもかかわらず、綺麗な車体を保っている。

学園都市製故の妙物か、それともあちらの当て方がいい意味でわるかったのか。

ともかく、運転を開始しても異常なし、快適な速度で、浜面は車を滑らした。

けれど、二人の間における空気は、最悪なまでに凍えきっていた。

どちらかに非があるという訳では無い、ここまでの出来事が、二人ではないある人物の存在が、この状況を突きつけているのである。憂鬱、気が滅入る、考えたくもない。

けれどそういうわけにもいかない。少なくとも浜面にとって彼女は仲間であつたし、今は時間がある。やっと、実感が湧いてきたのだ。きて——しまったのだ。

「……なあ、滝壺」

無言のままケータイとにらめっこを続け、時折移動の指示を出す滝壺に、ぽつりと、声をかける。視線は向けず、けれど、チラリと滝壺が浜面の方へ顔を挙げたのは、感じ取った。

「フレンダのこと？」

浜面が口に出す前に、滝壺が言葉を発した。

——既にこの世にも居ない少女、感情の感じ取れない滝壺の言葉を聞いて、浜面の顔は、どれほどこわばったことだろう。

「ああ、」

頷くのにも力を要した。

……彼女の事が嫌いであつたわけじゃない、言葉を交わすことは少なかったがそれでも、浜面は、彼女もチーム『アイテム』のひとりだと、認識していた。

けれど、

「もう……いないんだな」

彼の知る『アイテム』は、もうどこにもない。

「……うん、」

滝壺もそれを認識したのか、複雑な沈黙の後、消え入るような声で頷いた。

「絹旗は、すげえよな」

「………うん、きぬはたは最初、すごく怒ってた、あんなに冷静じゃ、なかったよ」

彼女にとって『アイテム』は紛れも無く居場所のひとつだっただろう、根性を信念とし、自身もまた根性であろうとする。

絹旗最愛という人間は、強いように見えて、思いの外、根性以外の部分はもろい。直ぐに悩むし、直ぐに落ち込む。

だから『アイテム』という居場所が崩壊して、悔しかっただろう、悲しかっただろう、怖かっただろう。——だからそれを、誰かにぶつけたりもしただろう。

けれども、絹旗は立ち上がっている。

「つよい、すごくつよいよ、きぬはたは、私が知ってる……誰よりも」

「俺も、あんなに強い人間は、今の今まで他には一人しか、しらねえんだ」

「……まだまだだね、私たち」

「そうだな、……だけど、だからこそ、俺は――」

俺は、あいつみたいに強くはなれない。そうやってぼつり、と浜面は言葉に出そうとして、しかし遮るように、滝壺の言葉が響く。

「私は、人が死ぬところを、見たことがあるよ、……はまづらは？」

「えっ？　い、や……ない、けど」

思い出すのは、あの死屍累々、地獄にしか思えなかった戦場のこと、けれど、アレに死人は無い、一方通行に殺す気などサラサラなかったのだから当然だ。

「きぬはたも同じ時に、――むぎのが吹き飛ばしたの、敵の、よくわからないけど、リーダーっぽい人を」

泣きそうだった、そうだ。

誰も気に止めようとはしなかったし、絹旗自身、触れて欲しくはなかったそうだけれど。

「つらそうだった、いつもなら根性で何とかするのに、その時はうつむいたまま、だった。敵を倒して、もう戦いは終わってたけど、動こうとも、しなかった」

滝壺も、麦野も、フレンダも、その時は同じ場所にて、けれど絹旗の様に気落ちしたりはしなかった。彼ら、彼女らは地に堕ちた人間だ、同情こそすれ、感傷に浸るようなことはない。

「だけどきぬはただけはどうしてか、同情以外の何かで気落ちして

るみたいだった。それがなにかは、今もわからないけど、でも、次にあったときには、ちゃんと立ち直ってた」

弱いけど、強い。

「私たちは……弱いよ、同じ場所にいるはずなのに、皆、遠いんだよ」

「それは——」

否定することは、できない。

なぜならば、気づいているからだ、滝壺は——浜面に弱いなんて思っただけではない、自分達は強くあれない、絹旗のように場違いな強さはないし、表に立つのは、少し陽へ弱すぎる。

だから浜面には強くあって欲しい。

それは——滝壺が見せた、小さな……弱みなのだろう。

「俺は、強くありたい……俺には麦野みたいな実際の強さや、絹旗みたいな心の強さもない、大したことないかもしれないけどさ……でも、胸を張って、誰かを守るんだってくらい、強くなりたい」

言い切って、少しだけ赤面する。

なんだこれは……ずいぶんと小っ恥ずかしいセリフじゃあないか、なんだって自分の口からこんなセリフが漏れ出るのか疑問でならない。

それだというのに体は動く、軽く赤面したまま、少しだけ視線を滝壺の反対、バックミラーの方へ寄せながら、滝壺側の手を、ハンドルから、ケータイを握る、滝壺の手へ寄せる。

まあ、何だ。

これもまた、一つの弱みなのかもしれない。

要するに――

「な、なんつーかさ、俺にとって一番守りたいのは、お、お前何、だよ、な。……いや、言葉にしづらいけど、えっと、その……」

「……は、はまづらあ、つ、つぎゅ、みぎだよ!」

言葉に出すより前に早く、滝壺が慌てて遮る。

「あ、ああ」

顔を真っ赤にして俯いている滝壺は、なかなか見てて新鮮だった。何て、眼福を収めつつ、再び二人は無言に戻る。

守ろう、強くなろう。

誰の思考でもなく、それはひとつの車と共に、二重構造の橋の下、ゆっくりと暗がりへ、消えていった。

――

後で聞いた、話になる。

フレンドは最後、いともあっけなく、唐突に現れたあの彼女によって、地に伏せたそうだった。

眠りにつく寸前の意識すらなく、ただ無力に。

それを聞いたとき、浜面は絹旗の感情を、少しばかり理解した。
絹旗最愛が持つ感情と比べれば、百分の一にも、一万分の一にも
満たない、ちっぽけな感情だろうけれど、それでも浜面は、少しだ
け、絹旗を知った。

それは、どうしようもない無力感、救うことも、守ることも、罵
ることも、愚痴することもできない、圧倒的な敗北感。

よくたちあがれたものだ。
だからこそ、理解した。

絹旗はつよい、どこまでもまっすぐな信念と、こだわり続ける根
性がある。

そして、――

――

その頃。

浜面達は何気なく通過した橋の上。

そこには、どういうわけか人がいない。逃げ出したんか、近寄り
がたいのか、単純な通路であるはずなのに、そこにあるのは二つし
か、影がない。

「……ったくよお」

ひとつは、麦野沈利。

「……なんですか？」

もうひとつは、絹旗最愛。

「手間取らせてくれちゃってさあ、高々大能力者のくせによ」

「それこそ、その大能力者相手に互角なテメエも、随分情けないですね」

仲間同士であつたはずの、敵同士。

自体は、誰もが望まない最悪へ、動き出しているのであつた。

第二章 2（後書き）

感想氷華誤字脱字その他もろもろお待ちしています。

木原くんが出てくる前もそうですが、こういうしんみりした雰囲気の話は何となく筆が乗ります。

補足

・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7639o/>

とある科学の正体不明（カウンターストップ）

2011年10月21日08時14分発行